



第735話 飛べ、飛ぶんだ

その朝は、起きたときから何か嫌な予感がした。胸騒ぎというか、何か本能から来るざわめきが聞こえていた。地中からの信号が、ぼくの内部の感知機に受信された。それは、この家ではぼくだけしか聞こえない波動だった。何かある。それがとてつもない恐ろしいことという以外は、ぼくは何が始まるのかは判らない。生まれてこの方、こんな恐怖感は味わったことがないのだから。

空は晴れていた。冬晴れというか、恐ろしいくらい澄み渡っているんだ。そこに、細く流れるような雲が一直線に走っていた。上の雲と下の雲が逆に流れているというのも、ぼくは見たことがなかった。誰もこの異変に気が付いていない。ただ、昨日と同じ朝が静かに訪れているという感じだった。

ぼくは、なんとかしてパパとママにこの危険な予兆を教えようと、騒いだが、二人とも暢気なもので、

「この子ったら、近頃、外に出ていないから、うるさいのよ」

と、取り合わない。

「そうじゃないんだ。大変なことが起こるんだ」

声にならない声を出していた。というのもまだ子供だから、言葉がうまく出てこない。ぼくは、外に出てもただ歩くだけだった。

窓から外を観察すると、ネズミたちが、家という家からぞろぞろと逃げ出して、どこかへ引っ越ししていたし、たったいままで屋根でたむろしていた鳩や雀たちが、一斉に飛び立っていった。みんな、どこへ行ったんだ。もう、空を飛ぶ鳥の姿はない。近所の犬たちも、奇妙な泣き声で騒ぎだしていた。彼らは逃げたくても、ロープで繋がれていて脱出できないのだ。それは、ぼくも同じなんだが、ただ、どこへ逃げててもこの地表では高い山へ逃げないといけなような気がしていた。そんなことは、誰からも学習したことはないし、どうしてそう思うのか不思議だった。

ぼくは、なおも騒ぎ続けた。そうすることによって、パパかママが気づくのではないかと、バタつかせた。

「なんだい、この子は。判った。判った。窓を開けてやるからな。少し寒いぞ」

パパが窓を開けた。ここは二階だから見晴らしはいい。海辺の町で海が見渡せた。シーズンになるとビーチはリゾート客でいっぱいになるんだとママは云っていた。それが冬だから、店も仕舞っていたし、誰も人は歩いていないのだけど、真っ青な海がやけに静かで、気持ちが悪いくらいだ。ぼくがまだ子供だから、どこへも行けないものと、パパは知っているんだ。

「政府はこのまま財政難を持ち越すと大変だ」と、新聞を見ながらコーヒーを飲み、パパはそう、台所に立つママに云っていた。ぼくの耳に「大変だ」という言葉がインプットされた。そうだ、そんな言葉があったんだ。

「大変だ、大変だ、大変だ」と、ぼくはパパの言葉を借りて叫び続けた。

「はははは、なんだよ、この子は」

と、パパは笑いながらぼくの頭を撫でていた。まだ、パパにはぼくの悪い予感が判らないんだ。外では動物や鳥たちがすべて逃げたあとで、静まり返っていた。もう時間がない。来るぞ。来るぞ。ぼくだけに伝わってくる。聞こえてくる。不気味な波長だ。

すると、いきなり地面が縦に揺れた。

「キャー」とママの叫び声が聞こえた。棚のコップなんか、床に落ちた。そのうち、横揺れが激しく始まった。食器棚が倒れた。パパはママを護るように抱き合っていた。

「地震だー」と、外でも大声がした。かなり大きいのだ。窓枠ごと外れたし、レンガの煙突が倒れた。隣の家はまるで砂糖菓子のお家のようにぐっしゃりと潰れた。大勢の町の人たちが外へ避難していた。電信柱も倒れた。車の上に倒れて、電気が火花を散らした。すると、大きな音で爆発が起こった。あちこちの家から火があがった。火事だ。ぼくはとても怖くなった。逃げようと思ったが、体がこわばって動かない。そのうち、海が龍という生き物のように、狂ったようにせりあがり、高さはこんな家なんか呑み込んでしまうような勢いでやってくる。

「津波だ」と、近所の声がした。パパとママは台所の家具の下敷きになって声もない。ぼくは、飛ぼうとした。それでばたつかせていた。いつか見た夢と一緒にだった。自分に飛べ、飛ぶんだと命じても、子供の飛んだことのないもどかしい自分がいた。危険が迫ってきていた。ぼくは、夢の中でパパ、ママと声を出したが、声にならない。金縛りに遭ったように動かないのだ。

その焦りが現実のものとなって、いま、傾きかけた家の二階の窓から、ぼくは離陸しようとしてもがいていた。津波はすぐ前まで襲いかかっていた。あと数秒もしないうちに、この家は海に吞まれてしまうのだ。海辺の別荘はすべて壊れて、屋根だけが波の上にあった。

「飛べ。お願いだ」

ぼくは、懸命に翼をばたばたさせて、思い切って空に飛び出してみた。浮いた。空中に浮いている。波はすぐ近くだ。もっと高く飛べ。ぼくは、死にものぐるいで羽根を動かした。下に屋根が見えたと思ったら、おおいかぶさるように突進してきた波の上すれすれを、ぼくは飛んでいた。生まれて初めてぼくは飛行していた。

「パパ、ママ」と、ぼくはぼくをいままで大切に我が子のように可愛がってくれた飼い主を心の中で呼んでいた。ぼくが、幼いオウムとして、この家に来て、飛ぶということも習わなかった。ぼくは空を手に入れた。町はすべて海となって、木や家具が渦巻く海の上でくるくると廻っていた。

第736話 死んだ老人

白いムームーのような珍しい衣服をかぶっただけで、パンツやシャツなど下着もつけていない老人が道端に倒れていた。

第一発見者はこう語った。

「ええ、わたしはね、毎朝、健康のために町内を一周するジョギングをすることにしてるんですよ。そうしたら、おじいちゃんが俯せで倒れているじゃないですか。驚いて、起こそうとしたんですけどね、あなた、冷たくなっているじゃないですか。あたしゃ、咄嗟にどうしたらいいか判らなくて、公衆電話を探したんです。近頃はケイタイのお陰で、公衆電話が減らされて、なかなか見つかりません。以前、あったところは撤去されていたんです。それで、二十四時間やっているコンビニに駆け込んだんです。そこから電話で一七に通報したんです。そしたら、馬鹿な女が出てきて、ただいまの時刻はって云うじゃありませんか。わたし、そんなことを訊いているんじゃないって、云ってやりましたよ」

お喋りなおばさんのあまりに長い話に刑事たちは途中で引き上げた。

警察は早速、病死、殺人の両面から操作を開始した。外傷や着衣の乱れはなかったが、衣服があまりにも不自然であること、老人は裸足で、この冬の寒空の下で、靴下もはいていなかった。所持品が全くないということもおかしい。まるでホームレスの老人狩りにでもあったかのように、老人の名前も身分を表すものが何ひとつとしてないということが、まるで、わざとらしく死体を遺棄した疑いもあった。髪は、ブラウンで白髪交じり、顎髭も長く、どう見ても日本人ではない。アラブかユダヤ系のようにもあるが、いまのところは国籍不明。外国人であることは間違いはない。ただ、全員が、その老人をかつてどこかで見たことがあるような気がしていた。懐かしい顔を誰だったかと思いついて出そうとしていた。

死体は一応、大学付属病院の法医学教室で解剖され、死因が確かめられた。ところが、どこをどう調べても死因が断定できないでいた。病根もなければ、窒息死、心臓発作、脳溢血、あらゆる可能性で確認作業をしたが、どれもあたらないという結果が出た。毒物の疑いもない。自然死というには、まだそう年取っていないように、体格はよく、健康そのもの、肉体年齢はまだ五十くらいとすべての数値がそう算出されていた。

警察への搜索願にもなく、外国人の登録名簿にも出てこない。各国に顔写真を電送して、紹介を試みたが、いまのところ該当者はなし。密入国者という結論が出た。そして、なんらかの犯罪が絡んでいる。そのために、死因が判らない新しい殺人方法で抹殺された。捜査本部はその線で動いた。

刑事たちによる付近の聞き込みが始まった。

「関係ねえよ、じいさんの一人や二人死んだところで、おれに金が来るわけじゃねえしよ」

この辺りの若者たちは無関心で、老人が道で倒れていても関わりになりたくない、助けようともしない。みんな見なかったことにして通り過ぎるというのだ。

「外人ねえ、どうせ違法就労じゃないの。わたしたちが仕事がないときに、どうして外国から働きに来て、安い賃金でも働く。やんなっちゃうわ。ホステスなんかもそうよ。わたしたちの店なんかには来なくなるし、みんな外人さんが好きなのよね。あんたたち、そんな旅券で仕事している人たちを取り締まったらどうなのよ」

飲み屋街ではそんなイヤミも云われた。

コンビニの親父が、棍棒を持って少年たちを追い回していた。万引きだ。もう警察は相手にしていない。数年前の何倍もの補導ですでに手が回らない。子供たちも荒れて、日常的にあちこちのデパート、スーパーが狙われた。警察に通報しても、もうパトカーでいちいち駆けつけないということを知っている子供たちは知っていて、万引きは大集団と化していた。

殺人事件、レイプ、強盗、誘拐、拉致監禁は、数年前の何十倍となって、警察官を増員しても足りない。だんだんと日本もアメリカ並に危険な国となっていた。まさしく犯罪天国だった。

高校生たちが、路上で公然と麻薬をやっていた。それを売買するのもインターネットのオークションでだ。取り締まっても、次々にいろんな手口で、サイバーポリスも発見ができない。

政治家から行政のトップの不正、先生たちの犯罪が、毎日のように新聞紙面を騒がせていて、テレビでも取り上げていたものが、ぱったりと報道をやめた。理由は、急激にそんな不祥事が増えたからで、われもわれもと先を争ってやっていた。真面目で犯罪に手を染めないものは損をする世の中になっていた。

政府は弱い立場の人間から重税を搾り取り、自衛隊を軍隊と呼称を開き直って換えると、海外派兵をアメリカの手下となって、利権争いに参加していった。仕事のない若い人たちは、兵隊として出兵していった。

上から下までそうだから、随分と悪くなってきた。確かに一人の老人の死なんかにつまでも関わってられない。一週間でうち切りとなった。別の事件が次々と起こるからだ。

「この国には、もう神も仏もないのかね」

良識ある、いまでは稀少価値の刑事は、そうボヤいた。

「そりゃ、そうっすよ。いまや、人間に恐れるものはないんです。やりたい放題で、法律なんか形骸化して、処罰ができない状態でしょう。街は完全に無法地帯となっていますね」

若い刑事が云うように、警官であっても袖の下でなんとでもなる。逆に金を要求するといった、墮落した国となっていた。

数日して、身元不明の外国人の老人について、各国からの紹介のメールが警察に送られてきた。各国とも、共通した見解であり、様々な老人に似た絵画が参考として添付されていた。ミケランジェロ、ラファエロ、ダ・ビンチ。さらに古い文献からも顔の特徴をアンダーラインをつけて、その箇所を示してきた。そして、統一した答えは、たった三文字、GODであった。

捜査本部はすぐに解散、捜査は打ち切りとなっていた。

「そうか、どうりで身寄りがないと思ったら、神様だったのか。哲学者は云ったよな、神は死んだって、死にたくもなるわな、こんな世の中」

刑事は唾を吐いた。そして、今日、貰った賄賂の札束を数え始めていた。

第737話 悲しいお知らせ

高層ビルの二十七階にその会社の本部事務所があった。広いフロアに間仕切で本部長室と、ホストコンピュータ室、資料室などがあり、女子事務員たちがそろそろ出勤してきていた。

「おはよう」

高見遥香がいつもの爽やかな笑顔を振りまきながら、エレベータに乗ってきた。遥香の顔を見るなり、みんなドキリとした顔をして、ざわついた。中には、信じがたい様子で、肩に触れ、

「高見さん、あなた、大丈夫？」

と、云ってくる人もいたが、すぐに別の人から口を封じられた。

みんなが、何かとんでもない事実を隠しているような素振りで、そわそわしていた。社員全員の視線が遥香に集まっていた。

「あ、高見さんだ」「嘘だろう、本当だ」「どうなっているんだ」「きっと、本人だけが知らないんだろう」

口々にそう囁きあっていた。みんなが暗い顔をしているときに、一人、遥香だけがうきうきした月曜日だった。

「どうしたの？ みんな浮かない顔をして。はりきって行きましょうよ」

遥香が、そうして、自分のデスクに行くと、遥香の席だけに花瓶に綺麗な花が飾られていた。

「まあ、綺麗。どうしたの。誰がくれたの？」

隣の席の同僚に訊くと、

「ええ、まあ、みんなの気持ちというか……」

と、言葉を濁していた。隣の女子社員は微かに震えていた。額に汗まで滲ませていた

。

「どうしちゃったのよ。本当に、みんなおかしいわ。まるでお通夜みたいね」

遥香がそう云うと、みんな俯いてしまった。

部長が、課長にそっと話した。

「君から、本人に話したほうがいいんじゃないか。高見君は気づいていないんだから」

「でも、部長、わたしなんかよりは、親しい女子社員から云ってもらったほうが……」
課長の云うように、同期入社の中のいい女子社員が、課長に呼ばれた。

「君は、高見君とは親友みたいなものだったね。ああして、会社に出てきてもらっては困るんだ。みんな動揺して、仕事が手につかない。第一、こんなことがあってはならないんだ。本人に教えてあげないといけない。そこで、君、高見君に話してくれんか」
その社員はおろおろしていた。

「なんて云えばいいんですか。わたし、困ります。いままで、そんなことを誰にも云ったことはないんです」

「そりゃ、そうだよ。誰だって、そんなことを申し渡しするなんてことはあったためしがない。残酷なようだけど、これは真実なんだ。さっき、高見君の家に電話して確かめてみた。お母さんが出てきて、泣いていたよ」

「判りました。なんとか、わたしから話してみます」

彼女は、引導を渡す役目が自分に来たことに躊躇していた。そんな悲しい事実をどうして遥香に云えるだろうか。考えれば考えるほどとても云えない。遥香はかなりのショックを受けるだろう。そんな悲しいことを本人に知らせなければならないなんて、どうして本人に説明したらいいものか。これは口で説明のつくことではなかった。

彼女は恐る恐る遥香に声をかけた。

「あのね、高見さん、お話があるの」

すると、遥香はけたたましく笑った。

「何よ、その云い方、高見さんはないでしょう。どうかしているわよ。大丈夫？インフルエンザの高熱で、頭がどうにかなっちゃったんじゃないの」

いつもは、遥香と呼び捨てにするのに、他人行儀な云い方が、かちかちに固まっている彼女の態度が可笑しかった。彼女は泣いていた。

「どうしたの？ 話って、わたし、訊いてあげるから、泣かないでね」

逆に慰められていた。

「ここの地下の喫茶店より、外に出ましようか」彼女は遥香を外のカフェテラスへと誘った。

二人は入社して五年一緒の課で、机も隣り合わせ、よくコンパや旅行にも行く仲だ。遥香はココアを頼んだ。

「本当にあなたなのよね」と、彼女はいまさらながらまじまじと眺めていた。足先を眺めていた。いつものほっそりと形のいい脚線美。遥香の手を握ってみた。少し冷たいが、確かに存在感がある。

「どうしたの？ 気持ち悪いわ」

遥香は急に友人が自分の手を握って涙を流すものだから、よほどショックなことがあったのだなと思った。

「さあ、何があったの？ わたしに何もかも話して。気持ちが楽になるから」

遥香はもともと強くて楽天的な性格だった。何を云ってもへこたれない。

「実は、話しにくいことなんだけど……、その、あなたにとって悲しい知らせなの」

遥香はじれったそうに気をもんだ。

「いいから、早く話しなさいよ。わたしは、何を云われても平気だから」

「そうよね、遥香は強いから。じゃ、云うわ。あなたは、先週の木曜日に自動車事故で即死したのよ。もう葬式も終わったのよ。あなた、死んでいるんだから」

さすがの遥香もさっと顔色を変えた。

「わ・た・し、死んだの？」

すると、遥香の姿が少しづつ消えていった。彼女は薄れてゆく影を探して泣き崩れた。

課長がその様子を見ていて、やってきた。

「辛かっただろう。自分が死んだことも判らない人っているものなんだ」

そうして、呑み残しのココアと空席を眺めていた。

第738話 催眠学習

家庭教師、それは、学生アルバイトが多いのだが、そのプロであれば、もっと真剣だ。頼まれた生徒を志望校に合格させるために、どうしたら勉強をするかというモチベーションにまで食い込む。

家庭教師の匠がやってきた。山野宇美三十六歳。勉強嫌いの壊れた子供をリフォームする使命を帯びてやってきた。宇美の武器は、単に学習システムの工夫だけに留まらなかった。出来のいい子供は自分で進んで勉強をするから、別に塾に行かなくてもいい。勉強から逃げる子だけが、親が縛る目的で、塾に行かせる。それも通うのを厭う子は、家庭教師という監視付きで拘束することとなる。

その意味で、宇美のいままで教えてきた子供たちは、勉強嫌いで手に負えない子が多かった。そんな子供たちを勉強に向かわせるために、宇美は、催眠術を使う。やる気を出させるためには、そんなことでもしなければならぬ子供もいた。

今日、山野宇美が依頼された子供は中学三年の武見浩太だ。もともと頭は悪い子ではないが、勉強すること自体に反発して、頑固に横を向いている。

「この子なんですけど、勉強しなさいって、親が云うほど、怠けるんです。反抗期で困ってしまって」と、教育ママもお手上げだった。塾も行かない。宿題もやらない。もうすぐ高校受験だというのに、音楽ばかり聴いて、逃げていた。

「今日から、君と友達になる山野宇美という。よろしくな。どうして、勉強が嫌いなんだ？」

「だって、どんなに勉強して偉くなったって、みんな悪いことばかりしているじゃないか。校長先生からして嘘をついてお金をごまかしているじゃないか。勉強することで人って悪くなるんじゃないの？」

この子は勉強をしないという哲学を持っている、と、宇美は思った。却って難しい。

「そうかな、確かに君の云う通りかもしれないが、別に勉強なんて、偉くなるためにするんじゃないんだ。人生を楽しむためにもするんだ。知らないより知っていたほうがいいときもある」

そこまでは常識的な大人の諭し方だ。浩太はすぐに反発する。

「楽しむための勉強なの？ だったら、遊びじゃないか。勉強って遊びのためのものか」

宇美は、これから面白いことをするからと、浩太をベッドに寝せた。

「目を瞑ってごらん。両手が重くなるよ。さあ、君は未来へ飛ぶんだ」

浩太が目が醒めたら、会社の事務所のようなところにいた。窓際に机があり、何故か、他の社員たちから隔離されているように、衝立で隠されていた。机の上には、みんなの机の上には必ずあるパソコンと電話がない。書類もなにもなく、綺麗なものであった。

（ここは、どこだろう）と、浩太は立ち上がった。自分が背広を着て、ネクタイを締められている。そして、驚いたことに、ガラス窓に映った顔は、どう見ても五十がらみのおじさんだ。髪もてっぺんはきれいになくなっている。眼鏡もいつからかけたのだろうか。あの、家庭教師の云ったことを思い出していた。浩太は、自分の未来を体験しているのだ。

浩太は、事務所の中を歩いて、社員たちに声を掛けようとした。

「うるさいんだよ。いま、忙しいから、座っていてよ」と、若い社員に怒鳴られた。女子社員たちも取り合わない。みんな、パソコンで英語をものすごい速度で打っていた。電話でも、専門用語か、英語だけでなく、各国の言葉が混じりあい、何を話しているのか、浩太には判らなかった。浩太がうろうろしていると、人事課長が浩太の肩を叩いた。

「どうだ、そろそろ気持ちの整理がついたか。まあ、応接室でもう一度、話し合おう」

浩太よりは年下の課長が、別室へ連れて行った。浩太はまだきょろきょろしていた。

「何も仕事がなくて辛いのか。よく我慢して、一日黙ってられるものだ。わたしなら、とっくに辞表を出しているところだがな。あんたは、最初から躓いたんだ。勉強が嫌いで、同期入社 of いまの部長たちから離され、昇格試験で落ちて、学校だけでなく会社でも落ち零れだ。勉強は一生つきまとうものなんだ。特に、能力主義を採用してからは、年功序列ではなくなった。すべて試験と、実績で上に上がれる。万年平社員のあんたは、後輩からも追い抜かれて、いまじゃ会社のお荷物だ。いまさら、焦って、勉強しても、暗記力は低下している。語学なんて覚えられんだろう。そりゃ、若いときは、英単語なんか、いくらでも頭に入ったろう。あんたは、そんな大事な時期をボイコットしていた。それが、常識も知らない大人として入社してきたわけだ。裁判所から料金は来る。それも、法律を知らないばかりにだ。安易に金を借りて遊興費に使い、さらには人に騙されて、家は差し押さえ、奥さん子供には逃げられる。どこでどう人生を曲がってきたんだか」

浩太は目を丸くして、屈辱に耐えていた。駄目人間のレッテルを貼られて、それでも我慢して会社にしがみついている中年になったときの自分を見てしまった。

一日中、ただ、ぼんやりと机に向かって座っているだけの自分がいた。まるで牢獄だった。それに耐えられるだけの将来の自分が許せなかった。机の引き出しを開けると、日記のようなノートが出てきた。それには、日付の他には、本日何もなし。とだけ書かれているだけだった。そして、鉛筆が綺麗に芯が研がれて並べられている。あとは、空っぽだった。何もない自分がいた。課長に訊けば、資格もなく、人望もなく、何の取り柄もない自分が、自分を高めようとしなくて、十年、二十年と一日のごとくやってきた結果だという。

家に帰っても、部屋は荒れていて、とても生活の場ではない。そして、冷たく暗い家には誰ひとり待つものはいない。

浩太は、ふらふらと会社の屋上に立っていた。生きていても仕方がない人間に思えてきた。そして、屋上から跳ねようとしたとき、どこからか家庭教師の宇美の声がした。

「一、二、三、はい、目が醒めました。どうでした？ 未来は」

浩太は自分の部屋のベッドで飛び起きていた。傍に宇美がいて、笑っていた。

「先生、ぼく、勉強します。英語頑張ります」

浩太の態度ががらりと変わった。

「そうだな、浩太君の年なら、英語の歌でも三番まですぐに覚えられるだろう。五十過ぎたら、歌の一曲を暗記するのも大変なんだ。いまの楽なうちに頭に叩き込んでおいたら、後になれば助かるんだな。それが勉強なんだ」

時には、贅沢な子供たちを、鮫のうようよいる大海へ投げ込んだり、猛獣に囲まれて絶体絶命の危機に晒したりする。そこからどうやって脱出するか、頭を使わなければ出られない、そんな催眠学習もしている。

宇美は、ポケットからそっと小さなケースを取り出して、中の携帯催眠マシンからソフトを取り出した。そのミニDVDには、「窓際族篇」と書かれていた。

第739話 春が来ない男

世の中、少し上向いてきていた。景気も少しづつ回復してきて、明るい話題も出てきていた。いままでが、暗いニュースと、気が重くなる政局、お先真っ暗であったものが、次第に、日が長くなり、気温が上昇してくる春になってくると、人間は気分屋なので、何か、いいことがありそうな予感に満たされて、心躍り、浮かれてくる。

そこが動物や植物と同じで、頭の中はブルーでも、体は春を感じずものらしい。生き物すべてが、回生し芽吹く春は、長い冬を払拭して一気に花開いてくる季を迎える。

そんなときにバレンタインもあった。猫が夜中に声を上げてうるさいのも同じ時期だ

。春は甘い期待感に溢れているのだが……。

北村だけは、浮かない顔をしていた。年を越しても、新しい年に期待感がもてない。マスコミは政府の手先になって、おいしい話しか流さない。まるで報道管制を敷いているような感じがして嘘っぽい。官と民の温度差も、やはり安定と不安定という立場もあるが、特に零細な自営業をしている北村にとっては、大企業の動向だけを捉えた景況感というのは信用がならない。

世の中が一番下層で苦しんでいる町の人たちの声をもっと聞いてもらいたいと、北村は切迫した状況でどうにもならない町を見て怒りすら覚えるのだ。

北村が、市役所に遅れていた税金を納めに行ったら、窓口がもりもりと人だかりができていた。

「す、すごい」

デパートでバーゲンをしてもこんな人は来ない。一体、市役所はどんな宣伝をして市民を集めているのだらうと、覗くと、税金の減免のために列をなしたり、群がっていたりしていたのだ。みんな貧しい人たちばかりだった。北村も貧しいと思っていたら、まだまだ苦しい人がいっぱいいる。商店の社長と肩書きはいいが、穴の空いた靴すら取り替えることができないほど借金まみれの経営者が沢山いる。

それでも、世の中は富の偏在は確かにあり、結構みんな数百万もする新車に乗っていたりする。いい家に住んでいる。北村はつい恨めしく見ていた。

年金や税金が上がる。消費税も来年からは殆どすべての商店も納めなくてはならなくなる。いままで消費税がないからと、小さな店に来ていた客も、どこも同じか、それなら大手のほうがいいと、来なくなりはいまいか。生活はいまより圧迫される。借金は減らない。あれこれと考えれば、新しい年、春は重く、よくなるどころか悪化するのが目に見えている。

年寄りたちは、年金で安泰だから、世の中がかなり悪くなっても、感じない。

「そうか、それは大変だな。まあ、無理をせずしないならないようにやるんだな」と、人ごとだ。

北村の娘の夏海は、だんだんと高校生活が面白くなり、彼氏ともうまくいっていた。バレンタインには彼に手編みのマフラーと、いま、編み物に熱中していた。中学の信宏はこれまた女の子にもてまくっていた。日曜日に四人も女の子たちが遊びにきた。

北村は自分の中学のときを思い出していた。六歳にして席同じうするなかれではないが、中学でも愛も恋もない、彼女という言葉も遠かった。最近ではバレンタインとはどこの国の行事かと、チョコレートをくれる人もなく、息子にいまから予約しておいた。

「なあ、チョコレート、おまえは沢山貰うだろう。お父さんに三個でいいからくれよな」情けない。

友人で羽振りのいいのがいて、また支店を出した。売れて売れて笑いが止まらないという。そんな業種もある。みんな悪いわけではない。車関連、健康関連、美容関連はいいようで、北村のような文化関連はいまいち。

「よう、元気でやっているか。今度、呑みにゆこうか」

と、威勢がいい社長が来る。北村はやつれていた。見れば元気かどうか判るだろう。それに、そんな呑みにゆく余裕もない。酒も控え、煙草も減らした。

北村の店に来る、天下りの助役は、

「こうした本に囲まれて幸せだね」と、北村のことを云うが、公務で出てきて、仕事をサボって古本屋巡りをしているあんだのほうに幸せだねと北村は云ってやりたかった。のんびりしている人を見ていれば腹が立つ。あくせくと働いても何の見返りもない。

気温がだんだんと高くなる。朝も早く明るくなり、夕方は遅くまでまだ暗くならない。雪は降っても積もれないから、積雪量は減ってくる。二月の二十日くらいが、一番積雪が多いのだが、それから僅か一週間で雪はあれよあれよというまに解けてしまう。三月の初めの卒業式には雪は街に見えないときもある。

庭には落のとうが顔を出し、福寿草が咲き、マンサクの黄色い花が木に咲いた。

卒業と入学、新しい会社に就職したり、引っ越し転勤で、新しい家に住んだり、春は新しいことづくめ。重いコートは脱いで、ブーツや防寒靴は仕舞わねばならない。人々は蘇生したように、期待に胸を膨らませ、気分も少し明るくなる。

ところが、一人、暗い男がいた。四月だというのに、北村の周りは吹雪だった。みんな陽気で明るい。笑いが眩しかった。なのに、一人だけ春が来ない。浮いた話もなく、金もなく、希望もない。

友人たちが北村の店に来る。みんな北村の頭を見て笑った。

「おいおい、どうした、おまえの頭のとっぺんにだけ雪が積もっているぜ」

第740話 バレンタイン狂騒曲

憮然と、人相の悪い男たちが、秘密のアジトに集っていた。ハ○、デ○、○ビ、イ○など差別用語でしか表すことができない形容の連中が、二月の初めに秘密集会を開いていた。

「毎年、今頃になると、おれたちは共通の屈辱感で、自分のアイデンティティをいやというほど知らされることになるのだ。こんな理不尽なことが許されていいのか」

「そうだ、そうだ。粉碎しろ」

リーダー格の若い男がその醜い顔をさらに醜くしながら叫ぶと、一同はシュプレヒコールで答えた。

「菓子屋の陰謀だと云う、あのバレンタインがあるお陰で、愛の偏在が判然としてきた。愛は一部のドン・ファン的ブルジョワによって独占的に搾取され、チョコレートを食べきれないほど貰っているというのに、われわれ同志諸君は、毎年、一個も貰えないと

いう不公平を生じている。これが許されていていいのか」

「肅正だ。革命だ」

「まあまあ、そこでだ、われわれは、ここに、ブ男だけが集まって、ブ男になろうど会、略してブ・ナロード会を結成して、この狂っているとしか思えない憎きバレンタインをこの世から抹殺するまで戦い抜こうと思う」

と、いきまいていたところで、どうにもなるものではない。決定的に女が走る相手が変わるわけではない。何もチョコレートが悪いわけではない。だが、坊主憎けりや袈裟までもだ。一部の同志が暴走した。

一臨時ニュースです。今日、正午ごろ、ヘルメットにゲバ棒を持った若い男たちが、デパートのバレンタイン特設会場を占拠、たまたまチョコレートにメッセージを書いていた製菓職人を人質に立てこもりました。彼らは、世の女性たちに、われわれにもチョコレートを寄こせと要求を繰り返しております。機動隊が売場を包囲して、ただいま、説得が始まっているところです。

と思うと、一方では、チョコレート工場に脅迫状が届いていた。

一即刻、チョコレートの製造を中止しろ。でなければ、三日以内に爆弾が爆発する。

ものすごい時代になってきた。とうとう、この馬鹿げた行事にぶ男たちは爆発したのだ。それをテレビで見ていた天野は世の中のくだらなさに嘆いていた。

「何もそこまでしなくてもなあ。本当に真面目に捉えすぎるよ。たかが、チョコレートのひとつやふたつで」

と余裕のある天野は、チョコレートを搾取する側にいた。彼の勤める役所の課に、毎年、彼はダンボール箱の私書箱を用意していた。

(チョコレートはこの箱の中に入れてください。天野用)

そうでもしなければ、勝手に下駄箱やロッカー、机の中に入れられる。公私混同しては困る。仕事の領域と、恋の領域は別でなければいけない。同僚たちは、彼を羨んだ。最近はお父さんたちでも、手ぶらでバレンタインに家には帰れないので、自分で売場でチョコレートを買ってゆくという。男はそこまで見栄を張る。奥さんや子供たちの手前、少しでももてているところを見せたい。そんな淋しい男性で、チョコレートが売れているとか。

別の課からも美人の職員が、恥ずかしそうに天野のところに来た。

「天野さん、チョコレートなんか、沢山貰うから、これ、わたしの手作りのネクタイなんですけど、お好みかどうか」

「いやあ、困るなあ。ぼくには、妻子があるんだ。こほん、まあ、貰っておこうか」

妻子ある男性でも天野は特別にもてまくっていた。その甘いフェース、憂いを秘めた瞳、そしてスマートで優しい人当たり。だが、その天野も家に帰れば恐妻家だった。年賀状も、奥さんの名前でしか印刷させない。彼はその年賀状を分けて貰い、その妻の名前の下に手書きで名前を書いて出すのだった。決して妻の名前の上になんか書けない。バレたら殺されるのだ。

そんな天野には、実は愛人がいた。それもつい先日できたばかりの出先機関の職員の

二十代の茉莉菜だった。茉莉菜は思いやりがあり、男性に尽くすタイプで、天野の身の回りを世話までしてくれる。そこが嬉しい。家に帰れば、逆に妻の世話をしなければならぬ天野にとって、茉莉菜は天使にも見えた。

天野は二月十四日に、沢山のチョコレートは貰うが、そんな雑魚のものより、茉莉菜から何も来ないことにそわそわしていた。

「天野さん、宅急便です」

と、小さな包みが送られてきた。差出人は出先機関名。すると、天野は目の色が明るくなった。茉莉菜からだ。いろいろと貰ったチョコレートは、家に持って帰るとうるさいので、いつも行く喫茶店のマスターにあげてくる。マスターはそれを男性客に配った。毎年そうしている。ただ、茉莉菜からのものは開けないで、鞆に入れて、後でそっと開けようと隠した。

課内には義理チョコをもらった人もいるが、天野には負ける。ダンボール箱ひとつを持って、天野は退社した。

家に帰ると、玄関からそっと入った。自分の部屋で茉莉菜からのプレゼントを開いてみようとしていた。階段を足をしのばせ昇ってゆくと、後ろから大声がした。

「あんたー」

その声で驚いた天野は小包を落としてしまった。衝撃で紙包が破れ、ピンクの包装紙にハートのシール、グリーティングカードなどが床に散乱した。それを奥さんが拾って読んでいた。

「なにになに、毎日、あなたとの一夜を胸に秘めて思いが募るだけです、だって？ あんたー、茉莉菜ってどこの女だー」

鬼のような奥さんが、阿修羅になって睨んでいた。天野、危機。ついに浮気がバレンタイン。

第741話 このままで一生を終わりたい人へ

しがないうだつのあがらないサラリーマンをしていた亜門は、五十を過ぎて、そろそろ自分の一生の先行きが見えてきていた。このまま定年を迎えても、万年係長止まり。男としていい仕事をしたという充足感もないまま会社を去ることになる。思えば、入社して三十年。自慢できる実績を残したともいえない。ただ、大過なく過ごしてきた平凡な人生であった。子供二人はみんな社会に出た。女房もよくもいままで我慢して連れ添ってきた一生の不作であった。向こうもそう思っているだろう。そして、ローンがあと少しで終わるそろそろ建て替えが必要なくたびれた小さなマイホーム。まるで、亜門にぴったりの器であった。

そんな人生に退屈し、不満を感じ始めていたある日、亜門は、新聞の片隅にこんな広告を見つけた。

一このままで一生を終わりたいくない人へ。あなたの人生変えてみませんか。

そんなに簡単に換えられるものなのか。何かうさんくさい広告だなと、思いつつも、その会社のある事務所へとふらふらと向かっていた。古いビルの上に、その会社があった。窓ガラスに、

一あなたの人生下取りいたします。と、大きなステッカーが貼ってある。そんな馬鹿なと亜門は半信半疑でドアを開いた。

「あら、いらっしゃいませ」と、年増の女子社員が対応した。

「あのう、こちらでは人生を取り替えたりしているんですか？」

亜門が殺風景な事務所を眺めながら訊いた。

「ええ、人生のリサイクルもしています。中古の人生もありますが、新品の人生も売っています」

「ええ？ 人生を売っているんですか」

「はい、そう驚くことはありませんよ。人生をはかなんで命を絶つ人を引き留めて、どんな人生でも安く買い上げています。この前も、サラ金に多額と云っても二百万円くらいなんですが、借金がある人が自殺しようとしたら、当社で下取りいたしました。死のうとした人は、首を傾げて、こんな人生でも売れるもんですかと、訊いていましたけど、あなた、借金が億単位の人にとっては、そんな人生でも素晴らしいものに見えるんです。人生って、自分で考えるより、下には下があるもので、もっと悲惨な人生っていっぱいあるんです。当社は人生の輸入、輸出もしています」

「すごい、国際的なんですね。人生が貿易品目に入るとは、知りませんでした」

「日本人はとても贅沢になりました。六畳一間で、月給十万の下積み生活の労働者の人生でも、アフリカの開発途上の国の人にとっては天国のような生活です。一日三食が食べられて、着て、寝て、テレビも見られる。まあ、そんな文明的な生活もできない月給千円で食うや食わずの生活をしている国の話ですが」

「だったら、わたしの平凡な人生でも売れるもんですか」

亜門が人生登録台帳に記入した内容を女子社員が見ていて、

「こんなにも完璧な人生はすぐに売れます。あなたには第一借金がありません。退屈だなんて、とても贅沢なことです。奥さんも平凡で、不満ですが、一通りの家事をこなし、お子さんは二人、別に問題もなく社会人。これは、平均的日本人の生き方そのものです。あなた、平凡でもいいからと、毎日貧乏や不幸に追い回されている人にとっては、平和で安泰な家庭というものは、それはそれは天国です」

亜門は、人生の掲載されているカタログを眺めていた。みんな、別のお父さんが欲しいと、家族の合意のあった物件がいくらでもあった。酒乱で、パチンコばかりやっている古本屋の北村という家庭は、店と自宅に若く美しい奥さんにまだ小さな子供が二人ついて、さらにウサギと金魚付きで、二百万と安い。旦那さんは、すぐにでも離婚して、

ロシアの田舎へ輸出することに決まっているという。亜門は写真などを見て、それもいいなあと思い、古本屋に座っている第二の人生を想像したりしていた。

また新品では、タヒチで未婚の女性。まだ二十代で、ゴーギャンの絵に出てくるような美人で、畑と船と家もあって格安だ。ただ、寝たきりの年寄りが二人もおまけについている。どうしようかと亜門は迷った。

「会社の社長さんというのもありますわよ。これなんか、明日からすぐにでも大会社の社長になれるんです」

内容を細かく聞くと、莫大な借金で、明日にも倒産しそうだ。豪邸もすでに差し押さえ、妻は実家に帰っている。そんな危険な人生なら社長でもいらぬ。

あれこれと物色して、亜門は古本屋の人生を購入することにした。さっそく、売買契約を結んだ。この会社では斡旋手数料を貰って営業収益にしていた。

亜門は入籍して、北村になった。今日から古本屋なのだ。いままでは、牛後だが、これからは鶏頭だ。誰にもへいこらと頭を下げる必要はない。しかも美しい若い妻だ。

「あなた、食器洗ったら、トイレの掃除よ。いいこと。前の亭主は、ギャンブルと酒びたりだったけど、家事はちゃんとやったのよ。あなたもこれから第二の人生で、あの人のようにならないよう頑張るのよ、いいこと！」

かっぽうぎを着せられた新しい北村は、妻の元子にこき使われることとなった。

「騙された。商品説明には、こんなことは書かれていなかった。これはインチキ商品、表示義務違反じゃないか」

だが、人生の返品はできないことになっている。一旦籍を入れたら、あとは転売、下取りよりなく、クーリングオフはきかないことになっている。

世の中、判らない。一見幸福そうな家庭でも入ってみると、地獄だったりする。よその柿は美味く見えるもの。北村は元子の尻に敷かれて、やはり、平凡な人生がよかったと、しみじみと後悔するのだった。

第742話 アパートの鍵貸します

家の中に居場所のないお父さんというのは案外多い。自分の書斎を持ちたいと思っているお父さんほど、家の中では粗大ゴミ扱いで、そんな願望を奥さんに話すものなら、かんらかんらと笑われる。

「書斎ですって？ はいはい、いつからそんな身分にお成りあそばしましたの？」

と、馬鹿にされておしまいだ。いつまでも自分の部屋という熱い思いだけが空転することになる。

そんなお父さんが、もし、自分だけの部屋を外に持つことができたなら。

齊藤貴幸という出版をやっている中年男性が、飲み屋でくだをまいていた。

「.....そうなんだよ。女房がなんだ。おれは一家の主だ。おれの部屋があったっていいだろうが。そうは思いませんか。ウィッ、ふう」

貴幸は吞めば愚痴るタイプではないが、最近は趣味の小説を書く場所もないのに腹を立てていた。自分専用の机の上も洗濯ものの万国旗、物置となっていて、仕方なく、読書も創作も畳に寝そべって書いたりしているのだが、それも歩く邪魔になると奥さんに怒鳴られていた。

そんな生活に不満を持つのは当然だ。だが、時として名作はそんな洗濯物の下から突如として生まれるものなのだ。

貴幸の愚痴を隣で聞いていたサングラスのお兄さんが、貴幸に声を掛けた。

「ちょっと聞こえてしましまして、すいませんが、もし、よろしかったら、わたしのアパートの部屋を借りてくれませんか。いやいや、家賃は前払いで一年分は払っています。わたしは、来週からアメリカに仕事で行くものですからね。誰も住んでいないと、不用心でね。留守番がてら、住んでいただけると、わたしも安心ですから」

突然、隣の見知らぬ客からいい話が飛び込んできた。

「その代わりに、ただで住んでもらうということでもいいですか。別荘の留守番はちゃんと賃金を支払いますが、わたしは商社マンでそうそう高給取りではないですから、出せませんが」

貴幸は、その棚ぼたの話に飛びついた。

「そんな、お金なんかありませんが、一度、部屋を見てみたいですね」

貴幸の酔いは醒めていた。

商社マンと称する男と約束した日に、貴幸はアパートの部屋を見に行った。アパートとはいうが、一Kのワンルームマンションより広く、綺麗だ。申し分ない。

男は階下の階段の下で、貴幸を待っていて、二階の部屋に案内した。

「電話はありません。みんな携帯を持っている時代ですから、必要ないでしょう。家具はひと通り付いています。勿論、自由に使ってもらっていいです」

部屋は、八畳の洋間に四畳半くらいのキッチンと食堂が付いている。クローゼットと、セミダブルのベッド、ライティングデスクにミニコンポ、テレビに冷蔵庫、ベランダには洗濯機まで設置されてあった。さらに、小さいが、バストイレ付きと完璧だ。こうした家具付きの部屋を只で一年も使えるというのはラッキーだった。

貴幸は焦った口調で即決した。男は、サングラスをかけているから、顔が判然りとは判らない。花粉症と云って、マスクも掛けているから尚更だ。ハナダという名前だけしか判らないのだ。

「ただ、ひとつだけ、守ってもらいたいことがあります。クローゼットだけは開けなくてもいい。そこにはわたしの私物が詰まっていますから。それだけはよろしく願います」

当然のことだった。ただ、もし、貴幸が出来心で、そうした家具なども転売したり、私物を荒らして、金目のものを盗むことも、男は考えないのだろうか。悪いやつに引っかかれば、相手はアメリカだ。何をしても判らないだろう。貴幸は、それが不思議だった。男は貴幸を信用して部屋の管理を委ねたのだ。

もうひとつ、男に頼まれたのは、郵便物と宅配便の転送だった。それは、アメリカではなく、男の田舎だとする東北の住所が書かれていた。すべて、その住所宛に送ればいい。電気ガス、水道はすべて料金は男の銀行口座から自動引き落としされるという。とすれば、ここに住んで、一円も負担しなくていいことになる。まさしく、貴幸が欲しかった部屋がすんなりと手に入ったのだ。

男は合鍵を手渡した。

「あの、何かあったら、アメリカのどこへいらっしゃるか連絡しなくていいんですか？」

貴幸は肝心なことを訊こうとしたが、男はさっさと貴幸の前から姿を消していた。

それから、貴幸の秘密の生活が始まった。女房、子供、自分の出版社の社員にも教えていない二重生活だった。一日、一時間でもいい。ひとりで、誰もいない個室で原稿用紙に向かい、推理小説を書くこと。それができるのだ。家から歩いて二十分もかからない。貴幸はその部屋に、いろいろと私物を持ち込んだ。自分の好きなジャズのCDや、辞書、愛読書、バーボンやグラスなど、理想的な書斎に必要な知的道具も持ち込んだ。

仕事が終わると、家族には残業や外周りと嘘をついて、そのアパートの部屋にいそいそと向かった。自分だけの部屋を持つということが、持ち家でも予算の関係で実現しなかった。その部屋では、貴幸は作家になれる。

音楽を聴きながら、バーボンをやり、原稿用紙にペンをカリカリと走らせる。何ものにも代え難い至福の時間であった。

一と、琢己は、ひとりアパートの部屋にいと、何か、異臭がすることに気が付いた。そういえば、おとといここに引っ越してきて、押入の中に大きなダンボール箱が入っているのに気が付いた。臭いはそこからするようだった。

と、そこまで推理小説を書き始めて、ふと、男の云った、クローゼットだけは開けな

い約束を思い出した。そして、嫌な想像をして、「まさか」と、独り言を云った。

開けるなど云われれば、開けたくなるのが人情だ。貴幸は、その誘惑に耐えていたが、ついに負けて、クローゼットの扉を開けてしまった。そこには、プラスチックの衣装ケースが二つあるだけだった。ひとつは軽いが、もうひとつは重い。ただの重さではない。持ち上げようとしてもなかなか持ち上がらない。しかも、きちんとテープで目張りがしてあり、嚴重に封印されているところがますます怪しい。貴幸の好奇心は募る一方だった。そっとテープをはがした。そして、衣装ケースの蓋を開けた。と、そこには、さらにビニール袋に体を押し曲げられている全裸の若い女の腐乱死体があった。想像していた通りだった。

貴幸は、また判らないように蓋を閉め、テープを貼り直すと、クローゼットを閉めた。

「なんだ、やっぱり死体だったか、つまらない」

そして、また思い直して、原稿用紙に小説の続きを書き始めた。読者の予想を裏切るものでなくてはならない。思わぬ展開にするために、陳腐なプロットではいけないのだ。死体がどう出てくるか、貴幸はそのトリックを考えて、現実を忘れていた。

第743話 個食

個食の時代と叫ばれてから久しい。それは一部の現象から、普遍的になりつつある。家族の団欒という言葉も、何か遠い昔話に聞こえる。いまや、家族は個人主義が罷り通り、バラバラが当たり前なのだ。

北村家でも、すでに「食卓崩壊」が始まっていた。

ある日、北村拓也がいつものように仕事を終えて、夜遅く帰宅すると、食卓の上に用意されているはずの夕食がない！ 冷蔵庫の中を見てもない。電子ジャーの中もご飯が空っぽだ。拓也は、女房の元子に文句を云いに行った。

「なんだ、飯がないじゃないか」

元子はふて腐って寝ていた。

「いいの、もうこれから食事の支度はしないことにしたの」

と、ストライキだ。

「どうしたんだよ、一体」

「あなたも、コンビニに行って、好きなものを買って食べてください。お金あげますから」

まるで、子供に弁当代を手渡すようだ。

「何があったんだ」

「みんな、勝手に食べるし、わたしの作ったものを食べないから。我が儘で大変よ」

話を聞くと、じいさんはだんだん年取ってくると、食べ物の嗜好が強くなり、新しい料理に手を出さなくなり、保守的になりつつある。子供に還るというが、自分の好きなものばかり食べる子供だ。しかも、好き嫌いがはっきりと出てきていた。

じいさんは、自分でスーパーから、晩酌の肴を買ってくる。海産物が多い。練り海胆、練り製品、薫製と、飯のおかずではなく、それで酒を二合二時間かけて呑み、ご飯も食べない。

ばあさんは、神経性の胃で、酢の物、揚げ物、堅い物、肉もの、塩辛いものすべて駄目。あれもこれも食べられないというから、元子も何を作っていいか判らなくなる。食べられるものは豆腐、おかゆ、あとはない。そんな似非病人と一緒に暮らしていると、病人食というわけにはゆかない。じいさんの好みで作るわけにもゆかない。食べ盛りの子供もいた。誰にメニューを合わせても大変だ。

中学の息子は、みんなと同じ時間に何故か夕食を食べない。学校から帰ると、おやつばかり食べるから、腹が減らない。齧歯類のように夜中に起きて、ごそごと自分で何か作って食べている。将来は調理師になるらしく、台所で作ることが好きなのだ。

高校の娘は、部活で遅くなるのだが、友達と外食してきたと、晩ご飯はいらないと云う。たまに、早く帰ってきてても、インスタントものか、ふりかけ、お茶漬けで満足している現代っ子だ。

結局、夫婦二人のご飯だけあればいいのだが、元子は完全に怒ってしまった。ご飯も炊かない。味噌汁も作らない。じいさん、ばあさんは、嫁へのあてつけのように、自分で食べるおかずをスーパーでできあいを買ってきていた。二人とも、嫁の作ったものには手もつけない。ということは、この家に嫁はいらないということなのだ。せっかく悦んでもらおうと作ったのに、ばあさんは、

「ああ、わたしゃ、胃にしみるから」

じいさんは、

「わしゃ、これでいい。あとはいらん」と、イカの薫製ばかり嚙っていた。あんなもの、腹の中で膨れるが、栄養があるとは思えない。そして、おかゆのレトルトパウチをどっさり買い込んで、電子レンジで暖めて食べている。

元子がついに爆発した。

「みんな、勝手に好きなものばかり食べて」

とうとう、家事一切の放棄を決めた。元子は元子で、スーパーで夜に半額に下がったデリカを買ってきて、食べていた。

仕方なく、拓也も近くのコンビニに行って、弁当を買ってきて食べていた。

「これでいいのかなあ、これで」

どう考えてもおかしい。おかしいことはおかしい。それがおかしくなくなる風潮が怖い。第一、食費が成り上がる。みんなで同じ釜の飯を食うから安い。それが家族で、それが家なのだ。それがなんだ、人間、協調と我慢を忘れたらお終いだ。

家族揃って晩ご飯というのは、年に一度の大晦日だけだった。それすらも、お節はいやだ、あれが、これがいいで、みんなてんでバラバラ。洋食、和食入り乱れ、やたら食

卓の上に並ぶこととなる。

ある日、電子ジャー炊飯器が壊れた。新しいのを買う必要もない。第一、最近は、米も買ったことがない。冷蔵庫の中も綺麗だ。食材を買うこともない。あるのは、出来合のおかずが冷凍庫が凍っているのと、インスタント食品の買い溜めがあるだけ。北村家は、それで生き延びてゆけるのだった。

ガスの使用量がめっきりと減った。煮炊きしていないからだ。元子は、食卓もリサイクルセンターに売り払った。食卓のない家。みんな、それぞれ、自分の部屋に引き込んでごそごそと食べている。

日本はいま、食生活から壊れてゆくのだ。

第744話 仕事ください

（静かにギターの名曲「アメリカ様の遺言」が流れている）

元子は、仕事がなかった。年末に失職してから、ひと月半。その間、毎日、インターネットで求人を検索し、求人情報誌をコンビニで買っては眺め、ハローワークへあししげく通った。

亭主の拓也は古本屋を営んでいたが、一家を支えるような稼ぎはなかった。半ば趣味でやっているような仕事だ。そんな食えない文学野郎につきあってはいられない。だいたい、選ぶ相手を間違っていた。青成りの文学青年で、経済力のあるものなんかいないのだ。詩人だとか、小説家を目指すという紙の上をただのたうちまわっているやつなんか、大根一本の値段も判らないのだ。

それで、高校、中学と教育費のかかる子供二人抱え、老人二人の面倒もみなくてはならない重さを感じているのは元子だけで、亭主の拓也の頭の中は、毎日書く小説のことや、仕事のことだけでいっぱい。金のこと、生活のことはたまにパロディとして題材にするだけで、深刻に考えてはくれないのだ。亭主と話しをしていると苛々してくる。とても現実離れしていて、元子の焦りが判らない。

元子が朝一番でハローワークへ入ると、もう沢山の職を求める人で溢れていた。有効求人倍率が三割と全国最低。沖縄の下で、ここ青森の貧困さが露呈されていた。元子が求人の窓口へ順番を待って行っても、係の人は冷たい。持ち家で亭主が自営業。別に働かなければ食えないというほどでもないだろうと見られるのか。少ない仕事の口は、もっと貧しい人や、リストラ、倒産に遭った人、一家の主などが優先だ。もっと大変な人が沢山待っている。

その多くの求人が、完全歩合給のセールスの会社であったり、アルバイト、パート扱いで、いずれも時間が極端に短い、小刻み就労だ。それというのも、パートタイマーに

も社保が適用になったので、さらに時間を短くして採用するのだ。酷いのは一日二時間というもある。元子の家から就労場所まで車で四十分、往復の時間が仕事の時間に近い。しかも、通勤手当はつかない。ガソリン代や車のローンを払うために仕事をしているようなものだ。

そのうち、ワークシェアで、多くの失業者を雇うために、一時間づつの勤務も出てくる。それでは、とても食えないのだ。

あとは時間的に真夜中とか、早朝三時からとか、主婦ができる時間ではないのが残っている。それでも、最低賃金だから、眠いのを我慢していくら働いても、一月の収入は僅か。

今年の一月一日で四十になった元子だが、まだ去年は三十九だから仕事があった。四十過ぎると極端に減るのだ。資格があればまだ仕事はあった。介護や薬剤師、看護師などは結構ある。元子はパソコン歴は五年とあるが、いまやパソコンできて当たり前だ。資格がないのが辛かった。それで拓也に云われて、職業訓練校に通うとか、通信教育をやってみるとか、資格を取得するための専門学校へ行くことも考えた。

この年になって、初めて自分が何もできないことに気が付いた。営業は好きだから、セールスは得意だ。文書を書くのも、拓也の仕事を手伝って少しはできる。だが、決定的に資格がない。

面接にでかけて行った。一人採用するのに、二十人くらいが殺到していた。ホテルのフロント係で、朝五時からの勤務。時給も最低なのだが、それでもそうだ。二人に絞られた中に元子が残った。それで二次面接に行こうとしたのだが、車で通勤しなければ、バスも汽車もない早朝の時間なのに、車を置く場所がないときた。自分で駐車場を借りなければならない。月に町中だから二万はかかる。とんでもない。それで断った。

元子がだんだんとやる気がなくなってきて、気も沈んできた。生活も圧迫され、すっかりとゲルピン状態になったとき、ハローワークの前で、ある男から声をかけられた。「お姉さん、仕事探してるの？ だったら、短期のアルバイトだけど、いい収入になるんだけど、やらない？」

と、どうも怪しい男だった。帽子を目深にかぶり、マスクもしている。顔がよく見えない。それでも藁にでもすがる気持ちで、たった一日の仕事だが、高収入になるという口車に乗って、引き受けることにした。明日の午後、二時から夕方までのほんの短時間だ。

それで、指定の場所まで、出かけて行った。服装はなるべく黒っぽい、目立たない格好で来ること。やはり帽子を目深にかぶってくるという条件だった。街中で、男たちと車に乗った。ハンドトーキーを持たされた。使い方を車の中で教えてくれた。仕事は単純なものだった。トーキーで、通りの様子を連絡すること、荷物を持ってきたら、急いで車に積むというものだった。それなら、資格がなくても誰でもできる。でも、どうして、そんな仕事が普通の主婦に廻ってきたのだろうか。

元子が、指定された銀行の裏口に立っていると、拓也が仕事で通りかかった。「おい、どうした。こんなところにつっ立っていて」と、拓也は声をかけた。

「いま、工作中なの。いい収入になるって、アルバイトやってるの」

「へえ、それで、時給はいくらなんだい」

「時給？ そんなの聞いていない。なんでも山分けって云っていたわよ」

すると、非常ベルがけたたましく鳴る。パトカーのサイレンが遠くから聞こえてきた

。

「おまえ、それはヤバイぞ。銀行強盗の片棒担ぎじゃないのか。逃げろー」

元子は拓也の車に乗って、逃げた。

いまは、そんな仕事しかないのだった。

第745話 エレベーター

エレベーターがまさしく閉まろうとしたとき、ぼくは駆け込んで乗った。あと一人だけ乗れるスペースがある。定員十二人と書いてあるので、それとなく人数を数えていた。ぼくを入れて十一人しかいない。それなのに、満員だ。もう一人として立つ余裕はない。まあ、詰めれば入るのだろうが、そうすれば、重量オーバーで警報のブザーが鳴るのだ。どうしてかと、よくエレベーターの中を見渡すと、ひとり、体重が百キロをゆうに超えている体格の持ち主が乗り込んでいた。その人で二人分の計算なのだ。それに、冬ということもあり、みんな着込んでいる。オーバーやコートだけでも合計すると、二人分くらいの容積にはなりそうだ。

ぼくは、そんな細かい計算をしていた。それにしても、どうして焦ってこのエレベーターに駆け込んだのか、あれこれと考えていたら、忘れてしまった。第一、ぼくは、何階で降りるつもりだったのか、このビルの上の階のどこに用事があったのか、ぼっかりと空いた記憶を探して検索がフル回転していた。

エレベーターというのは、都会の中でも何か、特別に居合わせた人々の密着した偶然の場であった。年齢、性別、職業様々、その居合わせた定員の人々が、密閉された空間で、互いに体をすりあわせながらも、どこかで恥じらい、そして、都合の悪いような沈黙に、到着階を示すランプ表示を目で、苛々しながら追っていたりしていた。

それにしても、さっきからエレベーターはどこにも止まらないで、上へ上へと昇っていた。各駅停車ではなかった。ひょっとして、ぼくは最上階への直通エレベーターに乗ったらしい。まあ、それでもいい。ぼくの行き先はまだ思い出していないのだから。それにしても、遅いのか早いのか外が見えないから判らない。かなりのスピードで上昇しているようなGを感ずるのだが、そのくせ、時間がかかりすぎる。

時間がかかるということは、ますます、ここに居合わせた人々に間の悪い密着時間が増えるということだ。だが、誰も何も云わない。ぼくは、ここで面白いことを考えていた。この押し黙った狭い空間で、思いっきりおならをしたら、みんなどんな顔をするだ

ろうか。きっと、どっと一斉に笑うのだろうか。

ぼくは、急に悪戯を試みたくなり、腹に力を入れて、ガスを出そうとしたが、何故か、腹に力が入らない。腹の中には空気も水も入っていないように空虚だった。ガスは出なくてもいいときは出るくせに、こんなときには出てこない。

ぼくは、電車でもエレベーターでも、乗り合わせた人々の顔や態度を観察することを平気です。まず、目。目を合わせないようにする人の如何に多いことか。ぼくは目を合わせることは怖くも恥ずかしくもない。目で会話をする事だってできるのだ。それを楽しむということもしていた。前には、交際していた彼女が意識する人で、話していても絶対にぼくの目を見ないのだ。その視線の動きに合わせて、ぼくは、体をその視線の方向に動かし、常に彼女の視線にぼくの目を合わせるといふ悪ふざけをよくした。彼女は笑って掌で顔を覆ったものだ。

いま、このエレベーターに乗り込んでいる人は、様々な視線をあちこちに向けていた。足下を見ている人、天井の照明を見ている人、女の人の後ろ髪を見ている人。みんな、無口だった。互いに知り合いはいないらしい。私的な会話も、仕事の話も聞こえない。咳払いやくしゃみも聞こえなければ、物音ひとつしないのだ。何か存在感すらないのだ。これが、都会か。できるだけ自分を殺し、息すら抑えて、少しの音も出さないことが、他人の中で生きるマナーだとでもいうのか。

それが、あまりにも長く続けば不自然に思える。これが田舎だったら、見知らぬ者同士でも、天気の話だとか、花木の話をお暇つぶしのようにするのだ。そして、こんな息の詰まる時間なんかありえない。どこか和やかで、明るく、お喋りだった。

文明人の気概というものは、個の尊重とする人間関係の冷たさから出発するのだろうか。ぼくは、エレベーターというその究極の箱の中で、文明と人間とを考えてみたいのだ。

女子高校生は、こんな昼間の時間に、どうしてこんなビルのエレベーターに何の用事がある乗っているのだろうか。今頃は学校で勉強しているのじゃないか。サボっているのか。それとも試験で早く終わったのか。その隣の老婆は、不気味なくらいにこにこと笑っている。何かいいことでもあったのか。昔を思い出しているように、目を細めていた。鬘鑠とした老人はいまどき珍しい蝶ネクタイに、シルクハットだ。いつの時代から迷いこんできた人なのか。エプロンをつけたままの主婦も、こんなところに普段着で出てきて、しかも、さっきからずっとケイタイを見ていて、目をその一点から逸らさない。すっかりケイタイ中毒患者だった。あんなもの、何が面白いのか。

サラリーマン氏は、大事な鞆を胸に抱えて、青い顔をしていた。何か不安な様子で視線がちらちらと動いて落ち着かない。異常な精神状態にあるのは誰の目にも明らかだ。

ぼくは、そうした乗り合わせた人々の観察をし、どんな人生を生きてきて、社会的な地位だとか、隠れた趣味だとか思想だとかを想像して時間を潰していた。

ところが、ぼくは、あまりに長い時間、エレベーターに乗っていることに、だんだんと懐疑を持つに至った。もう、二十分は乗っている。それなのに、エレベーターは途中

で止まっているわけでもなく、ものすごいスピードで上昇しているのに、どこの階にも着かないのだ。こんな馬鹿なことがあってたまるか。それを異常とも気づかず、ただ、黙って乗り込んでいるみんなが、さらに異常に思えた。この沈黙の空間にぼくは初めて声を出した。

「皆さん、おかしくありませんか。このエレベーターは、どこへ行くんですか。故障しているんじゃないですか」

すると、みんなの冷たい視線がぼくに集まり、また無視するように、通過階を示すランプ表示を凝視していた。ぼくは、改めて、その表示を見て驚いた。数字はどこにも見あたらない。点だけが無限に続いているではないか。そして、その最上階には、「天国」という文字が見えた。まさか。やがて、天国の文字が点滅すると、エレベーターのドアが開いた。ものすごい光が射し込んできた。眩しくて、目が開けていられない。そのとき、ぼくは何もかも思い出していた。

そうだ、ぼくは交通事故で死んだのだった。

第746話 鳥肉長恨歌

鳥インフルエンザで鶏肉が食べられなくなったとしても、わたしは平気だった。好き嫌がなく何でも食べるのに、この鶏肉いや、鳥全般の肉が嫌いなのだ。肉自体が、細く裂けるということが許されない。まして、ぶつぶつと毛穴の見える皮なんかはぞっとする。ヘルシーな食べ物として脚光を浴びていても、いまでもとても口にはできない。

人間、ひとつぐらいは嫌いなものがあったっていい。

わたしが生まれた家の裏に鶏小屋があった。卵と肉を自家消費するだけでなく、家業の製菓の原料にするためであった。姉なんかは、悪いことをすれば鶏小屋に入れられた。自分の背丈くらいもあり、幼心にも怖かっただろう。

すでに亡くなった祖母は、よくわたしたち子供の前で鶏をさばいた。首をちょん切ると、それでも走ってゆく鶏というのは本当だ。それを思っただけでも、いまでもぞっとする。

血抜きのために、家の前の川に吊された。熱湯をかけて羽根をむしる。その一部始終を幼いわたしは、じっと見ていた。見てはいけないと思いつつ、怖いもの見たさで見ている。

婆さんは、部屋に古新聞を広げて、大きなまな板に出刃庖丁を持ち出して、そこで首と羽根のない鶏をさばいた。手際よく、内蔵と肉を分けてゆく。それは、わたしには解剖の時間だった。黄色い臓物、赤い臓物、それらが、一羽、二羽と、さばかれるたびに、同じ色のものが集められた。棄てるところが殆どない。骨から皮まで使える。それを毎日のように見てきたわたしは、気持ち悪いと、食べるのを拒否するようになっていた

やがて、養鶏を本格的に叔父がやることとなり、東北本線の外に二階建の鶏小屋を三棟も建てた。

いまでも、その腑分けの情景が焼き付いていて、思い出すので、五十年近く経つのに、いまだに鶏肉は食べられない。

学生時代に九州一周の旅行をしたことがあった。博多の彼女の叔母の家に一週間も居候で転がり込んだ。姪の浜という、博多湾が一望できる崖の上に家が建っていた。台風の大雨で、崖崩れがあり、離れの裏庭が崩れた。わたしは、その離れに寝ることになったのだが、窓から首を出せば、下は何もない。ずっと下に木立と民家の屋根が見えた。建物ぎりぎりまで崩れたのだ。そんなところで寝ていると不安で眠れなかった。補強とされているとはいえ、空中楼阁で寝ているような恐怖感があった。

そこの叔母さんの手料理をご馳走になった。カツを揚げてくれた。白く柔らかい肉で、こんなに美味しいトンカツは食べたことがないと絶賛すると、叔母さんは笑いながら、

「あら、それは鶏のササミのカツなんですよ」

わたしは、口の中に詰め込んで、噛んでいたのを止めた。

名古屋の久屋大通りというと、テレビ塔があり、お城が見える公園になっているところ。そこに面して、古風な建物の料亭があった。一見客お断りという鍋料理の美味いと評判の店だった。

わたしは、地元の顔であるさる人に連れて行ってもらい、お酒と料理をご馳走になった。見るもの食べるもの珍しい。所変われば品変わる。名古屋と云えば、味噌煮込み、八丁味噌でぐつぐつ煮込む。後でうどんを入れていただく。うどんと云えば、釜揚げうどんも美味かった。

和服の女性が、鍋にすり身の肉を団子にして入れていた。その肉団子をあつあつでいただくと、出汁もまたよく、聞かなければいいものをわたしは聞いてしまった。

「これは、美味しいもんですね。なんという肉ですか」

「ええ、こちらの名物です。名古屋コーチンの若鶏ですけど、いかがですか」

わたしの口の中には肉団子が三個はまとめて入っていた。

夜の鳩バスツアーというのは、東京の、日頃は高く入れない店に、格安で団体を連れて行ってくれる。夜十時に東京駅を出発して、三店の高級レストランなどを周り、夜中の二時に東京駅で解散となる、ナイトツアーだ。そのどの店に行っても、ひとり一万二万はかかる。敷居が高く、なかなか入り辛い。ツアーなら、誰でも参加できるし、ガイド付きなので気楽に廻れる。それで一万少しの料金だ。

その夜のコースは、銀座四丁目の地下にあるマキシム・ド・パリの東京支店と、六本木にあるチェコの大使館直営のレストラン、そして、新宿にあるエル・フラメンコというサングリラを呑みながら本場のフラメンコを見られるスペイン酒場だ。

最初にバスが寄ったのは銀座だ。マキシムに二十人くらいの参加者たちが、そろそろと入ってゆく。フランス料理のフルコースだ。フランスパンをどうぞと、籠に入れて持

ってくる。仲間は沢山取ると、ポケットに入れていた。

ボジョレーのワインも振る舞われる。ヴァイオリン奏者が、食事中のわたしたちの席に来て、すぐそばでセレナードを奏いてくれる。いよいよ、メインデッシュが出てくる。照明が暗くてよく見えない。何かの肉の上にオレンジのソースがかかっている。

「すごい。このひと皿だけで、五千円はするだろうな」

と、仲間のひとりが云うから、そんな高級なものなら、じっくりと味わおうと思っていた。その肉をフォークとナイフで切り分けて、口に運んだ。ぐにゅとした食感。何の肉だろうか。いや、魚かもしれない。すると、隣の人が云った。

「いやあ、この鴨もオレンジと合うものだな」

半分くらい食べたときだった。

(何? 鴨だって?) 暗くてよく見えないが、目を近づけて肉を見ると、鳥の皮がぼつぼつと浮き出て見えていた。

第747話 コンパクト・シティ

山に春を見つけにゆこうと、柳沢加代は自然観察のメンバーたちと、近場の山に散策に出かけた。まだ、残雪がかなりある。林道は、雪解け水が川のように流れていた。春一番で出てくる緑と、小鳥の声、若芽を見ることで、今年の春が早いか遅いか、記録と照らし合わせて判る。

加代は、裸木の林の中に、きらきら光る不思議な金属を見つけた。なんだろうと思って、手に取ると、それは、どうやら女性の化粧に使うコンパクトのようだった。持つと不思議な重量感がある。どうも、比重が違うから、どの金属より重い気がした。表面は、何のメッキが施してあるのだろうか、パールのように奥深いところから光り輝いているようだった。銀色の奥に薄いピンクが隠されている。ただ、それがどうして開けることができるのか、いじくっても開けられないでいた。

「加代、どうした。何か見つけたのか」

自然観察のメンバーで、一番仲のいい田村雅之が近づいてきた。加代は、何か悪いことをしたように、咄嗟にコンパクトを隠した。

「ううん、なんでもないわ」

二人とも、三十は過ぎているのに、なかなか結婚というところまで行かない。どちらからもそんな告るということはしないのだ。のんびりしているところがあった。会社員だが、日曜日のたびに自然に触れるために、野や山を歩き廻る。目がそっちのほうにいてしまい、人間観察がおろそかになっていた。

加代は拾ったコンパクトのことはすっかりと忘れて、ルックザックに入れたままだっ

た。

田村雅之は、市役所の街創りのビジョンを説明会で聞いていた。建設会社としては、聞き逃すわけにはゆかない。

「これからの街は、コンパクトであることです。人間は固まって生きるほうが管理もしやすいし、街の機能としての効率もいいのです。たとえば、人口三十万の街が百平方キロの土地に散らばってあるのと、十平方キロの土地に集約されているのでは、全く、その都市のコストが違うわけです。特に、わが豪雪都市でも、人口三十万近くの街としては、これほどの積雪量を見るところは世界でも稀です。年間の除排雪の予算も馬鹿になりません。そこで、将来は、中心部に超高層ビルを建てて、郊外に広がる人口を中心に集めたいのです。そうすることによって、学校、病院、会館、保安、警備、ライフラインといったすべての都市機能が狭い範囲で、しかも少ない人員でのサービスの提供ということができます」

雅之は、メモをとりながら、なるほど、これからは分散より集中型か。と、納得しながら熱心に聞き入っていた。講師の先生は、中国の古代都市や、アラビアの都市にその原型を見ると、城郭都市を理想とするような説明を加えていた。

そのころ、加代は例の拾ったコンパクトをなんとかこじ開けようと、苦心惨憺していた。これが、なかなか開かない。壊したり、傷つけても、いけないと思いながら、慎重にやっていたが、かなり堅い物質でできているらしい。見れば見るほど魅力的な深い色だ。それ自体が美しい宝石のようだった。

硬度を確かめるために、ダイヤの指輪でこすってみたが、なんと傷がつかない。ということは、硬度は十以上で、地上にある物質ではない。不思議な拾いものに、加代は宝物のように、また諦めてハンドバッグに入れた。

そして、友達と会うために、夜の街に出ていた。待ち合わせのカフェに行くと、後で仕事を終えた雅之も呼ぼうと思って、ケイタイでメールを送信しておいた。

ハンドバッグの中が何か騒がしい。なんだろうと思い、そっと開けてみると、あのコンパクトが光を発していた。驚いて、バッグの口を閉めた。そして、カフェのトイレに駆け込むと、中で密かに開けてみた。光り輝くコンパクトは、化粧室の台の上で、いとも簡単に開けることができた。

加代は、あっと息を呑んだ。コンパクトの中に加代はすごいものを見てしまった。信じられない。そして、また慌ててコンパクトを閉じた。

カフェに雅之が来たときまで、加代は上気したまま興奮から醒めないでいた。

「あのね、わたし、この前、山へ行ったときに、これを拾ったのよ。何だと思う？」

と、加代はバッグからテーブルの上にコンパクトを出した。友達と雅之が、その不思議な色に目を見張っていた。しかも、硬質な皮膜で覆われているようだが、それ自体が光を放っている。

「いいこと、開けてみるからね。驚かないでよ。コンパクト・シティなのよ」

加代がコンパクトを開けると、二人とも、顔を近づけて中に浮かび上がった都市を見ていた。まるで、飛行機から街の夜景を眺めているかのようだ。ビルが林立し、高速道

路や走る車までが埃のように小さく見えていた。それは、宇宙から飛んできた宇宙ステーションだった。ミクロの宇宙人たちが、小さなコンパクト様のドームの世界で生活していたのだ。

雅之は、急に冷たい軽蔑したような顔を加代に向けた。

「コンパクト・シティって、こんなことだと思っていたわけ？ 馬鹿らしい」

そうして雅之は恥ずかしいくらい大きな声で笑った。加代は侮辱されたように赤面して、

「そうね。こんなことってありえない話ね」と、近くの燃えないゴミを入れるボックスにぼいとコンパクトを棄てた。

一ナ、ナニガアツタンダ。宇宙船ハ、ドコニイルノカ、位置ヲ確認セヨ。

宇宙人たちは慌てていた。

第748話 セキュリティ

少年犯罪が増えていた。相手が女の子でも油断がならない。若い人たちも、仕事がないので、ぶらぶらしている人が街に目立った。ケイタイやゲームに金がかかるときに、収入がない。中には短絡的に強盗を働く。おれおれ詐欺をする。誘拐、親父狩りをする。引ったくりも増えた。暗い夜道は若い女性だけでなく、老人もサラリーマンも気を付けなくてはいけない。だんだんと物騒になってきていた。

防犯のために、町内に自警団もでき、見回りをしていたりする。ショップでは、警報ブザーが安く売られていた。北村拓也は、それを買ってきて、高校の娘と中学の息子にそれぞれ持たせた。いまは、息子といっても、悪戯される時代だ。男の子だと安心もしていられない。

拓也は以前は何店も多角経営で支店を持っていたが、いままで六回も泥棒に入られた。画廊を経営していたが、うっかり鍵の掛け忘れで夜中に泥棒に入られた。レジの釣り銭をすべて盗まれた。店にあった高い壺や油絵には手をつけていなかったことが幸いした。そっちのほうが高額だった。翌朝、刑事や捜査班の人たちが来て、指紋、足跡を調べていった。たまたま、個展の取材で来たテレビ局が、カメラを手に、「これは丁度いいタイミングだ。事件の取材に切り替えようか」と、云っていた。

別の店では、マンガやゲームソフトを売っていたが、子供たちがひっきりなしにやってくる。

「おじさーん、トイレ貸してよ」と、数人の小学生たちが云うから、「あいよ」と、後ろの部屋にあるトイレを貸した。

ところが、翌朝、レジの金のごっそりとなくなっていた。たまたま売上がよく、万札が束で入っていたのを、レジを締めないで帰ったばかりだった。拓也は、アルバイトを

していた自分の息子を疑った。

「お父さんは、自分の子供が信じられないの？」

と、高校の息子は無実を主張した。悪いことをした。ところが、また翌日もレジから札が消えていた。ミステリーだった。シャッターが降りていたから、どこからも店には入れないはずだった。

その日の昼に、近くの小学校の教頭先生から店に電話があった。

一裏にトイレがありますね。ちょっと、窓が開いているか、見てくれませんか。

と云う。見に行くと、窓の内鍵が外されている。

一どういことですか。と、訊くと、

一うちの児童が、学校で友達に一万円札を配ってしましてね、問いつめたら、白状いたしまして、お宅の店に夜中、忍び込んで、レジから金を盗んだというものですから。

拓也は衝撃を覚えた。相手は小学三年生の可愛い男の子たちだったからだ。みんなこの辺りでは有名なグループで、スーパーでも手を焼いているという小学生の万引き集団だという。親も親で返済に来るどころか謝りにも来ない。

また、別の店では、裏口のドアの鍵を外しておいて、夜中に忍び込むという手口で、商品がごっそりとやられた。その犯人は、二度もうちに入った。二度目は刑事が「ぶっこみ」と隠語で云っていた、裏の窓ガラスを割って侵入していた。その犯人は、指紋を残していた。指紋は、十年前の犯罪で、データが残っていて、あえなく御用となった。仕事もせずにぶらぶらしている裏のアパートに住んでいる若者だった。その母親は、土下座して泣いて謝り、あの子を産まなければよかったと云った。

そんなことが続いたので、拓也は、防犯ドアブザーを各窓という窓に取り付けた。大手警備保障会社と契約するような売上もない。その警報機は、効果があった。明けから鳴りっぱなしでなんとかしてくれと、近所から苦情が来て判った。窓が少しだけ開いていて、警報が鳴ったので、未遂でそのまま逃げたのだ。内鍵は、外されていた。誰も入れない倉庫の窓だったので、そのことがあってすぐに辞めたアルバイトの高校生が、手引きしたことを知った。

内にも泥棒はいて、アルバイトで店を任せていた高校生の半分以上が、レジの金をごまかす、商品を持ち帰る、横流しする、レジを打たないで売上げをポケットに入れるということをしていた。頭のいい子は、レジを一旦精算して、また打ち直すという小細工までしていた。

それからというもの、頭にきた拓也は、アルバイトを使うのは止めた。マンガ本やゲーム、CDなどをすべて売のをやめて、専門書だけにすると、入口のドアに張り紙をした。

一十八歳未満入店お断り。

さっぱりした。万引きがあまりにも多かったから神経が休む暇もなかった。子供たちを閉め出すと、店は静かになった。本当の古本屋に戻ったのだ。

それでも安心ができないのは、一度は、支店の女子社員が男に店内で襲われたときも

あった。客として入ってきて、様子を窺い、突然強盗に変わるものもいるのだ。

店の隣のカメラ屋が、強盗に入られた。騒がれて、何も盗らずに逃げたという。あちこちで、入られたという話を聞くから、ものすごく荒れているのが判る。世の中、狂い始めている。

そこで、拓也は店に警報ブザーを置くことにした。レジの傍にブザーを買ってきて設置した。何かあると、鳴らすことで、強盗は逃げるだろうと思った。

そして、それから数日したときだった。顔を隠した怪しい男がきょろきょろと店内を眺めて、他に客がないことを確認している様子だったので、拓也は、何か悪い予感がした。案の定、その男は、拓也が、弱そうなやつと見てとったのか、いきなり、サバイバルナイフをつきつけると、押し殺したようなドスのきいた声で、

「金を出せ」と、すごんだ。

拓也は、冷静に、防犯ブザーのボタンを押した。すると、どうしたことだろうか。そのベルは試聴するべきであった。

ーピヨピヨピヨピヨ……。

と、可愛らしいひよこの鳴き声が出たのだ。

「はははは、それがどうした」

強盗は、馬鹿にしたようにナイフをひらひらさせていた。

第749話 碧い光

あれは、夜、九時頃であったと思う。いつも、わたしは仕事の帰り、三十分かけて、市内から海辺の自宅まで車を運転して、国道四号線を走っていた。八時を過ぎると、いつも車の流れはすいていた。民家もない郊外の道は両側が雑木林で、その後方には低い山があり、道はなだらかな登りになって、峠のトンネルへと続いていた。

わたしが、不思議な物体を見たのは、そのトンネルの手前二百メートルくらいのところであった。

ピッキーン、という聞いたこともない音がしたかと思うと、突如、わたしの車のフロントガラスの前を横切るように、碧い光が飛んだ。わたしは、自分の目を疑った。その光は、実にゆっくりと、空中、道路から二、三メートルのところを横に流れた。妖精に一瞬見えた。アニメで見るような人の形をしているなにものが、直径五十センチくらいの球体のカプセルに入って、コバルト色に光輝きながら、飛んでいる。そして、林の中に消えていった。ただ、それだけのことなのだが、いままで見たこともない、この世の色とは思えない光に、わたしが一番先に思い浮かべたのは、花火だった。誰かが、悪戯して、わたしの車を目がけて、マグネシウムかアルミニウムか、そんな人形を燃やしながら、破裂させた。

第一、わたしは、非科学的なことは信じない。必ず、何か不思議なことには、科学的

な裏付けがある。そう思っている、その光だけは、どうしても説明がつかないのだった。誰かにそのことを話しても、とても信じてもらえないから、女房だけには、天気のように何気なく話した。笑って取り合わない。

と云うのも、わたしの娘が中学まで、いつも妖精を見たときと騒いで、女房を怒らせていたからだ。少女が見る妖精というのは何なのだろうか。うちの娘だけでなく、よくそんな話は本でも読んだことがある。幻覚なのだろうか、娘は真顔で、

「ほら、いま、目の前を飛んでゆくよ。小さな碧い妖精さんが、ママ、見えないの」

女房には馬鹿らしい少女期の妄想と思い、気がおかしくなったと思い、それで怒るのだった。いま、五十になって、わたしも中年の幻覚を見たのだろうか。中年のおじさんの見る妖精というのは、何の意味があるのだろうか。でも、あの光の碧い環の中にいたものは、確かに現実の感覚で捉えられていた。わたしは、まだ狂ってはいない。

それでも、わたしは、子供のときから、不思議なことが好きだった。不思議でも、科学で説明するというテレビ番組を熱心に見ていた。アメリカのテレビ番組の「空想科学劇場」というのがあった。SFも好きなジャンルで、マンガにしても、読み物にしても、そんなものばかり貸本屋から借りてきて読んでいた。その延長で、仕事で疲れているわたしの目に天空から降ってきた妖精のようなものが見えたのだろうか。わたしの頭の中の構造が、幻想を捉えやすい作りになっているのだろうか。

UFOというのも信じないが、どこかでは完全に否定していない。この銀河系宇宙には、われわれのような高度な文明を持つ生物が、何千、何万とあると、天文学者は計算しているのだ。ただ、あまりにも恒星と恒星の距離が隔たっているから、行き来するには、光速の乗り物が必要だ。一番近いその太陽まで光速で七年もかかる。往復十四年、それだから、仮にその中に似た条件の惑星があり、宇宙人がいたとしても、やってくることは不可能だと、それも計算されているのだ。

ということは、あの碧い光は、宇宙人の小さな未確認飛行物体であるということも、妄想ということになる。でも、どうしても解せない。わたしの中にいつまでもモヤモヤした不可解が残り続けていた。

いまは、オカルトブームで、不思議な体験が、テレビでも盛んにやっている。この二十一世紀でも、中世に逆戻りしたように、悪魔や、妖怪が大流行だ。女房、子供たちは、ばかばかしいと思うそんな番組を食い入るように眺めている。そして、ビデオレンタルからはホラーものを借りてきては見ていた。

先が見えない時代には、怖い正体不明の魑魅魍魎たちがもてはやされる。平安の昔から相場は決まっていた。

科学が衰退すると呪術が罷り通る。これからは、政治も含めて、暗黒の中世へと逆行するのではあるまいか。世の中があまりにも幼稚になると、その傾向も否めない。

わたしは、碧い光のことはすっかりと忘れていた頃、テレビで科学捜査番組をやっていた。その番組で多くの目撃者たちが証言していたのは、まさしくわたしの見た碧い光の体験談だった。やはり、同じ光を見た人は世界に沢山いるのだ。あれは妄想ではない

。番組では、それが隕石であると報じていた。あれは、碧い光を放ちながら燃えて、宇宙から飛んできた隕石なのだ。わたしの前でピキーンと飛んだものの正体が判った。

ようやく、わたしの中に引っかかっていた疑問が消えた。どうだ。と、わたしは自分に威張って呟いた。この世で、計算で出せないものはないのだ。きっと、論拠がどこかに眠っているのだと。

第750話 隔家族

北村家はどこかおかしい。みんなバラバラだった。違う種類の細胞が寄り集まってできている組織のようだった。それは、誰かが泊まりに来たりするとよく判る。

北海道の姉がたまに遊びに来たりすると、

「あんたたち、どうなってるの？ こんな家って珍しいわよ。おかしいわよ」

と、笑うことになる。どこかギクシャクしている。というのも、八年前に主人の拓也が再婚したときから始まった。

嫁の元子はひと周り以上も拓也より下の若い嫁として、二人の連れ子と共にやってきた。娘は七歳、息子は四歳。それが難しい年頃に来たもので、いまだに祖父母になつかない。嫁もなつかないから、母親の格好を見て、子供たちが他人行儀になる。

拓也は、なんとか融和させようと、日帰り旅行にしょっちゅう連れて行ったり、家族で行楽、一泊と機会あらば親睦の場を設けた。拓也には子供たちはなついても、じいさん、ばあさんには行かないのだ。

それは元子が最初から遠慮したところから、線引きが始まったのだった。途中から入った気後れと、もともとの内向外向の二面性が悪い方向で出てきていた。それで、舅姑にかしづくようなことで、入ってきたことが姑には気に入らない。

「どうして、ママは、遠慮しているの？ 変だよ」

と、息子に云われるほどおかしかった。それが、後妻、連れ子という居候の遠慮から、自然と長い時間でそうなった。元子は、いつも一線を引いて、丁寧語で舅たちと話すのも、不自然だった。それが次第に子供たちに伝染した。

拓也の本当の子供たちは三人いたが、みんな成人して東京で仕事をしている。

その本当の孫と差別的な取り扱いをしていなかった姑も、だんだんなつかない子供たちが可愛くなくなる。いまでは、二人の子供は口もきかない。こそこそとひとつ屋根の下で生活しているのだった。

「わたしたちはいいです」と、元子は「わたしたち」という括り方で、親子三人を常に別に隔離したがる。それがますます姑には気に入らない。

「どうして、腹を割って話さないの。前の嫁は、お金がないときでも、義母さん貸してと、甘えてきたし、なんでも相談したものだ。いろいろあったけど、嫁も頼られると可愛いものさ。それに比べて、いまの嫁ときたら、口もきかない、何も話さない、自分の部屋に閉じこもって、知らんぷり。何を考えているんだか」

と、嫁姑の仲が急激に悪くなってきた。そのことを拓也は元子に話すと、

「あら、わたしは、昔から人には頼らないで生きてきたの。誰にも迷惑かけたくないし、弱音は吐かないわよ」と、いつも強気だ。嘘でもいいから、義母に甘えてほしい。そこが元子には判らない。あの二人、決定的に性格が合わない。姑は、細かく、いつまでも愚痴を云うほうだが、元子は大ざっぱで、けろりとしている。次第に互いが憎しみを

持ち、毛嫌いすることになった。

何か伝えたいことがあっても、直接話をしない。伝言板のように拓也を通すから、いちいち嫁から聞いたことを拓也は母に話す。またその逆だ。テーブルの上には伝言メモが置いてあったりする。そこまで険悪なのだ。もう、修復できないくらいだった。

「離婚はしないけど、別居もないし」と。元子は云うし、

「老人のためのマンションがあるんだって、そこに引っ越ししようかしらね」と、姑は云う。もう、お互いの顔も見たくはないのだ。間に入った拓也が一番大変だった。まあまあ、と宥めすかせるが、仇敵のように、水と油、うち解けることはない。

というのも、拓也は母親の性格があまり好きになれないでいた。その反対の女性をいつも連れてくる。以前も彼女だと連れてきた女が、男勝りの性格で、母から、

「おまえの選ぶ相手はいつも同じだね」と、イヤミを云われた。そればかりは好みだからしょうがない。女女した女は拓也は嫌いなのだ。女優でいったら、市原悦子、ぞっとすると云う。そんなだから、どんなに嫁が出ていって、新しい嫁が来てもまた同じことの繰り返し。当分、この壊れた家族の修復はできそうにもなかった。

晩ご飯もバラバラで食べる。年寄りたちが寝たあと、二階の部屋からそっと降りてきて食べている形跡があるから、何か正体不明の生物と暮らしているようだ。じいさんは、孫の顔を見ない日が続いていた。朝は早くから学校へ行く。帰りは部活で遅い。

「みんな、暫く見ないが、元気で暮らしているのかね」と、じいさんは拓也に訊いた。同じ家に住んでいる言葉とは思えない。

若い人たちの邪魔をしないよう、年寄りも遠慮して、さっさと自分たちの部屋に引っ込んでしまう。子供たちもそれぞれの部屋で音楽を聴いたり、ゲームをしたりしている。元子も自分の部屋でコスメ雑誌を読んだり、パックしたりとそれぞれがそれぞれの部屋で好きなことをしていた。

拓也も書斎で毎晩、指先物語の小説をパソコンで打ったり、ネタ探しのために本を読んでいた。家族は他人のような生活をしながら、各自隔離されていた。

それを見た拓也の姉は呆れて、

「これじゃ、アパートと一緒に。そうだわ、各部屋に番号札でも付けましょうか」

と、部屋のドアに番号を書いた札を貼った。一号室は拓也、二号室は元子、三号室はという具合にだ。

家族は時として他人より他人の場合がある。

「おはようございます」

と、にこやかに近所に挨拶する、幸福そうな家庭も、覗けばそんなふうであるかもしれない。

アレルギー体質というのでもなかったが、高橋健太郎は、神経質であり、感じやすい皮膚感覚を持っていた。

腕時計をはめていると、革のベルトならいいが、ステンレス製なら、付けているだけで、腕の辺りが赤くなり、痒くなったりする。部分入れ歯も、口腔内で拒絶反応を示し、どうにもいじくらしくなり、粘膜がただれ、口内炎になり、とても装着してられないので、結局は外してしまう。入れ歯が合わないのかと、歯医者に何度も通っては、削り、合わせてもらうのだが、どうにも体が受け付けない。一日と填めていられないのだった。

異物感というのは、服や下着にもあり、皮膚が敏感なので、毛糸のセーターが肌に直接接触れるところがちくちくして、我慢がならない。そうしたことは、眼鏡でも起こり、眼鏡の縁が当たる部分が痛くて仕方がなくなる。赤く型が付くほどの異常さだった。ならばと、コンタクトレンズにしたが、それはますますいけない。違和感で、何度練習しても、苛々して、目に入れていられない。なんとかしてくれと叫びたくなり、気が狂いそうになる。

それで、服装は綿や麻百パーセントのものだけ、化繊は着ないことにしていた。できるだけ、体には金属のものは付けない。眼鏡も必要ときだけ、虫眼鏡のようにして使用していた。腕時計は付けない。入れ歯がなく不便でも我慢するようにしていた。

意識過剰なところがあり、自分の体の部分でも意識すれば、異物として認識してしまうことに気が付いた。その反応が出たのは舌だった。あるときから、自分の舌が自分のものでないような感覚に囚われた。そう思うことで、ますます口の中に何か入っているという感じがいつまでも消えない。また苛々してくる。舌を噛みそうになるくらい、感覚がない。そればかりか、舌は勝手に動いているようだ。自分の体の一部分でありながら他人の舌であるように、云うことをきかない。そんなことがあってたまるか。健太郎は、鏡を眺めて信じ難い目で舌を見た。そいつは、まるで意思を持った生物のように蠢いている。

高橋健太郎は、三十過ぎの普通の会社員だった。その異常に気が付いたのは、商談の最中だった。相手は大手機械メーカーの専務だった。新商品の機械を売り込むチャンスだった。健太郎と、営業部長が商談の席についていた。

「さあ、高橋、専務さんにセールスポイントを説明しなさい。プレゼンは渡してあるね」

「はい、専務、それでは」と、健太郎はスマイルで専務に説明を始めた。

「てめえ、耳穴ほじくって、よく聞きやがれ」

すると、専務も部長も、本人も驚いて飛び上がった。健太郎は、（専務さん、これから説明をさせていただきます。お聞きいただいでご検討ください）と、云うつもりだった。それが、舌と唇、呼吸までが造反したように脳の命令をきかない。

「いや、失礼しました」一同、汗を拭いた。

「ばかやろう。こんなお買い得なもの、買わねえと、よそへやっちまうぞ」

みんなドキリとした。健太郎は口を押さえた。他人の口を塞ぐように、自分の口を手でおおった。

「モゴモゴ、おれを誰だと、モゴモゴ、思っただらうか」

「いやいや、大変なことで、高橋、君は疲れているんだ。戻りたまえ。本当に申し訳ございません。どうも、精神的におかしくなったようで、はい」

と部長は健太郎を追いやった。

ショックを受けているのは健太郎本人だった。顔でほほえみ、口で罵倒していた。唇も反抗的態度をとっていた。一日、健太郎は口をきかないでいた。舌が蛇のようにうねり、口の中でのたうちまわっているように、勝手に動くのが不気味だった。すっかりと落ち込んでいた健太郎が、酒でも飲もうと、ひとり、会社帰りに居酒屋に寄っていたら、恋人の坂井紀子が心配してやってきた。

「どうしたのよ。何かあったの？」

「おお、まぶい姉ちゃんじゃねえか。やらせろよ」

慌てて健太郎は口を押さえたが遅かった。客の視線と笑いが集まり、紀子は真っ赤になった。健太郎も赤くなり、下を向いていた。紀子は泣きながら、居酒屋を飛び出した。健太郎は、口の中に指を入れて、舌と格闘していた。

「いてえじゃねえか、やる気かよ。ぶっ殺してやる」

なんとか舌を黙らせようと、動く舌を叩いたりつねったりしていると、口はますます口汚く怒鳴り続けた。

「あのう、お客さん、他のお客さんの迷惑になりますから、ひとり喧嘩は外でやってくださいよ」と、とうとう店主につまみ出された。客の笑いが後ろから浴びせられた。

繁華街に出ると、恐ろしいものに追われるように健太郎は走った。自分の中に別の人格がいるのか、それとも、エイリアンが侵入したのか、どうなってしまったんだ。そのうち、手が感覚がなくなっているのに気が付いた。おや、おかしいぞ、右腕が勝手に動いているぞ。健太郎は焦って、左手で押さえようとした。すれ違う、チンピラの髪を掴んでいた。やった。やってしまったぞ。健太郎は目を瞑った。

「おう、何しやがんでえ」

チンピラが振り向いたところを右手が勝手に動いてパンチを顔面にくらわしていた。健太郎の顔は泣きそうな顔で、頭は謝って下げっぱなしなのに、手と口だけは威勢がいい。

「態度がでけえんだよ」と、健太郎は凶暴になって、チンピラの胸ぐらを掴んでいた。

（ごめんなさい、ごめんなさい）と、心の中では震えているのだった。

われわれは、どこかに他人を隠している。新聞を読んでも、テレビを見ても、世の中の矛盾と不正を許せないが、何もできない自分がある。紳士然としていても、本音で叫びたい心が怒りに震えているのだ。そんな弱い自分に見切りをつけて、体の一部分から革命は起こっていた。健太郎だけでなく、みんな、じわじわとくる体の異変に気が付きはじめていた。

第752話 抜けた

江戸時代の後期に、空から伊勢神宮のお札が降ってきたと、それを手に、いままで丁稚として店先の掃除をさせられていた小僧が、庭箒を手にしたまま、突如として、すたすたとお伊勢さんの方角に向けて街道を歩き始める。世間はそれを容認した。世に云う抜け参りである。世の中が、狂ってくると、みんな社会なんかどうなってもいいと一種のヒステリー状態になっている。

それは、長引く不況と、飢饉、藩の疲弊、財力の低下、武士階級の墮落、天災や伝染病といった、いまと似たような状況下にあって、民衆は、一揆に出たり、村ごと逃散といったパニックに陥っていた。それが幕末まで続くのだ。

そうした状況から抜けるということが、ある日突然に「こんなことは馬鹿らしい」と、仕事を放棄、家庭を遺棄して失踪するという挙行に出る。

プラスとマイナスというのは、がらりと違う。氷点を超えるか、超えないかでは水と氷ほどの差があるのだ。会社の赤字と黒字もとんとんの零度を境に天国と地獄の分かれ目となる。

いままで、アイスバーンでそろそろと走っていた車も、氷点から気温がプラスになり、雪も解けて水になると、道路は快適だ。スピードをあげて走れる。いままで鬱積していた冬から抜けたという実感が春にはある。

駄目な現状にいつまでもしがみついて、同じやり方をしてもじり貧になるだけで、解決の糸口がいつまでも見えない。

村瀬典之は去年、定年退職したばかりだった。息子夫婦と一緒に暮らしていたが、嫁姑の仲が悪い。息子の則生と典之もまた合わない。いままで、長く別々に暮らしていた親子だが、則生がリストラで失職すると、親の家に転がりこんできた。夫婦二人の静かな生活が、急に孫二人入れて、賑やかになった。最初のうちは孫たちと一緒に暮らせるから楽しかったが、則生がただぶらぶらと毎日パチンコばかりして、三十いくつにもなるのに、親に遊興費をせびり、全く仕事をする気配を見せない。親の年金にパラサイトする若夫婦に文句を云われ、次第に家は乗っ取られつつあった。

嫁も嫁でだらしなく、パートに出るのでもなく家事は姑にやらせて、まるで家政婦扱い。孫も我が儘で不良、問題ばかり起こしている。家の中は散らかり、ゴミだらけとなってゆく。典之が注意すると則生は暴力を振るうようになった。何かあると、

「あんたたちはいいよな。おれたちの働いて貢いだ年金でのうのうと暮らしていやがる。おれたちは、この先、年金なんか貰えそうにないもんな」

そう働いてもいないのに、云うべきことは云う。生活は悲惨になってきていた。

そんなとき、典之の昔の同僚から絵葉書が来た。綺麗なコバルトブルーの珊瑚礁の海に椰子の生えた島々。

(夫婦でフィリピンのカオハガンに来ています。老後は税金の高い日本より、物価の安いこちらで暮らすように居も構えました。遊びに来てください)

典之は、ふと、これからの老後が息子夫婦によって地獄と化すことに懸念を抱いていたところで、南国の孤島を想像していた。

書店でいろんな本を購入してきた。フィリピンでは、日本円にして五百万円をフィリピンの銀行に預金するだけで、国籍を取得できる。預金利息も日本より高い。

このままでは、息子夫婦に財産をむしりとられてしまう。年金も何に使ったものか、借金の返済に向けられていた。息子夫婦は、食べ物も贅沢なら、どんどんと、つまらない電化製品を買ってきて、その請求書も親へと回す。家族揃って、いまだ親の脛を齧り、やりたい放題だ。

そんなときに、老人の年金を据え置きから減額の話が出ていた。そして、さらに税金を高くして、ますます日本を暮らしにくくしている。政府は取りやすいところから取り立てる。この先、ここに暮らしていれば内憂外患で、内からも外からもむしり取られてしまう。ひょっとすると、介護費用だけでなく、葬式代までも取られてしまうかもしれない。

村瀬典之は、ついに覚悟を決めた。こんな息子は棄ててやる。こんな日本は棄ててやる。

ある日、息子夫婦は、ローンで買った自家用車でデズニーシーへと遊びに行った。それをいつもより、しみりと見送っていた老夫婦は、みんなが家を出た後、急に忙しくなる。夜逃げは近所の目があるから、昼逃げだ。用意周到、すでに海外渡航の用意はすべて完了していた。息子夫婦だけが知らない。家や家財はどうせ遺産相続で息子たちにやるものだ。後は、勝手に生活したらいい。貯めた虎の子だけはフィリピンに送金していた。友人は、月に三万もあれば、夫婦で楽に暮らせるという。この先、年金が減らされても十分な蓄えもできそうだ。老後は海外で。これは、これからはブームになるらしい。戦争に巻き込まれ、テロと犯罪が増えて、危険な国になりつつある日本、馬鹿な政治で、弱いものから取り立てる日本、こんなところに暮らしていると、生き血も吸い取られ、墓地も高額で、死んでも入るところがない。安住の地を求めて抜けなければならない。

雪深い東北の田舎から、常夏の国へと、移住する。

ジェット機はどこまでも澄み渡り、抜けたような青い空の南国を飛んでいた。そこなら、公害もなく空気も澄んでいる。食べ物も自然そのものだ。友人たちが、すでに住まいも用意してくれていた。

「あなた、ほら、あんなところに無人島が」

空の上からいくつもの島々が見えていた。

第753話 ああ、民主主義

総選挙では保守党が圧倒的勝利を収めた。九割の有権者が保守党に投票し、指示するといった民意はすべて選挙に反映していた。新内閣の支持率も空前の九十パーセントを超えるといった数字をはじめだし、首相の人気は絶大なものがあつた。国民的英雄とまで謳われ、どのタレントよりもてまくり、熱狂的ファンで首相の通る沿道は埋まつた。

ついに一党独裁国家が出現したのだ。政府イコール党であるから、党利党略に反対する少数野党は、危険分子撲滅の新法案で弾圧が始まり、解党、転向が官憲によって進められ、恐怖の踏み絵が始まっていた。いままで反戦を叫んでいた市民団体も、いまはなりを潜めた。政府に刃向かうこと自体が違法となつてからは、取り締まりが厳しくなつたのだ。危険分子と呼ばれたかつての野党、及び支持者たちは、地下へと潜り、表面的には姿を消した。

憲法改正はあつというまになされると、自衛隊は陸軍などと呼称を変え、堂々と海外へ軍隊を派兵するや、軍備の増強をはじめた。GNPの一パーセント枠など過去のもので、この不景気の世の中なのに、軍事予算は国家財政の四割を超えた。

国内の機械、電子メーカーはこぞって兵器の生産へと転化していった。自衛隊では海外の駐留もまかなえないから、二十歳過ぎた若者が一年間の軍務に就くといった徴兵制も敷かれた。

各学校職場には天皇のご真影と国旗が配布され、それを毎朝、全員で玄関で一礼するよう指導された。教育勅語も復活した。

強い国家を目指し、子供たちにも軍事教練が始まつた。町内では防火訓練も定期的に行われた。核を持つことは米国も容認し、陸海空の核装備は推進していた。

その強大な軍事力で、強気の外交が始まる。特に隣国には威圧的態度で、在日の民族に対する差別と迫害も始まつていた。

「やっしまえ」と、口々に民衆は叫んでいた。戦争の機運が高まつていた。一部の民族への暴力が民衆の手によって各地で公然と行われていた。いまや誰も戦争に反対しない。反戦を口にするのは、逮捕拘留を意味した。

北村の家に突然、憲兵のジープが横付けになつた。たいてい手入れは早朝に行われた。時計はまだ六時前だつた。北村の玄関のドアが壊れるくらい叩かれた。

北村の女房が、玄関に何事か出ると、拓也に逮捕状が出ていた。拓也は二階の窓から逃げようと思つたが、高所恐怖症であつた。飛び降りることができない。観念して玄関に出た。

「北村拓也だな。インターネットで、指先物語という衆人を拐かす非合法小説を発信し

ているな。憲兵隊へ連行する。これから家宅捜査も行う」

と、書類を提示するや、捜査班がどやどやと北村の書斎に入り、パソコンやエロ本、アダルトビデオなどを押収していった。拓也は青ざめた。パソコンのアドレス帳には、小説を送っている人たちの電話番号や氏名も登録されている。一網打尽になってしまう。それに、いまは発禁になっている社会主義関係の古書もすべて証拠物件としてダンボール箱に入れられていった。

拓也の老母は泣きながら、

「おまえは、いつからアカになったんだい。そんな息子を育てた覚えはないよ。おまえを殺して、わたしも死にたい」

騒ぎを聞きつけて、近所の人たちが、もの凄い憎しみの目で、北村の家を睨んでいた。拓也が連行された途端、

「アカは町内から出てゆけ」と、みんな家の窓という窓に石を投げつけた。一人でも分子が出た家族はみんな排斥の対象になった。

連行される途中のカーラジオから、我が国が宣戦布告し、日本海で交戦が始まったという臨時ニュースが流れた。西海岸に配置された中距離ミサイルが次々と発射されている様子が報じられていた。日本海は封鎖された。空を見上げると、無数のジェット戦闘機が西の空に消えていった。

街では、市民たちが日の丸を玄関や店頭に出し、手に手に国旗を持ち、声高に戦意高揚の歌を歌っていた。

すべてが戦前に逆戻りしていた。アンケートをとると、国民のやはり九割が戦争を指示していた。後の一割は無回答。

拓也が収容所に入れられたとき、文学仲間の笹本や久藤などもすでに連行されて、ぶちこまれていた。

「さあ、みんな、服や下着をすべて脱ぐんだ」

と、憲兵たちに集められた仲間がすべて全裸にさせられた。

「一体、何が始まるんだ」

みんな、おどおどしていた。戦前なら拷問だ。転向しなかったり、アジトを吐かないものは、なぶり殺しにされるのだ。

みんなは、シャワールームに入れられた。

「さあ、そこにある石鹸とシャンプーで、体を洗うんだ」

憲兵たちはそう命ずると、扉を閉めた。

「これは、ひょっとして、ガス室ではないのか。シャワーだなんて、騙しておいて、お湯の代わりに毒ガスが出てくるのだ」

「嫌だ、死にたくない、出してくれ」と、一人が騒いだ。すると、憲兵が入ってきて、

「どうした。お湯が出ないのか」と、コックをひねると、お湯が出てきた。

「ほら、ちゃんと出るじゃないか。いいか、ちゃんと、アカを落とすんだぞ。いいな」

そんなことだった。

いつも、戦争は一部の軍部の独走だということになっている。そして、敗戦とともに、民衆は口々に云った。「騙された」と。いつも民衆は正しい。選挙の結果がすべてではないとでもいうように。

第754話 文学とは何か

パチンコに夢中になっているとき、突然、頭の中に大きな疑問が湧いてくる時がある。

(人生って何だろう?) 勝って玉が出ているときは、そんなアホなことは考えないのが人間だ。いつもすってばかりで、何をやっても、玉が下に落ちてゆくとき、人間は虚しくなり、生きていることに疑問を持つに至る。

それと同じことが、古川弥勒の上いきなり落ちてきた。落ちてくるときは、すとーんと、目の前を塞ぐように落ちてくるものだ。

弥勒はペンネームだった。彼は五十を過ぎて、少し焦っていた。なんとか小説の新人賞で一発当てなければ後がない。だんだんと年齢的に新人ではなくなる。出版社も若い人に先行投資をするのだから、もうそのぎりぎりの年齢にさしかかって、なんとしてでも中央で賞に入り、文壇にデビューしなければ、自分には先がない。

そんなときに、二十歳、十九で賞をとったギャルがいた。弥勒は憤慨した。衝撃を隠せないでいた。あんな小娘の書いたものなんか読む気もしないと、世の中が変わったことを嘆いていた。いや、自分が古くなったことを認めたくはなかった。そのうち、最後の頼みの綱であった、短編小説が一次も通っていないのに、愕然とし、目の前が白くなった。

そのときだ。すとーんと、目の前に疑問が降ってきた。

(文学って何だろう?)

そんなの、今の今まで考えたこともなかった。自分が生涯をかけて挑んできた文学をそうして突き放して考えたことはなかった。すると、急に不安でいっぱいになった。おれは、いままで、何も知らないことについて立ち向かっていたのだ。それは大変な恥ずかしいことであった。

それで、おずおずと女房に訊いてみた。

「あのな、文学っておまえ判るか」

普段はあまり小説も読まない女房だが、誰でもよかった。

「あら、あなた、そんなことも知らないの? スーパーで売っているじゃない。おととも食べたでしょう」

弥勒はびっくりした。

「な、何? ぶ、文学が売っているってか。それに、おれが、食べた?」

女房は実に真面目な顔で、逆に弥勒を軽蔑したような視線を向けてよこした。

「ほら、今朝の新聞の折り込みチラシにも特売で出ているわよ」

弥勒がチラシを見ると、精肉の隣に、「文学百グラム五十八円」と、出ていた。

弥勒は、食事のときも頭の中は小説の構想でいっぱい、何を食べているか意識したこともない。まさか、文学が食べ物であったとは知らなかった。それで、確かめるために、弥勒は散歩がてら近くのスーパーへと行ってみた。

そうすると、冷蔵ショーケースの中に、あるある。厳めしくもあり、勿体ぶってうやうやしく売られている。本の形をして、上に金文字で文学と書かれていた。

「あのう、これって、日持ちするんですか？」弥勒は売場の担当に訊いた。

「ああ、文学ですね。賞味期間は一週間ですね。いまは、次々と新しいものが出るし、がらりと味も変わるので、もたないんです」

「そうですか」古いものは食えない。そういえば、もう、森鷗外、一葉なんかは、いまの若い人は古文のようで読めないだろう。いや、戦後でも三十年前、昭和四十年代に活躍した書き手の小説もいまは読まれなくなってきた。だんだんと世の中のサイクルが早くなってきた。昨日のベストセラーも今日はブックオフで百円だ。誰も見向きもしない。

弥勒は、子供二人と四人の家族を考えて、五百グラムを買うことにした。文学は秤に載った。

「少し出ますが」と、係は云う。「いいですよ」と云うと、「少しおまけしましょう」と、後で足してくれた。

弥勒はそれを大事そうに抱えると、いそいそと家に持って帰った。

「文学を買ってきたぞ。ところで、どうして食べるんだ？」

弥勒の女房はくすくす笑っていた。夫が食糧を買ってくるのは珍しい。

「そうね、今夜は鍋にしましょうか」

文学鍋は台所でぐつぐつと煮られた。文学に合うのは青臭い葉もの、頭を角にぶつけて死にたい豆腐、味も栄養も思想もない糸こんにゃくだ。ガスコンロで煮てから、食卓の上の携帯コンロで暖めるのがいい。そうでなければ時間がかかる。

夜、家族で文学鍋をつついた。弥勒は熱燗で一杯やりながら、春一番の吹く戸外のざわめきを聞いていた。

小学生の子供たちは、文学は嫌いだった。豆腐だけを食べている。

「ちゃんと、文学も食べなきゃ駄目だよ」と、弥勒が注意すると、

「だって、おいしくないもの」と正直だ。女房に云わせれば、栄養もあまりないとか。確かに、弥勒が熱々の文学を口にしたときは、ただ、熱いというだけで、感触はあっても美味しくはない。

すると、急に弥勒は悲しくなって、おいおいと泣きながら味のしない文学をはみ、酒で流しこんでいた。

「どうしたの？ あなた」「とうちゃん、なんで泣いてるの？」

みんなが箸を休めてじっと弥勒を見つめた。

「おれは、いままで、こんな不味いものに命をかけてきたのかと思うと、情けなくて、情けなくて……」

煮ても焼いても食えないもの、それが文学だった。食べ残した文学が、どろりと鍋の底でぶつくさ文句を云っている。そんなものでしかなかった。

第755話 厄介な投棄物

「とうちゃん、こんなもん拾ってきたよ」と、息子の正太がビニール袋の大きなのを、うんしょうんしょと引きずって店に持ってきた。

北村拓也の古本屋は、いまにも潰れそうに傾いていた。建物自体もそうなのだ。拓也の息子も、親父に見習って、いろいろなものを拾ってくる。ゴミ収集日には、丹念に見て廻ると、貴重な本の束が棄ててあったりする。この前も、国文学の研究本でも戦前の稀こう本がどっさりゴミに出されていた。多分、亡くなったじいさんの蔵書なのだろう。孫の代になれば、そんな茶褐色の本なんかゴミにしか見えない。親父がそんなゴミから宝物を発掘しているのを見ていた正太は、やはり親譲りの貧乏性で、なんでも拾ってくるようになった。

その朝、正太が店に引きずってきたのは、中が見えない二重三重に袋に入れられた重いものだった。拓也が持とうとすると、大人でも持ち上げられない。

「おまえ、よく、こんな重いものを持ってこれたな」と、感心しながらも、何でも持ってくるんじゃないかと、腹の中では詰っていた。

本が入っているような感じもするが、ただの紙の束のような感じもした。ビニールの口を解いて、中を見ると、びっしりと札束が入っている。一束が百万だから、ざっと三百束はありそうだ。ということは三億円だ。

「なんだ、札束か。正太、こんなもん、拾ってくるんじゃないぞ。こんな面倒なもの。今度から、中身をちゃんと確かめてから拾うんだぞ」

とんでもないものを拾ってきたと、忌々しく思っていた。古本屋は、確かに商売はよくない。借金も返せないでいた。使えるものなら、いまは喉から手が出るほど欲しい。

さらに、店のシャッターの前に、ダンボール箱が置かれてあった。拓也は開店前にそうして、どこの誰だか判らないが、いつも古本を寄付するという人が後を絶たない。棄てるのは勿体ない、古本屋さんならなんとか受け取ってくれるのではないか。そうした人たちが、店の前に無断で本を置いてゆく。

また、買えないよと断ると、持って帰るのが大変だからと、腹いせいに本を店先に置いて逃げるのもいた。そのてらいかと、ダンボール箱を開けてみると、なんと、そこに

も札束がびっしりだ。それもピン札で、造幣局から直行したような札束が、こちらは四億円はあろうか。

「くそっ、誰だ、人の店の前に棄ててゆきやがって」

もうすっかりと馬鹿にされているようで、拓也は煮えくりかえっていた。

そんな日は、続くもので、朝から本を売りにきた客がいた。ダンボール箱で六つもある。中身は、通販のカタログから電話帳の古いのまで入っていた。あとは、子供の教科書などだ。

「お客さん、こんなのは売り物にはならないんですよ。判るでしょう。ゴミじゃないですか。こんなの、持ち込んでもらうと困るねえ」と、パンフレットなどの底に、またびっしりと札束が隠されていた。どの箱の底にも敷き詰められていた。

「どさくさに紛れて、こんなものまで。油断も隙もありやしねえ」

拓也は、うちの店はゴミ捨て場じゃねえやと、もう少しで怒鳴るところだった。

「すべて、買えませんから、持って帰ってください」

怒ったように云うと、お客がちゃんと持ち帰るか、店頭で監視していた。いまは、ゴミも有料だ。百キロで千円も処分料が市から取られるのだ。それは、処分場に車で持ち込んでの料金だ。業者に頼めばその何倍も請求される。紙も本も再生は面倒なのと、却って費用がかかりすぎるので、だんだんとやめる方向になってきていた。

外では、暖かになってきたから、近所のチビたちがままごとをやっていた。

「ボーナスをもってきたぞ」と、札束をどっさりとした。額にして二千万はある。どこからか拾ってきたものか。子供たちのおもちゃになっているのだ。拓也は恨めしそうにその様子を眺めていた。

月末の支払に窮していた。十万少しの家賃も払えないときに、子供たちが二千万円で遊んでいるのだ。

街を歩くと、古新聞紙や一万円札が、風に吹かれて飛んでいた。ゴミをその辺に棄てるマナーのないやつがいつでもどこでもいるものだ。昔、お金は大事だよというCMがあったが、いまは、ゴミと同じ扱いだ。世の中変わったものだ。

店に珍しくお客が来た。全集を買っていった。レジは店にない。端末の機械があるだけだ。客は、ポケットから携帯電話を出した。それを端末に向けて、暗証番号と金額を打つと、端末のディスプレイに、相手の名前とお買上金額が表示された。

まったく、売れたという感じはしないと拓也は古い人間だからぼやいていた。やはり、札を指を舐めて数える醍醐味というものが商売にはある。それが、時代が変わって、みんなこうなった。

スーパーに買い物に行っても、レジはない。みんな携帯電話かICカードで支払だ。切符も自動販売機もすべて支払は電子マネーだった。お金というものが回収、交換されて使用できなくなって久しい。いまは、古紙で再生されないものは、ゴミとして不法投棄されていた。特に、電子マネーに切り替えるときに、すべての現金、預金が税務署に把握されるので、裏金や脱税のタンス預金はすべて、密かに廃棄されていた。その額はものすごいものがあった。それで、街の至る所に一万円札公害が広まっていた。街の通

りや公園、川面にも、枯葉のように紙幣がびっしりと棄てられて、清掃が間に合わない。

ただ、老人がひとり、紙幣を拾っては、「勿体ない」と、袂に入れていた。花粉症で、涙がやたら出る。一万円札で涙をかんでいた。

「これだって、紙じゃないか。揉めば尻だって拭けるものを」

スーパーで、拓也の女房が買い物していた。筋子を買って、精算しようとしたら、ICカードがこう云った。

一使イ過ギデス。食費ハ、予算オーバーシテイマス。生活費ハ、残高五千元デス。

カードが声も出す。家計簿もつける。銀行も姿を消したから、強盗もいなくなった。財布というものもなくなった。便利にはなったけど、それでいいのか悪いのか。

第756話 転 勤

去年の秋の終わりに、あいつは北海道の北から転勤してきた。クールというより、冷血なところがあった。自ら苦悩を背負った宿命に縛られているようでもあった。ただ、去年いたやつよりはおとなしく静かだった。

去年のやつは気性が激しく、短気で、よく暴れた。我が儘で、周りの迷惑なんか考えない。やりたい放題のことをして、さっさと転勤していった。

だいたい、転勤組というのは、後のことは考えない。後は野となれの方だから、後始末はいつも三月にやってくる後任がやることになっていた。あいつは確かにみんなの嫌われ者であったが、何かわれわれに考えさせることはあった。

というのも、上司が冷たく横暴であれば、部下というのは被害者意識で団結するものだ。人間は、ぬくもりを求め、助け合い、何かに耐えている真摯な気持ちに還る。それは与えられた試練だった。われわれは、厳しい中で知らず鍛えられ、自分自身の力ということを嫌というほど知らされるのだ。われわれには奢りがある。それをうち砕くためには、それ以上の力が上から加わることだった。

あいつが来てから、寡黙になるものが増えた。唇寒しどころではなく、息ができないくらい苦しいのだ。そんな息苦しさの中で、われわれは寄り添いながら仕事をしていた。

あいつの取り巻きで、白鳥がいつもあいつにべったりで、一緒に転勤していた。あいつとできているのか、いつも優雅で美形のスタイルをひけらかし、あいつに相応しい秘書のように振る舞っていた。

それもこれもすべてが終わるのだ。あいつが三月に入ると、白鳥と共に転勤してゆくのを誰も悲しむやつはいなかった。むしろ、喜びでいっぱいだ。とうとう行くのだ。さっぱりとしたという感じしかもたない。それほど人気のないやつだった。中には、好き

だというロマンチストの女子社員もいたが、そんな上辺だけの情緒に流されて、あいつの本当の恐ろしさを知らない女の子なのだ。

天下りというのは、孤独なものらしい。あいつにおべっかを使うのは白鳥ぐらいで、地元のわれわれは、一斉に反発していた。あいつは、新任早々、手土産をバラ撒くのだが、それが威圧的だった。どうだ、敵うものがあるかといった態度で、最初からどっと来るのだった。最初から甘い顔をすればなめられる。だから、最初の一撃で、従わせようとする。

ただ、あいつは、不景気のせいか、迫力が最初からなかった。いつもの威勢も感じられず、冷たい態度でもなく、むしろ暖かいくらいだった。それは、みんなにとって救いだった。ロートルの社員にとってはこたえるのが、あいつが静かで横暴でないから楽だった。

毎年そうなのだが、三月の初めは異動、転勤のシーズンだった。われわれは、一応、惜しむというわけではなく、形式として送別会を持った。まだあいつの残り香はあるが、それもみんなで大掃除をしてかたづけてしまうだろう。何故か、送別会だけは、みんなの顔は明るいのがあった。中には涙を流しているやつもいた。惜しまれて去るのではない。行ってしまえば嬉しい。嬉し泣きなのだが、あいつはそうは受け取らないかもしれない。

「去年は、非常に心優しい方をわれわれはお迎えいたしました。こんな方なら毎年でも是非おいでいただきたいと、どうでしょうか、みなさんからもお願いしようではありませんか」

と、仲間の代表送辞があり、拍手が湧き起こった。

あいつが、こんなに歓迎されるというのは珍しい。いままでは天下りというだけで、拒絶反応を示していたのが、みんなはやはり厳しい上司よりは優しい上司を望むのだ。

何か、最近の傾向のようで、去年の夏に来たのは、さっぱりメリハリのない、考えの定まらないやつだった。どうも、長引く不況で意気消沈しているのか、みんな力がなくなってきた。あいつが優しいというより、やる気がないのだ。だら幹というにぴったりで、自分の職務を全うしていない。上が遊べば下も遊ぶ。次第に、厳しさや怒りがなくなるのは風潮のような気がした。

「本当に、あなたのお陰で、経費も節減できましたし、第一、仕事がしやすかった。実際、余計な仕事がないだけでも助かりました。若い人はあなたの迫力に負けて逃げるので、いつも負担は年寄りたちが請負いました。今年は、大変ありがとうございました」

せっかく転勤しようとするのに、誉めたり、惜しんだりすると、あいつは気をよくして、また厳しい仕事をどっさり回してくる。まあ、それも最後のあがきだ。三月になれば、新しい上司が南からやってくる。

新しく赴任してきた上司は、ただ、上に居座っているというだけで、ほんわかムードだ。スローライフを地で行くやつで、ぼんやりしているだけで、何もしないから、下も

ぼんやり。そうすると、とにかく眠い。パソコンのキーは止まって、うとうと、うとうと。

人も自然もどこかおかしい。

第757話 映画と少年

半世紀近く前、地方では民放がまだできていなかったから、映画が市民の娯楽として、どこの映画館も夜は満員だった。映画館に途中から入ると、席どころか、立ち見の観客で後ろの通路までびっしりと混んでいた。ドアを開けると、満員電車のように人の背中が並んでいた。

子供の頃はそんな大人の足を見ながら、声だけを聞いていた。見えないよおと、ぐずると、よく映画に連れて行った祖父は、わたしを肩車して見せてくれた。子供の頃から体格がよく、祖父は重たかったろうと思う。

「わたしは貝になりたい」という戦犯で処刑される床屋の親父さんの映画を見た。フランキー堺が主演だった。最後に故郷の浜辺を子供たちが走っているシーンでは子供ながら涙が出たことを覚えている。そのときは知らなかったが、戦後の国内での戦犯裁判が報道されたのはA級戦犯で、国外の戦地では、数多くの兵隊たちも戦犯として処刑されていたという事実があったのだ。

映画のシーンだけがいつまでも焼き付いていて、大人になって歴史の勉強をしてから、その意味が判ってくる。

青森駅に近い今の中三デパートのところに映画館があった。確かその映画館で上映されたものと記憶している。大きな看板に、漁船が描かれていた。祖父は映画好きで、孫の中で一番わたしを可愛がってくれたので、よく映画に連れて行った。その映画のタイトルも読めないでいた子供だった。

だが、その映画を見ると、あまりの恐怖と悲しさにすっかりと引きつけられて、いまも鮮明に画面を思い出せるほど、強烈だった。漁船の漁師たちが、もの凄い光を見た。それから甲板でどす黒い雨に打たれている漁師たちの姿。静岡の港に戻ってくると、「ピカドン」と口々に云っていたその言葉。ガイガーカウンターという機械。放射能を浴びたマグロ。そして、漁船員の発病と闘病。千羽鶴。

第五福竜丸という名前は子供心に忘れられないものとなっていた。ビキニ環礁で被曝してから五十年と新聞に出ていて思い出した。

それ以前に放射能の恐ろしさは、昭和三十年を過ぎてから、五所川原市で開催された博覧会で、まだ幼稚園の妹と見た、原爆記念館の写真と展示品で、臍気に知っていた。敗戦から十年少ししか経っていなかったから、まだ、日本人は一億総懺悔という気分から出ていなかったろう。映画も展示も真面目であった。いまのような、敗戦と傷も忘れ、思い上がった日本人は少なかったのだろう。

いまは、学校では映画を見せに連れて行かないという。アクションもののアメリカ娯楽映画が幅を利かせているから、とりわけ学校で連れて行くべき映画が少ないせいもあるだろう。

われわれのときは、学校で映画によく連れて行った。ヘミングウェイの「誰がために

鐘は鳴る」とか、「戦争と平和」とかを見せに連れて行った。映画館も教育の場でありえた。一冊の本で感動したり、人生観が変わったという人がいるように、一本の映画で、自分の生き方に影響を受けたという人もいるだろう。映画も文芸作品の映画化も多く、いまよりはもっと世の中は真面目であったように思う。そういった映画を受け入れる風潮があった。いまなら、客動員が図れず、営業としては難しいかもしれない。

中学では、名物先生が多かった。彫刻をやる田村進先生が、美術の時間に関係のない8ミリ映画を教室でみんなに見せた。子供たちにそんな映画を見せたら、いまでは大騒ぎとなるだろうが、先生がどこから見つけてきたものか、アウシュヴィッツの記録フィルムであった。

「いまから、みんなに見せる映画は、作り物ではなく、本当にあったことだ。残酷かも知れないが、目を背けないで見てもらいたい」と、先生が声も出ない、映像だけの、モノクロの実写フィルムをがらがらと回した。先生の解説がないと、何が映し出されているのか判らない。

「これは、死体の山だ」

「焼却炉で生きたまま焼かれたところだ」

「死体から脂肪を採って、石鹼も作った」

「この一面のキャベツ畑は、遺体を焼いた灰を撒いて肥料にしたものだ」

そうした信じがたい光景が次々と出てきていた。ナチによるユダヤ人の虐殺というのは、世界史の教科書で知ってはいたが、それは単なる事実がたった一行で、説明されているに過ぎない。一行で事実が判るはずもない。

当時、ヨーロッパへ精力的に出かけていた田村先生は、お土産としてそんなフィルムを入手したに違いない。十二歳の少年が、四十年経った今でも、アウシュヴィッツという名前を忘れられず、戦争の狂気と罪悪をしっかりと胸に刻んでいられるのも、その一時間もない一本の映画だった。

そんな映画をより多くの人々に見てもらいたいという、映画館が閉鎖してからは、友人で、やはりそんな思いで、映画を持って廻るOさんも、苦戦していた。

「いい映画」というものが売れない。そんな情けない時代になってきた。

ハリウッド映画は、全世界に向けたアメリカの国策なのだという。映画はプロパガンダになる。ヒトラーも映画を作らせた。それに少しづつ洗脳されてゆく社会そのものも恐ろしい。フセインが湾岸戦争前のまだ剛毅なときに、アメリカのやり方を皮肉って、「ランボー」のようにはゆかないからな、と豪語していたのを思い出すたび可笑しくなる。常に悪役は東側であったが、だんだんとイスラム諸国になってきていた。娯楽映画の中で、敵を視聴者に意識させる。そんなくだらない映画が多くなった。

見たいと思う映画は過去にしかない。

だから、わたしは長い間映画を見ていなかった。特に邦画が不作だった。本と映画とテレビが同じ歩みをしている。昔のように家族で行きたいと思う映画、来ないか。

第758話 インフルエンザ旋風

未来、人間はウイルスで滅びると学者が云った。ウイルスも生存する権利があるから、人間が抗体を作ると、また新種で対抗してくる。そのイタチごっこが文明を発展させてくる。

動物たちも、インフルエンザでばたばたと倒れ、抵抗力がまるでないから、集団で感染すると、大量に死んだ。人間はワクチンがあり、医者にかかり、隔離されて、感染を防ぐ手だてをする。だが、そのワクチンも生産が間に合わない。また、型によって、効くかどうか判らない。

ヨーロッパでペストが流行したときは、裕福な人々は、スイスの保養地に避難生活をしてきた。高い山に登れば病原菌が追ってこないと考えた。まさしく、魔の山であった。

九州から北上してきたインフルエンザは、この交通システムの完備した日本では、あっという間に感染してゆく。新型で、ワクチンがまだできあがっていないときに、あっという間に広まっていった。死亡率が高く、三割を超えた。子供、老人たちからバタバタと死んでいった。

政府は九州を閉鎖した。空港も鉄道も道路もすべてが遮断されたが、すでに手遅れであった。四国や大阪で、患者が発見されると、東京にも飛び火していた。何人かの保菌者が飛行機で九州を脱出していたのだ。

感染していない人々は、狂ったように騒いだ。そのために、政府は、抗菌マスクと手袋、防護服を緊急に生産して、無料配布した。だが、そんな白衣は気休めでしかない。中国、近畿、中部と広まっていったインフルエンザは、関東も征するようになった。首都圏でもバタバタとみんな倒れて、病院はすぐに満員お断りの札を出した。病院はすでに通路にまで蒲団を出す騒ぎで、医者も薬も間に合わない。手の施しようがなく、死ぬに任せていた。

東北、北海道まで、インフルエンザが広まってゆくと、日本が封鎖される。空港は閉鎖された。貿易もできない。

人々は、感染者がうろつき廻っている街を避けて、高山へと避難していた。人間がいけない山では確かに感染をある程度避けることができるが、避難した人の中に保菌者がいると、同じことだった。

どこの山荘もコテージも満員だった。少しでも熱のあるもの、疑わしいものはどこも中には入れない。山肌は、テントも張られ、キャンプ村の様相を呈していた。

逆に、街はひっそりと死都になっていた。医者に見放され、高熱のうちに朦朧として裸足でさ迷い歩く患者たちが、通りにときおり見るだけで、商店もスーパーもデパートもすべてシャッターが降りていた。電車、バス、タクシーも止まっていた。道路という

道路は走る車の姿もない。置き去りにされた死体が、道端にごろごろしていたし、虫の息で、死の床に就いている患者たちは、自宅で看護もされず、じっと死を待っているのだった。共に死のうという家族だけは、居残っていたが、せめて子供だけでも助けたいと、親戚や隣近所に預けて、避難させた家もあった。

持ち出した食糧は微量だった。缶詰と冷凍食品だけが、かろうじて人々の命を繋いでいた。農場も工場も停止していたので、流通も止まったままだ。電気もガスも人がいないので供給が止まっていた。

すでに日本の人口の半数が病死していた。

そんな中で生き残った人々は、山荘に閉じこもって毎日を不安のうちに過ごしていた。テレビもラジオもインターネットも使えない。情報が入ってこないから、不安はますます募る。いつ、この山荘の中で発病するものが出るかも判らない。そうすれば、逃げ場を失うこととなる。狭い日本だ。どこに逃げるというのか。金のあるものたちは、すでに海外へと待避していた。それも特権階級だけで、一般の人々は渡航禁止の扱いだ。

テント生活をしている人たちは、山菜を採ったり、山の芋を掘ったりして食糧にしていた。山鳥は危険だった。渡り鳥からも感染することがある。山奥といっても油断ならない。薬もなければ医者もいない。みんな感染が怖くて逃げた。インフルエンザはA型も流行っていた。どれがどれか区別がつかない。ただ、熱が出た、普通の風邪でも恐れられ、隔離されたり、遠くへ棄てておかれた。

避難民たちが、木の実なども喰い荒らしているのが、熊が困った。熊の大好物の蜂の巣も採られ、笹の葉なども食べられた。食べられるものはすべて食い尽くされていた。

こんな大変なときに、街では一軒の汚らしい古本屋だけが店を開いていた。

「どうしたんだろう。今日も客が来ない」

店主の北村は、ずっと売上がゼロであることに憂慮していた。外に出てみても、車一台、猫一匹歩いていない。

「みんな、どこへ行ったんだろうか」

掃除もしていない埃と黴だらけの古本屋の店内で、もふもふした空気の中、北村はぼやきつつ、一人本ばかり読んでいた。普段から隔絶した世界に生きてきた北村にとって、世の中がどうなっているのか判らない。毎日がバイ菌の中で暮らしているから、北村の体は免疫どころか、どんなウイルスが入ってきても、ウイルスの方が死ぬのだった。全人類や動物が滅亡しようが、ゴキブリと北村だけは生き延びてゆけるのだった。

「それにしても暇だな」

もともと鶏肉が嫌いで、肉類もそう食べない北村だけがこの街で助かっていた。

あれは、昭和四十五年の春だった。東大の安田講堂が占拠されて、全学連が暴れまくったお陰で、東大の入試が中止になった年だ。

わたしは、二月の初めに大学受験のために上京した。みんな二つ三つは滑り止めで受験していたから、わたしはそれでも不安だから五つの大学に願書を出していた。音楽ばかり聴いていて、参考書は真っ白だった。なんとかなるさという気楽な気持ちで、单身初めての東京に足を踏み入れた。

早稲田を受験したときは、機動隊が受験生の手荷物を調べて、受験票と本人が一致するか首実験をして、隊列の中を重々しく入場した。競争率十二倍でも、自分はひよっとすると、その一人に選ばれると、宝くじのように考えていた。

ところが、三月に入り、高校の卒業式も欠席して、いまだ東京に居残っていた。合否の発表を見に行くのが一番心苦しい。張り出された受験番号を目で追ってゆくと、自分の番号の前後十人分くらいの番号がない。ということは、自分も含めて、あのとき、周りにいた二十人くらいがすべて落ちたのだ。せめて、前後賞でもあればいいのだが、それにも遠い。組違いとか、いや、宝くじではないのだ。ひとつ落ち、ふたつ落ちと、四校も、ない番号を見に行った。最後の五つ目は、見に行く気にもなれなかった。結局、五校すべて落ちたのだった。滑り止めも落ちて、初めて事態の深刻さに目を白黒させた。判っていることとは云え、自分の実力がねぶたであると思い知らされた。張り子の虎は山形だったかな。青森ならねぶただ。

さあ、これから受けられる二次試験はないか、書店に飛び込む周章でよう。親父は絶対に浪人はさせない、落ちたら働けと云っていた。それが約束だった。将来、職人になる倅に大学はいらない。どうせ、遊びにやるようなものだと、学生は遊んでいると思っているらしかった。

父の友人の家を二軒渡り歩いていて。あまり長く居候しても迷惑だからと、少し遠い親戚の家に身を寄せた。三月の末まで、二ヶ月近くも滞在していた。叔母の家では、只飯を食うのも気が引けて、飯の支度までやっていた。

ぎりぎり、ようやくこんなわたしでも入れてくれるところがあった。友人の半分は浪人して予備校へと進んだ。わたしは意志が弱いから、どうせ浪人しても高校の延長戦で、遊んでしまうのは目に見えていた。だから、どこでもよかった。

そんなのんびりな父親から、生まれた子供たちは、もっとのんびりしていた。子供たちのうち、三人までが、高校は推薦入学と、無難な道を選んだ。進路を決める先生との三者面談で、息子たちは、いや、娘までが、推薦にしてと、実に根性のないことを云うから、むっとした。自分を試してみることも大事だ。落ちることも人生勉強だ。そう、すすいと障害もなく進んでいいことはない。と、考えるのは古いのか。

ただ、三男だけは、無謀にも父に似て、一部上場企業で持つ高校に進学したいと、県外に行くことを選んだ。合格すれば高校の授業料は無料どころか、給金が逆に出て、全寮制だ。上の専修学校にも進学でき、卒業の暁にはその企業に入社できるという、エンジニアのコースだった。

試験は盛岡の会場であった。一日目はペーパーと作文、二日目は面接だったので、父兄同伴ということから、一泊でわたしも付いて行った。ただの付き添いだから、たっぷり二日は休める。どっさりと鞆に本を詰めて、息子が受験している間、喫茶店で読書三昧だ。息子も父との小旅行のような気分で、冷麺が喰いたいとか、ジャージャー麺がいいとか、喰うことばかり。まだ残雪のある市内を歩き、城跡の公園を歩き、足はどの街にいても不思議と図書館へと向かっている。そして、ふらふらと病気のように古本屋へと入る。

ホテルは寝るだけなので、息子を炉端焼屋へ連れて行き、お父さんは気持ちよく酔ってしまった。息子に抱えられるようにしてホテルへ帰ったくらいだ。一体、何をしに来たのか。

三男は、当然というべきか、滑った。仕方なく、普通高校を受験することになった。推薦は逃したから、こいつだけが全うに受験らしい受験をした。初めて、親としてハラハラ、ソワソワさせられた。後で、発表のときに、合格したよと電話を貰ったときには、どっと疲れが出た。

この息子、公務員試験でも落ちた。いまは、ところによっては、ネットで合否が判る。わざわざ見に行かなくても、インターネットのホームページに書き込まれる。何か、どきどき感がない。あっさりとしたものだった。それも時代なのか。

子供が終わっても、まだ、我が家には受験生がいた。求職中の女房だった。あちこち就職のために面接試験を受ける。

この前も、さる県の出先機関を受けるために、わたしと図書館へ行って、その関係図書をどっさり借りてきた。女房の勉強を手伝うわけではないが、わたしも興味があって、一緒に勉強した。難しい。だんだんと暗記力が落ちてきて、問題集も解けない。だが、そこも落ちたが、勉強したことは無駄ではなかった。これからもあちこち受けて、そのたびに一緒に勉強しよう。考えてみれば、人間一生勉強だった。社会に出て、結婚して、母親だからといって、世間は手加減しない。この就職難の時代に、若いものに負けてはいられない。

女房は、資格を取るための問題集を買ってきた。落ちて、初めて自分に何もないことに気が付いた。ただの主婦では通用しない。

今日も、ある会社で面接があった。場所が判らないというので、車で連れて行った。「いいか、判ったような口は利くな。従順に応えていればいいから」

と、わたしが面接のときの注意を云えば、「判っているって」と、女房は笑う。

また、二、三日後に、採用、不採用の電話が来るのだ。それまでは、我が娘のように、苛々、ハラハラ、ドキドキさせられる。ああ、いくつになっても受験からは解放されそうにない。

短歌、俳句、川柳、詩、そうした結社が地方でもいまだ沢山あり、同人誌を発行しながら頑張っている。だが、どこも問題を抱えていた。

「わしらの句会も、結成してから五十年経っている。当初の会員が二十余名いたものが、次々に老衰でリタイヤすると、いまはたった五人だ。八十過ぎた爺さん、婆さんばかりだ。後、五年もすれば、みんなおっ死んでしまいよる。どうしたものか」

河童俳句会では、主宰者が後継者不足で嘆いていた。俳句もハッカーと云って、外人もやるようになり、若い人も注目した時期もあったが、全体的には年寄りばかりだ。短詩型だけでなく、詩の会も年寄りばかりとなっていた。

「このままでは、俳句という文化そのものが潰えてしまう。なんとしてでも後継者に引き継いでゆかねばならない」と、声高に叫んでも、若い人でもやっている人たちは、徒党を組みたがらない。第一、みんなその道では偉い人ばかりで、敷居が高い。メンバーの名前をみただけで若い人は怖じ気づく。長い間、後続のメンバーを入れてゆかなかったので、どこの結社も五十代を底辺にして切れてしまっていた。

さらに深刻なのは、北国ペンクラブという、百数十名の大所帯だった。もの書きの集団だから、短詩型だけでなく、小説、随筆家、画家まで会員だ。だが、平均年齢が七十近い。毎年、何人もの会員が逝去するから、減る一方だ。また、痴呆や創作意欲がなくなったりして、書けなくなったものも多い。だんだんと、寝たきり会員も増えて、会の寄り合いに出てこれなくなったものが続出していた。

会長の三神恭司は、この深刻な事態をなんとかしなくてはと、頭を悩ましていた。

「ううん、困ったな。会としての活動にも支障が出る。このままなら、後十年もすれば会員の半分以上が鬼籍に入る。なんとか手を打たなければ、会の存続も危ぶまれる」

事務局の西東が、提言した。

「会員増強キャンペーンをやりましょう。三十歳以下の若い人たちを会員にするために、拉致してきましょう」

「拉致してどうするんだ？」

「やはり、身代金でしょう」

「おまえは何を考えておるんだ」

ということで、若い会員をみんなで騙して入れることにした。一番若い会員といっても桜田と北村ぐらいだ。みんな五十近いかそれ以上。二人で街角に立ち、キャッチすることにした。

「ねえ、彼女、なんか書いてる？ 芥川賞取りたくない？ 一攫千金よ」

ナンパなんかしたことはない。おじさんの格好では相手にしてくれないので、息子の洋服を借りて、髪もピンピン立てた。

「やだー、メールしか書けないよ」

少し弱そうなミニスカのギャルだった。

「いいのいいの、そのメール文学って、新しいかも」と、北村の言葉も若者言葉。こう

なったら、誰でもよかった。次々と少しでも書くことの好きな女子高生たちをゲットしていった。

北国ペンクラブの春の総会がホテルの宴会場で行われた。いつもは、よたよたと明日にでも死にそうな年寄りばかりが、集まるのに、この日だけは華やかだった。ぞろぞろと会場に女子高校生たちが、様々なファッションで連れてこられた。桜田と北村で、言葉巧みに騙して十人くらいの女の子たちを入会させようと連れてきた。

「嘘ー！ キムタクみたいのがいるって、みんなじじいばっか。キャハハハハ」

「だよねー、ここって、老人ホームじゃない。でも、ま、いいか」

自分たちの孫のような会員がピアスにミニスカ、ケイタイ片手にぞろっと座った。

「な、な、なんと、じじいだと？」傍で聞いていた会の理事のじいさんが、わなわな震えた。

「まあまあ、我慢してください。口の利き方を知らないのは若者の特権ですから」西東が、なだめた。

三神会長が挨拶した。

「ようこそペンクラブへ。皆さんは第二の綿矢りささんを目指して、思う存分書いて、この北国の文学界の明日を担ってもらいたい。わが県は久しく芥川賞作家が出ておりません。わたしたちはすでに終わった人間です。もう期待はあなた方にしかありません。どうか、新風を吹き込んで一念発起してもらいたい」

「イチネンホッキってなんだよ。ホッキ貝のこと？ あれって、チョー美味よねー」

それを耳にして、みんな老人会員たちは溜息をついた。

「大丈夫だろうか。わが県の行く末は」

「大丈夫です。可能性の問題です。世の中、変わったんですから」

北村が傍で耳打ちした。

新入会員の挨拶があった。高校生でも派手な化粧して、臍が見えている。

「おじいちゃんたち、わたしは十六歳で一す。好きな歌手はケミストリイ、愛読書はプチレモンよね。ハリー・ポッターは長くてやめたし、書くのは好きだけど、本って読むの嫌いなよねー」

ざわざわと会場で信じられないといった声が漏れていた。

「あたしは、詞を書くのが好き」と、別の髪を染めた子が自己紹介した。

「好きな詩人はいるかね。島崎藤村とか、三好達治とか」三神会長が訊いた。

「シマザキって？」すると、会長は本をちらりと見せた。

「ああ、フジムラね。確か学校で習ったな。じゃなくて、あたしの目標は、浜崎と倉木麻衣ね。あんな詞が書けたらなあなんて」

三神会長は一瞬青ざめた。はて、浜崎に倉木なんという詩人は知らないぞ。何でも知っている会長でも、知らない名前が出たことに懼れていた。ただ者ではない。

「太宰はどう思うかね」と、会長は私見を求めた。すると、みんなキャキャと笑って、

「ダサイなんて、もう誰も云いませんよ。おじいちゃん、古い」

すると、会長はまたショックを受けていた。郷土の作家、かの太宰治ですら、彼女たちには古くなっているのだと勘違いしていた。一事が万事こんな調子だから、とてもついてゆけない。ギャップがありすぎた。

それからの北国ペンクラブの雰囲気は確かにがらりと変わったことは変わった。でも、何か変でないか。カーカーという黄色い声と、ケイタイの着歌が鳴るなんとも変な会になったのだった。

第761話 個人情報

わたしは、ネットでいろんなものを購入している。欲しいものが翌日には配達されてくるから早い。仕事で使うコピー用紙なども、地元の問屋より安く、運賃もかからなくて、翌日には神奈川から送られてくる。支払はすべてネット銀行からの振り込みで、銀行まで走らなくていい。居ながらにして送金ができるのだ。

だが、そこに落とし穴があったのかもしれない。何を買うにしても、住所、電話番号からクレジットカードの番号、年齢、趣味まで書き込んで送信するのだ。いつも大丈夫かなと疑いをもちながら送っているのだが。

「よう、あんたも大変だね。強い嫁さんを貰うと、旦那は苦労するわ」と、突然、旧友からそう云われた。まるで、家庭を覗かれでもしたように、何でも知っているような口ぶりだ。そして、にやにやと笑って意味ありげな目くばせを送ってくると、わたしは気になりだした。なんであいつが知っているんだ。その旧友とはここ一年は逢っていない。誰かに聞いたのだろうか。うちのことをぺらぺらと喋っているやつがいるのだろうか。

朝からそんなことがあったときは、不思議と続くものだった。

「見たわよ、お宅のおばあちゃんと嫁さんと仲が悪いのね」

近所のおばさんから、いきなりそんなことを云われてドキリとした。どうして、我が家の秘密を知っているんだ。表向きはいい家族で通っているはずだった。特に外面のいい女たちは、世間体を気にして外では絶対に喧嘩なんかしないのに、どうしてそのことを知っているんだ。息子がバラしたのか。

二人にそんなことを云われたら、どうも他人の視線というものが気になりだした。近所が顔を合わせると、さっと家の中に引っ込んだ。窓から顔を出していた住人が、わたしと目が合うと、カーテンを引いて隠れた。みんな、何かを知っているように、くすりと笑う。気のせいかと思っていたが、みんな、秘密を知っているような顔をしているのだ。

職場でも、おはようの挨拶の後に、女子社員たちが、くすくすと笑いながら、小走り

に立ち去るのは、どうしたことだろうか。ひょっとして、わたしの顔に何かついているのか。よく、ご飯粒を頬に付けてゆくことはある。それとも、どこか服装がおかしいのか。

わたしは、気になってトイレへと駆け込んだ。鏡で自分を確認したが、どこがどうおかしいのか判らないほど、髪もきちんとして、ネクタイも曲がっていない。おかしいところはないようだった。そこへ、同僚が入ってきた。

「奥さん、仕事みつかったかい」

のっけからそう云われると、どうしておまえまで知っているんだと、愕然とする。仕事仲間とはいえ、そう、プライベートなことまで話す相手ではない。

「誰から聞いたんだ、うちのこと」

わたしは顔色を変えて問いつめた。

「いやあ、なんでもない。悪かった。気にせんでくれ」

そう云われると、ますます気にかかる。まるで、個人情報が出ているかのようだ。いや、さらに疑えば、我が家の電話機に盗聴マイクが仕掛けられているとか、部屋のどこかに盗撮ビデオまで仕掛けられているとかまで考えた。だが、何のためなんだ。目的はなんだ。ただ、笑いものにするだけのためか。人は、他人の私生活を覗くということが、週刊誌を見ても好きのようだ。表向きの顔と見えない顔とのギャップが面白いからだ。だが、それは芸能人とか時の人なら判るが一介のサラリーマンの何が面白いのだ。

昼過ぎに専務に呼ばれた。

「北村くん、お父さんは八十七だそうだね。誕生日が来ると米寿だろう。ボケが進行しているようだね。うちの親父は九十だが、公孫樹の葉を煎じて吞んでいるんだ。ボケの進行を止めるというんだが、試してみたらどうかね。ほら、ここに陰干ししたのがあるから持ってゆきたまえ」

もう、専務まで知れていた。会社の中では下は女子社員からみんなうちのことを知っているようだった。気味が悪かった。みんな、わたしの顔を見るとにやにや笑って、顔まで背ける。

会社に来た取引先の営業マンも、わたしを見た途端、こう云った。

「寸暇を惜しんで本ばかり読んでいるって、奥さんに逃げられますよ」

社外の人間までがうちの内部事情を知っている。

「ど、どうして、き、君までが、知っているんだ」

わたしは、興奮してきて、怒りすら覚えていた。気分が悪かった。完全に覗かれている。何ものかが、悪意で情報を流している。

あまり、頭にきたから、酒で憂さ晴らししようとして、帰りにひとりいつもの酒房の暖簾を潜った。

「あら、北さん、お久しぶりですね。ウサギちゃん元気になっている？ それに金魚の小泉さん」

もうそこまで云われると、わたしは目の前が真っ暗になった。

「ママ、どうしてうちのペットの名前まで知っているんだ」

わたしは、ついに爆発した。カウンター越しにママの襟を掴んで、情報の出どころを詰問しようとしていた。

「北さん、何を怒っているのよ。みんな知っていることでしょう。あなたを書いて、毎日ホームページで公開している指先物語の小説で、私生活を全部、バラしているんですもの。ほほほほほ」

「あっ」

わたしはすべてを了解した。

第762話 落ちの研究

「おまえのショートショートには落ちがないんだよ」と、北村が先輩の吉本平和に云われてから、彼は真剣に「落ち」ということを勉強することにした。落ちといえば、落語だ。さっそく落語の本を借りてきて、落ちの研究をした。

地口落ち、拍子落ち、仕込み落ち、逆さ落ち、廻り落ち、見立て落ち、はなれ落ちなどいろんな分類がある。読めば読むほど難しい。ますます判らなくなる。

そうして悩んでいたとき、いつも行く寿司屋で、おやじに訊かれた。

「どうしたんですか、北さん。何か行き詰まったような顔してますよ」

「そうなんだ。落ちということについて調べているんだが」

「ああ、それだったら、お隣の方が、落としの専門家ですよ」

同じとまり木に座って、寿司をつまみ、お銚子を傾けていた地味なコートを着たままの中年男が、ぺこりと挨拶した。

「それは、渡に舟ですね。どうしたら落とせるか、秘訣を差し支えなかったら、ちょっと教えてくれませんか」

北村は、お近づきのしるしに酒を注いだ。

「それはですね、絶対に相手にNOと云わないことです。とにかく、話を聞いてやるんです。相手の立場に立つことが大事です」

「はあ？」

「北さん、こちらの旦那は、有名なんですよ。落としの辰さんという異名まであるくらいだ」

寿司屋のおやじが解説した。北村はがっかりした。刑事の旦那に用はない。

北村は、毎日、落ちのことばかり考えて、落ち落ち眠れないでいた。どうも、落ち着かない。すっかりと詰まると落ち込んだ。

ショートショートは短い分、ラストの数行で、ストーンと綺麗に落とさなければま

まりが悪い。駄洒落の言葉で濁してもいいが、それは落語だ。最後の一行で決めたい。読者を唸らせるほどの展開はないものかと、日々そればかりを考えていた。

仕事をしている間も、家にいても、いつもぶつくさと独り言のように落ちのことばかり口にしていた。

「落ちねえ、落ち」

電車で同僚と一緒にになった。株をやっているやつで、いつもネットで売買しているという噂だ。会社のパソコンを使って、仕事そっちのけで株の売買をやっていた。頭の中は数字で埋まっていた。

「ジャスダックのストック銘柄で、薬品株はどうだろうかねえ。インフルエンザで一山来ないかなあ」

と、彼は北村にそれとなく訊いた。前も北村のぶつくさと云うご託宣が効いたことがあった。彼はそんなジククスを担ぐ男だった。北村は、彼の話なんか聞いていない。

「落ちねえ、落ちだよ」

まだ、ずっとそのことばかり考えていた。

「そうか、ありがとう。今回は見送ることにしよう」

北村は、先輩の吉本から勧められた海外のショートショート集も読みまくった。ジョン・コリアも面白い。ロアルド・ダールもいい。読めば読むほど、だんだんと自信がなくなってきた。だが、と北村は思い直した。自分の書くのは文学ではない。落語を目指すのだ。シナリオのような形式ではないが、とにかくコントを書き続ける。そう思った。

それで、寝ても覚めても、手にはいつもネタ帳。落ちの一行のことばかり考えていた。

どこにいても、考えごとをしながら歩いているから、危険だった。道路工事で、大きな穴をショベルカーで空けていた。たまたま、昼の休憩で誰もいない。そこに北村が通りかかった。ぶつくさと云いながら、歩いていて、前方に深い穴。北村、危ない。ところが、穴の縁ぎりぎりをぶつくさと歩いて、不思議と落ちない。側溝ぎりぎりに歩いていても、落ちない。それを見ていた通行人は感心していた。酔っぱらいも不思議と落ちないものだが、北村の歩き方もうまい。

みんなに、毎日のようにショートショートを書いてはメールで送信していた北村だが、だんだんとみんなに飽きられてきていた。落ちがなければ読者を裏切る。なんだと、次第に読まれなくなった。

「あいつの書くものは落ちがないんだよな」と、寄れば集まれば、みんなしてそう馬鹿にした。

その噂が広まっていった。

あるときから、北村が街を歩いていると、高校生たちが、北村を見かけると、近寄ってきて、体に触るのだ。

「何をするんだ」と、初めのうちは気味悪がっていたが、女子高校生たちも集団でやってくると、北村を取り囲み、体に触るのだった。高校生だけでない。中学生たちもやっ

てきて、べたべたと北村に触るではないか。

「な、何なんだよ。おまえたちは、人の体を触って」

すると、高校生の一人が云った。

「わたしたち大学受験間近だから、御利益あるっていうから」

第763話 アカデミ賞

世界から、自分こそ一番汚いと、推薦された乞食たちが、東京で行われていたアカデミ賞の審査、授賞式会場へと続々と来場していた。

アメリカ代表はニューヨークのスラム街で、五十年も乞食をしてきたキャリアの持ち主。もう、乞食の道を極めた強者であった。髪はボサボサでベトベト。くっついたまま離れない。その上に蜘蛛の巣がかかっている、蛾が引っかかっていた。臭いも凄いものがあった。会場に入るなり、審査員の一人がぼたりと倒れた。警備員も悪臭を嗅いで失神した。

毎年、審査員を頼まれて慣れている人は、防毒マスクに防護服に身を固め、完全防備で望んでいた。

次にボロ切れの敷き詰められた玄関まで、ポンコツのガタガタ車でやってきて、颯爽と降り立ったのは、南アフリカ代表の乞食だった。彼は、産湯をつかってから、風呂らしい風呂に入ったことがない。垢の層が漆器に漆を何度も重ね塗りをしたように、分厚く、黒光りしているのだった。それはそれは、汚らしいというより、人間の工芸品に近い荘厳な深い輝きすら見せていた。審査員の一人が、本人の許可をもらって、垢の厚さを測った。一部を削り、掘り起こして、地肌までの距離を測ってみると、なんと三センチもあった。

また、日本代表の乞食をやってまだ五年という日は浅いが、見た目の迫力では誰にも負けない。若いから、臭いも強烈だった。年寄りの乞食は体臭も出なくなるから、生臭くないのだが、若い分、新陳代謝は活発、生唾の出るような饅えた異臭がもの凄い。髪はじょろじょろと長く、それが埃で白くなっている。薦を体に巻くというオールド・スタイルだった。出身は青森だという。マスクをした記者がインタビューしていた。

「薦だなんて、なかなか今時珍しいですね」

「うん、これも五年この方取り替えていねえから、虫の住まいになっていたが、その虫も、あまりの臭さに死んでしまったじゃ。この前まで蚤も暮らしていたから痒くて。青森の昔のことわざにあるように、【むしろボドかちゃに着る】ということをしていだ」

若者はとうとうと喋り出す。

「何ですか、そのむしろボドとか」

「このおらの着ている薦も、長く身に付けていれば、痒くなるから、かちゃ、すなわちひっくり返して付けるんだ。転じて、さっぱりするということだべな」

「はあ……」

若者の乞食といっても、なかなか博学だった。最近は大学院まで終了している乞食もいた。元医者という人、履歴詐称でただの人になり、さらに転落して乞食になった元代議士もいた。乞食社会も高学歴、様々な人がなっている時代だ。

フランス代表の乞食は、ボロボロで、全身に穴の空いたスーツに、やはり先がかばかばと開いた靴、それにつばの切れた潰れた帽子と、なかなかダンディだった。上から下までイブ・サンローランというブランドで固めているあたりは乞食とはいえさすがパリジャンだ。

アルゼンチン代表は、パンツ一枚だ。

「ハイ、とても、ボロでも着る金もありません。このパンツも、洗濯したのは二ヶ月前です。どうしてはいてられるかって？ はい、パンツは普通にはいて二週間、それを反対にはいて二週間、ひっくり返してはいて二週間、さらにそれを反対にはいて二週間で一す」

下には下があるもので、アフリカ代表は、パンツすらない。全身に木の葉を付けて、蠅がぶんぶんたかっている。部族を追われて、放浪していた人非人に落ちぶれたものが乞食となっていた。

審査は、会場に用意された十数台の浴槽にたっぷりのお湯をはって、その中に各国の代表の乞食を入れる。お湯の濁りぐあいで、点数を入れてゆく。それと、垢の厚みも点数に入る。そして、全身を綺麗にした後の体重も量る。洗浄前と洗浄後の体重の差が、垢の重さになる。その重さがまた判定のための点数に加算されるのだ。

乞食たちが、それぞれボロを脱いで、風呂に入ろうとしたときだ。会場にいっせいに蚤がぴょんぴょんと跳ねて、会場の観衆に移った。すると、パニックになった。テレビ局のカメラマンも、アナウンサーも、マイクを手放して逃げ回った。審査員たちも、これはたまらんと会場から脱出した。みんな、痒い痒いとぼりぼり搔いていた。

「誰だ、蚤を付けてきたのは」

審査委員長は激怒した。蚤を持ち込むのは、審査対象外となっている規則がある。それを破って、蚤を体に養って、受賞会場にやってきた乞食がいたことが判明した。どんなに汚くても、他人に害を及ぼす者には、賞を与える資格はない。

このアカデミ賞は、垢出見賞というのだった。そして、ノミネートされた人たちは、蚤がねえ人だけが最終審査に呼ばれるのだった。

第764話 旅の未来形

明治に入って、汽笛一声新橋から汽車が走ってから六十余年、昭和十年に新幹線計画

が持ち上がる。日本から朝鮮半島を通過して満州まで弾丸列車を走らせる。時速二百キロだ。それをSLでやろうとした。

戦後、東京オリンピックを前に新幹線が走る。その新幹線も時速三百五十キロをテスト走行でクリアした。やがてリニア・モーターカーの登場で五百キロを超えるだろう。東海道は一時間、東北の果てまでは一時間半と、首都圏までの日帰りが当たり前になってくる。

飛行機もマッハで飛ぶ。超音速から、さらに大気圏外を飛んで、地球のどこへでも一時間で結ぶようになるシャトルが二十一世紀中には登場するだろう。

だんだんと早くなるが、所詮それらは動力を使った乗り物でしかない。スピードには限界がある。

ところが、二千X年、画期的な旅行マシンが開発された。

前田さんは旅行大好き老人だった。団体旅行は好きでないが、ひとりでふらりと各地の美術館巡りに出かけるのだった。旅行も目的があればいい。ただの名所旧跡物見遊山であってもいいが、前田さんのように全国の美術館を踏破しようという遠大な計画を立てて、旅に出るのもいい。

ある日、インターネットの広告で、ルーブル美術館と、大英博物館、メトロポリタン美術館、エルミタージュなどを四日で廻る旅行が出ていた。しかも、格安の十万円とある。日程を見ると、日本を発つのが朝の十時、パリに到着も十時となっている。翌日の十時かと思っていたら、そうではない。何かの間違いだろうと、メールで旅行会社に問い合わせしてみた。

すると、即返信メールが来た。

スケジュールには間違いはございません。お忙しい現代人にはぴったりの早廻り世界一周の美術館巡りツアーでございます。

だが、前田さんはどうしても納得がゆかない。ヨーロッパからロシア、アメリカと四日で廻れるのだろうか。どんなに早い旅客機でもヨーロッパまで八時間はかかる。それが、移動時間を見ていないのだ。こんな旅行があるはずがない。

前田さんは、一応、調べるためにもその旅行代理店を訪問していた。

「はい、出発は空港からではなく、この営業所から出発いたします」

前田さんは年寄りだから、難しい横文字の現代用語でべらべらと説明されてもとんと判らない。とにかく、それが本当なら、こんな安く、早い世界一周はない。さっそく申し込んでみた。出発は、来週の木曜日で日曜日には戻ってくるというものだった。

出発当日、まだ前田さんは疑心暗鬼で、旅行のいでたちをして、営業所を訪れていた。

「さあ、パスポートはお持ちになりましたね。トラベラーズチェックのカードも持ちましたね。それではどうぞ、このカプセルにお入りください」

説明によれば、このカプセルは、瞬間移動装置だった。スキャナーで物質を磁気データに変換すると、コンピュータのモデムから、パリの旅行代理店のカプセルへと人間と持ち物すべてをデータ送信するのだった。

自分が送信される。そのことがとても不安だった前田さんは、
「本当に大丈夫なんですね。痛くないんでしょうな。事故もないんですね」
そう、何度も念を押していた。

「はい、たまに、送信ミスはございますが」

「な、何ですか？ その送信ミスとは」

疑問が残ったまま、前田さんのカプセルの扉が閉じられた。係員は少しの間、失神したようになるが、それも瞬間的で、五秒後にはパリに到着しているという。とても、信じられない。心の中では、ルーブル美術館のサモトラケのニケの像を描きながら、その送信ミスという不安も抱きながら、カプセルの中で目を閉じた。

それにしても、世の中進んだものだ。ただ、旅というものは、目的地に着くまでの途中が面白いのに、それを省略した旅なんか、味気ないだろうなと、前田さんは考えていた。

スイッチが入れられた。人間の体をコピーするように光が走った。すると、前田さんの体は瞬時で消えていた。

すると、パリの代理店から緊急メールが届いていた。
一旅行者は到着していない。送信時の宛先確認頼む。

係員は焦っていた。

「どうしたんだ。確かに宛先はパリの旅行代理店だったはずだが……」

「送信済みの履歴をしてみる」

「あっ、大変だ。アドレスが違っていた。アフリカはケニアの、ジャングルの中にある国立公園の代理店だって？」

「おい、そこは何か事故があって、昨日から連絡がつかないと通報が入ったところじゃないか」

前田さんは、一瞬だが、熟睡から醒めたように気が付いた。カプセルを開けると、そこは熱帯で暑い。どうやらジャングルの中のようなようだった。食いちぎられた人間の腕が転がっていた。そして、隣にライオンがうようよいた。

「あれ、これはアンリ・ルソーの絵じゃないか」寝ぼけたように前田さんは呟いた。すると、ライオンの一頭が、大きな舌でぺろりと前田さんの顔を舐めた。

第765話 珍 味

日本人は、味覚においては、外国人より一味多いという。外国では四味なのだが、日本ではうま味というものがある。それを感じずる舌がある。

甘味というのは比較的初歩的な味覚で、現代人になると苦味を楽しむ。苦味がいまのところ最も究極の味のように。原始的生活をしている人々には毒のように思えて吐き出す苦味というものが、人類最後の嗜好なのだという。ゴーヤにしてもビールにしてもコーヒーにしても洗練された現代の味なのか。

味の追求ということに、日々、いろんな調理人たちが挑戦している。伝統的料理を現代風にアレンジすることから、和魂洋才、また折衷の創作料理など、ブリラ・サバランの云う「新しい天体」を発見するような味覚の探求がいろんなところで進められている。人間の欲求は上限がない。こと、味に関しては貪欲ですらある。

地上のどんな食べ物でも、すでに調理人たちには研究材料にされていないものはないくらいだ。その食材の組み合わせによっても、また新しい味覚が創出されるのだが、それもいろんな人の手によって試みられている。後は、隠し味や、調味料のいままででない第六の味を作り出すことによって、食に革命を起こすことだった。

食品メーカーはこぞって、甘味でもなく、辛みでもなく、塩味でも苦味でもうま味でもないものの開発にしのぎを削っていた。

ハルカ食品でも、研究室があり、日夜、新しい味を見つけるために調味料の合成をしていた。単なる香辛料などの調合では味の革命などできるわけがない。そこにはバイオの技術や、化学的に合成したりする全く新しいものが必要だった。それと、誰も考えつかなかった素材も血眼になって探しているのだった。

ハルカ食品では、密かに開発していた第六の味覚をとうとう完成させていた。研究班の田村と笹田は、その新しい調味料を固形スープや、だしの素、インスタント食品に入れることによって、がらりと味を変えることに成功していた。

それらの食品を食べた人は、不思議なノスタルジックな感覚に囚われる。何か、遠い昔に食べたことのある味のような気がして、それが何なのか判らないところが、話題になっていた。

「ハルカの調味料を使ったら、とにかく懐かしくなるんだよな。何の味だったのか。思い出せないんだ。子供のときに口にしていたような……。それが大人になって忘れてしまったような」

みんな、食べた人は口々にそう云うのだった。多分、どんな人でも一度は口にしたことのある懐かしい味。また食べてみたいというのは、その味を何とかして思い出したいとする人情だった。気になって気になって、夜も眠れない人が続出するくらいだった。

マスコミでも連日大きくスクープして、「新しい味の秘密は？」と、いろんな学者や評論家を出して推測させていた。ハルカ食品は、それは企業秘密なので、ノーコメント

だ。ただ、判っているのは生産量が微量のため、従来のグルタミン酸やイノシン酸のように量産はできないから、価格も倍以上と高いことが難点だった。

田村が、車で原料の仕入に行くときも、サングラスにマスクまでして、しかも、マイカーで自宅から仕入に出かける。産業スパイがうようよしているから、尾行されてもいけない。原料の入手経路で、バレてしまったりするのだ。案外、誰でも手に入る原料を使用したときは、製法特許は取れない。成分分析した結果だけを省庁に届け出ていれば問題はない。食品基準法もザル法で、最近はとみに煩いが、どうにでも隠せる。その不思議な添加物は、あくまでも有機物で、化学的に合成されたものではなく、口に入っても害はない。食品の基本は第一が安全ということだ。

田村は、ある村まで車を走らせると、車を林の中に隠すようにして停めた。ナンバーを覚えられてもいけない。顔も見られてもいけなかった。尾行しているような車がないことを確認すると、村の子供たちが遊んでいるところへと近づいていった。

「あっ、またおじちゃんが来たぞ」「おじちゃんだ」と、子供はすっかりとなついているように田村を取り囲んだ。

「どれ、みんな、いつものやつ溜まったかな」

田村は子供たちに優しく語りかける。

「うん、溜まった」と、みんな田村が前に手渡していた小瓶を差し出した。

「よし、偉いぞ。ほら、みんなにお小遣いだ」

と、まだ就学前の幼児にまで駄賃を配った。

「いつも云っているが、このことは、おじさんと、君たちとの秘密だよ。お父さん、お母さんにも絶対に話してはいけないからね。いいね。さあ、また指切りげんまんしよう」

田村がそうして、村の子供たちと接触しているのを木立の陰からビデオカメラで撮影している男たちがいた。田村の車のシャーシに密かに発信器が取り付けられていたのを、田村は知らなかった。産業スパイたちだった。

「間違いはない。あれだ。子供たちに原料を集めさせていたんだ」

「何でしょうね。あの小瓶に入ったものは」

「判らん。この辺りでしか採取できない珍しい薬草か、茸か」

スコープで見た限りでは、小瓶の中は黒い粒々が入っているようにも見えた。

田村は、また別の村まで、隠していた車で原料の調達に走り去った。スパイのひとりには田村の発信器で知らせる位置を追って、少し遅れて車で尾行した。もうひとは、居残って、なんとか、あの子供たちから原料を聞きだそうとした。

「ああ、いい子たちだね。おじさんにも、さっきの小瓶に入ったの、売ってくれないかな。さっきのおじさんの十倍の小遣いをあげようかな」

すると、子供たちは、もぞもぞしはじめた。

「でも、おじちゃんと約束したから」

子供たちの口は堅い。

「じゃ、おじさんにだけ少し分けてくれないか。後は、誰にも云わないって約束するから。ほら、指切りげんまん」

すると、一番小さい子が口を開いた。

「だって、もう、全部、あのおじちゃんにやったもの。もう、ないよ、ほらね」と、みんな、鼻穴を見せるのだった。

スパイはおったまげた。原料は「はなくそ」だったのだ。

第766話 堪忍袋

現代人は怒らなくなった。寛容になったのか、軟弱になったのか。年金の問題にしても政治家の不祥事にしても、税金を上げて、出すほうは渋るやり方に、みんな人ごとのように甘受して、不平は云っても、怒らない。こんな国民を馬鹿にしたやり方では、昔なら一揆、強訴だ。

そういえば、現代人の頭のとっぺんには、堪忍袋というのがついぞ見かけなくなった。古代から、人間の頭のとっぺんには、堪忍袋という袋がついていた。それが、この頃は、怒らないから、怒りを蔵しておく袋の必要性がなくなり、退化してしまっていた。

それでも、子供のときから怒りっぽい性格の人は、いまだ昔の人のように、堪忍袋を持っていた。だが、それは、随分と大きな袋になってきた。昔の人ののは小さい袋だった。不平不満がすぐ溜まる。そうすると、怒りを収容しきれなくなり、すぐに袋の緒が切れた。

それに引き替え、現代は、なんともだらしなく、堪忍袋も膨れる。それだけ我慢強いということでもなさそうだ。認識がなさすぎる。それで、袋がない人もいるし、あっても小さい。そして、だらしのない膀胱のように伸びるだけ伸びる。

怒りというのは、足の先から上に上がって、頭のとっぺんまで突き上げる。すると、血管が切れて脳溢血や動脈瘤の破裂なんかで死んでしまうといけなから、そのために袋がついているのだ。いつも小出しにぷりぷりと怒っている人は、溜まることはないから、普段はすっきりしている。気の長い人が、するが堪忍と溜めている。それは溜めれば怒りの利息が付く。爆発するときにはかなりの威力があるのだ。

北村拓也も短気なほうではないが、怒りの感情は忘れてはいない。二年に一回ぐらいは堪忍袋の緒が切れることはある。どかんとやるから、子供たちも怖がる。

「お父さんは怒れば怖いよ」と、息子たちは云う。怖くないお父さんが多いから、家の中が締まらない。地震雷と続いて、親父はベストテンにも入らなくなった。みんな優しい人間になってしまい、子供たちが逆に暴れる隙間を作る。

拓也は内に蔵まうタイプだから、怒りはいつも貯金しておく。それが案外、ストレスになっているのだ。体にはよくない。

朝だというのに、廊下は電灯が点けっぱなし。水道からは水が流れっぱなし。トイレは汚れている。屑籠のとなりにゴミが落ちていたり、使った食器もそのまま、その辺に置いている。ジュースなど、全部呑めばいいものを、半分残して、また次の口をつけては半分残す。一応親として子供に注意はするが、直らない。怒鳴りたいところをぐっと我慢して、こみ上げてきた怒りを堪忍袋に入れておく。袋は少し膨らんだ。

朝刊を見る。福祉を楯に、紋どころをひけらかし、実際は弱いものから取り立てる増税だ。いい話ばかりして、盛ったりまけたりと子供騙しの手を使う。すっかりと国民も舐められている。年金の見通しも、法案に盛り込むというが、それとて将来はいくらでも変えられるのだ。そして、人の金を集めて、自分たちのために運用している、いや、消費している。イラクで大がかりに支援しているような金の使い方をしているが、アフガニスタンで民間人がボランティアでやっている無償の支援には負けるだろう。支援なんか自衛隊でなくともできる。またむらむらと怒りがこみ上げてきた。まあ、ここは抑えて、袋へ蔵っておこう。拓也の袋はますます膨れてきた。

朝から、嫁姑の喧嘩が始まる。徹底的に仲が悪いところに、ちょっとしたことで口論になる。拓也はいつも間に入って、どっちの肩も持たない。どっちに寄っても立場がない。それで、いつも茶化すのだ。

「やめないか。おふくろもおふくろだ。元子も元子だ。おれはおれじゃないか」

「え？」

家がこんなだから、また頭にくる。ますます袋は膨れる。家庭不和に加えて、仕事もいまいち思わしくない。

仕事場のパソコンにはやたらウイルスメールが入り込み、そのお陰で毎日スキャンをしなければならない。客からは苦情、面倒な注文に文句ばかり。苛々が募る。何をしてもうまくゆかない。こんなときに、客がたてこむ。仕事が溜まる。印刷機もプリンタもストライキで、機械は止まった。手をインキで真っ黒くしても、直らない。こんなときに頭にくる。客は怒って帰った。

拓也の周囲はすべて刃向かってくる。そのうち、万引きだ。少年たちが集団でやってきて、盗り放題。追いかけると蜘蛛の子を散らしたように逃げた。

「くそっ、みんなして馬鹿にしゃがって」

とうとう、怒髪天をつく勢いで、血圧と怒りが同時に急上昇した。全身から沸き上がる怒りで、袋がさらに大きくなった。直径三メートルはあろうか。普通ならすでに破裂しているのに、いつもぱんぱんに溜め込む拓也の袋は、いくらでも膨れる風船だ。

息を切らせて、少年たちを追うのをやめると、拓也の体はふわりと宙に浮いていた。怒りのししまう場所がない。破裂したくてもできないでいたから、こんなに大きくなってしまっ。拓也も身の置き場がない。それで宙に浮いていた。

見ると、街のあちこちで、頭の上に大きな堪忍袋がアドバルーンのようになって、空中に浮いている人たちがいた。

とにかく、と拓也は思った。いかりを下ろしてどこかに停泊しなくては。

十数年前のことになる。わたしは、ある思想に触れて、それを実践してみようと思った。ただの市井の研究者で終わっても、生活と信条に齟齬がある。それは、宗教を信ずる者が、陰では教義に反する悪いことを平然としていることと同じだった。

エネルギー・ゼロの生活をするのがその目標であった。だが、人間、生きていて息をしているだけで、エネルギーをかなり消費しているのだ。それをできるだけ自然に近づけるために、わたしは、先ず、車をやめた。たまたま、車検が切れて、ポンコツの車を廃車にしたので、丁度よい機会だと、ばっさりと車をやめた。運転免許も次の更新時には切らしてしまおうとまで考えていた。

ただ、それでは仕事に支障があるから、近くの自転車屋の親父さんが作ったというリヤカーを安く譲ってもらった。いまどき、若者ではないが、三十いくつでリヤカーを引っ張るのは抵抗があった。最初は恥ずかしいが、直に慣れるだろうと思っていた。

古本屋を営んでいると、どうしても仕入れがある。少ない量なら、自転車の荷台にダンボール箱を載せて間に合うのだが、大量のときはリヤカーだった。たまたま市内の繁華街のデパートの近くに仕入れがあった。知り合いが声をかけて、からかってゆく。

「よう、どうせそこまでするのなら、リヤカーに古本買入れと旗でも立てたほうが、格好いいだろう」と、笑う。こっちは真剣だった。みんなの視線が気になった。だけど、車の渋滞する渋谷や、新宿などでは、宅配便も専用のリヤカーで配達していると聞いた。それは、まだカラフルで会社のイメージカラーで格好いいが、こっちは、昔からある黒のリヤカーだ。

遠方には自転車でリヤカーを牽引して走った。重い荷物は坂が大変だった。昔の人はよくやったと感心しながら、うんうん押していった。

貯えができたから、自然溢れる海辺に土地を買い、家を建てようということになった。たまたま、ログハウスの会社のパンフレットを入手したので、見積もりと平面プラン、仕様などを出してもらった。他県の会社で、すべて電話と手紙でのやりとりだった。坪当たりの建設費はどうしても割高になる。内装もすべて、石油製品は使わないこと。できるだけサッシや釘、樹脂なども使用しないことと、注文が難しいこともあった。

「下水道も電気も引かないんですか？」と担当者は驚いていた。

「水道ではなく、井戸を掘ります。同じ地区で昔から井戸を使っているお宅がありますから、大丈夫でしょう」と、わたしは調べたことを話した。

ただ、別の建設会社に訊いたら、井戸を掘るのにも結構予算がかかる。海の傍でも、土地の裏は山だった。下は岩盤で、これまたボーリングが大変なようだ。

「電気はどうされるんですか？」

相手は心配して信じない。

「ランプにします。ストーブは薪を焚きます」と、夢のような話をするから、てっきり山奥と思っていたに違いない。

わたしの夢はさらに広がっていた。自然そのままの生活をさせる長期滞在型のペンションにしよう。たまたま、家の近くで休耕地として、五反の畠があり、知り合いが、使ってくれたら助かると、荒れた畠を見せてくれた。そこで、自然農法により栽培した作物を自家消費用につけてみよう、福岡正信さんに傾倒していた頃で、農業の教科書まで、農業高校のものをセットで購入して読んでいた。家族は、とうとう気が狂ったかにしか見ない。

そこまでやるなら、と、農地を買ってしまおうと、市役所の農業委員会を訪ねると、「どなたか、身内で農業をやられている方がいますか」と、来た。

「いいえ、わたしは現在は古本屋で」と、云うと、職員たちは、懐疑の目でわたしを見た。

「新しく農業を始めるのは難しいですよ。ちゃんと、経営計画表を提出していただき、それを会議で審査いたします。よくあるんですよ。バックに不動産屋がついていましてね、安く農地として買ったものを宅地転用して高く売る」

わたしは、悪徳業者に見られていたのだ。いまは、そんなグルになったものが多いだろう。それに、小規模で農業をやっても食えないのは目に見えている。ますます怪しまれる。

家族とそのことについて話し合うと、まず、子供たちが反対した。

「お父さん、電気がないって、ファミコンができないじゃないか。それに、テレビもないだろう。どうして暮してゆけるの?」

「だから、おまえたちが、勉強しかできない環境を作るんだ。そうなれば、本でも読んでいるしかないだろう」

息子たちはげんがりしていた。その頃は、わざと健康を考えて、白い飯ではなく、玄米と麦を半々に混ぜて炊いていたものを息子たちに食べさせていた。それを「昔のご飯」と、嬉しく思わない子供たちは、妹の家に遊びに連れて行って、普通の食事をさせたら、

「あっ、白いご飯だ」と、大喜びするので、

「お兄ちゃん、毎日、何を食べさせているの?」と、妹にまで非難される始末。

洋服も綿か麻百パーセントだ。化繊のものは着ない。徹底していた。

家を建てる段になって、東京にいる両親を引き取ることになった。わたしは男ひとりであとは女の姉妹ばかり、いずれ親の面倒は見なくてはならない。となると、テレビもない家に連れてくるのはと慮った。それで、方向転換することにした。原始時代に戻るのではなく、最先端へと目を向けたのだ。要するに、人類の未来に責任を持った生き方をするという考え方に立つと、脱石油、反核で、電気をクリーンなエネルギーから取ることだ。なんとかハイムに電話して、ソーラーシステムについて相談をした。お湯はどこでもやっているように、屋根に載せた太陽光による湯沸かしで、暖房まである程度で

きることは聞いた。だが、電力までとなると、設備投資がまだ開発途上で高く、膨大になる。計算してみると、機械の耐用年数もあり、数倍の光熱費を支払うことになる。いまは、量産していて、畳一枚くらいのソーラーパネルが七万くらいで売っていて、家一軒の電灯くらいはまかなえるところまできた。あと、二十年もすればかなりエネルギーゼロの住宅は普及するかもしれない。

県内のいろんなところから仕入の電話が来るので、百キロも離れた町までリヤカーでは取りに行けない。仕事も我慢に耐えきれず、車のない生活がたった三ヶ月で終止符を打つ。家も諦めて普通の家を建てた。

やはり、この日本にいる限りは実現しそうにない文明とのかかわり。子供たちがかたづき、親を見送ったら、老後はひとりで南の国の島へ行き、クリーンな生活をしようとして、最近はそう思うようになった。

人類が滅亡しないためには、太古へ逆戻りするか、先に進んで科学の力で解決してゆくか、どちらの選択が正しいのだろうか。その答えは、百年後か二百年後か。その過渡期にあって、わたしは毒された世界で癌になって死ななければいいと思いながら、日々、ストレスと過食とウイルスと電磁波に浸って生活している。

第768話　かくれんぼ

もういいかい。

まあだだよ。

村上安里は孫たちが遊びに来たので、かくれんぼをして遊んでやっていた。家の裏の神社の境内で、遊んでいたが、いくつになってもかくれんぼというのはどきどきするものだ。隠れるという秘密めいた行為が、とても素敵なことに思えた。それに、みつかるという結末が、死神に追いかける生者のようで、孫が相手としても怖いものがあった。

安里は、祠の裏の崖に雑草に隠された窪みがあることに気づいた。長年、この町に住んでいて、こんな窪みがあったことは知らなかった。ここなら、絶対に見つかることはないだろう。安里はわくわくしながら、窪みに身を潜めた。

もういいかい。

もういいよ。

孫の声が遠くからした。

じっと暗がりにしゃがんでいて、このまま自分は失踪してしまいたい。安里はそんな気持ちで目を瞑っていた。

思えば貧乏籤の人生であった。何をしてもうまくゆかない。裏目裏目と出る。役所勤めも、同期が出世していたのに、自分だけはいまだに五十過ぎても役もつかない。女房

も一生の不作というやつで、子供二人はできたが、二人とも社会に出て所帯を持つと滅多に実家には寄りつかなくなった。たまに、遊びに来てもしそうに旅行の途中だったりする。こうして安里が孫と遊ぶのも久しくなかった。

サイドビジネスと思って始めた株では大損をして、せっかくローンも終わったマイホームも手放した。もともとの博打好きが、競馬だパチンコだと注ぎ込むが、いまだに回収したことはない。酒ばかり飲んで、血を吐いた。医者からは酒が禁じられた。いつか瓶がやられていた。家にも女房は口もきかない。すっかりと家庭内離婚状態だ。どうやら男がいるらしい。安里は職場でも家でも孤独だった。おれなんか、いてもいなくても、誰も気づかないだろう。いっそ、この社会からオミットされたい。おれなんか消えてなくなりたい。こんな自分を知らないところで、ひっそりと暮らしたい。

そう思っていたら、どれだけ時間が経ったのだろうか。孫の声がいつか聞こえなくなっていた。よくあることだった。子供のことだ。かくれんぼなんかすっかりと忘れて、別のところに遊びに行くのだ。探しにこないから、いつまでも隠れていたものは、そのうち、そこで寝てしまったりする。ふと、安里は幼い頃を思い出して笑っていた。そんなこともあったな。

そろそろ出てみるかと、安里が、雑草を払いのけて、窪みから出ると、驚いたことに、いつのまにか祠が朽ち果てているのではないか。もう、何十年も経ったように崩れている。まさか、何かの間違いだ。安里は自分の目をこすった。

神社は町が見下ろせる高台にあった。そこから見た町はつい、いましがたの町とは景観が違っていた。崩れている家もあり、ビルも団地もくすんで見えた。第一、道路や橋の上を車が走っていない。

安里は、焦って、石段を駆け下りて行った。今日は、日曜日だから、町も静かなのだが、それにしても静かすぎる。石段を下りたら、商店街があったが、そこはまるで廃墟同然だった。傾いている店、シャッターが壊され、ショーウィンドウは割られ、店の中は空っぽだった。燃えた車の残骸が道路に放置されたままだ。道路はゴミが散乱していたし、人っこ一人として歩いていない。

「どうなっているんだ」

安里は、体が震えた。急いで、県営住宅の建物へと駆け込んだ。三階の自分の住まいはドアが開けたままだった。中はがらんどろ。家具もなにもない。ゴミだけが残されていた。埃と蜘蛛の巣がすごい。もう、何十年も人が住んでいないようだ。どの部屋もそうだった。

「おおい、誰かいないのか」

安里は叫んだ。声は返ってこない。一体、みんなどこへ隠れたんだ。まるで、安里だけが鬼で、町民全員が隠れているように、犬、猫の果てまで、生き物の姿も見かけない。完全に死の町となっていた。どうなっちゃったんだ。

今度は、役所へと走った。スーパーもコンビニもすべて無人で荒らされたまま、廃墟だ。役場も同じだった。封鎖されたまま、ドアも窓も完全に閉め切っていた。

タクシーもバスもない。動くものの影すらない。安里は、電気店の置き去りにされている古いテレビとラジオを見つけた。何か情報が判るかもしれないと、コンセントをさしこんだ。ところが、電気の供給も停止したままのようで、電灯も点かないのだった。

「何かあったのだ。おれは、神隠しにでもあったのか」

店の中に古い新聞紙を見つけた。平成二十二年の五月の日付が見えた。少なくとも六年以上は経っている。ただ、この荒れ方からはもっと時間経過はしているだろう。

「おおい、誰かいるか。いたら返事をしてくれ」

安里は泣きそうな声でなおも叫んでいた。公衆電話を見つけた。警察に連絡してみたが、うんともすんとも聞こえない。人口三万人の地方都市が、空っぽになっている。駅まで走ったが、そこも同じだった。駅員も誰もいない。安里は放置自転車をみつけて、それに乗った。隣の市ならどうだろうか。ここから四十キロはあるが、自転車なら行けそう。

安里は国道を自転車に乗って走った。町外れまで行くと、橋の手前がバリケードのように土嚢が積まれ、道路が封鎖されていた。そこに立て看板があった。

一放射能汚染地域。通行禁止。

「何があったんだ、何が……」

安里は、青ざめて自転車を走らせていた。どうやら、隣の市も同じ状態のような気がした。どこまで行っても、田圃も荒れて、車も人も通らない。人間がすべて神隠しにあったのか。まさか。

原発事故で半径五百キロは人が住めないということを安里は知らない。

第769話 カラス

ヒッチコックの「鳥」という映画を若い頃見て、カラスが怖くなった。カラスはときとして人を襲う。身内でも急降下してきて、つつかれたのがいた。カラスは黒い、不気味、不吉ということから嫌われる。ポーの有名な詩「大鴉」も読んでいてぞっとするものがある。だが、中国でも日本でも、カラスの絵は縁起ものだという。

ゴミを漁り、カラス公害とまで云われて、各地で問題になっている賢い鳥、カラスは、今や人間生活に最も身近な鳥なのだ。

問題が発生していた。そのカラスが鳥インフルエンザで死んだのだった。たった二羽のカラスの死骸が、われわれの破滅のプロローグだとは誰も想像だにしていなかった。

かつてヨーロッパでペストが大流行したときも、発端は一匹のネズミの死だった。

鶏は、まだ養鶏場という小屋の中から出られないので、狭い範囲だけの感染だ。ネズミにしても移動距離はそう広くない。今度は、空を自由に飛ぶ、渡り鳥が相手だ。柵を

しても意味がない。日本中、どこへでも飛んでゆく。その鳥インフルエンザで死んだ渡り鳥の死肉をカラスが食べる。

民家の玄関先で、よろよろと弱っているカラスを捕獲したら、陽性反応が出た。その感染したカラスが人を襲う。

鳥インフルエンザは、またたくまに人間に伝染して、ペットの鳥や、農家の放し飼いの鳥を介在して広まっていった。死亡率が高い。ワクチンがまだ開発されていない状態で、手の施しようがなく、飛び火していった。その拡大は、面で広がるのではなく、まるでどこからか生物化学兵器のミサイルが飛んできて爆発したように、点を打つように思わぬところから発症した。

町や村には、道路に死んだ鳥が転がっていた。それを職員たちが、防護服にマスクを付けて、ゴミ袋に回収してゆく。鳥の死骸を見て、人々は、
「飛んでもないことが起こった」と、云った。

養鶏場の方から飛び立つカラスの群を見て、人々は云った。
「飛んだことが起こった」

政府は鳥類撲滅の作戦に出た。カラスだけではなく、すべての鳥が対象になった。雀も白鳥も、ツバメも鶴も、天然記念物であろうが、保護鳥であろうが、菌を媒介する鳥はすべて抹殺されることとなった。鶏は日本から消えていた。

かすみ網を使い、大掛かりにヘリやセスナまで出して、渡り鳥捕獲作戦に出た。果ては、自衛隊まで出動して、火炎放射器で、海鷗やカモメ、うみねこの巣を焼き払い一網打尽にしたりした。人間だけが生き残るために、すべての鳥類を絶滅させることは各国で平然と行われるようになった。残酷な殺し方に、自然保護団体も目を瞑っていた。

それでも、インフルエンザは、各地で大流行し、季節が変わっても、衰える兆しはなかった。春になっても、全国的にかなり乾燥した気候が続いたことが、さらに感染を広めた。とうとう、癌も抜き、死亡原因の一位になったばかりか、さらに死者を増やし続けた。

人々は、宇宙服のような防護服に、防毒マスクまでして、肌を直接外気に触れることはしない。その完全密閉型の防護服だけは、政府で奨励して全国民に格安で行き渡るよう、作らせることができた。そして、保健所だけでは間に合わないから、消防、警察、役場の職員も総出で、町や家の消毒殺菌に勤めた。

かつての飢饉のときのように、住宅地図には、家ごとに×が書き込まれていった。その印のある家は、一家全滅した家ということだった。

中世のヨーロッパの人口を半減させたペストやコレラは、それでも時が経てば、終息していったのに、このインフルエンザだけは、毎年、時がくるとまたどこからともなく不気味に復活してくるのだった。

各家庭で飼われている小鳥まで処分しろという通達が出た。職員たちが、各家庭を廻っていた。

「お宅では、近所の話ですと、インコを飼っているとか」

「ええ、でも、始末いたしましたわ。可哀想だったけど」

と、奥さんは嘘をついた。奥の部屋の押入に娘がインコの鳥籠を抱いて、隠れていたのだ。そんな家庭が多かった。

空を飛ぶ鳥の姿が見えなくなった。掃討作戦は効果があり、ゴミの日でもカラスの姿さえ、見かけなくなっていた。だが、カラスだけは頭がよすぎた。そんな鳥たちの捕獲や虐殺を事前にキャッチして、山には隠れず廃屋をねぐらとして隠れていた。そして、その家の中にある食糧を餌にして生き延びていたのだ。街を棄て山へと避難していった生き残った人々が、おどおどと高山のヒュッテで共同生活をしている頃、カラスたちは、逆に街を占拠した形で繁殖していた。レストランや食糧品店は、従業員や家族に病人が出ると、消毒、閉鎖されていったから、カラスたちにとっては、いくらでも餌はある。すでに地上はカラスの楽園のようになっていた。

街の人たちが、山小屋で避難生活をしているとき、こつんこつんと窓ガラスを叩くものがある。何だろうと思って、窓を開けると、そこに大きなカラスが一羽止まっていた。

「カ、カラスだ」と、人々は叫んで、戦きながら部屋の隅に固まった。カラスは人間の言葉を話す。

「never-more」

と、啼いた。

第770話 税務署へ行こう

ここ三年は、大手を振って税務署に青色申告に出かけている。やましいことは何ひとつとしていない。すべて出しても、たかが知れているからだ。よく、脱税の話聞くが、どこの国の話だろうぐらいにしか思わない。知り合いが、領収書を使えとくれることがある。気をきかせたつもりだろうが、わたしは逆に怒る。

「何？ うちを赤字にさせるつもりなのか」

儲かって仕方がないところはそんな手を使うだろうが、うちなんか、ようやく黒字なんだ。経費も切りつめていての話だ。これ以上、領収書も請求書も持ってくるな。

で、よく聞く話が、税務署に行くなら、ぎりぎりの三月の十四日くらいがいいというので、毎年、わたしは、その申告の期日ぎりぎりに行くことにしている。暇なときに行くと、じっくりと目を通してチェックされるのだが、駆け込みで行く人が多いから、混むというものじゃない。混雑しているから、窓口では、ざっと目を通して、承認のハンコをポン。何年か前から、マクドナルドの真似をして、税務署もドライブスルーにした。それでも混雑は解消されない。車がずらりと並んでいる。

「お宅は？」と、係員が仮設の検問所のような小屋で、申告書を受け取る。

「チーズバーガーにポテトのSにシェークのバナナね」と、何か勘違いしているカップルがいたりする。

税金を少しでも納めていれば、文句は云えるのだ。ただ、少ししか納めていないから、小さな声で文句を云う。一年間、血の滲むような思いで稼いだんだ。

かつて税金を納めていないときが長かった。そうすると、銀行が相手にしてくれない。少しでも利益を出しておかないと、痛し痒しといったところだ。それに、赤字続きでいると、必ず税務署が入る。うちも、八年前に入られた。まるで、泥棒に入られたようだ。二日に渡って、厚顔無恥といった顔の税務署員がうちのような、一見貧しそうな古本屋にぴったりと張り付いて、レジを打つのまで見ている。

「あっ、いま、レジを打ちませんでしたね」と、いちいちうるさい。

「いまのお客は、自分の本を持ってきて、代わりにうちの本と交換していったんです」

「でも、それは等価交換ではないのでしょうか。三冊持ってきて、一冊と交換ねえ、これは問題ですよ」

たかが、百円のマンガ本ではありませんか。めくじらたてるほどのことでも。

「お宅の申告ですが、去年が問題なんです。いままでの半分くらいの所得になっている」

「それは、いろいろと車や設備にもかかりましたから。足りない分はおふくろから援助してもらったんです」と、本当のことを云っても信じようとしない。

「ちゃんと、家計簿も付けているから間違いはないですよ」と、云ってしまっ、しまったと思った。

「その家計簿とやらを拝見しましょうか」ときた。それには、確かにおふくろからいついついくら借りたと書いてある。それだけではないプライバシーがいろいろと。子供にガム十円とまで書いてあるのは笑える。笑えないのが、女と食事したとか、ヤバイ交際費までが事細かに記してあるのだ。身内の貸し借りは計算に入れられないようで、結局、みなし課税として、どっと手土産を持ってゆく。わたしは怒った。

「なんで、こんな古本屋を虐めて税金を搾り取るんだ。医者とかパチンコ屋とか、もっと儲かっている人が沢山いるだろうが」

にやりと笑って、したたかなやつだった。あちこちで云われて慣れっこになっているらしかった。それまで、わたしは税理士を頼んでいないで、自分ひとりで計算して出していた。それで、このことがあってから、友人の税理士に泣きついた。

「何も粉飾なんかしていないのに、どうして税金を払わなけりゃならないんだ。どうしても納得がゆかないんだ」

税務署というところは、来たら必ずお土産を持って行くというのだ。黒という証拠がなくてもただ灰色というだけでも、みなし課税とは何事だ。

「おれが話してくるから、担当の名前を教えてくれ」と、友人は税務署に出かけていった。そうしたら、後で電話で、半分に下げてやったからという。半分でも納得がゆかないのに、またまた疑問が涌いた。どうして、税理士の一言で半分になったりするのだ？

そのとき、税金というのは実にいい加減な仕組みのものだなと思った。

もう、あんな悔しい思いはしたくない。税金さえ納めていれば、納税者は税務署のお客さんなのだ。威張ってられる。

「あんた、この決算書では、お金があることになっているでしょう。利益も出しているし、出しなさい」

と、女房のやつが、税務署より怖い。

「おかしいな、計算上では金が余っているはずなんだが」と財布をひっくり返してもゴミより出ない。いつまでも生活は楽にはならない。

「あんた、どこかにまた女をこしらえたりしていないだろうね。あるべき金も貢いでいたりしたら承知しないからね」

「おかしいな、どうしたんだろうな」

世の中、黒字倒産もあるくらいだ。勘定合って銭足らず。お金はすべていつのまにか古本の在庫に化けていたのであった。

第771話 携帯電話進化論

携帯電話もだんだんと機能が充実してきて、便利にはなってきた。電話とメールだけでなく、インターネットを通じて、テレビやFMを見れる聴ける。ナビや辞書活用、英会話学習もできる。テレビ電話から、お買い得情報、ボイスメモ、スケジュールの手帳代わり、電卓、音楽を聴くプレーヤー、カレンダー、時計、目覚まし、テレビゲーム、読書端末、FAX、デジカメ、ビデオカメラ、伝言板と、小さな中にいろんな便利が詰め込まれている。

携帯電話を製造しているコドモでは、次世代携帯電話のあるべき姿をさぐって、日夜、研究開発が進められていた。他メーカーに負けない機能を取り入れた画期的なアイデアで勝負すると、研究チームは、若い人たちの意見を採り入れながら、試作機を作っていた。

いよいよ、その試作機の製造特許も申請が終わり、マスコミを呼んでの、発表会となった。説明は開発部長が行っていた。

「これが、我が社が、次世代に向けた、いままでにない携帯電話なのです」

報道陣は、近づいてまじまじと見ていたが、どう見ても、形も大きさもいままでの携帯と変わるところは見つけれない。

「普通の携帯と同じように見えるんですが、どこが画期的なんですか？」

部長はこほんとか払いして、にやりと余裕で笑った。

「ここに、折り畳み式の携帯用の小さなキーボードも作りました。普段は、四つ折りにしてポケットに入ります。それを広げて、携帯電話を立てて装着しますと、ご覧のよう

にこれはパソコンになるんです。いままでのモバイル端末と同じに考えてもらって結構です。今回は特別にマイクロソフト社と提携しまして、携帯用のウィンドウズMINIもOSとして入っております。文章入力もワードのミニ版で自由自在です。辞書機能もノートパソコンと比べても遜色がありません。さらに、エクセルなどいろんなソフトも別売のCD-ROMのドライブを接続してインストールすることができます。それで、スペックは64Mの5Gと小さな体にしては驚くべき能力です」

「それはすごいですね。それでもディスプレイが小さすぎて、見にくいんじゃないでしょうか」

記者たちは目を輝かせて質問していた。

「その心配もございません。そのために、別売の画面が四倍に見える特殊な拡大鏡も用意しました。普通のノートパソコンと同じように作業をすることができます。メモリースティックでデータの保存、移動は可能です」

ある記者がいじわるな質問をした。

「いくら便利になったからって、まさか、鉛筆削りまで付いていないでしょう」

待ってましたとばかり部長。

「はい、そんな学生さんの要望にお応えしまして、今回は鉛筆削りも付いているんです」

会場からは、ほうとといった溜息が出た。

「さらにですね、驚かないでくださいよ。他社では絶対に真似ができない機能が付いているんです。いいですか、下がってください。携帯の横のボタンを押します」

すると、携帯電話の底から、ジェット噴射が起きて、携帯電話はなんと空に飛び上がった。一同、空を仰ぎながら、ただただ呆然としていた。

「どうです。携帯電話も空を飛ぶ時代になったんです。もう、携帯にできないことはない。携帯電話はオールマイティ、まさに科学の神であります」

部長はすっかりと自分の言葉にも酔っていた。

「でも、飛ぶのは判りましたが、それがどうだと云うんですか」

醒めた口調の記者に質問されて、部長ははたと我に還った。

いまや、幼稚園の子供から明日死ぬような老人まで持っている携帯電話。ますます便利になってくると、さらに携帯に取り憑かれた信者たちが巷に溢れる。道を歩いている、電車の中でも、携帯。携帯、携帯だ。寝ても覚めても携帯、携帯、携帯だ。携帯がなければ、禁断症状で死ぬものも出てくるほど、携帯電話依存症、たはまた携帯中毒患者が増えていた。

テストのカンニングにも携帯、盗撮にも携帯、クレジットカードの代わりに携帯、自動販売機でジュースも買える携帯、いろんな悪用もできる携帯だ。

九十近いじいさんは、半分ボケがはいっている。時々徘徊するので、家族が探しにでかけるときがある。そんなときに携帯は発信器にもなる。いま、どこを歩いているのか、通信衛星で判るシステムもある。

そのじいさん、携帯がすっかりとお気に入りになってしまった。

「おじいちゃん、受話器を置いたままですよ。電話をかけたらちゃんと所定のところに置いて、切ってくださいよ」

と、嫁が受話器を置こうとしたら、

「待て待て、いまな、気持ちがいいとこなんじゃ。そのままにしておけ」

じいさんは妙なことを云う。嫁が受話器に耳を寄せると、呼び出し音が聞こえるだけ

。

「おじいちゃん、何をしていますんですか」

「だからな、いまな、わしの携帯に家の電話からかけているところじゃ」

「どうしてそんなことをしなきゃ……」

やることがおかしくなっていた。すっかりとボケたのかと、嫁は嘆いていた。

「いやいや、背中に入れた携帯がな、呼び出しのバイブとやらで、震えておるんじゃ。凝りをほぐすにはちょうどよい」

たまに、誤用もあった。

第772話 頭痛の種

偏頭痛というのだろうか、数日前から耳の裏側辺りが規則正しく、脈拍に合わせて痛みが押し寄せる。わたしは、腹痛にはえらく強いのだが、頭痛には弱い。腹痛はいつもだから慣れてしまっているのだろう。また、どうせ腹のことだから、たいしたことはないと思っていた。

ところが、頭はそうはいかない。ズキンとくると、さては脳卒中の前触れかと、不安にかられるのである。友人が五十過ぎて、脳梗塞をやり、また知り合いが、次々と死んだりするものだから、わたしは、五十の坂にさしかかると、なにをさておいても頭痛だけは気をつけている。いま、倒れていられない。

男は女より頭痛には弱いようである。女性のほうが、よく頭痛をするらしいから、頭痛薬は常備薬として、家庭には必ずあるものだ。

わたしは、日頃から、あまり病気らしい病気はしないので、何か体調が悪かったり、どこかに痛みが走ったりすると、恐怖を感じるのだ。普段は強がり云々のくせに、そのときは、青菜に塩で、めためたとなる。健康は自己責任だ。病気に負けてなるものかと、まるで戦前の教育でも受けたように家族を叱咤するくせに、自分の番になると、すっかりと重病人である。明日にでも死ぬような格好をして、遺書なんかを書いておいたりするが、ただの風邪であったことが多い。

しかし、このたびの頭痛は、長いから心配して、病院に行こうかどうしようかと迷っていた。女房は、日頃の恨みとばかり、

「あら、それって、脳腫瘍じゃないの？ 早く見てもらわなければ助からないかもしれないわ」と、このときとばかり、嬉しそうに脅かすのだ。また、そこまで脅迫しなければ、なかなか病院にも行かないわたしの性格を見抜いていた。

わたしの家系は祖父母もまた曾祖父もすべて脳卒中で亡くなっている。親戚の叔父叔母もみなそうだから、わたしは、自分が死ぬのは脳の血管が詰まるか、切れるかして、どっとゆけばイチコロで安楽死。軽く言って、寝たきりになればそれは地獄だ。行くならどうか、いきおいよく逝ってくれと、直角死を日ごろから祈っている。

それで、しぶしぶと病院に行った。その前にいろいろと図書館へ行って、左手の人差し指が痺れるのはどうした関連があるとかないとか、下調べをしてきていた。患者がいらぬ知識をつけることは、間違っている。医者がやりにくい。思い込みもよくないだろう。

待合室のベンチには沢山の再来の患者たちが待っていた。自分の番はとてすぐにはきそうにもない。年寄りばかりが多い。わたしなんかはまだ若いほうかもしれない。

こっくりと眠っていると、わたしの名前が呼ばれた。急にまた頭痛がしてくる。心臓がどきどきしているのと、同じリズムで頭痛がする。

「どうしました？」と、わたしより若い医師が訊いてくる。

「一ヶ月前から頭痛がしまして」と、云うと、医師は問診だけで、別段、レントゲンやMRIをやりましょうともなんとも云わないで、ただ、にたにた薄気味悪く笑っているのだった。

「何か、悩みがありますか」

人生相談のように訊いてくる。

「それは、もう、商売のこととか、家を引越すこととか、家族のこととか、いろいろと悩みは尽きません」

「そうですね、そうですね」と、たいした病状でもないように、あしらわれているのか。

「どれ、そうしたら、ちょっと、叩いてみまじょうか」と、医師はなんと、金槌を引き出しから出してきた。まあ、脚気を見るときは、膝を叩くあれなのだが、頭をまさか叩くのではあるまいな。と、思う暇も与えずに、医師は、わたしの痛む頭の部位と反対の耳の裏をぼんと金槌で叩いた。

「痛い！ 何をするんですか」と、わたしはつい怒っていた。

「ああ、ごめんなさい」

すると、何か、耳穴から飛び出したようだった。それを医師は手で受け止めて、ガーゼに載せた。

「出てきました。ほら、もう痛みはないでしょう」

本当だ。まるで嘘のように頭痛がすっきりと取れていた。

「何なんですか、それは」

わたしは、自分の耳穴から飛び出した柿の種くらいの大きさの塊を見つめていた。

「これですか、頭痛の種ですよ」

医師はあっさりと言うが、わたしは見るのは初めて。

「へえ、これがあの有名な頭痛の種なんですか。記念に貰っていいですか」

わたしは、くんと匂いを嗅いだりしていたが、別に何の匂いもしない。これが、脳のどこかに引っかかっている、頭痛を引き起こしていたのだ。

ということで、種を大事にポケットに入れて持ってきたが、それは種というくらいだから、植えてみようかと、さっそく、居間に空いた鉢があったから、土を入れて、その頭痛の種とやらを植えてみた。水と温度が判らないが、まあ、とにかくやってみるよりない。家族には内緒で、わたしは毎日が楽しみだった。一体、そんなものが芽を出すものか。ところが出たのである。小さな双葉が、によきりと土から出た。

芽が出れば、伸びに伸び、やがて花が咲いた。見ているだけで、頭が痛くなるような複雑な紫の花だ。

「へえ、これが頭痛の花か」

ということは、花が果実になり、あるいは種をつけ、またまた頭痛の種が増えるのか。ありがたくもなんともない。

そんなときに、病院に具合が悪くなって行っていた女房が戻ってきた。

「更年期障害だと思ったら、お医者さんが、金槌で後頭部を叩いたのよ」

同じようなことを女房が云うから、

「なんだ、おまえもか」

女房のやつ、ガーゼでくるんだ種のようなものを見せた。

「わたしの鼻の穴から飛び出したのよ。心配の種だって」

家中、そんな花ばかり咲いたら、おちおち眠れなくなる。いまの世の中、そんな種ばかりだ。困っ種。

第773話 小心者

おどおどといつも人の視線ばかり気にしている。石橋を叩いても渡れない小心者の木村は、役所の外郭団体の経理を長年やってきた。牛乳瓶の底のように分厚いド近眼眼鏡をかけて、地味なスーツに几帳面な性格が出ていた。四十を過ぎていたが、いまだに独身で、彼女なんかいたためしがなかった。

それというのも、女性に声をかけて、
「あら、ごめんなさいね。予定があるから。」

と、断られるのが怖くて、誘うまではゆかない。仕事でも、どぎまぎしてなかなかうまく話せないのに、どうして個人的なことで話しができるだろうか。

真面目でこちこちに固まっているような、全く魅力も面白味もない木村の性格を上司が見抜いていて、信頼していた。

同僚が、アフターファイブに誘うことはない。それは、以前、木村を誘ってみんなでスナックに行ったときのことだ。ホステスたちが、場違いに緊張している木村をからかい半分にべたべたしたときだった。

「し、失敬な」と、木村は不機嫌になった。そして、ひとり毅然と姿勢を正して呑んでいるので、しらけていた。

「誰だい、あいつを誘ったのは」

実は、ホステスに囲まれて木村は震えていたのだった。

勘定は割り勘ということになった。ひとり五千元だ。そこでも木村ひとりが小言をぶつくさと云っていた。

「ビール二本で五千元とは高い。もう、こんなところには入れない」

普段は、昼を外食しても五百円くらいで済ませている。八百円の弁当を食わなければならない場面になると、暫く悩んで思いっきりが悪い。こと、お金と女に関しては木村には勇気のいることであった。

ギャンブルはいっさいやらない。そんな度胸はないのだ。テレビでホラー映画をやっていると、消してしまう。怖いものも苦手だった。とにかく、はらはら、どきどきするものは見ないことにしている。サッカーの試合も、野球も駄目。負けたらどうしようかと、見ていられない。それで、いつも観戦はしないで、翌朝の新聞で結果だけを見るといふ小心者であった。

スーパーで買い物をしていて、半額の札のついた商品は買いたくても買えない。レジでみんなに見られるのを恥ずかしく思い、男ひとりで買い物をしていて、興味津々に買い物かごの中身を見られるのも屈辱と考えていた。

時々、レジで打ち間違えることがある。特価の商品なのに、当たり前の値段で打ってしまうのだ。おばさんたちは、「あら、これって、二個でニックッパじゃないの?」と、ずけずけと云えるのだが、木村は云えない。チェッカーさんが間違ったのに、たかだ

か百五十円くらいのことで、云うのも気が引けると、黙って余分なお金を支払ってしまう。そして、いつまでもその百五十円のことと、云わなかったことをくよくよと思い返しているのだった。

事務所で大の方のトイレに入るのも木村は勇気がいる。誰かに見られたらどうしようかと、躊躇うのだ。そして、誰もいないことを確認すると、さっと隠れるようにして入る。入っている間に、誰かが小の方で入ってきたとき、トイレの音をさせまいと、じっと我慢するという女の子みたいなこともしていた。そして、出るときも、誰かいないことを確かめてから出たりする、そんな小動物のようなおどおど、きよろきよろしたところを持っていて、女性にしては実に嫌なタイプの男だった。

「今日ね、電車で木村と一緒にだったの。あいつが立っていた前に座っていた人が降りたのよね。目の前に座席が空いているのに、座る勇気がないのね。わざと気づかないふりなんかしていたけど、そのうちみんなの視線を感じたのかしら、いたたまれなくなつて、あいつ、ひとつ手前の駅で降りてしまうじゃない。わたし、おかしくって」と、女子職員たちが、いつも木村の失態を笑いものにしてるのが、木村には判るのだ。それで、聞こえないふりをして、休み時間でも仕事をしていたりする。律儀で几帳面だから、数字でも、仕事ぶりでもきちきちしていて、一円でも間違いはない。机の上を見れば、その人の性格というものが判る。木村の机の上は、いつも一ミリの狂いもなく、書類やパソコンを置く場所が決められていたし、ハンコを押すときもスケールで位置を測って、押印しているのだ。

そんな木村も苦手なのは電話だった。木村が電話を率先して取るのを見たものは少ない。また、個人的な用事でも木村にかかってくることはまずない。その木村に珍しく電話が入る。

「木村さん、電話ですよ。銀行から」

と、女子職員から教えられて、はっとした顔を木村は見せる。ネクタイを緩め、汗を拭き、異常なくらい喉が乾いたような格好をする。電話に出ると、「はい、はい」と、そればかり。こちこちに固くなっているのが判る。くすくすと、あちこちでみんな笑っている。

「木村さんみたいな人、亭主に持ったらどうかしらね」

「やめてよ、考えただけでぞっとしない？」

更衣室でも木村の話題だ。完全に笑いもので、馬鹿にされていた。

「一度、からかって、バレンタインのチョコレートをあげたの。そうしたら、木村さんね、真っ赤な顔で、小刻みに震えているのよ」

「あれだから、同期がみんな上へ行ったのに、まだ役職がつかないのよね。気が小さいって考えものね」

そんなあるとき、事務所に行行政監査が入ることになった。朝から無遅刻無欠勤の木村の姿がない。主事は、空席の木村のデスクを見て、

「珍しいな、木村くんが無断欠勤するだなんて」

それから大変な事件が発覚した。テレビ局、新聞社が押し掛ける騒ぎになっていた。女子職員たちは、ひそひそと話していた。

「すごいわね、十億円よ。密かに海外に送金していたっていうじゃない。なんでも、監査の入った日に成田から出国していたことは判っているんだって。うまいぐあいに見つからないように穴を開けていたものね。やるもんだわね、木村さんて」

警察の事情聴取では、みんな口を揃えて云った。

「あいつは、小心者で、とてもそんなことが出来るやつではないんです。これは、何かの間違いですよ、きっと」

いまだ誰も信じない。

第774話 バラバラ

会社が傾いてきているときは、統率がとれなくなるから判る。危ない会社の十箇条にもあるが、社長が不在がちになり、命令系統に乱れが生ずる。社員がしょっちゅう辞めては募集して、人事面でもせわしない。業績が悪化して、冬の賞与は出なかった。駒田産業の駒田社長は、いつも困った顔をしていた。その苦渋の表情に、経営難が見えていた。ただ、社員の中で、倒産するのじゃないかという噂が絶えないで、不安が広まり、それですっかりと仕事が上の空、中には仕事中でも、ネットでハローワークのホームページを見ている社員もいた。

「こんなときだからこそ、一致団結しなけりゃいけないんだ。それを部長からして、すっかり弱気で逃げ腰だ」

と、ひとり社長だけが気を吐いている。会社に不在がちというのは、資金繰りに走り廻っているのだ。いままで月の十五日に手形決済をまとめていたのに、細かく割り振りしたせいで、五日ごとに手形の決済日がやってくる。そのたびに足りない。

社内はバラバラだった。それは、トラブルが起こるたびに判明した。みんな、責任転嫁して、責任の所在が明確でない。またその対処もお粗末で、相手を怒らせることになった。

「誰も会社の看板を背負ったものはいないのか。まるで責任逃れでぬらりくらりと先延ばし、いい加減にしてくれ」

もう、心ここにあらずで、みんな別のことを考えている。確かに一生懸命にやっても報われないと、だんだんとモラルが低下してくる。上司からしてすでに保身術にたけていて、自分だけ助かる口をみつけていた。

駒田社長が、唯一の安らぎと思っていた自宅に帰っても、妻はカルチャーに通い、夜は不在だ。どこで何をしていることか皆目判らない。お互いに干渉することなく、夫婦

仲はすでに醒めていた。大学生の息子は部屋に閉じこもってパソコンゲームかインターネットか。家にいても顔も合わせない。話しもしない。高校生の娘なんかは夜遊び専門で、いつも間に合わなかったシンデレラだ。終電で帰ってくるが、勉強しているところは見たことがない。

お父さんは淋しそうに、ひとり食卓についた。冷蔵庫から、できあいの総菜を出してきたり、冷凍食品を電子レンジで解凍したりして、並べる。そして、ビールを出してきてぽつんと呑んでいた。家族というものはどこへ行ったんだ。みんなバラバラだ。一緒に食事したり、どこかへ行くということも何年もない。

新聞に目を通す。政治も足並みが揃わない。保守系の中でも批判の応酬だ。意見の統一を見ることもなく、国会は紛糾して、対応も決まらない。国連では世界各国の平和に関する考え方がバラバラだ。力でねじ伏せて、勝利の向こうに平和を目論む。死体の上に死体を重ねて、真の平和が来るものか。

こんな不況の閉塞感で人間の心理は、自分勝手になる。こんなときだから助け合わなければならないのに、エゴ剥き出しで相手を攻撃することばかり。人間関係もぎくしゃくし、社会が殺伐となり、ますますバラバラになってゆく。

あまり腹が立つから、駒田は新聞を閉じた。テレビもそんな社会を笑う漫才ばやりで、低俗で面白くもないから、見ないことにしていた。

庭で愛犬が吼える。散歩に連れて行けとねだっているのだ。誰も面倒を見ないから、しゅしゅ父親が見ることになってしまった。朝晩の犬の散歩は中年の運動不足にはちょうどよいかもしれないと駒田は考えていた。

「よしよし、おまえだけだよ、信頼できるのは」

唯一、飼い犬だけがそっぽをむくことなくなつてくる。初めは、面倒だと思っていた犬の世話も、自分に忠実な態度をするから、可愛くなり、いまは家族は自分のことばかりで、犬もお父さんも見捨てられ、見捨てられ同士で、散歩するのが楽しみとなっていた。

近所の人とすれちがっても、挨拶もしない。今の若い人は挨拶の仕方も知らない。関わりになりたくないというのか。人づきあいが煩わしい世の中になって、街の人もバラバラだ。お歳暮、お中元、賀状もすべて虚礼として廃止されつつあり、会社でも冠婚葬祭が簡略化し、昔から続いてきた人と人の間をとりもつ習わしがなくなりつつある。人間から間を取ったら、ただの人になってしまう。人は単体のもので、社会的な呼び方ではない。まして、それがヒト、ヒト科となったらどうしようか。駒田社長は、明日の社会を憂っていた。

犬がやたら吼える。公園に水銀灯だけが点いていて、その明かりで、うっすらと浮かびあがるものが、歩道の上に転がっていた。犬はその方向にぐいぐいと主を引っ張ってゆく。何だろうと思って、犬が臭いをかいでいる落とし物を近づいて見てみれば、それはマネキンか人形の足かと思ったら、なんと人間の足が切断されて、棄ててあったのだ。また犬が別の場所まで引っ張って行く。芝生の上に今度は腕が切断されて落ちていた。そして、その先には、胴体、それから首と血糊でべっとりして転がっていた。

すると、駒田社長はむらむらと怒りがこみあげてきた。

「みんなバラバラじゃないか」

第775話 親孝行

母親というのは老いても母であることをやめない。いつまでも子は子でありえた。

三好彰伸は姉妹がいるが、男ひとりで、いずれ母親の面倒を見なくてはならない。仕事の関係で隣町で働いているが、週末にはひとり暮らしの母のところに泊まりにいった。姉妹たちはいずれも他県に嫁いでいて、あてにはならない。頼りの息子だった。父親が早く亡くなり、母の悦子は七十八になっていたが、元気で自分の趣味のステンドグラスの創作に挑む毎日で、それが結構、工芸店で売れていて、年金だけでも多いのに、貯金に廻っていた。

彰伸は四十過ぎてもいまだ独り者。印刷屋で働いていたが、この印刷不況で、バタバタと倒産している中、安月給で賞与もなく、かろうじて首が繋がっているという具合だった。いい年をして、いまだにその辺の大卒の初任給以下の収入よりない。それでは結婚もできないというものだ。資金を貯めようにもひとりで生活するのにやっとの額だ。年々賃金が下がってくる。会社ではリストラしても間に合わない。印刷機の償却が終わる前に、また新しい機械を導入しなければ、受注がとれないほど、技術革新はめざましい。その設備投資のしわ寄せが、人件費にくる。

彰伸は、たまに同僚と外に呑みにいっても、せいぜいが焼き鳥屋か縄のれんを潜る程度。もっきりの焼酎に、塩を舐めて子供の小遣いくらいで酔うのだった。

そんな彰伸にも見合いの話はあるにはあった。大抵の相手は年収で驚く。「嘘でしょう」と、いまだき信じられないと云うぐらい。まず、そこでパスされた。彼女もできるはずがない。デート費用もないし、相手に何かプレゼントなどとんでもないことだった。逆に貢いでもらいたい。

彰伸の唯一の楽しみは、土日に実家へ帰ることだった。年式の古い軽自動車で、実家へ行くと、母の悦子は、家で教室を開いていた。ステンドグラスを若い奥さんたちから月謝をもらって教えていた。普段、仕事場では男ばかりなので、そんな華やかな場が羨ましい。

「あら、彰伸さんお帰り。うちの長男ですよ。ひとり息子ですけど、まだ独身でね、誰かいい人紹介してよ」

「よせよ、母さん」

若い奥さん方の視線を感じて彰伸はそそくさと奥の部屋に引っ込んでしまう。背は幾分か小さいが、マスクは悪くない。国立の理系を終わっている。家柄もいいのに、肝心

な金がない。力もあるが、金がない色男。それでは現代の女性にはもてない。

彰伸は、真っ先に冷蔵庫に向かう。子供のときからの習慣が抜けない。「なんか面白い」と、冷蔵庫に首をつっこみ、一週間分の贅沢をする。高級なハムや輸入もののチーズ、適度に冷えたワインを発見。それは、彰伸の好物と悦子が知っていて、金曜日のうちに冷蔵庫に入れておく。

生徒さんたちが帰ると、悦子は夕食の支度にとりかかる。

「美味しいサーモンを北海道のおじさんからいただいたのよ。今夜は鮭の押し鮭に、カルパッチョにしようと思うの」

彰伸は、この年になっても、母親に甘えられる不気味さ。彰伸はそれでもここが安らぎだった。母の手料理を味わい、昔話をして、一緒にテレビを見、日曜日には、車で買い物だ。洋服などを母親に買ってもらう。とても安月給からは被服費まで手が回らない。ここではすっかり子供になりきれぬ。

「ところで、母さん、お願いがあるんだけど、ちょっと車の車検もあってさ、サラ金から借金しちゃったんだよな。前からいろいろと借りてて、積もり積もっちゃってさ」

「サラ金だなんて、どうしてお母さんに一言相談しないんだい。利息も高いし、臓器も売られて云われるところだろう」

「大丈夫だよ。ちゃんとした大手から借りているから」

「で、いくらなんだい。全額返しておしまい」

「三百万ぐらい残がある」

「もっと早く云ってもらいたかったわね」と、悦子は奥のタンスから、ごそごとと札束を出してくると、彰伸に三束を手渡した。

「いまは、貯金していても利息もつかないし、わたしだって、いつ死ぬか判らない。なんでも、故人の通帳は遺産相続の関係で遺族がすぐには下ろせないというじゃありませんか。すぐに必要な葬式代ぐらいはタンス預金していたんだよ。覚えておいてね」

「で、母さんは体のほうはどこも悪くないんだね」

「ええ、お陰様でね、おまえがこんなだから、病気にもなっていないし、ボケたり寝たきりにもなれないしね。第一、誰が介護してくれるんだい。わたしはね、不憫なおまえを残して死ねないと思っているんだよ。毎日、おまえのことばかり考えて、しっかりしなけりゃと老体に鞭打って暮らしているんですよ」

彰伸に来るたびに金をせびられる。何かやらかしたのではないかと、そればかりが悦子は心配だった。

「母さん、おれ、来週から、ここに帰ってくるからさ」

と、いきなり息子が云うから、今度は何だろうと、悦子は息を大きく吸って聞いた。「実は、会社の集金を使い込んでさ、首になったんだよ。アパート代も溜めているし、引き払ってくるから」

「くるからって、これから仕事を探すのかい」

「いや、暫くは、パチンコで頑張っってさ、いろいろと本を読んで研究しているんだけど、おれ、パチプロを目指そうと思うわけよ」

それを聞いて、悦子は目眩がした。こんな息子を産んだ覚えはない。これは、すっかりと母親の責任だ。この子を残して先には死ねない。

悦子は持病もないが、年に一度、春には健康診断に出かける。知人の医者のところに行くのだ。

「やあ、いつもお若いすな。調べましたら、まだ五十代の体です。長生きしますよ。その秘訣は何ですか」

知人の医者が不思議そうに訊いた。

「まあ、連れ合いを早く亡くしたことと、うちの馬鹿息子のせいでしょうか」

話には聞いていたが、医者はそんなに酷い息子とは思わなかった。

「でもね、考え方では親孝行な息子さんじゃないですか」

医者は云った。

「気を張っていて、年をとる暇もない。親は頼りにされたが、長生きだ。死んでも死にきれないから生きていられるんだな」

そう解釈すれば救われる。

半年は遊んでいた彰伸だが、仲間がいないことに退屈して、どうやら心を入れ替えたように、地元の漁協に就職した。印刷の技術をかわれて広報部門だ。そこで知り合った学校の後輩で、バツイチと交際一年、あれよあれよというまに結婚して、三人での生活が始まった。彰伸も真面目に働いてくれた。夫婦共稼ぎだが、よくできた嫁で、

「お義母さんは、どうぞ、ゆっくりとしていて、家事なんかわたしの仕事ですから」と、何から何まで至れり尽くせり。働き者の悦子のすることはない。

「そうかい、それじゃ、そうさせてもらうかね。台所に女二人はいらないからね」

と、テレビを見ながらゆったりとお茶を飲む。こんな生活を八十過ぎてようやく味わうことができた。彰伸は本当に親孝行に転じて改心していた。悦子はこんな幸せな老後はないと思っていた。嫁が妊娠したと知ると、その喜びは大変なものであった。これで三好家は安泰だ。

臨月を迎える春になって、悦子は内孫の顔も見ずに、ぽっくりと死んだ。まるで力が全身から抜けたような静かな死であった。

第776話 逆流する世界

ある朝のことだった。わたしは目が覚めたと思ったら、急に眠りの世界に吸い込まれていた。寝てはいけない、会社があるんだと、自分の中で叫んでいたが、意識はなくなり、また夢の中へと逆戻りしていた。その夢もまた不思議な内容で、まるで小説を最後のページから読んでいるようなものだった。それはわたしが死ぬときの夢だが、家族がわたしの亡骸を棺桶から出しているのだ。その前にわたしの周りを埋めていた生花をひ

とりひとりといろんな親戚友人たちが、取り出すところから始まっていた。そして、わたしの体はまた蒲団に寝かされていた。ずっと長い時間のような気がする。いつのまにか、わたしは病院のベッドにいた。家族がわたしの周りで泣いてすがっている。医師が脈をとっている。酷い眠気とともにわたしはまた目が覚めていた。何時だろうと、腕時計を見ると、夜の十一時だった。なんだ、朝起きる夢を見たのかと、また眠りにつこうとした。ところが悶々として今度はなかなか眠れない。階下の居間が騒がしいから、みんな起きているのだろう。ちょっと下へ行って、ウイスキーでもやろうかと、起きていった。

「なんだ、まだ夕食を食べているのか」

家族はみんな食卓について、夕食をとっているのだ。

「いま、何時だと思っているんだ」と、わたしは少し不機嫌になって云った。

「あなたも、食事にしてください。かたづきませんから」と、妻が云った。

「おれなら、食べて寝たところだ。なかなか眠れなくてな」

すると、みんなおかしな顔をしている。わたしは、時計を見て驚いた。七時だった。おかしいな、腕時計が狂ったのかなと、デジタルの時計を見ると、確かに七時だ。それが、やがて、六時五十九分と戻っていた。秒を刻む時計が、カウントダウンしている。いよいよ、おかしい。壊れたのか。まだ買ってまもない時計だったが。

おかしいのはそれだけではなかった。空が明るくなってきていた。

「何だ、七時というのは朝の七時か。それじゃ、起きたというのは、夢ではなかったのだな」

そう思い込んでいて、外を見ると、朝焼けが始まっているように西の空が紅い。

「何だと、西の空が……」

みるみるうちに西から太陽が昇ってくるのだった。

「あなた、会社に行かないと、間に合いませんよ」と、妻がせかす。子供たちもカバンを手に学校へと出かけていった。

「どうして、夕方に出勤しなけりゃならんのだ」

もし、時間が戻っているとしたら、どうして動きが逆ではないのだ。それはどうしても納得のゆかない逆廻りの時計の世界だった。ともかく、会社へ行ってみようと、わたしは顔を洗い、歯を磨いていると、

「どうしたんですか、こんな時間に歯磨きなんかして」と、また妻は笑うのだった。

わたしは、昨日、確かに行ったはずの会社に戻っていた。

「こんばんは」と、みんな挨拶する。おはようではない。自分のデスクには昨日のままに書類が上がっていた。それを女子社員がどうしたのか勝手に持ってゆく。

「何か、体調が悪いようだね。少し休んだらどうかね」と、部長が肩を叩いた。いつもと仕事の手順が逆だから、どうも調子が狂っていた。上司が決済をした書類に、部下がハンコを押している。

それで、わたしは午前中に帰ろうとした。届出の書類には遅刻とある。早退ではない

のか。タイムカードは赤い時刻を印字していた。

こんなときは、早めに寝てしまふに限る。これは実に長くリアルな悪夢なのだ。寝て起きると、また元通りの世界に戻っているかもしれない。そうして、不審に思う家族をよそに、わたしは蒲団に潜りこんだ。ばかばかしい。あまりにもナンセンスだ。わたしは半ば怒っていた。

目が覚めると、真っ暗だ。まだ夜中なのかと、腕時計を見ると、十時だった。これは、朝の十時ではなく夜の十時に間違いはない。確かめるために、妻のところへ行って、みんながふざけているものと思い、時間を訊いた。

「あなた、明日から変よ。精神的に動揺しているわ。まあ、一日休んで、昨日になれば治るかもしれないけど」

何を云っているのかさっぱりと判らない。新聞の日付を見ると、昨日になっていた。

「どうなっているんだ。おまえたちには過去の記憶がないのか」

とうとうわたしは癡癪を起こして叫んだ。妻は冷静だった。

「あなた、どうしてしまったのよ。わたしたちには、未来しかないのよ。これから過去へ向おうとするのに、どうして昨日のことや、一月前のことが判るのよ」

ダメだった。何をどう話しても、理解を得られない。

しかし、そんな世界もまたいいこともある。死んだはずのものがゾンビのように生き返ってくる。誕生日のたびにひとつ歳が若くなる。

だが、歴史はどうなるのだろうか。太平洋戦争は、敗戦から迎えるのだろうか。革命やあらゆる犯罪、事件も結末から入るのだろうか。せっかく逮捕した犯人をみすみす逃がすことになるのか。判らない。どうなっているんだ。考えれば考えるほど、馬鹿馬鹿しい。

十年もそうして生活していたら、わたしも妻も若くなっていた。子供たちもだんだんと小さくなってゆく。社会人として働いていたのに、卒業式からまた学生に逆戻りだ。せっかく、卒業してもう勉強なんかしなくていいと思うのに、どんどん時間は戻っている。幼稚園の入園まで戻ったら、その先はどうなるのだろうか、わたしは、ぞっとした。娘は、二歳になり、一歳になり、とうとう歩けなくなり、はいはいをしていた。すっかりと赤ん坊にまで退化して、生後一週間。妻はそろそろ産婦人科へ入院だ。娘を抱いて入院する。

「おまえ、娘をどうするんだ」

「おかしな人ね、どうするって、子宮に戻すに決まっているじゃないですか」

人間はこの世に死から生還して、誕生前の無の世界に還ってゆくのだ。

そうか、まんざら悪くない世界だった。わたしは、妻と結婚式を境に他人となって、これから恋愛という青春時代へと戻ってゆくのだから。

息を切らして、きょろきょろと辺りを見回しながら、実に怪しい客が、北村古書店に入ってきた。この怪しい古本屋の北村から見ても怪しいのだから、相当に怪しい。

男は、役人のような黒っぽいスーツを着ていて、きちんとした身なりだが、靴は泥だらけで、ズボンも何故か汚れていた。そして、膝をかくかくいわせて震えているのだった。

古本屋という商売を二十年もやっている北村は、客の何割かはおかしい人が多いということを知っていた。病院を出たり入ったりする人も多い。紙一重の人だから、本屋にささる。

「あのう、突然ですが、この風呂敷包みを預かっていただけませんか」

と、男は青ざめた顔で、紫色の風呂敷包みを渡した。

「何ですか、本を売りたいのなら買いますが」

よくあるのだが、戦前の古本屋は、質屋の代わりもしていた。いまでも、たまにその名残か、自分の大切な蔵書を店に持ち込んで、これは売らないでくれ、ひと月経ったら、買い戻しにくるからと、本を担保にして金を借りてゆく。うちは、金貸しじゃないんだ。とは云っても、貧乏な学生さんには、北村はつい無利子で貸してしまう。当然、期日まで返さなかったら、本は売る。損はない。それだと思っていた。包みを解いて見ると、和綴じ本が三冊出てきた。かなり古いもので、あちこち虫喰い状態であり、題箋もはがれ、破れ、ようやく題字が解読できるというものだった。しかも、和紙といっても、今で云うところの再生紙、昔は薄墨紙と云って、墨の載った和本を潰してまた和紙にするから、墨が溶けて、全体に灰色となる。そんな紙を使った本は江戸中期から末期のものだ。

「なんですか、東日流郡誌と読めますね。写本ですか。記した人の名前も年代も書いていませんね。まさか、あの偽書と云われている東日流三郡誌の底本だというんじゃないでしょうね」

北村は、はなから信用しないで、笑っていた。

「そのまさかなんです。ただ、これを持っていれば、政府に狙われて、殺されるんです。いままでの持ち主は、すべて行方不明か、不審な死に方をしています。お願いです。お宅なら、和本が沢山あるから、隠しやすいでしょうから」

木を隠すなら森だ。本を隠すなら本屋だ。

「それは、物騒な話だ。ミステリーの読み過ぎではないですか」

男は少しむっとしたが、

「それに書かれていることは、日本の歴史を根底からひっくり返す内容だから、皇国史観に立つ我が国としては、非常にまずいわけで、闇から闇へ本も持ち主も葬ろうということなんだ。万世一系が南北朝のはるか以前にすでに絶えていたという事実と、津軽の古代王朝のことが、書かれているが、それは、この、いや、これ以上話すと、あなたまで命が狙われる。いまのことは、聞かなかったことにしてください。わたしが、一月経

っても、この本を取りに来なかったときは、ここに住所を書き記したメモがあります。このF教授に郵送してください。いいですね、頼みましたよ。このことは、他言は無用です。あなた自身のためですからね」

と、男は風呂敷包みを置いたまま、逃げるように走り去ってしまった。北村は、引き受けるともなんとも返事をしていない。

竹内文書など、歴史的に見ても怪しい文献は山ほどあるわけで、こんな文治国家で、まさか、こんな本のために宮内庁か国家保安機構か、右翼か知らないが、抹殺されるということがあるものかと、北村はせせら笑っていた。

その本のことは、すっかりと忘れていた頃、新聞に殺人事件の記事が載っていた。事故に見せかけているが、抵抗した跡があることから殺人事件と断定、捜査をしているということだった。北村は、その被害者の男の写真を見て、愕然とした。店に和本を持ち込んだ人物だったのだ。

北村は、本のこと急に気懸かりになり、店に行って、仕舞っていた風呂敷包みを広げてみた。本の中身はすべて漢文だ。しかも、白文だから返り点なんかない。それに、国字でない中国の古い漢字がふんだんに使われているから、とても読めない。

これは、ひょっとすると金に化けるかもしれない。北村はよせばいいのに、欲を出した。この本をそっくりに偽造するのだ。そして、密かにあちこちの大学教授に売り歩く。偽札を作るよりははるかに容易だ。いまは、コピーの機械もパソコンのスキャナーも精度が進み、こんな本なんかはちょろいものだ。

北村は印刷も店でやっていた。原料の紙の間屋に行って、似たような和紙を取り寄せると、簡易印刷の孔版にかけて、一ページづつ、和本を印刷しにかかった。インキではまずいので、墨汁にしてみた。それも、水で伸ばす粘度のあるやつを使ってみた。あまり濃く印刷されると疑われるので、できるだけ薄く印刷した。そして、それを数日天日に晒す。さらに、埃をつけてしごいたり、わざと古くさく見せるよう原本に近い状態にまでした。虫食いの跡まで、和紙を切り抜いて、それらしく見せた。そうしてここにそっくりの本が十組できていた。

本物は、男の指示したF教授に郵送し、偽書を偽造した本は、写真を撮ると、全国の左翼系の歴史学者たちに紹介文と共に送りつけた。この本を持っていた男が殺されたと、新聞の記事までコピーして添付した。自分も命が危ないので、早く換金したい、ともっともらしい文章にした。

「さあ、この餌に食いついてこないか。一儲けができるぞ」

と、北村は密かにほくそ笑んでいた。

それから数日して、昼になっても開かない古本屋の店先に、常連の客たちがたむろしていた。

「よほど、商売が悪かったんでしょうな」

「あの北村さんがねえ、自殺だなんて」

「昨日の夕刊を見て驚きましたよ。堤川に浮かんでいたというじゃありませんか」

「古本屋もどき店を閉めている時代だからねえ」

郵便受には注文のハガキがいくつか来ていた。

一例の和本、買ったし、と。

第778話 毒 腹

病院から帰ってきた婆さんが、突如、何かに取り憑かれたように、暴言を吐くようになった。

「なんだい、口では優しい嫁を演じているだけで、本当のところ、わたしが早くくたばればいいと思っているんだろう。とんでもない嫁だ。早く息子と別れて出ていってくれればさっぱりするわ」

「な、なんてこと云うんですか、義母さん。それはあんまりですわ」

と、嫁は泣いた。いつもは優しい言葉の婆さんが、病院に行ってきたら、急に毒舌になり、性格が豹変していた。どうしたことだろうか。

「よくも、こんな不味い飯を作るもんだ。犬でも喰わないよ」

帰ってきた亭主も驚いて、母親に注意した。

「どうしたんだ、母さん、云っていいことと、悪いことがあるよ。いつもは美味しい美味しいと食べているのに」

夫婦は、お互いに顔を見合わせ、婆さんが少しおかしくなったのではないかと疑った。急性の痴呆症というのがあれば、それかもしれないし、老人性の鬱病かもしれない。どちらにしても、一度、医者に診てもらう必要があるようだ。

「わたしなんか、どうせ、この家の余されもんだよ。姥捨山でもどこへでも捨ててきたらいいさ。それがご希望なんだろうさ」

歳とると僻みっぽくなるとはいうが、耳を塞ぎたくなるような憎まれ口をたたくようになった。

夫婦で、翌日、精神科の病院に騙して連れて行った。

「突然、なったのですね。それまではなんともなかった……」

医師は、カルテに書きながら、婆さんの様子を観察していた。

「ここは藪医者か。おい、おまえ、何人患者を殺した。医療ミスをいっぱいしているくせに、儲かってしかたがないだろう」

「これ、母さん、やめなさい」

医師は、こんな患者ばかり診てきているから、さほど気にはしない。

「そうですね、これはどうやら病気を移されたんですね」

「ええ？ 伝染病ですか」

「まあ、どちらかという、老人ばかりが病院で貰ってくるんですが」

「ということは、院内感染じゃありませんか」

「それとは少し違うんですね。医者から移るんです。お腹の中に毒が溜まる病気なんですね」

「毒、ですか」

「はい、そうです。みんな、こんな時代になりますと、苛々いたします。どこにも不平不満をぶちまけたり、あたりちらすところがないと、だんだんと、お腹の中に仕舞っておくものですから、それが毒になります。最近は、主に医者が罹る病気なんですが、それが患者に向けられて、感染するんです」

「治療法はないんですか」

「全部、吐き出してしまえば自然と治ります。ただ、あなた方に移らないようにするには、相手の暴言や中傷に耳を貸さないことです。聞いてやるふりをして、軽く聞き流してください。そうでなく、まともに受け止めて、それを相手に返したりすると、病気は長引きますし、毒はますます溜まる一方ですから」

夫婦が医師から聞いている間も、看護師に向けて、婆さんは罵詈雑言を浴びせていた。

「なんだい、少し若くて綺麗だと思って、自惚れんじゃないよ。白衣の天使だったって、私生活は酷いらしいから」

「母さん」「義母さん」と、二人は焦っていた。

「一応、参考のために、どこの病院で移されてきたんですか」

と、医師が訊くから、その内科の名前を云った。

「ああ、やはりね、あそこでしたか、最近、何人か、その内科で移されてきたと、患者さんが来ていましたから」

夫婦で話し合っ、こんな母にした内科に行って、話しをつけようということになった。

それで、婆さんを家において、夫婦で内科を訪れていた。待合室には患者がいない暇な内科だった。きっと、病気が移されると、みんな逃げたのだ。ひとり診察室に老人が入っているようで、医者の方が聞こえていた。

「ぎゃーぎゃーとうるさいんだよ。同じことの繰り返しを何回も云うんじゃない。どうせ、後生きて何年もないのに、死ぬの生きるのと、往生際が悪い。まったく、後から後から老人ばかりじゃないか。たまに、ピチピチした生娘は来ないのか」

それを聞いていた嫁は驚いた。

「酷い、病原菌はここだったのよ」

「これじゃ、腹に毒も溜まるな」

「でも、人の噂は怖いものよ。この内科も長くないわね。患者たちが寄りつかなくなったらお終いだわ」

「そうだな、おれたちも、感染しないうちに出たほうがいい」

その内科はそれからまもなく医院をたたんだ。年寄りたちを相手にしている商売はなんでも忍耐と寛容がいる。いちいち苛々していれば、毒が溜まるのだ。いま、ドクハラ

は、全国的に流行していた。

第779話 日本を喰う

代議士先生が、高級車で自分が誘致した工業団地の工場建設現場を視察に訪れていた。広大な二束三文の土地が、何倍にも跳ね上がり、さらに国から予算まで頂戴していた。

代議士は満足した様子で続々と基礎工事が進められている造成地を眺めていたが、何を思ったのか突然、腹這いになると、地面にかぶりついた。

「先生、何をなさるんですか」

秘書は焦って、止めにはいった。先生はおかまいなしに、むしゃむしゃと食べているのだ。そして、口の廻りにあんこをつけて、

「美味いから、君も食べてみる」と、秘書にも勧めていた。

「えっ？」と、秘書はたじろいだが、よく見ると、その地面は、どうやら下があんこで、薄いぎゅうひで包まれ、上が黄粉でまぶしてあるらしかった。

秘書も腹這いになって、夢中で食べた。

「す、凄い。こんな広い土地のようなくいす餅は食べたことがない」

秘書も鼻の先に黄粉をつけて、口の廻りをあんこだらけにして、土地を食べ続けていた。

学校では、校長から先生、職員までが、もう教育を放棄して、校庭の地面を切り出していた。スコップやつるはしなんかはいらない。庖丁ですっぱりと切れた。それをケーキサーバーで大皿に載せて、各自が職員室の自分の机のところに持って行って食べ始めていた。

「こんなに美味しいチーズケーキを食べるのも久しぶりだ」

土と思っていたのが、ココアパウダーを降ってある。その下はハードのクリームチーズと生クリームがティラミスのようにほんのりとチョコレートと甘苦く溶け合っているのだった。

児童たちが、教室の窓からその不思議な光景を眺めていた。まるでヘンゼルとグレーテルのお菓子の家の童話と同じだった。まるで魔法のお婆さんに大人たちが騙されているように、この国は甘いお菓子でできていた。子供たちは、絶対に食べてはいけないという約束を守っていたから、大人たちの愚かな行動を首を傾げて見守っているのだった。

会社でも、社長以下、取締役、幹部社員たちが、会社の前の歩道のタイルやカラークロックを掘り起こし、その下のコンクリートらしきものを叩き割って、さらに下の土を

すくっていた。

タイルと思われたのは、ミルクのたっぷりに入ったチョコレートでできていたし、ブロックも手作りのクッキーだった。アモンド・プードルが香ばしい。その下にはブランマンジェ、されに土と思われたのは黒蜜のカステラだった。

それを指をくわえて見ている社員もいない。上だけがいい思いをしていることは許せない。われわれもご相伴にあずかろうと、道路のアスファルトと思っていた巨大なホットケーキにかぶりついていて。その下はプリンでできていた。さらに掘ると、甘いジュースが湧いてきた。

「おい、このジュースみたいなもの、ひと口呑んだらやみつきになりそうぞ」と、みんながたかって、その土面の底からこんこんと湧く、甘い汁を吸っていた。ストローでは届かないから、各自がホースを口にくわえていた。

上から下まで日本全国、国を喰うことに忙しかった。仕事どころではなかった。政治どころではなかった。それを禁じね取り締まるはずの警官まで、こそこそと列島を手当たり次第食べまくっていた。みんな人より先に食べることに夢中だった。食べ過ぎて腹が膨れてくる。人間の欲望は腹八部目ということも知らない。詰め込むだけ詰め込んで、パンクしない腹はどんどんと膨らんで、ぱんぱんになってもまだ口のほうは食べ続けていた。

お陰で、道路は穴だらけ、車の立ち往生。

「誰だ、道路を喰ったやつは、これじゃ走れないじゃないか」と、運転手はかんかんだ。道路を喰うのをやめないのは、土建屋とそれにつるんだ政治家たちだ。さらに公団の偉いさんから職員まで、みんな嚙りついて離れない。

「いやあ、こんな美味しいものは、ほかにはないよ」

「わしにも味見させんかの」と、天下りの官僚ががぶりと噛みついた。

上が上だから、下も下。

「どうせ、真面目に働いてこつこつと税金払っていても、お先真っ暗の世の中だ。こうなったら、おれもおんぶにだっこで、御輿を担ぐのは止めた。おこぼれ頂戴とゆくか」

下請けの下請けも手抜き作業で、ゼネコンにべったりとついてゆき、一緒になって、日本を嚙り始めた。お父ちゃんが嚙れば、お母ちゃんも負けじと嚙る。ついでに息子もその端っこをがぶり。

いままで、脇目もふらずに汗みずくで働いてきた勤労者たちも、ただ呆然とそのあさましい光景を見てはいなかった。

「知らなかった。日本って、本当は、甘いお菓子でできていたなんて」

そうして、我先に山でも砂浜でも寄ってたかってがぶり、がぶりとやる。

とうとう、日本列島は虫食い状態の穴だらけ。後に残ったのは一千兆にならんとする請求書。さあ、どうしてくれる。

いくら寝ても寝足りない。毎日疲れているのか、眠りが浅いのか、ぐっすりと寝た感じがしない。せめて、丸一日でも誰の邪魔もなく、ずっと眠っていたいものだ。と、本村浩志は睡眠が趣味のようなものだった。就職のときも履歴書の趣味の欄に寝ることと書いたら、そんな寝るしか能のない人間はいらんと、どこも落ちた。

確かに、浩志は異常なくらい寝ることに固執していた。特技といったら、それも寝ることだ。どこでも寝れる。立ったままでも寝ようと思えば寝れる。しかも、ワン・ツー・スリーで寝る。いままで話していた浩志が、たった三秒でぐっすりと眠っていたということはよくあり、仲間からも称賛の声があがるほどだった。

そんな浩志でも就職できた。というのも、イタリアベッドの製造直販の会社だった。寝ているだけで給料が貰える。デパートの実演販売で、ふかふかのベッドで一日寝ているだけで、それが仕事になる。浩志は実に気持ちよそさそうに寝るから周りで見ているだけでも好感が持てる。そんな人間を会社では探していた。また、会社の研究室では、データ収集のために、実験台に浩志を選んだ。すぐ寝るから、待っていなくていい。

毎日最低十二時間は寝なくてはだもすっきりとしない。小さいときに、寝る子は育つと周りに云われてから、背が高くなりたいがため、極力寝ることにしていた。それで結果は育ち過ぎた。背丈は二メートル近い。体重はあまりカロリー消費しないで、喰っちゃ寝だから、百キロを超えていた。

春ともなれば、春眠暁どころではない。昼まで寝ていた。出勤するために、寝ぼけて途中で起きて、パジャマのまま会社に行く。しかも枕を抱えたまま、車を運転していた。危ない。背広なんか着なくていいのだ。彼の仕事着はパジャマだった。朝から晩までずっと着たままでいい。どうせ、会社に行っても、実験室かデパートに派遣されるだけだ。

だが、彼の睡眠は嗜眠症といって、それ自体が病気だった。あまり寝る時間が長いので、胡蝶の夢のように、現実の自分と夢の中の自分の区別がつかなくなり、自分の本当の姿は夢の中の主人公ではないかと錯覚することもあった。

彼は、夢の中ではエリートサラリーマンでありえた。バリバリと仕事をこなし、寝ている暇もない。いまのぼんやりしたお似合いの女房ではなく、スタイリッシュでスレンダーなモデルのような美人の女房が、モダンな高台の家で待っている。車も中古のポロ車ではなく、新型のベンツだ。会社では、若くして役員を待望され、常に同期のトップを走っていた。女子社員たちからは憧れの眼差しで見られ、現実の全然もてない、さえない浩志とは大違いだった。

「明日からミラノに出張だからね」と、浩志が若妻に云うと、

「あなたは、心配だわ。イタリアの女って、男もそうだけどあっちのほうが積極的だから」

女房は少し妬いていた。多分、この人は外国でもスマートだからもてるのだ。

浩志は、語学も堪能だ。それをかわれてデザイナーとの交渉役を仰せつかっていた。

ミラノの空港にデザイナー事務所から、グラマラスな秘書を連れてデザイナーのボビー・チェレンターノが出迎えていた。酒と女好きで浩志とは親交が厚い。どこか合うようだった。

「ダナ ナクリマッスルビゾ オカピト モルテコゼ」

「トボ タンティタンティ メ ジョラソ」

空港の前に停まっていたステーションワゴンの後ろに長四角の木の箱が積まれていた。ボビーは、浩志に、その箱の中に入れと命ずるのだった。

「これは来客用の新しいベッドだ。ずっと、永遠に眠れるように設計されている」

よく見ると、それは装飾が施されているが、棺桶のようだった。

「まさか、これに入ったら、墓地に埋めるんじゃないだろうな」

浩志はぞっとした。だが、発想としては面白い。寝心地もよさそうだし、最後まで無駄にはならない。そこで、浩志はその新型のベッドに入ってみた。そのまま蓋をされると、中は暗いと思ったら、ちゃんと電灯が点く。小型のDVDのためのディスプレイも付いて映画も鑑賞できるというわけだ。本も何冊か置いてある。眠れないときには強いスピリッツも収納するスペースもある。最適な空間だった。車はどこかへ走っていた。やがて、人の話し声がすると思うと、浩志の入っていた棺桶ベッドは持ち上げられたり、下ろされたりしているようだった。そのうち、何か地中深くに埋められたような気配を感じていた。蓋の上にはばらばらと土のようなものがかけられている。

「おい、もう出してくれよ」と、浩志はイタリア語で叫んだ。電灯はいきなり消えて、真っ暗になった。

「おおい、悪い冗談はやめてくれ。ここから出してくれよ」

蓋はすでにいくら蹴ってみてもきっちりと閉まっていて開かない。そのうち、悲しむような女のすすり泣きが聞こえていた。

「ボビー、何を考えているんだ」

浩志は必死で叫んでいた。そして、ふと、これは夢であることを思い出す。それにしてもいつもより随分と長い夢だ。なかなか覚めない夢の中にいた。

熱い。暗く狭い空間に閉じこめられて、浩志は熱さを全身に感じていた。何かが燃えている臭いも漂っていた。いよいよ、焦ってきた。絶叫したところで、浩志は目が覚めた。いままで見たことがない怖い夢だった。がばっと起きようとして、頭がぶつかった。夢と同じで暗い狭い箱の中にいるようだ。しかも熱い。夢ではなかった。本当だったのだ。浩志の体の周りには花で埋められていたが、焦げ臭い臭いで息もできない。浩志は必死で蓋を叩いていた。

「開ける、開けてくれ。助けてくれー」

浩志の女房は喪服を着たまま、泣いていた顔をふと上げた。

「いま、釜の中から声がしたわ。助けてくれって」

親戚の叔母たちが、慰めるように肩を押さえて云った。

「気のせいよ。浩志さんも、眠ったままとうとう起きなかった。植物人間みたいになっ

て、あなたも苦労したものね。さあ、控え室に行きましょう。一時間半でお骨になるっ
ていうから」

第781話 天下り

新しい知事は約束したはずだ。もう、天下りは廃止したいと。したいという希望が少し入っているが、知事ごときの力では阻止できない圧力もあった。まして、地方公共団体の内部だけなら押さえもきくが、国の機関や外郭団体にまで天下りラッシュが続いていた。それはもう、慣例を通り越して、黙認するよりなかった。力の差が歴然としていたし、第一、天下る彼らの知能指数は高すぎた。

知事や市長は選挙で決めても、そのブレーンはすべて天下りで占められているから、いわば、長と名がついていても、傀儡に近い。ブレーンたちにいいように動かされているだけなのだ。

副知事がそうだった。知事はまだ若く、東大を出ていたエリートだったが、副知事には歯がたたない。そうした天下りを果敢にも排斥しようと提唱した知事だったが、上には上がいるもので、命すら危ない。余計なことは云わないに限る。

鶴賀課長は、もう定年間近だから、いままでの鬱憤をすべて叩きつけてから、すっきりした気持ちで定年を迎えようと思っていた。そうなれば、怖いものはない。相手が副知事だろうが、じっと我慢で針の筵に座ることはない。ずけずけと直言してやろうではないか。鶴賀課長も頭は頗る切れるほうであったが、果たして口では完全に副知事に負けていた。まるで、碁や将棋と同じで、相手がこう云うと、こうして封じ込めるとばかり、先の先まで読まれていた。言葉でも、行くところすべて行き止まり状態だった。

「云いたいことはそれでお終いですか。それでは急ぎの用事があるので失礼する」

そうして、副知事は勝ち誇ったように去ってゆく。鶴賀課長は、失業者の多い本県で、雇用機会を増やすために、天下りの全廃で、それにかかる退職金や無駄な経費を臨時職員の採用に向けたいと、進言したところ、

「わたしは、規程に基づいての正当な支給を得ているのであって、制度そのものの見直しというのなら、話は別だ。わたしには、あり余る資産はある。これ以上の金というものには実際のところ興味はない。それどころか無給でもいいと思っている。わたしは命じられるままに赴任してきたのだ。すべては上の命令によるものだ。ただ、この地を治めること。それだけがわたしの使命と思っている」

鶴賀課長は、よく判っていた。本当に副知事は金銭的な欲はないのだと思う。そんなものを必要としていないのは、現在の世界的支配構造を見ていればよく判る。制度自体がよくないのだ。ただ、県庁の一課長ぐらいではどうすることもできない。どこの県でも、国の機関でも、どこの国でもあることで、いまや、国連を動かすものもすべて天下りだった。いや、世界を陰で動かしているのはすべて天下りなのだ。その理不尽な押しつけに抗議や反対運動をした者らは、左遷され、あるいは排斥された。さらに酷いところでは、密かに始末されていた。役所の幹部たちが、ある日突然に行方不明になり、後に自殺体で発見されるのは、すべて天下りかその手下によって、単に実行されたに過ぎ

ない。

そのために、諦観を持って、ただ、使えるという公務員に落ち着いてしまうほうが賢明なのだ。逆らって、得になるものはひとつもない。黙ってイエスマンでいたほうが、昇格もあるし、待遇もいい。給与と仕事で不満がなければ、上が天下ろうが関係はない。

確かに、いまから十年前と比較しても、生活にも仕事にもなんら変化というものが認められない。あいつらがやってきたところで、危害を加えるというものでもない。非常に職場では友好的で、協調性も見受けられた。素直に従っていけば、なんら問題はない。

ただ、そうした認識から外れて、人間本来の我に目覚めた敦賀課長などはすでにマークされていた。そうした危険分子は隔離され、あるいは抹殺されるブラックリストに載せられていた。

敦賀課長は、若い職員たちと秘密の地下室で酒盛りしながら、天下りの悪口をまとめてぶちまけていた。役所の中だけでなく、街中でもちらりとそんなことを漏らしたら、市民によって通報される恐れがある。だから、こうした隠れ家で、日頃の憂さを晴らしていた。

「酷いよな、課長は四月から最果村の出張所送りという内示が出たそうだ。課長、我慢してください。後、一年で定年ですから」

若手の職員が、自棄酒を呑みながら唇を噛んだ。

「まあ、これからが大変だろうな。やつらは横で繋がっているだけではない。さらに上がいるからな。その上にいる黒幕がいよいよ姿を見せるかもしれん。政治家というのは、選挙で落ちたら只の人だ。任期もある。ところが官僚はそうではない。まして、天下りともなると定年もあやふやだ。実際のところ、どこの国でも政治を動かしているのは、政治家ではない。官僚なのだ。そのトップに居座る天下りが、天下り、すなわち天下をとる日が近いのだ」

課長にはすべて先が読めていた。

「この先、やつらはどんな攻勢をしかけて来るでしょうね」

「そうだな、いまはまだ紳士的な顔でじわじわと体制づくりをしている段階だが、全世界に行き渡ったところで、まず、市町村合併と同じで、国同士の併合を進めてゆくだろうな。そして、国が国を呑み込み、征服する日までそう遠くない」

外から、仲間のひとりがやってきた。

「課長、四月からまたひとり教育長のポストに天下るやつが、やってきましたよ」

みんな、地下室からぞろぞろと夜の街へと出て、空を見上げた。銀色に光り輝く空飛ぶ円盤が、いままさに県庁の屋上に空から降りてくるところだった。天孫降臨のような神々しさに包まれていた。われわれ人間は無力だった。どうすることもできない。宇宙人に支配されるのを黙って見ていることしか……。

第782話 無意識

わたしは、ずっと毎日、小説のことばかり考えていた。頭の中は九十九パーセントがそのことで占められていた。毎日書くということを行のように自分に課してからは、寝ても覚めても新しいネタとプロットばかり考えていた。

女房はついに怒った。

「あなたは毎日、小説、小説、小説、それしかないの？」と。

だが、その愚痴でさえ、わたしは聞いてはいなかった。たとえ、聞いていたとしても

、「うん、これは小説に使いそうぞ」と、さっそくメモしたりすると、女房はますます怒り、もう、何も云わないと、黙り込む。それは、静かでもよかった。

車を運転しているときも、仕事でパソコンを叩いているときも、毎日の定型的な作業のときは、黙っていても手と目が勝手に動いているらしく、無意識のうちに目的地に着いていたし、データを入力していた。

一日の大半がそんな調子だから、いつも他人にはぼんやりと考え事ばかりしているように見受けられるようだった。いつ食事をしたのか、風呂に入ったのか、銀行に行ったのかも判らなくなっていた。

「あれ、おれ、飯喰ったっけ？」

と、家人に訊くと、みんな、また始まったのかと相手にしない。時々、我に返るのだ。空想の世界と現実の世界を浮遊しているのだが、空想の世界の滞在が長い。

ある日のことだった。いつものようにぶつぶつと不気味に独り言を云いながら、車を運転して、仕事からの帰りだった。ふと、気が付くと、自分の車ではない新型の高級車を運転している。わたしの車は中古で、内装も古い。ところが、運転している車のフロントパネルはピカピカだ。しかもナビが付いている。

「あれ、おかしいな。車を間違えたかな」と、ぶつぶつ云っていると、いきなり、わたしの左手を握ってくる女性の指があった。あっと思い、横を向くと、すごい美人が、わたしを見て微笑んだ。どうして、助手席に見知らぬ若い女が座っているのだ。しかもその女は、馴れ馴れしそうに、わたしの指に指を絡めてくる。これはただならぬ女だ。

「おい、君は、誰、なんだ。どうして、隣に、座って、いるんだ？」

と、わたしは心が乱れて言葉も途切れがちに云った。すると、女は急に顔を明るくさせて、

「ああ、拓也、嬉しい。わたしのことようやく振り向いてくれた」

「どうして、おれの名前を知っているんだ、祐子」

と、無意識に女の名前を口走っていた。祐子？ どうして、わたしはこの女の名前を知っているんだ。

「ううん、拓也ったら、いつも小説のことばかり考えて、わたしの存在なんか全然気にもしていなかったでしょ。ようやく気が付いてくれたのね。つきあって三ヶ月して、わたしのところに来てくれた」

「な、なんだと、三ヶ月だと。おれは、知らんぞ」

何か、はめられているような危ない臭いを感じて、わたしは、ロードサイドのレストランに車を付けた。

「ともかく、お茶でも飲んで、事情を聞こうか」

と、車から降りようとして、後部座席にアタッシュケースがあるのを見つけた。そいつを引き寄せて、開けてみると、びっしりと一万円札の束だ。五千万はある。

「ど、どうしたんだ。これは、おれのと似ているが、メーカーも大きさも少し違う」

すると、動揺しているわたしに祐子は云った。

「あら、さっき銀行に寄って、お金を下ろしてくると云ったじゃない。拓也って本当は金持ちなんだね。そんな大金持ち歩くなんて。ますます好きになっちゃったわ」と、女は抱きついてくる。

車といい、女といい、大金といい、全く身に覚えがない。これは、自分を陥れる何者かの陰謀だ。それとも、よくあるテレビ番組のドッキリか。わたしは、きょろきょろと、周囲を見回した。

「何を探しているのよ」

「どこかに隠しカメラがないかと思って。君は、誰に頼まれたのだ」

と、わたしは祐子という女に向き合った。

「頼まれたって…。ひどい、全然覚えていないのね。デートしたことも、ホテルへ云ったことも、この三ヶ月間の記憶がないの？ 判ったわ、惚けて、わたしとはただの遊びだったというわけね」

初対面のような女にそう急に云われても困った。すると、携帯電話が鳴った。女房からだ。いつももの忘れが多いから、すべて電話で行動が指示されていた。

「あなた、どこにいるのよ。とにかく早く帰ってきて、警察の方が来ているから。」

警察？ どうして、なんのために、わたしは無意識に何かをしたのではないかと急に不安になって、自宅へと車を飛ばした。女は助手席に座ったままだ。そっぽを向いて怒っている。

家の前に、パトカーが二台も停まっていた。わたしが車から降りると、刑事たちが、ばらばらとわたしを取り囲んだ。

「北村拓也だな。現金置き引き、車両盗難の疑いで訊きたいことがある」

女房はおろおろして玄関に立っていた。

「盗難だなんて、間違えたんですよ。車もおれのと、よく似た色だったから、どこかの駐車場で間違えて乗ってきたんです。このアタッシュケースも、多分、銀行でよく似ているから、間違えて持ってきたんです」

「すると、この女の人は？」刑事は女を見た。

「あなた、誰なのよ、その人。わたしとよく似ていて、間違えたとは云わせないわよ」

女房は鬼のような形相になっていた。

「それが、さっき車の中で気が付いたんだ」

「ひどい、拓也ったら、わたしのお腹のなかには、あなたの子供がいるのよ」

祐子は泣いていた。

「おれは、何も知らない。無意識でただ、銀行へ行ったらしく、それで、その、なにひとつとして記憶にないんだ」

すると、刑事は信じられないといった顔で云った。

「はあ、そうすると、おたくは、無意識で現金を持ち去り、車をすり替えたというわけですか」

女房も怒りを抑えながら云った。

「ふんふん、無意識で、愛人を作り、子供まで孕ませたとそう仰言るんですか」

刑事と女房と、愛人に取り囲まれても、どこかでは小説の案を考えていながら、わたしはただ、自分のしたことの重大さが判らないまま、震えて弁明していた。

「おれは、本当に何もしていないんだ。何かの間違いだ。何かの……」

第783話 運 命

ダダダーンと、夜中に玄関のドアが叩かれた。本村浩志は、どんな物音でも目が覚める。誰だろう、こんな真夜中にと、時計を見ると二時過ぎだ。非常識でなければ、何か大変なことがあるのだ。不安な気持ちで、ドア越しに訊いた。

「どちらさんですか？」

すると、ドアの向こうの主は応えた。

「わたしは、運命です。本村浩志さんですね」

ドアを開けると、そこには黒い布で全身を覆っている未公開の彫像のような塊が立っていた。

「運命って、あのベートーヴェンの第五のですか？」

「そうです。悲しいお知らせを持ってきました。あなたは、二十四時間で死ぬことになっているのです。そういう運命ということを伝えにまいりました」

浩志はかちんときた。運命というものは信じない。まして、見も知らぬ運命だか何だか判らないやつにそんな死の宣告をされる筋合いはない。

「運命だって？ 笑わせるなよ。ぼくは運命論者じゃない。第一、結果だけを見て、すべて運命だなんて、卑怯ではないですか。ぼくはですね、小さいときから運命なんて、自分の力でいくらでも変えられる、切り拓けると思っているんですよ。小学生のときですね、いつも歩く道をわざわざ引き返して、別の道を歩くという遊びをしたものです。そうして、自分の進む道なんて、いくらでも変えられるんだという実証をね。大人に

なっても、咄嗟に選択を変えて周りを驚かせたりした」

「ですから、それがあなたの運命だったのです」

「結果でものを云わないでくれよ。ぼくは、自分で選択を変えなければ、いまの職業にも就いていなかったし、いまの奥さんももらっていなかった」

「それも運命です」

浩志は完全に頭にきた。

「気分が悪いから帰ってくれよ。あんたと話もしたくない」

そうして、また寝直そうと思ったが、どうしても気になって眠れない。

「あなた、こんな夜中に誰よ」と、女房が起きてきた。

「何だか、よく知らない死神だよ。ぼくが一日の命だと云ってきた」

「気持ち悪いわ。あなた、今日一日は会社を休んで、家にいたほうがよくなって？」

「そんな馬鹿馬鹿しい」

とは云ってみたものの、どうも気になる。結局朝まで眠れない。

一ぼくは、本当に今日の真夜中に死ぬのだろうか。明日のぼくはもうこの世にいないのか。

そう思うと、まだ五十そこそこでやり残したこともあり、残された時間だけが頭にカウントダウンされていた。

会社は休んだ。嘘かもしれないが、一日の人生をどうやって過ごそうかと考えた。よく、死刑囚が、最後に何か望みはないかと訊かれる場面がある。はたと考えても、したいことが判らない。旅行にも行きたいが、時間がない。間違いならそれでいいから、一日は好きなことをしてみようと思った。

まず、遺言書を書いた。自分が死んだあとのことを細かく指示した手紙も残した。通知は、親戚友人仕事関係と、住所録をパソコンに入れてある。メールで一斉に同時同報できるように設定しておいた。それを女房に教える。身辺整理もしなくてはならない。仕事は、すべて同僚が知っているが、一応引継のため電話をしてみた。

一ぼくは、明日死ぬかもしれんから、取引先の名簿はパソコンのアドレス帳にみんな入っている。これからの予定は、スケジュールを起動してみてくれ。それは君が代行すればいい。頼んだよ。何事もなければ明日は会社へ出るから。

同僚は明るい浩志の声で本気にしない。死ぬという実感が無い。病気でもなんでも無い。浩志はどうやって自分が死ぬのかと、あれこれと予想をしてみた。交通事故か、それなら道路に出なければいい。車にも乗らないことだ。心臓発作でぽっくりとゆくのか。それとも脳溢血か。どう考えても健康な体に病死は考えられない。

夫婦で近くの銀行まで出かけた。歩いていても、空から何か落ちてこないかとおどおどしていた。

「でも、死ぬのは真夜中なんでしょう。昼間は大丈夫よ」と、女房もやけに明るい。とても亭主が死ぬ寸前の態度とは思えない。ひょっとして保険金を計算しているかもしれない。浩志はそんなことを考えていた。

銀行の定期も預金もすべて下ろした。死ぬと遺族が下ろせなくなるからだ。

「さあ、この金で、何か思いっきり、楽しいことをしよう」

そうして、日曜日でもないのに、デパートへ入った。全部、金を使ってもいいのだが、欲しいものはあっても、別にも買って、一日じゃ買う意味がない。あの世まで持ってゆけないからだ。モノでは最後は満たされない。

「そうだ、東京に出ている息子たちに顔は見れないが、声だけでも聞いておこう」と、みんなに次々と電話をした。

一お父さんだ。元気か。何、おまえの声を聞きたくてな。

普段、電話もしない父親から突然の電話で息子たちは戸惑っていた。

「あなた、うんと美味しいものを食べましょうよ」

「そうだな、最後になるかもしれんから」

二人で、日頃は高くて入れない料亭で、懐石を食べたり、高級レストランでフルコースを食べたりした。

「もし、死ななかったら、こんな無駄なことはないわね。でも、たまにいいか」と。女房は嬉しそうだ。結婚して、こんな贅沢はしたことがない。

「あなた、好物のおはぎが売っていたわ。いつも、好きなだけ食べてみたいって云っていたでしょう」

浩志が目がない五万石のおはぎ屋の店の前を通りかかった。

「でも、もう夕食までたらふく食べて、入らないかもしれないが、最後だからな。思いっきり食べてみようか」

そうして、浩志は好物のおはぎを五十個ほど買った。もう、すっかりと夜になっていた。後、数時間で死ぬというのが信じられない。

家に帰ると、部屋も綺麗に掃除してある。もう、思い残すことはない。さあ、おはぎをたらふく食べよう。すでにお腹はいっぱいなのに、それでもまだ食欲だけはあつた。ばくばくとおはぎを食べ始める。

「いやあ、幸せだよな。もういつ死んでもいい」

女房も目を白黒させていた。よく入る。好きなものとはいいながら、こんなにも食べられるものなのか。あつというまに五十個のおはぎが腹に入った。すると、口の周りをおんこだらけにして、浩志はこてんと倒れた。

「あなた、どうしたのよ。いま、救急車呼びますから」

いよいよ、死ぬと予言した夜中だった。まさか、おはぎの食い過ぎで死ぬとは予想しなかった。

「あなた、もう死ぬのね。最後に何か云い残すことはないの？」

意識が遠くなってゆく浩志は女房の手を取りながら、一言云った。

「うんめい」

テレビを点ける。すると、朝から晩まで、芸能人のだれそれが死んだとやっている。チャンネルを替えてもどこの民放も同じだった。

湿っぽくなっていけねえと、短気な田村はNHKに切り替える。テレビもしつこい。同じことを何時間も何日も流すから、ずっと見ている人は、馬鹿になる。

野球監督が入院したときも、マラソンランナーが選から落ちたときも、代議士の娘の出戻りも、朝から晩までだ。てめえら、うるせえんだよ、と田村はつい地を出して怒鳴った。

NHKもやっていたから、チャンネルを教育テレビに切り替えた。ああ、ここだけは別世界だった。コマーシャルのうるさいのもないし、世の中、革命が起ころうが、大地震が起ころうが、世間や社会情勢とは無縁で、「中国語講座」とか、

「源氏物語の世界」とかを実に間延びしたようにゆっくりと語っているのである。

「ああ、さっぱりした。教育テレビは心のオアシスだよな、まったく」

と、田村は云うが、実のところ見ていても面白くない。静かでもいいが、頭が逆に痛くなる。

日曜日の休みぐらい、家でゆっくりとしたいと、何の気なしにテレビを点けると政治討論番組で、朝からガタガタと大声で叫んでいる。

「うるせえ、聞きたかねえや」と、チャンネルを回すが、どこの局も申し合わせたように、見苦しい政治家が唾を飛ばしながら、ギャンギャンやっている。短気ですぐに切れる田村は、

「このやろう、黙れ」と、テレビを切ればいいものを、灰皿を投げつけた。

当然、ガシャーンとブラウン管が壊れ、いままで、番組の中だけで火花を散らしていたのが、本当にテレビから火花が散った。静かになった。テレビからは煙。はあはあと息を切らせて、次第に冷静になってゆく田村。テレビを壊したのは、これで三台目だった。テレビがいくらあっても足りない。

それで、仕方なく電気店にでかけた。

「テレビをご購入ですか？」

と、販売員。

「ああ、うるさくないテレビが欲しいんだが。民放が映らないテレビってのありませんか」

「ございます。最近、お客様のような方が増えましたので、チャンネルがひとつしかありません。NHKより入らないんです。リモコンにも、3よりありませんね。ただ、このテレビはここでしか使えないんです。引っ越ししたり他県へ移動はできません。青森地域限定版なんですね」

「じゃ、NHKに固定されているんですね。それで安い」

「はい、NHKから補助金が出ているから。反対に、NHKだけが入らない、受信料を納めなくていいテレビもございますが」

いろいろと、テレビも見る側の主張で、選べる時代になった。新聞をとるのと同じだ。朝日が嫌いなやつもいれば、産経が嫌いなやつもいる。テレビ局だって、選べる時代なのだ。

「他に、コマーシャルが全くカットされるテレビですとか、逆にコマーシャルだけが映るテレビとかもございます」

「そんな、コマーシャルばかり見ていて、何が面白いんですか」

「いいえ、いまはドラマやバラエティ番組が全然面白くないんで、一番面白いのはコマーシャルだと云われています。番組には嘘が多すぎますが、コマーシャルは明らかな嘘と判ります。それだけ信じられる」

「へえ、世の中にテレビ評論家が増えたってことかな」

「もっと面白いものでは、テレビを時計代わりに見ている人のために、ほら、画面に時計しか映らないんです」

ブラウン管いっぱい、大きな時計が映っている。くだらない。あまりにもくだらないすぎる。

「こんなのはどうです。テレビを見ていると馬鹿が移るといいますから、それじゃと、メーカーで開発したものです。すばり、映らないテレビです。いいですか、スイッチを入れても、音声より出ませんでしょう」

とうとう、教育上の理由から、そこまでテレビの進化というか、退化した。

「それでも、うるさいとおっしゃるお客様のために、特別に開発した新製品なんです、こちらのテレビは、画像も出ませんが、なんとあなた、音声も出ないんです」

田村は、そのテレビがひどく気に入った。

「これなら、静かだろうな」

「ええ、それは勿論です。うんともすんとも云いませんから」

田村は、静かな生活を求めて、その新型の自分を主張しないテレビを購入した。そして、居間に映らないテレビをでんと置いた。うん、確かに静かだ。静かすぎる。だが、と、田村は首を傾げた。

「なんか、変じゃないか」

情報過多の時代。マスコミが氾濫している時代。そんなテレビがあったっていいじゃないか。

第785話　されど割り箸

わたしはケチだと思われている。それは、なんでも勿体ないと思う性分が、とうとう古本屋にまでさせた。ゴミ捨て場まで漁って、バタ屋同然に、ごそごと捨てられた可

哀想な本を掘り出しては店で売ったりしていた。ポロポロの詩集なんかも、もうすでに背表紙もなく、かがり糸も解けてきているのに、ボンドでくっつけたりして補修までして売っている。誰が、そんな古本なんか買うのか。それでも捨てられないから、どんどんと溜まってくる。パンフレットから、小冊子、チラシの果てまでとっている。

いつか、札幌の有名な古書店の社長が来店して、本を買っていったが、そのときの社長の弁。

「あなたねえ、これはもう商売じゃないですよ。商売を通り越して、ボランティアです」というようなことを云った。

普通、古本屋というのは、百円、二百円などの本は、だんだんと在庫がオーバーしてくると、処分して棚には高い古書だけが並ぶことになる。坪効率を考えるのだ。一坪いくらで借りている店が多い。そんな、屑のような本の置き場に家賃なんか払ってられないという。ビジネスということから云えば、そうなる。

「でも、これが大事なんだよな。全国の古本屋に見せてやりたいよな。われわれの忘れていたものがここにある」と、その社長、かなり持ち上げてくれた。

古本屋が本の最終処分場である。しかも、市内でもわたしの店が、引き取り手のない本がやってくるから、ここが終点となる。ブックオフの店長なんかは、古い本をお客が持ち込むと、うちの店の名前を教え、そこだったら買うと親切にも宣伝してくれるから、ブックオフから聞いてきたという客が多い。実際、本の買いでお客と話すときも、うちが買わない本はどこも買いません、ここが本が助かるかどうかの最終地点なんです、と話す。

本は最後には、建て場という古紙回収場所に処分に持ってゆくことにはなる。五年、十年と店で価格も落ちて五十円以下になっても売れない本は見込みがない。だが、ビニールの表紙や石油製品のクロス張の本は再生ができない。以前は雑誌も業者は嫌がった。いちいちおばさんたちが、何人も座りこんで、中綴じのホッチキスを全部抜いてから再生に回さなければならないからだ。それは大変な割りにはたいした金にはならない。古紙は不足しているとはいえ、トン千円以下の相場では廃品回収のガソリン代にもならないのだ。

ついこの前まで、チリ紙交換というのが、マイクで呼びかけながら町内を走っていたが、こここのところ見かけない。うちに本を持ってきていた回交さんと呼ばれる彼らも、宅配便やタクシーなど別の仕事に転職していった。

いま、捨てられ、焼却される本が実に多いのだ。それは、すべて原料は勿論木である。森林が伐採され、地球を砂漠化している筆頭は建築材であるとしても、次に来るのが紙ではないだろうか。コピーも裏まで使おうと、最近提唱している。再生紙も出回っている。うちでも使ったが、どうしても高くつく。

この紙がこれからは消費が抑えられる傾向が見えてきていた。パソコンの普及だ。すでに伝票のいらぬ経理というのは常識になってきている。入出金や、振替伝票などいちいち書かなくても、経理ソフトが管理してくれる時代になった。日記や家計簿もノートではなく、パソコンでやる。本はブック端末が出て、それが普及すれば書店は潰れる

。返本もなくなり、古本屋も本がないからやってゆけなくなるだろう。すべて、新刊本はファイルになり、端末にダウンロードして読むのだ。小さい端末に文庫本なら千冊は入る。ポケットの中に図書館を持ち歩く時代がくる。

そうになると、毎朝配達されてくる新聞も紙の消費はすごいから、それもやがて電子新聞として、いまのウェブ新聞が、そのまま各家庭に配信されることになる、あの新聞紙の山がなくなる。

ということで。あちこちで森林枯渇を救い、砂漠の緑化を進める一方では、木と紙の消費を減らしてゆく努力をしている。

仲間のKさんは、どこへ行くにも自分の箸を持参する。割り箸を使わない主義だ。身近なところからやってゆこうと、全く頭が下がる。その影響で、仲間にも同調者が出てきた。

我が家でもあちこちから貰う割り箸を洗って、黄ばむまで使っている。使うのはケチなわたしだけのようだが、自分の箸というのがなく、いつも割り箸の古いのを折れるまで使っている。その割り箸、いくらで売っているのかと、スーパーで値段を見て驚いた。百膳で百円。一膳一円だ。あまりにも馬鹿にしている。だから、みんなたかが割り箸と使い捨てにするのだ。政府はいつそ割り箸税を儲けて、一膳五十円ぐらいにしたらどうだろう。みんな勿体ないと使わなくなる。

それか、お隣の韓国のように鉄箸を普及させる。少し重いが、外食産業では洗う手間をコストと考えないで、使い捨てを止める方向でありたいものだ。

よく、スーパーで弁当を買ったりすると、割り箸がついてくる。カップラーメンのときはレジでお箸を付けますかと訊いてくる。わたしは、いりませんと、断るのだが、その日に限って、店に割り箸のお古がなかった。それを知らずに、店で昼食にカップラーメンをと、お湯を注いで三分。さて、食べようと思ったら、なんと、箸がない。割り箸を笑うものは割り箸で泣く。さて、困った。何か代用品がないかと、机の中をかきまわしていると、耳搔き、鉛筆、ボールペンなど、長目のものは、そんなものしか出てこない。

わたしはこの中のどれかを使ってラーメンを食べた。割り箸とはまた違った味がした。

第786話 捻 金

かの江角様が、テレビの記者会見で、年金を納めていなかったことで謝罪していた。わたしは、別にファンでもなんでもないが、その事実を知ったとき、少しはショックを覚えた。

「ええ？ 芸能人って、自営業だったの？」

フリーのタレントもいるだろうが、みんなプロダクションに所属していて、ちゃんと社会保険は完備していると思っていた。だとすれば、今回のことで、すべての芸能人を洗い直しをすれば、すごい結果が出てくるのではないか。いまをときめく、タレントやアイドル歌手なんかは、

「ネンキンって何？ わかんない」と、続々と未納者が出てくる。

「わたしも納めていません」と、長者番付に載るような人気女優でも、納めていなかったりする。こんなときこそ、週刊誌は何をやっているんだ。いい企画だと思うが、社会保険庁から待ったがかかる。ひょっとして、大物代議士まで未納だったりすると、これは大変なことになるのだ。

払えない人には女神に思え、払う必要がないとする主義者たちには、それみろとばかり格好の宣伝材料になる。

不景気で正社員が減ったのと、会社で負担が重くなり、社保をやめたりして、社会保険を掛けている人はその家族を入れてもいまは国民の六分の一にしかすぎない。二百万人も減ったという。あとは、受給者を除けば本来は国保に入らないといけない家族だ。国保の方が多い。掛けた年数にもよるが、国民年金は今では五、六万しか貰えない。それでは老人の一人暮らしでも食べてゆけるのか。持ち家でもいろいろと補修はかかる。光熱費もかかる。寝たきりでもかかるものはかかる。まして、貸家住まいだったら、家賃だけでも大変だ。将来はそれもさらに減額される見通しだ。年金なんかあてにできないと、若い人たちは関心もない。老後を考えてこともないから、四十年以上も先のことなんかどうでもいいのだ。

若い人の未納者が多いから、このまま進めば年金は破綻する。政府ではそれを理由に国民に脅しをかけて、消費税を上げてくる。

「総理、ちまちまと五パーセントとか、十パーセントとか消費税率の引き上げをするのはやめましようや」

財務、厚生各大臣と消費税値上げの相談をしていた。

「それなら、欧州並みに思い切って、二十パーセントとゆくか」

「いやいや、そんなことでも我が国の財政難は救えません。もっと思い切るのです」

「それ以上とな」

「そうです。二百パーセントにしましょう」

「な、なんだと、百円の納豆買って、税金を二百円も納めるというのか」

「それは大変なことになる。どんな馬鹿な国民でも、少しずつなら判らないが、どっと上げるとバレるではないか」

「いいえ、逆なんです。それぐらい上げると、人間、頭の中が白くなって、呆然として、何が起きているのか判らなくなるものです」

すでに、国の台所はそこまできていた。如何にして、年金の支出金を捻出するかが、当分の問題となっていた。

以前は何かあると、税金を上げる口実に福祉があげられた。福祉の紋どころには、誰も何も云えない。これから政府は、何かあると「年金」と印字した印籠をすぐに出すに

違いない。

だんだんと貰いにくくするために、七十歳、八十歳支給になれば、いくら長生きしてきたといい、年金を貰う前にばたばたと老人たちは死ぬ。とうとう百歳から支給ということになれば、それまで、仕事もない、年金もない老人たちが大方、食えなくて死ぬので、対象者が減るのでいい、なんてことが平気で国会で討論されていた。

いままでせっせと働いて、年金の掛金を四十年も払い続けて、一番悔しいのは、明日が初めての年金が出る日というときにぽっくりと死ぬことだ。

それも、だんだんと減額されて、日干しになる老人が増えた。葬式も出せない。食えないから、餓死する年寄りも増えた。

若い人は逆に年金徴収の強制執行と、重税に泣いていた。働いても収入の半分以上が持ってゆかれる。だんだんとやる気がなくなる。

そして、ついに年金は破綻した。

「我が国存続のために、年金制度を全面的に廃止いたします」

とうとう、来るべきときがきた。

「金、返せ。これは国家的詐欺ではないか」

と、デモ行進が続いた。

それから、日本は戦前の年金のない時代に逆戻りした。収入のない老人たちの面倒をみるのは、息子や孫たちだったが、みんな税金が高いのでそんな余裕もない。生活苦のために、老人たちは車で山に捨てにゆかれた。老人の不法投棄が全国的に続いた。山はどこも老人たちで賑わっていた。どこの自治体も対策に苦慮していた。山道に立て札が立っていた。

一老人を捨てないでください。

年寄りが粗末にされる時代がやってくる。

第787話 薄笑い

三月は転勤、引っ越しの季節だった。ぼくの住む団地も転勤族でいっぱいだ。よそ者の集まりだから、いらぬ干渉はされないし、奥さん同士はたまに子供の繋がりや仲良くなることはあるにしろ、亭主同士ということはずもない。互いに顔は毎日合わせる人もいるから知っている、名前が判らない。どこの会社か役所か、何をしている人なのかも判らない。ただ、この家賃から考えれば、ぼくらとそう変わらないような気もする。また、マイカーの車種でだいたいの生活が知れることもある。

今度、ふたつ隣に越してきた石葉という少し暗い表情の中年男性が奥さんと二人だけで来た。子供さんはいないようだった。どんな仕事をしているのか判らない。六階建のK棟の廊下でよくすれちがった。すれちがうたびに、ちらりとぼくを見ると、石葉さんは薄笑いを浮かべるのだった。

「今度、ふたつ隣に越してきた石葉とかいう人なあ、何か気味悪くないか」

と、ぼくは妻に話した。

「そうですね。いつもは暗い雰囲気なんだけど、人の顔見れば、顔の奥から崩れるようににたりと笑うあれね。一体、何をしている人なのかしら。日曜祭日も仕事らしく朝から出かけてゆくもの」

「あの笑い方な、向かいのM棟にいる大泉さんもするよな」

「ああ、あの人ね。髪をいい年してパーマかけているおじいちゃんね。不気味に口元から漏れてくるような笑いね」

ぼくたちだけではなく、団地の奥さん方の間でも、専らの噂で、若い人の言葉を借りれば、「きもい」ということになっていた。まず、何を考えているのか判らない。人を見下したような笑いとも、小馬鹿にしているような笑いとも見てとれる。

「あの笑いは、何かを知っている笑いなんだ」

ぼくだけでなく、顔を見られてにたりとされると、自分の秘密を知っているとでもいうような、含み笑いに見えるのだった。次第に、団地の中では、各々の個人情報があつた二人に漏洩しているのではないかと、疑うようになった。多分、コンピュータ関係の仕事で、そんなハッカーをすることなど、簡単なのだろうと噂していた。そうでなければ、あんな、見ず知らずの人の顔を見て、おまえのすべてを知っているぞという脅迫めいた笑い方はしないはずだ。

とうとう、団地の人たちの多くは、被害妄想にかかっていた。被害者意識で団結しあつた。

「誰か、大泉さんと、石葉さんがどこで働いているか、尾行してつきとめてみない？」

この二人は同じ職業であることは間違いがない。同じ時刻に同じ電車で出勤だったし、よく、二人で話しているところを目撃されていた。

「探偵か、興信所か、それともヤクザかしら」

と、憶測だけが飛び交った。

「よし、尾行なら、ぼくたち夫婦でやろう。怪しまれないよう、子供も連れて、日曜日に決行だ」

ぼくは、そんなミステリアスなことが大好き人間だった。それで、家族で、日曜に朝から遊びに出かける格好で、探偵ごっこをすることになった。

少し離れたところから、石葉さんの後を追った。小学生の息子は、

「どこに連れて行ってくれのさ」と、うるさい。

「どこへ行くか判らないところが今日の面白いところだ」

と、自分でもわくわくしている。やがて、私鉄の駅で、大泉さんと合流した。二人は新聞を手にも、ラフな格好をしていたが、弁当を持っているから、仕事には間違いはない。仲がいいらしく、同じ車両に乗り込むと、ちらちらと周囲を警戒するように眺めていた。ぼくは、ヤバイと思って、柱の陰に隠れると、隣の車両に家族で駆け込んだ。どうやら、石葉さんと大泉さんは、他人の振りをしていたが、電車では気軽に話し合っていた

。「ほら、あの二人は繋がっていることは確かだろう」「そうね、ますます怪しいわ」妻も、すっかり探偵気分だ。

二人は、電車を降りると、また互いに他人の振りをして、歩き出した。歩く方角は同じようであった。ぼくたちも見失わないように、少し距離をおいて尾行していた。ぼくら夫婦は面が割れているから、サングラスをかけ、帽子も目深にかぶっていた。

やがて、二人は遊園地に入ってゆく。

「わーい、なんだ、遊園地に連れてきたのか」と、息子だけははしゃいでいた。まだ開園時間には早いらしく、ゲートは閉まっていた。あの二人は従業員用の出入り口から入ったようだ。

「ここの遊園地に勤めているようだな」

とすれば、別に問題はなさそうだ。危険でヤバイ仕事に従事しているわけではなさそうだ。せっかくここまで来て引き返すと、息子が泣くので、仕方なく、チケットを買って、三人で久しぶりに遊園地で遊ぶことにした。

「わあい、ぼく、お化け屋敷に入りたい」

「一人で入れるのかい。ママと入りなさい。パパは外で待っているから」

「なによ、わたしは怖いのが苦手。パパがついて行って」

結局、三人が団子のように固まって、入ることにした。中は真っ暗で何がなんだか判らない。冷たい風が吹いてくる。古典的な効果音も鳴る。いきなり壁がひっくり返ると、そこに髪を振り乱した死体がへばりついていて、赤いランプの光りの中に浮かび上がった顔がにたりと笑った。わあっ、気持ちが悪い。妻はしがみついて、黄色い声を上げた。絹を裂くような若い女の声ではない。雑巾でも裂くような絶叫だった。一瞬、幽霊になっていた従業員の方が、怖がった。よく見ると、どこかで見たような顔だ。

暗い道を進めば、墓地があり、棺桶からゾンビがむくりと生き返る。そして、にたりと笑った。妻と二人、あっと声を上げた。向こうも驚いていた。

「石葉さん。こんなところで働いていたんですか」

石葉さんは頭をかいて盛んに照れていた。

「パパ、お化けとお友達なの？」と、息子は手を引いていた。

さっきの幽霊は大泉さんなのだ。

お化け屋敷を出ると、ぼくたちは笑い転げた。

「あんな不気味な人でもちゃんと適材適所ってあるんだな」

ぼくは、あの薄笑いをどこか別のところでも見たように思った。よく考えると、それは政治討論の番組でもあった。そうそう、いるいる。あんな薄笑いの大臣が。あの世界も昔は狸と狐の化かしあいと云われたが、いまは、もっと不気味だった。騙されているのは国民だった。

「遊園地でよかったな」ぼくは云った。

「そうね、お化けでよかった」

そのぼくたちを見ていた周囲のお客たちがいっせいに、意味ありげににたりと笑って

いた。みんな、立ち止まって、じっと薄笑いをしている。

「な、なんなんだよ、こいつらは」

その無数の目は、何かを知っている目だった。

第788話 サボタージュ

労働者たちは、最近は全くといっていいほど、やる気が起きなかった。それは、ブレーンがなくなっているからだった。トップは部下を信頼していない。周囲の宣伝やセールスを信用して、すぐに新しいものに飛びつき、全く自分たちの一部分でもある現場というものを信用していないのだ。

それは、われわれの日々の作業を脅かすほどのものだった。この前も、破損した箇所が見つかったので、それをすみやかに修繕するために、われわれは現場に向った。ところがだ、われわれを信用していないトップは、外部に修繕を依頼していた。何かあると、すぐにそうだった。まるでやる気が出てこないのだ。

何のために、営繕課という部門があるのか、それは、故障したり破損した箇所を自分たちで直すために、昔からあるセクションではないのか。それを日本人の悪い癖の舶来信仰と同じで、国産を軽くみて、輸入物を偏重する。そんなものの力を借りなくても、われわれはいままでも歴史的にもある程度は立派に職務をまっとうしてきたではないか。それが何だ。最近、経費節減と口では叫んでいるくせに、少し穴が開いたくらいで、すぐに外部の専門家に依頼する。それはすべてコストだった。

元来、そんな予算もない裸同然のところは、外部に依頼したくともできないところも沢山あるだろう。そんなところは、昔ながらのやり方で補修することでしのいできた。

われわれは、まるで用のなくなった窓際族と同じで、出番がだんだんとなくなってきていた。

その不満は、他のセクションでも見られた。生産部門のラインでのことだ。エネルギーを生むための補給をしていたら、いきなり、トップから頼まれたと、できあいの製品や部品が次々と流されてくるようになった。完全な手抜きだった。それも高いものを買わされている。中には、まるでインチキに近いまがいものが混ざっていた。何の効果もないのに、トップは騙され、言葉巧みに買わされて、生産ラインの仕事も奪ってきていた。毎日、休むことなく働いてきた彼らも、とうとうやる気がなくなってきていた。

「まあ、楽でいいが、毎日、遊んでいて、仕事を忘れてしまうんじゃないか」

と、作業員たちは、ただ、目の前を通過してゆく、新製品とやらの様々な出来あいのものを眺めているだけだった。

「上がいいんだから、それでいいだろう。さあ、黙ってつつ立っていたって、疲れるだけだ。用がないんなら、みんなして寝ていようぜ」

業務怠慢は上が作る。本来は、不必要なものばかりが、次々に導入されてくるから、生産ラインは止まったきりだった。

そんなときに、現場で一番デリケートなまだ活きのいい連中が、ついにトップの命令に刃向かって、反乱を起こし始めた。命令には絶対に服従の彼らは、すべての伝達も無視して、仲間を増やし始めていた。

どう見てもまともではない。狂っているとしか思えない。デモやストならまだよくやるが、そ

れは、破壊活動だった。やがて、本体を倒すことにでもなれば、自分たちも同じ運命を辿るのは目に見えているのに、実に愚かな連中だった。

その反乱分子を鎮圧しようと、警備のやつらに命令が下るが、もう、肥大した彼らは、内部の警備体制ではどうすることもできない。トップは、ついに外部の手を借りて鎮圧しようとした。手っ取り早く、彼らを隔離し、除去することだった。そのためには、血を見ても仕方がない。いつまでもしがみついて離れず、健全な作業員たちまでまるめこみ、洗脳してゆくと、彼らのグループは四散してあらゆる作業場に潜り込みオルグしようとする。すでに、手のつけられない状態だった。外部の力を借りて制圧するということはすでに手遅れだった。本体は倒れ、救うべき道は途絶えていた。

われわれは、仕事場にいながら失職していた。それもこれもトップが悪いのだ。われわれを信用せずに、すべて科学的に管理しようとした罰だ。自然に近いほうが害がないのに、科学の力で立ち向かおうとするところに無理がある。昔ながらのやり方も全面的に悪いわけではない。力に対しては力で対抗しようとするから、細胞も狂うのだ。やつらは、異星人のように組織から分離して繁殖を続けていた。終いには全体を乗っ取ろうとでもするかのようなのだ。その前にすべてが終わるだろう。そのときは、やつらもトップも、われわれもすべて死ぬときなのだ。

まだ、何もしないほうが賢明であった。古来から、行われていた自然の食べ物から栄養を摂り、それを加工したり、摂取したりする作業はわれわれ労働細胞に任せておけばよかったのだ。それが、まるで怠慢を促すように、栄養食品だ、栄養剤だと食道からベルトコンベアで送ってよこす。まるでわれわれの出る幕はない。

外部からの事故で、表皮が破損したときも、われわれの同僚で、出血を止め、傷口を盛り上げ、再生するという自然治癒力があるというのに、ちょっとした傷でもやれ薬だ、やれ病院だと、トップの脳は実にうるさい。それで、免疫力も落ちてきたし、すっかりとやる気がなくなり、全員でサボタージュだ。

それだけならまだいいが、そんなストレスばかり送りつけてくるから、いままで従順な従業員であった細胞が、労働組合を結成して、癌細胞となり、あちこちへ転移することになった。やれ、風邪薬、それ胃薬だ、頭痛薬だ、とそのたびにわれわれを脅かすロボットたちを作業現場に送りつけてくるから、ますますやる気がなくなる。もっと、信じろよ。われわれは、もともと外敵に強い力を持っているんだってな。それを忘れ、科学に頼りだんだんと体質も弱くなってゆく。自然に任せておいていいんだよ。われわれにも仕事をさせろよ。いい加減にしてもらいたい。

そんな声が自分の体の中から聞こえたので、わたしは、ビタミンやカルシウム、栄養ドリンク、風邪薬などできるだけ吞まないようにしている。

見わたす山のはかすみ深し

唱歌で一番好きな歌が、この朧月夜だった。いまでもハモニカで間違えなく吹ける。自分にとって、これはまだ朧気な記憶の中の子供の歌だった。この歌を聴くと、いつも脛に浮かぶのは、木造の古い母校の橋本小学校だった。

その校庭が浮かんでくる。校舎の裏に広い校庭があった。鉄棒と、滑り台があり、花壇が綺麗に手入れされていた。さらにその後方には味噌を造る工場の大きな屋根と煙突が見えていて、いつも味噌こうじが発酵するような匂いが漂っていた。

小学校の裏手には、うどん一杯九円という看板が見えていたが、小学生が買い食いならまだしも、食堂にまで入ることはできなかった。それで、いつか入ってやろうと思いながら、ついに入ることのなかった食堂も懐かしい。

校庭の脇には南部煎餅の小さな工場と売店があった。そこでも、製造過程で必ず出る煎餅の耳というのを紙袋に入れて、十円くらいで売っていたと思う。子供たちの小遣いが、五円十円だったから、それは学校が引けてから、帰りによく寄って買い求めた。焼きたての煎餅の耳は、焦げているところが好きで、胡麻なんかはあまりついていないのだが、ぱりぱりと美味かった。

買い食いの店は、いまでも五十年以上も商売を続けている、こみやまという店が校門の並びにあり、角を曲がり、寺町の方へ行ったらやという店があった。「こみやま」も「てらや」も、文房具から駄菓子までなんでも売っていた、雑貨屋兼食品店だった。その辺りの地名も、いまはないが、大工町、鍛冶町と呼ばれていた。寺山修司も橋本小学校だったが、その町の名前を「田園に死す」の中で詠んでいる。

大工町寺町米町仏町老母買ふ町あらずやつばめよ

てらやの軒先では冬には大きな鍋から湯気を上げて、ぶりこを茹でて売っていた。ぶりこは赤、青、緑と不気味な色をしていたが、ハタハタの卵だ。いまは、かなり高級品になってしまい、とても大人の口にも入らないが、昔はハタハタもいまよりはよく獲れた。子供の小遣いで買ったから、そう高くないおやつだった。ぶりこを口に入れて、中の汁をガムのようにくちやくちやくと噛んで、すっきりと吸ってしまうと、後の白い殻は雪の上にぺっと吐いた。

わたしは、一番寺、二番寺と寺がずらりと並ぶ、寺町を通して通学していた。太宰治が下宿していた豊田家の前を過ぎて、柳と川のある町がわたしの生まれ育った町だった。

橋本小学校が、木造校舎を取り壊して、鉄筋の建物にするといったのは、昭和四十六年だった。その前の年の夏に、わたしは大学の夏休みに帰省した折、おんぼろ校舎を訪ねていた。夏休み中なので、児童も誰もいない静かな学校だった。わたしは用務員さんに、ここの卒業生だが、取り壊される前に是非カメラに納めておきたいものでと、許可を得て、その頃愛用していたニコンのS1949年型で、白黒フィルムを使用し、廊下から教室と撮影して廻った。

驚いたことに、そっくりそのまますべてが残っていた。卒業してまだ十年も経っていないのだが、わたしの妹の写真も廊下に展示していた。健康優良児で選ばれていたものだ。姉の描いた水彩画もそのまま飾っていたし、わたしが四年生のときに夏休みの工作で作った石鱈の象の彫刻も、ガラスケースに入って、名前も書かれていた。みんな、捨てないでとっていたのだ。

わたしは、タイムスリップしたように、懐かしい校舎を見て廻った。教室も机も意外にこじんまりとしていた。椅子なんかは、こんなに小さかったのかと思うほどだった。廊下は黒光りした

分厚い板だった。そこをみんな放課後の掃除の時間に、蝋燭を塗って、荒縄のたわしで磨いたのを思い出していた。

理科室に入る。やはりそこにも児童たちの課題展示コーナーがあり、貝殻の収集をした箱に、わたしはある人の名前を見つけていた。Nだった。こんなところで、あの人の名前を見つければ思わなかった。Nは、小柄で目の大きな女の子だった。生まれは福岡だった。父親が転勤族で、あちこちを転々としていた。一年生から四年生の春まで一緒だった。しかも、席はいつも隣だった。というのも、席替えのときにわたしは、挙手してNの隣をいつもキープしていたからだ。クラスで一番の成績だったNに、勉強を教えてもらえるという魂胆があった。気もあったのだろうか。まだ好きだとかそんな感情は生まれていない。

四年生になって、転校していったときも、わたしは青森駅まで汗びっしょりとなって、見送りに走っていった。ぎりぎり間に合った。シャープペンシルというものが出て、それを上げたかった。探していてすっかり時間がなくなっていた。Nはまた福岡の小学校へ転校していった。その後、大阪へと移ったが、十年以上もわたしとの間に文通が続いた。

大阪万博のときに、初めて彼女の家を訪ねて行った。あの目の大きな子は、十九の娘になっていた。横浜の国立大学に在籍していて、鎌倉に住んでいた。それから、わたしの鎌倉詣が始まる。

二十一の夏に二人で北海道から九州までひと月もの旅行をした。十数年ぶりで青森も訪れた。いま、まさに壊されようとしていた橋本小学校を二人で見ている。思い出はすべて壊されてゆく。街は戦後の木造から鉄筋コンクリートへと変貌復興してゆくのだった。

Nとの関係は、それから半年後に、生まれて初めての失恋という形で終わっていた。Nには専攻する美術があり、グループ展や卒業制作のための油の大作を描かねばならなかった。わたしはといえば、ただ、Nに溺れて学業を疎かにしてばかりか、無益な詩のような断章を書いてばかりいた。そんなわたしを見てはいられなかったのだろう。

すべてが卒業する春に、わたしはNとの写真も手紙も封印したまま、傷心のまま帰省していた。夏に一緒に行った場所を札所のように巡礼して歩いていた。橋本小学校は、新しい校舎が、鉄筋で組み立てられていた。校庭の花壇のへりに座りながら、わたしは無気力な人間となって、黙って眺めていた。まだ春休みの学校だったが、どこからかオルガンで朧月夜が演奏されているのが聞こえてきていた。

わたしは、すでに就職が決まっていて、四月から社会人だ。あの人は最後に手紙にこう書いていた。それは誰かの言葉を借りているものだった。

時が過ぎるのではない、われわれが過ぎるのだ、というようなことを。

思い当たることがあるとすれば、それはどこからか漂ってくる甘い匂いのせいかもしれないかった。匂いが一番、人間の記憶を引き出すキーワードを持っている。別に、これからどうなるとか、どうなってゆくのかという迷いも、期待もないくせに、わたしの中に整理のつかない遺失物がいつまでも残り続けていた。

今日もそうだった。モスグリーンの軽自動車が、国道を横切るように走っていった運転席にすぐと目が行った。同じ車種で同じ色の車というのは、この都市には何十台となく、走っているはずだ。それなのに、たまに町中ですれちがうときに、咄嗟に目を伏せるのはなんだ。第一、あれから十年は経っているのだ。すでに車は換えていたかもしれない。車のナンバーなんか電話番号と同じで、もうすっかりと忘れた。

この年は、三月になってもドカ雪が降り続けていた。いつもの年なら、三月の声を聞けば、雪解けの季節だった。二月の末でも二メートル近い雪があり、観測史上三番目の記録と云っていた。残雪はいつまでも町のあちこちに、黒い塊となって残り続けていた。まるで、わたしの清算されない気分のように、だらしなく、ぐずぐずといつまでも道端に残り続けていた。

四月にはいつてからも、寒く、時折、空から白いものが舞っていた。いつまでも春が来ないような気がした。

市民の誰もが、雪と闘って辟易していた。もう、いいと思うのに、それでも追い打ちをかけるように雪は執拗に降り続けていた。わたしも、やはりうんざりして、雪と格闘する毎日の生活でかなり打ちのめされていた。仕事場と家と駐車場と、雪かたづけに追われる毎日を過ごしていた。そして、ようやく豪雪の冬が行ったと思う四月がやって来た。

タイヤ交換をどうしようかと考えあぐんでいた。というのも、もう大丈夫だろうと、周囲の人間たちと話していても、どうも信用がおけない。四月に雪が積もるときもある。

ストーブも炬燵もまだまだ使うし、防寒具も衣替えで仕舞うのは早い。そんな、ぐずぐずとどちらともつかない季節の狭間というのが、いまのわたしの気分と合っていた。

見てはならない場所というのが、この町にはいくらでもあった。ロードサイドの茶店なんか、全面がガラス張りで、中でお茶を飲んでいるカップルなんか、ちらりと見えていた。いやいや、見てはならない。その茶店はいつも無視される場所として、わたしに長く黙殺されていた。

国道沿のレストランもそうだったし、空港へ行く途中の坂道脇のカフェテラスもそうだった。行ってはならない公園もあったし、ギャラリーや野の花の咲く林道なんかも、立入禁止区域となっていた。

町や山の至る所にそんな場所が点在していた。あまりにも長い間を共に居すぎた。

何を悪いことをしたというのだろうか。顔を伏せることもないし、おどおどすることもないのだ。裏切ったのは、わたしではない。いまさらどうのこうのということも時効だった、どうでもよくなってきたはずではなかったのか。そう自問してみても、いつも回答のない空白が、そこだけにあった。

いつかも、長い髪とベージュのロングのスカートが裏道を歩いていたとき、わたしは振り向いてはいけないものを振り向いていた。そして、他人の空似ということを確認してひどく安心するのだった。

モスグリーンの中。助手席にはバンダナをして丸いサングラスの男がいた。まだ続いているんだ。それもどうでもいいことなんだが、復讐はどこかで終わってなんかいない。宙ぶらりんのまま、方程式はイコールまで書いていた。

そうして、別々の生活が生きているのか死んでいるのか確認作業もしないまま、いくつかの春を迎えていた。

いつかきつと狭い町のことだ、どこかでばったりと逢ったりするのだ。そうしたら、笑いながら気楽にまたコーヒーを呑もうと、云っていた人。

四月も下旬だというのに、窓の外には雪一と思った。白いものが無数に舞っている。桜がいつのまにか散り始めていた。わたしの後遺症は、それを雪だと思った。

第791話 忌念日

その朝は目覚まし時計は鳴らなかった。すでに明るくなった戸外をぼんやりと眺め、時計を見ると八時を過ぎていた。大変だ、遅刻だと、小畑氏は跳ね起きた。慌てて階下に駆け下りると、トイレから出てきたばかりの寝ぼけ眼の息子もいた。

「ばか、学校、遅刻するぞ」

台所で朝餉の支度をしている女房につい怒鳴った。

「どうして起こしてくれなかったんだよ」

女房はきょとんとした顔をして云った。

「あら、あなた、今日は会社お休みじゃないの？ こんな日に仕事をする人はいませんよ」

小畑氏は、そう云われると今日が休日という感じもしてきた。カレンダーを見ると、黒い丸で数字が囲まれている。

「黒い丸？」

そこには何の記念日なのか書かれていないが、確かに祭日のようだった。だが、他の祭日はすべて赤い丸なのに、どうしてか今日だけは黒い丸だ。

「おい、今日は、何の日なんだ？」

小畑氏が訊くと、女房は呆れかえったような顔でちらりと云った。

「そんな……、笑われますよ。子供でも知っていることをいまさら」

そう云われると身も蓋もない。また政府が勝手に祝日を設けたのか。祝日を増やすことで、日本経済の活性化を図ろうとしているのか。働きすぎの日本人に休みを与えようとしているのか。小畑氏は自分だけが知らないことに腹を立てていた。四月の五日か。どう考えても、何の記念日なのか判らない。

新聞を見てみた。別にそのことについて触れていない。テレビを点けても、今日が祭日であることだけは報じて、何の日なのかアナウンサーもニュースでも一言も云わない。そればかりか、この日は何か静かだった。よく考えると、コマーシャルが全面カットされている。そして、歌

番組もない。お笑い番組やけたたましくうるさいバラエティもすべて番組変更されている。まるで、天皇が崩御したときのように、朝からクラシック音楽の演奏をしていたり、芸術鑑賞番組を流していた。

「とにかく、ちょっと、外へ出てくる」

小畑氏は、気になって仕方がない。そわそわして、サンダル穿きで外出した。町は日曜日の朝より、もっと静かだった。第一、外出する者がいない。みんな家に閉じこもっているようだった。二十四時間営業のはずのコンビニもみんな臨時休業のようで、準備中のプレートが掛けられている。どこも開いているところはない。車も走っていなかった。家々の玄関には国旗が半旗で出されていた。半旗というと弔意を示すことだ。誰かの亡くなった日なのか。昭和天皇でもない。まさか明治天皇とか。小畑氏は、あれこれと考えていたが、誰にも訊けないでいた。女房に訊くと、また馬鹿にされるし、まさか息子に訊くわけにはゆかない。通行人を掴まえて訊こうとしたが、人っこ一人として通らない。地下鉄も路線バスもすべて止まっているようだった。まるで、ゼネストでもあったようだった。

警官がひとりパトロールに廻っていた。小畑氏はちょうどよいところに来たとばかり、尋ねてみた。

「あのう、つかぬことをお訊きしますが、今日は、何の記念日なんですか？」

すると、警官はぎろりと怪しいやつでも眺めるように、小畑氏の身なりを上から下まで目で舐めた。

「今日は、外出は慎むようにとのお達しが判らないようだな。おまえは、ここにいつ来たのか」

「いつって、ずっとこの近くに家がありますから、そこに住んでいます」

「それじゃ、知らないというのがおかしいではないか。いや、きっと、どこかで彷徨っていたのだ。何年もの間な」

警官がおかしなことを云うから、小畑氏はくってかかった。

「何を云っているのか、さっぱり判りません。ぼくは、昨日も、おとといもこの町にいましたよ。二〇〇四年の三月も二月もずっと、ここに」

警官は、やはりと云った顔をしていた。

「二〇〇四年だって？ いまは二十年なんだ。やはりなあ、おまえは、あのときから、二十年も迷っていたんだな。たまに、そんなやつが、ひょっこりとやってくる」

駄目だった。どうも、警官はまともではない。二十年経っていたら、女房は六十じゃないか。息子も大人だ。小畑氏は自分がからかわれていると思っていた。

小畑氏は、やはり、たまらなく今日の意味を知りたがり、家へと戻った。そして、今度は息子にそっと恥をしのんで訊いてみようと思っていた。中学の息子は机に向かって宿題をやっていた。学校は休みでも家でする課題に歴史の問題を出していた。

「あのな、ちょっと訊きたいことがある」と、小畑氏が、息子の歴史の年表を見て驚いた。

「旧暦二〇〇四年で紀元前だと。それで、いまは紀元二十年とはなんだ？」

息子は、軽蔑したような顔を向けてよこしたが、やがて、疑問が解けたような晴れやかな顔になった。

「そうか、お父さんは、いままで彷徨っていて、判らなかつたんだね」

息子まで警官と同じことを云う。

「どういうことなんだ」

女房もいつのまにか後ろに立っていた。

「お父さん、今日はね、核戦争ですべての人類が滅んだ日なのよ。あの二十年前の四月五日に、わたしたち全員が一瞬で死んだのよ」

「死んだって、こうして生きているじゃないか」

「お父さんったら、自分の死んだのも判らないで、いままで成仏できずに、彷徨っていたんだもの。可哀想に。ここは、天国なのよ。わたしたち、すべてが、黄泉の国でこうして暮らしているの」

「う、嘘だ。そんな馬鹿な」

「だって、あなた、足を見てくださいな」

小畑氏が足を見ると、足がない。さらによく見ると、みんなの体が透けて見える。

「バカバカ、夢なら覚めろ」と、頬を抓ってみたが、全く神経がない。

「ほらね、痛くないでしょう。わたしたち幽霊なんだから」

「嫌だ、そんな嫌だよ」

小畑氏は泣き出した。でも、涙ももう出ないのだった。あの世で、新しい歴史がすでに始まっていた。

第792話 証明書

「あなたは、誰ですか。それをちゃんと証明してくれませんか」

ぼくは、さっきから、スーパーの警備室に連れて行かれ、警備員たちに取り囲まれて、自分を証明しろと詰問されていた。それは、レジで購入したものをクレジットカードで支払おうとしたときだった。たまたま、お金の持ち合わせがなかったから、カードで払おうとした。なにしろ、急いでいたから、購入したと思って、その場で包装を破り、すでに口にしていた。

「お客さん、ICタグは埋め込まれていませんか？」

レジ係の女の人が、マイクで警備員を呼んでいた。

「横浜の葛西様、センターレジまでお越しく下さい」

それは、スーパーの呼び出し隠語のようだった。

「なんですか、そのICなんとかって？」

まもなく、屈強な警備員たちがやってきて、ぼくを無理矢理、警備室に連れて行った。

「何を云っているのかさっぱり判らないんだが」

ぼくはかなり気分を悪くしていた。

「お客さん、最近日本に来た方でしょう」

「そうだよ、先週、海外から帰ってきたばかりだが」

「やはり、それじゃ、知らないんだ」

「だから、これは、ぼくのクレジットカードだって云っているでしょう。名前は桜田寿男、生年月日は昭和四十九年六月七日、住所は……」

ぼくはどうしてこんな目に遭わねばならないのか、腹が立って、乱暴な口調になっていた。

「お客さん、口頭で云うことは信用できませんから、あなたがあなたであるという証明が必要です。最近、おれおれ詐欺から、他人に成りすました偽装詐欺が増えましてね」

ぼくは、財布から運転免許証を出して、机に叩きつけた。

「どうです。これで納得ゆきましたか」

「免許証ですか。これは証明にはなりませんね。近頃はパソコンとコピー機がだんだんと性能がよくなり、シロウトでも偽造がいくらでも可能になりましたから」

それではと、ポケットから健康保険証を出して突きつけた。

「保険証ですか。これなんかも、盗んできたり、いくらでも偽造もできますからねえ」

ぼくは完全に頭にきた。鞆をひっくり返して、何か自分を証明するものがないかと捜してみた。あるはずがない。

「電話させてくれませんか。家に、親がいますから。それで確認をとってください」

すると、警備員たちは笑った。

「よく使う手なんですよ。そうして、周りを安心させようと、友達に電話して、みんなつるんでいたりする」

「せめてICタグでも装着していればよかったです」

もうひとりの警備員がそう云った。

「その、ICタグって何ですか？」

「知らないんですか？ 最近、ここで売っている野菜や果物にはすべてついてる小さなチップです。それをレジでバーコードのように機械で読み取るんです。そうしたら、産地から出荷年月日、賞味期間、価格、生産者のすべてが判る仕組みなんです。最近、ものすごく詐欺が多くなり、クレジットカードも他人の情報を別のカードにコピーする智能犯たちが横行してしまつてね、それで、カードを使用する人は全員、ICタグを手の甲に埋め込むことにしたんです。ほんの一ミリくらいの小さなものです。その中には戸籍から生年月日、家族構成、電話番号からメールアドレス、会社名、所属すべての個人情報認識票のように詰め込まれているんです。あなたも、やられた方がいい。いまは、それが無い人間は全く信用されません」

「じゃ、クレジットカードも使えないんですか？」

「そうです。そればかりか、銀行で金を下ろすことも、印鑑証明をとることも、契約書にサインすることもできなくなりました」

大変な時代になったものだ。人間もインチキ食品のようにタグ付きでないと、人間扱いされない世の中になったのだ。

「じゃ、どうしたらいいんですか」

ぼくは開き直って云った。

「困りましたね。いまから少々お時間をいただくことになります」

「時間がかかるんですか。ぼくは急いでいるんですが」

「ええ、三日ほど、ここにお泊まりになっていただきます」

「ええ？ 三日もですか」

「はい、指紋照合と、DNA鑑定をしてもらおうのですが、どうも検査をする機関が混んでいるようですので」

「な、なんだと。そこまでしなけりゃ、信用できないというのか。ぼくは、たった二百円の栄養ドリンクを買おうと思って、つい、レジで吞んでしまっただけなのに」

そのICタグの偽物も出回ってくると、すべての人間が他人を信用できなくなってきた。人間社会は信用で成り立っているのが、みんな怪しい。

「あなたは、誰ですか。ほんとうに、あなたはあなたなんでしょうね」

そう云われるぼくも、ぼくである自信はなかった。

第793話 シュミレーション

戦争を知らない世代が祖父までとなると、親子孫と三世代が、戦後生まれという時代が来ていた。戦中に生まれた人もすでに六十は過ぎていた。

そうになると、戦争の怖さが判らない。憲法改正に七割近い人間が賛成ということになる。

大泉家でも、じいさんとばあさんがテレビの特番を見て発憤していた。

「拉致だなんてとんでもない国だ。なんで下手に出る必要があるんだ。やってしまえばいいんだ」と、まるで戦前の国民と同じ。

「テロも撲滅するために、いつまでもあんな国々をのさばらしておけん」と、だんだんとエスカレートしてくる。マスコミの脅威論にすっかりとのせられていた。息子の信吉は、戦争反対の運動家だ。そうした市民団体にはいつて一生懸命頑張っているときに、両親からしてこんなざまだ。いつも、親子喧嘩が始まる。

「力を力でねじふせようとしても、屈しない相手もいるだろう。恨みが恨みを生んで、終わらない戦争だってあるんだ。日本のように、敗戦と同時に掌を返したようにころりと変わる国民は珍しいんだ。武力ではどういう結果になったか、歴史を見れば判るだろう」と、信吉が両親を諭すが、

「あら、いつからおまえは左になったんだい。そんな子を育てた覚えはないよ」

三十過ぎてても、子供扱いだ。信吉は頭にきていた。親が保守派で、完全な右寄り。二人とも、まるでプロレスの観戦のように、イラク侵攻をテレビで見っていた。好戦的な人間は多い。永すぎた平和に飽きた人間たちが、不況の打開策としてじわじわと軍国主義へ移行してゆく。

それは朝方のことだった。突如としてサイレンが鳴った。老夫婦は、その物音で跳ね起きた。

「何か、火事でもあったのかね」「昔の空襲警報みたいじゃないか」

すると、大きな爆発があったように、大音響とともに家が揺れた。外が真っ赤に燃えているようだった。二人とも、寝間着のまま、部屋を飛び出し、玄関に走った。信吉が、外に出るのを制していた。

「危ないよ。外には出ないほうがいい。それより、何が起こったか、テレビを点けてみよう」

居間のテレビを点けると、起きてきた小学生の息子と娘、嫁と六人が、まだ五時頃というのに

、起こされてテレビの前に集まっていた。

一さきほどより、緊急警報を流しております。テレビは点けたままにしておいてください。隣国のK国が宣戦布告をしてきました。各地の原子力発電所にミサイルが飛んできて、相当な被害が出ている模様です。また、敵の落下傘部隊が、日本海側の村々を占拠。上陸の橋頭堡を作っている模様です。海岸線近くにお住まいの方々は、むやみに戸外に出ないようにしてください。政府と米軍は反撃に出ています。

「大変だ。いつか来る来るとは思っていたが、とうとう、やってしまったんだ」

小学生たちは、異様な雰囲気ですっかりと怯えて、嫁までが泣いている。

「とにかく、逃げる準備をしよう。貴重品だけでいい、急いで荷造りするんだ」

信吉が、家族に指示していたところに、玄関のドアがドンドンと鳴っている。何者かが蹴っているようだ。そのうち、台所の窓ガラスが割られる音がした。窓の鍵を外すと、武装した迷彩服の兵士たちが次々に部屋に入ってきた。

「何をするんだ」

と、信吉が家族を護るように前に立ちはだかると、兵士の一人が、銃を至近距離からぶっ飛ばした。信吉の体は全身に赤い血痕がついて、その場にどっと倒れた。すでに息がないようだった。

「キャー、あなた」と、嫁が悲鳴をあげて信吉の無惨な姿にとりついた。

「パパに何をするんだよ」と、勇敢にも息子が兵士に向かっていった。刃向かうものはすべて射殺せよ。それが戦闘時の常識だった。小学生の息子も蜂の巣になって、吹っ飛ばすようにして倒れた。

「ああ、なんてことを」「いやあ、もう、いや」

老夫婦とも真っ青な顔でその場に座りこんで動けない。嫁は別の兵士に無理矢理、別室に連れ込まれていた。レイプされているのか、絶叫が聞こえていた。老夫婦は銃口をぴたりと頭につけられて身動きもとれない。孫娘はばあさんの後ろに隠れるようにして震えていた。外では、住民の悲鳴らしきものが聞こえ、飛行機の爆音から、銃声など間断なく聞こえていた。この家は、郊外だから、周りに民家はあまりない。

よく見ると、みんなK国の特殊部隊らしく、意味の判らない言葉を発していた。

と、今度は、玄関の方が騒がしい。ドアが破られ、どやどやと何者かが集団で入ってくる。やがて、居間にいたK国の兵士三人と撃ち合いが始まった。

「伏せて、床に伏せなさい」と、日本語が後ろからした。機関銃が連射され、侵入してきた兵士三人はその場に倒れた。辺りは血の海となった。

「ああ、あふあふ、あたあた」

老夫婦は怯えて、正気を失っていた。いまだかつて味わったことのない恐怖心で、体が硬直していた。

「もう大丈夫だ。われわれは自衛隊だ。この町は奪還した。敵はすべて殲滅した。だが、ミサイルが飛来してきている。どこに落ちるか判らないから、裏山の崖下に隠れていなさい」

放心しきった嫁はズタズタに引き裂かれた服を血まみれにして、隣室からふらりと現れた。安

心したのか、老夫婦は大声で泣き叫んだ。

「もういい、戦争なんかもう沢山だ」

その声を聞いて、死んだはずの信吉がむくりと起きあがった。

「本当ですね。戦争は反対なんですね」

「戦争は反対だ。こんな恐ろしいこと……。あれ？ おまえ、死んだはずじゃ……」

死んだ孫もむくりと起きてにたにた笑っていたし、殺された敵兵もいつのまにか、起きて煙草を吸っているではないか。

「ああ、みんな、町の劇団の友達なんだ」

第794話 戦慄の入学式

今年から入学式は変わった。随分と厳かな雰囲気になってきた。何か大事件でも起こるのだろうか、厳戒態勢の中で執り行われた。各学校には、警官隊が出動して、腕には赤い腕章をしている。ただの警官隊ではなかった。テロを警戒しているのか。それとも、何かとんでもないことが起こると通報が入ったのか。みんな、父兄たちはひそひそと不気味な警戒を話し合っていた。

「きっと、爆弾を仕掛けられたとかなんとか、そんなことかもしれないわよ」

「そうじゃなく、近頃、学校に乱入してくる刃物男がいるでしょう。そんなおかしい人たちを防ごうとしているのよ」

口々に、いままで見たことのない入学式会場に、父兄たちは緊張した面持ちで座っていた。

北見洋一郎は、妻の香奈恵と息子の中学の入学式に来ていた。昨日までランドセルを背負った息子が、学生服を着ると、何かおかしい。違和感があり、つい吹き出したくなる。いつまでも子供だと思っていたのが、きりりと詰め襟を着ると、少しはお兄さんに見えてくるから不思議だ。香奈恵は、子供の成長が少し淋しいと思う。だんだんと、親の手の届かないところに行ってしまうようで。洋一郎は、父親としてまた違った見方をする。はやく、大人になってくれればいい。そうしたら、共に酒を飲もうなど、成長が楽しみだった。

体育館の正面の壇上には、日の丸と校旗、そして、あれっと思う御真影が飾られていた。いつから、そうなったのか。よく会場を見渡すと、校歌の書かれた横額の隣に教育勅語の額まで飾られている。

「これから阿武内中学校の入学式を行います。国歌斉唱！」

と、教頭先生がマイクで叫ぶと、生徒と父兄は起立して、ピアノの伴奏に合わせて君が代を歌い始めた。北見夫妻の隣にいた知り合いの父兄は、考えるところあって、起立しないで、座ったままだった。ひとりだけ座っているから、目立った。

すると、そこへさきほど校門を警備していた赤い腕章の警官が二人、づかづかとやってきた。と、その座っている父親の前に立つと、何も云わずに、むんずと両腕を抱えるようにして立たせた。もの凄い形相で、警官はその父親を睨んでいた。それで終わりではなかった。その父親を

どこかへ連行するように会場から強引に連れ出したのだ。

「何をするんだ、離せ、このやろう、離すんだ。おれが何をしたというんだ」

それを見ていて、みんなの視線がちらちらと後方に向いていた。

そう云えば、今年から、国歌斉唱に対して、政府からかなり厳しい対応をすると云っていた。

北見夫妻は、露骨に顔に出して憤慨していた。

一酷いことをするなあ。起立を拒否した先生を処分したり、またそんな先生を監視する先生もいるという話は聞いていたが、まさか父兄までやるとは、しかも警官まで導入してだ。これは問題だ。

洋一郎は腹の中でそう思っていた。

そういう洋一郎も君が代は歌わない主義だったから、口を閉じていた。すると、今度は、づかづかと洋一郎の前に警官二名がやってきた。そして、無言で洋一郎を逮捕すると、両腕を捕縛するようにして、後方へと無理矢理連れていった。そんな父兄が四人はいた。みんなもがいていた。

「何をするんだ。何の権利があって、こんなことをするんだ」

「あなた」

と、香奈恵は後ろから駆け寄ってきた。それを制するように、警官が香奈恵を押し戻した。香奈恵は後ろ向きに倒れて、その場に泣き崩れていた。

そんなことはおかまいなしに、式は厳粛に進められていた。ますます、父兄は緊張して、次は何が起こるのかと、ただ、堅くなって座っていた。

連行された父兄たちは、後ろのドアから校庭の裏庭へと連れて行かれた。みんな目隠しをされて、いつのまにか手と足に手錠をかけられていた。まるで重大な事件を引き起こした罪人と同じ扱いだった。

「これは人権蹂躪だぞ。おまえらは大変なことをやっている。弁護士を呼んでくれ」

と、ある父親が叫んでいた。警官隊は、ずらりとジュラルミンの楯を構えながら、父親たちを楯で叩きながら、ダメージを与え、抵抗しようとする力を殺ごうとしているかのようだった。

いつのまにか、校庭の裏庭には丸太が四本建てられていた。そこに四人の父兄は引っ張られていった。目隠しされているから、何が先にあるのか判らない。そのうち、丸太にロープで体が縛られていた。それはいままでにない仕打ちだった。体の自由を奪うにしても、丸太に縛り付けるなど、どんな囚人にもないことだ。「こんなことして、あんたら警察を訴えてやるからな」

父兄たちはわめいていた。何を云われても、無言のままの警官たちは却って不気味だった。四人の父兄たちが、それぞれ柱に縛りつけられると、ざっざっと小石を踏んで、隊列をつくり別の警官隊がやってきた。手には狙撃に使うライフルが抱えられていた。そして、父兄から二十メートル離れた位置に整列した。

「ただいまより、君が代を侮辱した不敬罪により、四名を銃殺刑に処する」

洋一郎は驚愕した。

「嘘だろう。何かの悪い冗談だろう」

「狙え」

「馬鹿な、こんなことがあってたまるか」

「撃て！」

校庭に銃声が響いた。

「これで、入学式を終わります。全員起立。終礼！」

ピアノが和音を鳴らした。

第795話 ゴミソ

ゴミソとは津軽では神様のことを云う。わたしの古本屋の前の大家は店の二階に住んでいたが、やはり神様であり、いろんな人が訪ねてくる。その前の店の二階もアパートになっていて、店の真上の部屋に神様が住んでいた。八百万の神というのは本当かもしれない。町の至る所に神様が暮らしている。

アパートは風呂もないぼろぼろの安アパートで、廊下を歩くと床が沈んだ。床のコンクリの下が腐っていて怖かった。そんなところに暮らしている神様だから、たいした収入はないのだろう。神様という商売もさして儲かるものではないのだ。まあ、テレビに出て、本が売れ、芸能人や大会社の社長などを相手にして、しこたま儲けている神様もいるが、多くの神様は貧乏だった

。だいたい、見料みたいなもので喰っている。一人二千円から五千円が相場だ。つい昨日だ。うちの婆さんが、家売ってどこかへ引っ越しするということになれば、どこがいいかと神様のところにわざわざ訊きに行った。滅多に訊きに行くことはないが、当たるといふ評判の神様のところへ行ってみたいと、それで出かけたのだ。我が家はいま売りに出している。婆さんがだんだんと弱ってきていて、もっと病院の近い町中に引っ越そうと思ったのだ。それが、なにやら売れそうな雰囲気になってきた。

わたしは、あまり占いとか神様とかは面白いとは思いますが信じない。

「もし、ヤップ島に引っ越せとご託宣があれば、南の島に引っ越すのかよ」

わたしは、人間弱くなると、何かにすぎる気持ちは判るが、それを商売にする連中は許せない

。占いもどれほどインチキか、一度、朝のテレビの占いを各局を並べて比べたことがあった。その日の占いは、双子座はある局では一番、別の局では七位、そして十位と、ひどいバラつきがあった。もし、ラッキーカラーがピンクと花柄の服だったら、そんなのを来て仕事に行けるか。

「わたしに縁談が持ち上がるそうだよ」

と、朝から婆さんは嬉しがる。馬鹿な、八十三だ。

それで、婆さんが、訊きに行った神様はおとし当たりすぎて、中って死んだそう。タクシ一の運転手が無線で、仲間に他に当たる神様がないかと、問い合わせ、連れて行ったのが、これ神様ではなくイタコだった。

話を聞くと、そのイタコもなんだか怪しい。最初に家族構成とか、相談事とかを聞いて、頭に入れてから当たり前のことを告げたとか。予備知識がなくて、黙って座ればぴたりと当たれば、感心もするが、確認してからという念の入りようがおかしい。

イタコは死んだ祖母を降霊した。

「わたしゃ、よしじゃ。おまえの姑じゃ。どうして、引っ越しなどするのだ。いま住んでいるところにも医院はあるじゃろ。どうしても歩けなくなったら、施設に行け」

と云ったとか。イタコもたまにいいことを云う。でも、考えてみればさほど感心することでもない。当然のことを云ったまでだ。

イタコは、おまえの息子は将来、東京に住む。この町にはいないと告げた。きっと、商売が左前になり、夜逃げして、息子たちのいる東京へ行っているのか。いつか、うちの従兄弟で、日蓮宗の寺持ちをしている和尚が、家に遊びに来たとき、わたしの顔を見て、どきりとした顔をして云った。

「あんたは、五十過ぎると大成する。いまは両親が邪魔をしている。大変な相だ。おれも傍に一緒にいたいくらいだ」

と、真面目な顔で云うのだった。そう云われても、現在はじり貧でだんだんと落ちぶれてきている。よく当たると評判の従兄弟らしいが、どこまでも落ちてゆき、将来はホームレスで大成するのか。

ゴミソは、エズナという目に見えない動物を自在に使うという。エズナとは何か。ものの本にはイタチのような動物が、ホルマリン漬けになった写真がエズナだと載っていた。人を呪ったり、陥れるときもゴミソが出てくる。神様は悪いことも金のためなら平気でするようだ。

一度、団地に本の仕入に行ったら、玄関に神様の看板が出ていた。六十くらいのおしゃれに着飾った神様が、本を売りたいという。いい本もあったから、全部引き取る、見積もりはいくらいくらだと云うと、そんなに安いんですかと、売り渋る。あまり、イヤミを云うから、多分、うちが一番高いと思います。ブックオフなんか買わないでしょうよ、電話をまたしてきても、二度は来ませんから。と、わたしは捨て台詞をして、手ぶらで帰ろうとしたら、車で急に具合が悪くなった。神様の祟りなのだ。桑原、桑原。

店の二階の大家のところ客が訪ねてこなくなった。神様をやっているから、いろんなご婦人たちが見てもらいにきていた。よく、店の前を掃除していると、大家の神様が買い物袋を下げて、スーパーの売り出しから帰ってくるのだった。

「先着何名様に卵三十円だよ。ついでに白菜とトイレットペーパーも安くてね。チラシの目玉商品より買ってこないんだよ」

神様は辛抱だった。朝の開店と同時に並んで、スーパーの売り出しに突撃する。わたしは、大家に一度も自分のことを訊いたことはない。話していても普通の人だ。神様も不景気だった。ところが、客が来ないのは、どうやら近所の話では、当たらないという噂が立っているらしい。それで、客離れを起こしたというわけだ。

ある日、めかし込んだ大家が、タクシーでどこかへ行くところだった。

「お出かけですか？」とわたしが訊くと、

「ええ、ちょっと、神様のところへね」

わたしはてっきり、神様業界の組合があって、定時総会なんかもあるのだろうかと思った。すると、大家の神様は云った。

「わたしも年だから、この先、どうしたらいいか、神様のところに訊きに行こうと思ってね」
靈感のなくなった、惚けのはいった神様も大変なのだ。

第796話 純愛路線

冬ソナが凄い人気だ。特におばさんたちだが、おばあちゃんまでキャーキャーと見ている。わたしも、どんなものかと最初と最後だけはBSで見た。昔見た少女マンガのようなストーリーで、確かに画面は綺麗だし、韓国の役者さんも、好感が持てる。だが、見ていて恥ずかしくなってくる。考えてみれば、おじさんたちの見るドラマではないのだ。

美德のよろめきを三島が書いてから、よろめきドラマが流行る。ついこの前も、失樂園で不倫が大流行した。それは日本だけの現象ではなく、マジソン郡の橋という映画は、中国でもかなりブレイクした。別に珍しくもない浮気が、世界的に受けるというのもおかしかった。

ハーレークイーンなどは、どれもワンパターンで、恋愛をとうに終わったおばさんたちが、熱中して読んでいたのもつい昨日のことだ。内容はポルノ小説に近いほど、かなり露骨なものも多い。

若い女の子たちが、ヤオイ小説なるものをもてはやし、レズでは飽き足らなくなって、ホモ小説全盛期を作ったのも昨日のことだ。女性週刊誌のマンガや小説のほうが、男たちの読むフランス文庫より、遙かに猥褻だった。最近の売れっ子ポルノ小説の書き手は女性なのだ。もう、男の出る幕はなさそうだ。男が集まれば、そんないやらしい話はしないものだが、女同士は凄い会話になる。男の方が純情なのかもしれない。

そんな、汚れきった時代を経て、いま、また半世紀も前に絶滅したと思われる純愛が復活してきていた。おばさんたちには、娘の時を思い出させ、若い子には、見たこともない新鮮さで映り、冬のソナタはそんなときに出てきたのだ。

「これからは、純愛だよ。おまえの書くポルノ小説は古いんだ」

と、趣味で小説を書いている同人仲間からそう忠告された。わたしは、逢瀬夜梅という別のペンネームで、密かにポルノ小説を書いていた。ヨバイと読むように、夜這いの小説を書きまくった。だが、時代は純愛を求めている。新人賞で最終候補に残るものとして、やはり純愛をどこかに匂わせた小説がトレンドなのだろうか。

わたしは、ポルノをやめて、純愛小説を書こうと思った。だが、SMと、獣姦と、フェチと糞尿嗜好までありとあらゆる汚い世界を書いてきたわたしに、いまさらそんな綺麗な世界が書けるのか。いろいろと悩んだ。そうか、自分にもプラトニックラブの時代もあったのだ。それを思い出して書けばいいのだ。

一菜穂子は、健康的な小麦色の顔に白い歯を覗かせて笑っていた。こんな避暑地には、東京だけではなく、地方の財閥の娘も来ていると聞く。菜穂子は、少しの訛が北陸を思い起こさせた。

ぼくらは、松林のサナトリウムに近い木立の陰に座って、すでにお互いに中断していた学生生活のことなどを、とりとめもなく話していた。ぼくの手を少し伸ばせば、そこに菜穂子のスカートがあった。ぼくは、じわじわと手を這わせて、菜穂子の中に...

いかん、いかん、どうしてすぐそうになってしまうのか。これは純愛なのだ。昔、堀辰雄の小説に憧れた少年時代を思い出せ。

一菜穂子は、ぼくの知らない出生の秘密を告白した。

「ダメ、わたしたちは愛し合うことができないのよ。だって、腹違い、種違いの兄妹なんですよ」

菜穂子はそう叫んで、ぼくを拒絶した。シーズンオフの別荘の空家に侵入したぼくたちは、すでに夏が去ったことを黒いストッキングで知ることができた。

「菜穂子、ぼくは、麦藁帽子をかぶったノースリーブの素足の君が好きだった。夏が行ってしまうように、君も行ってしまう」

ぼくたちは、あまりに長い季を見つめあいすぎた。菜穂子、と、ぼくは、乱暴に押し倒した。ダメだ、ぼくは我慢ができない。君のブラウスのボタンを外して……。

いかん、いかん、どうしてもそうになってしまう。わたしには書けない。原稿用紙を書いては破り捨てた。屑籠がやがていっぱいになった。

あの、二十歳前の、女性を偶像化していた純粋な気持ちはどこへ行ったのか。いまは、ただ、にたにたといやらしい目で眺めているスケベな中年のおじさんだ。純愛なんか書けない。

ポルノを書きながら感じるものがあった。書き手はすでにレイプの加害者に感情移入して、理想の女を書きながら、犯してゆくということを主人公と共同行為として進めてゆくのだ。毎日、原稿用紙に向かいながら、架空の女を次第に愛するようになる自分がいた。それは、書き手でなければ判らない異常な性愛であった。事に及び思いを果たすことによって、完結できる小説も、その一歩手前でセーブしなければならない残酷さ。菜穂子という男を知らない少女と二人きりでいるのに、手も握れない。わたしは、むしゃくしゃして髪の毛を掻きまくった。

「おい、どうした。純愛小説は進んでいるか？」

同人仲間の友人に訊かれた。わたしの髪はボサボサ、目はぎらぎら。寝不足で苛々していた。

「それが、欲求不満でどうしようもない。頼む、脱がせるだけでもいい。そうさせてくれ」

「おれに頼んでも仕方ないけど、困ったな」

おじさんたちに純愛は無理がある。

第797話 第二創世記

人類が核戦争と大地震とウイルスと惑星衝突と水飢饉で絶滅したあと、人間だけがいない静かな地上に神が淋しそうに佇んでおられた。

すでに文明の欠片もなにひとつこの地上には残っていなかった。すべて人間の手で造られたものは人間の手で破壊されつくしていた。それをさらに掃除するように、火山灰が降り、地殻変動が海に沈めた。ビルも工場も道路もすべてが跡形もなく、塵となり飛散して、地球は太古の姿に戻ろうとしていた。

それでも神は孤独を癒すことはできないでいた。あの、愚かな人間をまたこしらえようとしていた。

「今度は、絶対に失敗はしないぞ。さて、土をこねくって、わしに似た人間を創ろうかい」

神は土からまた男をこしらえ始めた。それが似てもにつかぬ美男子にできた。映画スターのキアヌ・リーブスに似ていた。

「うん、わしに似ておるぞ」と、自己満足の神であったが、それが単なる理想であることを見てとった神は、まだ命も吹き込んでいない土の人間に嫉妬して壊された。

「人間が、わしより美しいなんて許せん」

神は、最初にお創りになられた人間がどんなものか忘れてしまわれた。それで、土の中に偶然埋められていた死体を発見すると、その男を蘇生させることで、新しい人間の誕生とした。

「まあ、面倒くさいから、手抜きじゃな」

その遺体はふたたびこの世に息を吹き返した。

「さて、今度は、この男のあばら骨から、女を作ろうとしようか」

と、男の体から骨を取ろうとして、愕然とした。

「な、なんと、骨がない！」

男の体をまさぐっていた神は、男には骨がないのを知ったのだ。

「そうであったか。どおりで、最近の男には骨のないやつが多くなったと思ったわい」

そこで、蘇生させた男をまた土中に戻すと、今度は、神は女からお創りになろうとした。

「うん、女は難しいのう。どうも、胸の出っぱりの形がよくない。やはり巨乳かのう。いやいや、どうも変な気になって困る」

と、神は涎を垂れながらも、一体の女をこしらえた。その尾てい骨から、今度は男をこしらえた。そうしたら、うまくいった。

「さて、名前だがな、前のようなアダムとイブなどと、不吉な名前はやめよう。しかも、一定の民族に偏った名前もよくない。国際的にするために、そうじゃな、男はシンノスケという名前にしよう。女は、クサンチッペがよい」

と、命名したが、どこかで聞いたことがある。しかも、その取り合わせは複雑な感じがした。

さて、新世界に命を与えられた男と女は、エデンの園に放された。そこは、永遠の命と若さと美貌が保たれる楽園であったはずだった。いや、楽園には違いない。少なくともクサンチッペには。

「シンノスケ！ 朝ご飯の果物を採ってくるんだよ。判ったわね」

いつものクサンチッペの罵声が飛んだ。男は女にアゴでこき使われていた。ここは男にとっては地獄だった。

「どうして、神はこんな不公平な男と女をこしらえたんだろう」シンノスケは嘆いていた。

それはそうだ。男は女の尻の骨で作られた。だから、いつまでも尻にしかれる運命を背負うこととなった。

男尊女卑の旧約聖書の世界が、いま逆転していた。女尊男卑の新しい世界がこれからの世界の基本になろうとしていた。

「どうして、おれだけ働かなけりゃならないんだ。自分だけ楽しんで、ぶくぶくと太りやがって」

ただ、面と向かって女に云えないのは、云えば殺されるかもしれない。そんな勇氣はとてもなく。男というのは、女のために食糧を採ってくる、そのために創られた生き物なのだ。

シンノスケが、ある樹のところに行くと、赤い林檎が実っていた。それを食糧にしようともぐと、枝を伝って蛇がやってきて云った。

「これは毒の果実なのだ。食べると智慧がついて、死ぬものになる」

それを聞いて、毒林檎で女を殺そうとした。この苦しみが永遠に続いてたまるか。

シンノスケは、クサンチッペに林檎を沢山持ってゆくと、女はあまりにも美味しそうに食べるので、どんな味がするのかと、シンノスケもつい嚙ってしまった。すると、二人とも、自分たちが裸であることを気が付いた。

「いや、どうしてわたしは裸でいるの？ いちぢくでもなんでもいいから葉っぱを採ってきてちょうだい」

女は、いままでのような横暴な声から、女らしい恥じらいのある声に変わっていた。

それを見ていた神は、わなわなと震えて怒った。

「なんてことだ。誘惑に弱い人間どもめ。また同じ轍を踏みやがって。歴史は繰り返すというが、愚かな人間はどうしても原罪からは解き放されることはないようだな。さあ、エデンの園から出て行け。おまえたちは、病気も貧困も飢餓も争いも味わうがいい。そして、死ぬ苦しみもな」

二人は楽園追放されて、荒野に降りて行った。神はふてくさったポーズで寝転んでおられた。

「くそ、ペットはペットのままが幸せなんじゃ。それが智慧という余計なもので、武装するから可愛くなくなる。これから、人殺しも盗みもするし、汚職も詐欺もするんだ。そして戦争も何千回となくやるじゃろう。最後に核戦争ですべてが滅ぶまで気が付かないのじゃ。もう、勝手にせえ。わしは知らん。もう人間なんかは創らんぞ」

神の創られた創造物で一番の失敗は人間だった。

第798話 活字が消えた

本を読む人がどんどん減ってくる。本が売れないから返本率は半分を超し、多くの出版社、印刷屋が倒産していった。

二十一世紀に入り、突如として出現した電子ブックも救世主にはならなかった。基本的に活字離れという習慣は、時代の趨勢であり、誰にも止めることはできないのだった。

「わたしゃ、五十年この方、本なんか読んでこなかったけど、それでも暮らしにゃ全然困らなかつた」と、どこかの婆さんが云うように、いまや、本を読むという行為は学校でもなくなりつつあった。教科書がパソコンのモニター上のテキストファイルになってからは、紙の印刷物としての教科書が消えた。当然、子供のときから本を読むということがないから、本が何か知らない子供たちも増えていた。

新聞も消えた。新聞ですら読まなくなったので、最初の頃は、テレビのモーニングショーで、新聞を読んで視聴者に聞かせているという愚行までしていた。そうでもしなければ、新聞記事に関心も寄せてくれないのだ。すべてテレビが悪かった。一億総白痴は確実につくられていた。

本が流通しないから書店というものも絶滅して久しい。週刊誌もだんだんと活字を減らして写真だけにしていたが、ついに発行部数が激減して、採算割れすると、姿を消した。マンガ本まで形態が古いのと、やはり読むという行為になじめないので、姿を消すこととなった。

メールもだんだんと漢字を使わなくなり、かなまで使うのが億劫で、ついに絵文字だけでやりとりすることになった。知らない人を見ると、それは古代の象形文字のようだろう。

とにかく、この世から文字が消えようとしていた。人々は手紙も書かなくなったから郵便局の仕事も減った。社内文書や公文書まで、絵文字が認められると、 (^_^)(^^)/~~~(?_?) (@_@)(*_*)=(=_)_(^_)_(.)_^^;(^_^)v:-(-);(:;)(-)(^^)m(_)mc▽〒♂♀というような顔文字が氾濫するようになると、すでに昭和前半生まれはついてゆけなくなっていた。何が書いてあるのか、さっぱり判らない。意味不明の言語が若者言葉だけでなく、新しい日本語として認めざるをえなくなってくると、古来から使われてきた日本語そのものが消えようとしていた。

国語審議会が何年にもわたって、審議を重ねてきたが、すでにそのメンバーの中にも絵文字顔文字で汚染されている若手も出てきて、大正生まれどころか昭和一桁も死滅すると、戦後生まれが人口の大半を占め、逆に漢字の読めない書けない世代が圧倒的になると、文部科学省は、世の流れを変えることはできずに、ついに日本語を全面改革することになった。

それだけでなく、アメリカとイギリスの英語圏が、英語のグローバル化を押し進め、他国に英語を強要することによって、世界を支配しようとする戦略が功を成し国際公用語だけでなく、世界中の教育文化経済の標準語となると、看板もパッケージもすべてが、英語か絵文字で用が足りるようになった。

文学全集などいまは読むというか、読める人がいないので、電子ブックの中のファイルでは、夏目漱石の三四郎も、絵文字顔文字に「翻訳」されていた。漢字の持つ、情緒や、心象、意味のニュアンスといったことがすべて失われて、ただ、おふざけ文化が定着してしまったのだ。

街中を見回しても、とうとうどこにも昔の日本語を見つけることはできない。ところが、地方都市の片隅に、いまだに漢字で看板を掲げている古びた店があった。「林語堂古本店」と、その傾きかけた店の前に文字が掠れて、なんとか読めるような、化け物屋敷ではないのかと疑いたくなるような店があった。

「ママ、あのお店って、気持ち悪いね。なんて書いてあるの？」

と、小学生の娘が母親に訊いていた。

「さあ、なんて書いているんでしょうね。ママも学校で確か、古文の時間で漢字は習ったけど、忘れちゃったわ」

昔の日本語はすでに古文、漢文の世界なのだった。現代語訳しなければ読めないところまできていた。

林語堂古本店だけが、唯一、本というものを売っている。若い子たちが、時折、不気味そうに覗いてゆく。

「なあに、これって、何なの？」

「ばっかあ、あんた、知らないの？ 歴史の時間に習ったでしょう。確か『本』って云うんだよ」

「何に使うものなの？」

「さあ、昔の人の枕かなあ」

そんな時代にも、年取った店主は、少ない年金をもらいながら、細々と営業していた。たまに買いにくる人は、本を骨董品として買ってゆく。読むためではなく、置物、飾り物として買ってゆくのだ。

そんな古本屋に、ある日、政府の偉いさんが数人訪ねてきた。

「北村さんですね」

「はい、げほげほ、最近、体を壊して、店に座っているのも大変でしてな」

「それはそれは、おいくつになられましたか」

「はい、数えで九十九になりました」

「それでも、現役で働いてらっしゃる。たいしたものですよ。今日、お伺いしたのは、この店ごと国の重要文化財として保存したいと、申請がありまして、それで調査に伺ったわけです」

「そうですか、とうとう、そこまできましたか」

「いまだに、古本屋という商売をなさっているのは、全国でもここだけですからね、これは貴重ですよ」

文字は博物館に入り、書店なきあと、古本屋も保存される。北村はこれで役目が済んだと、その翌年、ひっそりと亡くなった。

第799話 紫キャベツ

ぼくは、学生時代から、金がなければ、歌にもあるように、安いキャベツをスーパーで買ってきて、それを千切りにすると、トンカツソースをどろりとかけて、むしゃむしゃと喰うのが好きだった。それだけで腹は一杯にはならなかったが、何か幸せな気持ちにはなった。もし、その脇役だけではなく、コロッケの一個でもあったら、これほどの贅沢はない。

社会に出てからも、貧乏学生の癖は抜けずに、みんなは外食やコンビニ弁当ばかりで夕食をとっていたのに、ぼくは、そんな無駄なことはしないと、ちゃんと、味噌汁を作り、ご飯を炊いた。おかずは、いつも納豆とコロッケだった。それに山盛りの千切りキャベツを飽きもせず、毎日食べていた。

ある日、スーパーで気取ったキャベツをみつけた。ぼくの好きな紫色のなんとも高貴な、それでいて、艶っぽい形の紫キャベツだった。ぼくが、紫色を好むのは、女子高生に憧れた少年時代からで、セーラー服の紺色によく似合うスカーフが紫だった。可憐な少女を水彩風に描いたポスターも部屋に貼っていたが、それが紫色をぼかしたところに、紫陽花が添えられていた。ぼくにとって、紫でも薄紫は、たまらない女性の色となっていた。そんな服装だけでなく、車が走っ

ていても、すぐに振り向いた。

それで、いつもは高い紫キャベツを一度は買ってみようと、ほんの百円高いだけなのだが、勇気を出して買い求めた。見れば見るほど惚れ惚れとする形と色あいだ。

ぼくは、何か恋人に遭遇したようなときめきさえ覚えたのだ。そのキャベツをどうやって料理してやろうか。それは、まるで処女を犯すような怪しい気分だった。

ぼくは、一人暮らしのアパートに帰ってきた。今日は、見たいドラマもあったし、給料が出たから、ワインも買ってきていた。なんとなく、独身の自由な生活の匂いに満ちている部屋。まずは、音楽からだ。バーデン・パウエルギターを流しながら、ぼくは紫キャベツをまな板に載せた。さあ、彼女、どこから切ってやろうかい。と、ぼくが、まさに庖丁をあてたときだ。

「やめて、わたしを食べないで」

と、どこからか声がした。音楽CDからではない。テレビも消してある。それは、生々しい若い女性の声だった。ふたたび、庖丁をキャベツに立てると、

「痛い、お願い、許して」というそれはそれは色っぽい声だった。明らかにキャベツから聞こえていた。

「なんだよ、おまえ、キャベツのくせに話をするのかよ」

「そうよ、わたしはたまたまキャベツに生まれてきたけど、あなたと逢えてよかった」

なんともセクシーな声だった。声美人とはいうが、まさに声だけ聞いていてもゆきそうになる。ぞくぞくする声は、発音も綺麗だし、聞いていてうっとりとしてくる。

「それじゃ、食べないでおくよ。でも、みずみずしくて美味しそうだけどな。嚙れば、しゃきしゃきしていそうだ」

「ダメよ、あなたの口に入るのは最後でいいの。それはきっと最高のエクスタシーだわ。美味しいことはとっておきましょう。それまで、あなたとお話しがしたいわ」

ぼくは、なんとも奇妙な紫キャベツをテーブルの上に置いて、ワインを呑みながら、キャベツの千切りのない皿の上にぽつんと淋しそうなコロッケを切り分けて食べていた。

「ドキリとするような声だな。キャベツにしておくのは勿体ない。多分、人間の姿なら、絶世の美女なんだろうな」

「あら、いまのわたしだって、こんなに清純な色をしていて、スタイルだっていけると思うけど」

「そうだよな、ひょっとして、君の葉を剥いてゆくと、中から美女が出てくるんじゃないだろうね」

「そんな、タマネギさんもそうだけど、わたしたち野菜はみんな洋服を重ね着しているようだけど、それが肉体なのよ」

「肉体というような言い方はやめてくれよ。もう、君の声を聞いているだけで鼻血が出そうだよ」

ぼくは、酔いもあったが、その信じられない紫キャベツとの出会いを、何か熱い思いが吹き出てくるように胸を詰まらせていた。こんな気持ちになったのは、久しぶりのことだ。いままで彼女がいなくて、淋しい思いをしていたのが、今夜からは一人ではない。

ぼくは、たまの日曜だから、紫キャベツを抱いて、デートに連れて行くことにした。ぼくは、

彼女ができれば、絶対に連れてゆこうと決めていたベイブリッジ脇のレストランで、客船を眺めながら、食事をしていた。

「お一人様ですか」と、ウェイトレスが訊くから、

「いや、二人だ」と、紫キャベツを隣の席に座らせた。そうして、二人でとりとめもないお喋りをする。他の客は、ぼくが独り言を話していると思って、ちらちらと気味悪そうに見ていた。

そうして、ぼくたちは港を眺めながら、公園を散歩していた。そこへ、ぼくの会社の同僚が彼女とデートか、ばったりと出くわした。

「おい、なんだよ。昼日中から、キャベツなんか抱いてよ」

ぼくは、むっとして云ってやった。

「これは、ぼくの彼女だ」

すると、あいつ、ぼくが気違いだというふうに、天を向いて絶望の表情をすると、行ってしまった。遠くから笑い声がした。

そうして、ぼくは毎日同棲生活をするように、紫キャベツとの秘密の甘い夜を過ごしていた。もう、何もする気がしない。それはいままでしたことのないかなり重病の恋なのだ。

「なあ、このままでもいいが、ぼくは、君のすべてが欲しくなったのだ。結婚しよう。そのほうが、君も安心していただけるだろう」

「嬉しい。そう云ってくれるのをどこかでずっと待っていたのよ」

「そうだよ。確かな証として、ぼくたちは夫婦の契りを結ぶのだ。さっそく、ぼくの両親に逢ってくれるね」

「でも、わたし、なんだか自信がないわ。あなたのご両親、なんと云うかしら」「いいんだよ、ぼくがよければそれでいいんだから」

数日して、ぼくは車で、田舎へと紫キャベツを連れて行った。高速道路で三時間もかからない。電話で、結婚したい相手を連れてゆくと、両親には連絡しておいたので、その日曜日は、そわそわして両親とも、家で待っているらしかった。ぼくは、彼女に実家を見せた。

「古いけど、昔は大宅だったから、家は広いんだ。ぼくはここで生まれ育ったんだ」

「わたし、緊張するわ。でも、反対されたらどうしよう」

「黙ってついてこればいいんだ」

ぼくは、紫キャベツをしっかりと抱きかかえていた。

「それで、おまえは、そこのキャベツと結婚したいと云うんだね」

座卓に向き合い、ぼくの隣の座布団にちょこんと座っている紫キャベツをじっと見つめながら、父と母は茶をすすっていた。

第800号 何が彼女をそうさせたか

国道を走っていた車があった。派手な赤いポルシェだから、ただでも目立つのに、いきなり猛

スピードで走り出した。通行人もドライバーも、みんなの視線がその車を追っていた。運転しているのは、車に合わせた赤いワンピースにスカーフを首に巻いたサングラスの若い女性だった。制限速度五十キロの道路を八十以上は出していた。しかも、運転がヘタなのかうまいのか、前を走る車を次々に追い抜いてゆくのはいいが、それがすれすれで、慌てて避けようとする車同士が接触したり、横転したりして、かなりの被害が発生していた。

そんなことにはおかまいなしに、赤いポルシェは蛇行運転のようにくねくねと車の隙間を縫うように走っていた。白バイがその暴走する車を発見して追いかける。通報を受けたパトカーも各地から駆けつけて、追跡に加わった。

これが街中であれば、もっと大変な混乱を生ずるのだろうが、たまたま民家もない郊外だったから、まだよかったのだ。前方の車は、みんな救急車が来たときのように減速して車を両脇に寄せて道を空けていた。その真ん中をカーチェイスでもするように、赤いスポーツカーとパトカーの追いかっけこが始まっていた。上空では、マスコミのヘリコプターまで出て、取材のカメラを回し、空の上からスクープを狙っていた。

「赤い車、止まれ。止まるんだ。」

パトカーはスピーカーから命じたが、女の耳には何も聞こえていないようだった。女の目には何も見えていないようだった。周囲が見えないほど、女は急いでいた。汗さえ垂らしていた。額も首筋も濡れているのが見えた。そして、いまにも泣き出しそうな顔で、紅いルージュを塗った唇が微かに震えている。

ヘリコプターは中継に入っていた。

「凄いスピードで走っております。一般国道で百キロは超えているようです。すでに五十キロオーバーですから、それは逮捕、免許取消ということになります。しかも、スピード違反だけではありません。信号無視、進路妨害、一時停止違反など数え上げればきりがなほどの違反が加算されています。乗っているのは女性のようなようです。しかも、高級車のスポーツカーを乗り回しているのは、相当な資産家かもしれません。何があったのでしょうか。逃げなければならぬ理由があるはずですよ。車を避けようとして、路肩に突っ込んだトラックやバス、自家用車など多数に及び、すでに怪我人の収容に当たっております」

やがて、車は中核都市の郊外までやってくると、ようやくドライブインやパチンコ店、ガソリンスタンドが見え始めた。パトカーよりも走りの性能ではポルシェが勝っていた。なかなか追いつけないでいた。なんとしてでも、街に入る前に止めなければ大変なことになる。街の入口では非常線まではられていた。暴走車を停止させるために、緩衝材でバリケードを組み、数台のパトカーまで国道を閉鎖して待ち構えていた。

暴走車の捕獲、女の逮捕は時間の問題だった。ところが、それを事前に察知しているかのように、女の車は郊外型のスーパーマーケットの駐車場に入って行った。それもあまりのスピードなので、ハンドルを切ると横滑りして、車はスーパーの店頭のガラス面を突き破り、店内のサッカー一台に当たって、ようやく止まった。車はフロントがめっちゃくちゃになったが、女は無傷で、車から降りると、おろおろした様子で、足踏みをしていた。自分がいままで何をしたか、そんなことは思ってもいない様子だ。

そこへ、警官たちが雪崩こんだ。手には全員拳銃を構えている。ここまでして逃走するのは、

大変な犯罪を犯したやつに違いない。銃器ぐらいは持っているかもしれないと判断した。それで、ひとりの警官が女の背後から組み付いた。女は、目立つ赤い服装だから、すぐに発見される。「いや、何をやるのよ。やめて、大変なときに」

そう云うと、女は警官から拳銃を奪っていた。それは、無意識でしたことだった。拳銃を手にしたまま、女はレジ係の店員に何かを訊こうとして近づいた。手に拳銃を持っているから、みんな悲鳴を上げて、逃げる。

「どうして逃げるのよ。時間がないのよ。急いでいるの。お願い、待って」と、女は何の気なしに引き金の指に力が入った。すると、拳銃が発砲され、ガラスケースがもの凄い音とともに割れた。買い物客たちは、キャーと逃げまどう。警官たちも警戒して、身を伏せたまま女を包囲していた。みんなこんな捕り物は初めてのようで、がたがたと震えているのだった。

女は、何かを訊こうと、人に近づくと、みんな泣きながら、逃げてゆく。女は困った顔をしながらも、目で探していた。すると、あるサインを見つけた。

「あった。あったわ」

苦渋の顔をしていた女にようやく明るい顔色が出てきた。その一瞬の油断を警官隊は見逃さなかった。四方八方から女に飛びついて、女は、警官たちによって、もみくちゃにされ、拳銃を取り上げられ、手錠までかけられた。

「ただいま、突入した警官隊が、犯人の女を逮捕したようです」

マスコミの中継車が駐車場からカメラで生中継していた。すごい野次馬でごった返していたし、上空ではヘリが旋回して、この捕り物の一部始終を全国に放送していた。

女は急に号泣しだした。

「どうして、みんなして邪魔するのよ。わたし、トイレに行きたかっただけなのに」

女の足下には水溜まりができていた。

第801話 漂流家族

家族はバラバラだと愚痴を云ってみたところで、最近の家族はみんなそうらしいから、我が家だけではなさそうだ。一見、まとまった家族のようで仲がいいと近所で評判の家庭でも骨肉の争いで、死人が出たりする世の中だ。何か事件が勃発してから、あんないい人がとか、あんな暖かい家庭で凄惨な事件があるなんて信じられませんかとニュースではたびたび出てくる言葉だ。

女房とは以前から離婚の話が出ていた。

「あああ、あなたはいいわね、毎日寝ていられるものね」

と、女房の愚痴がまた始まった。

「仕方がないだろう。おれだって、することがないから寝ているだけのことだ。仕事があるならしたいさ。そうだろう。毎日が日曜日のようじゃ、体もなまるし、このままじゃ、ダメになるっていつも思っているさ。だけど、どうすることもできないだろう」

「それに、短歌だか俳句だか判らないけど考えてばかり。こんな大変なときに気楽でいい身分ですこと」

「じゃ、何をしろというんだよ。毎日が退屈で、せめて趣味の文学ぐらいやらせろよ。別に金がかかるわけじゃない。紙と鉛筆がありゃいいんだ。悔しかったら、おまえも何かやれよ」

「あなたと離婚したらね。子供が社会に出るまでは仕方なくいてあげるわ」

「望むところだ。おれだって、いつでも離婚届にハンコは押してやるぞ」

「あら、じゃ、いま押したら？」

「ばか、できるわけがないだろう」

「ほら、やっぱり、わたしを無給の女中代わりにとでも思っているんでしょ」

女房はいつもそうだった。くよくよと考えるタイプだから、将来に悲観する。わたしは、なるようにしかならないと、ケ・セ・ラ・セラだ。

女房のすることなすこと、姑は嫌う。

「また、魚かい。昨日も魚だったし、おとといもだよ」

年寄りには食べ物にうるさい。

「婆ちゃん、何云っているんだ。魚だけでも食えるのは幸せってなものだ。ついこの前まで、鳥インフルエンザがあったときは、鶏肉なんか食べないって云っただろう。その前は牛肉を食べないって。それで魚が飽きたって云ったら、後は何も食べるものがないんだよ。贅沢を云ってもらっては困る」

「おや、いつも嫁の肩ばかり持って、そうかい、わたしたち老夫婦、どこか老人ホームへでも行こうかい。その方がすっきりするようだしね」

年とると僻みっぽくなり、構ってもらえないことが我が儘に走る。まるで子供と同じだった。

中学の息子はなんにもしない。手伝うこともない。

「おい、学校には何週間も行っていないんだろう。せめて、勉強ぐらいしたらどうだ」

「けっ、勉強たって、何をすりゃいいんだよ」

「そうか、ここじゃ、家庭教師がいるわけじゃないしな。どれ、お父さんが、問題を出してやるから、それを解いてみろ」

「いいよ、宿題があるわけじゃなし、試験があるわけじゃないし、第一、学校に行っただけなのに、かったるいんだよな」

いつからか、息子は悪い仲間と遊ぶようになってから、不良になっていた。

高校の娘も、だらしが無い。何も手伝おうとしない。

「洗濯ぐらい手伝ってよ。結構これが重労働なのよ」

と、母親に云われて渋々と手伝う。最近の子供たちは進んで家のことを手伝おうとしない。ぶつくさと文句をいいながら、ようやく手伝うというあんばいだ。じいさんだけが、ただひとりボケているから、扱いは大変だが、文句だけは云わない。

「危ない。ちゃんと、じいさんを見ていろよ。徘徊して行方不明になったら大変だ。落ちたら、それこそ、死んでしまうんだぞ」

娘と息子にじいさんの世話を頼んでいた。

「なんで、わたしたちが介護をしなけりゃならないの。こんな、テレビもビデオもパソコンもないし、ケイタイもないところで、じじいの世話と、勉強しろっていうの？ もう沢山よ」

とうとう、娘まで造反しだした。みんな自分のことばかり考えている。これが家族だろうか。家族って何だろう。わたしは、こんな生活はもううんざりしていた。来る日も来る日も、みんなの文句を聞きながら、目的もなく、ただ、流されてゆくだけの生活。

「もう、何日、こうしているの？」娘がヒスを起こしていた。

「わたしも、こんなところ早く出たいわ」女房も投げやりに云った。

「それは、おれだって同じだよ。こんなところにいつまでもいたって仕方がない。周りは海ばかりだし、陸地が見えない。大津波で、家ごと流されて、もうひと月は太平洋を漂流しているんだ。誰が、好きこのんでこんなところにいるものか」 六人家族はかろうじて屋根が筏のようになり、それに乗って漂流していた。喰うものは魚よりない。あとは、船に発見されるのを待つだけだった。

第802話 医療ミス

医療ミスと騒いでいるが、何もいまに始まったことではない。江戸の昔から、藪医者之家に殺気立ちと川柳に詠まれているように、人間のやることだ、多かれ少なかれミスはある。その場数で腕を挙げる職業だから敵わない。キャリアを知らないで執刀されると、昨日、入ったばかりの新米の床屋の見習いが、顔を剃るときのように緊張するが、そんなことは命がかかっているから、病院も教えてくれない。体のいい実験台にさせられるのだ。北村医院(仮名)も、医療ミスが多いが、そんなことは多くは判らないから、隠すものは隠して知らん顔をしていた。大概の病院は内部告発か、よほど明確なミスが遺族に摘発されて、発覚するのだが、看護師たちも待遇がいいから、ひとりふたり死んでも、ほおっかむりしていた。

院長の北村は、病院の二代目だが、出来はよくなく、ようやく裏口入学で医学部に入ると、やっとの思いで医師の資格をパスした。医者の子必ずしも医者になれるとも限らない。そこに無理がある。

「先生、この前、手術した患者さんですけど、また患部が腫れてきたそうですが、どうしましょうか」

看護婦長が、院長のところに訊きにきた。

「なんだ、あの患者か、これで二度目じゃないのか。困ったな」

「大学病院に回しましょうか」

「いや、待て待て、そんな金蔓をみすみす逃すこともない。それでは、もう一度診てみよう」

診察室に腹の膨れた患者が苦しそうに坐っていた。

「先生、何か、おなかの中に入っているようで、異物感があるんですが」

「それじゃ、レントゲンを撮って調べてみましょう」

患者はすぐにレントゲン室に入れられた。

「先生、大変です。おなかの中に歯が生えています」

「君、馬鹿なことを云っちゃいかんよ。口の中と腹の中じゃ……」

と、院長がレントゲン写真を見て、喜んだ。

「なんだ、こんなところにあったのか。あれほど捜してないないと思っていたのが、君い、こんなところにあったのか。ははははは」

「先生、なんなんですか、この不気味なものは」

「不気味とは失礼な、これは、わたしがなくした入れ歯だよ。そうか、手術に夢中で、外れたの知らないでいたんだな」

「あのう、患者さんには、なんて説明すれば……」

「いちいち、本当のことは云わんでよろしい。適当に説明しておくから。すぐに手術の準備だ」
ということで、入れ歯を取り出すための手術が行われた。患者は何も知らない。

「先生、また何か、忘れてらどうしますか？」

と、助手が心配そうに訊いてきた。この病院では、手術のときに、いろいろと、腹の中に忘れ物をするので有名だった。脱脂綿などまだいいほうで、カンシからメス、針からタワシまで入れたまま傷口を塞いだ経緯がある。

「また、再度手術をするのは面倒だな。そうだ、いい考えがある。わたしに任せなさい」

手術は無事に終了した。患者は、三日も入院すればいい。

いよいよ、その患者の退院の日、腹に巻いた包帯を取るところだった。

「先生、抜糸をするんですか」と、患者は明るく訊いた。

「いや、もう縫合したり抜糸したりしなくて済むようにしてあげましたから」

包帯を取ると、腹にチャックが付いているではないか。

「おたくは、三度目の手術でしたでしょう。これからは、手術をしなくてもいいように、チャックを付けてあげました。開けてごらんなさい」

患者は怖々と、チャックを開けた。なんと、自分の腸が丸見えだった。

「ほらね、便利でしょう。開腹手術をする必要がありません。今度、何か、悪いところがあったら、いつでも覗けますからな」

という、恐ろしい病院だった。

診察ミスで、手遅れになった患者も担ぎこまれてくる。早期発見を見落としたのだ。ただの風邪ですよぐらいで何度も通院させていた。それが検査ではかなり進行している悪性腫瘍。看護師たちはおろおろしていた。家族たちは、もの凄い剣幕で、くっつかかっていた。

「先生を出してください。ただの風邪が、長引くと思ったら、薬が効かないどころか、死にそうじゃないですか。こんなに痩せてしまって」

もう一度精密検査をしたら、確かに悪性の末期だった。困った。どうしようか。ここまできたら、手の施しようがない。と、北村院長は青くなっていた。

「でも、先生、もはや、ごめんなさいでは済みませんよ。このことが世間に知れたら、この病院は患者が来なくなり、倒産です。なんとかしてください」

看護婦長が、気弱になっている院長を叱咤するように、迫っていた。

「わ、判った。とにかく、手術だ」

どうせ、切ってみたところで、無駄だとは思いますが、そんなことを家族には云えない。なんとか、手術のフリだけでもしなくてはいけない。そして、手を尽くしたが、後は本人の生命力でしょうとか何とか、ごまかそう。と、院長はいつもの手を使うことにした。

緊急に手術が行われた。どうせ、死ぬ患者なんだ。適当にやろうと、院長は、景気よく、ぶちぶちと患部を切りまくった。もう、人間としては見ていない。命の重さもへったくれもない。金だけ取ればいいのだ。

投薬も、もうどうでもいいように、普段は使わない、薬までチャンポンにして患者に施した。

「先生、いいんですか。こんなめちゃくちゃな薬を使用して」

「構わん、構わん。薬一滴が、君、すべて利益だよ」

いままで、失敗して殺された患者は数知れず、ここの病院にかかったのが運のつきだった。

数日して、患者の容態はよくなっていた。

「先生、不思議です。患部がすべて綺麗になっています。一体、どんな手術をされたんですか」

死にそうな患者がめきめきと健康になってきた。手遅れだと思っていた家族は大喜びだった。

「ひょっとすれば、先生の治療や手術が、画期的なものだったかも判りません。どうなすったか、思い出してください」

そう云われても、全然覚えていない。何の薬と何の薬を調合したのかも、適当で慌てていたから覚えていない。

藪医者が、患者を救った。その評判は町に広まった。

「まあ、たまにそんなこともあるだろう」

北村はめげたりしない。いつも前向きだった。

「先生、おなかの中で、音楽が鳴っているという患者さんが見えましたが」

「今度は、何を忘れたんだ？」

いつまでも賑やかな北村医院であった。

第803話 将来の夢

将来の夢と訊かれるのは、二十歳前ぐらいまでだろう。「大きくなったら何になるの？」と訊かれるのも、子供のうちだ。だが、わたしには五十過ぎても、将来の夢がある。

「大きくなったらやることがあるんだ」

と、この前も友人に云ったら、

「どこが大きくなるんだよ。おまえ、背丈が去年より一センチ縮んだっていうくせに。年と共に縮むんだよ。まあ、腹だけは大きくなるよな」

と、互いの腹を触ってみたりした。

「いや、将来の夢のことだな」

と、訂正すると、友人は笑って、

「なんだと、将来なんかあるのかよ。もう八割は終わっている人生だぞ。もう、この先、何ができるっていうんだ。あとは、老後というか、余生が待っているだけなんだ」

酷く現実的なやつに失望していた。これから、わたしはあと、五十年は生きるつもりだ。まだ半分残っているのに、仕事だけを考えて、あと数年で普通なら定年退職だから、リタイヤしてのんびりとした老後を送ろうとか、そんなあたりまえの設計しか考えていないやつに、話すほうがまちがいであった。

先が見えてきたからこそ、人生が読めてくるし、秒読みも、計画も建てやすい。しかも、子供たちもそれぞれ所帯を持ち、老父母を見送り、自分の責任がすべて終わり、一人になったら、それから本当の自分の人生が始まるんだ。

あっ、女房がまだいた。まあ、そのころになれば逃げられていないかもしれない。

普通なら、六十で定年なのだが、自営業のわたしに定年はない。いつ商売を止めてもいいし、働けるなら立てなくなるまで店番はできる。だが、あと十年と考えていた。変動がありすぎる商売だった。古本屋というのも、世の中の景気に関係なく、どんどんと衰退してゆく。本を読まなくなったから、新刊書店がここ十年で三割以上潰れて、二万店を割ったのと同じで、次々と廃業している。ここ三年でも、この街の古本屋は半分以下になった。生き残って、細々とやってゆくこともできるが、見切ることも考えていた。

六十からの大学院の歩き方という本が入ってきて、読んでみると面白い。六十過ぎて、それから何を勉強するのかと笑われそうだが、巷では定年退職してから、自分ができなかった学問をもう一度、やってみたいとする老人たちが多し。いまさら学んでも、なかなか頭に入らないかもしれないが、楽しみとして若い人たちに混じって、もう一度キャンパスを歩いてみたいというのは夢だろうか。

ボランティアをするというのも、いまはできない。毎日の稼ぎでかつかつ喰っているから、余裕はまるでない。ボランティアをしている人が裕福に見えて、羨ましくも思えた。いまだあくせくと休みもなく働いている自分がみじめに思えてくる。あんな余裕があったら楽しいだろう。

それも、六十三からするのだ。なんだってできそう。学生時代は親の脛を齧っていたし、生活は考えなくとも食えるから、自由な時間と共に、旅行なんかもしたし、学生運動からアルバイト、旅行や恋愛とやりたい放題。それが、社会に出て、結婚し、子供ができて、マイホームのローンとなると、仕事と生活に縛られて身動きがとれない。老後は、また学生時代のように、なんでも出来そうな気がする。

最終目的は、南の島だ。どうも、無人島に行きたい症候群というのが、あるらしく、これはちゃんとした現代用語にもあるくらい、現代人のひとつの病気であるのだ。そのための準備もする。タガログ語を覚え、持って行くものを揃えてゆく。電気もガスもないから、デジタル機器はいらぬ。そうした生活にもビリオドを打たねばならない。漢方薬や、和紙や墨、麻や綿といった反物、いろいろとリストアップしてゆく。

将来は、子供らと一緒に暮らさないと決めた。わたしが大変な思いをしているのを、子供た

ちにも味わいさせたくはない。どうせ、ボケたり、動けなくなったりして迷惑をかけるのは目に見えている。

「そんな、病院もない南の島に行って、病気になったらどうするの？」

と、心配してくれる友人。

「大丈夫だよ。ちゃんと、呪術師というものがいる」

這ってもできることは、自分です。それができなくなると、野垂れ死にだ。姥捨山のように自分の死に場所をいまから探しておく。

笑われるような話だが、夢はいつも夢として逃げ場所を用意していた。もうじき、五十半ばになる。そろそろ老後を考える射程距離に入ってきた。

第804話 花見ごろ

花見に、このところ行ってない。花見より人見になるからだ。押すな押すなの人混みで、人の間からちらりと桜が見える。露店と、カラオケ、見せ物、酔っぱらい、ケンカ、反吐、そうした喧噪の中で、花見とは情緒がなさすぎる。

それはそれで、昔からの花見のスタイルだから、お祭好きの日本人は好む。花の下で浮かれ騒ぎ、後は、ゴミの山。

そのゴミをバッテリーを備えた掃除機を肩から担ぎ、吸い込みながら清掃している犬を連れた老人がいた。

わたしは、仲間と久々の花見に、海浜公園の桜祭に出かけていた。

「へえ、あんなふうにはパーキュームみたいな掃除機で、ゴミを吸っているんだ。市の清掃職員なのかな」

すると、老人を噂で知っていた仲間が教えてくれた。

「職員なわけないだろう。じいさんだぜ。あの人は立派な人だよ。毎日来て、ボランティアでやっているんだ。善行表彰ものだな。それに、吸い取ったゴミを後で、ちゃんと分別して、燃えないゴミ、リサイクルに出せるペットボトル、アルミ缶、生ゴミなんかは別にして燃やして灰にしているらしい」

「そこまでやっているなんて、感心だな」

「それだけではないんだ。燃やした灰を枯れた桜の木の根本に肥料として撒いている。じいさんの世話した木はまた元気を取り戻すというんだ」

「なにかい、樹医さんの資格でも持っているのかよ。それにしても、花を見て食べかすを捨てて行った心ない人たちのゴミを灰にして、また花を咲かせるか。それこそ、リサイクルの思想にぴったりだな」

というわれわれだが、果たして吞んで喰ったあとのゴミは持ち帰らなかった。山では、ゴミ箱はないから、ゴミは持ち帰らないといけない。公共の公園にはゴミ箱があるから、みんなそこへ捨てている。期間中は、ゴミ箱が見えないほど、盛り上がっている。カラスがやってきて喰い散らすから、また大変だ。ゴミのぽい捨ても目につく。酔っているから、その辺に置いて帰る人も多い。

花とゴミはなんとも対照的だ。綺麗なものと汚いもの。それをする人もまた、人ゴミとゴミに見えてくる。

ここ青森の合浦公園は桜の名所でもある。中国の海浜公園の名所、合浦を真似て作った。いまは閉店してしまったが、東京と同じ名前の八百膳という料亭があった。そこの釜飯が美味いのでたまに寄った。同人誌の合評もそこでよくやった。花見のときは予約でいっぱい、なかなか席が取れない。

公園の入口にはつじいと木村屋と二軒の団子屋が店を開いていた。木村屋のほうは、何十年前に、惜しまれてやめてしまった。わたしは、その蜜かけが好物であった。やわらかで、ぽ

ってりとした白い餅に、醤油ベースの甘い蜜がかかっている。それと、細麺のラーメンがよく合った。

木村屋の前にあった一本の柳の木が、子供たちの間で幽霊が出ると評判だったことを覚えている。

花より団子もそうだが、子供の頃は、親に花見に連れて行ってもらい、露店商が並べている玩具を買ってもらう目的があった。子供には花より玩具だった。

また、見世物興業がテントを張っていて、いまなら禁止の対象になるだろうが、不具の可哀想な人たちを見せて、金を取っていた。生まれつき手足が殆どない女性を蛇女だと見せていたりした。そういうことが公然と許されていた時代だった。

ストリップ小屋やお化け屋敷なんかもあったりして、何か子供の目には異界のように映たろう。日常生活にはないものが、そこでは年に一度お目にかかる。云ってみれば、博覧会のような物珍しさがあった。

夏は海水浴場になる砂浜から松の木がちらほら。松の緑と桜の色が混じり合って興をこしらえている公園だ。

その花見も、やはり夜桜がいい。夜咲く花には狂気と妖艶が隠されている。ぼんぼりの明かりで、浮かび上がる桜は、閨の女のような怪しい匂いを漂わせる。

ただ、浜風が寒いから、夜桜で呑むときは、冬まかないで装備して行かねばならない。アノラックやジャンパーといった防寒服で身を包み、さらに風除けで、ダンボール箱を壊してフードにするといい。気分はホームレスといったところ。何もそこまでして呑まなくてもと思う。ガタガタと寒さで震えながら、酒の力で暖まろうとするが、とても追いつかない。コンロを持ち込み、焼肉やバーベキューをして、その火でいくらか暖かいといったところ。

子供たちは、親の酒宴にはつきあっておられず、それぞれが小遣いを貰って、屋台へと走る。たこ焼き、焼きそば、りんご飴と食べるものはいくらでも売っている。いまでも、輪投げや鉄砲で景品を撃ち落としたりする遊技場もやっている。スマートボールというすでに滅んだ遊びもそのときは店を開く。いまどき、安物のライターもくだらない人形も欲しくはないが、何か郷愁がある。そこだけは五十年も時間が止まったような世界だった。

ぼつぼつと客が帰り始める。シートをまるめて、陣取りのロープも取られ、その跡にはゴミの山。それをまた犬を連れてじいさんが、掃除機を抱いて清掃して歩く。

「ああいう人もいなけりゃいけないよな」と、わたしが云うと、仲間は、

「あのじいさんは、人もいい。絶対に嘘はつかないんだ」と、詳しい。

「犬もよくゴミをくわえて手伝うよな。ところで名前はなんて云うんだ」

「犬の名前はポチというんだが、じいさんの本名までは知らないなあ。世間ではみんな、掃除機じいさんと呼んでいるが……」

「そうか、掃除機じいさんポチ連れて……??？」

にんじんの嫌いな子供が多いのは今も昔も一緒だろうか。カレーに入っているにんじんまで、スプンでのけている子供をみかける。何でもそうだが、子供のときに食べれないものが、大人になって好物になったりする。それは、にんじんだけでなく、チーズもそうだった。生牡蠣なんか、口に入れた途端出してしまうほどだった。コーヒーにビール、苦味のあるものは子供はダメで、大人になるに従って、味覚嗜好が変わってくる。

にんじんが嫌いだった、子供の頃に、おふくろが体にいいからと、赤いジュースを吞ませようとした。ぐっと口に含むと、なんと、にんじんジュースだった。当然、一気に吐いた。にんじんには嫌な思い出よりない。いまでこそ、健康のためと、にんじんジュースは好んで呑む。

そのにんじんが、先週の日曜日に、とあるスーパーに買い物に行ったら、大きなビニールの袋に入って、店頭で百円で売っていた。持てないくらい重い。石油缶ひとつより重いから、二十キロ以上はあるだろう。中サイズのにんじんが百本は入っている。それで嘘のようにたったの百円だ。わたしは、信じられないというように、レジで訊いた。まことに百円だった。ただ、気をつけなければならないのは、安く売るには訳がある。腐っていたりする。外見だけでは判らない。中身が黒くなっていたりするからだ。それでも食べられるところだけでもいいと、わたしは、重いにんじんをひと袋買ってきた。

家の玄関で選別作業をした。ビニールに入れたままだと、どんな野菜でも悪くなりやすいから、新聞紙で一本づつくるんだ。見たところそう悪いものは入っていない。

さて、これほどのにんじん、一体どうするのか。妹が来たから持たせてやった。うちで飼っているウサギにもやった。ウサギはにんじんを喰うと思っていたが、喰わないのだ。わたしは、子供のときから、ウサギはにんじんばかり食うから目が赤いと信じていたくらいだ。

「喰え」と、ウサギににんじんを向けると、ウサギの野郎、さっと尻を向けやがった。

「なんだと？ 贅沢なウサギめ、皮を剥いて刻んでやらねば喰わないのか」

と、今度はちゃんと食べやすいようにして、餌入れに入れると、やはりそれにも尻を向けて、知らん顔だ。頭にきた。

「こいつ、喰え、喰ってくれ。おまえも手伝え」

どうしても食べない。ウサギはにんじんが嫌いなのだ。知らなかった。

どうしようか、これほどのにんじん。買ってきた手前、なんとかしなくてはと、その日の我が家のメニューにやたらにんじんが増えた。毎日、にんじんを使う料理を考える。にんじんのきんぴら、にんじんのサラダ、にんじんジュースはもとより、にんじんとじゃがいもの煮ころがし、にんじんの味噌汁、にんじんのほうが圧倒的に多いカレー、娘にはキャロットケーキを作らせる。

「また、にんじん……」と、絶句する息子。

「うるさい、にんじんは体にいいんだ。ビタミンAとカロチン」

「ところで、それって、何に効くんだっけ？」

と訊かれても、よく判らない。

「つべこべ云わずに喰うんだ。とにかく体に悪いものではない」

まるで、家畜に餌をやるように、毎日にんじん、にんじん、にんじんだ。寝ても覚めてもにんじんだ。夢の中まで出てくるにんじんにうなされるほど、にんじんだ。

次第にわたしは後悔していた。安いからと今度からは買ってこないことにしよう。まるでにんじんに脅迫されるような毎日に、頭を悩まし、腐ってゆくのを横目で見ていた。

ある朝、何か体に変化があることに気が付いた。妙に、顔が自分の顔でないような感じがしていた。それで、おかしいかと、洗面所に行って、鏡に自分の顔を映して驚いた。なんと、顔が長くなっているではないか。それは突然変異のようだった。鏡が歪んでいるのではないことを確認すると、居間に慌てて飛び込んだ。

「大変だ、顔が変形している」

と、椅子に座っている家族が一齐にわたしを振り向いた顔が、みんな長い顔なのだ。

「どうしたんだ、みんな。同じ、長い顔になってしまっ」

「そうなんだ。いまも話していて、これはにんじんの食べ過ぎではないかって」 やけに冷静におふくろが話している。

「嫌、わたし、学校に行けない」

と娘はいないた。

「ひひーん」

「ひひーん」

泣き方も、笑い方もまるで馬だ。

嫁とおふくろが慰めあうように、手を取り合っていたし、普段、顔も合わせない息子も神妙な顔をして、傍にいた。家族はバラバラだったが、またひとつになったような感じがした。そして、仲良く話している光景を目にして、わたしは思った。

「うん、これは馬が合う」

第806話 健康幻想

ラジオでもテレビでも、毎日のように、健康のためなら、これを食べる、あれを食べるとうるさいくらいだ。まるで、日本全国、栄養失調と病人ばかりの国のようだ。これほど、栄養過多で、豊食の時代で、しかも食べ物の三割を捨てているときに、その他に何を摂ればいいのか。

と、判っていても、人間の心理はおかしいもので、健康、長生き、美容にダイエットとなるとなんとなく気が動く。北村も最近、運動不足と中年太りで、体がなまり、調子が悪い。周りの友人たちが、いろんな病気で入院した、手術したと聞くと、余計に今度は自分の番だと、健康が気にかかる。

それで、マスコミに乗せられ、すぐに飛びつく健康オタクになってしまった。

「らっきょうを買ってきてくれ。一日三個づつ食べればいいらしい」

から始まって、納豆キナーゼがいい、イソフラボンだと、毎日、納豆とおから料理も欠かせない。

朝、起きるとまず水だ。水分を摂ることが体にいい。それもミネラルウォーターから、山から摂ってきたゲルマニウムの水。不思議と何日置いても腐らない水だ。ルルドの聖水もその成分でできているとか。この辺りの火山の麓も、それと似た水が湧いて出るところがある。

あとは、缶ジュースなんかは呑まない。呑むなら青汁、まずいもう一杯だ。さらに野菜ジュースだ。無添加の野菜で、ビタミンC、ベータ・カロチン、カリウム、食物繊維ときたもんだ。

仲間もみんな五十過ぎたら、寄れば集まれば、病気と健康食の話ばかり。

「うちでは、きなこをドリンクにして毎日呑んでいる」

ふむふむと、すぐにメモして、さっそく北村は帰りにでも買ってこようとしていた。

「おれのところは、黒酢を毎日おちょこに一杯づつ。はちみつを入れて、のぼして呑むと呑みやすい。疲れがとれるぞ」

「そうか、そうか」と、北村は、疑わず、いいことはすべて真似てみるのだ。

「うちはね子供たちのおやつまで、健康を考えてカルシウムウエハースとキシトール入りのガムだ」

「そうだね、健康は家族全員を考えないとな」

「うちでも、ご飯には押し麦と、玄米を入れて炊いている。減塩味噌の味噌汁も毎朝だ。コレステロールが心配だから、体に脂肪がつきにくいヘルシーなオイルを使っている」

「糖分だってよくないから、うちでは人工甘味料に麦芽糖だね。果物も食べ過ぎはよくないっていうじゃないか」

「それはそうだが、林檎は繊維があるから、一日一個はみんな食べているよ。それに、完熟バナナにいま嵌っていな」

「おれんところは、健康茶に凝っている。バナバ茶、黒豆茶、なた豆茶、十七茶、ウーロンに減肥茶、カテキンの緑茶、コーヒーも糖尿病にいいらしい。なんでも、アメリカ人は一日三杯以上呑むから、糖尿患者が少ないんだそうだ。それに、黒豆ココアだな」

「ふむふむ」

と、北村はすべてメモしていた。

「椎茸も水に漬けて、その水を毎日呑むといい。酢に漬けた大豆もいいし、うちでは、肉より魚だ。しかも安い小魚を丸ごと食べる。魚、魚、魚を食べると頭がよくなるDHA。それにカルシウムも摂れる」

「肉はよくないね。食べるなら、ヘルシーな鶏肉だね。酸性体質がよくないんだ。肉を食べたあとは、うちでは梅干しだ。なんでも、肉二百グラムの酸性を、梅干しのアルカリ性が消してしまうというんだね」

友人たちから、情報を得る。テレビの受け売りなのだが、不思議と、テレビは嘘っぽい、知人の口から聞くと信用するからおかしい。

というような話をしながら、酒を飲み、煙草を吸っているからどこか矛盾している。

北村は、さっそく仕入れた情報を手に帰りに二十四時間営業のスーパーに寄った。食品を買う

ときも、輸入ものか国産か。合成保存料が入っているか、着色料は何を使い、甘味料はなんだと、実にうるさい。野菜も有機栽培で無農薬でなければいけないと、拘りがある。すっかりと病人だった。あまりにも、雑誌、テレビで騒ぎ過ぎるから、そんな病人みたいな人間が巷に増えていた。

その北村がある日、ぽっくりと死んだ。妻は、家でぼったりと突然倒れた夫に驚き、すぐに救急車を呼んだ。病院に搬送する途中で息を引き取った。

医者は、死因を調べると、驚いていた。

「一体、ご主人は、今朝から、何何を食べたり呑んだりしたんですか？」

北村の妻は、思い出しながら、医者に告げた。

「納豆に、おから料理、らっきょう、きなこドリンク、ゲルマニウム水、青汁、野菜ジュースそれぞれ一リットル、カルシウムウエハースふた袋、押し麦と玄米のご飯丼三杯、林檎にバナナ五つつつ、バナバ茶、黒豆茶、なた豆茶、十七茶、ウーロンに減肥茶、黒酢、緑茶にコーヒー、黒豆ココアそれぞれ一リットルでしょう、それに椎茸、酢豆、小魚一キロ、鶏肉一キロ、梅干しに……」

「……」

第807話 入れます保険

テレビを点けても、新聞を開いても、朝から晩までアリコ、アリコ、アリコだ。うるさいぞ、アリコ。あまり、くどく、しつこいと嫌われる。逆効果で反感しかない。何事もやりすぎはよくない。いくら儲かっていたからといって、広告攻勢は適度にしないではいけない。あれほど機関銃のようにやられると、何か怪しいと疑いをもちたくなる。よく、派手に宣伝していたところは、後々問題を起こして、倒産したりする。金を集めるだけ集めて被害者が全国に数知れず。それが、そこだとは云っていない。別にアリコに恨みもない。

何かが流行ると、それに追従する会社が必ず出てくる。対抗馬として、外資系のキリギリス保険が出てきた。そこは、アリコの上に行く、保証内容と、安い掛け金、さらに年齢を引き上げての攻勢だ。

「ごめんください。おたくのおじいちゃん、お元気のように、近所で聞いてきたんですが、わたし、おじいちゃんの親戚の隣の家から嫁に行った先の義兄の友人ですが」

と、全くの他人。いきなり、セールスは身分を明かさない。まず、ドアから中に入ることだった。

「何の用ですか」

と、たまたま日曜で家にいた北村が対応した。スーツをぴしっと着た若い男性だ。

「おじいちゃん健康の秘訣について聞きにきたんですが。もうすぐ九十だそうで、何かおやりになっていますか？」

「毎日、お茶に梅干し入れて吞んでいます」

「はあ梅干し爺いですか、いや、失礼、それから？」

と、若い男はメモするふりをしていた。まるで、健康調査にでも来たように、根ほり葉ほり訊くのだ。北村は、苛々して、相手の言葉を遮った。

「一体、何が云いたいんですか。単刀直入に云ってください。何の売り込みなんですか。結論から云ってください。こっちは忙しいんだ」

北村の短気が出た。

「はい、あのう、わたし、キリギリス保険の高村と申します。おたくのおじいちゃんでも入れる保険のお勧めに参ったんですが」

若い男はようやく正体を明かした。

「馬鹿な、明日にでも死ぬかも知れない老人に保険をかけて、あんたら、損をするだろうが」

「いいえ、そこはトリプルCの実力と安心をお届けしているキリギリスです。お向かいのおじいさんは、百歳ですが、ご加入いただきました」

「だけど、普通なら、健康診断して、現在、病気の人、寝たきりの年寄りなんかは入れませんでしょう」

いつか、北村は相手のペースに嵌っていた。

「そこです。いままでの保険はそれが常識でした。キリギリス保険は、なんと、危篤の人でも入れるのです」

「そんな、馬鹿な。死にそうな人にも保険金が下りると云ったら、みんな入りますよ」

「はい、ですから、ぴくぴくとでもかろうじて生きている人なら、たとえ重体の人でも、余命三日の人でも入れるんです。まさに、保険の革命児ですね」

あまり調子いいから、何か裏があるなと勘ぐりたくなる。

「おかしいな、何かトリックがあるんでしょう」

「ありません、ありません。ここに保険の約定書があります。それに書かれていることを読めば、嘘がないと信じていただけるでしょう」

月々の掛け金が一万円で、死ぬと三百万がおりてくる。葬式代は出るということだ。ただ、解せないのが、誰でも必ず死ぬのだ。北村のじいさんも、あと五年は頑張って長生きしてもらっても、掛け金はせいぜい六十万。その五倍がどうして支払われるのだ。その計算がどうしてもおかしい。

とにかく、これは本当だとしたら、すごい投資になる。北村はさっそく、家族全員の分を入った。

キリギリス保険の役員会が本社ビルの会議室で秘密裏に行われていた。

「営業担当常務、どうかね。契約高は？」

社長が数字を求めた。

「はい、この企画がスタートしてから、まだ二週間ですが、全国で一千万を超える契約を成立させました。よその保険から寝返った方が大分ですが、まずまずの成功ですな」

「そうですか。すべて、予定以上ですか。財務担当の常務は、資金の集まり具合を報告してください」

みんなホクホクだった。

「はい、数日で、我が社には一千億という金が流れてきております。団体保険から、経営者保険という大口もかなり、アリコから奪い取っております」

「次に、ノアの方舟計画の状況を報告してくれたまえ」

「はい、この資金で、なんとか、宇宙ステーションをロシアから買い取ることができました。これからの集金で、NASAからスペースシャトルを三機購入する予定です。時間があまりありません。あと、ひと月ですから」

社長は、何も見えない都会の上空を眺めながら、溜息をついた。

「そうだな、あと、ひと月で、巨大隕石群が地球に衝突する。それが、すべて人々に内密にされている。一部の国家のVIPだけが知っている。民間では、われわれだけだろう。だから、助かるために、とにかくどんな方法でも金を集めなければな」

第808話 自己責任

会社の帰りに、鹿内弘幸は、いつもの道で、四角い箱を拾った。大きさはティッシュペーパーの箱よりは小さいから、爆弾とかそんな物騒なものではなさそうだ。ただ、がっちりとした箱で、中に何が入っているのか判らないが、とにかく重い。よく、社員教育の一環で、想像力を高める訓練として、黒い箱というのがある。その中に、何かが入っている。それを当てるゲームのようなものと似ていた。

箱を振って、音がするかどうか。音はしない。それによって中身の大きさと形が判る。傾けてみることで、中身が倒れると、形状が判る。比重で、そのものが、水より重いのか、軽いのか判る。ところが、その黒い箱は、びっしりと中身が詰まっているようで、振っても中が動かない。しかも、鉛が詰まっているよりも重いときている。ということは、この世で一番比重が高い物質でできていることになる。それは何だろうか。鹿内弘幸は、表面も金属で出来ていて、立派な箱だから、見捨てておくわけにもゆかずに、交番に落とし物として届けようと、抱きかかえた。

通行人の多くは、それが何か知っていたようで、弘幸が拾うと、指をさして笑っていた。

—あんなもの拾って、知らんふりしていればいいものを。

—拾ったら最後だ。偽善者ぶって。

ちらちらと弘幸の顔を非難の目で見ながら、関わりになりたくないように、足早に去ってゆく。

都会は無関心。ゴミでも危険なものでも放置しておく。たとえ、放置された自転車でも、どこかへ移動しようとして、手にかけてところを警官に見つかり、それが盗難届けが出ていたら、どんな言い訳しても、自転車泥棒の濡れ衣は着せられる。

だから、ゴミでも拾わない。犯罪に使われたかもしれないナイフを拾って、それに指紋がつい

たら、後で、とんでもない殺人犯にさせられるかもしれない。だから、見て見ぬふりをするというのが都会のルールだ。

弘幸はもともと正義感が強い。黙って見過ごすわけにはゆかない性分だ。いまだって、それを失くして困っている人がいるかもしれない。それで、交番まで少し遠回りをして、届けに行ったのだった。

「すみません。この先の歩道にこんなものが落ちていたんですが、誰かの落とし物でしょうか。立派なもので、とてもゴミには見えないんですが」

警官はそれを見ると、弘幸を軽蔑したように斜めに眺めた。

「あんた、大変なものを拾ったね。そんなもの、こんなところに持ち込まれても困るんだ」

「だけど、持ち主がいるかもしれないし、探していたらと思って」

「何を云っているんだ。それは、拾った者のものなんだ。あんた、拾ったからには、誰かになりつけるまで、自分でちゃんと抱きかかえていなけりゃならないんだ。その辺に捨てたりしたら、警察に通報されて捕まるからね」

「ええ？ これって、何なんですか」

弘幸は、田舎から転勤で都会に出てきたばかりで、そのものの正体を知らなかった。

「それは、『責任』というものだ。みんな、背負いたくないから、手に取らないようにしているんだ。一度でも手にしたら、それは、あんたの自己責任だよ。いいね、ずっと持っていなくちゃいけないんだ」

そんな条例が都会にはあるなんて知らなかった。

「こんな、重いものを、ずっと持っていなけりゃ、いけないんですか？」

弘幸は大変なものを抱えてしまったと後悔していた。困った、どうしたらいいと、持てあまし、弘幸は、区役所の清掃課に電話をしていた。

一責任というものを拾ってしまって、どこかへ捨てたいんですが、それって、燃えるゴミでしょうか。燃えないゴミでしょうか。それとも、リサイクルできるとか。

電話で対応した区の職員が、舌打ちするのが電話口に聞こえた。

一そんなもの、捨てる場所はありません。回収もしません。いいですか、時代は変わったんですよ。以前は何かあれば、すぐに国の責任だ、社会が悪いと云っていましたが、これからは、自己責任の時代です。いちいち個人の責任を役所がカバーする予算はないんです。あなたが、一度、拾ったからには、自分で責任を持って管理してください。無責任に放置したり、責任転嫁したりすれば、法に抵触いたしますから、くれぐれも違法投棄だけはしないように。

役所にそこまで云われて、善意でしたことに、弘幸は悔やんでいた。電車で通勤しても、手にずっしりとくる責任は、もともと他人のものなのだ。なんで、おれが持たなければならないんだ。と、弘幸は憤懣やるかたない。

会社に行くと、事務所で、みんなはにやにやと笑いながら、弘幸を見ていた。

「鹿内くんは人がいいからな」

「まあ、ご苦労さんなことで」と、同情もしない。

弘幸は、重いから、それを床に置こうとすると、上司が血相変えて飛んできた。

「君い、そんなものを会社の床に置いて、会社のせいにするのではないだろうな。個人的なも

のは、自分で持っていたまえ」

と、叱られる。

「すまん、これを少し預かってくれないか」

と、今度は部下に弘幸が頼むと、

「嫌ですよ。仕事と関係ないじゃないですか。そんなこと云って、人に責任を押しつけようとしているんでしょ」

もうダメだ。部下にも拒絶され、手から離してもいけない。一生、持っていなくてはいけないのか。

社内を見ると、弘幸だけではない。肩に同じ黒い箱を載せてうんうんと唸っている先輩もいたし、よろよろと両手で抱えて、外出しようとする経理のおばさんもいた。

これからは、病気をしても、事故でも、盗難にあっても、すべての人間がその箱を持たせられる。

「どうしたらいいんだ。こんなものをずっと抱えなければならないのか」

と、弘幸は同僚に向かって叫んでいた。

「そのために、責任銀行があるんですよ。責任を果たしたら、手形や小切手を落とすように、その銀行で箱は回収してくれるんです」

弘幸は、どうしても納得がゆかないで、いつまでも反問していた。

「おれが、なんの悪いことをしたというんだ。むしろいいことをして、何もしないやつらから白い目で見られて、他人の責任をこれからどうして返済してゆけばいいんだ」

いまの若い人は賢い。そんな教育を受けてきていた。部下が云った。

「だから、余計なことはしなければいいんです。君子危うきに近寄らずですよ」

そんな君子ばかりの世の中になってしまった。

第809話 素描展

郷土館で濱田正二先生の素描展をやっていたから、両親を連れて行ってきた。

日曜日というのに、客の入りはよくない。濱田先生はミニコミ誌の北の街の表紙を長く描いていた。戦前から戦後にかけての青森の街や風俗が、やはり考現学を提唱した我がふるさとの今和次郎と兄弟の今純三のスケッチにも似て、興味深く見ていた。

たまたま、会場の長椅子に先生が坐っておられた。両親とも、懐かしく話していた。暫くお逢いしていなかった。大正二年生まれというから、今年、九十二になられる。相変わらず耳は遠いが、お元気で描かれている。九十を過ぎても描かれている、画家や詩人、工芸家を見ていると、わたしなんかもまだまだ終わっていないという気がして励みになる。

「君のお店、どこへ行ったの？」

と訊かれた。以前はよくうちの古本屋においでになられた。読書家でもある。わたしは、引越

し先を教えた。

会場のガラスケースの中に東奥日報の新聞記事がヤケていたが、展示してあった。昭和三十四年の新聞の切り抜きだった。数日前に、新聞に青森刑務所の濱田先生の壁画が壊されていたことが惜しいという記事が載っていて、そのことで、ペンクラブの会長の三上強二先生が、当時を思い返してやはり、新聞に書かれていた。

壁画は、受刑者を癒すために、濱田先生が昭和三十四年に描かれた。除幕式の写真が、なんとも懐かしい。というのも、その写真はわが家の昔のアルバムに貼られているからだ。幕の紐を引いたのは、当時六歳のわたしの妹だった。三上先生が、壁画を描く材料代を捻出するために、親父の入っていたロータリークラブに頼んだという経緯が書かれてあった。

「見たまえ、この建物の造りを」と、濱田先生は、天井を指差した。県立郷土館は、戦前は青森銀行の建物であった。その当時のまま、建物の一部が、戦災にも焼けないで残っていた。

「こんな建物は、こうして保存して残さなければいけないんだ。昔の建物は洒落ていた。いまの建築には美しさが微塵もない」

見ると、大理石造りのカーブのついた手すりのある階段や、六角の窓、エンタシスのような荘厳な円柱、天井も壁画さえ描かれてはいないが、洒落た模様が随所に施してある。

青森市は空襲で焼け野原となって、戦前の古い建築物は殆どない。それを写真ではなく、素描画という芸術で残そうとする濱田先生の怒りが、展覧会という形で伝わってきていた。先生の描いた刑務所の壁画も壊された。古い建物も、文化財も惜しげもなく破壊され、街はアートのないモダンという怪物になってゆく。

滅んでゆくものに美しさがあった。それを絵として残すことが使命でもあるかのように、建物を、通りを、橋を、公園を、港を描き綴ってゆく。

いつか、北の街の出版社の事務室で、社主の斎藤せつ子氏と、表紙を描いていた濱田先生が話しておられたところに、たまたまわたしがお邪魔したときがあった。

「もう、活版は古いんでしょうかねえ」

「時代の流れで、仕様がな」

「活字に品がありますでしょう。字に肌触りがあるというか、それが、最近は新聞社もやめたそうです。印刷屋もいままでのような植字工など職人さんが減ったようですし」

そんな話をされていた。活版からオフセットに、写植文字へと移行する決断がつかないでいた。本の世界も変わりつつある。建物も街も人までも変わりつつある。そのぎりぎりのところで、斎藤せつ子氏も、悩んでおられた。

「どう思います?」と、わたしに意見を求められても、困ってしまう。印刷文化も、コンピュータへと急速に移行してゆくときだった。技術的なことは、どんどんと先へ進んでいるようだが、美的感覚は衰退しているようにも見受けられる。濱田先生が指摘するように、街並の景観だけでなく、ビルから住宅のデザインは、最近は変わってきたというが、全体的には醜悪なものが多く、現代の街は全く絵にならない。

本もそうだった。新しい本は、量産可能なスタイルであり、印刷、製本の生産ラインに乗るものが大方だから、すべて企画に則っている。変形版は嫌われるのだ。箱入りの本もめっきりと減

った。カバーでもビニール加工し、バーコードまで印刷されている。見た目、いい本といわれるものは、昭和三十年代で終わっているように思う。

濱田先生のアトリエは、五十年以上も同じ場所にある。わたしが最初に遊びに行ったのは、子供のときだった。祖父の畑の隣が先生のアトリエだった。いまのように家が建っていなかったから、周りは林檎園と葡萄棚があるだけで、あとは畑だった。小川も流れていて、大きな鯉を捕まえたことがあった。祖父はよく、わたしたち孫を畑の手伝いに連れて行った。若い濱田先生がアトリエの雨戸を開けて、よく話しかけてきた。それで、わたしたちは、アトリエに上がりこんで、いたずらをしていた。周りには家がないから、近くに池があり、三内霊園から八甲田山までがくっきりと見えていた。

アトリエから見た八甲田山と畑の眺望を先生の素描を見た。それで、つい思い出してしまった。

写真がこれほど普及しても、絵は衰退しない。絵と写真を一緒に考えるほうがおかしいが、戦前の青森の町並みや風俗、風景といった写真があまり多くないのに、絵だけは残っている。絵だから残ったのかもしれない。時代の証人としての、残すべきものを、絵の中で語り続けるのは、先生の眼力と、絵筆だった。九十を過ぎてなおも描き続けるということが、会場に重く響いていた。

第810話 バカなパソコン

パソコンはバカだ。大バカだ。所詮、人間の作ったもので、人間を越えられるはずがない。だが、世の中には絶大の信頼をコンピュータに寄せて、もうすっかりと神様扱いの人もいる。コンピュータが間違えるはずがないじゃないか、と、云うのだが、それに入力するのは人間の指なのだ。バカな人間が、間違ったデータを入力するから、素直で正直な、パソコンはそのまま間違った答を出してしまう。人間のバカが機械に移り、とうとうパソコンもバカになってしまったというわけだ。

まず、先走りの早とちりが気に入らない。「東京都中央区銀座」と、前に住所を打つと、それをしっかりと覚えているのはお利口なのだが、こっちが次に「東」と、打っただけで、気をきかして、「東京都中央区銀座」と、頼みもしないのに、出してよこす。こっちは知らないものだから、つい、続けて、「津軽郡田舎村大字ど田舎」と、打ってしまう。そして、よく画面を見ないでやってしまうことがたびたびあるのだ。「東京都中央区銀座津軽郡田舎村大字ど田舎」という地名はどこにもないのだ。

インデントだ、タブだと、こっちが頼みもしないのに、気を利かして、勝手に字下げをしてくれる。一、二度ならまだ我慢ができるが、毎度それだから、頭にくる。

「いい加減にしろよ」と、キーボードを叩いて、短腹なおれは、何度もパソコンを壊した。

こういったソフトに便利性を追求したプログラマーたちの頭の中がそのままパソコンになって

いる。ひとつ良ければひとつ悪い。二律背反の悪い面が邪魔をする。

新しいウインドウズでは、USBのカードリーダーを差し込んだだけで、即座に「はい、はい、ご主人様、あなたは、これからデジカメで撮られた写真を、マイピクチャーに保存されたいのですよね」と、先回りして画面に出ると、その裏面では、

「どう？ わたしって、実に細かいところに気の付く女でしょ」と、云いたげなところが気に入らない。まるで、トイレのトイレトペーパーの端を三角に折ったり、簾を掲げて見る清少納言のように、何でも知っていることを鼻にかける女のように、おれは嫌いなのだ。多少、謙虚なほうが女は可愛い。

男と女の相性のように、多分、パソコンと使う人間の間にも相性があるに違いない。だから、購入するときは、パソコンの血液型、もしくは製造月の星座などは調べておいたほうがいい。

頭に来ることは山とある。おれがせっせと何時間もかかって原稿用紙二十枚くらいの文字を打ったときのことだ。あと数行で打ち終わり、やれやれと思っていたら、突然、フリーズを起こして、固まってしまいやがった。

「なろう、どうしたらいいんだ、どうしたら」

と、おれは泣きそうになっていた。パソコンを撫で撫でしたり、ご機嫌をとるために、世間話で、気をそらそうとしたが、ダメだった。パソコンはフランスでは女性名詞なんではないか。どうも、気質が女だ。というと、女性に怒られそうだ。最近の気難しく細かいのは男性に多いのよ、って。

結局、考え事をしたまま、ぽかんと口を開けて、空を眺めているようなパソコンのスイッチを切って、強引に閉じた。それがハードディスクに負担をかける。いいんだ、壊れてもと、こっちもふてくさる。

もっと頭に来ることは、それも一日がかりで、仕事のデータを打ち込んでいたときだ。しかも、あと少しで終了するというときに、これもまた突然に、画面の中央に強制終了の警告が出た。「なんだ、なんだ、なんだよ。おれが何か悪いことをしたっていうのかよ。なあ、仲良くやろうや」と、云ってみたところで、ほほほほほほと、笑う女の意地悪そうな顔が見えるだけ。全く動かないから、どうすることもできない。カメラで画面を撮影して、それをスキャナで読み取って保存しようか、などとバカなことまで考える。どうしても二人の関係を終わらせたいのか。おまえから一方的に別れるとは、酷いじゃないか。バチッと画面が黒くなって、閉じてしまった。「うううううう」

と、おれは捨てられた惨めな男の役で泣くことになる。

ちゃらちゃらした現代的なアクセサリをいっぱいつけて、壁紙にアイドルの写真なんか貼り付けて、そんな女の子が相手だったから、国語の能力は時に小学生並だ。

一月に村雲は何風邪。と、訳の分からないことを出してよこす。

寿司という漢字を打つときに、すすと打つと、煤と出してよこすのだ。バカ野郎が、煤が食えるか、すすだ、判るか、すすだっていうの。仕方なく、わざわざことぶきにつかさと打って出す、手間がかかる。

こんなこともあった。いへめけんと打ったら、異へ目県と出しやがる。こっちは、愛媛県と出したいのに、こんな県名も判らないのか。と、何度もいへめけん、いへめけんと打っていると、

とうとう、パソコンがヒステリーを起こした。

「うるさいわよ。いへめけん、いへめけんって、えひめけんでしょう。すすじゃなくてすしなの。あなた、青森の人ね、完全に訛っているわ。」

「な、なんだとお、パソコンのくせに、生意気にも意思を持って話しかけるな。おまえなんか、こうしてやる」

と、おれは五代目のパソコンをめちゃくちゃに壊していた。

第811話 リメイク

定年退職してから第二の人生が始まる。

吉田俊平は、その日を心待ちにしていた。彼は、サラリーマン時代は自由にできなかったことを、リタイヤしたあとにしようと思っていた。それは、また学生生活を送ることであった。六十になって、いまさらまた大学で勉強したいなどと、思うのも、あの素晴らしい愛をもう一度であった。自分の人生の中で、一番光り輝いている青春時代へ、あの日に帰りたいであった。

いまは、流行り歌でも、昔の懐かしい歌が、現代風にアレンジされてカバー曲となっていたり、銭形平次や、座頭市、奥様は魔女といったリメイク番組、映画が話題を呼んでいた。そんな歌や映画を見て、ますます昔日を思い出す。

大学のキャンパスで、自由に学生運動をして、声を上げて体制批判をしたい。若い女の子たちとまた恋愛なるものもしてみたい。鳶の絡まるチャペルで祈りを捧げてみたいと、おじさんにしては不気味な想像もしていた。

大学を卒業し、社会に出てから三十八年、会社という看板に縛られ、一生の不作の妻には尻に敷かれ、子供にはバカにされ、家のローンのために働いて、自由という言葉さえ忘れていた。そして、いま、定年という奉公の期限がきて、自分は自由の身になった。これからは何をしたい。吉田俊平は世界が広がるような気がした。

社会人のために門戸を開いている大学はいくらでもある。勉強する気さえあれば、年齢問わず。さっそく、俊平は願書を出した。何をしてみたいかと、履修学部を選ぶ楽しみ。俊平は、老後に社会に役立つボランティアをしようと、スクールカウンセラーで、病める子供たちの相談に乗ることを考えていた。そのためには心理学を勉強しなくてはならないから、その方面の大学を受けることになった。

ある日、大学の同期で、やはり定年退職した友人から街で声をかけられた。

「よお、俊平じゃないか」

見ると、大学生のような若者が、馴れ馴れしく人を呼び捨てにするのだ。

「あんたは、誰だい」いま問題の怪しい詐欺師にも思えて俊平は身構えた。

「おれだよ、沢野だよ」

「何だって、あの沢野か」

あれから三十数年も逢っていないのに、学生時代の面影がそのまま残っている沢野均と逢った。

「嘘だろう。おまえ、六十じゃないのか。どうして若いんだ？」

着ている服も、言葉も、髪もすべてが若い。

「リメイクしたんだ。ほら、あのビルの上に、若返りのための整形美容クリニックってあるだろう。その隣には男性エステ、両方に通って、四十は若返ったんだ」「す、凄い」

俊平は呼吸が止まるほどの衝撃を受けていた。話には聞いていたが、これほど技術が進歩していたとは。

「わしも、行ってみよう」

俊平がクリニックのドアから入ると、いるいる、中年の男性たちがひしめきあっていた。俊平の番になり、ドクターから説明を受けた。

「そうですねえ、あなたの皮膚を調べてでなければきちんとしたお話はできませんが、お年の割には、肌が綺麗ですね。まず、当クリニックでは、お肌の若返りの治療から入ります。髪は量がありますね。後退していないようですので、白髪染めで十分でしょう。おなかの脂肪を除去して、全身の皮膚のたるみと皺、ほくろなどを取り去り、張りのある体型を作りましょう。治療にはひと月はかかります。費用なんですけど、家一軒建てるほどかかりますが、それぐらいは覚悟していただかないと」

「はい、大丈夫です。退職金と、預貯金をすべて注ぎ込みましょう。若い日に戻れるなら、これほど安いものはありません」

俊平の妻は早くから亡くなり、子供たちも所帯を持って、孫も三人いる。家で一人暮らしの俊平にとって金なんかはいらぬのだ。金で時間が買えるのなら、それが最も俊平にとっては生きてきた金の使い方だった。

四月になり、大学の入学式に望んだ俊平は、誰の目にも二十歳の青年だった。俊平は、ドクターに云われた通り、歩き方も若者らしく颯爽と歩くように努めた。背中をまるめてしょぼしょぼ歩く初老の男ではもうないのだ。声もしわがれていてはおかしいから、はりのある高い声を出す訓練までした。下着もラクダのシャツやすててこと腹巻はやめて、トランクスにTシャツにした。見立てはすべて売場の若い社員に頼んだ。インナーからアウターまですべて若者の流行できめた。 ケイタイ電話も持つことにした。俊平は絶対に年がバレない自信があった。さあ、どこからでも来てくれ。大学生に混じって、幸福感を味わっていた。ちらちらと、誘うように女子大生が俊平の顔を見ていた。いままでは相手にもされず、振り向かれることすらなかったのに。ぞくぞくとしてくる。

「吉田さんね。わたし、千葉由岐というの。下の名前はなんていうの？」

さっそく女の子から声をかけられた。

「わしか」「え？ わし？」「いや、こほん、ぼ、ぼくですか。俊平って云います」

「これから、歓迎の合コンを超イケメンの人を集めて、隣の学部とやるんだけど、参加してー」

「はあ？ ゴウコンにイケメン？ はてさて」

ともかくも、俊平は訳も分からず女の子たちに連れて行かれた。カラオケルーム貸し切りで、チューハイとスナックが運ばれてきた。

俊平は、若い人たちの話についてゆけなかった。第一、何を話しているのか、若者言葉が理解できない。

「メルアド教えてよ」と、訊かれても、はて？ さて？ ケイタイを取り出すが扱い方がいまいち判らない。両手であちこち押したりしていた。

「この人、顔はいいけど、少しおかしいわよ」

ひそひそと女の子たちの声が聞こえていた。

「俊平くん、何か歌ってよ。得意な歌って何？」

突然のご指名に戸惑いながらも、カラオケならまかしてくれと、俊平はマイクを手にした。「人生の並木道を歌います」ざわざわと騒がしくなって、みんな変な顔で見ている。ヤバイと思った俊平は曲目を変更した。

「いや、それでは、新しいところで、『孫』なんかありますか」

「誰？ あの人」みんなの奇異な視線が俊平に集まっていた。どうやら、頭の中まではリメイクできなかったようだ。

第812話 古本商売

わたしは古本屋をなりわいとして、そろそろ二十年が経とうとしている。その間、嫌な客というのも数知れず。また、古本屋が因果な商売だと、自分で自分が嫌になったときも多々あった。何にしても、根気のいる待ち続ける商売であった。

Kさんから電話があった。以前はちょくちょく店に顔を出していたのだが、このところ姿を見せないと考えていたところだった。

「ああ、暫くです。どうしていますか。入院してしまいましたね。」

という病院からの電話であった。さっそく、わたしは病院に見舞いに行った。すっかりと痩せて、ベッドに横になっているKさんは別人のようにも見えた。

「去年からかけて二回手術をしました。いやあ、年とると、丈夫になるところはひとつもありません。みんな弱ってきますからな」

と、力無く笑うKさん。高校の校長を退職してからは、専攻の国文学を活かして、カルチャーセンターであちこち講座を持っていた。あとは、好きな読書三昧で七十の余生を過ごしていた。

「ところで、蔵書のことなんですが、あなたのお智慧を拝借したいと思ひましてね。わたしには、献上されたときの署名本が沢山あるんですよ。宇野重吉さんや、永井路子さんとも交友がありましたもので、他にもかなりの作家のサインをいただいておりますが、わたしの名前も書いていますから、そんな本が巷に出るとやはりまずいでしょうか」

「そうですね、いつか、献上署名した方が、うちの店におみえになって、自分の贈呈した本が古本屋で売られていたことに憤慨していましたね」

Kさんの相談を受けて、わたしは、もうKさんは自分の余命幾ばくもないということを知っていたのだと思った。それで、蔵書の処分を考えていたのだ。それは、前から電話で何度かお願いされていた。だが、わたしはそれとなく丁重にお断りしていた。というのも、以前、うちで少しばかり本を処分されたときに、「北村くんに、すっかりと安く買われてしまって」と、あちこちで云いふらしていたのを耳にした。また、売るときには、いちいち、

「これはいくらいくらで買った本です。なかなか貴重なもので、神田の古書目録では、いまは三倍以上にはなっていますな」と、古本屋にとってはやりにくいお客だった。

古書目録に精通しているマニアの方などは、相手にしないことにしている。高く買わせられ

ても、地方では東京値段ではさばけない悲しさがある。それでも、買値が安いと文句を云うお客には、どうぞ、神田でも早稲田でも売りに行かれたらよろしいと、けっして相手のペースには乗らない。無理をしないことにしている。最近、不景気で高目の本が動かないから、棚飾りになってしまっただけだ。Kさんの家にお邪魔したときは、何度もあるが、書齋と書庫にびっしりと本が詰まっている。古典文学の研究本と、全集、漢文大系が揃えである。古本屋なら鼻を鳴らすところだが、Kさんののは自慢話でしかない。

「こう見えても、わたしは中央ではすごい人間なんですよ」と、自慢話をする人間は、信用がならない。かえって価値を下げているようなものだ。

だから、表向きは客だから、すごいですねと、驚いてみせるが、Kさんから買う気は失せていた。

「どうしたらよいでしょうか、この二万冊の本ですがね」

暗にわたしに買ってくれと云ってきたのが判るが、わたしはつらっとして答えた。

「図書館に寄付したらいかがですか。K文庫ということで。前の知事さんの本もそうして文庫になっているでしょう」

すると、どうも図書館には寄贈したくはないらしい。換金したいのだ。

「わたしの本は、あんな知事さんの本なんか比べものにならないくらい価値がありますよ。いい本ばかりです。貴重な本もあるのをご覧になって知っておられるでしょう」

「そうですね、そうですね」と、わたしは相槌を打っているが、陰では舌をながめていた。

本は売りたい、高く売りたいのが目に見えている。ブックなんとかを勧めたが、第一、古い本は扱わないし、価値が判らない。東京の大手では、送料もかかる。そこで、知り合いということで、わたしに買ってもらいたいのだ。話の中に別の本屋の悪口も出てきた。

「あすこはあくどいですよ。六万円もする本を二千元で持ってゆかれました」

わたしは、そんなKさんの話には耳も貸さないで、逆に奥様と仲良くなろうと、いつもお邪魔するときは、奥様の機嫌をとるために上生菓子を手土産に持っていったりした。そして、よく奥様といっても六十半ばの上品なおばあさんだが、顔を売っておくために世間話をしたりしていた。

ぬらりくらしと交わしながら、Kさんの蔵書処分の話には乗らないようにしていた。それがKさんにはじれったかったのだろう。

最後の電話を貰ってから、また三度目の入院をされたということを別の客から聞いた。どうやら、今度は退院はできないようだと。それから、まもなくだった。Kさんの死亡広告が新聞に出ていた。名士様であったので、盛大な葬儀が営まれた。無論、わたしもお偉い会葬者のずっと後ろの席で、Kさんとの長いつきあいを思い返していた。

一長かった。実に長かった。

四十九日が過ぎて、わたしは、ふたたびKさんの家を訪問していた。相変わらず、夥しい蔵書の匂いが陰気くさい家の中に漂っていた。また、奥様の好きな和菓子を土産に、仏壇の遺影に線香を上げ、悲しむふりまでした。奥様は、本の値打ちについてはシロウトで、興味もなにもない方だった。わたしは、くるりと奥様の方に向き直ると、

「ところで、本の処分のことでございますが」と、切り出した。

待ちの商売というのも、長く辛いものがあった。モジリアニが死んだら、存命のときは冷たかった画商が絵をすべて買ったときのように、ああ、古本屋というものは、つくづくと嫌な商売ではある。

第813話 ナポレオンの辞書

パリを訪れたときに、ナポレオンの墓を見てきたことがあった。墓といっても、宮殿のように立派な建物の内部にあり、周りは豪華な大理石と、彫刻で埋められていた。ナポレオンが使用したという辞書もガラスケースの中に展示してあり、わたしは興味を持ち、なんとか中を見てみたいものだと思っただけで、警備の人に頼んでみたが、当然のように断られた。そこで、管理事務室まで行き、ちょっとでいいからと、片言のフランス語で頼みこんだ。係員は、そんな外国の観光客が多いのだろう。慣れた口調で、ガラスケースの鍵を手についてこいと、顔で合図をした。

果たして、総革のぼろぼろの辞書だったが、ナポレオンの汗と指紋がついている辞書をわたしは手にとることができた。自分でも感激のあまり、手が震えるのを止めることはできなかった。やはり、調べてみたいことは万人共通のことで、不可能という文字があるかということであった。辞書は、ページがところどころ切れて、文字も定かではないところがあり、かなり使いこなしていたことを証明していた。しかも、ナポレオンというのは確かに勉強家であったとみえ、ページの余白にペンで解釈の書き込みが随所にしてあるのだった。その文字も走り書きとはいえ、実に品性のある字である。辞書もここまで使われたら、役目を終えたいと思う。そして、いよいよ不可能のところまで辿り着くと、その文字impossibleだけがペンで掻き消されているではないか。なんだ、そんなことだったのか。わたしは、多分、多くの観光客がしたように納得した。初めからその語彙のない辞書なんかあるはずがない。

わたしは古本屋という職業柄、本には異常な興味がある。どこに行っても、本があれば立ち止まり、覗いてみようとする。趣味で物書きの真似事をするので、辞書にも興味がある。ただ、最近では電子辞書の普及で利便性から、紙の辞書が売れなくなり、どこの古本屋にもごろごろと余っていた。買いも安い。以前よりは売れなくなっていた。百科事典なんかは、どこの古本屋も買わない。それで、毎日のように仕入の依頼の電話がくる半分は、百科事典を売りたいとする電話だ。どこの古本屋も断る。ご丁寧に、林語堂ならなんでも買うようだと、他店で宣伝してくれるものだから、あちこちから殺到することになった。

「林語堂さんで買わないと、ゴミだって云われました。」

と、うちがまるで本の最終処分場のような云い方。酷い。確かに、勿体ないと思いつつ、つい捨てないで店に置いておく。百科事典は場所もとる。ブリタニカだろうが、ジャポニカだろうが、平凡社の大百科だろうが、十年以上経ったものはいらない。車の年式と一緒に、古くなればなるほど役には立たない。

「その辞書は第何版ですか」という質問が多い。小説なら初版なのだが、辞書は後の版ほどいい。間違いが訂正されてくる。新しい現代用語も入る。

事典も辞典もまた字典も売れない時代に入った。百科事典なんか、わたしも平凡社の大百科をCD二枚で持っている。いまやパソコンですぐに検索できる。

英語、フランス語、スペイン語でもなんでも、英和でも和英でも、辞書なんか買う必要がない。ネットで辞書サービスをしていて、世界各国の言葉が、いまや無料で調べることができる。これではいよいよ古本屋もいらぬ。

神田の古書会館でやっているセリに、一度、某閣僚のご自宅から売り立てがあった。すべて某とし、持ち主の名前は伏せるのが通例だが、噂で、それが小泉家から出たものだということが、囁かれていた。総理大臣がどんな本を読んでいるのか興味のあるところだった。

普通、セリは簀の子の上に本を縛って棒にして載せていたり、一点ものならそのまま並べられ、札を封筒に入れてゆく。某閣僚は、古本屋に処分を依頼したのだ。それは、一括売りで、どうも札の入りがよくない。封筒の厚さを見れば、札がどれだけ入っているか判る。どうやら空っぽのようだった。

それはそうだ。われわれ業界では会社の社長と政治家はろくな本を持っていないというのが相場だった。政治経済、経営のハウツウものなど、過ぎてしまえば終わりの本が多い。それとやたら豪華な大型本。それらは買わせられたものが多い。買ったときは何十万もしたかしのいが、そんな豪華限定本は、法外な価格設定が多く、中身はあまりない。売りも買いも安いのだ。

某閣僚の蔵書には、マンガ本とH本も入っていた。Xジャパンのツアーパンフも混じり、いいと思うのはクラウゼヴィッツの戦争論ぐらいで、あとはくだらない贈呈本ばかり。死んだ代議士の遺族が出したまんじゅう本といわれる、どうでもいい本ばかり。葬式まんじゅうに掛けて、葬儀で配るからそう云われた。

わたしは、その中に新品同様の辞書を発見して、何気なく手にとった。辞書が手垢もついていないということは、あまり勉強しなかったということだ。辞書の裏表紙にJ・Kのイニシャルが書かれていたから、あの人の辞書には間違いがなさそうだ。

わたしは、ぺらぺらとめくっているうちに、その辞書が特殊な辞書であることに気づいた。なんと、平和という文字がないではないか。そして、自衛隊という言葉を見ると、軍隊とあった。第九条というところを見ると、そこは削除されていた。「吾輩の辞書に平和という文字はない」一まさに、勢いに乗った和製ナポレオンの私製辞書であった。

第814話 人妻の料理法

次のターゲットは小山内夏樹三十八歳。

子育てをある程度卒業した母親たちが、PTAの寄り合いの後に、夜の街に繰り出すのは珍しくない。たいてい、同じくらいの年齢の女性たちが、三人くらいでスナックで呑んでいると、そ

の年齢に近いぼくは、ひとりカウンター席で呑んでいて、いつか声をかけられる。

さも、単身赴任で、上場企業の地方支店に勤める真面目なサラリーマンといった雰囲気です座って呑んでいけばよかった。

夏樹は、三人の中ではひとり浮いているような若さと美貌があった。結婚して十五年。そろそろ周りが見えてくる。寄れば集まれば亭主の悪口と愚痴だ。カラオケで、彼女たちの好きそうな歌をうたうと、うっとりとして手をたたいてくれる。

ぼくは、なんとかして夏樹のケイタイのメールアドレスを訊いた。それは名刺代わりに交換することで、ひとつの秘密のホットラインを持つことになる。

夏樹はスッピンでも十分いけた。肉付きもほどよくあり、美味しそうだった。彼女と話して、ごくりと唾を呑んだ。

獲物を捉える攻略法は、強引でもなく焦らず、時間をかけなければならない。なんとか、メール攻勢で、気持ちを引きつけながら、次のチャンスを待っている。最初は食事だ。あくまでも食事だけ。決して深追いはしないこと。下心があっても、見せてはならない。二度目は、映画だ。それも、カフェで軽いアルコールぐらいで九時前には帰す。紳士的に振る舞うことで安心感を与えるのだ。

そして、三度目の密会の夜がきた。互いに家庭があり、狭い街だから、どんな目があるかもしれない。ツーショットで見られるのはまずいから、逢うときは、できるだけ目撃者の少ない場所がいい。あるいは、かなり混み合っている洋風居酒屋ぐらいが、明るくて安心させることができる。

ぼくは、今夜、いよいよあのことを決行しようと思い立った。それで、予定通り、夏樹に強い酒を勧めた。

「あら、わたしを酔わせて、何をしようとするつもり？」

その手には乗らないわよ、と云った女の嗤いがあった。とても一筋縄では行かない相手だ。ご馳走はそうやすやすと手には入らないのだ。そこにハンティングのスリルと醍醐味があった。

「まあ、ぼくのほうが酔ってきたようだよ。君は顔色を変えないね。酒には滅法強い。無論、男にもね」

「あなたも物好きね。みんな若い子がいいというときに、どうしてこんなおばさんなの？」

「若い女の子は味がない。やはり女性は成熟しきったところに深い味が出てくるんだ」

「酸いも甘いも噛み分けた？」

ぼくは夏樹の云った言葉を取り違えてどきりとした。

「酸味はある。甘味もあるね」

夏樹は何でも知っているような目でぼくを見つめていた。ぼくは、夏樹の足を見た。ごくりと生唾が出てくる。足フェチのぼくは、レッグが大好きだ。

「何見ているの。いやらしい。わたしの足が太いって思っているんでしょう。そこだけは成熟しすぎて、網タイツをはいていたらー」

「ボンレスハム」ぼくたちは同じ想像をして嗤いあった。

ぼくは時間を気にしていた。亭主が待っているから、門限があると、いつもはそれを気にしているのだが、今夜はそうではない。実行する計画があったからだ。「ねえ、わたし、すっかり酔

ってしまったわ」

夏樹の体には火照るくらいアルコールがしみていた。これで下ごしらえはできた。

「しょうがない人だな」ぼくはもたれかかる夏樹を支えながら、

「ぼくのマンションに少し寄って、休んでゆかない？ 酔いを醒ましてから帰ったらいい」

「あなたの好きにして。どこへでも連れて行って」

しめた。ぼくはこの言葉を待っていた。ぼくは、タクシーで、少し離れたところで降りると、暗い夜道をアベックのように寄り添いながら歩いた。ぼくのマンションの部屋に、まんまと夏樹を連れ込むことに成功した。

「シャワーでも浴びないかい。さっぱりするよ」

そうして、夏樹をバスルームに案内した。夏樹がシャワーを浴びる音がしていたとき、ぼくはシャワールームに入って行った。夏樹は全裸で、前を隠しながら、云った。

「気の早い人」

「ごめん。どうしても我慢できないんだ」

ぼくの手に出刃庖丁が握られていたのを夏樹は知らない。

ああ、ぼくは、この最高の夜を堪能していた。久々に、人妻の刺身を食していた。やはり、新鮮な肉は違う。ぼくの見立ては間違っただけではなかった。夏樹の肉は霜降りで、柔らかく、口の中でとろけそうだ。明日は太股のステーキにしよう。塩胡椒は降って、冷蔵庫にすでに寝かせてある。骨付きカルビは、独自のタレに漬け込んであさっての晩ご飯は焼肉だ。残った部位の肉はすべて冷凍しておいた。でも、前の二体の人妻の肉がまだ冷凍したままだった。

ぼくはワインで一杯やりながら、アルコールが回って柔らかくなった生肉を刺身醤油でいただきながら、不思議に思っていた。どうして、こんなに美味しいものが身近にあるのに、人は人を食べないのだろうか。

第815話 回転ドア

回転ドアが事故から脚光を浴びるようになったが、このドアは個人的にはいつも怖いと思い、隣の普通のドアから出入りするようになっていた。何か、挟まれるのではないかという恐怖感がつきまとうのは、誰もそうかもしれない。その恐怖が現実のものになってしまった。子供たちは遊園地的な面白さがあるが利用したがるかもしれないが、大人はどうも恥ずかしい。狭い空間にたまたま見知らぬご婦人と一緒になれば、観覧車に二人きりで乗っている錯覚を一時覚えるのでドアが手動であれば、一緒に押すという共同作業がなにかと照れる。

わたしは、新しいもの好きで、どこかにビルが完成したとなると、さっそく行って見たがる性分だった。地方都市に実験的に大手建設会社が建てた、省エネ、ゼロエネルギーのビルが建ったときいて、そこを見学に訪れていた。十五階建の全面ガラス窓でできているような細長いビルだ

った。入口は四カ所あり、それがすべて回転ドアが設置されてあった。ドアはすべて手動であり、極力、外部から引き込む電気は使わない設計になっているという。いわば自己完結型の未来のビルなのだ。

天井を見ても、低くなっている。普通の住宅と変わらない。何か、圧迫感はあるが、わざと天井を高くして無駄な空間があるから空調にものすごい経費がかかる。吹き抜けなどという、一見豪華で格好はいいが、何の意味もない広さを暖めたり、冷やしたりしているのだ。これからの二十一世紀のビルは、すべて効率を考え、無駄な広さや間取りはやめる方向にあった。車百台以上のカロリーをこのくらいのビルはカロリー消費する。公害を撒き散らすのは車や工場だけでない。いまや、普通のビルが問題なのだ。

この新世紀のビルは、全く電気を供給しなくても機能を果たしているということだ。どういう仕組みになっているのか、案内の係員に質問していた。

「昼と夜の温度差を利用した放射冷却システムで、夏の冷房をまかなっております。建物の外装に使用している金属部分がすべてその装置の役目を果たしています。また、全面ガラスと見えるのは、すべてソーラーシステムでありまして、室内の電灯やコンピュータの電源をまかなっております。電灯はすべて、省エネ型の液晶を使い、従来の蛍光灯の十分の一の消費電力で、同じルックスを得ております。窓をご覧ください。ところどころに滝のように水が流れておりますね。あれは、太陽エネルギーで、お湯を作り、冬の暖房、湯沸かしにも使用しています。ですから、このビルにはボイラーがありません。重油や石油、ガス一切を使用しないで済むのです」

多くの訪問者たちと説明を聞きながら、時代が変わってゆくのを実感していた。すべての電化製品も、電力消費を抑える方向に開発されて、かなりの効果を出していた。

「このエレベータは、モーターを使用しておりません。滑車で錘を載せたり下ろしたりしているだけで、上へ昇り、下へさがるという原始的な方法をとっております。内線電話も、電気を使用しない糸電話の応用です。音声をカーボンと糸の振動で伝えます。多少、聞きづらいかもしれませんが、これからの技術革新で、さらにコストパフォーマンスは向上すると思います」

ビルのコンセプトは無公害であること、光熱費をゼロで抑えることの二つだ。一般の家庭までこの思想と技術が進めば、もう、電力会社は倒産だ。原発や核のリサイクルだと騒ぐ必要もなくなる。まして、イラクの石油利権だと、戦争も起こらない。

「でも、本当は、ここの電力を作る主要な発電装置は別にあるんです。ただ、それは企業秘密で、皆さんにお教えするわけにはゆきませんが」

と係員はにやりと嗤った。何だろうか。ひどく気になる。後は、バイオガスの利用だろうか。排泄物から出るガスを燃料に使うのはアフリカでも行われている。ビルの屋上には巨大な風車がある。風力発電も説明を受けたから、それでもなさそうだ。

わたしは、ビルの中を自由に見学していて、黒いドアがあるのに気が付いた。しかも、そこには無断で入らないでくださいと、張り紙がしてある。そうになると、入りたくなり、何があるんだろうと覗きたくなるのが人情というものだ。どうやら、外観からして回転ドアのようだが、外からは中が見えないスモークガラスを使っていて、ますます怪しい。

わたしは、誰も見ていないことをいいことに、そっと回転ドアに入った。中は真っ暗ではない。薄明かりが点いていて、ガラスの向こうに何かが見える。肌を露出したモデルのような綺麗な

女の人がこっちを見ている、回転ドアの隣のスペースにいるようだ。

「あのう、あなた、こんなところで何をしていますか？」

と、わたしが訊こうとして、ドアを押すと、回転ドアはくるくると回りはじめた。女の方は、別に押しているふうも歩いているふうもなく、こちらをじっと見て微笑んでいるのだ。その人はやがて、一枚ずつ服を脱ぎはじめていた。

「ええ？ 嘘だろう。こんなビルの中で、まるでぼくを挑発しているようだ」

わたしは一生懸命にドアを回していたが、三百六十度は回転したはずなのに、出口も入口もないのだった。おかしい。ぐるぐるとドアをわたしは押していた。すると、女の方はいつか消えていた。今度は、後ろから異様な物音がした。振り向くと、後ろのスペースの中にいつの間にか、ライオンがいるではないか。太い前足をガラスにかけて、ガリガリとやっている。そして、吼えだして、わたしにいまにも噛みつきそうになる。わたしは必死で逃げた。逃げるにも、ドアはぐるぐると回るだけで、出口も入口もない。

「助けてくれ、ここから出してくれ」

わたしは、すでに恐怖で泣き出しそうな声を張り上げていた。どうして出口がないのだ。非常ベルもないようだ。大声で助けを呼んでも聞こえないのか。ただ、ハムスターのように同じところをぐるぐると回っているのだ。

そして、汗びっしょりになって、走るのをやめたとき、出口が突然に開いた。わたしはふらふらになって見学者たちのたむろしているフロアに出られた。

そこへ、先ほどの案内人がやってきて、実に愉快そうに訊くのだった。

「どうでしたか、いい運動になったでしょう。これは、止まるとドアが開く仕掛けになっているのです。そして、あなたの起こした電気は三キロワットでした」 その回転ドアが、発電機になっていたとは知らなかった。

第816話

親父の背中

子供は、親の背中を見て育つ。親父の広いはずの背中、小さくなった。齢八十七になろうとしていた。顔もじっくりと見ると、あのダンディも枯れて、見る影もない。あれで女を泣かせたとは思えないほどの、よぼよぼになっていた。そして、最近は何も忘れが酷く、斑ボケというやつで、一瞬、ぼんやりと止まっているときがある。同じことを何度も云うことに何度も返事をしなくてはいけない。

わたしはああなりたくないと思っても、我が家は男はみんなボケる巻だから、いずれ、なりたくないと思っても、順番がくるのだ。しからば、いまからボケ方をよく観察しておこうと書き綴っている。

親父は、自分がよく忘れるものだから、その時々メモをしていた。筆まめなほうで、手紙もよく書いたし、何かいつも書きものをしていた。それは日記のようだった。しかも、一日の終わりに書く日記ではなく、いつも実況中継のように、「いま、車に乗って弘前に向かっている。お堀の桜は満開だった」

というぐあいに、アルツハイマー患者が、自分を見失わないように必死でいまという生きた証を書き留めておくように書いていた。

いつも、新聞を読んでいないときは何か図書館から借りてきたり、古本屋から買って来たような本を読んでいるのが常であった。わたしが勧めた本は、メモしておいて、借りて読んでいた。森本哲郎を勧めたらすっかりとファンになって、講演会に行つて、楽屋まで押し掛けて、一緒にコーヒーを呑んできたという。

時に住井すゑのファンになったり、どちらかというと、ひとりの作家に取り憑かれるほうだった。そんなところがわたしも似ていた。

「おやじ、その本は家にあるよ。読んだじゃないか」

と、わたしに叱られるほど、同じ本を何冊も買ってくる。気に入った題で、また読んでいても、読んだ片っ端から忘れていたのだ。わたしもそうなるのだろうか。おふくろのほうで醒めた目で見ていて、

「あんなに毎日本を読んでも、頭には入っていないんだよ」

そうかもしれない。それでも、若いときからの読書習慣はなかなか抜けないので、本を開いているだけでも安心するのもかもしれない。

昭和二十三年に親父は、シベリア抑留から帰ってきた。三年もの間、ソ連の極東のラーゲリに捕虜として収容されていた。厳寒の地では六十万の捕虜たちが強制労働に従事させられ、十万近い捕虜たちが病気と寒さで死んだ。兵隊だけでなく、民間の男たちも連行されたと聞く。

親父は数字に明るかったので、野外の木材の伐採作業ではなく、経理として内勤をさせられた。もともと満州の営林署にいたから、木材の計数管理は慣れていたのだ。そこの所長にいたく気に入られ、自分の娘と結婚してくれないかと、ロシア人の娘と危うく結婚させられるところであった。

捕虜たちは、毎日のように作業が終わると、マルクス・レーニン主義を叩き込まれる。三年間ですっかりと洗脳された親父が、引き揚げ船で、舞鶴に上陸した。港には、全国各地の戦災の様相などが写真で展示してあり、その中に青森もあった。帰ることは、四月に収容所から届くか判らないハガキを出していたが、それから三月もかかっていた。初夏の日差しが暑かった。

おふくろは、満州にソ連軍が攻めてきてからは、一年余りも新京にいて、食うや食わずの生活をしてきて、ソ連の暴挙を目の当たりに見てきて、すっかりと共産党を恐れ、嫌いになって昭和二十一年に引き揚げてきた。

その夫婦が、戦争で離ればなれになって青森で三年ぶりの再会をすることになった。ゲートルを巻き、背嚢を背負い、ぼろぼろの軍服のつれあいの眼は厳しく、まるで人が変わったようだったとおふくろは述懐する。

親父は、帰るとすぐに共産党に入党した。赤平木材に勤めながら、活動家として動いていた。

やがて、勤めを辞めると、戦前に銀座の洋菓子屋に勤めていた経験を活かして独立して店を持った。小さな工場に洋菓子の店とカウンターだけの喫茶店。親父は工場で菓子を作り、おふくろは店に出た。

店はいつも党員の溜まり場になっていた。大沢久明氏や塩崎要祐氏、ときには秋田雨雀氏なんかもやってきた。レッドパージでマッカーサー旋風が吹き荒れると、みんな地下へ潜った。親父も、秘密の暗号めいた紙をしのばせていたという。ピラなどを密かに刷って、配っていたから、おふくろはそれを嫌い、みつけるたびにストーブにくべた。

商売をしていて、銀行が融資を断ってきた。親父が共産党員であることで、支店長から相手にされなかったのだ。それで自ら進んで民商の支部を作ったりして、仕事の上でも結束することになった。

おふくろはそういった左翼思想には過度なアレルギーを示していたので、よく夫婦としてやっていったものだと思う。

昭和二十六年。わたしが、待望の男子として生まれた。跡取りもできたから、脱党してくださいと、家族会議で詰め寄られ、親父は泣き泣き共産党を脱党してきた。そして、生後一週間のわたしを抱いて、男泣きにおいおいと泣いた。

「世界が幸せにならなければ、おれの幸せは来ないんだ」と云っていた親父が、初めての男の子を抱いて、悔しまぎれに、

「おれは、この子をモスクワの大学に入れるんだ」と、云ったことが、我が家では語り草になっている。

あれから半世紀余り。いまは歩くのも容易でなくなったおふくろと、半分ボケた親父を病院に車で送ってゆきながら、政治の話になると、左翼じいさんと右翼ばあさんの喧嘩が始まる。と、云っても、とんちんかんな会話に近い。その中で、まあまあと、中道にならなかった息子がいる。

親父はよく本を買い与えた。その影響だけではないだろうが、どこからかくるわたしの中に流れている反骨の血を近頃不思議に思うのだ。

それにしても、親父の背中、哀れなくらい小さく見えた。

第817話

未納ファミリー

市役所から電話が来る。

一北村拓也さんですね。国民年金が未納になっていますが。

拓也はドキリとする。督促状はすでにだいぶ溜まった。十枚溜めると、何かくれるのか。電話ならまだいい。そのうち、係員が家まで押し掛けてくる。

「はい、すみません。なんとか、遅れを取り返すよう努力していますので」と、ぺこぺこして

いる。こんなことは誰にも云えない。実に恥ずかしいことだった。

ところがだ。ここにきて、なんと大臣の半分近くが国民年金の未納だ。いままで、こそこそと押し黙っていた拓也は、急に気が大きくなってきた。

「おれよう、年金を少し溜めていてさあ、未納なんだよな」

「ええ？ 本当、まるで大臣みたいね」

いままではただの貧乏人だったのが、急に大臣呼ばわりされる。自分がひどく偉くなったように思う。いまは、未納であることが恥ずかしいことではなくなった。堂々と公言してはばからない。

「未納だなんて、北村さん、格好いいわ」と、女の子までそう云うから、何か世の中逆になった。

ついでに、未納兄弟に入れてもらえないものかと、政府の広報に電話をしてみた。全然取り合ってもくれない。それを先輩に話すと、

「そりゃ、格が違い過ぎる。向こうは、おまえ、金があり余って、それで一万三千いくらの端金をバカにして払わないだけなんだ。それに、将来は、年金生活なんかしなくても、うなるほどの財産があるんだ。そんな、月に五万くらい貰ってどうするのと、軽く見て払わない連中だ。それに比べて、おまえは、本当に払えなくて払っていない貧乏人だぞ。どうして、兄弟どころか、親戚にもさせてもらえないさ」

そう云われて、拓也はしゅんとなった。

「でも、おれには、電話は来る、取り立てに係員まで家庭訪問するのに、どうして大臣や代議士の家には取り立てに行かないんだろう」

そう思うと、急に腹が立ってきた。拓也は、いまをときめく未納兄弟に名を連ねてもらわなくてもいい、自分たちで未納ファミリーを組織してやろうと考えた。

そこで、さっそくインターネットのメーリングリストを立ち上げて、管理者になると、会員募集と呼びかけた。すると、即日に全国から、入会申し込みが殺到した。入会金はなし。メールとネットの掲示板で、年金問題に対して文句を云ったり、実状を訴えたり、払わない主義の人は、その信念を書き込んでもらいと、未納ファミリーは賑やかに意見交換をしていた。

一将来、年金は破綻するんでしょ。そんなところにお金を注ぎ込んでも損するだけだもの。

と、若い人たちの声が出た。

一将来の五万円より、いまの一万円が重い。ぎりぎりやりくりしているから。

と、主婦の書き込み。

一うちのじいさんなんか、月割りにすると二十万以上も年金を貰っているのよ。年にとって、どうしてそんなに金が必要なのよ。別に欲しいものとかおいしいものとか、家のローンとか、教育費とかあるわけでもないのに。

一そうだよ。一番、金がかかるのは、子供とローンを抱えたわれわれ四十代の家族だ。

一国民年金だけじゃ、将来はアパート代も払えないっていうじゃない。ということは、もらっても米代にもならないし、老人の独り暮らしで、国民年金だけじゃ餓死しろってことなのね。

いろんな話が出て、最後の怒りは代議士先生に向けられる。

一国会議員の未納者も二百人以上はいるんじゃないかっていうし、仕事もないぼくたちがどうし

て払わねばならないんだ。その前に仕事をよこせ。

と、就職浪人たちが叫ぶ。

一払ってもいない人たちが、国会で何を決めるというの。そんな権利があるの？

一年金を貰わずに、生活保護を将来貰ったほうがずっと得なんだってさ。

白熱しているネットだけではもの足らず、北村拓也は主催者として、オフでも未納ファミリーの集いをやろうと、呼びかけた。

すると、予想を上回る参加申し込みがあり、ホテルを貸し切りで、懇親会も兼ねたパーティをやることとなった。

大きなホテルの入口に「未納ファミリーの集い」と看板まで出た。みんなドレスアップして、ブランドもののバッグを競うようにして抱え、老なし若男女が、ちゃらちゃらと集まっていた。

主催者を代表して北村拓也が挨拶した。江川マキコさんに未納代議士までが、応援に駆けつけた。

みんな、こことばかりに不平不満をぶちまけて、景気よく高いシャンペンを抜き、ご馳走をビュッフェ形式で食べながら、氣勢を上げていた。

「われわれを誰だと思っているのだ。未納者だぞ、未納者」

いまだかつて、これほど未納者が威張っていたことはない。みんな、密かに大臣たちに感謝していた。

と、ホテルの係が、拓也に来客を告げた。

「主催者の方に是非と、三人の方がお待ちですが」

会場の入口に、怖い顔をした男たちが立っていた。

「はあ、どちらさんですか」と、訊くと、名刺を出した。見ると、なんと市役所の収納課。

「こんな、豪勢に飲み食いするお金があったら、なんとか国民年金のひと月分でもいいですから、みなさんに払ってもらえるよう、話してくれませんかね」

ちょっと派手にやり過ぎた。

第818話

自分探しの旅

三男の拓人だけが、いまだに定職に就かないでいた。スポーツ一筋でやってきて、一流選手にならないかぎり、それだけじゃ社会では食えない。喰うたためには、人のできないことを習得するか、難しい資格を取って、それを武器にして就職活動をする。ところが、本人は焦っているが、どうやら勉強はしたくないようだ。安穩として狭い就職の門から入れるか。

「いいんだ、おやじ、おれは、二十五になるまでいろんなバイトなんかして、フリーターで自分の中の潜在能力を見つけようと思う」

と、息子は自分探しの旅に出ることにした。

「それもいいだろう。いまして、ふらふらできないんだるただ、三十過ぎてもふらふらとフーテンをしていれば、それは問題だな」

と、何をしても若いときには無駄がないと、何でもやってみろと父として云ってやるが、「どうして、自分を見つければいいんだよ」と、本人から電話でしつこく訊かれるから、「判らんやつだな、てっとり早く、自分の顔写真を持ってだな、あちこちで聞き廻れ」と、父親はいいかげんな返事をした。

「そうか、自分の写真ねえ」

拓人は、関東無宿人で、親戚兄弟、友人の家に居候しながら、自分の顔写真を手にしながら、駅前や商店街で、いろんな人に訊き回っていた。

「あのう、この人を知りませんか？」

「この人って、これは、おまえさんじゃないのか」

「ええ、そうなんです、別の自分がどこかにいるようで、ずっと探しているんです」

「あんた、大丈夫かい。頭、調べてもらったほうが……」

と、大概は相手にされない。

「あのう、こんな人を捜しているんですが」

と、女子高生たちに問いかけると、

「ええ？ なに、これって、自分ですよ。おかしい」

と、みんな一目散に逃げてゆく。笑いながら振り向いていた。

拓人は思った。そうか、写真を見せるからいけないんだ。そこで、人の出入りの多い駅前のコンビニに入って、店長らしき人に訊いた。

「あのう、ぼくにそっくりの別のぼくを見かけたことはありませんか」

「はあ？ 何を云っているのかさっぱり判りません」

「ですから、ぼくであって、ぼくでない、もうひとりのぼくを捜しているんです」

ここでも忙しいからあっちへ行けと、まるで気違い扱いだった。

拓人は、自分を捜すということが難しいものだということが判ってきた。だが、めげない性格だから、なんとしてでも自分自身を見つけるまでは旅は終わらないと心に誓っていた。

拓人が、鎌倉までやってきたとき、やはり、道を尋ねるように、通行人を掴まえて訊いていた。

「すみませんが、この辺りに、ぼくがいませんでしたか」

「朴さんって、隣の国の人かね」

「いいえ、違います。ぼくですよ、このぼくなんです」

「心理クリニックなら、その辺にあったがな」

と、そこでも相手にされない。

「難しい質問だわね。ぼくのように、ぼくでないぼくを捜しているのね。それだったら、ほら、この先の石段を昇ったところにお寺があるから、そこの和尚さんに訊いてみたらいい。難問はお得意だから」

拓人は、云われるまま、石段を昇ってゆくと、山門があり、手入れされた庭が綺麗な禅寺に入っていた。

なんと云って入ればいいものかと拓人は悩んでいた。人生経験だけでなく、生き死にに就いても解答をくれるのではないかと、期待して玄関に立った。たまたま、出てきた雲水さんに、住職さんにお目通り願いたいとわけを話すと、暫く待たされてから、寺の中へと通された。

廊下から柱から黒光りしている。かなり由緒あるお寺らしかった。拓人は緊張して年若い雲水についていった。住職は、石庭の見える部屋で、茶を入れていた。

「ささ、そこにお座りなさい。自分を捜しておいでだそうな」

住職は、茶をすすめながら、自分でも一服していた。

「はい、本当の自分に出会いたくて旅に出ました。一体、ぼくはどこにいらっしゃるのでしょうか」

「それはいい問いかけです。我は何者なりという公案ですか。すでに答えは出ていますぞ」

「ええ？ 知っているんですか。ぼくがどこにいるのか」

住職は、すくりと立ち上がり、庭に降りると、拓人もそれに続いた。そして、住職は一本のウドの大木を指さして、叫んだ。

「おぬしは、あれだ、あの木そのものだ」

すると、その一言で、拓人は開眼した。懐かしさで、涙がとめどなく流れてくるのを抑えることはできなかった。

「ああ、それがぼくなんです。よかった。ようやく、ぼくを見つけた」

拓人は感激のあまり泣きながら、大木に抱きつき、頬をすりすりしていた。そこで旅は終わっていた。図体ばかり大きい拓人と同じ木だ。こんこんと叩けば、拓人の頭と同じ音がする。

「やはり、これはぼく自身なんだ」

中身が空っぽのもの云わぬ木の中で、それからの拓人は暮らすようになった。

過疎の村へ

県庁の中でも若さとバイタリティでは誰にも負けないと自信満々で、レスリングでは国体選手だったこともある小畑直樹は、直属上司に呼び出されていた。

「小畑くん、君にいい話が出ているんだ。東日流外郡の荒羽場気村だがね、そこで助役を一人頼むと云ってきている。そこで、すまんが、君に三年ほど行ってもらいたい。いや、三年とは云わない。もし、君が気に入ったら、何年でもいいんだが。無論、給与はいまの何倍にもなるし、村では庭と池のついた特別な官舎も用意すると云っているんだが、どうかね、またとないチャンスだとは思わないか」

直樹は、突然の話にどぎまぎして、信じられなかった。

「わ、わたしのよな、若い職員にはあまりの大役と思いますが……」

「そうでもないよ。独身でなければ転勤も大変だし、第一、体力を使うハードな仕事だ。若い人でなければ務まらないかもしれないと村では云っている。いい返事を待っているよ」

ということで、四月から荒羽場気村の助役として、若干二十七歳の小畑直樹が就任することとなった。村は、人口が七百人という山峡の過疎の村だ。転出する人は毎年かなりいても、転入する人がいないから、どんどんと人口は減る一方だ。近くの市からでも車で一時間以上もかかる。

友人たちは、まるで葬儀のように直樹の送別会をやった。当の直樹だけは、この若さで、田舎とはいえ、助役さまという重職に就くことの恍惚感に浸っていた。

独身だから、そう荷物もない。車に積めるだけ積んで、村へとやってきた。ちまちまと段々畑と、林業を営んでいる村だが、基幹産業というものが無い。工場ひとつないし、無論、スーパー、コンビニ、パチンコ屋、喫茶店などもあるわけがない。小間物屋と食糧雑貨屋が二軒だけあるだけ。病院もない無医村だから、週に二回、近くの町から医者が往診にやってくる。

村で一番若くて綺麗な秘書が出迎えると云っていたが、案内に立ったのはどう見ても六十近いおばさんだ。

「あのう、一番若い秘書の方は？」と、直樹が訊くと、

「そりゃ、おらだ。この村では一番若けえ。まだ五十代だ。そんでもって独身だね」

秘書の職員は恥じらいで顔を赤くしていた。げげげ。ということは……。

「そんだ、ここの村の平均年齢は八十だば。じじと婆ばかしの村さ、よく来たねし」

「若い人は誰もいないんですか」

「みんな、仕事がねえし、農業なんかでは食べねえから、他県まで働きに行ったべ。ここじゃ、おまわりさんも、村長も、五人の村会議員も、先生もみんなボランティアに近い。みんなよぼよぼだ」

「学校はあるんですね」

「小・中学ひとつの分校みたいなのが。生徒なんか何人もいねえ。先生も本校からわざわざやってくる」

そういえば、道路はあるが車が走っていない。車を持っている家が殆どない。

「買い物なんか不便ですね」

「ああ、毎日、トラックで行商しにくるから、そこから買うのよ」

「電気は通っているんですね」

「おめえ、バカにすんな。いくらど田舎でも、テレビもあるど、ほら、ケイタイも持ってるし。ただ、電波が届かぬ圏外だども」

官舎は、豪邸と思っていたのが、なんのことはない、農家の空き家の払い下げだ。萱ぶき屋根の家に住むことになる。

役場に行くと、御年八十五歳という村長の出迎えだ。

「よく決断してくれましただ。この村はおめ様の肩にかかっているだ。頼みますよ。わしらは、もう何もできん体だから」

「はあ、前の助役はどうしたんですか」

と直樹が訊くと、

「はい、一人は逃亡、一人は自殺」

と、秘書が云ったら、村長は「しっ」と、口止めした。何か穏やかではない。この村には何かがある。直樹は、薔薇色の村を描いてきたのが、不吉な予感がしていた。

実に小さな役場だった。職員も年金を貰い、無給で手伝っているだけのOBばかりだ。みんな婆さんばかり。

「パソコンはないんですか」と直樹が訊くと、一台だけ誰も操作できないから埃をかぶって放置されていた。

「なにせ、地方交付税がかなり減額されて、村は合併からも見捨てられ、赤字でどうにもならんもんだから、村長以下、みんなボランティアにしたり」

自分の給与は出るのかと、直樹は不安になった。役場に電話がかかってきた。

「はい、ただいま、助役が到着しましたから、そちらに向かわせます」

さっそく直樹の出番だった。

「すまんが、井戸の水汲みに行ってくれか。婆さん一人で難儀しとるはんで」

「ええ？ そんなことまでするんですか？」

しゅしゅ直樹は山の上の水道も通していない家まで坂道を登って行った。きつい坂で車では無理だ。汗だくになって、農家に着くなり、井戸から水汲み。それが終わると、尾根伝いに歩いてゆく家で、一人暮らしのじいさんが呼んでいるという。行ってみれば、じいさんは一人では立てない体で、床を這って移動していた。

「おじいさん、どうしたんですか」直樹が抱きおこすと、

「便所に這い蹲って行ったども、間に合わんで、漏らしてしまったじゃ」

直樹は、不思議に思った。街ではホームヘルパーさんやディーサービスなどがあるが、こんな僻地ではそんな施設も人もない。不自由な体で日常生活を這ってまでやっている。

「わしのことはいいから、隣のクメ婆さんのところさ行って助けてやれ、身寄りがないし、昨日から何も食べていねえんだ」

隣と云ってもだいぶ離れている。玄関で声をかけると、虫の息の婆さんの声。大変だと中に入ると、すっかりと寝たきりで面倒を見る人がいない。直樹は、婆さんの下の始末をして、お湯を沸かして、体も拭いてやった。部屋が汚物で散らかっていたから掃除までした。それからお粥

も作って食べさせた。すっかりと汗びっしょりでくたくたになる。

少子高齢化が進むと、全国こんな村ばかりになるだろう。役場までへとへとになって戻ると、秘書が、また死にそうな老人の家に急行してくれという。あちこちから、一助役はいたか、助役はまだか。と電話が殺到していた。道ですれ違うと、「おい、助役、雨戸が壊れたから直してくれ」と、そんなことまで命じられる。

直樹はついに切れた。

「ぼくは、助役だぞ、助役、なんで、みんなして手足のようにこき使うんだ」

と、道端に座りこんで、はたと騙されたことに気づいた。

「そうか、助役って、ヘルパーのことだったんだ」

長寿のロシアの村では、一番若い人で六十七歳の村があり、若い人は一人もいないという。二人に一人が老人という時代が来たら、年金の問題どころではない。

第820話

無菌状態

インフルエンザだ、花粉症だ、ダイオキシンだと、空気中は、花粉とウイルスと科学物質、ダニや煤塵、排気ガスで充満している。現代人は病気にならないほうがおかしいくらい、汚染された環境で暮らしている。

ここに登場する中年男は、そんな時代背景が生んだ神経質な潔癖性の持ち主だった。健康とか自然食品とかには異常な興味を示し、人に勧められれば即実践、あれこれとやってみる性質だった。

というのも、親友が肝炎で亡くなり、同級生で突然死したやつもいて、かなり動揺していた矢先に、親が病気で亡くなった。周りで、次々と病死したり、入院したりしていると、次は自分の番かと極度に病気を懼れることとなった。

そんなときに、彼、浅田隆雄は雑誌でマクロビオティック料理のことを知った。「これだ。ぼくの求めていたものは」

と、さっそくこの街のカルチャーセンターで教室を開いていることを知り、通うことになった。マクロビオティックは、身土不二の思想から、その土地で生まれたものは、その土地で成った作物を旬のときに食べるのが体に合っているということと、作物は皮まま調理することから、有機栽培の玄米などを主食としている。食物にはすべて陰と陽があり、その組み合わせを大事にする。ただ、本来のマクロビオティックであれば、なかなか現代の食生活になじめないので、いまは、現代人でも取り入れやすいように、調理に工夫がされている。加工することで食物の組成が壊れるから、煮たり焼いたりせずに、粉食するのがいいのだが、それでは毎日食べるわけにはゆかない。

隆雄は毎日玄米を炊き、よく咀嚼して食べるようにした。野菜も自然農法で、化学肥料も農薬も使わないものを使用した。最近、有機栽培と偽る野菜が多いから、信用のおける農家から直接買うといったこだわり方であった。輸入ものや、ハウス栽培などは一切摂らない。すべてその時期に収穫されたものばかりだ。それも、空気のおいしい高原野菜だけをわざわざ山まで買い付けにゆく。

肉や魚は食べない。それを三ヶ月やると、体中の毒素がすべて排出されて、内部から浄化され、血も内臓もすべての細胞が綺麗になってくる。人間が病気になるのは、合成されたものを摂り入れたり、許容範囲であるから安全だという化学物質や薬を体内に蓄積させるからだ。隆雄は徹底していた。このままでは自分は肥満死するのではないかと、きちんとカロリー計算までして食べていた。酒や煙草は止めた。女もやめた。とにかく体に悪いことはすべて止めた。水道の水も怪しいから飲むのを止めた。わざわざ山に行き、湧き水を汲んできて、それをさらに浄化装置にかけて濾過すると、その水でご飯も炊いた。カルキの入った水道も毒のような気がしてきた。そんな食生活で、隆雄はいままで百キロあった体重が七十キロまで落ちた。玄米食は食べて痩せられる。余分な栄養は摂らない。ことに油分や糖分は摂らない食事だから、みるみる体重は落ちたというより、適正になってきていた。

家の中でも、ドアのノブを掴むときは手袋をはめたままだ。電車に乗ると、吊革なんかはティッシュで巻いて握る。極力、外部と直接触れないようにしていた。そこまで行くと、今度は空気だ。空気を吸うと、肺に毒が溜まるような気がしていた。それで、酸素ボンベとサーキュレーターを購入すると、酸素ボンベを背負い、さらに空気が直接肌に触れないように、宇宙服のような防菌服を着て、顔に頭からすっぽりとフードをかぶる。白装束の集団のように、上から下まで白だった。これで完璧だ。

隆雄の仕事はフリーライターだから、どちらかというとな家の中でばかり閉じこもり原稿用紙に向かっているのだが、たまに外に出るときは、防護服の重装備だから、みんなの笑う視線に耐えなくてはいけない。白装束のメンバーと間違えられて、インタビューを受けたこともある。みんな、気味悪がって近寄らない。

隆雄の家族は、子供たちはみんな社会に出て、奥さんと二人きりなのだが、そんな隆雄の潔癖性には呆れて奥さんは放っておくことにした。隆雄は自分の部屋をわざわざ改造までしていた。入口を二重にして、完全に密閉した空間を作ると、そこにスチームを四方に設置して、外から帰ると、消毒するように足下にはクレゾール液、そしてスチームで防護服を全身殺菌する。部屋に入って初めて服を脱げる。無論、部屋の中は、常に無菌状態に保たれていた。家族でも入室はできない。

ついで、部屋の中にはシャワー付きのトイレまで設備した。室内の空気は清浄機で徹底的に滅菌された。恐らく、ダニどころか塵ひとつない。特別の料理も、奥さんが作り、食器ごと瞬間殺菌されて、取り出し口から差し入れのように供される。どんな大病院でもここまではやっていないかもしれない。

一度、病院で検査を受けたら、血糖値も血圧もすべての機能と数値が正常に戻っていた。健康そのもので、問題は全くなかった。だが、それで無菌室から出てこればいいのだが、外に出るのが怖くなり、一年以上も、まだそんな無菌生活を隆は送っていた。家族はそんな隆雄を無菌無菌

マンとバカにしていた。

隆雄の高校のクラス会があった。どうしても断りきれずに、酒も飲めないし、料理も食べられないのだが、みんなの顔だけでも見に行こうかと、ちょっとだけ顔を出すことにした。またいつもの白い防護服で酸素ボンベを背負っての外出だ。料亭に出向くと、みんな一斉に笑った。

「何だよ、浅田、コスプレか、それとも仮装行列かよ」

隆雄がわざと目立つようにそんな格好で来たと思った。

「みんなして、脱がせてしまおう」

激しく抵抗する隆雄に四五人が乗りかかって、隆雄のかぶっているフードと酸素ボンベを取ってしまった。すると、どうしたことか、外気に触れると、隆雄は顔色を青くして苦しみだすと、その場に倒れてしまった。救急車が呼ばれた。クラス会は騒然となっていた。

隆雄は死んだ。診察した医師の話では、免疫も抵抗力もなくなって、即死状態であったという。この毒にみちみちた世界の中では純粋な人間は生きてゆくことができなかった。

第821話

自由についての形而上学的考察

うちで飼っているウサギは、初めは掌に載るくらいの小ささで、貰ってきたときは、あまり大きくならないと云われて、それならと我が家で飼うことになったが、それから二年、豚までとはゆかないが、のさばっている猫ぐらいには成長しやがった。またよく喰う。ウサギはものの本によれば食欲で、食い気となにの気だけは人一倍でなく、動物一倍あるとか。

だが、ウサギを飼っていいこともある。残飯整理に役立つのだ。生ゴミの排出が我が家では減った。肉食ではないから、肉魚は食べないが、野菜屑は食べてくれる。林檎の皮なんか大好物だ。そうしているうちに、飼い主に似てぶくぶくと太りだし、檻も二回取り替えたが小さくなった。運動不足で、ぴよんぴよん飛び跳ねたいだろうが、それができないから完全な運動不足だった。それじゃ可哀想だと、暖かくなったから、玄関に犬のように首輪をつけて放し飼いにすることにした。

ところがである。ウサギの野郎、首輪を噛みきって逃亡しやがった。三日三晩、どこかへ行っていた。誰かが、貰って行ったものか。

「あんな醜く太ったウサギでも持ってゆく人がいるのかな？」と女房が云うから、

「バカ、美味しそうだろうが、まるまると肥えてまあ、鍋によし、火で炙って、とうがらしを付けてもよし」

「まるで、カチカチ山みたいね」

そんな会話をしていたが、少し淋しいが、世話をする手間が省けたというものだと、半ばほっとしていた。というのも、子供たちが世話をするからと約束して飼ったウサギだ。もうこれからは何を飼うと云っても大反対する。絶対にお父さんは騙されないぞ。

そうしたところに、実にご親切に近所の人が、裏山で遊んでいたと、掴まえてきてくれた。出て行った女房が戻ったような心境だった。

鎖で繋ぐのはいいが、首輪はよくない。それも鉄製のものならいいが、やつら齧歯類は、鼠と同じで歯が鋭い。何でも噛みきってしまうのだ。そこで、大きなサークルを買ってきた。それを庭に置いて、中でウサギの放し飼い。それならいい。

「雨が降ったらどうするのよ」

と、女房が心配するから、

「過保護なやつめ、もともとウサギは野生なんだ。雨でも雪でも外にいるだろうが。それとも、レインコートを着ているのか、ん？」

確かにウサギは湿気を嫌うという。水もやらない。野菜や雑草から水分を摂る。寒いのは平気だろう。あんな毛皮着ていて。足が冷たくないかしら、靴なんかと女房はまだバカな心配している。ペットも過保護な時代になっている。

ところで、我が家の庭は毎年、雑草がすごい。近所で笑うほど、草ぼうぼう。見苦しいくらいで、旦那さんは忙しいからねと、云われるくらいだ。そこで、このウサギ、檻を置いたところの若草を食べてくれるから、檻を移動することで、自然と庭の草むしりができる。例のカルガモと同じやり方だ。これは一石二鳥というか、一兎二草。ズボラというのは智慧を出す。如何に効率よく怠けるか。それが革新的発明の母なのだ。

最近、女房がやけにめかしこんで、PTAだ、友達と飲み会だと、出かける。仕事とって、夜遅く帰ってくる。それが毎週土曜日ということも怪しい。しかし、こちらも負けじとあの会、この会と呑みに出かけているから、文句は云えない。たとえ、浮気をしていても、ちっとも焼きもちを焼かないところが醒めた夫婦の関係だ。男からメールが頻繁に来ているらしい。いや、それを自慢してわたしに見せる。ちくしょう、こっちはメル友もない。いたらこの年で気色悪い。「おれにだって、女の一人や二人はいるよ」

と、女房に云ってやるが、

「北村さんいますか」

と、家に電話や店に訪ねてくる人はみんな婆さんばかりだ。

「いいわねえね、あなたには女の人のファンがいっぱいいて。くすくす」

と、笑いやがる。

「うるさい」

若い女性に縁がないのは淋しいが、いまに見ている、見返してやる。

結婚して、何年で夫婦はお互いの自由を獲得できるのだろうか。うちのように、檻をとっばらい、首輪も外して、どうぞどこへでも行きやがれという関係になると、それもまたつまらないものだ。さあて、困った。行くところがない。

ウサギもそうだった。檻から出しても、逃げない。うろうろしているだけだ。縛られすぎたウサギは、檻がなくなったことに気付きもしない。それもまた悲しいことだった。

第822話

娑 婆

○つば付きの帽子に、ダボシャツを着て、腹巻きをした一見ヤーサン風のじいさんが、セールスお断りと玄関に貼ってあるドアから入り、玄関に腰掛けている。古びた革製の大きなトランクを開けている。対応しているのは、五十がらみの品のよさそうな奥さん。エプロンをしたまま、傍に立っている。

じいさん「お母さんよ、どうでえ、パンツのゴム紐だ。安くしとくから買いなよ」

奥さん「あら、お宅、ひょっとして、押し売りだったりして」

じいさん「押し売りたいあ、人聞きの悪い。まあ、若いときはそう云われたもんだ」

奥さん「いまどき、パンツのゴム紐だなんて懐かしいわ。それに、なあに、その格好、とてもクラシック」

じいさん「なんだとお、クラシックだと。おれはベートーヴェンか。バ、バカにするな。おれを誰だと思ってやがんでえ。先週、務所から出たばかりよ」（と 凄む）

奥さん「やはりね、そう思ったわ。あなた、長かったんでしょ」（同情するように）

じいさん「（ほろりとして）そうよ。若いとき強盗殺人で無期懲役をくらってから、四十年近くにもならあな。やはり娑婆の空気はうまいぜ」

奥さん「でしょうねえ。（笑いをこらえながら）いまどき、パンツのゴムなんか買う人はいませんわ。パンツなんか、安く売っていますから、切れたら捨てるのです」

じいさん「なんだとお、勿体ない。靴下に穴が空いてもか」

奥さん「靴下に穴が空いても捨てます。いまは女の人でも裁縫もできない人が増えているんですよ。それに、靴下も百均で売っている時代ですよ。そのゴム紐も、百円で売っています。千円だなんて、誰が買いますか」

じいさん「なななな、何と？ 百、キンドと？」（手も言葉も震えている）

奥さん「そうです。何でも百円で売っているお店があちこちにあるんです。そこではね、眼鏡も、腕時計も、トランジスタラジオもみんな百円なんです」

じいさん「ラジオが、百円……。（呆然としている）」

奥さん「面白そうねえ。他にどんなのを持って歩いているの？」（しゃがんで、トランクの中を覗こうとする）

じいさん「それなら、こいつはどうだ。ボールペンだ。どうでえ、書いたら消しゴムでは消せねえ。驚いたか」

奥さん「別に。うちの子はそんなもの使わないわよ」

じいさん「バカ云っちゃいけねえ。手紙書くときぐらい使うだろうが」

奥さん「手紙なんか書かないわよ。みんなケータイのメールで出しているもの。わたしもパパも、家計簿にしてもみんなパソコンで打っているもの」

じいさん「なんと、そうしたら、文字を書くことはしねえの？」

奥さん 「(うんざりした顔で) あのねえ、文字というのは、書くものじゃないの。打つものなの」

じいさん「……」(頭が混乱している顔)

奥さん 「他にないの? 珍しいものとか、おかしいもの」

じいさん「なら、これはどうだろうかねえ」(自信のない様子で)

奥さん 「まあ、懐かしいわ。唐草模様の風呂敷じゃないの。(両手で広げる) わたしが子供のときはよく、泥棒さんの定番グッズだったわね。これはいいかも。ショールみたいに体に巻くと、若い人なんか、和風ファッションブームらしいから」

じいさん「(気をよくして) それじゃ、こんなのはどうでえ」

奥さん 「なあに、これは。柄が派手で、田舎くさい」

じいさん「ネッカチーフって知らないのかよ。それと襟巻き。真知子巻きって、あれほど流行ったのに」

奥さん 「ネッカチーフって聞いたことあるけど、その真知子って何よ」

じいさん「おめえ、君の名も知らねえのか。ゲルマニウムラジオで聞いていなかったのか」

玄関のチャイムが鳴る。

奥さん 「はい、どちら様？」

セールスマン「ダイエットフーズですが」

奥さん 「セールスならお断りいたします」

と、テレビカメラのモニターを覗く。

奥さん 「ほら、あなたが、勝手に入ってきたから、ドアの外にもう五人もセールスが順番を待って並んでいるわ」

じいさん「なんでそんなに押し売りが多いんだ？」

奥さん 「それは、店で待っていてもお客はこないし、不景気でリストラされたり仕事がない人が増えたから、元手なしで簡単にできる商売でしょう」

じいさん「世の中、そんなに大変になったのか」

奥さん 「大変ってものじゃないのよ。デフレでモノは余っているの。これを見て頂戴。電話のファックスで、一日にこんなに買え買えって送りつけてくる。それに、通販のカタログもこんなにもあるのよ」(どっさりとしいさんの前に積む)

じいさん「す、凄え」

奥さん 「まだ驚いちゃダメよ。他に、一日にこんなにDMが来るの」(どさどさとじいさんの前にぶちまける)

じいさん、声もなく、ただおろおろしている。

奥さん 「それだけじゃないのよ。ケータイにパソコンのメールで押し売り攻勢もすごいし、テレビでもラジオでも毎日毎日通販通販。挙げ句の果てに毎日、うるさいくらいのセールスマン。電話が鳴るとみんなセールス、セールス。夜中にもかかってくるし、寝てもいられない。それによ、見て、この家の中。モノで溢れかえっているでしょ。タンスの中ははみ出しそうな衣類の山。押し入れは使っていない贈答品でびっしり。モノ、モノ、モノだらけなのよ。もう、なーんにもいらぬの。モノなんかあり余って、これ以上買ったら、寝る場所もなくなるわ」

奥さん、次第に興奮して怒り出す。じいさんは、その剣幕に後退りする。

じいさん「知らなかった。娑婆は、こんなに大変なことになっていたなんてよ」

奥さん「そうよ。あなたも、モノを売るなんてやめなさい。みんな、年金も将来貰えないかもしれないっていうし、借金だらけで、仕事もない。それに税金も上げてくる。そんな時代に出てきたのが運の尽きね」

じいさん「そうか、娑婆は地獄になっちまったのかい」（ちらりと、ドアの方を 未練がましく振り向く）

じいさん「なんだか、塀の向こうが住みやすく思えてきたぜ。あんがとよ」

じいさん、元氣なく俯いて、ドアを開けて出てゆく。

—暗転—

第823話

武装解除

イラクで突如として奇怪な現象が起こりはじめた。米軍の戦闘機が操縦不能に陥り、高度を上げ始めた。どんどんと垂直に上昇してゆき、大気圏外に出ると通信が途絶えた。それは、一機二機ではなかった。当時、偵察飛行をしていたステルスも、またイラク上空で監視を続けていた偵察衛星まで、レーダーから消えたり、通信不能になるなど、第三国のなんらかの介入がないかと、連日のホットラインでの首脳同士の話し合いが続けられていた。

それは、空の上だけではなく、地上でも起こり始めていた。イラクのレジスタンスの所有する銃器やミサイルが、突然空中に浮遊したと思うと、空高く吸い込まれるようにして消えていったというビデオが、イラクのテレビ局で放映された。

一方、ロシアの上空でも、ミグが数機行方不明になり、さらには、大陸間弾道ミサイルの発射場から発射台ごとミサイルが上空に吸い込まれていったと報じられていた。その現象は、イギリスでもフランスでも中国でも見られた。民間機までが、怪奇現象の犠牲になり、航空機が次々と宇宙に飛び出すように上昇して姿を消した。

各国の旅客機は、すべてのフライトを一時見合わせることで、空の交通は混乱状態にあった。それでも、制止も聞かずに、飛んでいった民間の小型ジェット機がやはり、次々と同じ運命を辿ると、飛ぶ飛行機はいなくなった。

それだけではなかった。現在、地球の軌道を回っている、有人、無人の衛星がすべからく機能停止して、天気予報も衛星放送も、データ通信すべてが遮断したまま、世界中が大混乱に陥っていた。

国連でも調査が続けられたが、原因がどうしても判らない。初めは武器弾薬などが主に狙われていたが、それが罪もない民間の航空機までが狙われるとは、全く、その狙いが判らない。何者かの仕業なのか、自然のなんらかのエネルギーによるものなのか、その両面で、各国が協力しあ

いながら、原因究明に努めた。

イタリアでは、高速道路を走っていた車が突如として空中に浮き上がると、ものすごい勢いで空に吸い込まれていった。トラックもバスも、電車も飛んでいった。ドイツでは商店の看板が、アルゼンチンでは工場の屋根が、空に消えたという報告が相次いだ。

国連の科学捜査班は、この現象に共通点として、強力な地場が発生して、金属が宇宙に吸い取られていると分析した。ということは、次に起こることは、街の崩壊だった。みんなの危惧が現実のものとなっていた。工場や橋、高圧電線や、鉄塔、東京タワーなどは、基礎部分からすっぱりと抜けるようにして宇宙へと飛んでいった。ビルディングも、鉄筋が内蔵してあるから、地中に埋められてある地階部分から、ものすごい力で抜かれると、空高く消えていった。

街ではいろいろなものが飛び上がってゆく。消火栓、電話ボックス、道路標識、鉄柵、腕時計をはめている人間たちまで、片手を取られるようにして、空中へと昇ってゆく。

市民に対して、警告はできない有様だった。電話も使えない。テレビも映らない。パトカーも消防自動車もすべて空に消えた。警官たちは、必死で、木立に掴まりながら、市民に注意を呼びかけていた。

「体に付けている金属を外しなさい」

眼鏡も、ひょいと空に浮いた。浮上するのを石にすがっていた人々も、腕時計やコインをすべて身から離れた。ベルトにも金属が付いている。不思議と、体から金属を取り去ると、浮上することはないのだった。

街はすでに瓦礫だけが残っていた。木造の建物と、街路樹を除けば、ビルもなくなり、コンクリートと石だけが、残されていた。貴金属にすがっていた強欲な人たちは、ブランドものの時計や金塊、買ったパソコンや、ケイタイ電話を握りしめたまま、空中に吸い込まれ、小さくなって、やがて見えなくなった。途中で手を離れた人たちは、ばらばらと地面に落ちてきた。

海上では、タンカーやフェリー、航空母艦や潜水艦なども、どんなに深く潜っても、吸い付けられるように空へと飛んでいった。船も車も電車も飛行機も、あらゆる乗り物が全世界から消えた。

強力な磁気が発生しているのはあらゆる計器で測定できたが、それは、地上にない全く新しい磁気で、鉄以外の物質、特に金属全般をも引き寄せるといふ力が天上から加わったことが発見された。だが、測定途中で、その計器類も建物ごと宇宙へと吸い寄せられていったので、いまや、人類は科学でも軍事でもすっかり丸裸の状態であった。

最後まで無事であった、南極のアメリカ基地のレーダーに、地球の三万キロ離れた軌道に、ものすごく巨大な浮遊物体を確認したという報告が最後に入った。それは、やはり最後まで残っていた無人衛星のレーダーにも捉えられていた。

瓦礫となったニューヨークの国連施設の跡に、科学者たちがたむろしていた。

「信じがたいが、その巨大円盤型は視覚では見つけられないものだそうだ。彗星か隕石の可能性もゼロだ。どうも、人工的に造られた宇宙船のようだと云うのだ」

ある国の学者が云った。

「そんなものがこの世に存在するはずがない。大きさは少なく見積もっても直径五千キロもあるというのだろう。地球に近づくまでに見つけられなかったのが不思議なくらいだ」

地球は、交通、通信、生産のすべてが停止した状態で、人々はただ呆然と空を仰いでいた。
「船長、イイ星ニ当タリマシタネ。イママデデ最高ノ収穫デス。コンナニモ金属ノアル惑星モ珍
シイ」

「ソウダナ、コレハ高く売レルカモシレン。サテ、マタ別ノ惑星ヲ探索シニ出発シヨウカ」

巨大な宇宙サルベージ船は、ゆっくりと地球を離れていった。船体の横には、会社の名前がその宇宙人の文字で書かれていた。

一宇宙鉄屑屋スクラッピー

第824話

宅急便

田沢家のベルがピンポンと鳴る。

「はい、どちらさまですか」

と、奥さんがドアを開ける。若い作業服の男が立っていた。

「奥さんここでは、ゴールデンウィークの家族旅行のプランは決まっているんですか？」

「あなた、旅行屋さん？」

「いいえ、鉢植えの花なんかいかがでしょうかね」

「花屋さんなの？」

「いいえ、あっ、そうだ、何か捜している本がありましたら、一週間以内にお届けいたしますよ
」

「本屋さんなの？」

「すみません。余計なことばかり云っちゃって。宅急便です。荷物が来ていますから、ハンコお
願いします」

最近の宅配便は、いろいろとセールスもする。宅配という機会を利用して、食品から事務用品、コピー用紙までなんでも売り込み配達をする。かつてご用聞きというのが、いろんな注文を取りにきたようなものだ。宅急便も競争が激しくなって多角経営に忙しい。

数日して、田沢家の周りを怪しげな男がうろついていた。それも夜遅く、玄関の電灯も消えているから、家族は皆、寝静まったようだった。その男は玄関の辺りを行ったり来たりしていたが、家の横に回りこんで、窓から中を覗こうとしていた。そのうち、ごそごそと懐中電灯を出してきて、電気のメーターを覗きこんでいた。そして、呟いた。

「なんだ、留守かと思ったら、いるじゃねえか。電気の使用が、冷蔵庫だけだと、こんなに早く回らないんだ。これは、他の電化製品を使っている証拠だ。ということは、起きているということだ。くそっ、手こずらせやがって」

男は、ふたたび玄関のドアの前に立つと、今度は、激しくドアを叩き始めた。

「おい、中にいるのは判っているんだ。ドアを開けろ」

そう大声で叫んだ。田沢さんの一家が何事かと、手にバットや、箒を持って玄関に集合していた。ドアの鍵が開けられた。男は解錠したのを確認すると、ゆっくりとノブを回してドアを開けた。男が顔を出した。

「宅急便ですが。夜間配達的时间指定でして。玄関のブザー、壊れていませんか」

宅急便もメール便と称して、数年前から手紙もやりはじめた。郵便局より十円安いから、みんな使うようになった。特に、DMの配達に、切手ならぬ宅急便のシールが貼られたメールが増えた。日本の郵便料金は世界的に見ても高いというから、これから過渡競争で、欧米並に下がってゆくのだろうか。郵便局VS宅急便の熾烈な戦いが始まっているのだ。どちらも、真っ向勝負で、サービス合戦だ。

とにかく早くなった。特急では夜、十時に出した荷物が、翌朝十時までには日本中どこでも到着するというのだ。昔は、四日、五日とかかったものが、翌日配達あたりまえの時代になってきた。そのスピードアップも競争で、ついに日本全国一時間でお届けするという超特急まで現れた。田沢さんの奥さんも、料金は高いが、出張に行った亭主の大事な忘れものを出張先まで届けなければならなくなった。そこで、その超特急便を使うことになった。

「本当に一時間で着くんですか。だって、飛行機でも一時間以上はかかるでしょうに」

と、奥さんは信じない。

「大丈夫です。こちらには新兵器があるんです。荷物はこれですね」

宅急便の配達員は、荷物を受け取ると、トラックの後ろにある円筒形の得体のしれないものの中に、荷物を入れていた。そして、操作パネルのパソコンから、目的地を入力していた。

「奥さん、下がってください」

すると、トラックの屋根がぱっくりと開いた。発射台がするすると伸びてくる。おやおやと思うまもなく、トラックの荷台から、ミサイルが発射された。

「すごいものですね。便利になりましたわねえ」

宅急便同士のサービス合戦は次第にエスカレートしてゆき、一日配達員に人気タレントを起用したりして、荷物を一個でも多く引き受ける戦いをしていた。

田沢家の玄関のベルがピンポンと鳴った。

「はい、どなたかしら」と、奥さんがドアを開けると、福原愛ちゃんが荷物を持ってにこにこ笑顔で立っていた。

「卓球便で一す」

その西ヨーロッパの小さな国を訪れたのは、これで二度目だった。前は、東側の体制が崩壊する前のお堅い国という印象で、そのときも観光には違いなかった。

わたしは、気が付いたらひとりになっていた。息子たちはそれぞれの道を歩き始め、一人去り二人去りと、家族はいずれ老人の一人暮らしというところまで孤独になってゆくだけなのだ。

長い間、わたしは車輪の下になって働いてきた。これからは自分のために生きようと思う。そのためには好きな旅行を毎年海外と国内と二回ずつ計画を立てていた。

その国に着いたのは、正午をいくぶんか過ぎたころであった。空港からリムジンバスで首都の賑やかな通りに面しているホテルへと入る。街並はすべて整然と建物の高さが揃えられている。十七世紀にはその原型がほぼ完成したとされる古都であった。それが、自由化の波ですっかりと様相を変えているのが、車窓から眺められた。第一、車がやたらと増えて、どこの道路もひどい渋滞をしていたのだ。そして、古都には相応しくない原色の看板が目につくようになった。ファーストフード店とかドラッグストアの有名チェーン店、それに日本の企業の看板までが、美観を損なうように乱立している。ヨーロッパの美学をアメリカの無感覚が壊している。そうとしか思えなかった。

ホテルに荷物を置いて、わたしはふらりと夕方の街に出た。さてと、どこへ行こうか。これからは美術館は閉館だ。何か美味しいものでも探しに行こうかと、歩道の真ん中で立ち止まっていると、警官が警笛を吹いて、わたしの方に指差しし、注意を促していた。何かしたのだろうかと、わたしは自分の周辺を見回した。とりわけ不審なことはなさそうだ。警官が走ってきた。

「♂♀☆○▽〒□◎！」と、こちらの言葉で叫んでいたが、わたしが外国人と知ると、少し訥弁な英語で話しかけてきた。

「立ち止まるな。歩け」

そう命じているのだ。何を怒っているのかさっぱりと判らない。他の人の通行の邪魔になっているとは思えない。

「歩けと云っているのが聞こえないのか」

ものすごい剣幕なので、わたしは訊き返していた。

「ここにいてはいけないのですか？」

「あたりまえだ。前進か後退か左か右か、歩行者には四通りの選択しかないのだ。立ち止まるという法律は我が国にはない。断じてない」

と、妙に威張るものだから、それはおかしいと抗議した。すると、警官は道路標識を指さした。それには車ではなく、人のマークに斜線が一本引かれている。

「歩道では駐人禁止なのだ。違反したときは反則金と点数が引かれることになっているのだ」

「そんな理不尽な、この国は自由になったのではないか。旧社会主義の国よりまだ頑固な法律が作られたのか。こんな思想も何もない法律を誰が決めたのだ」

わたしも負けじと怒っていた。

「思想だと？ 我が国を侮辱するのか。前進はすなわち進歩主義だ。後退は懐古主義、いや、経験主義といおうか。左翼思想も右翼思想もここでは自由が認められているのだ」

「だったら、立ち止まるという実存主義、いや構造主義を認めたっていいだろう」わたしは噛みついた。

「ダメだ。そんな唯物史観を無視した、弁証法に立たない思想は認められないのだ」

「自由だなんて、とんでもない。立ち止まる思想も認めないとは」

「おまえは、免許証を持っていないんじゃないのか」

警官は睨んで云った。

「自動車の免許証はちゃんと持っているぞ」と、見せると、

「それではなく、我が国の歩行者免許だ」

「なんですか、その歩行者なんとかというの？」

「やはりな、おまえを無免許歩行で逮捕する。いま、パトカーを呼ぶから、この先は歩いてはならん」

わたしは、それから警察署でこってりと絞られた。この国に入国する旅行者でも歩行者免許を持っていないものは、半日の講習を受講して、免許を取得した後に自由に出歩くことができると、法律が改正になっていた。というのも、自由化でやたら車が増えたら、交通事故が激増した。車に慣れていない歩行者のマナーが悪い結果が多く悲劇を生んでいた。歩行者教育が必要だった。信号無視や飛び出し、車の直前横断、さらに悪質なのは酔っぱらい歩行だ。ケイタイ電話をしながらの歩行も危険だった。

車を取り締まるより歩行者を取り締まったほうが事故が減ると考えた。それで、すべての人間が歩行者免許を持つようにしたというのだ。あまりに違反の多い若者たちはすぐに点数がなくなり、免停で家から出られないものもいるという。

わたしは、翌日、講習を受けさせられた。まるで幼稚園の園児に教えるような講義と試験だった。

「人は左、車は右、信号で青は進め、いいですね」

判っていて、大人はルール違反しているのだ。それでも、確かにこの国では成果は上がっているようだ。交通事故は極端に減ったという。

今日、博物館前の交差点で、歩行者の一時停止を物陰から見ていて、掴まえていた。時速二十キロ以上で走ってはいけないと交通法にある。暴走族の若者たちが、全速力で商店街を駆けていて、頭の上に赤いランプを回している警官たちが走って追いかけていた。歩道には白いラインが引かれている。追い越し人線も決められていた。歩行者は、決められたコースを歩かなくてはならない。それに違反したものは、一種の思想犯なのだ。

どこか狂っている。一見、自由なふりをしていて、実は大変なことになっている。それを意識させないのが政治なのだろう。

歩行者は足並みを揃え、足の上げ方も角度も一緒になければならなかった。曲がり角では直角に曲がるべし。

ざっくざっくざっくと軍靴のように響いてきた。

第826話

書 齋

お父さんたちは、家を建てたら自分の書齋なるものを欲しくなるものだ。そんな広い部屋でなくともよい。六畳、いや、四畳半、三畳でもいいから、自分だけの部屋があればいい。

書齋といっても、別にそこでお勉強をするというのでもない。亭主の居場所として知的空間が欲しいのだ。

足立さんも、ようやくの思いでマイホームを建てられた。苦節十年。サラリーマンの安月給をせっせと貯めて、奥さんもパートで働き、子供二人は小学生。庭にガレージのついた4LDKだ。賃貸マンションからいよいよ引っ越しの日が来た。リビングルームとダイニングルーム以外に四部屋ある。足立さんの計画では、子供部屋に娘と息子を一緒に入れる。夫婦の寝室、そして、客間、一番小さな二階の部屋を書齋にする予定であった。

いざ、引っ越しのときになって、家族で口喧嘩が始まった。

「何ですって、あなたの書齋ですって？」

妻はけたたましく笑った。まるで、亭主をバカにするかのような大笑いだった。

「家を建てたら、自分の書齋を持つというのがおれの夢だったんだ」

足立さんは、ブスツとして口を尖らせた。

「やめてよ、柄にもない。何が書齋よ。そんな部屋はありません。子供たちだってすぐに大きくなるのよ。男の子と女の子をいつまでも一緒の部屋というわけにはゆきません。これから中学、高校と勉強が大事ですから、ひとりずつの部屋にしてもらいます」

「じゃ、おれの居場所は？」

「あなたは、玄関か廊下に佇んでいらしたら？」

「ひ、酷い」

夢は音を立ててガラガラと崩れさる。やはり、所詮、親父の居場所というのはないのだった。昔は三界に家なしと、女性のことを云ったが、いまじゃ、それは男の話だ。

足立さんは、せっかく平面図までプランを練って書き上げ、どこに何を置くのかまで事細かに用意していたのに、それがオジャンになった。本を読むのも、いままで通り、洗濯物の下にごろんと寝転んで読むのだろう。ノートパソコンは食卓の上だった。音楽を聴くのでさえ、MDをヘッドホンで聴いていた。本の置き場所だって、みんな邪魔だというから、下駄箱の奥とか、ダンボール箱を立てて、それを本棚にしていた。知的からはほど遠く、痴的、稚的、恥的でさえある。

足立さんを満足させるのは、図書館かインターネットカフェだった。そこは、自分の書齋にしては広すぎて、しかも賑やかすぎたが、週に何回かは、憩える場所であった。それと、書店に行って、話題の新刊を立ち読みするのが、唯一の楽しみであった。

足立さんは、本屋に行くとトイレに行きたくなる。これは、一般に法則のように云われている事実である。何故だか判らない。条件反射のように、本屋で本を見ているだけで、トイレに行き

たくなる人が多いのは不思議だった。

昔から、本を読んだり、案を出すには、厠上、枕上、馬上と云った。今なら、電車だ。確かに、本を読む場所は、寝床や、トイレの中や、通勤電車の中が一番多く、効率よく読めて頭に入る。足立さんは、特にその中でトイレが読書の格好の場所であった。いつも、トイレの中には本を並べておく。匂いが沁みて、古本屋には売るわけにはゆかないが、何故か、あの狭い空間が読書には向いている。そのためか、本屋で本を手にしてしまうと、急に便意を感じてくるのだ。

と、そのことを考えていて、足立さんは、急に手を叩いた。

「そうだ。おれの書斎があるじゃないか」

日曜日。朝から足立家では、大騒動が持ち上がっていた。

「誰よ、ずっとトイレを占領して。漏れるから、出てきてよ」

娘がドアをどンドンと叩いても、内鍵がしてあり、中に誰かいるのだ。そのうち、息子も、騒ぎ出す。

「早くしてよ、ぼくも出ちゃうよ」

「あなたでしょ。出てきなさい。わたしだって我慢しているんだから」

みんながトイレの前に並んでいたが、一向に出てくる気配もない。鼻歌までしていた。

「あなたあ、いい加減にして、出てきなさい」

と、大声で奥さんが叫んで、ようやくドアが開いた。

家族全員、固唾を呑んだ。なんと、そこには、ヘッドホンでクラシック音楽を聴きながら、便座に座り、ライティングデスクまで用意して、そこでノートパソコンを打っているお父さんがいたのだ。しかも、トイレの壁はすべて本棚になり、ずらりと全集もの辞書が並んでいた。

「ここは、今日から、おれの書斎にしたから。トイレは外でしなさい」

哀れ、お父さんの居場所はトイレであった。

第827話

路 上

ぼくは、すべての私物を捨てて、路上にこの身を投げ出していた。

家も家族もいらなかった。一切のこの世のしがらみを断つことで、本当の自由を得るために。

市役所の市民課の窓口で押し問答をしていた。

「ですから、ぼくは、引っ越ししたのです。道路の上です」

「判りました。それで、そこにはお住まいというか建物は建っておられるんですか」

「判らない人だな。さっきから何度も云っているように、路上で生活するんです。新しい住所と云われても、ぼくには判らない」

「困りましたな。住所がないところには転入できないんです」

「どうして、建物だけに地番、号がつけられて、公園や歩道、立木には住所がないんですか？」

「あなたも理屈っぽい人だな。住所というのは、人間の生活の場にだけ付けられるためにあるんです。一体、立木が市民税を払ってくれるんですか？ ええ？ 公衆電話ボックスに選挙権があるんですか？」

市民課の係は少し切れかかっていた。

「それじゃ、路上生活者のぼくには住所というものがありませんね。それじゃ、手紙が受け取れない。連絡先だけでもほしいのですが、住所不定なのですか」

「そうです。まさに住所不定無職です。市役所からいろいろと通知が行きますから、郵便物を受け取れるところがないのですか。あればそこを現住所にすればいいんですがね」

そう係に云われて、一瞬考えた。ふるさとはあり、そこに老母も住んでいる。兄弟も遠方に暮らしている。だが、この都会には親戚もない。

「そうだ、いい考えがある。現住所は市役所にしましょう」と、ぼくは、近くにあった小さな空のダンボール箱を手にとって、

「マジックを貸してくれませんか。この箱に、ぼくの表札と、郵便受の穴を開けて、この隅に置いておきますから」と、云うと、

「駄目です。市役所にはそんな私物は置けません。郵便局の私書箱を使ってください」

ぼくは、そうするより仕方がなかった。どうしても現住所というものが必要なので、本局に行って、私書箱を登録した。そして、郵便局がぼくの新しい住所になっていた。だけど、どうやっても、私書箱というコインロッカーより狭いところには、体が入りそうになかった。

それで、ぼくはまた路上に出た。道の上で暮らすということは、実に贅沢なことのように思えた。第一、いままでのアパートのように、四畳半とか三畳台所とかという壁に囲まれた生活が如何に窮屈であったかが判るといふものだ。見てくれ、この広さ。ぼくの家はこの街すべてなのだ。ぼくの庭は整備された公園だったし、ぼくの食堂はデパ地下の試食コーナーだった。

さて、今日は、どこで寝ようか。毎日、寝る場所を選べる楽しさ。ダンボール箱のベッドを手にも、ぼくは、橋の下の散歩道や、アーケード街の横道なんかに寝ていた。週に一度は、雑誌や新聞紙、書籍なんかが捨てられている集積場を回って、只で読んでいたし、いい本は古本屋に売りに行って、小銭を稼いでいた。それに、広い書齋もあった。図書館という膨大な書物の学校だ。

水も公園で使える。トイレも公衆だ。風呂はたまにコインランドリーみたいなシャワールームを使う。

大東京貧乏マニュアルによると、自動販売機の下を捜すと、よく百円玉が見つかるという。電話ボックスの辺りにも転がっている。人が財布を出し、小銭を使う場所にはお金が落ちている。

ぼくは、まさに街という公共施設にパラサイトする名前も捨てたただの有機体なのだ。ぼくが、いま、路上でのたれ死にしても、身元不明でかたづけられる。免許証も切らしたし、年金も掛けていないし、国民保険もやっていない。ぼくの身分を証すものは何ひとつとして身につけていないのだ。

唯一、この現世との交信の場所が、私書箱という郵便受であった。それすらも、断つと、ぼく

はのら犬と一緒にするような気がしていた。

車も手放し、パソコンもケイタイも、ステレオも友人たちも、趣味のサークル仲間とも、彼女とも、すべてとさよならしたら、ぼくはどんなにか気が晴れたか。こんなにも自由で、義務も責任もない生活というものが、素敵だったなんて、いままで知らなかった。

路上には、複雑な会社の間人間関係もないし、面倒な男女関係の愛憎もない。利害関係もなければ、すべてが無関心のまっただ中でのんびりと暮らしてゆける。

春には、ぼくは道端の草群の中で、草になれた。夏には街路樹の枝のハンモックで、毛虫のように眠っていられたし、秋には落ち葉の衣装をまとい、土に還る腐葉土にさえなりえた。

何でみんな時間に縛られて、せかせかと歩いているのだろう。株価に一喜一憂し、ギャンブルに夢を託し、あぶく金を密かに裏で積み、ブランドもののネクタイにいい靴をはいて紳士然として歩いているが、みんな何かをやらかしている。

そんな汚い街の歩道を、ぼくはみみずのように這っている。ああ、地面に直接寝る。ずっと昔、そう、太古の記憶が、ぼくに蘇ってくるようだ。裸のまま横たわってみたい。そうすると、ぼくは土と同化できそうだ。

いつのまにか、見渡すと、ぼくのような路上生活者たちが、うじゃうじゃと道端に寝転がっていた。ぼくらは、道と区別がつかないほど、すでに擬態を始めていた。

第828話

焚書

いつの時代でも、国民の圧倒的支持を得て、英雄という名の政治家が出現してくることはある。だが、英雄は軍隊という強大な武力を従えた独裁者である場合が多い。

我が国も、憲法改正し、自衛隊が陸海空の三つの省に昇格して、総理大臣も軍人が就任すると、シビリアンコントロールの影は微塵もなくなっていた。国民皆兵策で、町内では日曜日になれば軍事訓練が行われ、徴兵制で、活きのいい若者たちの姿は街にはなかった。予備兵も入れれば、六百万という軍隊が、国の内外を護っていた。アメリカは軍事費を削減するために、中東や東南アジア諸国から撤退を始め、その入れ替えに我が国の軍隊が駐留することとなった。

「反日」と呼ばれた政府のやり方に反対する政治団体は違憲となり、すべて取り締まりの対象になっていた。彼ら、すでに少数派となった昔の野党は、地下に潜り、密かに出版という形で教宣活動をし、小説という名のアネクドートで、政府を攻撃して、それがかつての落首や狂歌のように、庶民の間で笑いのネタにされていた。

首相官邸に高級車が次々に停まった。降りてきたのは官房長官、主だった大臣たちだ。皆、軍服にサーベルといった格好で、明治時代を彷彿とさせた。

「総理、ここにありますのは押収した書籍類のほんの一部のものであります」

テーブルの上に雑誌や小説などの単行本がずらりと並べられた。「遙」という雑誌もあった。「指先物語」という小説もあった。

「これら出版物は、取り締まっても次々に出てきて、いまや書店で堂々と売られています。すべて危険思想であります。一日に五百点の書籍、雑誌が出版されている現況では、これらすべてについてチェックを入れるのは難しく、さらに地下出版ということで、ネットや通販で売られているものもあります。どのようにして取り締まればよろしいでしょうか」

別の大臣も報告した。

「最近、週刊誌でさえ、あげっぴろに政府を攻撃する記事を載せております。その方が売れるからであります。選挙では、一党独裁で、わが党よりないので、投票している国民も、裏ではそのようなたぶらかす本や雑誌で日頃の不満を解消しているようなのですな」

また、別の大臣が云った。

「本を読むという人種が一時は激減していたものが、最近は増加の傾向にあります。読むことで、実に文句が増えてきました。政治評論家が巷にやたらと増えたようであります。やはり、国民は無知蒙昧に置いておくほうが統治しやすいかと思いますが」

それらの発言をじっと苦虫を潰したような顔で聞いていた首相は、いきなり握り拳でテーブルを叩くと、怒りに満ちた顔で立ち上がって叫んだ。

「本という本を燃やしてしまえ。すべての本や雑誌をこの国からなくするのだ。臨時国会で、出版禁止令の法案を出そう」

文部科学省の大臣は慌てた様子で、立ち上がった。

「閣下、ということは、小学校や中学の教科書もでありますか」

「そうだ、高校も大学も、辞書もすべての本だ」

とうとう、愚民政策が発動した。教育を低下させることで、全国にアホを多く造り、兵隊としてあるいは軍需工場で馬車馬のようにこき使う文句を云わない国民を養成するための学校教育になってゆく。

トラックが書店の前に次々に到着した。

「ただいまより、書籍類の回収を行う」

店内の本はすべて、トラックへ積まれ、焼却場へと運ばれてゆく。軍のトラックは、出版社の前にも着いた。憲兵が令状を片手に翳して、

「出版物すべてを押収する。以後、出版をしたときは、二十年以下の懲役に課する」

突然のことでただ呆然とするばかりだった。すべての出版社、書店は廃業を余儀なくされた。

トラック部隊は古本屋の前にも着いた。

「いまから、すべての古本も販売の禁止令の対象になるからして、押収する」

兵隊たちが、無言で古本屋の本をどんどん運び出すのを見ていて、店主の北村は悦んでいた。

「よかった。売れないで、これほどの在庫をどう処分しようかと悩んでいたんだ。

本当に、ただで処分してくれるんですね。これで、やめたくてもやめられなかった商売もたためる」

という中には情けない店もあった。

図書館も閉鎖され、蔵書はすべて廃棄された。一般家庭からも、町内会長が各家庭を回り、書籍類の回収に歩いた。

みんな、読むものがなくなったので、新聞がよく売れた。活字もまた、なくなれば淋しいもので、人々は活字に飢えたのを新聞で解消しようとしていた。

ふたたび、首相官邸。

「閣下、民衆は新聞売店に列を作って並んでおります。その新聞もまた、週刊誌にひけを取らないほどの悪口雑言」

首相はテーブルを叩いて立ち上がって、叫んだ。

「新聞という新聞を燃やせ。新聞社も潰すのだ」

とうとう、この世から活字媒体をすべて抹殺しようとしていた。

人々は、今度はネットに殺到した。印刷物が駄目なら、インターネットだ。

ふたたび、首相官邸。

「閣下、民衆は、パソコンの前に座ったきり、仕事も怠けるようになりましたが」

首相はテーブルを叩いて立ち上がって、叫んだ。

「パソコンというパソコンを燃やせ。プロバイダーも違法にしろ。生産工場を取り締められ」

「閣下、パソコンがなくなったら、庶民はケイタイで……」

「ケイタイも燃やせ」

「閣下、今度は壁新聞で、塀に貼っているところに民衆は群がっていますが」

「壁新聞も燃やせ」

「閣下、子供が、道路にチョークで閣下の顔を描いて、バカと書いていましたが」

「道路も燃やせ」

大変な時代になってきた。読み書きのできない国民が増えた。活字のない時代が続き、歴史の空白ができていた。

第829話

外 面

田舎者は見栄っ張りが多い。関西ではええカッコしいというのが、青森では「えふりこぎ」という。良い振りをするやつという意味だ。女で辞めた前の知事がまさにその典型だった。就任期間に箱もの行政で、二千億以上の借金を増やしてしまった。

知事もそうなら市長もだ。どこもそれで財政難に陥っている。

この青森市だけを捉えても、三内丸山に百億以上もかけて、遺跡の横に不似合いなほど立派な展示資料館を造り、しかも入場無料にした。貧乏な県民の税金でどれほど賄っているのか。

豪華客船が年に何回も寄港しないのに、そのためにわざわざ立派な埠頭を作った。空港も立派、駅前再開発も、すべて、表玄関を豪華に綺麗にしようというところは、田舎の家を見ればよく

判る。玄関だけはやたらと広く作る。新しい家でも吹き抜けにしたり、玄関に高い絵や書を飾り、棚には高価な陶器。欄間には彫り物。

田舎者はとにかく大きなことが好きなようで、村同士で競い合う。「おらほの村」はとにかく隣村には負けたくねえとばかり、隣が三階建の鉄筋の役場を建てれば、こっちは四階建だ。

大風呂敷のほら吹きも多い。話を面白くするために、でっかい話が好きなので、ほら吹き大会までどこかの町で毎年やっているくらいだ。青森のねぶた祭に負けないと、黒石では世界最大の大ねぶたを作る。すると、五所川原では、高さでは負けねえと、二十メートル以上の立ちねぶたを作る。

貧乏なくせにこと祭は派手で、とうちょうから来る客さ、恥んずかすいものは見せられねえ。

とかく、おもてなしの気持ちはどこよりもある。サービス過剰だった。観光客を引っ張るために、あれやこれやと金を使い、気が付くと、観光客が落としてゆく金より多く使っていたりする。

そんな田舎返上の気概は、昔からあった。明治六年というから、廃藩置県されてまもなくの頃だ。青森はまだ村みたいなもので、貧しい漁村であった。県では、おふれを出して、辻に札を立てた。それにはいくつかのしてはならないことが書かれていた。外で大小便をするなかれというのは、ありえたとして、家の外でご飯を食うなかれというのがある。当時は、玄関から出て、外でご飯を食べているのが普通のものであった。その風習は戦前の中国にも見られた。

七輪で魚を焼いて、家族が茶碗を手に外で座ったり立ったりして飯を食っている。いまなら、野外バーベキュー。アウトドア志向で格好いいのだが、それは貧しさの現れで見苦しいからと禁止されたのだ。津軽地方を明治の始めに訪れた探検家のイザベラ・バードにも、当時の生活ぶりが克明に記されている日記がある。そして、日本が国際的になり、外国人が観光にやってくるようになると、ハンセン病患者たちを道端に放置しておくわけには行かないと、強制的に各地にの収容施設を作り、隔離するようになった。犯罪人と同じ扱いで、警官がそれに当たる。乞食狩りも行われた。すべてが、貧困を覆い隠すために、外見だけを取り繕うという応急処置であった。

その感覚が未だに田舎へ行くほど残っている。供応は派手で、冠婚葬祭は財産を食い潰すほどだ。結婚式が延々と一週間近くも続くというのはつい昨日のことだ。これでもか、これでもかと見栄を張る。借金してもおふるまいをする。インディアンの間で行われるポトラッチという贈り物合戦の悪習にも似ている。

そんな赤字団体に転落しそうな青森を建て直すべく、匠が立ち上がった。リフォームの辰蔵という、新しい知事に腕をかわれて、これからの公共施設の建設は彼の腕に任せられた。

彼の仕事は、老朽化した公共施設を十分の一という破格の予算で、しかも以前にもまして立派な外見の建物を建てるということだった。彼の手によって、市役所の建物が、五十階建という、白河以北で一番高い建物となり、青森が自慢できる高層ビルとして、県都に聳え建っていた。県庁も古くなったので、それは都庁よりも大きくしようと、ついに百階建で、しかもツインという田舎にはとても場違いな高層ビルとなった。

それでは、うちも頼むと、いろんな会社の支店などが、辰蔵に依頼するようになり、あれよあれよというまに、青森の街は、ニューヨークのマンハッタンのように、超高層ビルが立ち並ぶよ

うになった。すると、それを見ようと観光客が押し掛ける。すでに、青森は田舎の代名詞を返上して、大都会の様相を呈してきた。百階建の県庁の最上階に昇れば、さぞかし見晴らしがいいだろうと思うのは、みんなの考えること。それで、観光客が詰めかけた。エレベータに乗ると、六階までしかない。

「一番上まで行きたいんですが、エレベータはどれも途中までしかないんですか」すると、案内嬢は、微笑みながら応えた。

「はい、この建物は、実質六階建でございます。上の階はすべてはりぼてで、明かりを灯しますと、本物の高層ビルのように見えますが、すべて、青森が世界に誇るねぶた師、辰蔵の作でございます」

なんだ、みんな見かけ倒しなのだ。街はねぶたで創られていた。

第830話

未加入

ぼくは、菅さんが好きだった。あのおくゆかしい微笑、柔和な顔立ち。その人は菅郁子といった。ぼくの初恋の人であった。幼稚園から一緒に、家も近所であった。武田京子と、柴田治喜と五十嵐順というのが、幼なじみで、よく遊んだ。菅さんは呉服屋の京子が派手な分、おしとやかでぼく好みであった。

あれは、碓ヶ関村に林間学校に行ったときのことだ。菅さんは川端の公園で、盆踊りをしたとき、浴衣を着て、なかなか色っぽかった。ということは、小学五年で、ぼくはませガキだったのだ。フォークダンスをするとき、菅さんが巡ってくるときは、ドキドキして、手が汗ばんだ。

あっ、こんなことを書くつもりではなかった。大変な菅違いをしてしまった。そうだ、未加入問題だった。

北村は、市役所の収納課に呼び出されていた。

「おたくの国民年金ですがね、平成何年の何月から何月まで未納になっているんですが、何度も督促を出して、知っているとは思いますが」

と、担当の職員は面談室で台帳を開いて云った。

「未納だなんて、人間きの悪い。あのときは、社会保険から切り替わるときで、未加入だったのです」

「未加入？ そんな言葉は、年金にはないんです。すべて強制加入なんです。税金と同じです。詭弁もよしてくださいよ」

「おや、おかしいことをおっしゃいます。社会保険をやめて、国保に切り替わるまでは、未加入じゃありませんか」

「それは、一時的なことでしょう。何年もでは、未納と同じです。それに、北村さん、固定資産税も去年から払っていませんね」

とやぶ蛇だった。

「ああ、それも未加入なんです」

すると、職員はわなわなと震えだした。

「固定資産税に未加入もくそもありますか」

北村は、だんだんとヤバくなったので、あまり惚けるのをやめて、ある分だけ払ってきた。少しでも払えばいいのだ。払う意志の問題だ。それにしても待ったなし。なんだかんだと収入の三分の一が強制的に引かれてゆく。

県税事務所からも電話だ。

「北村さんですね。税金の未納があるんですが……」

「ああ、それは未加入なんです」

北村はつらっと答えた。

「はあ？ 未加入って何ですか？」

「はい、ぼくは青森県に入っていないんです」

「それでは、引っ越しされたんですか？」

「いいえ、住んでいるのは青森ですが、生まれてこの方、そんな税金を払う会なんかに入ったことないし」

「払うんですか？ 払わないんですか？」

「それに、誰が最初にそんなバカなことを決めたんですか」

「払いたくないんですな」

「いいえ、払います」

どこの窓口も景気が悪いから、そんな未納、滞納者で溢れかえっている。支払を先延ばしにするための口実をいろいろと考えて、北村は窓口に来てきた。

「すみません。制度が複雑で」

と、議員のように云えばいまはなんとかなると思っていた。

「どこが複雑なんですか？ 若者からおばさんまで、みんなして払っていることでしょう。あなたのような学歴のある方が、こんな簡単なことも理解できないとそうおっしゃるんですか」

まるで、複雑と云ったのが、無知を乗り越えて、すっかりアホだといわんばかりだが、口実でなく、本当にそう思っているのなら、それに近いかもしれない。

北村のように商売をしているところは、どこも長引く不況で全滅に近い。売上が下がるから、支払がすべて滞る。税金だけではない。問屋の支払、光熱費、通信費。

「電力会社ですが、先月分が未納になっているんですが」

「うちは未加入です」

「NHKですが」

「はい、うちは未加入です」

その道理も相手には通らない。電話なんかは、ある日突然通じなくなるだけだ。一方的に切られる。

いろんなところから来る請求書、督促状、振込用紙で、鞆がいっぱい重くなってくる。暗い顔で金策に回る。親戚の家でコーヒーが出された。

「ミルクは入れましたか」

「いや、未加乳です」

北村の頭の中はそのことでいっぱいだった。

第831話

独りの休日の過ごし方

日曜日である。千葉由起夫は、朝からはりきっている。五月晴れだ。暖かくなってきた。気温は二十二度。快晴。雲ひとつないすがすがしい朝に、さて、今日はどこへ行こうかと考える。山へ山菜狩りに行くのもいいな。それとも、思い切って遠くへドライブでも行こうかと、今日一日、羽根を伸ばすことを考えていた。いままで、ずーっとそうして、休みのたびに、家族でどこかへ出かけてきた。その長年の習慣が抜けない。

由起夫は、仕事がほとんど事務所に閉じこもっているデスクワークなので、週一の休みくらいは、野外で遊びたい。家でごろごろしていることはない。

「おい、今日は、海で潮干狩りがいいか、山で山菜狩りがいいか」

と、中学の息子に訊くと、

「ああ、ぼく、今日は、彼女と街へ出る約束あるんだ」

と、やたら髪を染めたり、服装も粋がっていた。

「そうか、彼女とデートか」

それにしても、最近の中学生は格好ばかりつけてと、由起夫は少しがっかりした。

「おまえ、これからドライブに行こうか。どうだ」

と、高校の娘に訊くと、

「ダメ。今日は、彼氏と逢うんだから」

と、こちらは何を着て行こうかと、ファッションショーの最中だ。

「おい、お母さん、せっかく天気がいいんだから、これからドライブにでも……」 と、女房に訊くと、

「あら、残念、わたし、これから彼氏とデートがあるのよ」

女房まで男がいて、デートだと、めかし込んでいる。

「いいなあ、みんなして、おれも彼女を見つけようかなあ」

哀れ、お父さん、みんな出かけてひとり取り残された。子供たちが大きくなると、誰も親と一緒に歩かなくなる。親離れするのも何か淋しい。結婚して、十八年、もう夫婦関係なんかどうでもよくなってきたことで、妻が夫離れをする。それもまた淋しい。

天気がいいのに、誰もいない日曜日の我が家。そこに恐ろしい現実があった。「おれは、何を

して日曜日を過ごせばいいんだ」

由起夫は叫んだ。もう、家族でどこかへということはなくなった。みんな、それぞれの休日を楽しんでいる。お父さんだけが、何をしたいのか、どこへ行けばいいのか、分からないで家の中をただ、おろおろと歩き回っていた。

「そうだ、こんなときは、友人に電話をしてみよう。と、北村拓也に電話を入れた。

「一よう、どうしている？ 忙しいってか。日曜日に何をしているんだよ。

「一ああ、もう朝から一週間分のやりたいことでいっぱいだよ。

「一あんとこも、子供さんは大きいよなあ。

「一そうだ。みんな、デートらしい。でかけたよ。女房も買い物。女の買い物に昔の濡れ落ち葉のように付いて歩いても面白くないしな。うちは、みんな別行動だ。一どこもそうやってゆくんだよな。で、おまえは、どんなにして過ごしているか、邪魔でなかったら、教えてくれよ。これから車でおまえんところに行くから。

と、由起夫は、やはり独りの休日を過ごしている北村の家に行った。

「家で、ゆっくりのんびりと昼寝したり、テレビ見ていたほうがいいんじゃないのか。おれの休日は、休みにはならないからな。とにかく忙しいんだ」

北村は時間が惜しいように、出かける準備をしていた。

「よし、今日一日、ついて回るよ。参考のためにな」

由起夫は北村の車に乗り込んだ。北村は自営業で、朝から晩まで店から出られないから、たまの休みにまとめて外出するのだ。

「子育ても、妻育ても終わったお父さんは、また独身時代に戻ればいいんだよ。家庭サービスが終わったらさっぱりしたろう。これからは、自分だけの時間と楽しみを持ってほしいんだ」

北村は、だいぶ前から、そうして独り遊びの楽しみ方を知っている。

車は図書館へと着いた。そこで、車から降りた北村は、重い本を抱えて走った。

「おい、走らなくてもいいだろう」と、由起夫が付いて走る。

「そんな、時間が勿体ないんだよ。駆け足！」と、図書館に入ると、本を返して借りて、またバタバタと車へと戻る。まるで借り物競走のようにせわしない。

「今度はどこへ行くんだ」

「古本屋巡りだ」「ええ？ おまえ、図書館で借りてきてまだ足りないのかよ」

車で市内の三軒の古本屋を覗いて歩き、掘り出し物を何冊も買った。

「見ろ、契沖全集が一冊百円だぜ。これだからセドリは面白くてやめられない」

古本屋の中も走っている。その後ろを由起夫はへとへとになってついてゆく。「おい、どこかで昼飯にしようよ」

「おう、もうそんな時間か。よし、いつも日曜はグルメ探検をしているんだ。新しくオープンしたレストランやラーメン屋に行くんだ」

「一人でか」それも何か虚しい。でも、こっそりと美味しいものを食べるという秘密めいた喜びもある。

二人は海岸にできたスペイン料理の店でランチを食べた。

「おまえ、いつも日曜にはこんな美味しいもの外食しているのか」

「そうだよ。ランチだから安いし、週に一度くらいバチは当たらんだろう」

食後のコーヒーを飲んだら、時計を見て、時間がないと、バタバタとまた車に乗り込む。

「また、駆け回るのかよ。もっとゆっくりしたいよ」

「これから、そのゆっくりするところへ行くんだ」

車は、今度は高原へと走っていた。三十分ぐらい走れば残雪のある山が壮大に見える高原だ。そこでは、家族連れがボール投げなんかして賑わっていた。北村は車からシートを出して、草原に敷くと、ごろんと横になり、本を読み始めた。

「なんだ、こんなところで読書かよ」

「家のソファでごろんと本を読むより健康的じゃないか」

太陽の光を浴びて、新鮮な空気と若葉の匂い。つい、うとうととうたた寝をしてしまう。それも一時間。また、運動会が始まる。バタバタと、車で今度は近くの山の温泉だ。

「おまえ、週に一度はこうして、温泉巡りもしてんの？」

「そうだよ。どこにも出られないから、せめて近場で旅行気分だ」

二人で露天風呂に入って流れる雲を眺めていた。

「いいなあ、贅沢な休日だよな」

しかし、そこもゆっくりしてられない。せわしく車で街まで降りてくる。車を街角に停めて、由起夫は通りかかった女の子たちに声を掛けていた。

「おじさんたちと遊ばないかい」

由起夫は慌てた。

「お、おまえ、なんという破廉恥な。ナンパまでしているのか」

「そうよ、時間がないんだ。おれたちには。せいっぱい楽しまなくちゃな」

五十過ぎて、人生を爆発させていた。

第832話

歌を忘れたカナリアたち

ずっーと探している歌があった。ジョーン・バエズの初期のLPレコードだが、ベトナム戦争に反対する集会などで盛んに歌われた歌が入っていた。そのレコードは、暮らしに困ってすべて売った中に入っていた。一度手放したら、もう二度と手に入らないものはいくらでもある。いまだに、わたしは、ネットや中古レコード店などで、そのレコードを探し続けている。

ふと、口ずさむ歌がある。もう、忘れるくらい遠いところから聞こえてくる。

死んだ男の残したものは ひとりの妻とひとりの子ども

他には何も残さなかった 墓石ひとつ残さなかった

題名も忘れた。誰が歌っていたのか。学生時代のときか、いや、もっと前のような気がした。

姉は、ベ平連のデモに行ったきり帰らなかった。テレビでは昭和通りをフランスデモをしてい

る映像が報じられていた。六月二十二日。蒸し暑い夜だった。

死んだ女の残したものは しおれた花とひとりの子ども

他には何も残さなかった 着物一枚残さなかった

「まだ、そんなことやっているのか」

旧友のところに署名を頼みに行ったら、「そんなこと」と云われた。昔、学生時代に闘士であったとは思われない発言だった。

一十代でマルクスに傾倒しないやつはおかしい。三十代で傾倒しているやつはもっとおかしい。

そんなような云い古された言葉を云われた。彼だけでなく、多くのデモ行進に参加していたヘルメット姿の彼らは、すべからく経済の洗礼を受け、平和と安泰の中で満たされすぎて、保守へと転向していった。

死んだ子供の残したものは ねじれた脚と乾いた涙

他には何も残さなかった 思い出ひとつ残さなかった

あの日。駿河台の大学の部室にわたしはいた。文研は闘争方針を決めていた。同人誌をガリ板で刷っていたのが、いつかアジビラの印刷になっていた。部室の中には、荒地派の詩人の詩集や、埴谷雄高の黒い本が乱雑に置かれていたが、投石用のバラス、恐らくそれらは工事現場から盗んできたか、中央線の線路脇から勝手に持ってきたものだろうが、それと、角材、ヘルメットが山積みになっていた。文学研究会の部室はアジトに変わっていた。

「北村君、コーヒー飲む？」と、女の子たちがインスタントコーヒーを入れてくれた。外ではアジ演の声が響いていた。パトカーが走り、機動隊が角々に待機している。ものものしい雰囲気の中で、すべては安保に向けて上り詰めているようだった。みんな、怒っていた。労働者も、学生も、商店の親父も。まだ、怒りが人々の中に純粹に存在していた。

死んだ兵士の残したものは こわれた銃とゆがんだ地球

他には何も残せなかった 平和ひとつ残せなかった

千葉にいる三男から電話で、生活費がないから金送れと電話があった。仕事はやめてぶらぶらしていた。雇用保険も切れた。いままで高給取りだったのが、一円も残っていない。一何に使ったんだ？ 貯金もないのか。貰った給与をすべて使い果たしていた。随分と贅沢をしてきたのだろう。ゲームやケイタイ、デート代に使ったという。

「おまえ、ボランティアで、中東へ行ったらどうだ。飢えと貧しさで苦しんでいる人がいっぱいいるという現実を見てこい。」

そうは云ってみたが、根性もありそうではない。うちの息子だけがおかしいのではないだろうが、目的もなくふらふらして、消費と欲望にずっぴりと浸かっている若者はふつうだった。まさに、教育の成果だった。そんな若者を養成するために仕組まれた教育と情報が功を成した。政治には「興味がねえよ」「関係ねえよ」の若者を作り上げた。

死んだ彼らの残したものは 生きてる私生きてるあなた

他には誰も残っていない 他には誰も残っていない

その夜は、神田は騒然としていた。救急車のサイレンと消防車と慌ただしく行き交っていた。中核と革マルが大学の正門で小競り合いをしていたが、竹竿で激しく応戦して、怪我人が続出していた。そのうち、路上で火炎瓶が燃え上がった。機動隊が、催涙弾を撃ち込む。その煙で息も

できない。わたしは恐怖で顔をひきつらせ、地下鉄の方へと逃げていた。ベトナム戦争反対、安保反対。デモ隊は投石を開始した。田舎から上京したばかりの、十九のわたしは、その中で何を見、何を感じていたか。

死んだ歴史の残したものは 輝く今日とまた来る明日

他には何も残っていない 他には何も残っていない

何という歌だったろうか。どうしても思い出せないでいた。歌詞は口をついて自然と出てくるのに。気になれば思い出すまで、毎日悩ませられる。

イラクの戦死者数が、インターネットでカウントされている。それは遠いところの話でもない。だが、ベトナムのときのように、大きな反対運動は起こらない。若者たちは怒らず、昔の全学連たちは生活の重圧の中で、反戦の歌も忘れていったのだ。

(「死んだ男の残したものは」 作詞谷川俊太郎・作曲武満徹)

第833話

次に何が起こるか

ハプニングという言葉が流行ったのは、七十年代だったか。それからは、何が起こってもおかしくない異常な時代が続いたので、人々は、大概のことには驚かなくなっていた。ところが、ここにきて、次々と奇怪なことが起こる。政治がこれまで、こんなに面白く、馬鹿げた時代はなかった。テレビから目が離せない。何が次に起こるか判らない。

伊藤さんの奥さんは、それまで政治に興味もなかったし、ニュースや討論番組なんかは見たこともない。ところが、最近は、娯楽番組がつまらなく思えてきた。政治のドタバタ喜劇より面白い番組は他にはない。それで、毎日、ドキドキしながらニュースや日曜の政治討論番組を、テレビにかぶりついて見るようになった。

一ついに、首相までが年金の未納であることが発覚いたしました。

「やったわ。これで全員じゃないのよ。いや、待てよ、もうひとつの政党が残っているわね。でも、これで今度の選挙は戦い勝てるとみんな思っているんでしょうね。だって、公平に未納なら、みんながハンディを背負っていることになるもの」

伊藤さんは、たまたま遊びにきた隣の風晴さんの奥さんとモーニングショーを見ながら、ランチとしゃれこんでいた。

「でもね、その選挙だって、みんな馬鹿にしているって、投票率が落ちたらどうなるの？」

「そうだわね。史上最低の十パーセントだったりすると、恥ずかしくて世界に笑われるわね。国民を舐めるのもいい加減にしてと、みんな投票に行くのやめたら」

「ダメよ。わたしたちの仲間が出るんだから、あの人にだけは入れに行かなきゃ」と、主婦同士の会話もいまや政治の話で持ちきりだった。芸能界の誰だれが別れたとか、くつついたとか、

そんな話にはもう飽き飽きしていた。

面白いのは日本の政治で、逆に世界のニュースは悲惨なものが多かった。特に戦争。それも何が次に起こるか判らない。そっちの方は、怖いくらいだ。いまや、小説が読まれなくなったのは、事実のほうの方が奇なりで面白いからだ。まさに世界は劇場化していた。毎日、ハラハラドキドキして、このままどうなってゆくのだろうか、不安にさえなる。年金だって、いまは笑ってられるが、若い人たちがあまりに馬鹿にしていると、怒って、加入しなくなれば、またまた試算が狂う。というか、未加入が半分以上になり、毎年、毎年そんな若者が増え続ければ、そのうち半分が四分の三になり、とうとう、年金は破綻するのではないか。いずれ、みんなの老後に問題が起こってくるのだ。

未加入の若者たちが、三十年、四十年後にどうやって暮らしてゆくのか。

「うちの甥っこもこう云うのよ。どうせ、将来は貰えないんだから、あてにしていないし、年金なんかいらないうて。でも、子供たちの世話になれなかったら、誰が面倒見るのよねえ」

「そうそう、うちの姪だって、わたしたちが払う年金が、貰うときは半分以下じゃ、貯金しておいて、自分で老後に使ったほうが得だって云うのよ」

「そりゃそうよ。取られるだけ取られて、貰うのは少ないとなると、若い人でも嫌になるわよ」

ニュースでは、年金未納が知事から市長、ニュースキャスターなどといった有名人まで及び、国を挙げての未納祭に発展していた。マスコミは面白がって、どんどん調査だと云って、ほじくりかえしている。それが連日のニュースを賑わす。様々な嫌な事件も次々と起こる。特に最近では異常な事件が多い。子供の虐待、新興宗教の異様な事件、拉致問題から裏金作り。イラクの人質からこれから起こるであろう、自衛隊の被害。

今回のことで、若者たちが年金に無関心でいられなくなったのはいいことだ。政治に無関心であった主婦もワイドショーのように監視するようになったこともいいことだ。ただ、見ているだけの観客だけではなく、文句も云わなければそれはただのショーにすぎない。

伊藤さんは、専業主婦だから、買い物に出る以外はいつも家にいる。そうすると、どうなったかなと、テレビを点ける。また、新たな進展がなかったらどうか。突発的な事件が起こっていないだろうか。勿論、野次馬根性だ。

夕方の主婦にとっても忙しい時間でも、料理をしながらテレビを見ていた。庖丁を手にしていても、目はいつでもテレビを見ていた。てんぷらをしようと、鍋を火にかけた。すると、突然テレビの画面の上に、信音がして、なにやら臨時ニュースのようだ。

「あら、なにかしら」と、伊藤さんは台所を離れて、テレビの前に釘付けになる。ドキドキしていた。今度は何が起こるのかしら。

部屋の中に油煙が充満し始めていた。

第834話

充 電

出てこないものは出てこない。うんうんと唸っていた。どんなに力んでも詰まっているわけでもなく、ちびりとも出てこないのだ。便秘の話ではない。北村拓也の小説のネタの話だ。

拓也は、毎日インターネットでショートショートを送り続けている。いま流行のケイタイ電話で読むケイタイ小説を日替わりでホームページでダウンロードできるようにしていた。また、メールで小説宅配をしていた。それが彼の使命というより、意地でもあるように。

書くことがなくなったとき、拓也は自分の頭脳中枢の言語野に組み込まれている辞書に言葉がまるで入っていないことに気が付いた。

「空になっている。大変だ」

ぼんやりと考える力もなく、どうすれば新たなストーリーが出てくるのか呆然としていた。そんな拓也の様子を見て、妻の元子は、

「どうしてそんなくだらない小説ごときで自分を追いつめるのよ。書くのを止めたら？」

と、薄笑いまでしている。それでも、書かねばならない。何がなんでも書くんだと、頭の中のコマンドがそう仕組まれている限り、止めようとはしない。いや、できないのだった。

「そうだ、こんなときは、無理に書こうとしないで、別のことを考えたり、したりした方がいいんだ」

拓也は、スランプに陥っていたり、追い込まれると、いつも図書館に行くことにしていた。

最近の単行本は高くなった。二千円を超えるものが多く、文庫本でも千円以上のものがざらにある。新刊は高くて拓也の小遣いでは買えない。それで、図書館に行って、新刊コーナーを漁ることになる。ただ、話題の本はいつまでも予約でいっぱい、なかなか順番が回ってこない。

さて、何について書こうかと、ヒントを得るために、書架の間をうろうろと歩く。地震について書こうかと、「巨大地震」「地震考古学」「自分地震」「顔に地震のない人のために」といういろんな本を借りてきた。ひとつのショートショートを書くために、五冊の本を読むときもある。

ネタは書物にだけあるのではない。いろんな情報を得るために、自分の耳のソナー、目のレーダー、鼻の感知機、心のアンテナを張り巡らせ、何かをキャッチしようとする。新聞もざっと目を通す。週刊誌もだ。インターネットで検索もする。くだらないテレビのバラエティ番組も見ると、芸能界にも視線を送る。自分の中で、こんなくだらないものと、シャッタアウトしてしまえば、面白い話も書けない。

それでも、拓也はやはり本を読んでいても、ファッション雑誌まで見ている、常にそのことが強迫観念のようにある限り、枯渇したデータベースに何を呼び出しても、出てこないものは出てこないのだ。当分は入力してやる必要がある。小説のことは忘れて、全く別のことを考え実行するのだ。拓也はそう思い、少し創作から離れてみようかと思った。

小説ネタには関係のない本を古本屋から買ってきて読んでいた。いつも、やわらかい本ばかり

読んでいると、ハードディスクが柔軟になりすぎて、現代用語ばかり学習機能で叩きこんでも、辞書登録が簡易なものだけで埋められる。それでは鍛えることができないから、学術的な図書も読んで、専門用語の語彙も増やしてやる必要がある。オートコンプリがいつも若者言葉ばかりを呼び出しても、すっかりと週刊誌のような文章しか書けなくなってしまうのだ。

拓也のCPUは最近古くなってきたので、回転速度も容量も少なくなってきた。何せかなりの年代ものの中古になってきたから、それはやむをえないことだった。デフラグをかけたり、クリーニングをしたりして、余分な知識や、使われなくなったファイルをたまに除去して空きスペースを確保しなければ、突然に先日のように動かなくなったりする。元子に笑われるほど、思考が停まった状態になるのだ。そんなフリーズを起こしたときは、元子は慣れたもので、頭を笑いながらがつんと殴った。すると、拓也は我に返ったように、「おれはいままで何をしていたんだ」と、修復するのだった。

「あなた、大丈夫？ いまから痴呆になったら、わたし、あなたを介護してこれからの人生を犠牲にするのって嫌よ」

と、元子も不安になる。もともと一回り以上も上の亭主と結婚したのが運の尽きだった。よその亭主より年式も古いから、早く使いものにならなくなる。

拓也は、いつもぶつくさと独り言のように云いながら、本ばかり読んでいた。そのうち、突然に家で倒れてしまった。慌てたのは元子だった。意識がないようだった。あんなに根を詰めて本ばかり読むからだと、元子は青くなって救急車を呼んだ。どんなにスランプになっても、いままでこうして倒れたことはなかった。どうしたのだろうか。元子はすごく不安になった。

病院に担ぎ込まれた拓也は、元子の呼びかける声にも応答がまるでない。体が全く動かなかった。死んでいるようだった。

「先生、うちの人、死んだんですか」

元子は泣き叫んでいた。医師は、拓也の胸に聴診器を当てて、診察していたが、やがて、看護師に命じて、コンセントから延長コードを引っ張ってきた。そして、拓也の背中の蓋を開けると、そこにあるプラグに差し込んだ。

「奥さん、大丈夫ですよ。バッテリーが切れただけです。いまから充電すれば、意識を回復しますよ」

それを見ていた元子は呆然となって云った。

「あなた……わたしを、長い間、騙っていたのね。ロボットだったら、結婚なんかしなかったのに……」

一世代といえ、三十年くらいか。たったそれだけの時間経過で、生活がこうも違うものかと、嘆いているのは高橋重雄だった。重雄には一男二女の子供がいた。いずれも二十歳を過ぎて大人なのだが、パラサイト・シングルで娘二人は適齢期を過ぎているのに、そのまま家に居座るつもりなのか。

だが、娘はいずれ良縁があればさっさと嫁に行ってしまうだろうが、問題なのは息子の重則だった。大学を出て、地元の企業に就職したが、これが高橋家の長男で男一匹かと思うと、父親の重雄は情けなくなってくる。

それは、二階の息子の部屋をたまたま覗いたときのことだ。いままでどんな生活をしているものか見たこともなかった。無論、娘の部屋であっても、もう大人なのだから、プライバシーがどうのと家族でも煩い。

二十五にもなって、この部屋はなんだ。とても、日本男児の部屋とは思えない。壁には一面の少女が描かれたアニメのポスター。セーラー服みたいな女の子の衣装が掛けてある。

「まさか、あいつ、こんな服を着たり脱いだりして密かに楽しんでいるのではないだろうな」

世に女装趣味というのがある。変態なのだろうが、それかと思った。机の上にはパソコン、プリンタ。本棚には本はあるが、これすべてコミック本にゲームの攻略本、そして、ロリコン趣味のような雑誌やマンガばかりがずらりと並ぶ。それとDVDレコーダーに薄型のテレビ、ステレオと、それらはどこの若者の部屋にはきっとある必須アイテムだ。

読書をする本というものがまるでない。その代わりに、パソコンゲームからDVD、ビデオテープなどがずらりとライブラリーのように並んでいる。タイトルを見ると横文字が多いので重雄には判らないが、すべてアニメ系なのだ。

他には、棚にガラスケースに入ったフィギュア人形、プラモデルのガンダムロボットなどが宝物のように飾られている。さらに驚いたのは、ベッドの枕の脇にぬいぐるみの猫がいた。何かのアニメ映画のキャラクターのぬいぐるみなのだろう。

「あいつ、いい年してこんなぬいぐるみを抱っこして寝ているのかよ。とほほほほほ」

重雄は愕然とした。完全なジェネレーション・ギャップがそこにはあった。男二十五といえ、重雄の父親なら、戦争へ行っていた。重雄は、結婚する前で、競馬、麻雀、パチンコに狂い、毎日夜中まで酒ばかり飲み、トルコ風呂へ通っていた。そして、そんな飲む打つ買うをしても、本だけは読みあさった。ちゃんと国家資格をとるために、会社から帰ってからは遊びもしたが勉強もした。本棚には西田幾多郎全集や三島由紀夫全集などがずらりと並んでいた。壁に貼ってあるポスターは高倉健の網走番外地。とにかく男臭かった。むんむんと男の臭いで満ちていた。それにひきかえ、この息子の部屋はなんとも嘆かわしい。まるで女の子の部屋ではないか。

重則は酒が弱かった。息子が大きくなったら共に酒を飲むのを楽しみにしていた父親だが、完全な下戸だった。しかも、彼女もいないらしい。これじゃ、できないかと、重雄は改めて息子の趣味を見てそう思った。

重則が仕事から帰ってきた。アパレル関係の仕事だが、婦人ものを扱っている関係か、いつもちゃらちゃらしたいいまの若者の格好をしているのが重雄には気に入らない。

「重則か、まあそこに座りなさい。おまえに話がある」

滅多に説教をすることはないが、重雄は晩酌で酔った勢いもあった。

「おまえの、その生活態度はなんとかならんのか」

「パパ、何を怒っているの？」

「その言葉使いも何だ、女みたいな。それにおまえの部屋だが……」

「ひどーい。勝手に開けたの？」

「だから、止めろっての。薄気味悪い。我が息子ながらぞくぞくする。もっと男らしくしたらどうだ」

「あら、ふるーい。いまはジェンダーフリーの時代なのよ」

「何がジャンダーだ。ばかやろう。おれがおまえの年にはな、飲む打つ買うをしたもんだ。それが男の甲斐性ってなものだ。判ったか」

すると、急に重則は泣き出した。

「ぼくにだって、それぐらいできるよ。パパにできて、ぼくにできないことがあるものか」

重則は二階には上がらずに、玄関から外へと飛び出して行った。その会話を聞いていた母親は心配して、

「あなた、重ちゃんは優しいいい子なのよ。あなたのような古い男性社会の概念をあの子に押しつけたって、本当に時代が変わったのよ」

重雄はぶすっとして、ウイスキーをストレートで呷っていた。

家を飛び出した重則は、いつも仲間がたむろしているミスドに向かっていた。ケイタイで連絡すると、仲間がいた。

「いまから、ぼくに付きあってよ。今夜はむしゃくしゃするから、飲む打つ買うをするからね。一何だい、その打つとか買うとかって。」

ミスドに行くと、重則は新発売の抹茶のシェークを二つも頼んだ。そして、さらにチョコレートとメロンのシェークも。

「おいおい、重則くん、そんなに一気に飲んで大丈夫かい」

「いいんだ。ぼくだって、自棄シェークしたいときもあるの」

見ているほうが気分が悪くなる。シェークをすべて飲みほすと、重則は仲間を次に誘った。

「さあ、次は打つだよ。インターネットカフェにこれから繰り出して、パソコンを好きなだけ打ってみようよ」

みんな仲間は仕方なく重則について行った。ぞろぞろとインターネットカフェに行って陣取ると、パソコンのキーボードを慣れた手つきで打つと、ネットの掲示板にやたら鬱憤を書き込んだ。

「さあ、次に買いだ」

「買って、こんな夜にショップはどこも閉まっているけど」

「違うよ、買って、少女人形を釣りあげることなんだよ。みんなで、これからゲーセンへ行ってゲーム機で人形をゲットしようよ」

ご一行様はまたぞろぞろと重則について行った。実にいまの若者は健全であった。

第836話

ガラスの家

静かな家庭だった。言葉を交わすこともなく、みんなそれぞれが自分の部屋に閉じこもっている。テレビの音声も低くしてできるだけ外部に音を出さないようにしていた。

桜田家は以前はこうではなかった。毎日が場外乱闘の連続だった。家の中がそのままプロレスのリングと化していた。夫婦の関係はすでに壊れ、日々DVの修羅場であった。夫の貴志は妻に殴る蹴るの暴力を日常茶飯事のように繰り返していた。それはいつも食後三十分以内と決まっていた。

「こんな飯が食えるか」と、食卓をひっくり返す。

そんな夫婦の仲違いを見ていて、子供がよく育つわけがない。多感な中学の娘はすっかりと不登校になり、自分の部屋に閉じこもって出てこない。高校の息子はすっかりと不良の仲間入りをして、警察に呼び出されることはたびたびだ。殆ど学校には行っていないようだが、毎日悪い仲間と万引きしたり、ゲーセンで遊んだりしていた。たまに、家に戻ってくると、窓ガラスを割ったりして暴れた。家庭内暴力が酷く、とても手がつけられない。

つい、半年前も貴志と息子の壮烈な喧嘩が始まり、ドアも壊れ、家は穴だらけとなった。そして、貴志が怪我で入院まですると、息子は保護観察処分となった。妻は毎日アルコール依存症となって酒ばかり飲む亭主の酒代を工面するため、サラ金から借りてきたりしていた。

いまではそんな家庭も珍しくはない。どこにでもある風景だった。

桜田家も家が壊れたのと、建築基準法が変わったことで、違法建築となったので、家をリフォームしなければならなくなった。資金は国が低利で貸し付けしてくれることになっていた。

家はキラキラと、見違えるように綺麗に生まれ替わっていた。すると、どうしたことか、桜田家の人々は急におとなしくなったのだ。貴志も暴力はふるわない。酒も慎むようになり、娘も学校へと通いだした。息子も暴れなくなった。それでも、静かで、笑いとお話のない冷えた家族関係には違いない。いつ崩れるか、いつ粉々に割れてしまうのか。そんな危うい家族が、緊張状態にありながら、表向きは平和な、何事もないような仲のいい家族のように見えていた。すっかりと作り物。各々がペルソナを付けた家族であり、ただ一緒に暮らしているというだけで、表面を取り繕っているに過ぎない。

最近法律が改正になって、DVを見つかったりすると近所から警察に通報がゆく。子供を虐待しているのが見つかったとしても、すぐに警察が介入する。世間の目が厳しくなったから、以前のように暴れることはできなくなっていた。

貴志の会社もリフォームしてからは、がらりと変わった。怠けて仕事をサボる者はひとりもいなくなった。隠れて、マンガ本を読んでいたたり、会社のパソコンで仕事をする振りをしてアダルトサイトにアクセスしたりする者もいなくなった。

経理も、不正をすることができなくなった。すべてが見られていた。経営会議も役員会も密室ではなくなり、オープンになってしまったから、社長の言動も筒抜けで、社員に不信感を抱かせることはない。社内だけではない。取引先にも、顧客にも、株主たちにも、安心感を与えていた。

会社がそうなら、役所だってそうだった。リフォームしてからは、市民に信頼ある役所というイメージを植え付けた。以前なら、開示請求しなければ見せられない裏の裏もなくなり、すべてがお見通しであった。オンブズマンも役目を終えていた。

会社でも役所でも税務署や行政監査の目が怖くなくなった。どうぞ、好きなだけ見てくれと、全員が開き直っていた。隠し事も、こそこそと裏で工作することもない。

桜田家も、前にはピッキングされて空き巣に入られたことがあったが、もう安心だった。どここの家庭でも、家をリフォームしてからは、泥棒も入らなくなった。

「それはいいんだけどさ、なんとかならないの？」

桜田の家の娘がついに悲鳴を上げた。

「そうよ、こんな生活、まるで晒し者じゃないの」

妻もそう叫んだ。

「せめてなあ、お風呂場とトイレだけでも、見えないようにしてもらいたかったなあ」

貴志も我慢の限界だった。居間から息子がトイレに座しているところが、丸見えだった。窓の外に目をやると、隣の家の奥さんがシャワーを浴びているところが見えていた。

世の中、あまりにも不透明になり過ぎたから、国会も、会社もガラス張りにした。そして、住宅もすべて透明なガラスで壁という壁を作るように法律で決められた。

不正も虐待も犯罪もなくなったのはいい。だが、見え過ぎるのも困ったものだ。街はすべてガラスでできていた。壊れやすい透明な世界で、人々は恐る恐る生活をしていた。

第837話

半額処分

電気店の前に車が停まり、大きなテレビの箱を抱えた本田さんは、ぶすっとしてサービスカウンターにテレビの箱を持ち込んだ。

「このテレビ、昨日買ったばかりなんですけど、今日のチラシ見て、半額だなんて酷いじゃないですか。お金半分返してください」

と、係の男性に詰め寄っていた。

「それは困ります。たまたまセールで、特価にしたんですが、他にも値引きした商品がいろいろあります。いちいちお客様にセールのたびにすべて返金していれば商売にはなりません」

係員は丁重にお引き取りを願っていた。

「でも、おかしいじゃないですか。これは詐欺ですよ。明日から安くなるというのなら、買うと

きに教えてくれたっていいじゃないですか。マンションだって、半額以下に値引きして売って、住民たちが訴訟を起こしているんですよ」

係員は困惑していた。

「マンションもそうですが、わたくしどもも、売れ残ったものは値引き販売いたします。何も悪いこととは思いませんですが。失礼ですが、スーパーで納豆をお買い求めになられて、それが翌日半額で売られたら交換に行きますか？」

本田さんは慚然として答えた。

「そんな、納豆ごときでいちいち行きますか。これは金額の問題です」

係員も負けてはいなかった。

「それなら、高級なマグロのお刺身ならどうですか」

「あなた、常識で考えてください。食品は別ですよ」

「だったら、衣料品はどうですか。金額がいくらまでなら、諦めて納得されるのですか」

そんな押し問答をしても埒があかない。買ったほうがたまたま運がなかっただけなのだ。

そんな一件があってから、本田さんはチラシをまめに見るようになった。まともな値段で買うのは馬鹿らしい。欲しいものでもじっと我慢して特価品の目玉で先着何名様と出るまでひたすら待つのだ。ことに不景気になると、一円の重みが出てくる。まして、高額商品なら大きい。本田さんも今年は賞与が出そうにない。奥さんはパート先が倒産して、ただいまトラバース中だ。このところ何年も昇給もない。家のローンだけはだんだんと上がってくる。ボーナス払いもあるから、家計を節約してなんとか生活費から捻出しなければやりくりがつかない。

「あなた、会社の帰りにデパ地下へ寄ってきてくださらない」

「ああ、いつもの半額だな」

こうなったら、自衛するよりない。少しでも安いものを買って、ケチに徹するのだ。デパートは七時までの営業になっている。会社の傍にあるデパートは、六時になればそろそろお総菜を値引きするようになる。本田さんはそれを狙っていた。デパ地下に六時に直行した。だが、その日に限って、値引きのシールを貼っていないのだ。ちらりと本田さんは腕時計を見る。まだ早いかな。本田さんの他に、値引きを待っている人が数人、うろうろしていた。なにせ早い者勝ちなのだ。シールが貼られるとあっという間になくなる。それまで、別の売場において、遠くから様子を窺っている人もいるのだ。そんな買物客が、販売員がシールを貼っていると、どこからともなく集まってくる。

六時半になった。それでも担当者が姿を現さない。みんなじれったくて、時間ばかり気にしていた。そのうち、ようやく白衣に白い帽子をかぶったお総菜係の男性がやってきた。みんな心の中で拍手をしていた。待っていたのよ、あなたが出てくるのを、いまかいまかと。係の男性の後ろを本田さんを先頭に数人の買物客が並んでついて歩く。

ところが、担当者が貼りだしたシールは三割引のシールだった。

「半額じゃないんですか。いつもなら、六時過ぎたら半額にするのに、今日は三割引だなんて、ケチ」

と、OLが抗議した。すると、半ば自暴自棄になっていた担当者は、売れ残っていたお総菜の山を見て、

「いいんです。もう、なにもかもが、よくなりました。どうでもいいんです」と、投げやりに云った。

「だったら、あなた、思い切って半額にきなさい。さあ、男の子」

と、周りの客が煽動するように云った。

「いいんです。もう、どうでも」

担当者は何故か涙ぐんでいた。いつもと様子が違う。すると、半額のシールを取り出してきた。

「いよ、待っていました大統領」と、みんなしてはやし立てた。担当者は、何を思ったのか、半額シールをペタペタとすべての商品に貼り始めた。缶詰にもインスタントコーヒーにも。売場の係員全員が黙々と半額のシールを貼って歩いている。客は騒然となった。みんな、競い合うように買い物籠に山のように商品を入れていた。そのうち、半額シールはレジや販売台、ワゴンにまで貼られた。ショーケースにも、柱にも床にも、階段にも自動販売機にも、やたらペタペタと貼られていた。

担当者の男性は自分の額にも半額シールを貼って、客たちに云った。

「どなたか、わたしを今の給与の半額でいいですから、雇ってくださいませんか。冷蔵庫もレジもご希望金額の半額で売ってしまいます。なんなら、このデパートの土地も建物も半額にします。さきほど、当デパートは手形の不渡りを出しまして、倒産いたしました」

みんな目玉商品しか買わなくなった。利益率が低下して、どこも大変だった。ことにデパートは年々売上げが落ちてきていて、二十年前の売上げと同じだとか。かつては最も華やかな商売が、いまはどこも赤字で貧乏していた。元値が高いから、半額でちょうどいい。

本田さんは得したような顔でお総菜を買って我が家に帰った。これで少しは家計が楽になると思っていたら大間違い。作った方が安くつくとは思いませんか、本田さん。

第838話

残りものに福

最近、チンピラに惚れられて困っていた。店にどこから持ってくるか判らないが、いろんな本を持ち込んでくる。

一おう、おやじさんか。いい本、また持ってゆくからな。

と電話をしてくる。古本業界では、買いが一番、売り二番と云い、本を売りに来る客は買いに来る客より大事にする。古本屋だから、一応、大人だったら、誰からでも本は買う。たとえ、やくざな客でも、盗んできたものでない限りは、きちんと買う。

一また、どうせ、たいした本じゃねえだろう。

こっちも言葉がグレてくる。

一いま、ラーメン喰っているから、それから行くからな。

「なんだよ、いいなあ、こっちは店でカップラーメンとしけている。

やがて、ラーメンを喰ったチンピラ氏が顔を出す。サングラスをかけて、ぱりっとスーツを着ている。いい車に乗っている。しかも助手席には、着飾った若い女。上から下までブランド志向。可愛いけど、どうも趣味が合わない。チンピラ氏は、わたしと年が変わらない。五十になったばかりというが、若い。いつもその辺のお姉ちゃんを引っかけて連れて歩くと、男も年を取らないのか。

「高く買ってくれよな」

見ると、昭和三十年代の少年探偵団や、児童文学の古いものだ。当時の菊田一夫や、吉屋信子の売れっ子作家が少女小説を書いている。これは高く売れると思っても、顔に出さないところが古本屋。

「どうだ、驚いたろう」と、チンピラ氏は云うが、鼻で笑ってみせる。

「何だ、がっかりした。もっとお宝を持ってくると思ったが、これじゃな」

と、買う気を見せない。

「これはフリマじゃ、高く売れるんぜ」

と、あまり古本の知識がないのにそう云うから、

「じゃ、そっちへ持っていったら」と、本を返す真似をすると、

「いいよ、みんな置いてゆく。がっかりだな」と、わたしの云い値で妥協した。

「とにかく、古い本な。戦前のぼろぼろでもいいから、捜してきてくれよな」

チンピラ氏は今日の酒代くらいは手にして、少しは機嫌よく帰った。

わたしは知っていた。新しい本はブックオフに売りに行くのだ。そして、そこで買えないと断られた古い本をうちに持ってくる。うちの店は新しい本はいらない。業界では白っぽい本と呼ぶ、ビニール貼りのバーコードのついたような本はいらないのだ。新しい本を大量に店に持ち込むと、ぞっとする。

「いくらぐらいで買ってくれますか」

と、若いお姉ちゃんたちが、ベストセラーものばかり売りにくると、

「うちは、おたくのお父さんやおじいちゃんの読んだ本なら買います。新しい本ならブックオフへ売りに行ったらいいですよ」と、回してあげる。

また、ブックオフでも、古い本ばかり持ち込まれると嫌な顔をして、

「うちでは買えませんが、林語堂さんなら買っていますよ」と、紹介してくれる。お互いにちゃんと棲み分けをしているのだ。

古本の業界では、二極化しているが、従来の古本屋は新しい本は毛嫌いして、粗末にしているとか、ブックオフなどの新古本屋は、逆に貴重な古書を廃棄しているとか、問題になっている。確かにある店で、客が売りに行った、永井荷風の私家版を買えませんかと断って、

「うちで処分いたしましょう」と、若いアルバイト店員がご親切にそう云ったとか。市場では数十万円でセリ落とされる本でも、彼らにはゴミでしかない。それをうちの客が見つけて、捨てるならくれとか、買うとか申し出たが、若いバイトはこれが頑固で、

「処分する本は差し上げられませんし、売ることもできない規則になっています」と、何がなんでも捨てるのだ。中には史料的価値のあるもの、この世に一冊しかなくなった超稀こう本なんか

もあつたりするのではないか。文化財、国宝級の本でも、ばばっちいという理由でゴミに出されているのかもしれない。

昨日も、とある家に呼ばれて仕入に伺った。玄関に積んである本は、ものの見事に古い本ばかりだ。わたしが呆然ともものも云えないでいると、そののばあさんが、急に謝りだした。

「ごめんなさいね。おたくが来る前に、ブックなんとかという古本屋さんに来てもらったんです。そうしたら、新しい本だけ選んで持ってゆかれました。残った本は、林語堂さんで買うんじゃないのかって」

そうではない。わたしが無口でいたのは、その残りものの本のすごい内容にであった。死んだじいさんの蔵書だというのが、ブックなんとかは孫のマンガ本や、娘の読んだ小説だけを持って行って、そのじいさんのアイヌ関係の本、各藩の日記、市町村史には手もつけなかった。

「せっかく来ていただいて、こんな本ばかりで、すみませんね。捨てようかと思いましたが、持って行ってもらうだけでも助かりますので」

(しめた!) わたしは、その言葉を待っていた。

「そうですか、残念ですね。まあ、ガソリン代にもなりません、それではお言葉に甘えていただいて帰ります」

そんなときでも、決して嬉しそうな顔をしてはならない。しぶしぶとゴミでも持ち帰るような演技。ああ、わたしは古本屋をしていなかったら、役者になっていただろう。

いま、本がどんどんと捨てられている。それに興味もなく、どういうことなのか意味も判らない人が如何に多いことか。

明治維新後に、日本の陶器が西洋に輸出された。その陶器を包んでいた紙が浮世絵だった。それに驚いた西洋人が日本に芸術を逆に発見したということを忘れてはならない。未来の人々が嘆くようなことを現代人はしているのかもしれない。

第839話

スーツケース

メキシコシチーを定刻に飛び立ったボーイングは、ワシントンDCに直行していた。

窓辺の席に座っていたハンナは、時折、目眩が襲うように涙ぐんでいた。すべての過去を否定するめに、こうして出てきたのに、忘れることができないほど悲惨な境涯をいつまでも断ち切ることはできないでいた。旅がそれを幾分か癒してくれるとしても、それは旅の持つ特殊な不安と慰撫だ。実に気まぐれで、空々しい気分であるのは旅という特質が醸し出すものでしかない。

隣に座っている紳士が、心配そうにハンナの顔を覗きこんだ。

「失礼ですが、ご気分でもお悪いんですかな。何か冷たいものでも頼みましょうか」

ハンナはそんな問いかけにはっと顔を上げた。二十代の東洋系の美しい面立ちがあった。黒い瞳に黒く長い髪が紳士を見上げていた。

「ありがとうございます。少し強いアルコールで直ると思います」

訛のある英語だった。紳士はスチュワードにブランデーを頼んだ。優しそうな紳士は、六十前だろうか。口髭も少し白い。エコノミーの情報紙を読んでいたから、ビジネス関係の人には違いない。

ハンナはブランデーの小さなグラスを一気に傾けた。そして、吐息を漏らした。

「ご旅行ですか。いや、わたしはミカエル・ジェッキンズといいます」

紳士は話をしていると気が紛れるかと気を遣っているのが判る。

「ええ、ワシントンに桜を見に行きます。ハンナ・ナスラーラです」

ハンナの声は詰まっていた。紳士はユダヤ系の名だったので、ハンナは金持ちを想像していた

。

「それはいい。今頃は満開で、綺麗なものですよ。桜を見るのは初めてですか？」

「はい、なんでも、葉の出る前に花が咲くとか。短い間に一斉に咲いて散るそうですね」

「日本からだいたい苗木が贈られてきましてね。いまはワシントンの名物です。でも、それだけでワシントンを訪れる外国の方も珍しいですね」

ハンナはギクリとした。アルコールが少しは気分をハイにさせていた。

「センチメンタル・ジャーニーなんです」

紳士は、改めてハンナの服装を見て、黒一色だということに気づいた。

「どなたか、身内の方に不幸でも？」

「夫が昨年亡くなりまして、二歳だった息子も一緒に……」

ハンナは思い出したように目頭を押さえた。

「それは……大変なことを思い出させまして。交通事故かなんかですか」

ミカエルはこの沈痛な表情の女性に興味を抱いた。ハンナは首を横に振り続ける。まるで、すべての現実を否定するように。

「本当は、喪に服さねばならないので、旅行なんかできないのですが、ひとりの家にいまして、子供の玩具とか、夫の洋服とかが、どうしても目につき処分もできずに、出ていったときのままにしております。まるで、夕方にでもひょっこりと帰ってくるような、わたしたちの生活はあのときのままで、静止してしまっただけです」

話題を変えようと、ミカエルは、ワシントンの名所や、公園、博物館などの話をし出した。

「いまが一番綺麗な季節です。花という花が咲き誇り、晩秋も好きですが、やはり五月がいい」

ミカエルは、何かお力になればと、名刺まで差し出した。見るといくつかの会社を営んでいるようだった。

やがて飛行機はワシントンの空港に到着した。ハンナの荷物は貨物室、それは空港で受け取れる。スーツケース一個だけだった。そのケースの中には本当は持ってくるつもりはなかったが、夫の写真とパイプが遺品として入っていた。息子の大事にしていた宝物の玩具も一個だけ入っていた。それらと一緒にあれば、家族で旅行をしているといった安心感があった。いわば、スーツケースの中には、ハンナは思い出と愛と、自分自身の歴史と、怨念と、神への誓約と、あらゆる願いと、諸々が詰められているのだった。

ハンナは、飛行機が定刻に到着したことに感謝していた。もし、少しでも遅れることがあった

ら大変だった。すべてが水の泡になる。それで先刻から、腕時計ばかり気にしていた。そして、空港の様子をきょろきょろと見回していた。誰か出迎えにきているのを確認するように。あちこちに警備の警官が張り付いているだけだった。平日も週末も関係がないほど、空港は出入国の旅行者でごった返していた。

飛行機から降ろされた荷物が出てきた。ハンナはそれを手にすると、入国審査のところまで運んだ。メキシコの空港職員の仲間の顔が浮かんだ。どこにでも仲間はある。それだけがハンナには心強い。スーツケースはかなりの重量がありそうだった。女の力ではキャスターがついていても重そうだった。それを見ていたミカエルが手を貸した。

「押してあげましょう。おや、これは重い。何が入っているんですかな」

すると、ようやくハンナは笑みを浮かべて話し出した。

「ええ、わたしの友人たちと、父母、叔父、勿論、夫と息子、そして、わたしたちのすべての思い出と憎悪、深い信仰が詰められていて重いんです」

ミカエルは首を傾げて笑った。話の内容が読めなかった。入国のゲートで手荷物のチェックが行われていた。ハンナの番になった。スーツケースは重くてとてもひとりではテーブルに載せることもできない。係員が怪しんで、数人が手伝ってスーツケースをテーブルに置くと、ハンナに開けさせた。

開いたら、ハンナの衣類や家族の写真、玩具なんかが、出てきた。それを出すと、その下にはハイテクの計器類が見えた。デジタルの数字がカウントダウンされている。あと、三秒でゼロになるところだった。

第840話

春 蝉

春に蝉が啼く。それは、この山裾に居を構えるまで知らなかった。家のすぐ裏は松林が斜面に駆け上がり、春蝉の格好の団地だったのだ。

引っ越してきた当初は、五月の暑い日に、裏山で一斉に啼いている蝉の合唱が、幻聴だと思った。去年の夏の疵が癒されぬまま、三半規管の砂浜にいまだ波のように繰り返し寄せているものだと。

営林署を退職した老詩人が、わたしに春蝉のことを教えてくれた。ヒグラシに似ているが、幾分か小型だ。小さい分、声も小さい。だから、遠くから聞こえるように思うのだ。

ただ、その蝉の協奏は五月の暑い日、何かの間違いで空の温度調整が狂ったものかと思われるほど、気温が上がり、夏日になったときに、騙された蝉たちは外に出てくる。それも一週間と続かない。いつのまにか、裏山は静かになる。一瞬の夏の偽装のように、蝉とは儂い命であることを知る。

その子は自閉症だった。小学校まではちゃんと学校に通っていた。中学からだんだんと不登校

になってくる。親はわたしの兄貴分であり、いろいろと仕事のことで面倒を見てくれ、アドバイスもいただいた。彼の家によくよくとお邪魔しては、昼から鍋をつつき、ビールを飲んだ。

わたしが来ると、いつも仕事は空けておいてくれる。真っ直ぐな性格で、仕事一筋だが、どうも家庭サービスは欠けるようだった。

一人娘は恵美といった。幼稚園のときから知っていたが、わたしには息子三人よりいなかったもので、女の子も懐けば可愛いものだと、行くたびに遊んでやった。

わたしが遊びに行くと、周りをうろうろして、よく両親に叱られていた。何かいつも落ち着かない様子を見せていた。それは、居場所を捜しているのだろうと思った。わたしは、

「メグちゃん、ここへ座り」と、膝の上に座らせた。すると、安心しておとなしくなるのだった。

「これ、メグ、おじさんが食べられないだろう」

お父さんは厳格で、客人にそんなことはさせられない。わたしは普通だった。何か食べたいものがあるかと、食べさせるくらいあたりまえのことだった。

「いいんですよ」と、云ってみるが、

「あっちへ行っていなさい。勉強はしたのか」と、口調がいつも厳しい。まだ小学校の低学年だ。

メグちゃんは、ふいと怒ったふうに自分の部屋に閉じこもる。それを親は、我が儘で云うことを利かないと突き放しているようにも見られた。地元では名士で通っている家柄のため、こと子供の教育には厳しい。習いものだ、塾だと、それは取り立てて云うほどのことでもないが、どこにでもある家庭の顔のように見えた。

わたしの知る限りで、子供たちが暴れたり、グレたりするのは比較的経営者の家に見られた。すべてが事業のために犠牲にされる。親は子供の顔まで見えない。大概、母親もなんらかの形で役員になっていたりして、共稼ぎの家庭が多い。大きな家に住んでいて、鍵っ子になっている。それで、小遣いだけは世間より多いというのも、それに昼食代もはいつていたりする。忙しくなれば、その金で弁当を買って食べなさいとやるのだ。

家族が揃って夕飯を食べるということはまずない。日曜は商売の稼ぎ時だから、とても子供をどこかへ連れてゆくといった家庭サービスなどしてられない。家族で旅行、キャンプ、ドライブ、そうした良い思い出は生まれたときからないのだ。

メグちゃんは中学にあがった。うちの長男と同じくらいだから、一度、うちの子供たちも連れて遊びに行ったことがある。親戚の子供たちもみんな集まってきて、庭でバーベキューをやるということになった。狭い庭が十人くらいでいっぱいになった。外に連れてゆけないから、せめてそんなことでもすればいい。

メグちゃんは、終始黙ったまま、口を開かないという。学校にも行かないで、すっかりと閉じていた。おじさんとこの子供たちも来るというので、いつもは出たがらないメグちゃんも、珍しく出てきた。お母さんに聞くと、病院に通い、薬もいただいているという。暫く顔を見ていなかったが、小学生のときより、暗く、態度もおかしかった。

当夜はうちの三人のお笑いショーだった。すっかり津軽弁で、学校のこと、街の面白いことな

どを小学三年の下っこまでが、漫才のように喋るので、みんなゲタゲタと笑っていた。上方漫才は関西弁の云い回しが面白いが、津軽弁もおかしい。

その笑いの中にメグちゃんの笑い声があった。みんな、はっとしてメグちゃんを見ていた。わたしに親戚の人がそっと囁いた。

「メグが笑うの初めて見ましたよ」

そんなことがあってから、わたしはメグちゃんを一年でも引き取ろうかと思って相談した。国内留学だと思えばいい。どうも、うちの子供たちと合うようだし、家族は多いほうが賑やかでコミュニケーションもとれるだろうと。それはやはり世間体がどうのとダメになった。子供が病んでいるのは親から隔離する必要もあるのだ。何もその子供が病気なだけではない。早い方がいいと思ったが、実現は不可能だった。

それから何年かして、時折、メグちゃんはどうしているだろうかと案じたりしていた。短大に入ったとも聞いた。ただ、心の病は治らずに、いまだ対人関係がおかしいと聞いた。

突然の知らせが入ったのは、五月の暑いさなかであった。メグちゃんが、ビルの屋上から飛び降り自殺した。

蝉は啼くのではない。羽根を摺り合わせて音を出す。声が出なくても、言葉で云えなくても、メールでもいい、聞く相手があれば、聞いてもらいたかった。ボディランゲージを発信していたのに、気づかないで、ひとつの若い命が閉じた。虫たちが啼くのは互いに相手呼び合うものだ。ケイタイとパソコンの普及は、何よりも若者たちのコミュニケーションの渴望が一番ではないだろうか。どこかで誰かがメル友を求めてアクセスしている。それが、蝉の啼き声にも聞こえてくる。

第841話

悲しき傀儡

最近になって、彼はもの思いに耽ることがあった。時折、悲しそうな視線を窓の外に向ける。五月病というやつであろうか。いや、五月の病は、新しく来たものたちが罹る病気だった。彼のように、今の仕事を何十年もしてきた者の病ではない。

彼は別の人生を考えることがある。それはありえない想像なのだが、想像の中では、彼はいつもごく普通のサラリーマンでいられた。

彼の妻は、家では普通の女として、彼の身の回りの世話をして、洗濯に掃除、炊事もひと通りこなす主婦なのだ。一人娘がまだ手が離せないから、子育てが大変だ。

妻は、そんな淋しそうな夫がいつもできない想像だけで我慢しているのを見ていながら、運命を呪うのだった。

「あなた、また考え事？ 仕事が嫌になったのね。いいえ、判るわ。あなたの目は、いつも外の世界ばかり見ておいでですもの」

妻にはすべて判っていた。夫の傍には、どこからか密かに取り寄せた、アパマン情報誌と、アルバイト情報誌が何冊も置いてあるのだった。

「君と娘と三人で暮らすには丁度良い庭付きの瀟洒な家があるんだ。多摩川の上流でね、自然もまだ残っている。古い民家だが、家賃が七万円と安いのだ。間取りもいいよ。ほら、タタキもあって囲炉裏まであるんだ」

妻はいつもの戯言が始まったと思っていても、夫の夢なのだからつきあうことにしている。そして、三人だけの生活をいつも話し合っ、お喋りをする。

「囲炉裏には墨火、夏なら雨戸を開放すると、柱だけの家になるのね」

「隣の農家の人が、取れたてのトマトをお裾分けだと持ってくる」

「あなた、庭に家庭菜園もしましょうよ。お茄子だとか、ピーマンだとか、そうねえ、じゃがいもなんかいっぱいできそうですよ」

「ところで、新しい仕事なんだが」と、彼はアルバイト情報誌を開いた。

「これなんかどうだろう。ツアコンというやつ。外国から来た旅行客を案内するんだ。君なんかもできそうだよ」

「それは、あなたも語学は堪能だけど、それは、いまのお仕事の延長線上にないかしら。それよりも、がらりと変わった方が面白くてよ」

「そうかな。例えば？」

妻は情報誌を覗きこみながら、いい仕事を探していた。

「これなんかはどうかしら。あなたにぴったりだと思いますが」と、妻は笑う。夫が見ると、たこやきの代理店。ねじり鉢巻をしている自分はどうしても想像できない。

「でも、これってどこでもできるわけではないだろう」

「それはそうよ。ちゃんと機械一式を購入してから、研修も受けて、どこか人通りのいいところ

に小さな店舗を借りるのよ」

「ぼくなんかに、果たして貸すだろうか」

妻はくすくすと笑っている。

「いまの仕事は自由がないし、肩が凝るから、そうだなあ、もっと自由に動き廻れるセールスがいいなあ。保険の外交でもいいし、車を売って歩くとか」

「それはいいかもしれませんがね。あなたなら、お顔が広いから、きっとナンバーワンのセールスマンになれましてよ」

「そうかなあ」と、彼はまた想像を巡らしている。実に真面目で、素直な性格が、ときとして反抗するときもある。それは人間だから、押さえつけられると、反発はする。いまの仕事は発言も自由にできないのだ。言論の自由はここにはなかった。すべての日程は決められて、それに則って動くだけだ。

「あなたが可哀想……」

そんな夫を見て、妻は涙ぐんだ。

「いや、ぼくは諦めているが、それより君のほうこそ可哀想だ。ぼくは許さない。できればこの体制を壊してやりたい。いままでができなかったが、時代が変わったのだ。許されるのならぼくは辞めてしまいたい。そして、転職するのだ。君も奥さんたちと井戸端会議もしたいし、カラオケにも行きたいだろう。娘だってそのうちそう思うようになると思う。あいつらが、がちがちの頭だから、これからもよくなるわけではない。もうエリートの集団はたくさんだ。古い体質があるかぎり、ここは狭くて苦しい。きっと死ぬときは云うんだ。もっと自由をってね」

夫の言葉が乱暴になった。いつもはこんな人ではなかった。よほど頭にきたのだろう。

「ときおり、夢の中で、逃げ出して遊び回っているんだ」

「それはわたしも同じよ」

「君も夢の中でしか自由はないのか」

電話が鳴った。彼が電話口に立った。

「はい、判りました。あと十四分で参ります」

彼は外出の支度を始めた。

「あら、もうこんな時間。あと十四分しかないわ。正確ね。洋服はすべて揃えてありますから」

「毎日、毎日フルコース攻めだ。全く。お茶漬けと納豆が食べたいよ」

ドアがノックされた。正装した彼が、戸口に立った。

「皇太子殿下、ご用意はよろしいでしょうか」

従事が迎えに立っていた。

突然の電話だった。

—北村さん、ぼくですよ。斎藤乾一です。

—はあ？ サイトウケンイチさん？

わたしの頭の中のアドレス帳が急速に回転して、その名前を検索していた。新潟の斎藤健一という詩人なら、以前は詩集を送ってきていた。彼だと思い違いしていた。

—十年になりますか。あのときの個展のときが忘れられなくてね。約束の店に飾る陶板の看板を作ったので、持って行きますよ。来週の土曜日なんか如何でしょうか。

それで思い出した。十年前にギャラリーもやっていたとき、東北の窯シリーズという独自の企画展を一年間やったことがある。東北六県の陶芸家に手紙で作陶展をしませんかと案内を出した。どうしてもやってもらいたい窯元には、車で出かけて行って頼んだ。一年で二十五名の作家さんの個展をやった。

斎藤乾一さんはその中のひとりだった。気仙沼で高前田乾隆窯を開いた。海外でも積極的に個展を開催している人だ。あのときはまだ五十を過ぎたばかりだった。どうしても顔が思い出せない。飲み歩いた記憶だけがあった。彼の紹介で、アメリカの前衛作家のギャラリー・ホールのテラコッタや陶器の展覧会もうちでやった。アメリカ人の作る器は発想が面白かった。

その斎藤さんが、十年前の約束を覚えておいてくれた。友人の銅版画家の塚原弥太郎さんと二人で青森に行くというので、ホテルの手配をした。

土曜日になった。宮城県から車を走らせて、県庁前から電話してきた。うちの店の場所を教えたが、迷ってようやくやってきた。顔を見て、お互いに云うことは同じだった。

「髪が真っ白になって、太りましたね」

それはそうだ。彼は還暦を過ぎ、わたしだって、ギャラリーをやっていたときはまだ四十過ぎたばかりで、まだシングルファザーだった。思い出した。個展そっちのけで毎晩飲み歩いたことなどを。

わたしより少し上の塚原さんは、

「ときどき、あなたのことを斎藤さんから聞いておりました。あの一週間が忘れられないって」

それは、個展のことではなさそうだ。確か、わたしの記憶では企画展は惨敗で売れなかった。花入れとグイ呑み、コーヒーカップぐらいが出たろうか。壺などの値のはるものが出なかった。わたしの好きな瑠璃色の平鉢など、彼は瑠璃を見せつけた。それは、彼の工房の近くの海であり、自分の夢の色であるという。

普通は、地元の先生なら、個展のオープニングに小パーティを開き、ファンの女性客を集めて、ギャラリーの中で呑んで食べて、予約してもらおう。そして、個展の打ち上げにもやはりパーティをやって、さらにお買い求めいただくということをしていた。酒は卸問屋から買い、オードブルはわたしが作って持参したりしてあまり経費をかけないようにする。それでなくても企画展は、ポスターやハンドビル、個展の案内状などの郵送費と、費用がかさむ。売上げの何割かいただいて運営しているので、一週間やった個展で、ひどいときは油絵が一枚も売れなかったこともある。まるまる赤字だった。斎藤さんのときは、地元では知名度がないから、パブリシティを狙って、テレビ局、新聞社各社に毎度のごとく個展の取材要請をした。文化記事やテレビのニュースでは、よく穴埋めに来て取材してくれた。大きな事件がなかったり、平穏な日が続けば、文化

で埋めるのが無難だ。

斎藤さんのときは、個展の紹介で新聞に写真入りで小さく取り上げてはくれたが、テレビ局はたまたまどこも来なかった。そんなこともあって、宣伝不足で客もまばらだった。毎日、レジを精算して申し訳なく思っていた。わたしは、古書店が閉まってから、毎日ギャラリーに顔を出して、売上の悪いのを酒でごまかそうと、斎藤さんをあちこちのスナックや居酒屋に誘った。彼もホテルに投宿するし、往復の旅費と経費を掛けて来ているのだ。

十年の約束をこっちはすっかりと忘れていたのに、斎藤さんは心に引っかかったままだった。ギャラリーは三年で畳んだ。工芸関係から遠ざかり、芸術家たちとも疎遠になってきた。そんなときにひょっこりとやってきた斎藤さんだ。

陶製の板に林語堂と名前を釉薬で書いて焼いてくれた。わたしは、さっそくその看板を店の玄関に飾った。なかなかいい。

「あのときのスナックに行きたいですね」と、斎藤さんが懐かしがるが、みんな潰れてしまっていた。ただ一軒、なんとか潰れないでやっているところに連れて行って三人で呑んだ。マスター一人だけでやっている店で、たまたま来ていたピアニストが店のアップライトピアノを弾いて、交互に生伴奏で歌を歌った。

「さあ、次行きましょうや」

と、わたしたちはあの日のように夜中まで呑み歩いた。独身時代が戻ってきていた。

「みんな東京を向いて仕事をしているわけじゃない。嬉しいなあ、あなたのように地方で頑張っている人がいるってことは」

斎藤さんは感激の塊みたいな人だった。窯入の火のようにいつも燃えている。同行してきた塚原さんも、岩手の辺境の地にへばりついて画業に精を出している。ちょっと田崎潤に似ていたので、店にあった自伝の署名本を彼に贈呈した。

「北村さんってこんなやつなんですよ」と、斎藤さんはヤケに誉める。

世の中、不況で書画骨董、芸術みな売れない。それを売る店も大変だが、作家も食えない時代になってきた。そんなときによく人はいい時代を振り返る。ゆとりがなくなっていると、いい茶碗でお茶を飲むことも、花を飾ることも、本を読むこともなくなる。

「また、何かやりたいね。何かできそうだよ」

斎藤さんはそう云うが、若さだけは確実に消耗していった。それを懐古するようにわたしたちは腕を組み、酒に流れてゆく。

第843話

ある駆け込み訴え

はい、患者は待合室で待たせてあります。今年八十三になるわたしの母です。本人は四十年以

上も前から自分が心臓病であると信じて疑いません。ですから、ここではっきりさせたいのです。おふくろは本当は、心臓病なんかではないと思うのです。神経心臓と云いますか、パニック障害と思うのです。というのも、わたしもその精神的病に二十六年間も悩ませられてきました。わたしは自分が心臓病であるとは思っていません。似た症状の発作がくるので、初めはそう思いましたが、データがなかった時代です。いまでこそ、パニック障害の本は書店でかなり売られ、芸能人でその病に取り憑かれている人たちがテレビで告白し、いろんな患者の会が全国規模で広がっているのです。お医者さんも、病名をつけるようにしたのは大変と助かりました。おふくろが、その病に罹った昔は、そんな病名すらもいまだなかったときです。それで、初めは、入退院を繰り返してしまして、いまだに舌下錠をお守りのように持って歩いています。ニトロというのは健康な心臓には却って悪いではありませんか。副作用があるとか。それで、田舎の病院のことです。検査をしてもどこも悪くないと申しますので、おふくろはすっかりと医者不信に陥りまして、例のドクターショッピングを繰り返すのです。考えてみれば、診断を下した医者はすべて正しかったのです。ただ、落ち着いたところは儲け主義の悪い医者で、あっさりと言いの言い分を吞んで、「あなたは心臓病です」と、おふくろに病名を付けました。そして、何年もその病院に入院したり、薬を貰ったりと、いまだに通っているわけですが、おふくろがあまりうるさいから根負けしたのでしょうか。自分が心臓病であると云う医者はおふくろにはすべて名医なんですね。わたしの祖母、すなわちおふくろの母親ですが、やはり心臓病と本人が云っておりました。それでも亡くなったのは肺炎でした。しかも九十七才で亡くなりました。母方の女はみんな長生きです。そんなに長生きするのなら、みんなも心臓病になりたいと思いませんか。パニック障害というのは遺伝するんです。うちの姉も同じ症状で苦しんでいます。祖母から移り、おふくろにわたし、姉と、これでわたしが心臓だと騒げば、うちの息子もパニックになるかもしれません。思いこみが遺伝するのだと思います。おやじは、昔、わたしが初めての発作で入院したときに、おふくろを叱りました。「おまえが騒ぐから、息子まで心臓病になったではないか」と。わたしの場合は四半世紀もそれとつきあっているわけですが、自分で克服しております。確かに死の不安はつきまとい苦しいものですが、いまだ死んだ試しがありません。おふくろは、三日に一回、心臓発作が起こります。一年で百二十回、十年で千二百回、四十年で実に五千回近い発作です。これはギネスブックに載りませんか？ もし本当なら、命がいくつあっても足りません。悲劇を通り越してすっかりと喜劇です。朝から晩まで、あちこちが痛い、悪いと、体の話ばかりです。それで、やたら健康食品、栄養剤ばかり通販で買って吞んでしまして、食べては寝ていますので象アザラシのように太ってしまい、散歩をしたりすると発作が起こるといっているので、家から出ない日が続きます。運動不足で本当の心臓病になるのではないかと心配するほどです。問題はおふくろだけには留まりません。本人は、毎日が重病人で、うるさいほど朝から晩まで不定愁訴を云うものですから、家族がたまりません。わたしなんかには「こいつは冷たい息子だよ。わたしが苦しんでいるのに、知らん顔をしている。こんな息子と一緒に暮らしていたら殺される」とよく云います。嫁もうるさがるので、すぐに二階の自分の部屋に避難するわけですが。おふくろは口を開けば毎日同じことの連続で、多少のボケもその中には入っているのですが、毎日聞かせられれば同情もしません。オオカミが出たオオカミが出たと聞かせられるのですから、耳を塞ぎた

くなります。そのうち、嫁も孫たちも、次第におふくろの顔を見れば、蜘蛛の子を散らすように逃げるようになりました。おふくろが何かを話しかけると、さっさと逃げるか無視いたします。それはそうでしょう。傷ついたCDのように同じ箇所を何回も聞かされるのに、いちいち「お義母さん、大丈夫ですか。救急車を呼びましょうか」なんて、優しい言葉を掛けてられません。相手は一種の気違いなんですから。それを、おふくろは、「嫁も孫も口も利かない。みんな狂っているのではないか。精神病院で調べてもらったらどうか」と、気違いは周囲の人間を気違い呼ばわりいたします。自分に理解のないのはすべて狂っているのです。だんだんと我が家は悲惨になりました。毎日が地獄です。おふくろは、「おまえが連れてきた嫁はまるで思いやりがない。冷たい鬼のような女だ。あんな嫁はタタキ出してしまえ」とまでエスカレートしてくるのです。わたしも家には帰りたくないの、いつも残業をしたり、家にも自分の部屋で本を読んだりして、できるだけおふくろと顔を合わせないようにしておりました。居間で本は読めません。そばでぐちゃぐちゃと間断なく病気のことを立て続けに云われるのですから、口にバンソウコでも貼りたいくなります。一時間とおふくろのそばで話を聞いてやるというのは、聞く方が苦痛です。みんな傍に寄りたがらないのは判ります。それが、嫁との喧嘩になり、嫁をおふくろは癩癩を起こして怒鳴るわけです。孫には、おまえは気違いかと、罵り、家庭の中が病気と喧噪で実に暗く賑やかになりました。わたしが寝ていると、真夜中におふくろが苦しそうな声でドアの外から呼びます。血圧が高くなったから、救急病院に連れて行ってくれと云うのです。階下の居間で、血圧を何回か測り直すと、血圧はだんだんと下がってきました。わたしも発作のときは血圧が高くなります。それは精神的な作用です。毎日がその有様です。食事も、油ものを食べると胃にくるから、また発作になる。とか、酢のものもよくない、サラダは生のままでは腹にくるとか、いちいち食べるものにもうるさくなり、あまり酷いので、スーパーへ連れて行って、自分の食べられるお総菜を買わせるようにしました。おかゆに豆腐、そんな病人食です。そして、ハンバーグだカレーだと作る嫁は、自分の食べられないものをわざと作っているのだ、わたしを殺そうとしているんだと、被害妄想です。全く我が儘で、年取ると老人は僻みっぽくなり、我が儘にはなると聞きますが、それでは家庭崩壊です。嫁は家を出てゆくとか、離婚するとか騒ぎます。おふくろは施設に入ったほうが、安心できると反抗的に云います。このままでは、わたしども家族が逆に病気になってしまいます。なんとか助けてください。それでわざわざ東京の大病院におふくろを連れてきたわけです。全国的にも名医と信頼のある先生に診察していただき、心臓病でなければ、パニック障害であると、おふくろに宣告していただきたいのです。いまは、その発作を止める薬もあるようです。先生から権威ある診断を下してください。そうすると、おふくろは憑き物が取れたようにけろりと直るかもしれません。お願いです。おふくろを静かにさせてやってください。なんとか、お願いします。

第844話

あなたの代わりはいくらでもいる

キャリア・ウーマンとして、泣く子も黙る人事部長をしている松原英子は、その美貌で男を踏み台にしながら、のし上がってきた。大企業の中で男たちを押しつけて出世してゆくというのには、周囲の憶測が絡んでくる。多分、体が資本だったのとか、社長秘書からの転身なので、愛人ではなかったのかとか、いろんな噂が英子の周りを飛び交っていた。

そんなことにいちいち聞き耳立てていれば、部長職なんかは務まらない。英子は持ち前の鋭い直感と、頭の良さで、醜聞を実績で切り返してきた。女盛りとは最近では随分と年齢が上がったが、五十になって更年期になっても、英子の女としての魅力はますます磨きがかかるようだった。仕事が英子をそうさせる。社会人になる息子が二人いると聞くと、母親である別の顔を想像できずに、みんな意外な顔をする。子育てが終わってから、母はまた女に戻るようだ。

人事権というのは各部門の上司が握っているが、それを組み立て、配置したり、昇給や賞与などの待遇面を鑑みるのは人事部の仕事であった。

英子のいる損保会社も、最近では外資系の企業の攻勢に負けて、業績は毎年下方修正しなければならないほど、シェアを喰われていた。

「このままでは、我が社は二年後には危機的状況を迎えざるをえません。人件費が非常に大きいウエイトを占める業態ですから、この際、大掛かりなリストラを断行することを提言したいと思いますが、如何でしょうか」

部長会議で、英子が男たちが言い出せない禁句をついに発した。女のほうが時には冷たく割り切る。

「まあ、その前にやることがあるでしょう。経費節減なんか」

と、財務部長が臆して云うと、英子は嘔みついた。

「電灯を日中消す運動だとか、そんな電気代って、いくら使っているのでしょうか。みみっちいことはもう止めませんか？ 不採算の営業所も閉鎖したいま、肉を切らして骨を切るぐらいの覚悟がなければ、再構築なんかできませんことよ」

みんな唇を噛んでいた。とうとう、来るべきときが来たという感じだった。その計画を策定して、役員会議で決まればすぐさま実行に移される。

一月後に、英子の計画がトップの英断で具体化されることとなった。四千人の社員のうち三割にあたる千二百名の首切りが始まる。人事考課に基づいての尻尾から切るという作業は、上司ができない分、人事部が死刑執行の解雇辞令にハンコを押してゆく。悪役はすべて英子がかっていた。こんなときは、誰かが悪役にならねばならない。直属上司たちも、云いにくい肩たたきも、人事部が絡んでいればなんとか云えることもある。

当然、各部門から助命嘆願がやってくる。営業課長が、渋い顔で人事部にやってきた。

「第二営業課のM君のことですが、母親が病気で、ひとり息子なもので、切るには忍びないのですが」

英子が課長の対応をしていた。

「あら、そんなことはいくらでもありますわ。娘が大学に入ったばかりだとか、息子が来月結婚だとか、奥さんが手術をしなければならぬとか、家が火事で焼けたとか、それではお聞きしますが、本人の能力や実績を排除して、幸福で満たされている家庭を持っている人なら切れるんですか。なんだったら、あなたが、その人の代わりになって辞めるというのなら、考えてみまし

よう。この船は定員がいっぱいで沈むタイタニックなのよ。いまは荷物を捨て、人を海に捨て、船を軽くして、船とできるだけ多くの人を助けたいの。いまの時代、いくらでも人はいます。連鎖的に辞めてもらったほうが、こっちは助かるというものよ」

人間はかけがえのないものであったはずが、現代はかけがえのあるものなのだ。モノより粗末に扱われている。簡単に首は切られた。その人間の人生、生活、家庭なんかはどうでもいい。

そのくせ、聖域として手のつけていないところが、役員報酬や退職金制度、顧問料だったりするところが、政治家の世界とどこか共通するところがあった。隗より始めよということが全くない。人間は使い捨てであり、消耗品であった。

英子は七時には退社する。ケイタイに男からメールが来ていた。まあ、食事ぐらいならと、いつもの地下室のイタ飯で逢う約束をした。五つ下の不倫相手はバツイチのアーティストだった。広告代理店で知り合った。

「英子さん、いつ一緒に旅行に行ってくれるんですかね」

カンパリーが利いて少し酔っていた。ボビー・ソロの歌が流れていた。

「性急な人ね。でも、そこが好き。来月になったら、北海道に出張があるからそれに合わせない？ わたしだって、一応旦那や会社の目というものがあるのよ」

英子は才媛らしくすまして話していた。

「まだ、亭主には未練がありそうだね」

「いつでも別れてあげるわ。でもね、物事には順番というものがあるのよ。そうそう夫をリストラしても、解雇辞令みたいにはゆかないわよ」

そうしてアーティストとは週一くらいで逢い引きしていた。外では社員の目もあるから、できるだけ仕事の延長に見せかけていた。

英子が家に帰るのはいつも十時を過ぎていた。夫と二人きりの生活だから、互いに縛られることなく、勝手にやっていた。その夫が珍しく文句を云った。

「おまえは、仕事、仕事と毎日のように吞んで帰ってくるが、おれを餓死させるのか。冷蔵庫は空っぽ。食器は山積み、洗濯ものも溜まる一方」

「あなたがやればいいことよ。共稼ぎなんだから当然でしょう。不満なら別れてもいいのよ。あなたの代わりはいくらでもいますから」

夫のほうが入りが少ない。会社も小さい。女房のほうが社会的には上なのだ。精神的にじわじわと亀裂を入れて、離婚するのは時間の問題だった。そろそろ夫にも厭きた。次が控えているから、辞めさせようかと英子は考えていた。夫を辞めさせる。そんな時代なのだ。

英子は疲れて自分の寝室に入った。すると、クローゼットががたがたして、隠れていた間男が顔を出した。

「待ちくたびれてさ」

「まあ、おとなしく待っていたの。いい子ね」

二十以上も年下の彼をペットのように密かに家で飼っていた。

「で、いつ離婚届にはハンコを？」

「焦らないの、物事には順番というものがあるのよ。解雇辞令もひと月前と決まっているのよ」

いつから男は女の奴隷に成り下がったのか。傾城とは男も国も滅ぼすもの。げに恐ろしきものなり。

第845話

経済制裁

ひとり息子の孝幸は、両親が共稼ぎだから、同居していた祖父母に育てられたも同然だった。小さなときは、祖母から自分は生まれたと信じていた。

里村典子はその息子孝幸のことで悩んでいた。別に甘やかして育てた覚えはない。むしろ厳しく育てたつもりなのだが、どうも人間が甘くできすぎていた。それはいまどきの若者の傾向なのだろうか。どう見ても頼りない。

夫の孝伸は典子よりもがっちりとしている。両親ともにそうだから、孝幸は同居の祖母に逃げる。

「ばあちゃん、一万円くれよ」と、甘えてせびる。孫には無条件で甘い婆さんは、

「はいはい、何に使うか判らないが、はいよ」

とポンと出す。それを典子に見咎められた。

「おばあちゃん、そんな大金を中学生に渡してどうするんですか」

「だって、典子さん、いまどきの子は、あれだろ、お金がないと万引したりするっていうから、悪いことをしないようにするために、お金はやっていたほうがいだろう」

「それは違いますよ。なんでもお金、お金って簡単にお金が手に入る苦労知らずになると、将来が大変ですよ。これからは孝幸にはお小遣いはやらないでください」

孝幸は経済観念がまるでない。中学生でも、モノを大事にするということは判っているはずだ。買ったばかりの文房具でもまだ使えるのに、格好悪いとゴミ箱に捨てていた。子供部屋には本人はいないのに、テレビと暖房、電灯も点けっぱなしで遊びに行ってしまう。おやつのお菓子は半分食べてあとはポイ。缶ジュースも呑み残して捨てている。外食すれば、食べられない量を注文して、みんなに手はつけて半分食べ残す。家でも、おかずを無駄にする。

洗面所のシャワーは出しっぱなし。トイレトペーパーやティッシュはあつというまになくなる。

それだけではない。ケイタイを持たせないと仲間外れになるというから、仕方なく持たせたら、その請求額が驚くほど来た。家の電話料金もすごい。インターネットだゲーム料金だと、何か知らないところから親のクレジット番号を知っていて、やたら請求がくる。そのうち、オークションで買ったものが次々と代引きで配達されてくる。

里村夫婦は完全に頭に来た。何度も叱っても云うことをきかない。他の奥さんたちに訊くと、みんなどこでもいまはそうらしい。野放しにしているいいことはない。そんな子供が成人して社会に出たらどうなるのだろうか。未恐ろしい。

孝伸の会社は景気が悪く、今年はボーナスは出ないことに決定した。四月からは給与もカットされた。業績が悪化して、巨額の赤字を計上してしまったからだ。典子の働いていた出版社は先月倒産した。それで、いまはパートがないかと捜していたが、なかなかいい条件のところがない。みんな怪しい会社だとか、歩合給だとか、最低賃金のところばかりだ。

そんな親の苦勞も知らない息子に、何を話しても無駄だと判った。

ある日、孝幸が怒って学校から帰ってきた。

「お母さん、ケイタイのお金、払っていないでしょう。止められたようで、使えないんだよ」

「ごめんね、いま、うちにはお金がないのよ」

典子は憔悴しきった顔で呆然と立っていた。

孝幸が自分の部屋でパソコンのスイッチを入れると、ネットにも接続できない。これではメールができない。プロバイダーに問い合わせると、接続料が先月から引き落としできていないので、止めたという。

「なんだよ、貧乏人」と、孝幸は友達の家に出かけて行った。孝幸が家に戻ってくると、家の中は暗い。玄関の電灯も点いていないようだ。

「お母さん、停電なの？」

「ごめんね、電気代払えなくて電力会社で止めて行ったものだから」

シャワーを浴びようと懐中電灯を手にバスルームに入ると、お湯どころか水も出ない。

「お母さん、水が出ないよ」

「ごめんね、水道料金を溜めていたから、こっちも止められたんだよ」

「ええ？ どうするのさ。これじゃ生活できないじゃないか。顔も洗えないし、歯も磨けない、お風呂にも入れない」

夕食は、四人で蝋燭を立ててしんみりと食べた。おかずはたくあんとゴマ塩、メザシだけ。煮炊きは庭で木ぎれを燃やしてやるしかない。

「メインがないじゃないか。お肉もない、これじゃご飯はいらないや。まだカップラーメンのほうがいいや」

孝幸がふて腐ってラーメンを食べようかと捜していたが、ガスも止められているようで、鍋が使えない。冷蔵庫も止まっているから中は空っぽにしていた。

孝幸がテレビを見ようとして、焦った。

「そうだ、今日は見たい番組があるのに、テレビも点かないんだ」

それでねまたばたばたと騒々しく友達の家を走って行った。電話も使えないから、ビデオに録画してくれと頼めない。頼んでも電気を止められているから、見ることはできない。

夜になって、孝幸はおなかが空いてたまらなくなる。

「お母さん、なんかおやつないの？」

いつものところには何も無い。

「ごめんね、うちにはジュースもスナックも何も無いのよ」

「それなら、コンビニで買ってくるからお金くれよ」

典子も孝伸も財布をひっくり返して見せた。埃も出てこない。

「ごめんね、一円もないのよ」

「いいよ、もう、いいよ」と、孝幸は怒って、祖母のところに行く。
「おばあちゃん、コンビニから弁当買ってくるから小遣いくれよ」
すると、真っ暗な部屋で寝ていた婆さんは、むくりと起き出して、
「すまないね、おばあちゃんの年金は家のローンのために全部出してしまったんだよ。お父さんの賞与が出ないものだからね。おばあちゃんも無一文になってしまっただよ」
「それじゃ、それじゃ、ぼくに死ねっていの」
三人とも、その声を聞いてにんまりと笑った。
里村家ではそんな生活がひと月は続いたろうか。蠟燭の生活にもすっかり慣れた。あれほど好き嫌いが酷く、食べ残していた孝幸も、ご飯粒ひとつ残さず食べるようになった。むしろ食欲に餓鬼になっていた。給食も友達の食べ残したもので、勿体ないと食べているという。本を読んで、勉強もするようになった。家族がいつも蠟燭の灯る居間にいた。
「あなた、孝幸は随分といい子になりましたわね」
「そうだな、そろそろ経済制裁を解除してやるか」
時には不便も躰のうちだ。

第846話

蛍光灯

のそり、のそりと歩く生き物がいた。体格はよく、身長もあるが体重もある。がたいだけは大きくても存在感がまるでない。みんなは、そんな彼のことをぬり壁と呼んだり、蛍光灯と呼んだりしていた。

彼、大山豊太は三十二の独身のサラリーマンだった。仕事は警備員をしていた。体が大きいから威圧感がありそうでないのは、ぶよぶよしているからだ。風船のように浮いた感じがするので、怖くもない。それは豊太の優しい性格にもよるだろう。

警備会社からの派遣なので、勤務先は、ときには銀行だったり、デパートだったりするのだが、何か頼りがない。いつもぼんやりしていて鈍感だ。あれでは、万引や置き引きを見張れないと、みんなは安心できないでいた。

「おい、蛍光灯、大丈夫か。最近は、窃盗団が荒らし回っているようだが、ちゃんと見張ってくれよ」

と、店長にも云われている。

その日の豊太は、どうも元気がない。体の調子がよくないのだ。同僚には、顔色が悪いと云われる。青いというより白い。血の気がないようだ。そう云われると、なにやら貧血気味のように、ふらふらする。体が軽いのだ。

「大山くん、病院に行ったほうがよさそうだよ。いつからだい？」

「うん、太りすぎて、心臓に、負担が、かかって、いると、思うんだ。今朝方、出勤するときに、心臓が、痛くなってさ、つい、しゃがみこんでしまってさ。暫く、道端に、座っていたら、楽には、なったけど。やはり、病院に、行ってみます」

豊太は、制服のまま近くの内科に行った。午後だから患者は少ない。待たせられることなく医者は診てくれた。口髭をつけた年輩の医者は、聴診器を豊太の胸や背中に当てて、首を傾げていた。そして、目を見て、脈をとった。そして、急に怒り始めた。

「あんた、何のつもりなんだ。医者をからかいに来たのかね。お引き取り願います。そんな、バカにして、全く」

ぷりぷりと怒って、それ以上は診察をしてくれない。一体、何の病気なのか、教えてもくれない。具合が悪いのには変わりがないというのに、処方箋も書いてくれない。頭にきたのは豊太の方だった。

「いくら、体が、大きくて、丈夫そうだからって、ぼくは、とても、気分が、悪いんだ。きっと、何かの、病気なんだ。それとも、病気じゃないと、いうのか」

いつものゆっくりした口調でぼやくのも、かなりズレていて、すでに病院を出たあとだった。仕方がないから、別の病院へと入った。

「顔色がよくありませんね」

その医者の聴診器で豊太の胸を診ていて、急に顔色を変えた。

「心電図をとってみましょう」

隣の部屋で心電図がとられた。看護師たちが、青くなって騒ぎ始めた。報告を受けた医者は、真っ赤な顔をして、怒鳴り始めた。

「あんた、何のつもりだ。医者をなめとるのか。いい加減にしなさい。早く出て行ってくれ」

ここでも同じ目に遭った。

「いくら、なんでも、酷すぎる。健康だったら、異常なしと、云って、くれれば、いいものを、タタキ出すことは、ないだろう」

と、ゆっくりと文句を云っている間に、外に出されていた。看護師は、塩まで玄関に撒いていた。

どうしても納得がゆかない。なんで、こんなに具合が悪いのに、ちゃんと診察してくれないのだと、豊太はぶすつとして歩いていた。

「そうか、町医者だから、精密検査を、してくれないの、かな。大きな、総合病院なら、機械が、揃っている」

豊太は、気を取り直して大学附属病院の玄関から入った。いろんな科があって判らないから、とりあえず内科に行くことにした。

「大山さん、お熱を測ってください」と、受付で体温計を渡された。一分計だからすぐに測れる。三十五度と一番低い。上がっていないようだ。

「ちゃんと真面目に測りましたか」と、まるで子供のように叱られた。測り直しても、同じだった。

「おかしいな、壊れているはずはないのだけど」と、看護師が、豊太の額に手を当てて、驚いた。

「先生」と、すぐに医者を呼びに行った。豊太は真っ先に診察室で診断を受けることとなった。ひと通り調べてくれたが、医者ほうんとも云わない。黙ったまま腕組みをして、目を瞑っている。

「先生、前の、医院でも、突然に、医者が、怒り出して、からかって、いるみたいだと、追い出すんです」

と、豊太が云うと、医師はようやく重い口を開いた。

「ううん、あなたのような患者は初めて見ました。怒りたくもなります。あなたは日頃から、のんびりした性格なんでしょう」

「はい、みんなから、蛍光灯と、云われています」

「なるほど、なるほど。はっきりと云いましょう。あなたの診察の結果ですが、血圧測定不能、瞳孔は開き、脈拍、呼吸ともにありません。なんだったら脳波も調べてあげましょうか。すなわち、あなたは医学的にはすでに死体です」

「ええ？ この、ぼくが、もう、死んで、いただなんて」

豊太はようやく、自分が死んだことに気づいた。すると、その場にこてんと倒れてそのまま動かなくなった。

「遅いんだよ、全く」

医者は苛々した口調でそう云った。

第847話

十二人の怒れる男女

いよいよ判決の日を迎えていた。裁判員席には、ふて腐ったような顔をした十二人の男女が座って、あらぬ方向を向いていた。そして、みんな、腕時計ばかり気にしていた。

裁判員制度がスタートして、初めての裁判が行われ、断る理由のない十二人の一般市民たちが、裁判員として、法廷に座っていた。最初の仕事は、三十半ばの男の強盗殺人の事件だった。彼は、母親が癌で手術をしなければ助からないと医者に云われ、その費用がないため、社長宅に強盗に押し入り、抵抗した夫婦をベランダからはずみで突き落として殺したというものだった。日頃は親孝行な息子で、貧しい職工だが、仕事は真面目で、若い奥さんと生まれたばかりの子供がいた。見るからに人など殺すような人には見えなかった。

それでも、十二人全員は、怒っていた。口をへの字に曲げ、目は被告を睨んでいた。みんなが、おまえのせいだと、被告に恨みを持っているような視線をたまに送っていた。

金曜日の夕方になっていた。審理は長引いて、裁判員たちは、そわそわし始めていた。

裁判員Aは、この夜、愛人とホテルで逢う約束をしていた。それが六時だったが、苛々するほど話が長い。どうでもいいから、早く帰りたかった。もう、裁判のことなど放っておいて、愛人

のところに駆けて行きたいのだった。Aは、この夜のフルコースを想像していた。今日は、どんな体位で責めてやろうかと。

裁判員B子は、普通の主婦だった。ただ、今夜はPTAの仲間とホストクラブに行く予定であった。その前にカフェでみんなと待ち合わせだ。B子には狙いのホストがいた。彼にプレゼントも用意していたほどの熱の入れようだった。こんな、七面倒なところ、早く出たいと時計ばかり見ていた。

Cは自営業の親父だが、やはり金曜の夜は予定が入っている。商店会の麻雀大会がある。自分が出なければメンツが足りなくなる。しかも、今夜の景品は豪華だ。なんとしても上位に食い込みたい。もともと博打好きな親父は、足をぱたぱたさせて、裁判を早く終わらせたいと思っていた。

Dはサラリーマン。別に予定はないが、今夜だけは早く帰してもらいたいことがあった。首位を争う巨人阪神戦のナイターをテレビでビールを呑みながら観戦するのだ。それを楽しみにしてきたのに、やりたくもない裁判員だと、いい加減頭にきていた。それでさっきから貧乏ゆすりをしていたのだ。

E子は、OLだが、今夜はどうしても行かねばならない用事がある。E子の大好きなタッキーのライブがあるのだ。そのチケットはようやく手に入れたものだ。やはり大ファンの友人と二人で、横浜まで駆けつけなければならないのだが、時間がない。時間ばかり気になって、弁護士の話も被告の暗く沈んだような声も、耳には入っていない。内心は、もう、早く終わってよ、何をごちゃごちゃと云っているのよ、帰してよ。と、だんだんと焦りが怒りに変わってきていた。

Fは家族で映画を見に行く予定であった。みんなで食事してからと、チケットを持っている自分を待っているはずだった。いつも仕事では残業、出張、そして、この裁判員に任命されてからは、とみに家庭サービスが疎かになった。せめてもの罪滅ぼしにと、話題のロードショーと食事を奮発したのに、また邪魔が入る。

G子も落ち着きがない。デパートでワンデーバーゲンがあり、ブランドもののバッグが半額で売られる。本当は、今日は来たくはなかった。できるものなら途中で抜け出したい気持ちだ。早くバーゲン会場に行かねば、いいものは売り切れるのだ。しかも、デパートの閉店時間というものもある。頭の中は欲しかったグッチやシャネルでいっぱいだ。法廷内の光景なんか見えてもいない。

誰も好きこのんで裁判員を引き受けた者はいなかった。みんな嫌々仕方なくやらざるを得なかった。やる気がないから、すべて上の空。みんな自分のことで忙しく、他人の人生なんかはどうでもいいのだ。

被告は泣いていた。そして、それを見守る家族からもすすり泣きが漏れていた。

裁判員たちは一時退席し、やがて裁判員席に十二人が戻ってきた。裁判員の判決が出た。全員一致で死刑だった。場内はざわめいた。号泣する声が響いていた。

みんな、怒っていた。もういいだろう。死刑なんだからさ、早く帰してくれよ。そんな目で、被告と判事を睨んでいた。

第848話

本が怖い

本が怖いと思ったことはありませんか。一冊、二冊の本が机の上にあったぐらいでは、そんな怖いという感じはいたしません。それが、図書館や古本屋のような、古くいかめしい背表紙が並ぶところに立てば、なにやらぞくぞくしたものを覚えるのは、わたしだけでしょうか。

わたしは、古本屋をやって来年で二十年になります。いままで、本が怖いと思ったことなどこれっぽっちもありません。あなた、魚が怖くて調理人ができますかと似たもので、そうです。古本を怖がっては、古本屋は務まらないのです。

古本にはそれを持っていた人の怨念と申しますか、何か思い入れみたいなものがあるのです。ちょうど、人形を大事にして可愛がっていた女の子が死んで、その人形が人手に渡ったら、髪が伸びてきたという話をよく聞きますが、あれと似た靈気を本に感ずるようになったのです。

というのも、こんなことがあったからです。

ある日、宅買いがあり、大きな家に呼ばれて行ったのですが、亡くなった父親の本だと、その息子さんが蔵書をすっかりと売り払うつもりでいました。本はすべて綺麗にしてありました。それを見ていれば、生前、如何に本を愛した人かということが判ります。包装紙でカバーまでしている本は、その本への思い入れが伝わってくるようでした。書斎には仏壇もあり、本の持ち主の遺影が、わたしを睨んでいるように見えました。

息子さんは全く本には興味がないようで、邪魔なゴミぐらいにしか考えていないようでした。わたしは、本をすべてワゴン車に積んで、お代を払うと、店まで戻ろうと発車しましたところ、エンジンがかかりません。おかしいかと、ようやくかかって出ようとしたら、今度はサイドのドアが開くではありませんか。車を停めて、もう一度、きちんと閉めたのですが、車を出すと、ドアは勝手に開くのです。息子さんも首をひねっていました。

(本を持ってゆくなあー)と、どこからか声がしたように思いました。

うちの古本屋は、広いことは広いので、端から端まで掃除するのも大変です。なにせ一人でやっているもので、本棚に上から下までハタキをかけるのでさえ、ひと仕事です。いい運動をしているのだと思わなければとてもできません。毎日汗びっしょりとかくのですから。

広い店に十万冊の本です。それで、お客が沢山入れば嬉しいのですが、そこは通信販売のための倉庫みたいなものでしょう。外からは何屋さんか判らないようになっている。常連客なら、看板を見てうちが何を売っているか判ってやってきますが、通りがかりの人は、恐る恐るドアを開けます。開けると本がぎっしりと積んであるんで、大概は驚きます。ここにこんなお店があったなんてと。

それだから、普段は客はいないわけです。なのに、ハタキをかけていると、奥の棚から、本をめくる音がするんです。棚から本を取りだし、パラパラとページをめくる音ですね。つい、声を掛けてしまいます。

「誰かいるんですか」ってね。そうすると、音はぴたりとやみます。不思議な感じがいたします。

わたしの知人で、超心理学を研究しているやつがおりまして、わたしより若い骨董品屋のおやじですが、そいつが来ると、何かを感ずるらしいんです。

「本に人の思いがくっついてきているんだな」

と、彼は見えるように云いました。

「だったら、綺麗な女の人を読んだ本なら、そこに立ったりするのか」

わたしには怖いものなどありません。しいて云えば、美人が怖いというぐらいでしょうか。まんじゅうと同じで、こんなことを四六時中云っていれば、どなたか、意地悪して、わたしに美人をけしかけてくれまいかと、そんな下心があってですがね。まあ、美人の幽霊というものは許されましょう。

でも、残念ながら、わたしには見えません。うちの女房は見るんです。たまに、店を手伝いにくると、棚の陰からたったいま、マントを着た男の人が覗いていたと、ぞっとするようなことを云います。いまどき、マントなんか着ている人はおりません。やはり、それは戦前の古い人間がいたのでしょうね。

わたしの場合は、音を聞いたり、感ずるということはあります。人の気配がするというのは、よくあることで、この前なんか、誰も店にいないと思って、一番の奥まで本を探しに行ったら、何か、人がいるような気がしました。すーすーと息をするのが聞こえてくる。でも、わたしはそれは幽霊ではないと思いました。何故なら、生きているから息をしているのですから。最後に客が入ったのは午前中にひとりだけ。そして、夕方になっても、今日は暇で、客が一人も来ていません。入口にレジがあり、わたしが座っているんですから、入る客は判ります。

ところが確かに息をする音が聞こえている。わたしは、背筋がぞくぞくしましたが、そっと奥の本棚の陰を覗きました。すると、そこにいたのは、午前中に入った客でした。通路に座り込み、本の間ですーすーと気持ちよさそうに寝ていたのです。

そんなものです。わたしは、言霊とか、靈魂とかは信じません。ただ、科学的な超心理学でいえば、知人の云うように、人間の奥底に隠されていて、それが形となって出るときがあるかもしれません。

本に意志があるわけではありません。本はだから生き物ではないのです。ただ、怖いと思うのは、本のページには膨大な歴史が秘められ、あるいは死んだ人の写真だとか、日記だとか、恋する思いだとか、言葉としてもぎっしりと詰められているのです。その人類の歩いてきた足跡が、叫びが、ぎっしりと棚を埋めているわけです。本はその事実を訴えています。読んでくれと、話しかけてきます。だが、客は来ません。読者が現れないまま、幾年もひたすら待っているのです。

わたしは、パソコンに本の在庫データを打ち込んでいると、静かな店内にはキーを打つ音よりいたしません。すると、また店の奥から、女のすすり泣きが聞こえてくるではありませんか。わたしは、頭にきました。いい加減にしてくれと。それで、つかつかと奥の本棚のジャングルに入ってゆきました。迷路のように複雑に入り組んでいます。と、まるでわたしをバカにするように

、今度はケラケラと笑い声がするではありませんか。確かに本の中から聞こえているのです。

わたしは、どんな悲恋の小説が泣いて、どんな哲学書が笑っているのか確かめようと思いましたが。そのうち、まるで地震でも起こったように、本という本が棚から落ちてきました。わたしを攻撃しているように、わたしに向かって飛んでくるのです。わたしは、ついカッとして叫びました。

「うるさい。静かにしろ。おまえたちは、おれをバカにしているようだが、おれはおまえたちにバカにされるようなことをしたか？ ええ？ 本来なら哀れにもゴミにされ、焼却される運命にあったおまえたちをだな、おれは可哀想だと思って拾ってきてやったのじゃないか。そして、綺麗に拭いてやったのは誰だ。おまえたちが、本としての二度目の人生を歩けるよう、こうして店の棚に只で住まわせてやっていることに少しは感謝しろ」

そう、きつく云うと、それっきり本たちは奇怪な物音を立てなくなり静かになりました。

第849話

ポケベルが鳴らなくて

ぼくは、だいぶ前に、公衆電話ボックスごと背中に背負って歩いている人を見かけました。それは、新しいものにいつも飛びつく進んでいるおじさんでした。ぼくは、見たこともない光景なのでおじさんについて声をかけてみました。

「おじさん、重そうですね。それは何ですか」

すると、おじさんは、汗をタオルで拭きながら、どっこいしょと背中に縛り付けていたボックスを地面に置きました。

「何って、見れば判るだろう。電話だよ」

「かけられるんですか」

「あたりまえよ。持ち運びができる画期的な電話だ。かけてみな」

その電話は本当にかけられました。ぼくはびっくりして感激していました。今から考えると、あれが携帯電話の走りだったんですね。

それから、そのおじさんは、今度は自動車電話に飛びついたようで、自慢げに、車から降りると、肩から電話を下げて、歩きながら電話をしていました。小型のテレビくらいの大きさがあり、それは携帯といっても重そうでした。おじさんは、みんなに見せびらかしに、わざと人通りの多いところで大きな声で電話をしていました。

次におじさんが飛びついたのはポケベルでした。それは会話はできませんでしたが、いままでの重くて大きいものではないので、汗をかくこともありません。ポケットに入るのです。おじさんは随分とそれが気に入ったようでした。それで、逢う人ごとに、

「電話をかけてくれないか」

と、用事もないのに頼むのでした。今の携帯電話のような着メロというものがなく、ただの電

子音のベルが鳴るだけでしたが、それがポケットの中で鳴るときは、おじさんはとても嬉しそうに笑っていました。

とにかく、最新の機械というものが、おじさんの玩具でした。いつだったか、電卓というものがこの世に出たときも、おじさんは手にぶらさげて歩いていました。大きさはショルダーバッグぐらいはありました。そんな、いつも必要でないものを自慢するために毎日手から離しません。みんなはまだ珍しいときだったので、

「それは何ですか？」と、必ず訊くのでした。おじさんは、待っていましたとばかり、にこりと笑うと、

「これはだな、手で持ち運べる電子卓上式計算機なんだな。ほら、電池八本でデジタルの表示だ。掛け算、割り算なんでも来いだ」

みんな凄い機械を見せつけられたように、感心して眺めていました。ぼくは、そのとき初めてデジタルという言葉を目にしました。その頃の計算機というのは、レジスターよりも大きなものでしたから、手で持ち運べるというのは凄いことでした。

それはいまから三十年も前の話です。おじさんがポケベルを誰よりも早く持ったのも、考えてみれば、いまから二十年前のことです。

文明の利器はどんどんと部品がチップ化してくると、小さく小さく、持ち運べるようになりました。最初のテレビは四本足で、でんと部屋の中央に王様のように威張っていたものが、いまでは壁に掛けられる薄さです。腕時計型のテレビでは、いつも腕にテレビがついているというものもあります。電卓も、キーホルダーのように小さくなりました。おじさんが買ったときは、確か月給のひと月分をはたいて買ったと云っていたが、いまでは百円でいくらでも売っています。

パソコンから携帯電話と、世の中は急速なデジタル革命で進歩をいたしました。いままでの進化が、ゆっくりとしたものであれば、そのスピードも次第に加速して、現代では目まぐるしいほどになりました。

おじさんのことだから、きっといい年になったろうが、相変わらず新しいものに飛びついているだろうと思っていたら、先日、久しぶりに街で会いました。

「おじさん、お元気そうで。いつまでも若いですね」

と、お世辞を云ってみましたが、髪は真っ白、歯も抜けて、七十は過ぎていました。ハイテクおじさんも年には勝てません。

「その後、パソコンだとか携帯だとか、おじさんのことだから新製品を買いまくっているんでしょうね」

と、ぼくが云うと、

「いやあ、それが、買おうとは思ったんだが、なにせ操作が難しくてな、分厚い説明書や、マニュアルというのかな、そうした本がいっぱいあるだろう。読んでいるだけで、もうとてもついてゆけない世界になってしまったよ」

「それじゃ、携帯電話は持っていないんですか？」

「ああ、まだこれを使っているんだ」

と、ポケベルを取り出した。ぼくはびっくりした。まだ、こんな過去の遺物を持っている人がいたんだ。すごく懐かしい感じがしました。

「ところがな、もう、ずっと鳴ったことはないんだ」

おじさんは淋しそうに云いました。

「それはそうですよ。いまは持っている人はあまりいないでしょう。メーカーも倒産したり、製造中止したり、いまは、頑固なポケベルを守る会とか、ポケベル保護協会とかに入っている人だけが持っているらしいですよ」

世の中にはいろんな人がいるようで、無くなるものを欲しがる人もいます。いまだにビデオのベータを捜し歩いている人もいるのです。この前は、8トラックのテープを捜している人に会いました。進化に取り残された人もいます。ついて行けなくて、人間の方が古くなってゆくのです。

あまりおじさんが可哀想なので、また番号を聞くと、ぼくはおじさんのポケベルに電話をかけました。すると、すぐに傍にいたので懐かしい音でポケベルは鳴りました。

「おお、おお、鳴った。鳴ったぞ」

おじさんは感激して、涙をぼろぼろと流していました。

第850話

障子を張る

障子に障子紙を張る。それはまともすぎて長いから、短くした。

五月最後の日曜が嬉しいくらい暑く晴れていたから、今日は障子張りの日ですと、天気予報では云わない。春の大掃除のときに、町内で一斉に外に畳を出して、ぱんぱんぱんと畳を叩いた光景も見られなくなったが、障子紙を張るということも見なくなった。

最近のは紙ではないのか。ビニールでできていて、破れないのかと思ったりした。和室も減った。我が家でも、老父母の部屋が仏壇と畳の部屋だ。その障子も穴だらけとなった。十二年の間、一度も張り替えていない。第一、わたしはやったことがない。昔、小さいときは、亡き祖父が、外で障子の張り替えをしていたとき、手伝ったぐらいだ。

「さあ、破け」と、おとなしく待機していた子猫たちに、祖父が命ずると、待っていましたとばかり、日頃はとても叱られてできなかった鬱憤をそのときは晴らせる。猫のようにバリバリとやれるのだ。もの心つかない妹と二人で、全部の障子を破り、紙を剥ぐ。それから祖父は向かいの川から汲んできた水で、障子を濡らし、亀の子タワシで残った紙を取り去るのだ。大概是、五月か大掃除のときのいい天気の日に行われた。

天日で乾いた障子に、刷毛で作った糊を塗ってゆく。糊なんかもみんな家で作った。そんなことを思い出しながら、わたしは日曜の朝、バリバリと紙を剥いだ。水で洗った。キラキラと水が歌う。われに五月と云った詩人も、この青森の五月のなんたるかを知っているのだ。なんとなく

嬉しい。

老父母の黴臭い部屋をなんとかしようと、窓をすべて開けた。普段は、締め切っていた部屋だ。万年蒲団であった。すでに、蒲団を押し入れに上げるといふ力もなくなりつつあった。しかも、半ば病人のように、昼でも寝ている。それではいけない。いけないのだ。

畳も黴ていれば、陰気くさい老人の部屋に新しい五月の風と光を入れた。居場所の無くなった老人は枕を抱いてうろうろ。蜘蛛の巣も取り払い、窓も拭いた。

妹と、老父母のことをどうするかと話し合った。老人専用のマンションができたという。そこに入れてもらおうかと、相談していた。バリアフリーになっていて、すべてが老人の生活のために作られている。老人ホームに入れるのは反対した。まだ、自分で歩けるうちはいい。ポケもさほど酷くはない。ただ、あと数年と云われず、九十を過ぎればいろいろと厄介にはなってくるだろう。そのときはそのときだ。食べるもの、老人の我が儘、頑固、そうしたものもひとつの障害には違いないが。介護が必要になれば、それなりの施設はあるだろう。妹も向こうの義母が目が見えないから、手がかかる。わたしも仕事があるから、付きっきりというわけには行かない。もし、将来、どうしても大変になってきたら、店に連れてきて、傍においておこうとまで考えていた。いまは、下の処理から、椅子がベッドになったりするものまで便利な道具はいくらでも売っている。

それでも、多分、家が売れたら父母は別居という形になるのだろう。そのために家を売るので。

障子が乾くまで、父母を車で十分の隣の温泉へと連れて行った。歩かなければ歩けなくなり、出さなければ出なくなる。そうして、いつのまにか寝たきりとなってしまうのだ。できるだけ、休みの日には外へ追い出すことにした。人間も黴てくるし、腐ってくる。

風呂上がりにアイスクリームを買って舐めさせた。泡風呂が好きで、それをポコポコと云って悦んだ。ついで、スーパーで好きな食べ物を買うようにさせる。年取ってくると食べ物の嗜好も固定化して、食べたことのないものには箸がすすまない。だからといって、いつも同じものばかりでは栄養が偏る。親父は、ついこの前までは蟹蒲鉾ばかりであった。あんなもののどこが美味しいのか。それが竹輪になった。そればかりをどっさり買うから、賞味期間が過ぎて捨てたりしていた。

「二つくらいでいいんだよ」と、注意しないと、二十も三十も籠に入れるのだ。子供のように向きになったり、隠したりするようになってきた。

家に戻ると、今度は障子を張る。糊を塗り、障子紙を張った。やってみて、わたしにはねぶたを作る才能は全くないということに気が付いた。どうしてこうも不器用なのか。不器用なのは女だけでよかった。

妹と相談したことは、暫く保留にしておこうと思った。何故なら、せっかく障子を張り替えたからだった。いまのまま、やるだけのことはやるさ。

最後の仕上げに霧吹きだ。ところが、我が家では霧吹きなるものは使わない。いまのアイロンはスチーム付きだ。しかも、ノーアイロンの衣類が多くなった。

仕様がなから、わたしはコップに水を汲んできた。確か、昔、祖父がやっていた。それは見えて汚いというより、威勢が良かった。武士だって、刀に同じことをしていた。

わたしは、外で遊んでいた息子を呼んだ。

「お父さんが、口に水を含んだら、何か面白い顔をするとか、一発芸で笑わせてみな」

「いいよ」

と、中学の息子はわたしの前でトレパンの下を下げてちんぽを見せた。わたしの口の中の水は霧のように障子紙にかかっていた。

第851話

五十年後の世界

二〇五四年に、西東孝幸は目が覚めた。初めは、自分が誰であるか、記憶も凍り付いていて、解凍してゆきながら、自分の名前からゆっくりと思い出していった。目が覚めたのは病室のベッドだった。ぼんやりと視界が広がっていったとき、そこにはナースと思われる白衣の若い女性たちが覗きこんでいた。ただ、白衣が何か未来の服装に思えた。

孝幸は、自分がどうして眠っていたのか、ずっと長い夢を彷徨っていて、そして長い闇が続き、ようやく息を吹き返していたことのすべてを理解するに半日はかかっていた。

「気がつかれましたか？ ご気分は如何ですか？」

と、優しく声をかけてくれる。医師たちも、検診が終わったようで、すべての装置を外していた。

「ここは？」

孝幸はようやく声を発した。

「ここは、国立第三十四病院ですよ」

「今日は、何日ですか？」

「二〇五四年の六月二日ですよ」

「ということは……、五十年間眠っていたんだ」

「そうです。あなたは、癌の末期で手の施しようがなかったのです。それで希望して冷凍人間になって、未来へと眠り続けたのです」

誰も死なない世界というSF小説があった。難病、不治の病で死に瀕している人々が、死の直前に急速冷凍装置で、自身をかちかちに凍らせて、治療法が見つかる未来に生命を委ねるというものだ。そんな冷凍保存の人間が数万人もいるという。

「あなたは、癌で助からないと云われて、冷凍されていました。現代では、癌は風邪みたいなもので、ワクチンが発見されてからは、完全に治る病気になりました。人間の解凍技術も進んで、あなたの癌はすべて完治しました」

孝幸が冷凍されたときは、五十二才であった。彼の年齢までは停止できないから、細胞活動も成長もすべて止まっているにも拘わらず、時間だけは過ぎていた。だから彼はいま百二歳である

のだ。

ベッドの傍に、孝幸より少し若い感じの女性が心配そうに顔を覗き込んでいた。

「おじいちゃん」と、声をかけた。

「あなたのお孫さんですよ」

「ぼくに、孫なんていない。娘が一人いただけだ」

「その娘がわたしの母なんです。母は、三年前に事故で他界いたしました」

すべてを思い出していた。

「じゃ、ぼくの親父とおふくろは？」

「曾祖父母は、わたしが生まれてすぐに相次いで亡くなったと母から聞きました」

冷凍されていたから、時間的感覚が大幅にズレていた。時差ボケも五十年だ。

「それなら、ぼくの姉妹や文学仲間たちは？」

「みんなとっくに亡くなって、もうこの世にはおりません」

当然のことと判っていながらも、孝幸は衝撃を受けていた。もし、百年後の世界に目覚めたのなら、もう、孝幸の知る人間はひとりもいないのだ。

孝幸は退院した。孫のアンジュが孝幸を引き取ることになった。孝幸は初めて未来の郷里の街へと出た。そして、啞然とした。街の様子ががらりと変わっていたからだ。

「ぼくの家はどうした？」

アンジュは笑って応えた。

「もう、とっくに壊していまは公園になっています。誰も住む人がいなかったし、建物も三十年したら老朽化してひどいものでしたから」

市の中心地はまさにドーナツ化現象で、ぽっかりと広い公園になっていた。建物はすべて取り壊されて、道路を走っている車も少ない。何か以前の街と比べたら淋しい閑散とした街になっていた。

「それはそうですよ。この地方都市も昔は三十万人いた人口がいまは半分もありません。日本の人口が歴史で習ったときは、確か一億二千万人と云っていましたが、いまはその半分です。少子化と、戦争、ウイルス、若者たちの重税による海外移住で、六千万人になりました。土地は値上がりする一方で、あちこちでがらがらと空くようになりまして、マンションも住宅もみんな空き家続出です。いまは、子供のお小遣いで土地なんか買えます。それほど安くなってしまったのです」

未来の車はすべてコンピュータが動かしているとのことで、太陽エネルギーで走っていた。

「車だって、半分以下に減りましたから、道路行政も車が増えるという前提で拡張工事をしてきたのが批判されました。道路も三車線もいらなくなりました。狭くてもいいのです。人口が減ったから、当然、すべてのものが減ります。デパートも商店数も食糧もモノも半分でもいいわけです。いまの日本は食糧自給がほぼ百パーセントになりました。よくなったのは農業だけで、工業、商業は半分は倒産しまして、自然淘汰です。銀行も半分は潰れました。保険会社も学校もあらゆる設備も機関も、半分あればいいのです」

もう、いまは土地に投資する人は一人もいない。チェーン店がかつてのように新規参入したり

、自転車操業のように闇雲に出店してゆく狂乱の時代は終わっていた。

人が減ると、なんだか空気も澄んできたようにうまい。公害も減ったようだ。原発もいらなくなり、廃炉となっていた。電気の需要も半減し、新しい太陽エネルギーですべてがまかなえるから、電力会社はすべてが破産して消滅していた。

「半分になったら、住みやすい、いい国になりましたわ」

孫のアンジュはそう余裕のある云い方をしていた。人間もせかせかしなくなった。どこかおおらかだ。人間の寿命も百二十才まで延びたという。だから、定年は八十だ。みんな、年を訊いて驚くほど若くなっていた。いまは若返りのホルモンもあるようだ。未来は人生が二倍近くに長くなったのだ。

孝幸は未来とは実に素晴らしいところだと実感した。いままでが人間が多すぎた。だから経済戦争や、石油利権だとか食糧難から就職難、戦争や飢餓などいろんな問題が起こった。それが世界的に緩和されてきた。

孝幸が五十年間の眠りから覚めたというニュースが巷を騒がせると、孝幸のところに、ある男がやってきた。

「西東孝幸さんですね」

男の差し出した名刺は、信販会社だった。

「あなたに、毎年請求書を出しておりましたが、病院で受け取りませんでしたか？」

孝幸ははっと思い出した。カードローンが冷凍する前に十万円だけ残っていたのを。

「これは、いままでの延滞利息を足した請求書です」

と、孝幸が見たら驚いた。十万円が七億円になっていた。借金までは冷凍できなかった。

第852話

勝ち組・負け組

第一回目の芥川賞は、石川達三の「蒼氓」だった。それは、ブラジル移民のことを書いた小説だ。明治から多くの日本人がブラジルへと夢を抱いて渡っていった。ふるさとは遠きにありて思うだけならいいが、どうも国を離れて移住すると、人間は国粹主義者になるようだ。国を思う気持ちが、日本にいる国民より強くなる。

それで、ブラジルでは戦後になっても、日本が負けたということを信じない移民が多数いた。すでにニュースでも新聞でも歴然とした事実として報道されていたろうが、ブラジルでは逆に捉えて、日本が連合国に勝利したと信ずる、いわゆる勝ち組が長くいたという。それに対抗するように、負けを認めた負け組の間で熾烈な喧嘩が各地で起こったという。

ブラジルで成功した日本人は多い。無論、その何倍もの日本人入植者たちが、のたれ死にをしたり、挫折した。すでに三世、四世の代になり、現地人と結婚した者は、名前によやく日本人

であることが残っている程度で、顔も言葉もブラジルである。

五十年以上も論争してきた仲の悪い隣同士の、津村家と南村家は、まだ二世のじいさんが健在だった。津村のじいさんは、勝ち組、南村のじいさんは負け組であった。二人とも、大きなプランテーションを経営していて、コーヒー農園としては、屈指の生産高を自慢しているほどの大富豪であった。そうした金持ちであっても、何故か日本には戦後、一度たりとも足を踏み入れたことはない。六十数年前の戦前の日本には若いときに父に連れられて里帰りはした。

この二人は顔を合わせるたびに、日本が勝った負けたと煩い。周りの家族は辟易していた。

「そんなに、いがみあうなら、二人で日本に行って確かめてきなさいよ」

両方の家族は、この半世紀以上にも及ぶ論争に終止符を打つため、二人を日本に旅行に出した。

戦後、六十年以上経っているというのに、未だ互いの信念を曲げない。まるで、キリスト教のさる団体が、ついこの前まで天動説を信じ、地球は平板なものだという観念を信仰上の理由から捨てなかったのにも似ていた。

かくして、仲の悪い二人が決着を付けようと、揃って日本に向かう飛行機の中にいた。

二人は各々の親の故国へと半世紀以上も過ぎてから足を踏み入れたことで感激していた。南村老人は、戦争で負けたから、さぞかし一億総懺悔して、平和憲法を守り、過去の軍国主義の影は微塵もないだろうと想像してきていた。ところが、成田から東京に向かうにつれ、日本の変わり様に目を見張っていた。ビルや工場が建ち並び、高速道路から新幹線、ハイテク機器で装備した街は、ブラジル以上にかなり進んでいた。それを見た津村老人は勝ち誇ったように云った。

「ほら、見ろ。どこが敗戦したんじゃ。わしらの母国はこんなに繁栄しとる」

南村老人はそれに反論した。

「それはだな、戦後日本の努力で復興したからじゃ。戦争に負けたときは、どこもかしこも焼け野原で、占領統治されておったんじゃ」

「それじゃ、そのおまえの云う、戦争を放棄した平和な日本がどこにあるか見せてくれ」

津村老人は鼻で笑っていた。東京を巡ると、あちこちで日の丸が目についた。すでに軍隊という名前に変わった自衛隊が、街中を堂々と行進していたし、戦車やジェット戦闘機が、やたら動き回っている。いままでは、街中でそんな光景は見られなかったが、憲法改正してからは、軍国主義がふたたび台頭して、軍隊が、テロから首都を守るという名目で、東京は完全に武装していた。街角街角に銃を手にした兵士たちが警備していたし、迷彩服がうろうろしていて、かつての平和な雰囲気は全くなくなっていた。

「どうじゃな、これでも日本が負けたと云うのかな。大日本帝国の無敵の陸海軍は健在じゃろうが」

津村老人はざまあみろといった目で南村老人を見下していた。南村老人は首を盛んに傾げていた。

「おかしいな、こんなはずではなかったんだ。これは、ただテロを警戒しているだけのことじゃろ。非常事態かなにかでな」

「そうかな。それならあれはなんじゃ」

オフィスビルやデパートの正面玄関には必ず天皇陛下の御真影が飾られ、通る人は一礼して通

っていた。そして、日の丸は法律で常時掲揚するように定められているという。もし、それを怠ったら、憲兵隊がすぐさまやってくる。赤い腕章をしている憲兵たちが鋭い目を光らせていた。「なんということだ。戦前の日本と同じではないか。日本はこんなにも変わってしまったのか」南村老人は嘆いていた。それでも負けてはいなかった。

「だが、戦争に負けたのは事実じゃ。それは常識で、小学生でも知っておるわい」

「よし、それじゃ、その小学生に訊いてみるとしますかな」

ランドセルを背負って下校途中の小学生たちを掴まえて二人は質問していた。

「日本は太平洋戦争で負けたって歴史で習ったじゃろう」

南村老人が訊くと、子供たちは口々に云った。

「太平洋戦争って何？ 日本はいままで戦争に負けたことはないって先生が教えたよ」

「ええ？ そんなバカな。社会科で歴史の教科書があったら見せておくれ」

小学生たちが見せてくれた歴史の教科書には太平洋戦争のところが削除されていた。広島、長崎の原爆のことも、天皇の人間宣言も、ただ、日中戦争で勝って八月十五日は停戦ということになっていた。どこにも敗戦という記述がない。

「見る、やはり日本は負けてはいなかったのじゃ」

信じられないといった顔の南村老人に、勝ち誇った顔の津村老人は云った。

「負けた負けたと云うと憲兵のおじさんたちに掴まるって先生が云っていたよ」

歴史教育からして、完全に変わっていた。教育勅語も復活し、皇国史観一辺倒の教育に逆戻りしていた。

「何が、どうなってしまったんじゃ……」

南村老人は呆然と街を見渡していた。

一八紘一字。一一億一心。そうしたプロパガンダの垂れ幕が、ビルの壁にひらめいていた。

第853話

ゲテモノ趣味

本が売れないと、嘆いているのは、わたしだけではなかった。どこの本屋もダウンしていた。新刊書店と古本屋は同じ運命共同体だ。新刊が売れないと、いずれ古本としての流通量が減るから、同じくダウンしてゆくのだ。

そこで、最近の中央の大市などの入札目録を見ると、生原稿や横額、短冊などの肉筆ものから絵画、書に至るまでの、本でないものが幅を利かせている。

わたしの古本屋も、軸ものから道具まで扱えるのだが、残念ながら目利きではないから、美術品の真価は判からない。

以前、本を買いに行ったら、掛け軸をどっさりを出してきた。医者の家だったが、その家のじいさんというのは、医者ではなく、金沢工芸の教授をしていたというから、こんな青森にあっ

ても、向こうから持ってきた美術品が多かった。何も知らずに、店に軸ものを持ち込んで、眺めていると、年代物ということだけは判る。すべてが共箱ではない。普通はちゃんとしたものは桐の箱に入っている。そして、箱書きと称して、箱に墨で、それを書いた人のいわゆるお墨書きがあるのが正しい。

全くの裸では、贋作の方が多いというから、怪しいというよりない。樵という号が見える山水画があった。うまいのかへたなのか皆目シロウトでは見当がつかない。そうして、首を捻っているところに、民芸家協会にいるうちの常連客の吉田さんがみえた。

「ほう、何かいいものが入りましたか」

吉田老人なら、鑑定はできるだろうと、見せると、顔色が変わった。

「あなた、これは鐵斎の号ですよ。本物だったら、大変なことになる。文化財級だ」

そのほか、高浜虚子の俳句の書いた一行書、新渡戸稲造の二行ものなど、ごろごろと出てくる。あまり有名人が多いので、吉田老人は笑っていた。信用していない。こうした地方の小さな古本屋に入ってくるものに、お宝などあるはずがないと思っているらしかった。

「京都で鑑定するところがありますが、鑑定料も高いですからな」

値段を訊いて、わたしは、無理しないことにした。どうせ、処分していただきたいと無欲な医者のお奥さんから預かってきたものだ。わたしにとってはどうでもいいものばかりだった。そうしたわたしも欲がない。

知人の額縁屋に持ち込んで、買ってもらうことにした。彼曰く、

「偽物と判って売ったら倍返しという決まりは知っていますね」

と脅迫するから、一本一万円で売ってしまった。面倒くさくなってしまった。

そうした美術品が難しいのに対して、ゲテモノと称する本以外のものは比較的扱いやすい。古書目録にはいろんなものが写真入りで出ている。ゲテモノとはどんなものだろう。

和菓子屋で、打ちものと云う、砂糖菓子に使う木型がある。木を彫って、鯛や海老の形にし、そこに米の粉と砂糖を混ぜたものを押し込み、ぽんと叩いて取り出すと、祝儀の引き物に使うお菓子ができる。その木型も古本屋で売っている。

少年雑誌の付録。これは昭和二十年代からの古いものが多い。「ぼくら」「日の丸」「少年クラブ」などの紙のクラフトの玩具であったり、若乃花の下敷だったり、懐かしいものがある。

また、駄菓子屋で売っていた、ブロマイド。大川橋蔵や市川雷蔵、西田佐知子といった昔の俳優や歌手のモノクロ写真だ。そんなものが、一枚五百円とか千円の値がついている。

メンコも入ってこれば高い。やはり古いもので、月光仮面だとか、力道山、赤銅鈴之助といったマンガのヒーローから巨人の川上などの写真が載ったものまで、昔懐かしいものを売るのも古本屋だ。わたしは、そんな商売を以前、「思い出産業」と云ったことがある。懐かしさは高く売れた。

ゲテモノはそんなところに留まらない。なんでも古くなると金になる。

駅弁の掛け紙。そうしたものを不思議とまた収集しているマニアというものが、この世には存在するのだ。

以前、書店で掛けてくれる本の掛け紙を集めている人がいた。驚くことに、そうしたコレクターの全国の会まであった。本の葉を集めているから、捨てないでとっておいてください、買いま

すからと、つい先日も関西の客から電話を頂戴した。

一度、店でいつも来る若い男が、本棚の陰でごそごそとやっていて、天井の鏡になにやら懐に入れるのが映っていたから、わたしは万引だと思って掴まえたことがあった。その男は、ポケットに葉を沢山入れていた。

映画のポスターからチラシ、パンフレットは勿論ファンは沢山いる。昔、銭湯の脱衣場の壁に貼ってあったような片岡千恵蔵のヤクザもの時代劇などのポスターはいまでは一枚五万とかで出ていたりする。

変わり種としては、汽車の記念切符、味の素やオロナイン軟膏のスチール看板、戦後のブリキの玩具、凧やこけしなどの民芸、大津絵や錦絵などの古い刷り物、タンスの底に敷いてあった新聞紙でも、それが何かの重大事件があったときのものは値がつく。

大阪には、そんなゲテモノばかりを集めて売っている専門店まである。その店を覗くと、こんなものでもと笑ってしまうものがガラスケースの中でお宝として売られているのだ。

考えてみれば、世の中には捨てるものなどないような気がしてくる。ある人にはただのゴミでしかないようなものが、ある人には垂涎の的だったりする。わたしは商売だから、捨てるのだったら、くださいとただで貰ってくる。それが店にいっぱいになってくる。本だけでもいっぱいなのに、ガラクタで塞がってゆくのだ。いらぬもの、見捨てられたものに、価値のあるものがあるかもしれない。

女房が、たまに店を見にくるときがある。店の中に若い女が数人座っていたり立っていたりしていた。女房は不信に思いわたしを問いつめた。

「誰よ、あの女の人たちは？」

「ああ、みんな人妻だよ。いらぬって言うから貰ってきたんだ」

恐ろしいものは古本屋、売れるものならなんでも売ってしまう。

第854話

人生のロスタイム

若いときにしたことは無駄がないというが、その付けが老いてから請求書としてやってくる。

三男の拓人は、せっかく入った会社を二年で辞めてから、いまは東京近辺をうろついて、フリーターをしていた。千葉の二人の兄のところに居候と転がり込んで、二つのマンションを行ったり来たりしていた。

一新婚所帯に邪魔になるから、おまえも独立して部屋を借りて住むんだな。

わたしは、いつまでも人に甘えて生きてゆくのはよくないと、電話で何度も忠告した。

あいつは、若いときのわたしに似ていた。

無謀だった。後先のことを考えずに、あっさり仕事を辞めたり、居を、捨て猫のように変え

たりした。

わたしもそうだった。東京に出たときは、何かができそうな青年の裏付けのない自信に満ちていた。だが、ものすごいパワーに押し潰されてしまう。自分の存在が、ほんの小さな点であることに気が付く。

拓人は、みつからない捜し物に夢中だった。警察官からSP、バイクの修理工、外国にも行きたいと、夢だけがいつも空回りしているようだった。警備会社を辞めてから、レストランのボーイをし、内装屋の助手をし、道路工事の人夫もした。そして、いまは広告代理店で営業に歩いている。

—おれが、何をやりたいのか教えてくれよ。

—ばかやろう。五十過ぎたお父さんだって、いまだに判らないものを、まだ二十一のおまえに判ってたまるか。

実のところ、二十年前は、わたしは古本屋になっているとは思もしなかった。この先も、本がダメになると、何か別の仕事に入るかもしれない。老後までふらふらしていようとする親だから、子供をバカにできない。

わたしは、若いときはいろんな仕事を転々とした。パン屋、ビッグストア、果物屋、本のセールス、サラ金、旅行会社、電気店。それが経験としては無駄ではなかったにしろ、同期の連中がまともに就職して、ちゃんとした会社や役所で確実に人生航路を進んでいるときに、わたしは足踏みしているにすぎなかった。何かになりたいと、蠢いていて、ただ時間だけが流れていた。駆け落ちから行方不明という汚点まで残していた。海外へ逃亡している犯罪人の時効はその間の時間は止められ、カウントされない。まるで、そうしたように、わたしの若いときの無茶は、時間を保留してくれていた。

どうも拓人は女に貢がせられているという金の使い方をしているらしかった。兄たちから、そんな話しぶりで電話がくる。本人のケイタイに何度電話しても通じないことが、わたしを不安にさせていた。ようやく拓人から連絡があった。

—おまえ、いま流行のデート商法に引っかかっているんじゃないだろうな。

—そんなじゃねえや。普通のつきあいだ。

—いいか、おまえはいい格好して人に奢ったり、なんでも買ってやるような性格だから、騙されやすいんだ。毎日呑み歩いているというが、酒と女で失敗するなよ。お父さんは失敗したんだから。

—親父も女には理性をなくするのか。

—うるさい。

拓人は二十五まではうろうろさせてくれと云っていた。デラシネのようにあちこちへフーテンしていたいと。

わたしもそうだったから何とも云えない。東京、横浜、大阪、堺、名古屋、岡崎、富山、札幌とひとつところに三年と住んでいられない。近江商人の家系なので、その流転の血が騒ぐのか。

いつもゲルピンであった。貯金なんかなかった。すべて呑んでしまい、音楽にも費やして、貰った給与を五日で使い果たし、後の二十五日は生味噌を舐めたような無計画な生活だった。拓人

も同じことをしている。親として歯がゆいが、どうしてこうも無謀が遺伝するのか。

兄たちがちゃんと仕事も生活もやっている分、三番目の素行が心配だ。もう、大人なんだからと思っても、いつまでも子供は子供だとどこかで案ずる。周りを見渡せば、どこの末っ子も甘やかせて育てたせいか、うろうろしているものが多い。兄弟というのはそうした構図になっているものなのか。

若いときは、いくらでも時間があるから無駄遣いをしているのだ。だんだんと先がなくなれば、時間が一番勿体ないと思うようになった。最近になって、寸暇を惜しんで本を読んだり、日々充実している時間の中で、自分を忙しくさせていて、だんだんと後年になって加速度がついてきたように思う。

いろんなものに首をつっこんで、いまは確かに時間がない。だが、よくしたもので、わたしには老後という人生のロスタイムが待っている。お釣りの時間が、それからのやりたいことに使えるという。

ケイタイの着信表示に拓人の名前が出る。どきりとする。今度はなんだろうかと。
—親父、金を貸してくれないか。
—何だと？ 今度はどんな女だ。

第855話

古本屋の親父

二十五度を超えると夏日。朝から気温は二十七度もあった。六月に入り、記録を更新してゆく。

じっと座っていても、古本屋の帳場は暑かった。汗かきのわたしは黙っていても汗をかいてくる。

店に行くと、一番最初に準備中のプレートを営業中に替える。まあ、どっちでも変わりはないが。窓を開ける。パソコンの周辺機器からスイッチを入れてゆく。このパソコンというものがこの世に出現してから、古本屋の業務が大きく変わった。それまでは、従来の古典的な古本屋の親父というものがあつた。丸眼鏡を鼻に掛け、帳場で本を読んでいながら、ぎろりと万引を見張っているといった、偏屈者の親父で、客を客とも思わない。そして、立ち読みで買わない客にはハタキで嫌がらせをする。どこか暗く、黴臭い古本屋も、IT革命でハイテクになった。意外と、旧態依然としている業界のようで、世間よりいち早くパソコンを導入しなければならなくなった。

というのも、インターネットの普及で、多くの古本屋や組合が、通販をやり始めたからだ。いまや、うちの組合員で八十近いじいさんまでネットで商売している。頑固じいさんも、キーボードを打っているのが驚かされる。

誰が考えたものか、コンピュータの検索システムというのが、これがまた実に本を探すのに適している。書名、著者名のいずれかで、捜している本が一発で出てくるのだ。

昨日も七十過ぎたじいさんが、店にやってきて、四十年も捜していた本をうちのデータベースで検索してやったら、あることが判明した。倉庫から、三十秒くらいで持ってくると、驚き、感激で涙し、手も震えていた。そんな威力を発揮するから、古い体質の古本業界に、またたくまにパソコンは普及してゆく。

こんな田舎の小さな古本屋にも、全国あちこちから本の注文が来る。舛添さんの事務所から、石原都知事から、宮内庁から、各省庁から、テレビ局のディレクターから、大学や図書館からと、資料の請求に追われている。

赤軍のあの人が出てきたり、作家の没後三十年だったり、俳優が亡くなったといえ、なんらかの事件にかかわる本や資料が、あちこちからメールで注文が殺到する。検索窓口で。よど号と打てば、それに関する週刊誌の古いものから雑誌の特集、書籍がずらりと出てくる。ジャーナリストは記事を書くために、ニュースステーションも明日の番組で使いたいと、明日の午前中に到着するようにしてくれと依頼される。また、宅配便も早くなり、東京なら、夕方出しても、早ければ翌日の午前中に配達されるのだ。

うちでは、注文を受けてから二十四時間以内に発送するという謳い文句で、両日中にお客の手に入るようになっている。新刊本はそうは行かない。流通システムが複雑で長ければ、それだけ時間がかかるのだ。そこが個人で一人でやっている古本屋は小回りが利く。「あいよ」の返事で、すぐさま梱包して送るのだ。

本に対しての問い合わせの電話も多く、目次にはどんな内容が並んでいるか、孝明天皇のことが書かれているとか、そんなことも本をすぐに出してきて電話で客と話ができる。

メール注文が殆どだが、ファックス、手紙、電話でも来る。月にすれば五百個の小包を出しているから、結構、午後三時までは忙しい。三時には宅配便が集荷に来るから、それまでは包んでしまわねばならない。

以前は、顧客台帳というのが分厚い帳簿で六冊あり、いちいち注文してきた本の題名と金額、日付など書き込んだものが、いまは便利な経理ソフトがあって、顧客管理から請求書発行、果ては決算までやってくれる。後払いだから、中には焦げ付きもあり、詐欺もある。滞納、未払いも一発で判るから、悪質なものは組合と業界にブラックリストとして流すことになる。

いまや、パソコンがなければ業務ができないほどで、一日十時間は使っている。発送が終われば、新しく入ってきた本をデータ入力する。目標は一日二百冊と自分自身にノルマを課している。適当にデータが溜まったときに、サーバーにアップしてやる。入れると、すぐにその本の注文が入る。ものの五分とかからないときもあり、こっちが驚く。本を探している人は、毎日何回も検索しているのだろう。これはタイミングの問題で、いい本はたまたま見つけた人の手に入る。みんなから、何十年も捜していて、見つかって嬉しいとコメントをいただく。悦んでもらうのが古本屋冥利に尽きるというもの。

店はだんだんと倉庫になってくる。いままでのようなジャンル別の本の並べ方から、入荷した順番に番号で管理する形になってきたから、たまに客が入ると、怒るのだ。

一なんだ。哲学書の隣にマンガ本があり、滅茶苦茶ではないか。これでは探しにくい。

—ここは倉庫だ。文句があるなら帰った、帰った。

とハタキばたばたは従来の古本屋と同じ。売上の七割が通販になり、ますます店は倉庫になってゆく。

一日パソコンだから、姿勢も悪く、運動不足になる。たまに、立ち上がり、首と背中の中の運動をする。凝り固まった背骨が、反り返るとバギバギと音がする。それで、タバコとコーヒーばかりだから胃にも悪い。誰もいないから、気分転換に大声で歌もうたう。ラジオもCDも聞き厭きた。CDは図書館から借りてくるジャズピアノ。パソコンをパチパチと打つのは、ジャズがいい。

ついで、大きな屁もふる。屁をひっておかしくもなし独り者という川柳が思い出される。

ああ、それにしても店は閑。朝から客がひとりも来ないときている。何をしても自由、誰も見ていないから、店の中で裸踊をしてもいい。こんなこともできる。あんなこともできると、古本屋の親父はどこかおかしいのだった。

第856話

四谷階段

昨年の就職試験で、悉く不採用になった箕輪省吾は、ようやく四谷にある大手の商事会社に就職することができた。大学を卒業してから、就職浪人二年目にしてようやく運を掴んだ。その間、面接回数が五十を超えた。リクルート情報誌でアパートの部屋はいっぱいになり、本棚には常識問題、就職試験必携といった参考書がずらりと並んでいた。まともに正社員として採用されるまでの競争率も高く、いい会社であればあるほど大学に入るより難しい世の中になった。

入社初日である。前日に床屋へ行き、新調したスーツを着ると、学生気分が抜けていた。今日から賃金計算される社会人なのだ。

四谷にある会社のビルは十三階建てで、そう高くはない。周りの超高層ビルに比べたら、目立たないほうであった。定刻九時入社までまだ二十分はある。余裕で本社ビルに入った。最上階の社長室に行かねばならない。省吾はエレベータを捜してうろうろしていた。

「すみません。新入社員の箕輪といいます。十三階に行きたいんですが、エレベータはないんですか？」

聞かれた先輩社員たちが、ぎろりと軽蔑したように省吾を睨んで云った。

「君ねえ、そうそうエレベータでスムーズに上にあがることを考えてはいけないよ。考え方が甘い。みんな階段を踏みしめながら、汗だくでこつこつと昇ってゆくんだよ」

そう云われて、省吾は赤面した。会社というところは実に厳しいところなのだ。みんな社員が階段を昇ってゆくを見て、省吾も階段を昇り始めた。同じ新入社員もいる。先輩から定年近いロートルの社員、女子社員と、みんな黙々と階段を昇ってゆくのだ。経費節減なのだろうか。それでも不思議なのは、こんなビルにエレベータがないだなんて。省吾は不思議に思った。

みんな、苛々するほどゆっくりと昇っている。この遅さでは遅刻してしまうじゃないか。省吾は焦り始めた。確か、渡された職務規程では、タイムカードを各部門で押すことになっている。七階が省吾の採用された企画部だ。そこで、九時前にはタイムカードを押して、それから十三階の社長室へ九時丁度に集合となっていた。

階段は朝のラッシュの電車並に混んでいた。上を見ると先輩社員たちがびっしりと押し合うようにして昇っている。下を見ると、省吾のように今年採用された若い社員から、パートタイマーのおばさん、嘱託社員などが、続々と昇ってくるではないか。全社員がひとつの階段を黙々と昇ってゆくのだ。その光景は何かの避難訓練のようにも思えた。

ところが、いつまでも昇っていても、踊り場はあるが、各階に通じるドアがない。普通なら、階段の各所に鉄の防火ドアがあり、各階を示す標識ぐらいあるはずだ。なのに、まるで非常階段か、裏階段のように、上へ上へといつまでも続いているのだ。省吾は数えてはいなかったから、それが最上階へ通じる階段だろうと思っていた。あまり、長い時間がかかるので、腕時計を覗いて驚いた。すでに十時を過ぎていた。初日から完全に遅刻だ。

省吾は焦り、前を昇る人を掻き分けて、上へ急ごうとした。

「すみません。遅刻しちゃうんで、先に行かせてください」

すると、先輩社員たちが、冷たい視線を省吾に向けてよこした。

「あんたは、今日入ったばかりの新米だろう。先輩を押しつけて、上に行こうとするのはいい度胸だ。名前は？ 箕輪省吾か、よし、覚えておこう」

初日から先輩社員に睨まれた。後ろからついてきたパートのおばさんが、省吾の背広の端を引っ張って囁いた。

「あんた、バカだね。会社というところはね、まだまだ年功序列なのよ。先輩は立てなければね」

「でも、時間が過ぎてゆくんです。いつまで、こんな階段を昇っていればいいんですか」

省吾は暗い気分になって、一階ずつ数え始めた。数えていて、おかしいことに気が付いた。すでに二十階分は昇っていた。このビルは十三階よりなかったはずだ。

省吾は異常さに気が付いた。これは、ひょっとして、天国へ昇る階段なのではないか。自分は死んだのだ。それに気が付かないで、昇っている。そして、この社員たちは、かつての社員たちの亡霊なのだ。

「いやだ、いやだ。ぼくは、今日があれほど念願していた記念すべき日なのだ。それを、それを、こんな無意味な死者の行列に加わるなんて」

隣を歩いていた新入社員のひとりが、省吾をこづいた。

「何をさっきからごちゃごちゃと云っているんですか。ぼくたちは、今日から社会人ですよ。サラリーマンなんです。定年まで、こつこつと階段を昇るんです」

「その通りだ。疑問を持つやつは、その一步を踏み出す前に考えるんだったな」

前の先輩がそう云って笑った。

「そんな、バカな……」

出口も先も何も見えない。ただ、階段だけが無限に続いている。省吾は思った。ぼくは、この階段をこれから四十年も昇らなければいけないのか。それは、ただ、ぞっとする話にも思えた。

第857話

交通事故

そこは、信号機のない交差点だった。交差点の真ん中に、大きなコンクリートの塊が放置されていた。そこに、二台の車が進入してきた。一台は、水の入ったドラムカンを積んだ小型トラックだった。若い女性が運転していた。NPOの職員をしているジルという勝ち気な娘だった。

別の方角から交差点に進入してきたのは、ムダラーという商人の夫婦の乗用車だった。二台の車は、交差点の中央にどっかりと置いてあった塊を避けようと、急にハンドルを切ったのが、たまたま右と左で、二台とも正面衝突の格好になった。トラックはバランスを崩して横倒しになったまま、乗用車の助手席に激しく衝突した。トラックの荷台のドラムカンは四方に転がった。辺

りは水浸しとなった。一瞬、何が起こったのか、二人のドライバーの頭の中は白くなったままだ。乗用車の側面に、トラックが突っ込んだ形で止まっていた。

白い煙が立ち上っていたが、滅茶苦茶になった車の中から二人のドライバーは、頭と手にかすり傷を負ったくらいで、ふらふらと出てきていた。中年の男、ムダーラの方は、助手席で、押し潰されたように圧死している妻の名を呼んでいた。すでに息はないようだった。

そんな大事故が起こっても、野次馬も駆けつけないし、商店の人たちは覗きにも来ない。冷たいものであった。みんな、関わりになりたくないように、知らん顔で通り過ぎる。

ムダーラは、潰された車の中から妻を引きずり出した。そして、暫く抱きしめながら嗚咽していた。救急車もパトカーも来ない。二人は軽傷、妻はすでに死んでいたから、救助の必要もないことだった。

ジルは、ようやく事の重大さに気が付き、ムダーラのところに駆け寄った。

「ごめんなさい。どうしたらいいの？ 救急車を呼んできます」

ジルは気を取り乱しながら、うろたえていた。そんなジルにムダーラは優しく話しかけていた。

「いいんですよ。もう、その必要はありません。それより、あなたの方は、大丈夫ですか」

ジルも少しむち打ち気味で首が痛かったが、外傷はそうたいしてない。ガラスの破片やひん曲がったボディが突き刺さり、手から少し血が出ている程度だ。ムダーラの方が、頭から血が流れている。

「どうしましょう。そうだ、電話だわ。わたし、電話してきます」

ジルは、とにかく救急車の要請をしようと思った。もしかしたら、救急隊の手にかかれば蘇生するかもしれない。それで、近くのカフェに飛び込んだ。客が数人いたが、みんな無関心のようにコーヒーを飲んで、新聞を開いていた。

「す、すみません、お電話貸してくださらない？」

カウンターの中にいたマスターは、顔を電話の方に向けて示したが、首を横に振っていた。ジルが電話に飛びついて、救急を呼ぼうとしたが、電話機はうんともすんとも云わない。故障しているのか、不通になっているのだ。そう云えば、こんなに暑いのに、天井の扇風機も止まったまま、電灯も消えていた。

「まあ、なんて店なの」

ジルはただ焦っていた。みんな笑いながらジルを眺めているだけで、手も貸そうとしない。

ジルは、今度は隣の床屋へ入った。そこは電気が通っているようだ。電話を借りた。

「交通事故で、怪我人がいるんです。急いで救急車を回してくださいませんか」

電話の向こうの係は面倒くさい声で対応していた。

「お二人は、立って歩けるようなんですな。ご婦人がすでに息がない。そうですか、それならタクシーかなんか使ってください。いま、こちらは忙しくて、手が回らないんです。たかが、交通事故ぐらいでいちいち電話しないでくださいな」

たかが、交通事故？ ジルは憤慨した。この街の行政はどうなっているの？ フランスでは考えられないことばかりだ。

ジルは、また急いで事故現場に戻った。

「奥様をタクシーで病院へ」と、ますます慌てて云うと、ムダーラは首を横に振って、

「もう、いいんです。すべてが終わりました」と、静かな口調で云った。

「でも、そんな、わたしのせいで、こんなことに」ジルは大声で泣き出した。

それを優しく慰めるようにムダーラは云った。

「あなたのせいではありません。これは不可抗力というものです。道路にあんなものが置いてあったのも悪いし、信号もないのですから、どなたが運転しても事故は避けられません。あなたに過失はありませんよ。それに、これはただの交通事故ではありませんか」

ただの交通事故？ この人も同じことを云った。

「そんな、でも、奥様がお亡くなりになりました。あなたも怪我をしておいでです」

「いいですよ。たいしたことはない。交通事故でひとりやふたり亡くなったところで、たかが死亡事故じゃありませんか」

ムダーラの顔は、皮肉を云っているのではない。むしろ諦観にも似た表情であった。

「人間の命です。ひとりふたりと申しましても、それは酷すぎます」

ジルは、あまりにも無関心な街の人々に悔しそうな目を向けていた。すると、突然、近くのビルが大爆発を起こした。ミサイルが通りを飛び、大きな建物に命中した。ジェット戦闘機が数機、低空飛行で旋回していった。と、別のビルから空に向けて機関銃が発射された。通りの後方より地鳴りがしたと思うと、米軍の戦車が歩兵を従えて突入してきていた。戦車砲も撃たれ、市街戦が始まっていた。民衆は、逃げまどい、無差別の殺戮が始まった。女、子供、老人までが、流れ弾に当たって、バタバタと道路に倒れた。迫撃砲の応戦があり、戦車の近くで炸裂した。みるみるうちに、通りは死体の山となってゆく。

ジルは車の残骸の陰に身を潜めて、震えていた。

「だから、云ったでしょう。いまは、それどころじゃないんだから」

ムダーラのほうがのんびりとそう云った。

第858話

ハイビイ ベイビイ

高層ビルの正面玄関前に、黒塗りのベンツが停まった。車のドアを先に降りた秘書の男が開けた。ビルの中からも数人の背広族が足早に駆けつけてきた。そして、車の横に整列していた。おもむろに車からひとりの巨漢が降りてきた。帝国総業の会長の山口泰造であった。百キロを越す、取的ぐらいの体はあった。貫禄の塊であった。その風格にも圧倒されて、近づきがたい存在だった。

バブルの前に不動産と株でしこたま儲けた会社だ。いまでは、パチンコ屋の全国チェーンを経営し、外食産業からホテルまで幅広く手がけている。泰造の周辺にはいつもボディガードがついている。まるでヤクザの親分のようなものものしい警戒と移動であった。

本社ビルに入るときも、大名行列を迎えるように、社員たちは即座に通り道に整列した。泰造

は雲の上の人で、強大な権力を誇示し、実業界にも君臨していた。

ビルの最上階には、都内が見渡せる全面ガラスの社長室があり、それも外からは見えないスモークガラスだ。広すぎる部屋にはぶかぶかの絨毯、必要のないくらいの美人秘書たちをハーレムのように囲っていた。

午前中より役員会議。会議室には常務、専務などの取締役がずらりと椅子についていた。泰造が入室すると、全員が敬意を払って起立する。泰造にギロリと睨まれれば、大の男たちでも失禁するほどの迫力があつた。

「今回、集まってもらったのは判るな。業績が下向きだからだ」

泰造の押し殺したような声が、震えているのが感じられた。皆、一様に緊張していた。

「営業担当役員、その辺を説明してもらおうか」

「は、はい、まずですね、ホテル部門でございますが、最近では、観光客もめっきりと減りまして、地方都市にも格安ビジネスホテルチェーンが次々と進出いたしましてですね、価格競争に巻き込まれて苦戦しておる次第です」

担当役員は、汗を拭いていた。

「ばかやろう、おれはそんな説明を求めたんじゃねえ。対策がどうなっているのかだ」

「は、はい。いまのところは、その、手だてもなく……」

「判った、判った。明日からおまえは湯の島出張所の所長に格下げだ」

「湯の島といえばどこでしょうか」

「青森の浅虫温泉にある無人島だ」

担当役員の足下に黄色い水が滴り落ちていた。

威勢を張る男は、実は小心者である場合が多い。ワンマンで、近づくものが少ない怖さを持った泰造だが、家に帰っても、子供たちも寄りつかない、妻は女中のようにかしづくだけで、内でも外でも、腹を割って話すものがない寂しさがあつた。孤高ということは、実に悲しい存在だった。かつて、江戸で向かうところ敵なしの横綱に、俳人が詠んだ句を捧げたら嗚咽したという。大江戸にひとり淋しき相撲かなというものであつた。

その泰造にも誰にも知られたくない秘密があつた。秘書もボディガードも帰してから、ひとり、夜の巷に紛れ込む。

泰造は、とある裏通りにあるビルの階上に、エレベータで上がって行った。サングラスをかけて、上物のスーツを着た泰造は、どう見ても普通の人には見えない。どこかオフィスビルのようなフロアに秘密クラブのような部屋があつた。ドアには保育園と書かれている。ホステスさんの赤ん坊や子供たちを預かる託児所のようにも見えた。夜間保育というのも、この辺りではよく見かける。ところが、少し様子が違う。

泰造がドアから入ると、若い保母さんや、母親たちが寄ってきた。

「あーら、ター坊、来たのね」

すると、優しい声に取り囲まれて、頭を撫で撫でされた泰造は、急に泣き始めた。

「うううう、ぼくちゃん、さびしかったでちゅ」

涎まで垂らしている。

「ずーっとひとりだったのね。かわいそう。さあ、お着替えしましょうね」

泰造は背広を脱がせられると、大きなロンパースにおむつまでさせられた。涎かけにおしゃぶりまでさせられた。

「ぼくちゃんは熱爛がいいのかな」

保母さんが哺乳瓶にミルクを入れていた。

「ううん、ぼく、ダラ爛がいいんでちゅ」

「猫舌ちゃんだものね。さあ、いい子にして待っているのよ」

ガラガラやぬいぐるみでお話をしてくれたり、普段は誰にも触れさせない顔なんかも、優しく撫でてくれる。泰造はもうすっかりと陶醉の域に入っていた。退行現象で、すっかりと幼児になっていた。

ここは、そういったクラブなのだ。高名な政治家や社長さんたちが会員になっていて、よく利用しているという。

翌日も会議だった。景気が悪く、赤字を抱えてくると、トップというのはさらに孤独になる。苦虫を潰したような顔の泰造が、でんと席にふんぞり返っていた。

「能なしばかりか、この会社は。目からウロコの打開策を提示するやつはいないのか。てめえらの会社だろうが。時代に流されるんじゃないや」

泰造の檄が飛ぶ。

そこへ、秘書のひとりが空の茶碗を下げにきた。

「会長、お茶は熱いほうがよろしかったでしょうか」と、秘書が優しい声をかけた。泰造の顔は急に緩んだ。

「ううん、ぼくちゃんは、ぬるーい方がいいでちゅ」

会議室の全員の信じられないと云った視線が止まっていた。

第859話

雨 男

空梅雨ということがある。人間にとっては鬱陶しい梅雨なのだが、作物にはこれがなければいけない。恵の雨も、降水量が足りなくて、それこそ飢饉の前触れのようにぞっとするときがある。

雨宮水男は、名前が表すように自他共に認める雨男であった。彼は、六月に生まれた。三十で独身。その年でも彼女のひとりもできないのは、性格が陰気くさいからだ。暗くて、いつもじめじめしていた。男のくせにいじいじうじうじするところがあって、どうも決断力に欠ける。はっきりとしないところが、六月の空にも似ていた。

彼の行くところ雨が降る。それで、せっかくの会社の仲間うちのドライブでも、彼だけはいつも外されていた。

「雨宮には悪いが、あいつを連れて行って、晴れたときはなかったからな」

「そうそう、不思議だよな。天気予報では晴と云っていたのに、あいつのお陰でバーベキューもできなかったことがあったよな」

会社の運動会も、レクリエーションも、雨宮だけは電話番で居残りだ。上司も可哀想とは思いますが仕方がない。そうしたジククスが信じられるほど、雨宮に関しては確率が高く当たるのだ。それで、お土産をみんなで出し合って奮発することで、彼には納得してもらっていた。

なんでも、聞くところに寄れば、雨宮は、中学の頃まで寝小便もしていたとか。何回も流産しかけて生まれてきた話もある。子供のときは溺れかけて死にそうになったときもあった。家が豆腐屋で水を使う。いろいろと水に関係した生い立ちだ。

いつかは、誰かがネットの掲示板で雨宮のことを紹介したせいか、砂漠の国から、是非、招待したいと云ってきたときがある。

雨が降ると、困る商売がある。観光地、ゴルフ場、野外スポーツなどなど。逆に、天気のいい日曜などは、ショッピングセンターは行楽地や海山に人を取られるから、がらがらとなる。雨乞いの儀式でもして、朝から雨を降らせたい。みんな行くところがないから、デパートへでも行こうかとなる。

他に雨で潤う商売は、映画館やビデオレンタル、インドアで楽しめる遊園地などだが、雨宮の勤める会社も、パチンコ屋やボーリング場を経営するレジャー産業だ。稼ぎ時の日曜祭日には、雨が降る降らないでは客の入りが違う。雨宮の噂を耳にした社長が、売上の悪い地区に雨宮を派遣しようとした。

「すまんが、雨宮君、社長からの直々の命令で、土曜日から日曜にかけて、関西に飛んでくれないか」

「泉南地区ですか。行って、何をすればいいんでしょうか」

「何もしなくていい。ただ、そこに行って、社宅の空き部屋に一泊泊まってくるだけでいいから」

それは、目的も定かでない奇妙な仕事だった。

泉南地区は空梅雨で、もう何日も雨が降っていなかった。

雨宮が、岸和田の郊外にあるチェーンの支部に顔を出したときは、まだ土曜の昼だったが、からりと晴れていた。雲ひとつない青空で、とても雨など降る気配がない。

ところが、雨宮が来た途端、何か雲が出てきていた。

「君が雨宮君か。東京本部から聞いている」

支店長が迎えた。女子事務員たちは、囁き合っていた。

「いややわ、なんや、黴臭いんとちゃう？」

「せやな、湿気が出てきはった」

なんとなく、事務所の中がじめじめとしてきた。ちらちらと、笑って見る女子社員たちの視線を雨宮は暗い気持ちで感じていた。

「また、ぼくをバカにしているんだ。どうせ、ぼくはみんなの笑いものだ。」

そうして、雨宮は卑屈になるたびに、空が曇ってくる。雨宮の心をまるで空が映しているような感じだった。

雨宮が事務員の案内で社宅に行こうとすると、事務所の中からの声が背中まで追ってきていた。

「あんなやつ、よくうちで採用したもんや。あれでよく営業が務まるもんやな」

「なんや、パンツの中まで黴が生えとるとちやいますか。ははははは」

いつも、どこでも雨宮はバカにされていた。涙が出そうになった。東京だけではない。初めて来た大阪でもちらりと見られただけで、人格も含めて雨宮のすべてが笑い者にされる。

すると、大粒の雨がぽつりぽつりと降り始めてきた。空は真っ黒になった。天気予報はすっかりと外れていた。

「すごい、あいつの御利益は本物や」

支店長は空を仰いで本社へ報告の電話を入れていた。

午後からの雨は、土砂降りとなった。一時間に百ミリを超えた。それでも雨足は衰えることがなかった。そうスコールのように降られると、外を歩く人影も消える。傘なんかも役にたたない。地面は水溜まりができて、短靴では濡れてしまう。道路は川のように流れていた。そうになると、車から降りるのも大変になるので、パチンコやレジャーセンターに来た車もそのまま引き返す。逆効果だった。

雨は夜になっても止みそうになかった。翌朝の日曜になっても、ますます雨は酷くなるばかりだった。すでに、川という川は決壊し、近くの都市は床上浸水までの被害となり、多くの家が流されていった。車も冠水した。もう、電車も車もストップしたままだった。パチンコ屋もボーリング場も、水没していた。被害額は大変なものがあった。百年に一度あるかないかの大洪水となっていた。

社宅の屋上にみんなと避難していた雨宮のケイタイが鳴った。東京の本社からだ。一ばかやろう、そこまで降らせるな。いいから戻ってこい。

バカという言葉だけがいつまでも雨宮の心に残り続けていた。雨は、いよいよ勢いよく降った。もう止めることはできない。

第860話

不倫マーケット

ネットの出会い系サイトはよりとりみどりの不倫の花盛り。だが、気をつけなければならないのが、金目当ての罠である。

ある日突然メールが来る。掲示板で見たという。全然こっちには覚えがない。それで、亭主が浮気している二十七才の人妻さんは、不倫目的で交際してくれと云ってきた。何のことが判らない。こっちが八十のじいさんだったらどうするのだ。あるいは小学生かもしれない。暫く、どんなことになるのかとつきあってやることにした。その危ない内容のメール交換が一週間続いた

すると、あるサイトに自分の紹介している写メも掲載しているから、そこから一度でいいからメールをください。そうすれば、信用して、自分のケイタイの番号を教えるというもの。結局、そのサイトのメンバー登録をして、高額の代金を支払うようにし向けた手の混んだ芝居なのだ。これでひっかかっている男性は多いのだろう。大概のメル友、恋人、不倫相手を捜すというサイトは怪しい。

勿論、健全な、無料のところもある。ハンドルネームで、名前も顔も判らない。相手が男か女かも判らない。小学生のいたずらかもしれないし、まして、住んでいるところが判らない。メールアドレスは使い捨ての無料のもので安全策を講じている。アドレスの中にヤフーやホットメールという文字があれば、あまり信用ができない。いつでもやめられるからだ。しかも、すべてでたらめな登録でもいい。犯罪にも簡単に使えるのだ。

宮下真希は、結婚して十五年。亭主とは家庭内別居状態にある。子供はひとりで中学生の娘。この娘がさばけていて、夫婦仲が悪いことにケロリと云う。

「パパとママ、いい加減に離婚して、お互いに別の人を捜せばいいじゃん。わたしのことは心配ないから、邪魔しないように行ったり来たりしているからさ」

亭主の誠司は、ここ三年くらいは夫婦生活がないから欲求不満気味だ。もう、四十を過ぎたから、若い子は相手をしてくれない。愛人でも作ろうかと、最近は思うようになっていた。

そんなときに、仕事場のパソコンに毎日のように来る、セールスメールの中に、出会い系サイトの紹介メールがきていた。完全無料だという。怪しいが、サイトを開いてみた。希望する好みのタイプを入力する画面があった。血液型、芸能人では誰に似た人とか、年齢、職業などとくだらないが、からかってみるつもりで書き込んでみた。そして、こちらのタイプも入力してやる。どうせ、おじさんだから、若い子よりは人妻だろう。誠司は、自分とあまりかけ離れた相手を求めないことにした。射程距離を考えて、自分の好みで相手を捜した。すると、その条件に合った人が三人出てきた。その中のひとりを選ばなければならない。エミーさんとミチさんと真剣さんか。誠司は真剣さんを選んだ。そして、自分のプロフィールを送信した。その中身はいい加減なものだった。

一人妻愛好者のセイイエスです。ぼくも、妻とは別れる寸前でいます。お互いに似たもの同士ですね。

一方、真希もやはり、家にいて自分のケイタイから、出会い系サイトにアクセスしていた。浮気してやると思いつつも、女も四十近いと、誰にも相手にされないようだ。せめてメル友でもいいから、話相手が欲しい。そう思って、自分の好みのタイプの男性を捜していた。年下は無理だろうな。いや、最近のドラマでは親子ほど年が違う年下の若い男とのラブロマンスもあるのだ。と、あんな無理な設定のドラマを真に受けて、真希は夢を見ていた。現実には、やはり年上の素敵中年男性しかいないか。と、少し上の年齢の人を理想として入力した。

その募集を出して半日で、ある男性からさっそくメールが来た。血液型も合致している。会社経営とあるから、社長さんだ。きっとお金持ちかもしれない。長身で、感じが福山雅治みたいだったらどうしよう。メールの悪いところは想像力だ。気持ちだけが膨らんで、出川哲郎も福山に

してしまう恐ろしさがあった。

誠司の方のパソコンにも、真剣さんから返事が届いていた。優しく、女らしい文面であった。せめて、女房にそのひと欠片でもあったならと、久々に女らしい言葉に温かくなっていた。互いが、理想に近い相手であることを確認し合っていた。息もぴったりと合いそうだ。ただ、何日かメールのやりとりはしていたが、まだ本名や住所、ケイタイの番号までは教えない。それは最後の最後なのだ。だから、見えない相手がどれほどの美女で美男で、スマートでグラマーなのかと、すべて想像だけで愛してしまうのだ。

真希の方も、同じだった。久々に独身時代のときのような、心のトキメキを感じて、胸が熱くなった。キューとせつなく締め付けられるような感じが十五年ぶりに訪れていた。すでに、自分の中では消滅していたと思っていた恋心がまだ生きている。メールの回数が増えるたびに、思いはエスカレートするばかりだ。男らしい言葉、そして優しく包み込むような抱擁力。せめて、そのひと欠片でも亭主にあつたらと思う。互いが、互いのパートナーの悪口を云いあっていた。世の中に、うちのやつほど酷いのはいない。それに比べて、あなたは素晴らしいと。

ハンドルネームは変えないで、真剣さんと誠司のセイイエスはオフで逢うこととなった。互いに顔が判らないから、手にはハンカチを互いに垂らすようにして持つことで、確認しあうことにした。

「おれは、今日は飯はいらんからな。遅くなるかもしれん」

誠司は真希に出がけに顔色を変えないようにして云った。

「あら、わたしも今日は、お友達と映画見てくるから、遅くなりますから」

真希も負けじとそう冷たく云った。そういう真希も、今日は初めてのデートなのだ。さて、どんな服を着てゆけばいいかなと、朝からうきうきしていた。娘時分に戻ったように、髪をセットしたり、爪にネイルアートしたりして、洋服もいろいろと展示会のように出していた。もし、最初からホテルなんていうことにでもなれば、初めての不倫だ。他の男性に抱かれるということはどんなことなのだろうか。ドキドキしてきた。

誠司は、待ち合わせ場所の六本木ヒルズの正面にハンカチを手にして立っていた。時間だけが気になる。あと一分だ。どんな人が来るのだろうか。酒井法子みたいな人だったらどうしようか。きっと、理性を抑えることはできないかもしれない。食事をした後は、洒落たクラブへ行って、それからホテルだ。今夜は燃えそうだ。

誠司は、待ち合わせ場所に、どこかで見たことのある女を見た。真希も、どこかで見たことのある男を見ていた。そして、二人とも口を揃えて云った。

「あれ？ こんなところで何しているの？ ハンカチなんか持って」

子はかすがいの時代は終わった。子供がいようがいまいが、親の身勝手に離婚はする。自分たちのことより考えない。子供のことが見えていない。腹を痛めた子といっても、子供が邪魔になったと殺す母親もいる。

いまは、親がかすがいだ。親が存命中は兄弟仲良く、親のいる長男の家にみんな集まったものが、親が亡くなれば、遺産相続の醜い争いで対立し、互いに憎しみあい、全く兄弟でも行き来しなくなる。

親が活着ているからこそ、盆だ正月だと、菓子や酒を持って本家にみんな集まってくる。嫁同士も仲が良く、老親は孫たちに囲まれてご機嫌だ。昔話に花も咲く。

親が亡き後は、またふたたび兄弟が家族で会うのは、三回忌、七回忌、十三回忌ぐらいなもので、その先は判らない。

ウメ婆さんは、三人の息子がいたが、そのどれもが金に執着しがめついのをよく知っていた。八十を過ぎた頃から、自分が死んだ後のごたごたを思えば、死にきれないものがあった。一見、兄弟仲がいいように見えるが、こと財産のことになれば醜い争いが始まるのは目に見えている。息子たちに輪をかけて後ろから背中を押すのは嫁たちだ。

児孫のために美田を買わずという。楽しんで儲けることばかり考えている横着な息子たちの性格はよく知っている。ご先祖様が残した土地には、アパートが何棟が建っていて、ウメ婆さんは、アパート経営で、かなりの金も貯め込んでいた。それを知っていて、息子たちはちょくちょく借金してくる。というより無心だった。

長男の茂一は、自分で経営している学習塾が、競争相手がやたら増えて、生徒を取られると、収入はダウンしていた。生徒が減っても、講師にはちゃんと給料は出さなければならないし、教室も借りているから家賃がかかる。教材費もバカにならない。最近、ネットの家庭教師まで現れて、昔ながらの塾は古いのだろうか、各教室をパソコンで結び、講師の数は減ったが、そのための設備投資がかかった。

「母さん、というわけで、いまはどこの銀行も貸し渋りで、大変なんだよ。三百万でいいから貸してくれないかな」

たまに息子たちが顔を出すと、みんな金だ。子供が小遣いをせびるのとわけが違ふ。子供のときは、指一本が十円だった。中年になるとそれが百万だ。

「おまえたちは、貸してくれといつも云うが、貸すということは返すということがついてくるのじゃないかえ。一円たりとも返してもらったことはないがの」

ウメ婆さんはつい小言が出る。

「それじゃ、貸してくれなんて云わないから、頂戴」と、手を出すのだ。いくつになっても子供は子供だ。中身は成長していないように思った。それで、金額だけは成長している。

次男の茂二は、地方公務員でありながら、金使いが荒い。株をやって大損している。それに娘の入学金まで注ぎ込んでいた。すっからかんになって、実家へ頼みに行く。

「おふくろ、生前贈与をしないか。どうみても長生きしそうだから、こっちが必要なときに遺産をもらわなかったら意味がない」

とかなんとか云って、大金をいただいて帰る。

三男の茂三はまだ独身だが、性悪女に引っかかって、だいぶ貢いでいるという噂だった。貰った賞与もそっくり女のために消えていた。それでもまだ足りない、婆さんのところにせびりにくる。

「おれよう、結婚を真剣に考えているのだが、向こうがうんと云わない。もう少しで落とせると思うんだ。だから、お願い、貸してちょ」

バカ息子ばかり三人も持つと親は苦勞する。そんな息子たちにウメ婆さんは、ほいほいと大金を与えていた。どうせ、遺産相続で喧嘩をするのは目に見えている。いまのうちに配分しておいたほうがいい。

そんなウメ婆さんはある日、脳溢血でぽっくりと死んだ。いつまでもあると思うな親と金。

葬式一切が済むと、息子たちは、それぞれが、遺産相続のことで頭がいっぱいだ。アパートと土地だけでも、いくらいくらあるだろう。それを三等分しても、暫くは遊んで暮らせるかもしれないと皮算用をしていた。親が死んで、悲しむよりむしろ悦んでいるような不肖の息子たちで、欲の塊であった。その辺もウメ婆さんはちゃんと考えていた。

さて、四十九日も済むと、いよいよ家族が集まり、遺産をどうするかという話し合いになった。その場に、銀行の融資係がやってきた。

「ご相続がお決まりでしょうか」

係はにこにこ笑っている。

「なんだ、気の早い。まだここを売った金をお宅に貯金しようというところまで行っていないんだ」

すると、係はウメ婆さんの借入明細を提示した。

「はい、ウメさんは、だいぶ以前から、土地を担保にいたしまして、当行に長期借入金がかかりございます。以前は、この辺りも地価が高かったんですが、いまは担保割れをしております、そうですね。いまは、不動産も動いていませんで、売れるかどうかは判りませんが、売れたとしても債務超過は確実ですね」

見ると、いままで自分たちがむしりとったのはすべて借金であつた。

「こここのところ、ご返済が滞っているようですので、手前どもといたしましても、できましたら、どなたか相続されて、ご返済をお願いできませんかと……」

三人とも青くなった。限定承認まで時間がない。遺産を相続するという夢の先に、借金付きという地獄が待っていた。みんな遺産を放棄した。がっかりしていた。ごうつくものの息子たちには一円たりとも残さない。ウメ婆さんの計算がちゃんとあつた。せいぜい子供たちに親は貸すがいい。

出生率がまた低下した。これは分かり切っていることだった。いくつかの山はある。戦後ベビーブームの生めよ増やせよの世代の子供たちが、結婚して子供を作るのが今頃だ。それでも、年々減少してゆくのは止めることができない。

ノーキッズで、夫婦や自分たちの人生を楽しみたいとする人たちも増えた。結婚をしない女やシングルライフを楽しむ男たちが増えた。周りを見ていれば、子供の非行や、事件、不登校、虐待、このさき、年金も出ない重税の未来にわざわざ自分の子供たちを向かわせたくない。戦争なんか起こったらどうするのだ。そう思うと、子供は生まない方がいいかもしれない。どんなに苦労して育てた子供でも、どうせ将来は親の面倒をみない。親は邪魔ものとして捨てられるのだ。

それに、教育費がバカ高つく世の中になった。大学を終わらせるまで一人二千万もかかるという。三人いたら六千万だ。それだけの小遣いが使えるなら、子供なんか作って子供のためだけにあくせく働くよりは、人生をもっとエンジョイした方がいい。周りを見ると、子供がいない夫婦というのは、実に若々しく、いつまでも仲良く、夫婦であちこち行っていたり、結構、リッチな生活をしていた。すべて心血を子供の成長のために使い果たし、身も心もボロボロになって死ぬのは、産卵したら死ぬだけの鮭にも似ていた。

確かに家庭に子供がいたら、潤いと変化と楽しみもあった。それが、最近では、問題だらけで、親の気苦労が耐えない。まされる宝子にしかめやもとはよくぞ云った。子はいまは宝ではなく借金なのだ。

「おやじ、金貸せよ」の声がどきりとする。親をすっかりと食べ物にしている邪悪な存在なのだ。

教育費がかかるから、せいぜい一人あればいいと、一人っこが当たり前になってきつつある。それではますます日本の人口は減る一方だ。年金の試算が狂う。このまま減少が続けば、年金は破綻。国家財政も破産する。

そこで、政府は、戦争で人口減少したのに、国家の再建するために必要な種を播くために、生めよ増やせよの奨励をした戦後のように、如何にして子供を沢山生ませるかといういと法案を通し、国を挙げてのキャンペーンを張った。

- 一、スキン、ピルなどのバスコントロールの販売、使用を禁止する。
- 二、ラブホテルの増築。立地に対しての緩和措置。
- 三、ニューヨークの大停電のときのように、月に一度は停電の日を設ける。
- 四、ポルノの全面解禁。

などなど、様々な意見を求めて、日本をさらにピンクにすることで、国民に意欲を持たせることにした。

総理自ら、記者会見でこう言明した。

「若者だけではありません。四十過ぎたあなた、もう諦めていませんか。芸能人を見習ってください。マル高の何が怖いんですか。いいですか、もっと励んでください。わたしだって、この年で頑張っているんですから。はははは」

政府は、少子化を防ぐために、バイアグラの無料配布、四人目から、養育資金の無償支給、十人目では夫婦で世界一周プレゼントと、いろんな特典を付けることにした。

さらに、国民の祝日を増やして六月九日をシックスナインで子作りの日と決めた。NHKや教育テレビではチャンネルを回せば、どこかで性教育番組をやっている。民放では、昼メロどころか、朝メロから夜メロまで、朝から晩まで露骨なドラマを放映して、その気をそそる。国や地方公共団体では、性の悩み相談窓口を儲けた。子供の作り方を知らない夫婦には実施で手ほどきまでしてくれる。そのためのトレーナーまでいて、指導をするというものだ。

最近セックスレス夫婦が増えた。男と女の関係が肉体関係だけではないと、極端に嫌う夫婦がいる。それは、反日分子として、思想犯扱いで、取締の対象となった。

新婚の家庭には、国から係員が一軒づつ周り、赤まむしドリンクを配りながら、「なんとか、頑張ってください。お国のためですから」と、激励して歩いていた。

その結果、第三次ベビーブームが到来した。

「総理、出生率が2を超えました。このままでゆけば、3になるのも時間の問題です。我が国の将来は安泰ですぞ」

大臣からの報告で、すべての未来が上方修正することになった。年金も、税収も、産業も国防もこれで解決できると、悦んでいた。

十年後一。

予想外れて景気はよくなる。税金は高くなり、年金は破綻寸前だ。人々の生活はいよいよ苦しくなり、地獄と化していた。自殺する者、一家心中が絶えない。犯罪も増えた。社会は新しい生命を抱えて、バラ色の未来のはずが、暗い未来になっていた。

それもそう。ただでも大変な時代に、生まれた子供たちが、社会に出て世のために働くまでには、二十年はかかる。その間は、逆に国の約束もあり、親も国も金がかかる。いま以上に窮地に追い込まれた。財政支出に窮して、国は養育費の支給を履行できなくなったから大変だ。

連日、国会を取り巻くデモが行われていた。いままでにない珍しい子連れデモであった。一政府は約束を守れ一。

一ミルク代を支給しろ一。

一われわれを餓死させるのか一。

哀れ、お父さんたちは、背中に赤ん坊、両手に幼子、お母さんもまた同じ。調子に乗って作りすぎた夫婦は、昔のように八人、十人あたりまえ。家は狭く、家計は厳しく、教育費も出せない有様。

若い夫婦は一挙に貧乏人の子沢山に陥った。みんな騙された。腹を空かせた子供たちがピーカーピーガーと泣きじゃくる。どうしてくれる日本よ。

とうとう家を出ることになった。嫁姑の戦いは、姑が出てゆくことで終わろうとしていた。いま、住んでいるところが病院が遠いという不便もあった。それで、家を売りに出して、街中に住もうというのが、少し早い、老夫婦だけ先に家を出ることになった。いろんな意味で、いずれは家を出なければならない。

わたしは十二年前に、海と山と両方が借景として窓から見えるという理想的なロケーションに家を建てた。それが、年寄りがやがて歩けなくなり、通いが大変になってくるという誤算があった。

嫁と姑の諍いも、もうそろそろ頭にきたところだ。こうなったらすべて売り払ってやると、わたしは怒っていた。つい先月、買い手が見ついたが、値段交渉で決裂した。いまから思えば、売っておけばよかった。もう、こんな家なんかいない。家族も解体する。全部ぶち壊してやると息巻いていた。

それで、八十をとうに過ぎた老父母を連れて、日曜日に賃貸マンションを見に行ってきた。隣が青森でも一番大きいショッピングセンターで、窓からすぐに正面入口が見える。七階建の三階で南向きと日当たりもいい。3LDKで六万以下だから安い。年寄りだけならどこもいまは貸さないだろうと、わたしも週に六日は両親といることにした。ということは、殆ど両親と住むということだ。女房と子供たちは、家が売れるまでそこにいればいい。そして、売れたら近くのアパートかマンションに引っ越ししてくる。二つの家を行ったり来たりするのだ。もし、これで愛人でもできたら、三軒の家をくるくと周り、目が回るだろうと、バカなことを想像していた。友人にそのことを話すと、笑って、

「大丈夫だよ。あんたにそんな金も体力もないから」と、はっきりと云う。

そのマンションからは病院も近い。いつも行っている内科までタクシーでも最低料金だ。目の前にバス停があるから、耳鼻科も外科もそれで五つ目のバス停で降りるとすぐだ。買い物も歩いてゆける。まだ、どうにか歩けるから、いまのうちなら、自分の好きなおかずでも買って食べていればいい。いままでも嫁の作ったものは口にもしないで、そうして買ってきて食べていた。

管理人のおばさんは、にこにこ部屋を案内してくれた。内装も綺麗で、ガスは使わないでいま流行の電磁調理器だから安全だという。スプリンクラーも非常階段もすべて整備されている。両親も非常に気に入って、明日にでも引っ越してこようという云い方だった。

ところがである。一週間経っても、返事が来ない。ようやく不動産屋から、電話があって、両親が高齢だから、大家がもめているという。

「わたしも一緒に住むんですよ。それでもですか」

それから何度か電話が来ていたが、とうとう断られてしまった。わたしは憤慨して云った。

「これは社会問題ですね。老人だけを受け入れないというのは判っていましたが、老人を抱えた家族まで入居を拒むというのでは」

すると、不動産屋は慌てて云った。

「訴えても無駄ですよ。入れる入れないは大家の自由なんですから。前に外国人を拒否したら、同じことを云いましたがね」

別にわたしは、そんな意味で云ったのではない。これから老人を扶養している家族が住むとこ

ろがないのは大きな社会問題だと云いたかったのだ。何も、拒んだ大家を恨んでいるのではない。

「火事が一番怖いんです」と。不動産屋は云った。よく、ニュースで見る老人の一人暮らしの焼死。

わたしもふと思い当たる。タバコの焼けこげが、我が家のテーブルにもよく見かけた。犯人はじいさんだ。だが、それより子供たちの方が危ないと思うことがたびたびあった。子供たちは、ストーブを点けばなしで遊びに行っていることがあった。部屋にはテレビも電灯も点けたままだ。そして、ストーブがFFのタイプだとしても、その熱風吹き出し口に、ビニールの袋なんかが、無造作に置かれていたりするのだ。いちいち、チェックして部屋を開けると、部屋の温度が上がっていて、非常に危険になっている。

だから、こと火事に関しては、すべて老人が元凶というわけでもない。幼子の火遊びも、うっかり主婦の台所出火も、若者たちの蛸足配線によるショートということもある。危険は家族のひとりひとりが持っている。

そんな、どこにも住めない老人が、元気で歩いていれば、老人ホームも満員だから、断られる。介護の必要がなければ、また見てくれる家族がいれば、いろんな制約があって施設の入居が難しい。

老人専用マンションもあったが、それは最近建てられたもので、すぐに満員になった。ケア付きの老人マンションも新築されたばかりだが、そこは高い。バリアフリーで、三食付き、介護付きだから、普通の老人ホームより高い。よほどの金持ちでなければ入れないようなものだ。

面倒を見る家族がいる老人でも入れないから、子供のいない老人はホームレスになるよりない。これからの家族関係からいうと、親はますます孤独になるだろう。親を引き取る子供たちが少なくなる傾向にある。いよいよ老人たちは行き場がなくなる。

「それじゃ、三人で、わざと市役所の前庭にダンボール箱を持って行って、ホームレスをやりましょうか」ということまで話した。

それでも、なんとか今度は大家に嘘をついて、わたし一人だけ入居するという事で別のマンションを借りることにした。大きなところでなければいちいち家族構成まで訊いてこない。

「大丈夫かね。後で見つかって、出て行ってくれと云われるんじゃないだろうね」

とおふくろが心配するものだから、

「大丈夫。もし、バレても年をごまかしておくから。普段から若い格好をしてくれよ。髪は金髪にして、ミニスカートをはく。網タイツに、ど派手な化粧だ」

と、八十三になるおふくろの姿を想像して、吐きそうになった。それより、親父が心配だ。そろそろ徘徊するようになったら、誰が見張っているかだ。首輪をして、繋いでおくよりない。大家にみつかったら、ワンと吼えることを教える。

とかなんとか、とても笑える話ではなかった。

第864話

急ぐ旅ではないけれど

大学一年の夏休み、生まれて初めての長い東京滞在からの帰郷だった。僅か四ヶ月の不在だったが、もう何年も故郷を訪れていないような気がした。

帰るときは、たいがい、急行を使った。特急なんか贅沢で、まして特急寝台となると、学生の身分では使えない。だが、そのときはいい気分で帰りたかったから、はつかり号の特急の自由席を買った。何か、とても裕福な感じがした。

一急ぐ旅ではないけれど……

という歌が流行っていた。「はつかり号は北国へ」というフォークソングだった。

葛飾の亀有に叔母がいた。駅前近くで洋装店を経営していた。お針子さんを何人も使って、オートクチュールの仕立てをやっていた。昨年、九十近くまで生きて他界したが、その当時はまだ五十代であったのだろう。なかなかセンスのいい人で、年取ってからファッションには気を遣っていた。

早くから離婚して、息子たち三人を働きながら育てた。仕事が叔母を若くしていた。

わたしは、よく叔母の家に泊まりに行ったり、ご機嫌伺いをしていた。その叔母から電話がきた。

一あなた、青森に帰るんでしょ。おじいちゃんのお土産を持たせてあげたいから、帰るとき寄ってよ。

せっかくの叔母の土産が何かは知らないで、わたしはこのこと亀有まで出かけて行った。

一あら、一段とまた垢抜けして、東京ボーイと見間違おうわよ。

叔母はそんな古い言い方をした。高校の学生服で、坊主頭で受験に来たのがこの春だった。

一これね、珍しいものじゃないけど、おじいちゃんに食べてもらいたくてね。

と、渡されたのは、なんと巨大な西瓜だった。

一ええ？ こんな重いの持って行くんですか。

一あなた、若いし、力もありそうだから、それに荷物はそれだけでしょ。おいしい西瓜なのよ。

と叔母は盛んに云うが、故郷離れて三十年か。いまや青森が西瓜の名産地ということも忘れていたのだ。冷たい麦茶と叔母のおしゃべりのせいで、わたしは列車の時刻を忘れていた。時計を見ると、後、三十分もない。慌てて暇した。上野まで、うまく電車が来ればいいが。わたしは、重い西瓜を抱えながら、ふうふう云って階段を駆け上がり、時間ばかり気にして、ホームで足踏みまでしていた。東京は七月の中旬。三十度をゆうに超えていた猛暑だ。汗が全身を滝のように流れた。

こんな急ぐときに限って電車は来ないものだ。時間が短くも長くも感じられた。よう

やく来た電車で飛び乗ったら、クーラーのきいていない古い車両で、窓からの風と、天井の扇風機がなまぬるい風を送ってよこす。

上野に着いた。コンコース走った。東北本線までの乗り換え。すでに発車のベルが鳴っている。あわや、ドアが閉まる寸前に飛び乗っていた。まさに滑り込みセーフだった。重い西瓜に腹が立つ。途中、何度も捨てようかと思った。落ちて壊れたら諦めもつく。こんなお土産も非常識だと、ぶつくさと云っていると、乗客の視線が、汗びっしょりのわたしの顔と大きな西瓜に集まっていた。すごく恥ずかしい思いをした。

アナウンスが入るときのオルゴールの音が好きだった。自由席だから、どこでもよかったが、あいにくすべて満席で、指定席もなく、通路に人も立っていた。わたしは西瓜を抱えて、車内をうろうろしていた。またみんなの晒し者になっていた。顔が西瓜のように赤くなった。

疲れていた。ともかくどこかに座りたかった。そんなときに食堂車を思い出した。そこは指定もなにもない。混んでいれば嫌がられるが、コーヒーパイでねばるだけねばって座ってゆこうと決めた。昼を過ぎていたので、食堂車は空いていた。わたしは昼を食べていなかったの、腹が空いていた。だが、すっからかんで田舎へ帰るので、ポケットの中の小銭を数えたら、ようやくアイスコーヒー一杯分。駅弁も買えないし、まして食堂のメニューを見ると、街のレストランより高いときている。がっかりして、これから八時間近く、なんとか喉が渇いても我慢しなければならないのだ。

車窓を緑が走る。いつだったか、窓際に置いたポータブルラジオから、ベートーヴェンの田園が流れていたのを思い出していた。あの交響曲を聴くたびに、車窓を後ろに流れる夏の草を思うのだ。わたしは、ようやく引けてきた汗を拭きながら、氷がグラスの中で完全に解けるまで、ストローでちびりちびりと吸っていた。

氷がなくなると、わたしはここにいる正当な理由がないように、食堂車を出た。通路に立ってゆくのも癪だから、少しクーラーが弱い、デッキに座ってゆくことにした。仙台を過ぎると、ようやく半分は通過した。あと四時間だ。わたしは、ナップサックから、よれよれになった文庫本を取り出した。「天の夕顔」だった。誰かを愛してみたいと思う年に、そのことを話すと、従兄が、それならその小説がいいと云った。

半年近い東京で、巡り会いもなにも別になかった。七十年安保の火炎瓶と催涙ガスと、デモ行進の逃げまどう夜と、陰惨な暗い学生生活だけがわたしに幻滅とすさまじい現実を押しつけていた。かといって、傷心の上に帰省するのではない。まだ始まったばかりの大きな旅の入口だった。好きな人もこれからできるかもしれない。沢山の本を読んで、何かを掴むかもしれない。何も焦ることはない。すると、あの歌のフレーズがわたしの口をついて出た。

一急ぐ旅ではないけれど……。

第865話

車上生活者たち

一台のキャンピングカーが山陰の宍道湖の畔を走っていた。助手席で全国の道路地図を広げて見ていた妻の美智子は、カーナビが付いていても、先を読んで夫の博介にいちいち告げていた。

「あなた、この先に道の駅があるわよ。今夜はそこで宿泊しましょうよ。晩ご飯は何か地元の美味しい魚を買ってきませんか」

やがて、車は道の駅のパーキングに入った。夕方で、宍道湖の夕焼けが綺麗だった。道の駅にはこの倉田夫妻のようなキャンピングカーで全国を回っている老夫婦が何組も停車していた。

博介が定年退職してから、十年は経っていた。その間にいろんなことがあった。子供たちと一緒に暮らそうかと思ったが、どうもうまくゆかずに、それぞれがまた別々の生活を求めた。築三十年の家は老朽化して、新しく建て直すにも、資金もなく、借入もできない。それで、将来ともに他県で働いている息子たちは故郷に戻ってくることもなさそうなので、夫婦で話し合い、家は売ってしまうことにした。古くなれば、いろいろとリフォームにも金がかかる。生きてあと十年少しだと思えば、老後は好きな旅でもしたい。思いついたのが、家屋敷を売った金で、キャンピングカーを買って、体の動けるうちに日本全国を隅々まで見て歩く放浪の旅に出る余生だった。いまは、そんな年寄りたちが増えていた。

車の居住スペースは四畳半はあった。そこに、コンパクトに機能的なシステムキッチンが付いていて、折り畳みの椅子テーブルがあり、食事の支度もできるようになっていた。屋根裏のような口フトにベッドルームがあり、夫婦二人ゆったりと寝られる。狭いが、シャワールーム兼トイレも付いていた。車の屋根にソーラーシステムを載せていて、電気とお湯はそこから得ていた。テレビもステレオもパソコンもあり、普通の家庭にあるものは小さいがすべて揃っている。冷蔵庫にはいつも非常食がびっしりと入っていた。子供たちと連絡するのは携帯電話だし、毎日の新聞もウェブニュースで、パソコンがモバイルで常時接続されていた。

通りかかった土地の市場などで、晩ご飯の材料を買ってくる。珍しい土地のものを調理法を訊きながら、買い求め、車はいくら停めていても無料のパーキングスペースなどに停めておいた。生活に必要な水だけは、ポリタンクに貰ってくる。

観光もネットで調べながら、その土地の歴史や風俗に触れながら、名所旧跡を隈無く見て歩いた。それが日本を知るいい勉強となった。

電気代がかからない。水道やガスなどの光熱費もかからないし、固定資産税などの税金もかからない。ガソリン代や保険料、食費、通信費などを合わせても夫婦で十万からお釣りがくる。年金もかなり減額されて、夫婦で普通の生活をするのにさえ大変な額まで落ちた。この車の中での移動生活は、実に旅行と生活が合体した、金のかからない儉

約生活なのだ。

香港にもまた日本にもいまだ船上生活者たちがいる。家を持ってない、住所不定の貧しい人たちだ。いまの日本は、老人たちを受け入れるアパートもなくなりつつあり、老人ホームは満杯だ。それで考えたのが、車上生活だった。

現住所だけは息子の家にしておいた。郵便物はすべてそこに届くようになっていた。「あなた、松江温泉って入ってみたいわ。それと、明日はラフカディオ・ハーンの資料館なんか見学しましょうよ」

「うん、それと美味しいものをたまに食べに行くか」

広い道の駅の駐車場には、似たような老夫婦たちが、キャンピングカーで来ている。「これ、少しですが、出雲でいただいてきた蕎麦なんですけど」と、逆コースで山陰を回っている人が差し入れを持ってくる。

「いやあ、すみませんな。代わりといっちゃ変ですが、鳥取砂丘で買ってきた二十世紀梨です」

お互いに交換して、いろいろとこれから回る土地の情報も聞くことができる。

「よろしかったら、今夜、うちの車で一杯やりませんか。とっておきの萩の地酒があるんです」

車がいつか、バーになったりする。そういった交流もまたいい。

子供たちとはいつもメールのやりとりをしていた。自分たちに来た手紙は、息子がファックスしてくれる。それがパソコンの画面で読めるのだ。旅のスナップを画像添付で送ってやったり、旅先の珍しい食べ物を送ってやったりした。年に一度は各地に所帯を持っている息子たちの家にも立ち寄る。孫の成長が何より楽しみだ。

本が読みたいときや、その土地の歴史を調べたいときは、図書館へ車で立ち寄って、半日読書で過ごすこともある。映画を見ることもあった。大概是、その町の美術館や民俗資料館、神社仏閣、庭園などを見て歩いた。毎日が移動出来る蝸牛のような家を持ち、一日中観光をしている人生なのだ。

漁り火を見たいために、海辺に車を停めて、潮の匂いの中で寝てみたり、熱帯夜のむし暑い夜は、高原まで車で上がり、涼しい夜を虫の声とともに寝ることもできた。

真夏は北海道へ渡り、冬には九州を走った。ときには桜前線とともに北上したときもあった。田舎の新鮮な野菜や魚をいつも食べられた。東京では考えられないくらい安い値段で売られていた。

「わたしは、こんな老後があるとは思いませんでしたよ。毎日、広い家をお掃除して、庭の草むしりをして、そんな家事が随分と減りました。洗濯ものはコインランドリーでしょ。お風呂もあちこちの温泉に入れるなんて、楽しみなことばかり。町にいれば、ご近所のいがみ合いもあるし、うるさいセールスも来ます。ここは、いつでもお客さんでいられるもの」

「おまえも、随分と明るくなったし、元気になった。家に閉じこもっていたときとは違う。おれたちは、このままずっと歩けるうちは日本の隅々まで見て歩き、旅の途上でのたれ死ぬ。芭蕉の心境じゃないか」

夫婦で俳句もやっていた。そういった金のかからない趣味を持ち、句碑を見て歩く楽しみもあった。

夏祭でも、田舎の小さな祭を覗いて歩くのも好きだった。いろんな人と出会うこともできた。その人たちから時折メールが来る。

車は、光り輝く日本海を見渡しながら、灯台の立つ、日御碕へと向かっていた。

「あなた、カモメの群ですよ」

岬の行く手に美智子は指をさした。

「あれは、ウミネコだそうだよ。繁殖地があるらしい」

美智子はいつも博介の腕をとっていた。それしか仕合わせを表現することができないでいた。

第866話

欠陥車両

新車を買っての初乗りは、新しい彼女ができたときより嬉しい。シートのビニールを取るのも勿体なくそのままにしていたし、足下のラバーも汚してはならないと、わざわざ新聞紙を敷いたりしていた。

二十五歳で独身の菊池祥吾は、自分の給料の大半を車のために使っているカーキチだった。ただ、今度は、なんとなく気が重い。何故なら、あの欠陥隠しの三菱自動車のスポーツタイプのランザーツを買ったからだ。買ってから、ニュースででかでかとして騒いでいた。果たして、自分の車は大丈夫だろうか。心配になってきた。

それで、祥吾は初乗りをひとり、郊外まで遠乗りをしてみることにした。長距離をかければ、どこかおかしいところが出てくるだろうと。カーコンポもパワフルなアンプに換えて、大音量でガンガンとロックを聴くこともできた。カーナビもDVDで映画も見られるやつ。フル装備のオプションにかなり金を使い果たした。車が趣味だから全財産を注ぎ込んでも悔いはない。

広い国道の一直線の道路を走っていたときだ。いきなり、ハンドルが取れた。

「ええ？ おいおい、嘘だろう」

慌てて、ハンドルを取り付けようと思ったが、どうやら途中で折れたらしい。祥吾は、マンガのように取れたハンドルを回していたが、そんなことをしている暇はない。かなり焦った。対向車がないから、とにかく停車させることだ。ブレーキペダルを思いっきり踏んだら、今度はペダルが取れた。

「まさか、勘弁してくれよ」

舵のない車はどこへ走ってゆくか判らない。たとえようもない恐怖感が祥吾を襲った。祥吾は冷静になるよう自分に云いきかせていた。

「そうだ、まだサイドブレーキがあるじゃないか」

咄嗟にサイドブレーキを引こうとすると、これもまたポッキリと折れて、取れてきた。

「ばかやろう。なんてこった」

もう祥吾は泣きそうになっていた。ブレーキがダメなら、シフトダウンして減速するよりない。フロアシフトのギアチェンジをいきなりローにしようとした。ところが、そのシフトレバーも、ぽっきりと折れたではないか。

「おがあちゃーん」

祥吾は必死で母を呼んだ。まるで、特攻隊が、天皇陛下万歳ではなく、母を呼んで突撃したような心境になってきていた。右へも左へも切れない。まして停めることもできない。イグニッションキーを停止にして、エンジンを止めようとした。ところが、キーが回らない。抜けない。

「こんなときに、どいつもこいつも」

直線道路で、通行量のあまりない広い道路だったから、助かっていた。もし、信号が前方にあったら、停車している車があったらと思うと、気が気でない。

ガタンと車体が傾いた。と、後方にタイヤが飛んでいったのがバックミラーに映っていた。

「大変だ。今度は後輪のタイヤが外れた」

祥吾は必死に体重をかけながら、車のバランスをとっていた。車は三輪でも二輪でも走れるはずだ。前にアクション映画でスタントマンがやるのを見たことがある。祥吾はそれと同じことをして走っていた。

「そうだ、いまのうちに脱出しよう」と、ドアを開けようとしたら、ドアまでが外れた。ガラゴロンと外れたドアが道路に転がっていった。

「なんなんだよ、この車は」

と、嘆いている暇はない。今度は前輪の同じ側のタイヤが外れた。祥吾はますます体重をかけて、車体を斜めにしようと、身を乗り出そうとしたら、今度は、反対側のドアも外れて落ちた。もう、そこまでくると、別に驚かない。当然だと考える。もう、勝手にやってくれ。

今度は何が起こるのだろうか。バンパーが外れ、シャフトが外れ、そういった部品がバラバラと道路に散らばっていった。普通なら、そこまで分解すると、走らないのだが、その車は不思議と惰性で走っていた。

と、後輪の残りのタイヤが外れた。祥吾は開き直った。

「どうにでもなれさ、ふんふんふん」

鼻歌まで出していた。車は奇跡的にひとつのタイヤで尚も走り続けていた。

祥吾は、首の運動をしていたり、もう、どうなってもいいという諦めがついていた。

すると、残りのタイヤも外れて路肩へ飛んでゆくのがサイドミラーに映っていた。これで四本すべてのタイヤが外れた。

祥吾は、救援を呼ぶことをふと思いついた。それで、携帯電話を取り出すと、車のディーラーに電話をした。

「はい、つい昨日、お宅からランザーツを買った菊池というものですがね。うううう。と、祥吾は思い出して泣き声になった。

「ハンドルが取れまして、ブレーキもシフトレバーもドアまですべて外れましてですね、ううううう、タイヤも四本とも外れても、まだ走っているんですが、ああ、前方に車と信号がある、どうしたらいいんでしょうか。

すると、ディーラーはおかしいなといった云い方をした。

「普通はタイヤが四本も外れたら、走っていないでしょう。

祥吾は、それもそうだと、ドアのないサイドから下周りを見ると、空中を走っている。

「あのよう、一体全体、なんて車を売りつけたんだ。飛んでるよ。空を飛んでいるんだよ。どうしてくれんだよ。

祥吾はわんわんと泣きだした。ピカピカだった新車は、いまや無惨な姿で空中に浮いていた。

第867話

古本市

何かいい商売はないものかな。世の中が不景気になれば、商店主たちは一様にそう考える。他人の商売が美味しそうに見えたりするが、どの業界も大変なのだ。いくら頑張っても右下がりになる商売が嫌になり、業態転換を図ったり、異業種に向けて多角経営したりするのは、可能性を求めてジタバタしているのだ。

古本屋は万年不況だ。古本の売れ行きは、年々落ちてきていて、別に不景気と関係がないような気がする。活字離れでだんだんと本を読む人が減ってきたから、構造的に不況に陥っているのだ。こればかりは世の中が回復しても持ち上がることはない。

古本屋の親父の北村は、それでずっと飯を食ってきたし、これからもそうあるべきだと、他には色気を出さないで、客の来ない店にしがみついていた。以前は、年に二回は、新聞広告を出したり、チラシを折り込んだりして、店内で割り引きのセールをやったりしていた。その効果がなくなって、やめたのが十五年前。広告費を回収できないほど、古本市は不発で終わり、客動員がなかった。価格訴求が効くのは、価格の弾力性がある家庭日用品などの毎日使うものだけだ。なければなくてもいいものは、たとえ十円でもいらぬのだ。

それでも、指をくわえて景気のいい店を見ているだけでもいけない。死活問題だ。あれこれと、どうしたら売上が上がるだろうかと、常日頃考えていたが、へたな考え休むに似たり。いいアイデアは出てこない。

そんなときに、店に親戚で、経営セミナーをやっていた山下先生がやってきた。

「おお、やっているか」と、世の中で一人だけいつも景気のいい顔をしている。経営コ

ンサルタントが暗い顔をしていれば、誰も話を聞きに来ない。

「まあ、なんとか、ぼつぼつでんな」

と、北村は浮かない返事。ぼちぼちではない、没没なのだ。山下先生、いろいろと北村から相談を受けて、腕組みして考えていた。

「そうだ、古本市をやろう」

まるで斬新なアイデアが出たように掌を叩いた。

「それは、昔からやっていたことで、効果がないからやめたんですよ」

北村はぶすつとして答えた。

「そうじゃない。競合相手のいないところでやるんだ。何も、店に拘る必要もないことだ。需要というものは、隠されていることが多い。それを知らないだけなのだ。いいか、ここだけに固執するなよ。売れる場所に古本を持って行って、売るんだよ。誰も考えないようなところだ。そこでは、古本屋がないから、古本に飢えている客がいて、別に安売りしなくても、当たり前値段でも飛ぶように売れるのだ」

山下先生は、顔が上気し、唾を飛ばし、だんだんと興奮してきていた。この熱弁で、いままでどれだけの人が騙されたことだろう。危ない、危ないと北村は警戒した。

「例えばだ、岩木山の山頂近くで、缶ジュースを冷たい山の水で冷やして売っている背負子がいる。彼は、麓から、毎日、登山シーズンになると、リュックサックにジュースをいっぱい詰めて、山頂まで運んでいるんだ。勿論、そんな場所には自動販売機があるわけではない。コンビニが建っているはずもない。みんな、汗だくで登ってきて、そこに美味しそうなきりっと冷えたジュースが売っているのだ。ついつい、買ってしまふ。だが、それは定価の倍で売っているのだ。運び賃としてより、そこには競合するものがない。独壇場なのだ。ひとり相撲なのだ。だから、君もだ、人のやらないことをやれ」

不思議なもので、北村もその話術に取り込まれ、その気になってしまうから、コンサルタントは山師か、いかさま師か、いずれにしても、気持ちは動いた。

よし、おれもやってみよう。北村は古本市の準備をした。家族連れも来るから、マンガ本も用意しよう。植物図鑑なんかも売れるかもしれない。箱に売れそうな本をチョイスしてどんと詰めた。まあ、こうなったら、ドサクサで何でも売れるだろう。何せ、古本屋なんか一店もないところで独占的に商売ができるのだから。北村もすっかりと乗ってきていた。許可がいるとか降りないとか、そんなことは頭にもない。売れる想像だけで、目がレジスターになっていた。

岩木山の山頂。標高一六二五メートルあり、青森県では最高峰の山になっている。日曜ともなれば、下から蟻の行列のように、山頂目指した登山客が登ってくる。小さい子供でも元気に上がってくるが、そう楽なルートでもない。

「あれれれ、お父さん、こんなところに古本屋さん」

子供たちが、びっくりして山頂近くの平板な土地に、ダンボール箱を並べて、古本を売っている北村を奇異なものとして見ていた。古本市と、大きな紙に書いてあった。北村は朝から重い本を担いで下から三往復もしたから、全身へとへとだった。それでも愛

想よくにこにこと笑っていなくてはならない。

中年の登山客が、立ち寄って、箱の中から本を取りだして、眺めていた。

「ふーん、ヘーゲルの精神現象学ねえ、こんなもの、こんなところで売れるんですかね」

すっかりとバカにされている。他にも、物理学事典だとか、経済学講話だとか、専門書が並んでいた。

小学生の娘を連れた母親が、通りかかった。

「あっ、ママ、コミックを買ってえー」

と、近づこうとしたら、母親が娘の手を引いて、足早に去ろうとする。

「いけませんよ。あんな人に近づいたら。くるくるぱーなんですから」

みんな不気味なものを見る目でちらちらと見て見ぬふりをするように通り過ぎる。

「くるくるぱーか」北村はがっかりしていた。一冊も本は売れなかった。この本をまた三往復、三時間かけて下まで下ろさねばならないことを考えると、ぞっとした。街でも売れない、山でも売れない。もう、本というものは、どこでも売れないような気がしてきた。

「ああ、本屋さん、一冊売ってくれませんか。何でもいいですよ。とにかく一番安い本を」

客が来た。一冊売れた。北村は嬉しさのあまり涙が零れた。

「キャンプをするんだが、燃料を忘れてきて、焚きつけに丁度よい」

哀れ、本はそんなことでしか売れない。

第868話

お金は大事じゃない

老夫婦で貯めこんでいる家はいまでもかなりある。それがまた不安の種だ。

吉田利吉はがめついことで知られていた。貰うものは食べ残しでも貰うが、出すものは鼻くそでも嫌だというほどのものだ。そうして、がっちり貯めこんでいたが、困った時代になってきた。夫婦でいつも利殖について話をする。

「なあ、おまえ、最近は何騒で、金持ちの老人宅に強盗だそう。うちなんか狙われやすいから、警備保障会社に頼もうかと思う」

「でも、あれは通報だけが行くのでしょうか。駆けつけたときには死体だったりしたら、なんにもなりませんわ」

「いや、防犯のための眼球の虹彩を判断して自動的に開くドアだとか、ボールで叩いても割れないガラスとかにしたら、不審者も入れない」

いまは、使い途のないお金がタンス預金となっていた。それが狙われやすい。昔なら

預金していたものが、いまは預金するのがバカらしいほど金利が下がっていた。金利生活者という、それで飯を食うことができなくなっていた。定期預金でも〇・一パーセントの利息だ。一千万を預けても、一年でたったの一万円しか来ない。それでは映画見て、外食したらすぐになくなる。逆に十年の定期なんか組んだら、満期で下ろしたときは、実質目減りしているのだから、お金も貯金の意味がない。

吉田老人は、以前、バブルの絶好調のときに土地を買いまくった。それが、どんどんと地価が下がる一方だ。これからは上がることはない。日本の人口が、五十年以上も経つと、少子化で一億二千万から七千万と五千万人も減るのだ。そうになると、これからは土地だけでなく、マンションもアパートも家もガラガラと空くのだ。きっと酷い街なら、人口が半分になる。すると、商店もデパートも工場もいまの半分で足りることになる。学校も、保育園もあらゆる産業の半分が潰れる。景気だって、よくなるはずがない。ますますこれからはじり貧になってゆくのだ。ひと昔前は、人口が増え続ける自然増加で、毎年、その分だけでもどこも売上は上がっていたし、人が増えればモノだけではなく家も売れる。いまは自然減なのだ。

株も四万台の好調のときから、八千円まで下がる一方だった。ようやく最近、持ち直しても安値安定だ。吉田老人は株でも痛い思いをした。土地で大損し、株でも損をした。もう、そのどちらもやらない。

それではと、投資の対象を美術品に向けた。一時、オークションに出入りして、有名絵画を買いあさったことがある。ところが、書画骨董も全般に不調で総じて値崩れしている。証券会社が倒産して、その保有していた美術品が大量に市場に流れたときは、愕然とする値がついた。一時は、ピカソの代表作に百億以上がついたものが、いまはその何分の一かに下がっていた。

吉田老人は街で昔からやっている北村古書店にも出入りしていた。

「北村さん、何かいいものが入りましたかな。あなたの目から見て、買っておけば、必ず倍以上には値上がりするというものが」

親父の北村は胸をぽんと叩き、

「そうですね、わたしが自信を持って云えるのは、どれも必ず下がるというものばかりですな」

「何だと、この漱石全集が一万円か？」

「そうです。いまは全集ものが一部を除いて値崩れしてしましてね、第一、買う人も売る人も場所をとっていません」

「だったら、本でなくてもいい。肉筆ものとかはどうかな」

ちらりと、吉田老人はガラスケースの中に展示してある生原稿に目を移していた。

「ああ、この前入った喜多村拓の小説の直筆原稿ですか。それなんか、はっきり云って、鼻紙にしかありません。第一、字がへたくそで、なんて買いてあるのか読めません」

「短冊も、横額も、刷りものもダメか。これからの世の中、何がいいのかね」

吉田老人は溜息をつくばかり。北村のように、いつも貧乏していれば、そんな贅沢な悩みをしなくてもいい。金がある人の悩みは羨ましい。

「この前の出資は結局、裁判で戻ってこないんですね」

と。北村が訊いた。

「ああ、まんまとやられたわい」

必ず儲かるという口車に乗って、かなりの大金をある大臣経験者が会長を務める組織に出資して、詐欺にあった。

「海外の投資はどうですかね」と、北村はお茶を勧めた。

「政情がいまはどこも不安定だ。政権が変わればまたどうなるか判らない。それに、いまは景気のいい国を捜すほうが難しい」

吉田老人はずずっとお茶をすすりながら、口をへの字に曲げていた。

「吉田さんは、もう七十半ばでしょう。子供さんも立派に事業をしておられるし、別に財産を残す必要もない。それに、棺桶まで金は持ってゆけない。いまは、ぱーっと派手に使うのが一番ベターでしょうね」

「使う、か……。いままで、そんなことは考えもしなかった」

吉田老人は目からうるこの気持ちで、呆然としていた。

「金は使うためにあるんです。そうですよ。老後もいつまでもあるわけではない。奥様と使い果たして余生をもっと楽しむんです」

「そ、そうか。使うのか。よし、そうするぞ。北村さん、そのガラスケースの中のもの、すべて買うから、届けてくれ」

(やった)北村は、ひと月分の売上にはなる高い限定本や豆本などを一挙に買われて、ほくそ笑んでいた。(喋ってみるもんだ)

吉田老人は、さっそく家に帰ると、夕食の支度をしていた妻に信じられない言葉を吐いた。

「そんなことはしなくてよろしい。これからは毎日、あちこちの高級レストランでグルメをする」

いままで、外食なんか贅沢だとラーメン一杯も食べさせてもらったことのない妻が耳を疑った。

「ええ？ あなた、どうなっちゃったんですか」

でも、いざ使う段になると、日頃の吝嗇な性格が、二の足を踏む。使うということはとても勇気のいることであった。

毎日が豪遊だった。観劇をして、海外旅行をして、妻にはブランドものを買ってやり、高級クラブにもあししげく通った。

お金はおあし、足が生えて出てゆくのが本望だ。そんな老人たちが増えてくれれば、少しは消費が上向くだろうか。

古新聞紙や雑誌を紐で縛って出す日だった。一台のロールスロイスが、ゴミの集積場所の前に停まった。ドアが開くと、革靴の先がジョーズのように口を開けた中から、さらに穴の空いた靴下が覗いていた。彼の名は北村拓也。北村古書店の親父だった。近所の人たちが、嫌な顔をして、囁きあっていた。

「いやあね、古本屋の親父なのよね。なんでも、ゴミの中から国宝級のコテンセキとかいうものを掘り当てて、大儲けしたというじゃない」

いまは、ひい爺さんが持っていた貴重な本であっても、孫子の代になれば全く、本に興味もなく、汚い紙屑ぐらいにしか思っていないので、どんどんとゴミに出されていた。それがリサイクル法が施行されてからは、少しは変わった。本は燃えるゴミからダンボール箱やトイレットペーパーで第二の人生を歩むことになった。

拓也は、燃えるゴミでも燃えないゴミでもよく覗いて歩くようになった。とんでもないものが落ちていたりする。家の蛍光灯も、ストーブもテレビもすべて粗大ゴミの中から拾ったものばかり。まだまだ使えるものをどうして捨てるのか。単に流行遅れというだけで、どんどんと捨てている無神経さに腹が立つ。元来の貧乏性が、やたら町のゴミを集めてくることになる。唸るほど金を持っていても、その性分は直りそうにもなかった。

拓也は生まれたときから、両親は共稼ぎで、忙しいからと祖父母に預けられていた。明治生まれの祖父は石川啄木と誕生日も近い。そんな祖父がケチで有名だった。なんでも拾ってくるバタ屋みたいなことを趣味にしていた。石でも木でも飾れば工芸品になりそうな形のいいものを拾っては磨いて棚に並べてコレクションにしていた。

祖母は食べ物でもなんでも粗末にすればよく叱った。小学生のときは、弁当箱の蓋にご飯粒を付けて帰っても怒られた。お米のひと粒ひと粒がどんなに貴重なものであるかと、こんこんと説教するのであった。

そんな祖父母に育てられて、躰られて、とうとう拓也は捨てられる本があまりにも可哀想で、古本屋にまでなった。

その日も、町内を車で一周していると、分厚い「白秋全集」が揃いで収集場所に出してあるのを見つけた。戦前に発刊された天金の背革で、状態もいい。なんと一巻目の見返しに白秋の署名までしていた。しめた、収穫ありと、それを持ってゆこうとすると、市役所の職員がたまたま通りかかって拓也を呼び止めた。

「あんた、勝手に出されたものを持って行っては困りますよ。泥棒と同じですから」

拓也は驚いた。

「泥棒って、あなた、これは捨てられたゴミでしょうが」

「この前、数千万円の札束が捨てられてあったのを回収業者が届けたので、市から返還訴訟を起こされたニュース、知っているでしょう。このゴミも、出された以上は市のものなんです。あんたに所有権はありません」

「そんな、札束じゃないんでしょう。あんたたちだって、ゴミは減らしたほうが経費が少なくなるというものだ。それなのに、たかが捨てた本ぐらいで泥棒呼ばわりですか」

「ゴミは昔の話です。いまは、その本一冊でお尻が何回拭けると思っているんですか。あんたは、少なくともトイレトペーパー三個分の窃盗をしたことになります」

その本のあった場所には、他に市の沿革史、建部綾足の紀行の和本など、図書館か博物館に収蔵すべき貴重な郷土史が無惨にも捨ててあった。

「いいですか、これは県の立派な財産になるべき文献なんだ。それが鼻紙にされるのを黙って見ているというのか、この唐変木が」

温厚な拓也はついに怒った。市の職員は、規則を楯にとって、断固として譲らない。買うからと財布を出しても、売り物ではないと拒絶する。時価百万以上はする古書をどうしても便所紙にしたいらしい。そのうち、回収車がやってきて、口論している間に持ってゆかれた。

本はそうして、次々に見えないところで処分されていっているのだ。

拓也の祖父もそうだが、来年米寿を迎える父もまた貧乏性だった。一緒に暮らしているのだが、モノを粗末にするのを極端に嫌う。包装紙や裏に印刷のしていないチラシなども丁寧に裁断して、メモ用紙にするというが、その紙の束がすでに天井に届くまでとなった。スーパーのショーレックスの袋は屑籠の中に入れるために使っているのだが、それも使用量を遙かに超える量が毎日来るものだから、だんだんと溜まってきて、大変な量になる。紐にしても、輪ゴムにしてもきちんととっておくのはいいが、使いきれない量となる。紙袋でも捨てるに怒る。

拓也の母親は、連れあいの溜め込むのに頭にきていた。じいさんがどこか一泊で旅行にでも出ている間に、黙って捨ててしまう。それでもまた自然と溜まってくるのだった。

「先にじいさんを捨てなければいけないね」と、ばあさんは云うのだ。

そんな血が脈々と流れているから、勿体ないと思う気持ちが、北村古書店にも生き継がれている。

朝から拓也は一冊の本を手はどうしようかと考えていた。捨てるべきか、置いておくべきか。馴染みの客が来て、

「何を悩んでおられるのかな。その本をどうするべきかと？」

戦前の改造文庫だが、ひどい状態でもともと布張りだから汚れまくっている。

「たいして貴重な本とは思えないが、あなたの性分では先に進まない」

拓也は決断力がない。思いっきりが悪い。たかが文庫本一冊のために悩むことしきり

以前は別れを決めた女でも、なかなか捨てられずに、二人でうろうろしていた。

客は云った。

「あなたのその勿体ないと思う気持ちは大事ですよ。どんな本でもきっと世の中には捜している人がいるでしょうね。でもね、もっと現実を見たらどうですか」

はっとして、拓也が改めて店を外から見た。入口までびっしりと本で埋まって、中に

入れないのだ。とうとう、立錐の余地もなく、客だけでなく店主まで居場所がなく出されてしまった。

「店は客のためにあるのじゃないですか。これじゃ、店じゃありません」

「ごもっともですが、店は本のためにあるんです」

店のドアを開けると本がどっと降ってくる。通路から天井まで本で埋まっていた。

第870話

偽書売ります

当地に偽書といえば、有名な東日流外三郡誌がある。いまでこそ殆どの人は偽書と思っているだろうが、当初は信じている人の方が多かった。あまりにも偽書とするには、よくもまああちこちの文献からジグソーパズルのようなピースを持ってきて、一大古代ロマンを書き上げてしまったものだ。すでに亡くなったが、その張本人は、作家としてデビューした方が成功したかもしれない。

こちらは偽書ではないが、一度こんな大騒ぎがあった。北村古書店の常連客で、目利きと云われている物知りが、ある日、北村のところに血相を変えてやってきた。

「あんた、大変なことだよ。あんただから教えるが、南町にある中央古本店ね、あそこに芥川龍之介の初版本があるんだよ。芥川の大正八年に出した『傀儡師』だ。わしは、ちゃんとこの目で奥付も確認してきたから間違いはない。それがだよ、何も知らない若旦那が、なんと千円という値を付けているんだ。わしはもう本を集めるのはやめたから、あんた、買うだろう。あんたは面が割れているから、わしが知らん顔して買ってあげよう」

その老人は、北村から千円を預かり、また吹っ飛んで行った。かなり興奮している様子だった。北村はどうも信用していない様子で、どうもおかしい話だと笑っている。この北国の街は戦災で焼けてからは、戦前の本も探すのは大変だ。図書館まですべて空襲で焼けたからだ。後で、外から入ってくることはあるにしても、北村もこの商売をやって二十年近くなるが、いまだに明治大正の文豪の初版本にお目にかかったことはない。

やがて、老人が息を切らして店に戻ってきた。

「よかったよ。まだ売れていなかった。状態は申し分なくいい」

と、北村が手に取ると、どうも、紙が新しすぎる。かなり黄ばんで汚れもそれらしく年代もののようなのだが、小口が白いのが気にかかる。普通は、天や小口などが先に汚れてくるものだ。疑ってよくよく見ていると、奥付の隅に小さく、特選名著複製全集と印刷してあるではないか。

「やっぱりなあ。これは古くさい感じはするけど、複製本だよ」

「やられたかあー」と、老人は額をぼんと叩いた。

二十年、三十年と経てくると、複製本も本物と見間違えるくらい古書の風格が出てきたりする。

北村は、その一件以来、あることをずっと考えていた。古本屋が決してやってはいけないこと、それは偽書を作るという犯罪行為だった。本の偽物はでっちあげが多いが、現存する奇書などの値打ちものを、一冊だけ作れと云われても、版を起すだけでも大変な金がかかる。手間と経費を考えれば、たった一冊の偽書を作るというのは割りに合わない。ところが、最近になって、偽札も簡単に作れるようになった。それは、カラーコピーの機械の精度の向上と、パソコンのスキャニングの解像度、画像処理が格段と進んだからだ。オンデマンド印刷により、たった一冊の本でも、いまはそう高くなく、注文ができるようになった。

「それだ」と、北村は、商売があまりよくないので、つい悪いことを考えていた。

菅江真澄といえば、天明の頃に津軽を通り道南まで旅をした。紀行文とスケッチを残している。菅江真澄遊覧記として、後にまとめられているが、その原本が、当地の医者が一冊だけ持っていた。その医者と、北村は文学仲間で、親しくさせてもらっていた。一冊というのは、絵入の和本で「外濱奇勝」という。津軽の各地の奇岩、名勝をスケッチしたものだった。歌に詠まれた外が浜が、歌人たちの憧れの地ではあった。

現存が確認されているのが、その一冊よりないとされていた。個人蔵としては珍しい。東北の奇書という本の中にも登場してくる本だ。

北村は、半日でお返しするという約束で、先生からその貴重な和本を借りてきた。それを慎重に、北村はスキャナで画像処理すると、データをパソコンに取り入れた。カラープリンタもいまは、解像度が二四〇〇DPIとかなりよくなっていた。北村は、その使われている美濃紙に近い紙質のものを、紙店の和紙の中から捜した。そして、そのよく似た和紙を使い、原本そっくりにプリントアウトすることに成功した。和綴じの紐までそっくりにし、全く同じものを一冊作り上げた。

それだけでは、紙が新しすぎるので、天日で焼いたり、汚れを自然と出したり、虫食いの跡まで、似たようにくり抜いたりするという小細工までした。

もう、誰の目にもそれは本物であるように見えるだろう。北村は、得意げになって眺めていた。これでも小学校のときは、図工はいつも5だった。手先が器用なので、古本屋になっていなかったら、画家か、すけこましになっていたかもしれない。

蔵書家というのは、人に自慢したがるものだ。密かに高価な本を隠し持っていて、自分ひとりだけで悦に入っているものもいるだろうが、大概は人に話したくてうずうずしている。

その蔵書家が、古書交換会で、三人集まっていた。最近の掘り出し物を見せびらかしに風呂敷包に入れて持ってきていた。何か、隠しているような笑い方で、三人ともご機嫌だった。交換会が終わると、いつも仲のいい老人三人が、料亭の離れで会食をしながら、互いの戦果を報告しあうのだ。

「わたしは、大変なものを手に入れましてな。いままで五十年、蒐集家としていろんな

本を集めてきましたが、これに勝るものはありません」

と、ある老人が云った。すると、別の老人も、風呂敷包を大事そうに抱えながら、「わしも、卒倒するぐらいの奇書を落手した。もう、毎日が興奮して、夜も眠れなかったわい」

もう一人の老人は、もう風呂敷包を解いていた。

「わしのも見てくれ。これは大変な掘り出しものでな。この世に二冊しかないという。いままで、ある医者が一冊だけ持っているというたが、もう一冊が発見されたんじゃない」

三人が、同時に卓の上に出した本は、全く同じ「外濱奇勝」だった。

第871話

蔵書信託

老人は、大病を患って入院したり、手術したりすると、自分の齢というものを認識させられるものらしい。中にはいきなり老け込んでしまうものもある。気持ちのどこかには、まだまだという余裕があったのに、医者にも無理ができないと忠告されて、初めて、自分は年寄りであったことを知るのだ。

いままでは、頑固で、融通の利かない年寄りも、つい気弱になってくる。ひよっとすれば余命幾ばくもないかもしれないのだ。

駒田老人は、そんな病気をしてから、医者にも食事制限もされ、げっぷが出るほどの薬を毎日飲み続けなければならなくなった。いままでは、肉体の衰えなど気にもしないで、若者に負けてたまるかと仕事でも息子たちと張り合ってきたものが、退院して自宅療養してからは、ぼんやりと一抹の不安にかられて涙ぐむこともあった。

老人の心配事がひとつ増えた。それは、いままで六十年をかけて蒐集してきた蔵書の行方だった。息子たちは、ひとりも本も読まない。親父に似たものはいなかった。みんなマンガ本やゲームをやっているか、せいぜいが週刊誌だ。集めたも集めた三万冊の蔵書が十六坪の書庫にぎっしりと詰まっていた。蔵書一代とはいうが、老人が死んだら、きっと、ばあさんと息子たちが結託して、日頃から汚いとか、黴臭いと騒いでいる本なんか、あっさりゴミに出されてしまうのは目に見えていた。

自分の分身、我が子のようにいとおしい蔵書をそんな恐ろしい目に遭わせたくはない。なんとか、人手に渡しても活かしてゆけたらと、いつも考えていた。

それで、図書館に相談に上がった。図書館も最近では寄贈者が爆発的に増えて、困っているようだ。同じ本が五冊も六冊もいらぬのだ。第一、図書館として箱ものだ。収納スペースが限られている。どうも、ありがた迷惑な返事だった。そういえば、図書館も最近では、娯楽的な本が増えた。新刊書店の傾向がそのまま、図書館に移行してもおかしくはない。ベストセラーを市民が求める限り、図書館としてはそちらに予算を割くよりない。結果、貸し出し希望の少ない専門書は、だんだんと購入しなくなり、棚にも古くさい本は並べなくなってゆく。新古本屋が、店の雰囲気壊れるからと、古書を並べないのが、最近の図書館にも見える。

それはさておいて、駒田老人はこまった。それではと、ブックなんとかという大きな全国チェーンの古本屋に相談に行った。

「わしの蔵書をすべて処分しようと思うのだが、一度、見に来てくれまいか」

相手が老人なので、浮かない返事だ。

「コミック本なんかありませんよね」

「そんなもの、わしが読むと思うか、たわけ。白川静が揃っておるし、最近の新しい本もあるぞ。ユルスナールに凝っておってな、レヴィナスやフォーコーは卒業したかの」

若い販売員は何を口走っているのかとんと判らない。それで自宅の方へ見に来たが、どうも買うべき本がない。手ぶらで帰って行った。

頭にきた駒田老人は、蔵書に火を付けて書庫ごと燃やしてしまいたい衝動にかられた。そんなところに、俳句仲間の高谷老人がふらりとやってきた。駒田老人は、事の仔細をつい愚痴ってしまった。

「そんなことですか。わたしなんか、蔵書をすべて北村古書店にお任せいたしました」

「なんと、すべての本をですか」

「そうです。北村くんは知っておられるでしょう。文学サークルで一緒に、色男です。最近、そんな蔵書家のために、蔵書信託をやり始めたのです」

「して、その信託とは？」

北村が考えたのは、行き場のない蔵書をすべて委託で販売するというものだった。ただし、本の値段については、提供者が一冊ずつ付けていただく。店に持ち込んだ蔵書に、すべて登録番号と、持ち主の記号を付けた付箋紙を貼る。それが、店在庫として売られ、インターネットで常時流され、古書目録でも掲載されるというものだ。そして、売れた本の何割かを北村古書店がもらう。販売手数料というわけだ。毎月月末にレジの近くにある箱の中の付箋紙を各信託者別に集計して、精算するというシステムになっている。それは、本人が亡くなった後も、遺族の人に本が有る限り、毎月年金のように払い続けられる。

北村古書店では、十年前からそれを導入して、現在は数人の老人たちが、毎月の売上を楽しみに店にやってくる。しかも、持ち込みも自由なので、読んだ本は、委託として売ってくれるのだ。

北村としても、売れるかどうか判らない在庫を抱える必要もないし、仕入の資金も出たり、在庫として寝せておくこともない。リスクが少ない商売になる。しかも、本に関しては、北村よりもずっとキャリアの長い老人たちだ。よく知っている。

「それだ！」

と駒田老人は膝を叩いた。世の中にはいいところに目をつけるものもいる。駒田老人は、さっそく北村古書店に行ってみることにした。

北村古書店は、店舗というより倉庫に近い。外から中が見えない。何か様子がおかしいと思ったら、窓が殆どないのだった。通りかかった人は、そこが何屋さんか判らない。

駒田老人は、恐る恐るドアを開けてみて驚いた。入口まですでにびっしりと本が並べられている。本棚は迷路のように、広く奥深い倉庫に入り組んでいたし、天井に届くほどの本に圧倒されていた。その本はすべて番号順に並べられているのだった。とても、三万冊の本がこの状態で入るとは思われない。

店主の北村が、げっそりと痩せて出てきた。顔色が悪い。

「北村さんですか。駒田です」

げほげほと北村は咳こみながら、立っているのもようやくのようだ。

「ああ、高谷さんから聞いていました。三万冊の蔵書を処分したいと。残念ながら、わたしも大病を患いまして、店をやってゆくことができなくなりました。神田神保町の古本屋で、古本屋まるごと信託をやってくれるところが出てきまして、そこにお任せすることにしました。げほげほ」

委託でも、もともと本が売れないから、同じことだった。みんな病気だった。売れないことで頭を悩まして、それが病気になる。いまは、マンションもアパートも余っていて、空き部屋を利用する商売も出てきた。蔵書信託はそれに似ていた。

「何かいいアイデアで、本がもっと売れてくれればいいんですがね」

駒田老人も考え込んでいた。すると、北村はけろりと云った。

「簡単なことです。古本を買おうと、藤原紀香がついてくると宣伝すればいいんです」

第872話

人生いろいろ

人生いろいろとあの人云ったお陰で、島倉千代子が困惑しているとか。彼女の再起した思いをこめた歌を汚れた政治の場面で使ってほしくはない。まして、それが今年の流行語大賞にでも選ばれたら、もう島倉はその歌を歌うのはやめるかもしれない。彼女がステージに出て、涙ながらに人生いろいろと歌えば、みんなどっと笑うからだ。もう、恥ずかしくてとても歌えない。

男もいろいろ、女もいろいろ、ウサギだって、亀だっていろいろある。「いろいろあらあな」と、云う言葉は退廃的で、開き直り、どうでもいいように聞こえる。しかし、最近では年金問題、イラクの問題、はては不況で雇用もなく、人生いろいろの時代なのだ。男はリストラでいろいろ、女は過労でいろいろ、ペットにやつあたりするから、ウサギも亀も苛々。

古本屋をやっている北村のところにはいろいろな人が出入りする。最近では、また金に困って、少しでも本を高く買ってもらおうとする客が増えた。時代なのだろう。古本を売って、いくらになるものか。そんな貴重な本でも持ち込めば別だが、きっと高く買ってくれるはずだと、車から降ろすのは、ワイド版の美術全集、全集、百科事典だ。

「これは、まだ見てもいません。ほら、新品同様でしょう。買ったときはボーナスをはいたくらい高かった」と、客が云っても、北村はそんなものはいらぬ。あてが外れて、怒る客、呆れる客。みんな一様に陰で北村の悪口を云っている。

「あの古本屋も全くものを知らないんだよ。こんな豪華な全集を置いていって、全く売り物にならないような、虫の食ったぼろぼろの本ばかり持って行ったんだ」

商売柄、北村は倒産、破産に立ち会う。あるところの奥さんから本を買ったが、相談も受けた。借金で身動きがとれない。売上はガタ減りで、従業員の給与を払ったら、自

分たちの取り分がない。さらに、社長である夫が肺ガンで何度も入退院を繰り返し、仕事ができる体ではない。もう、家にはお金がなくなり、破産をしたくてもできないという。いままで見てきたうちで、一番悲惨なケースだった。つつい高く本を買ってしまう。それもたかが知れている額だから、治療費にもならない。奥さんは、ぼろぼろと涙を流して泣くのだった。

また、こんなのもあった。借金のかたに取ってきたような本をゴミ袋に乱雑に入れて、店に持ち込んだ。見るからにヤーサンだ。

「おい、おっちゃんよ、高こう買うてや。また持ってきてやるさかいに」

ただ、手当たり次第に入れてきた本を見ると、哲学思想、教育学と学校の先生の本のようだ。きっと、高利の闇金の連中か。どうせ、値踏みで文句を云うのは判っていた。かなり安く見積もった。

「なんやと、それだけか。もう少し色つけたらんかい」

「ううん、しょうがありませんな。それじゃ、あと一万円上乘せしましよ」

「そや、話が判るわ」

そう云って、凄味を利かせた兄さんたちは、ほくほく顔で帰っていった。普通の客なら、その倍は払っていた。北村は、それだけの知性と教養があった人でも、借金に手を出すほどの何かがあったのか。身ぐるみはがれた見えない人のことを思うのだ。

一人暮らしの婆さんが、店にひょっこりと顔を出した。

「うちに本が沢山あるんだが、これから来てくれないか」

と、場所を教えに来た。店を一時閉めて、後で、その婆さんの家まで行ってみた。ところが、玄関でいくら叫んでも、婆さんは出てこない。ドアには鍵もかけていない。不用心だが、どうもおかしいと、そのときは帰った。すると、店にまもなく婆さんから電話がきた。

一待っているのに、どうして来ないんだい。

しぶしぶまた出かけた。玄関の表札には間違いがない。ところが、ドアをどんと叩いても、呼んでも、誰も出てこないのだ。あまり煩いので、近所の奥さんが出てきて云った。

「お宅も騙されたのね。ここのお婆さんは変わり者で、あちこちへ、電話をしたりして、からかっているみたいなの。淋しいからなのかねえ。それを楽しんでいるみたいなのよね」

そう云われて、北村は啞然とした。世の中には子供のような婆さんがいるものだ。

古本屋は人の家の奥の奥まで堂々と入れる商売だ。私生活を覗くことができる。あるときは、夜の十時過ぎに来てくれというから、仕事で遅くなる人もいるのだろうと、このこと出かけた。マンションの一室に、女の一人暮らし。年の頃は四十くらいか。何故か、子供や男の臭いのしない部屋だった。後家さんか、お水系の人には見えない、妖艶な感じの人が出てきた。スケスケのネグリジェを着ているので、目のやり場がない。

本をどっさりと部屋の中央に出していた。

「あらっ、古本屋さんて、おじいさんがやっているものと思ったら、あなたのような若い人もやっているのね。いま、おいくつ？ 結婚はしているんでしょう」

と、いろいろとこっちの私生活まで訊いてくる。本の値踏みをしているときに、横に接近してきて、ネグリジェの裾を、痒いところがあるようにたくしあげている。ちらちらと下着が見えて、途中まで数えていた金額が判らなくなる。

「いいわよ、どうせ、読んでしまった本だから、いくらでも。それより、コーヒーがいかしら。ウイスキーもあるわよ」

と、妙に挑発してくる。

「いやあ、車ですから、それに、これからひと仕事ありますんで」

と、北村は代金を精算すると、本を車に積んで、そそくさと逃げ帰ってきた。人生色々である。

第873話

ユビキタスホーム

朝、爽やかなモーツアルトのK 3 3 1のピアノソナタが流れてくる。昨日はちゃんちきおけさだった。目覚ましの曲が毎日変わる。音楽が止むと、ベッドが起きあがってくる仕掛けになっている。辺見さんではないが、自動起床装置が働くのだ。専業主婦の伊藤さんは、別に起きる必要はないのだが、一応、夫を会社に見送らねばならない。

洗面所に入る。美容院のような椅子があり、その上にフードがかぶさっている。伊藤さんが、椅子に座り、フードをかぶせると、スチームが出て、髪と顔に潤いを与え、車を洗淨するように洗顔してくれる。口を開けると、歯も磨いてくれる。髪も素早くお好みにセットして、着替えた服は、洗濯機。それもすべて全自動で、乾燥までするのは従来と同じだが、アイロンをかけたようにしわ伸ばしまでしてくれる。

夫も起きてきた。朝ご飯は、洋定食と和定食を選べる調理マシンにタイマーでいつもセットしているので、伊藤さんは原料だけ機械の上から入れておくだけでいい。今朝は、夫の好みに洋にした。分厚いトーストが焼き上がり、スクランブルエッグにベーコン、カフェオレがトレーに並べられてテーブルの上に出ていた。

テレビの巨大なスクリーンに、送信されてきたウェブニュースが出てくる。丁寧に、音声でリアルタイムの情報を解説しながらスクロールしてくれる。必要な箇所はあらかじめマクロ機能で命令しているので、夫の趣味である文学関係の記事は、切り取りコピーされ、フォルダに自動的に保存されているのだ。奥さんの好みはダイエットだから、そのキーワードですべての関連記事を自動保存してくれる。後でゆつくりと読むことが

できる。

家の中の電化製品は、ホストコンピュータと繋がっており、センサーがすべてについていて、それがブロードバンド回線でスピーディに情報を伝達、家事やセキュリティなどを機械がこなしてゆく。

電灯は暗くなれば点くようになっているが、それも必要なところだけだ。人がいない部屋は自然と消えている。省エネが徹底されている。冷蔵庫の中も、先入れ先出し法が徹底されて、常に原料のロスがないように、音声で賞味期限も警告してくれる。

毎日の献立もすべてお好みで選択したメニューで組み込まれているから、必要な原料が、スーパーにメールでオーダーされている。家庭内に必要な消耗品はうっかり切らすこともない。機械が残量を知り、やはりメールで注文してくれるので、スーパーから毎日のように配達されてくる。その支払も、ホームバンキングで、ネット銀行の口座から引き落とされるのだ。

伊藤さんは、原料や消耗品をただ、各機械の中に入れるだけでいい。調理マシンのマエストロは、原料を刻んだり、皮を剥いたり、煮たり焼いたり味付けをしたりで、ちゃんとレストランのように綺麗に皿に盛りつけて出てくる。

台所というものが巨大なロボットがあるだけで、従来の流しだとか、ガスコンロというものが無い。すべて一体型に組み込まれ、洗い物までしてくれるから、主婦の手を煩わせるものは殆どないのだった。

部屋という部屋はお掃除ロボットが掃いて拭いてと、プログラムがセットされているから、黙っていても定刻になれば作動することになっている。だから、昔は午前中は主婦は忙しかったものが、午後でもいつでもすることがない。一日中、することがないのでベッドで寝ながらマルチチャンネルのテレビばかり見ていた。主婦という主婦がズボラになり、日がな寝てばかりいるから、日本全国、寝たきり主婦ができあがっていた。起きるのも面倒だ。

やがて、主婦は掃除の仕方料理の仕方すべてを忘れて、家のことが何も判らなくなっていた。

ある日、台風で大停電になった。停電はまもなく復旧したが、光ファイバーケーブルが寸断されて、中央からの情報が途絶えたばかりか、家庭内の回線も正常に作用しなくなり、大変なことになっていた。データはすべて消去され、プログラムは狂った。電灯は昼でも点いて、お掃除ロボットは外を走り回る。マエストロのロボットは、カレーライスの上に納豆をかけ、その上にさらにホイップクリームをデコレーションしていた。夫が会社から帰ってきて、玄関のドアが開かない。顔や指紋で、センサーが家族身内を判断して解錠するのが、

「アタタハドナタデス？ セールスナラオ断リデス。帰ッテクダサイ。」

と、セキュリティシステムまでが誤作動を起こしていた。伊藤さんは、ベッドがマッサージをして、起きあがったり、寝せたり、大音響で音楽を鳴らしたり、

「助けてー」と悲鳴を上げていた。

洗濯ロボットからは煙が出ていた。それを感知した監視ロボットが、現場に急行し、

異常を知らせる。

一 火事デス。大至急通報イタシマス。コチラハ遙団地ノ伊藤トイイマス。親子井三ツオ願イシマース。

伊藤さんのケイタイに近所の主婦たちから電話が入った。

一 電気釜も処分してしまったから、鍋でご飯を炊こうと思うんだけど、どこまで水を入れたらいいの？

一 さあ、わたしも忘れちゃったわ。手の魚の目、タコまでじゃなかったかしら。

一 わたし、手にはそんなものないけど、足にはあるわ。

一 それじゃ、足を突っ込んで水を入れてみたら？

また別の主婦から伊藤さんに電話だ。

一 缶詰が出てきたけど、これってどうやって開けるの？

一 じゃがいもの皮が剥けないの。

一 庖丁とまな板貸してくれない？

街中の家庭が大混乱に陥っていた。世の中便利になりすぎると、いまさら昔には戻れない。

第874話

回帰現象

いまは和ブームだという。別に世の中が右傾化してきたから、国粋主義者が増えたというわけでもない。ファッションでも食生活でもインテリアでも、洋に飽きた若い人の目に、昔の和装が新鮮に映っただけのことだ。

ジーンズの上に着物をざっくりと着て、それを洒落たベルトで締めたりと、和魂洋才、またその逆もあり、街は異様な雰囲気にも包まれていた。

下着メーカーが、そんなブームを見逃すはずはない。各社が新商品を出した。

一 そよ風を腰元に、フンドC。

一 まだトランクスですか？ 男らしさはフンデーションから。

と、なんと懐古趣味がとうとうふんどしまで来ていた。じいさんたちが昔はいていたただのふんどしというのでは、現代の若者たちにアピールしない。それを現代風なネーミングとデザインに変えることによって、よりファッション性を高めた。

いまや、ショッピングセンターの男性下着売場には、懐かしい越中が、ひらひらとぶら下がっていた。赤ふんもある。サイズもいろいろ。六尺と云ってもピンとこないから、LL、L、M、Sとあり、ナニの大きさをサイズを変える。

天野さんも、流行に遅れまいと、エッチュウなるものを買いに来っていた。だが、若者たちのファッションになっていたのも、五十過ぎたおじさんには照れもある。また、その売場が女性販売員であるのは恥ずかしい。

「お客さまは、サイズのほうは……」

と、天野さんの下半身に販売員の目がちらりに行く。ズボンの盛り上がりからしか判断はできない。まさか、サイズをお測りいたしますので、と云うわけにもゆかない。トップとアンダーの差で、カップの大きさを決めるブラジャーのようにもゆかない。なにせ相手は大きさだけでなく、長さ、右向き左向きとぐにゃぐにゃな収まりの悪いものだからだ。

「Sでよろしいですね」

と、販売員が云うから、天野さん、男の見栄もあり、ムツとした。

「LLにしてください」

と怒ったように云った。すると、販売員は平然とした顔で云った。

「失礼ですが、LLですと、おズボンの下からひらひらとはみでますが」

「それが格好いいのだ。いまはわざとパンツを見せる時代なのだ。シミチヨ口結構。はははは」

と、笑ってみたものの、がふがふだと締めが悪く、脇からぶらぶらしないかと心配だ。

橋本さんも、同じショップのランジェリー・ファンデーションコーナーをうろうろしていた。従来のショーツなどはもう古い。やはりこの売場でも、いま流行なのが腰巻きだった。これとて、単に湯文字と云っても、ピンとこないから、若い女性にアピールするように商標を変えた。

ー胸騒ぎの腰つき、それはパスワード。

ーヤマトナデシコはレッドゾーン。

売場には、赤やピンクの腰巻きがひらひらとぶら下がっていた。昔のままの腰巻きでは受けないから、夏向きには派手なTシャツのような絵柄がプリントされていたし、キュートな感じでは、フリルの付いたもの、アニメキャラのものまである。何も知らない若い人たちは、それが下着だと思わないで、いま流行りにジーンズの上にはいたりしていた。婆さんたちは、堂々と腰巻きをスカートみたいに外に出している格好を見て笑うこと。

橋本さんは勇気を出して、腰巻きにしようと思った。若い子たちに混じって、気後れはしたが、たまたま居合わせた風晴さんの奥さんも選んでいたのもので、

「あら、よかったわ。あなたも腰巻きを？」と少し安心して選んでいた。

「そうなのよ。、これって、下に何もはかないのよね」

ガードの堅い女性たちには少し抵抗がある。でも、流行には遅れたくない。夏は風通しがいいかもしれないと、つつい買ってしまった。

天野さんが、買い物を終えて、自転車で帰ろうとしたら、同じ会社の同僚の田村さんが、粋な着物姿でふらりと歩いていた。

「よう、休みの日は、いつも着物かい」と、天野さんが声をかける。

「最近、着物に凝っていてな。紺もまた涼しいし、下駄もいいものだよ」

周りを見渡すと、着物姿の男女が結構歩いている。

「だんだんと、江戸時代に戻ってゆくのかな。江戸情緒もいいよなあ」

と、天野さんも着物にしたいと思った。

すると、突然、キエーという奇声が聞こえた。裸足で、腰に麻の布だけ巻いている、どこかで見たことのある男が走り回っていた。その姿に、橋本さんも風晴さんも我が目を疑った。天野さんも指さして、戦いた。

「あれあれ、あ、あいつは会社の北村じゃねえか」

田村は知っていたようだ。

「そうなんだ、いまや、江戸時代でも古いんだ。あいつのは縄文時代なんだよな」

流行はいまやそこまで遡るか。

第875話

台風一過

すべてが誤解だった。気持ちが噛み合わない。嫁姑という永遠の仇敵は、真夜中のもの凄い喧嘩で爆発した。風速五十メートルはあった。家が揺れた。

何が起こったのか一瞬のできごとで、気が付いたら、女房子供がいない。荷物をまとめて出て行った。性格の不一致というのは、夫婦間だけではない。別に恨むようなことではないが、積もり積もっていた。世間にはよくあることで、珍しいことではない。

台風が行った後は、必ず暑くなった。その朝、わたしは、車で仕事に出かけるときに、北海道に抜けようとする台風の尻尾を見た。どろどろと渦巻いて、列島を駆け抜ける魔女の後ろ姿にも思えた。

それでも暴風圏内であろうか、まだ風は樹木を震わせる。午後になって、青空が見えると気温が上昇してきていた。黙っていてもじっとりと汗ばむ。わたしはジャケットを脱いでTシャツ一枚になった。

新しくマンションを借りた。婆さんが嫁の顔も見たくないということもある。かかりつけの病院が近いというところで、家まで売らせて引っ越した。すべてが自分のためであった。老人のエゴが家族まで崩壊させる。

いまの家の近くにも病院はある。だが、すべて信頼おける医者でなければならない。年寄りには、なにもかもが行きつけのところでなければ不安になる心理があるようだ。郵便局も銀行も病院も、だから変えようとしな。遠くへ引っ越しても、わざわざそこまでバスを乗り継いでも行こうとする。

「どこでも同じだろうが」と、わたしは云うのだが、

「いや、国道支店の銀行は、わしの顔を知っていて、親切にしてくれるんだ」

とじいさんも云う。パーマはどここの先生でなければならない。薬を買うのはどここの店と、すべて決まっているようで、それだからいま、住んでいる海辺の温泉街は

何をするにしても遠くて不便だ。保守的で、我が儘が、だんだんと酷くなってくるのだ。

「わたしや、嫁に負けたよ。悔しいね。いまは、姑が嫁に出されるんだね」

婆さんは毎日毎日、そんな呪いの言葉を吐き続ける。

「老人を粗末にする家はダメだね、老人は大切にするものだ」

そう、本人が云っている。それにも限界というものがある。

同人仲間の本間さんのお父さんは、寺の住職で、御年八十二になられる。いつだったか、知人の通夜に行ったとき、その席で、こんなことを云った。

「最近の新聞でも、老人の虐待とか、そういった施設での行為が問題になっておりますが、わたしも年寄りだから云うのでありますが、ときには虐待と捉えられることもしたくなります。ボケた老人たちと一日中つきあってみてごらん下さい。同じことを何度も何度もしますし、云います。してはならないことも子供のようにしますので、つい叩いたりして注意もするでしょう。老人の相手をするというのは根気のいるものです。その当事者でなければ判らないものがあります」

それを聞いて、わたしは頷いていた。

大正生まれの戦前育ちと、平成に生まれた孫とでは、全く生活も価値観も違いすぎる。それが同居となると、老人にとってはおかしい生活に見えてくる。

わざと穴の空いたジーパンをはいていること、朝ご飯を食べないこと、髪を染めること、日常の挨拶のないこと、口の利き方、高校生で化粧をしていること、ケイタイの請求金額が高いこと、夜中まで起きていること、朝シャンをしていること、そういったことのすべてが気に入らない。それは母親の躰が悪いとなる。

「いまは、それが普通なんですから」と、弁護しようものなら、

「何が普通だ。おかしいことはおかしいではないか。世の中が狂っているんだ」

同じことを何度も云うのに、孫になれば、うるさいので、

「あ、それ十三回聞いた」と、ちゃんと数えているようにぴしゃりと云う。同じ質問が何度もあれば、最初のうちは答えていても、だんだんと相手にしたくなくなる。終いには、壊れた人間を相手に、まともに同情したり、思いやりをもった接し方という寛容な気持ちもなくなり、苛々してきて、耳も塞ぎたくなる。誰でも、三百六十五日、毎日云われたら、それは拷問のようで苦痛になるものだ。

老人の悪いところは、自分がボケているというのを認識しないところにある。それだから、嫁が、

「何度も聞きました」と、云おうものなら、

「なんだよ、その云い方。云った覚えはないよ。反抗的な」と、シルバーハラスメントと思うのだ。

加えて、うちの婆さんの精神的病のパニック障害だ。それとても毎日のように擬似心臓発作がくるのだから、本人は騒ぐが、周りは至って日常的なことで、冷静だ。相手にしていない。すると、また婆さんは怒るのだ。

「いたわりの気持ちもなく、冷たい家族だ。こんな家にいたら殺される」と、被害妄想

に雇ってくる。優しい言葉がけが嘘でも、毎日十年間も、そんな演技ができるはずがない。こっちがおかしくなってくる。

妹とつい先日も親のことで話した。女の姉妹は三人いたが、あとの二人は遠方なので、同じ街に嫁いだ妹が、たまに親の病院通いを手伝ったりしていた。妹のところにも目の見えない義母がいるから、そっちのほうが大変だった。それに比べれば、立って歩いてゆけるうちの親はまだいい方なのだが、頑固で我が儘は扱いにくい。

「いっそ、死んでくれたらと思うときもあるよ」と、わたしは禁句を口にした。だが、まだまだ我が家は老人問題の入口なのだ。これから、寝たきりになったり、完全な痴呆になったり、徘徊したりするようになれば、さらに地獄が始まる。

出て行った嫁からケイタイに電話がかかってきた。ゆうべは、行くところがないから、スーパーの駐車場で車の中で子供と寝たという。土日は八戸の実家に帰るが、子供の学校もある。引っ越しまであと五日。それまで、どこかに緊急避難させなければならない。親戚のアパートに空室があるから、そこに日曜の夜から厄介になることにした。

仕事場の窓を開けた。気温は三十度近くはあるだろう。暑くなってきた。六月は、人が一番狂う月だという。台風が行った後、不快な湿気が充満しているようであった。

第876話

出張販売

わたしの家は代々の商人の家であった。それが明治に入ってからには菓業になっていた。屋号は近江屋である。全国津々浦々にある近江商人の末裔なのだ。

わたしの曾祖父は明治二年に生まれたが、六代目近江屋忠兵衛を名乗っていた。襲名というのは、そこで終わった。あまりにも穀潰しが多かったので、縁起が悪いと嫌われたものか、親父の亡き兄が忠の字を付けていたが、忠一といい、その最後のひとりとなった。

近江屋は南部八戸藩の歴史に出てくる。三店のひとつとして栄えた商家だった。ときの町の半分近くを牛耳っていたあまり、財閥解体の憂き目に遭った、あの七崎屋と並ぶほどというから、よほど悪いことを積み重ねてきたのだろう。そのときの恨み辛みが、いま、わたしたちの上にも業として災いを招いているような気がする。

元々、盛岡南部藩の御用達の海産物問屋であった。盛岡の願教寺の住職が八戸二万石の小藩に移ってきたとき、一緒に来たようだ。八戸の本覚寺に、無縁仏になっていた墓石があった。墓の礎石に近江屋忠兵衛の文字が微かに見え、家紋の蔭蔦が刻まれてある。その墓石は、母が捜してきて、いまは我が家の墓に移されている。

映画監督の川島雄三の家も近江屋忠兵衛を名乗っていたというから、むつ市の川島さ

んの身内に訊いたことがあった。すると、やはり同じ八戸の出身だということで、繋がっていた。

その近江商人の血が騒ぐからではないが、わたしは一カ所に何年も住んではいけない性質だった。いま住んでいるところが一番長く十二年。今度引っ越しをするのが数えたら十七回目になる。五十三年の歳で割ると、三年ごとに引っ越ししている勘定になる。

いまのようなデスクワークの多い、店や机に縛り付けられた仕事は、本当は一番嫌いなのだ。どちらかという、行商が好きだった。津村節子の小説に、夫婦で北海道を行商するペーソス溢れる作品があったが、それを真似るように、前の菓業でも、北海道各地のショッピングセンターを一週間単位で催事で歩いたことがあった。帯広、釧路、江別、旭川と、その町の安い商人宿に投宿しながら、商品を売り歩くというのが性に合っている。

いまの古本屋になっても、たびたびいろんなところから頼まれると、車に本を満載して、各地の行事につきあうのが好きだった。古書組合の合同催事で、デパートでやるのもよかったが、暇でコーヒーとタバコばかりで、商売にならなくてやめてしまった。活気があって忙しくなくてはならない。

昭和大仏の門前市がスタートした当初から参加していた。さも、寺から古い本が出てきたように、ワゴンの上に和綴本を並べて、手を叩きながら売ったりしていた。バナナの叩き売りのように古本を売るのが好きであった。ねじり鉢巻に胴巻き、古本売りの口上もそのうち作らねばと思っていた。

駅前商店街のフリマにも、宵宮にも出た。昔は、宵宮には古本屋が結構出ている。電灯の明かりの下で古本を売っていると、立ち止まり本を選ぶ客たちは、裸電球に翳すようにして、本のページをめくっていた。

フリーマーケットはいまでこそ、日曜には必ずどこかでやっているほどで、目新しくなくなったが、十年以上も前は、どこかの会館を借りたりして、いろんな業種が集まったのフリマにうちも古本や中古ゲームを並べて参加したが、当時はよく客が来て売れた。六尺台が十五本となると、一人では見てもらえないから、家族総出でやったことがある。小学生のチビから年寄りまで連れて行った。みんな万引きをされないように、見張りもしたし、半日でかなりの客があり、またよく売れた。店の三日分を五時間くらいで売ってしまうのだ。そんな忙しい中で、じいさんだけは全然役に立たず、椅子に座って黙々と本を読んでいるのだった。

そのフリマが三時に終わると、わたしたち家族は上がりでファミレスに寄って遅い昼食を食べた。それが子供たちには駄賃だった。

だんだんと、外でも本が売れなくなった。それで、頼まれても出張販売はしなくなった。

ただ、今日は友人の会に頼まれて、どうせ売れないと思いつつ、久しぶりに露天で古本を売った。ショッピングセンターの駐車場で、捨て犬や捨て猫の里親探しの保護団体の主催によるフリマだった。日曜の朝からダンボール箱に本を詰めて、並べた。椅子を

持っていったから、座って本を読む。実演販売だから、本を読む男を見かけると、ああ、おれも本を読みたくなったと思う人はいないのだった。ただ、客が寄りつかない。みんな、着るものや玩具みたいなものにささって、古本屋は実に世間の日陰者であった。売上を犬猫の餌代に寄付するチャリティであったが、半日で売上はなんとたったの三百円。読んだ本は十四冊。

本はどこに持っていっても、見捨てられて相手にされなくなっていた。だが、店の中でも客が来ないから、同じことで、まだこうして、外の空気を吸って、日焼けしたほうが健康的だと思った。今度やるときは、日焼けオイルを上半身に塗って、パンツ一枚になって肌を焼こう。ついで、缶ビールなんかいいな。バーベキューのコンロも持ち込んで、牛肉をタレつけて焼いて食べる。本を仕事中に堂々と好きなだけ読める。それもいいな。

何を考えているのだから古本屋。

第877話

セドリ日記

セドリとは、古本屋に行って、バカ安く値付けした本を抜いてくることを云う。本屋がやる時もあれば、それを専門に商売にして、別の古本屋に売りにゆくものがやる時もある。神田の古書専門街でセドリは難しいが、地方の小さな古本屋や、最近の大手チェーンは狙い目であった。

梶山季之の小説にもセドリ男爵が登場する一作がある。セドリ屋で全国を回っている目利きはいくらでもいるだろう。うまくゆけば、それだけで飯が食え、全国古本屋行脚ができるのだ。だいたい、何も知らないばあさんのやっている店を覗き、店頭の一均一で、中には一冊数万円の値が付く古書をたったの五十円で手に入れることもできるというもの。一度でもそんな思いをすると、その醍醐味が忘れられない。パチンコで大儲けしたり、競馬で大穴を当てたときと同じ心境で、五十円を出す手まで震えてくる。そして、まるで万引きでもしたかのように、一目散に本を手には逃げるのだ。そんなドキドキする気持ちが古本屋にはある。

わたしも、元々が古本屋が好きで始めた商売だ。この商売に入る前は、古本屋の熱烈な客であった。旅行であちこちへ行っても、必ず古本屋を捜して入ろうとする。

「お父さん、やめてよ、また本ばかりだから」

女房も子供たちもせっかくの旅行中でも古本屋に入り浸るので不満だった。仕事でひとりで出かけるときは、古本屋回りの時間も作る。毎年出している全国古書店地図はあまり見ないようにしている。大方、組合に入っている仲間の店なので、みんなベテラン揃い。掘り出し物など期待薄なのだ。それより、ある町に着くと、真っ先にタウンページで古本の欄を見て、知られていない小さな古本屋に電話をすると、そこに向かう。時

間があれば、その古本屋でまた近くの古本屋を訊いて回った。

いつも大漁というわけではない。わざわざでかけてきて、坊主のときもあるし、ダンボール箱でいくつにもなり、宅配便で送らせることもあった。

パチプロが箱に足をかけて玉を積み上げているのと同じで、大手チェーンの古本屋がオープンすると、箱でいくつも買ってゆくのは大概古本屋のセドリだ。いい本ばかり百円の棚から抜かれるので、残った本はカスばかりになる。すると後で来た客には全く魅力がなくなるというので、ようやく気が付いた大手さんも、店頭に張り紙をするようになった。

『同業者お断り』

わたしはそれでも平然と入ってゆく。一度、おばさんたちに睨まれて、「あなた、古本屋さんじゃないでしょうね。最近、ごっそりと買ってゆく古本屋がいると問題になっているから」

と、疑われたことがあった。

「いいえ、とんでもない。わたしはポルノ小説家です。おばさんたちのような美しい中年の女性を浮気に走らせる危険な小説を書いています」

「あら、そうかい。一度読ませてくれないかい、ふふふふ」

とかなんとかごまかしてみたりした。

あるときは、大手のブックなんとかで、本をスーパー籠二つに山積みしているところへ、そこの店長と本部の偉いさんが来て、

「林語堂さんですよ」と、声を掛けられた。ドキリとした。もう素性がバレている。まるで刑事に職務質問されている指名手配の犯人の気持ちだった。

「どんな本が売れるのか、教えていただけませんか」

と、籠の中の本をまじまじと見て、

「こんな本が売れるんですか」

と、訊かれるのも恥ずかしい。まるで盗品の品定めをされているようで。

「いやあ、自分の好みですから。あてが外れる場合が多いですよ」

わたしは汗をかいていた。面が割れているのは、少し前に地元のテレビ局で、新しい古本屋さん昔の古本屋さんという特集を組んで、取材に来たことがあった。汚い店を映すというので、わたしはアルバイトにも頼み、二人で二日かけて普段は整理もしていない店の掃除までした。そして、取材のアナウンサーとカメラが入ると、わたしはわざと正直商売と染め抜かれた藍の前タレをかけて、テレビに登場したのだ。明治の教科書を見せて解説したりしていた。

新しい古本屋では、そのブックなんとかの店長が出て、取材に応じていた。だからお互いの顔が判ってしまったのだ。

それでも共存共栄、互いにやっていることは違うのだから、受け入れられる。向こうは若い客を相手にし、新しい本ばかり扱う。こちらは老人相手に古い本ばかり扱う。ちゃんと棲み分けがされている。

最近面白いところはリサイクルセンターだ。引っ越しのときにいらぬ家具と本も持ってくる。本は買うというよりただで持ってくるのだから、どこも安く均一で売っていたりする。ごちゃごちゃと電化製品や食器などが並んでいる中に本が無造作に置かれている。その中から掘り出し物が出てくる。

ところが敵もさるもの、みんながそうして安い買い物をしていると、だんだんとどんな本が売れるかということを経験するわけで、次に行ったときは、

「郷土史料は高いから千円均一です」と、どっと上げてきた。

「はあ、そうですか」と、二度と行かない。千円でも安い本は抜き取られると、玉石混淆の石だけになってしまう。

いまは、インターネットで本の相場がすぐ判る。情報がどんな片田舎の古本屋でも一目で判るようになったから、そのうち全国のどんな小さな古本屋でも値段については神田と同じ、横並びになってしまうかもしれない。そうなったら、金太郎飴だ。全然面白くない。

やはり古本屋というのは、わたしのようにどこか抜けているほうが客としてはいい。ただ、あまり抜けすぎているとバカにされる。その折り合いが難しい。

第878話

梅雨の明けない夏

いつまでもぐずぐすと雨ばかり降っていたかと思うと、はっきりとしない鬱陶しい日が続いた。雨降って地崩れる。

姑に叩き出された嫁は、子供を連れて行くところがない。とりあえず、避難場所が必要だった。親戚でアパートを経営している仲がいいのがいるから、電話で頼んだ。部屋は二つ空いていた。そのアパートというのは、二十年前に、やはり前妻をおふくろが嫌い、一緒には住めないからと、実家を出たわたしたち夫婦がチビ三人を連れて、暮らした部屋だった。何か因果がありそうだ。

おふくろは、わたしが連れてくる嫁はすべからく気に入らないようだ。それはそうだ、全く反対の性格の女性を好んだからだ。合うはずがない。

「おまえの連れてくる女はみんな同じだね」と。おふくろはよく口にした。ひとり息子にやきもちだろうか。不気味な感じがした。

車で仕事場にやってきた女房と連れ子は、何か痩せたような気がした。ともかくも、車二台でアパートへと向かう。アパートは市内の平和公園に面した環境のいいところにある。アパートのすぐ近くに、保育園が見えた。そこに三男がまだ小さいときに預けた。古本屋をやり始めた頃で、アパートから歩いてゆけるところに五坪の小さな店をやっていた。

すべてが懐かしい。二十年経つと、周りもマンションだらけになって変わっていた。アパートも外装、内装ともに新しくして、間取りは一緒だったが、明るくなった。わたしは、郵便受に隠した鍵で、ドアに空室という看板の貼ってあるドアを開けた。

風呂なんかは、前は寒々としていたが、ユニットバスにしていたし、納戸も洗面所に改装し、昔の面影は柱や鴨居だけであった。台所も狭く感じた。下に居間と台所があった。二階は和室が三つ。上がってみると、わたしが二十年前に書斎にしていた四畳半がそのままあった。

「いやあ、懐かしい。この部屋の天井まで四面本でぎっしりだった。重みで床が下がったと、大家の親戚が云っていた」

窓を開けると、隣は広い空き地であったが、いまはアパートばかりが建て込んでいた。

「いいところだろう。ここで五日間だけ我慢して暮らすんだね。来月になったら、親は引っ越して家は空になる。そうしたら帰れるから」

病院が遠いというので老父母を連れて、わたしも街中に引っ越す。そんな矢先におふくろは何かが乗り移ったように、嫁を追い出した。いままでが平穏な日々でありすぎた。今年は何もない年なのかなと思っていたが、後半は大変な動乱を迎えていた。

車に密かに積んできた蒲団もおろした。ゆうべから何も食べていないというので、わ

たしの車で郊外の寿司屋に連れて行った。

「さあ、何でも食べなさい」と、云うが、どうも食欲もないようだ。胸がつかえて食べ物が通らない。

近くのホームセンターに行って、当分使うものも買ってやった。五日間とはいえ、石鹸も洗剤も、タオルも必要だ。着のみ着のまま家を真夜中に飛び出してきた。学校の制服と勉強道具だけは持ってきていた。

「あなたと離婚して母子家庭になれば、学校の授業料は免除になるのかしら」と、いまからそんな心配をしている。

二十年前と同じ不安な気分で、同じアパートの部屋にいた。何もないがらんとした部屋だ。わたしは、あまり遅くならないうちに、家に帰ることにした。引っ越しの用意もある。それより、おふくろが主婦の座を奪って待っているのだ。気が重い。なににつけても鬱陶しい。不快指数は百を超えて窒息しそうだった。

わたしは、今日、介護関係の本を図書館からごっそりと借りてきていた。その中に一冊、『老親を捨てられますか』というタイトルの本が入っていた。

親はだんだんと歩行困難になってくるだろう。子供も何もない部屋でうずくまってパンを嚙っている。どちらも不憫だった。

だが、いまのわたしは、冷酷に答えられる。そのどっちも捨てられると。

雨だけが女の恨みがましい涙のように降っていた。わたしはどちらも信じない。女の涙の嘘つきなのはよく知っていた。騙されてはいけない。騙されては。

第879話

戦争の影

沖縄の終戦記念日の六月下旬を過ぎた。沖縄本島を米軍が掌握した日とされているが、一部では九月下旬まで戦闘が続いていた。洞窟での最後の抵抗が、日本の敗戦後も続いていたのである。飢えと病気と追いつめられた死の恐怖で、自決することなく戦い続けた半年は、日本軍の最後の一発の反撃が、火焰放射器で焼かれて終わる。

どんな家にも身内に戦死者がいたりする。仏壇の上に遺影が飾られ、軍服を着た青年の顔が見える。わたしの家でも、叔父が沖縄で戦死している。さらに、母方の叔父では、ニューギニアでひとり、満州でひとり戦死していた。出征した叔父と父と五人のうち、三人が帰らぬ人となっているのだ。父は運のよい人で、部隊が全滅したときも、ひとり行軍からはぐれて助かっていたし、足に弾が当たり、傷痍軍人として一時帰国していた。終戦のときは、千五百名の靖国隊というソ連国境での肉弾攻撃の部隊にいて、ソ連の戦車に爆弾を抱えて自爆するという作戦の中、や隊、す隊、く隊、に隊と四つの隊のうち、最後のに隊の攻撃半ば、五十人になったときに終戦となり、ソ連によって武装解

除され命拾いしていた。

母の兄は、田辺中将の家に養子となって行ったので、召集されたが、弘前の部隊に特別に配属されて、前線に行くことはなかった。将校の親戚は優遇されていた証拠だった。

我が家のことを考えただけでも、戦争に行くということは、確実に死ぬということ、遺影が物語るのである。

いまだ沖縄が日本に復帰していない外国であった頃に、亡き祖父は慰霊祭に出席するために沖縄に行っている。太三造叔父は父のすぐ下の弟で、父とは仲がよかった。遺影を見ると俳優の篠田三郎の若いときにそっくりで、なかなかの美男子であった。許嫁がいたが、あと一週間後に挙式という段取りの中で召集令状を受け取った。初めは中支に配属されたが、沖縄に転戦配属を命じられたのは、すでに南島が間近まで占領され、玉砕につぐ玉砕で、B29が本土を空襲していた昭和二十年に入ってからだった。沖縄に転戦を命じられたことは身内の者でも知らなかった。手紙という通信手段はすでに遮断されて、家族は、叔父がどこでどう戦っていたかも判らないのだ。

戦死したか生きているかも判らないまま、行方不明のまま家族は敗戦後も、ただひたすら帰りを待ち続けた。二十年代は、引き揚げの年で、いきなりひょっこりと戻ってくる兵隊もいた。

だが、太三造叔父の場合は、昭和二十七年に、政府の方から、一通の通知が来て、沖縄で戦死したことを知るのだ。その一枚の簡単な報告書には、五月一日と、亡くなった日だけが記されていた。それも真偽は判らない。たまたま所属していた部隊が、米軍の激しい攻撃を受けて、全滅した日なのだそうだ。それが五月一日という、実にいい加減で、まだ生きていたかもしれないし、その前に死んだかもしれない。戦死したところを目撃したり、生き残った人がいちいち覚えていることは不可能で、叔父のように戦死者というのは、祥月命日は不明の者が多いのではないか。どこでどう死んだか、何年の何月何日に死んだか、どんな死に方をしたのかも判らない。だから、戦死者には年忌がないことがある。

母のすぐ上の兄は、年が近いこともあって、母と仲がよかった。勉兄といい、青森中学でも優等だった。ギターを弾くのが趣味であった。飛行機乗りになりたかったが、視力で試験は落とされた。それでも夢を諦めきれずに、名古屋の飛行機製作所に勤めるほどだった。勉伯父の遺影をみると、わたしとそっくりである。母は生まれ変わりではないかと、よく話した。

召集されてからは、中支にいたのは判っていた。母は、慰問袋を勉叔父の部隊に送っている。今度、結婚することになった人ですと、父との写真を一緒に送ったが、後で、写真だけは返送されてきた。自分はこれからどうなるか判らない、大事な写真だから粗末にするわけにはゆかないと、手紙も添えてあった。

勉伯父がニューギニアで戦死したという通知も、敗戦後しばらくしてから、一通の通知で家族は知らされた。三千人の守備隊のうち、運良く生き残って帰国したたった十六人の中に、たまたま勉伯父と同郷だという後潟の方がいた。家族はずっと後になって、

その方の存在を知ると、家まで訪ねて行って、勉伯父が飢えと病気で死んだことを知らされた。よく津軽弁で話もしたという。

生還した人は、蠢く虫でもなんでも喰えるものはすべて喰ってきたと重い口を開いた。人の肉まで喰ったところまでは語らない。思い出したくもないだろう。

その人は、数年前に藤田美栄さんを団長とする、慰霊団でニューギニアに行ってきたが、ジャングルの奥地で、とても普通の人は入り込めないところだった。やむなく飛行機を飛ばして、空の上から激戦地を見ようとしたが、あいにく雲がかかって見えなかったという。

遺骨収集団が、アジア各地に行くのをみても、いまだに浮かばれないしゃれこうべが無数に散乱したまま放置されているのだ。戦後六十年近く経ってもあの悲惨な太平洋戦争の傷は癒えない。それなのに、まだ歴史的にも喉元も過ぎていないときに、第九条を改悪し、イラクに自衛隊が多国籍軍として戦闘に参加するまでとなった。

まだ終わっていないのに、また次が始まろうとしているのか。

戦争を知らない世代が大半になった。わたしたちは、街を歩いている、その影を見つけることはできない。ただ、仏壇の引き出しに蔵ってある茶封筒の手紙と、若くりりしい遺影だけが、いつも何かを伝えようとして無言を保っているだけであった。

第880話

ホームレス家族

家族が解体していた。嫁姑戦争は、ついに決裂し、老人たちが家を出ることで決着するのかと思っていたら、そんなふうにはスムーズにはゆかなかった。老人は最期の逆襲に出た。「このまま、出てゆくだけでは腹の虫が納まらない」とばかり、嫁たちをも道づれに出してしまった。話は複雑になってきていた。

妻の元子と高校の娘、中学の息子は家にも帰れず、ついにホームレスになっていた。それではあまりにも可哀想と、夫の拓也は親戚のアパートの空き部屋に緊急避難させたのだが……。

「困ったことになったよ」と、拓也のところに親戚の大家がやってきた。二日間、アパートに棲ませたのは、不動産屋にも周囲の住民にも、大家の家族にも内緒だったのである。それが、当然バレる。空き部屋とドアに大きな看板がついているのに、夜中に電灯が点いている。怪しんだ住民が、

「誰か、夜中に入りこんでいたずらしている」と、通報する。大家の女房は、旦那を問い詰めた。

「どうしたのよ。何があったのよ。あなた、わたしに内緒で、愛人を傍で囲おうって魂胆じゃないの？」

「そんな、同じ囲うなら、こんな目と鼻の先で囲うか」

アパートは大家の家の敷地にあった。

「でも、判らないわよ。灯台下暗しということもあるもの。あなたのことだから」

大家の女房は前科のある旦那を疑った。

「よせよ、子連れで困るかよ。それに、拓也の家族だぜ」

「だから、何があったのか教えてら？」

大家は暗い顔で、拓也に話していた。

「ということなんだ。悪いが、今夜、どこかへ移ってくれないか」

いよいよ、行くところがなくなった。アドレス帳を開きながら、あれこれと考えた。ホテルに家族でとも思ったが、教育上よくない。いまからそんなところに入出入りするのを実施で教えてなんになる。

かといって、ちゃんとした旅館は高くつく。あと少しなんだがと、思案に暮れていた。新しく老人と拓也が引っ越すためのマンションは借りていた。一日から入れるが、と、ぼんやりと考えていた。

「そうだ、親が引っ越すのが一日だ、ということは、それまではこっそりと暮らしていれば判らないか」

お互いに顔を合わせないようにするには、一日に自宅とマンションをそれぞれ引っ越せばいいのだ。電気もガスも一日から使うように連絡してあるから、真っ暗な部屋では可哀想だと、ホームセンターに行って、キャンプ用のランタンを買ってきた。ラジオくらいなければ退屈だろう。大家の気持ちがよく判る。わたしも家族とはいえ、何か愛人一家を困っている心境になっていた。

少しボケたじいさんが、

「元子たちはどこにいるんだ？」

と拓也に訊くので、

「うん、棲むところがないから、ダンボール箱の中で寝ているんだ」

と、拓也はけろりと答える。

「食べるものはどうしているんだ？」

「うん、その辺の道に落ちているものとか、生ゴミなんか拾って食べているらしいよ」

と、冗談を云っても通じない。

「そうか、不憫だな」と、本気にしている。

拓也は文学サークルのサロンがあって、その夜は忙しい。途中で会を抜けて、アパートへと駆けつけた。部屋の中の蒲団やテレビをまた車に積んだ。子供たちはうんざりしている。元子も今回のことではいい薬になったろう。棲む家があるということが、どんなにありがたいことかということ。

引越しまであと二日。マンションの方に、またこっそりと入る。もし、不動産屋に見つかったら、掃除をしていると云おう。そう拓也は考えていた。

元子はいつもの迫力もなく、神妙になっていた。それぐらいが丁度いい。いつものおらしいほうがいいと、拓也は内心ほくそえんでいた。

我儘な子供たちも素直に云うことをきく。それでいい。

マンションはがらんとしている。何もない部屋に一家が寝るのだ。遅い晩飯に、近くのスーパーから弁当とジュースなどを買ってきてやる。

文学仲間からケイタイに連絡が入った。どここのスナックで飲んでいるからと。拓也は娘の自転車にまたがって、スナックへと走った。自宅は少し遠いから、飲んだときは、終電で帰らないといけなかった。終電は二十二時七分だ。みんなが、これから飲むというときに、拓也はいつも先に帰っていた。今度からはそれがない。午前様になってもいい。とことんつきあえる。マンションは街中にあった。

「大変だな」と、仲間が口々に云う。

「これからは、本宅と別宅を行ったり来たりしなけりゃならん」

老人だけではどこも貸さないから、拓也の名義で借りたマンションだ。これからは、週に五日は老人介護のために、お三度もする。そして、後の二日は女房子供と。

「また、小説が書けるな」と、仲間が云うから、拓也は頭を抑えて云った。

「悲惨なネタはもういいよ。もっと笑えるネタがないものか」

周囲は深刻なのに、この男、すべて活字にして笑おうとしているのだった。とんでもないやつだった。

さて、居場所のない元子たちもどうにか引越しの日まで滑り込みだ。このドタバタ喜劇、これからどうなってゆくのか。

第881話

気楽な家業

古本屋になろうとしたわけではなかった。飯を食うために古本屋しかできなかったのだ。家業が破産して、すべてを持ってゆかれたが、蔵書だけは残っていた。どうやって明日から食ってゆこうかというときに、命から二番目に大事な蔵書売ることを思いついた。「わたしは何番目なのよ」と女房が訊くから、指折り数えてみたが、十指にも入らなかった。まあ、中には命より大事と思っている人もいるくらいだから、二番目というのはまだいいほうかもしれない。

古本屋は若いときから好きであった。大学が神田にあったので、講義のないときは、暇潰しによく神保町の古書街を毎日のようにほっつき歩いて、覗いていた。店頭の一冊でも買う金がなかった学生であったから、ただ、その雰囲気に触れるだけで充分と合わせであった。

毎日、駿河台下の交差点から古書街を一軒づつ歩いていると、どこの店のどの棚にどの全集ものがあるか判ってきた。それが売れたか売れないかも気になっていた。欲しいくせに高くて買えないものだから、売れないでほしいと願ったりした。いまに見ている、社会人になってサラリーを貰ったら、きっと買いにくるからなと、本を仇のように思

っていた。古本屋周りは、社会に出てからも続いていた。そうして、少しずつ買いあさった古書で自分の部屋が埋まって、どうにもならなくなったときに、倒産の憂き目に遭い、思い切って手放すことにしたのだ。趣味と実益というのは滅多に一致しないものだが、古本屋になろうと思い立ったら、いままで、いろんな町の古本屋を回って買い集めていたことが、店に居ながらできるということに、非常な満足を感じた。しかも、店で買うよりずっと安くお客から買える。自分の読みたい本が、営業として手に入ると、わたしは、古本屋を始めても、まだ客の気持ちでいた。

それで、女房に五坪の小さな店舗を借りて、古本屋を始めたときも、自分の読みたい本が入ってくると、帳場の後ろの棚に本を積んでおき、夜に勤めから帰ると、女房と店番を代わり、その本をずっと読み続けていた。そこは、わたしの書斎だった。自分の書斎ごと売ったのだから、売りにたくない本も売れるが、欲しかった本も入ってくる。ただ、古本屋になってからは、大事に本をとっておくことはしなくなった。読んだらすべて売る。

客が、じっとわたしの後ろの棚を見て、

「ご主人、あの本はいつ頃読み終えるんですかな」と、読み終えるのを待っている人もいた。それでは商売にならない。古本屋は本を集めるのはいいが、売り惜しんではいけない。それからは、読みたい本は図書館へ行って借りることにし、入荷した本は次ぎつぎに売ることにした。

家業の破産事件もかたづき、わたしは古本屋に本格的に座ることとなった。もう一店を出して、夫婦で二店を切り回した。まだ、インターネットだ、目録だと面倒なこともないときだった。また、そんな通販をしなくとも、店でも充分本は売れた。大型店もまだなかった時代だ。好きな本を一日中、読んでいて、それで収入があれば、これは最高の仕事だった。しかも、あまり頻繁にお客の来ない日中は、ぽかぽかと陽気がいいと、うつらうつらと帳場に坐ったまま、昼寝もできた。客に起こされて初めて気がついた。した。

常連の客が来たら、碁盤を出して、囲碁もできる。客と本の話をしながらか、お茶を入れて飲んだり、ときにはサイホンでコーヒーを入れたりした。

暑い日の午後は、近くの酒屋に走って、冷えた缶ビールを買ってきて、親しい客と営業中に飲んだりしていた。もう、自営業は気楽なもので、何をしても自由に許される。

読書に飽きたら、エロ本を眺めたり、マンガ本を見たりしていた。そして、机に原稿用紙を置いて、客のいないときには、作家の真似事で、ヘタな小説なんか書いたりしていた。

帳場には、小型のテレビもステレオもあり、番組を見たり、音楽を聴いて、録音したりしていた。自分の趣味を仕事場に座っていながら、すべて満喫することができた。

誰もいない暇なときには音楽に合わせて大声で歌を歌ってもよかった。ただ、そんなときに、店の見えない本棚の陰からいきなり拍手が起こったことがあった。なんと、いないと思っていた客がいて、手を叩いていた。顔が赤くなった。

本に囲まれて仕事ができる。誰にも束縛されることなく、時間も気にすることもない

。たまに入った本を拭いて、値付けをするぐらいが仕事で、あとは、ゆっくりのんびりと、読書三昧の生活。まさしく、理想的な仕事だった。いままで、あくせくと働いてきたことが嘘のようであった。

ところが世の中はそうはうまくゆかないのが常であった。

店にある日突然電話が来る。女性の声だ。

「なんとか信販ですが、カード代金が口座振替ができなかったので、早急に銀行から振り込んでください。

レジにも通帳にも金がない。わたしは焦った。そこへ、電力会社の集金人。

「二か月分溜まっているんですが」

事務用品の間屋も集金にくる。電話料金は明日まで払わなければ止められる。子供が学校から諸費袋を持ってくる。重なるときには重なるものだ。

「ばかやろう。坐って、本を読んでいるときじゃねえ」と、わたしは自戒する。こんな楽な商売で、売れて笑いが止まらないというものがあつたら教えてもらいたいものだ。

だが、どうせ売れない古本屋。手はいくらでもある。わたしは、急遽、シャッターを下ろして臨時休業にする。こんなときは居留守に限る。自営業はときに自衛業になる。

第882話

共存共栄

ひとつの町に専門店がオープンする。それが小さい店であれば町の経済に与える影響というのは少ない。ところが、最近では、全国的なフランチャイズチェーンが、駐車場付きで、売場面積もかなり広く、どかんとやってくる。人口一人当たりの売場面積が他の市町村と比べてどれほどなのかが、問題になってくる。この地方都市では、ショッピングセンターが出すぎて、商圈人口も減ってきているときに、既存店も売上が落ち込み、全店が赤字転落してしまった。電器店にしてもそうで、大きい店が次々に出店してきて、連日のチラシ合戦。どここの店よりも安いという触れ込みで、価格競争をするものだから、潰れる店が続出した。残っている店も勝ったわけではない。儲けの少ない喧嘩をして、痛手を受けていた。売場面積を逆に減らし、人員整理までしているのが目に見えていた。

古本屋も近頃の大手チェーンが、この北国の人口二十八万の市にも続々と支店を出してきた。いままでは小さな古本屋が四、五店が細々と営んでいたのが、その既存店の売場面積を足したよりも大きなのがどーんと出てきた。みんな、スーパーが倒産したりした空き店舗を借りて出てくるので、二百、三百坪はある。その競合店が、地方でも負け

まいと、近くに大きく店を出す。気がついたら、北村古書店の周囲は、マンモス古本チェーンに取り囲まれていた。

敵の店は、本の値打ち云々という商売はしない。目利きで、この道何年という経験と勘がなければできない古本屋のやり方を根底から崩した。昨日入ったアルバイトでも、本なんか読んだことのない若者でも、マニュアルに則って、すぐに入入れができる。十年以上も経った本は原則的には買わない。本の良し悪しは、ただ、綺麗であること、新しいことであるという基準で判断するというものだ。北村の店で千円している本でも、そこに行くと、百円だったりする。新しい本は半額、古くなれば百円に落とす。

そんな店が出てきてからは、顔を出さなくなった客が多い。北村古書店でも客を取られた。あおりをくって、小さな古書店が、ここ数年でバタバタと店仕舞いをした。古書組合では、死活問題だと、ブックなんとかを目の仇にして、ただ、何もできないから遠吠えしていた。そんな大手チェーンでは貴重な本がただ古いという理由でゴミに捨てられている。それを憎憎しいとまた問題視する。

だが、ここにきて、大手も赤字転落していった。不採算店舗を閉鎖していった。何事も増えすぎていいことはない。スーパーや大型専門店と同じで、パイが少なくなると、経営が成り立たない。

北村の加盟している古書組合の県の総会で、古本屋の親父たちが、みんな困った顔をしていた。大手のブックなんとかは、すべて非組合員であり、加盟していないのだ。従って、業界としての繋がりがまるでない。

「ブックなんとかが、経営難で大変だそうだ。このままでは、この町から撤退するしかないという噂だ」

組合の支部長は、現状報告をしていた。

「なんとかならんものかな」

「なんとか、潰れないように、みんなで支えられないかな」

そんな声が組合員の中から出た。

「ファンクラブを作って、会員を増やしてあげるとか」

「町に雇用のための補助金を出してもらえるように、市民から署名を集めるとか」

「とにかく、潰れてもらっては困るのだ」

なんと、話が逆になっていた。

「今月で、店を閉店すると紙を貼りだしていたな」

「なんだと？ そんなことはさせられるか」

「許されないことだ」

「どうだろう。みんなして、閉店を阻止するよう、実力行使に出ないか」

「どうするんだ？」

「組合の旗を持って、ブックなんとかの前で座り込みをやるとか」

「向こうの社長に嘆願書を組合の名で提出するとか」

「なんとか、みんなの力で、ブックなんとかを守ろうではないか」

「そうだ、そうだ」

客を取られて、従来の古本屋には、買いにも来なくなったのに、なんと心優しい古本屋の親父たちであったか。古本屋たちにはもうひとつの悩みがあった。客が売りにもこなくなった。みんな、大手の店に売りにゆく。それも問題であったのだが。

ある日、古本屋の親父たちは、鉢巻をして、旗を持ち、ブックなんとかの店頭に集まっていた。

「われわれの愛すべき店を閉めるなー」

「閉めるなー」と、シュプレヒコールを繰り返していた。

「この町からブックなんとかの灯を消すなー」

「消すなー」

この騒ぎを聞きつけて、マスコミが取材に来た。組合の支部長がインタビューを受けていた。

「普通なら、出店阻止するところですが、どうしてこんな不可思議な挙行に出たんでしょうか。この店はあなた方には敵の店でしょう」

すると、支部長はきっぱりと云い切った。

「店を閉められると、仕入れ先がなくなる」

なんとも情けない。

第883話

新しい生活

旭町、そこがわたしたちの引っ越した町だった。昔は遊郭であった。戦後は赤線になった。いかがわしい旅館の跡がいまも残っている。つい数十年前まで、そこには遊郭の廃墟が建っていた。わたしは、その傾き、朽ち果てた洒落た屋根と造りの木造家屋が壊されるのを見ていたことがあった。なんとも古風な大きな建物で、時代の怨念と迫力にみちみちていた。

その建物の破壊現場に立ち会って、何かとても恐ろしいものが壊れてゆくように、言葉も失って立ちつくしていた。

町は変わる。国鉄の操作場も使われなくなったから、公園になっていた。鉄道の枕木を使ったタール色の柵もいまは見あたらない。だけど、戦災で焼けた線路の向こうの旧市街は近代的に生まれ変わり、また、この線路際の旭町から郊外に向かうと、それはそれで新興住宅街とショッピングセンターと、新しい町が広がっていた。

この旭町は、いわば官庁と商店街の旧市街と新市街に挟まれた取り残された町であった。古い建物が多い。閉めたままの飲み屋街や、やっていないような連れ込み旅館が亡霊のように建っていた。

わたしが若い頃に、スナックで暖簾まで吞んでいると、そこのホステスが青線のようなことをやっていた。わたしの腕を放さないで、この旭町辺りまで連れてくるのだった

。こっちも相当酔っていた。寿司屋で二人で少し腹を満たすと、時計はもう二時を過ぎていた。

「あんた、泊まってゆこう。お金、ある？」

と、訊いてきた。その要求で、わたしの酔いはすーっと醒めてきた。そして、改めて女を見ると、わたしよりは年増で、ちっとも綺麗ではない。肉感的ではあったが、どうも遊び相手にはなりそうにもない。

いまでは、郊外や海手にいくらでもホテルがあるが、その頃はまだ連れ込み旅館であり、逆さくらげと云われていた。そして、そうした場所がいまはうらぶれたこの限界であった。

わたしが、この町に引っ越してきたのは、何か自分の書くものとの因縁がありそうだった。年老いた親父は、偏見があるのか、初めてこの町のマンションを見に来たときは、嫌な顔をしていた。時代の流れで歴史の上にまた別の歴史が建てられて、町はそのうちどんどんと生き物のようにならなくなってゆくのだろう。

本宅には、学校がある子供と女房は残してきた。娘が高校で、そのことを友達に話すと、

「それって、別居っていうのよ」と、云われたようで、知らなかったと驚いていた。週に二日は本宅に帰る。そんな二重生活が始まる。別に夫婦間には何もないから、年寄りの病院が近くなっただけの引っ越しだった。

わたしの引っ越し荷造りは三十分もかからない。もともと私物は少ない。着替えは衣装ケース一個、机とノートパソコンとステレオ、それだけだ。自分のワゴン車で足りる量だった。

ところが老父母の荷物はいままでの生活戦後五十年の累積である。じいさんの荷物といったら、背広五十着、ネクタイ三百本、流行遅れの細いのから幅広まで、かつて女性に贈られたものか、捨てられないでとってある。洋服なんかサイズもあるから、身内へのお下がりもできない。それに、アルバムが平積みして天井まで届く山が三つもある。若いときからカメラが趣味だったので、ひたすら撮りまくったのが、ネガだけでもすごい。どうするつもりなのか。

ばあさんも、勿体ないとなんでも捨てないから、増える一方。その二人分だけで大型トラック一杯になった。引っ越したマンションは3DKだから、よく入った。

北海道の姉とこちらに住む妹が手伝いにきた。バタバタと二日で荷物を出してしまう。そして、次の日からは普通の新居での生活が始まった。その中で、わたしはやはり本を読み、パソコンを叩き、音楽を聴くといった生活パターンは変わらない。たとえ、天変地異が起ころうと、それで天地がひっくり返ろうが、わたしは、逆さになっても黙々と本を読んでいるに違いない。

本宅に家具や電化製品は置いてきたので、新しく買った。まるで親子の新婚生活のようだった。独身時代のように、またわたしは台所に立った。妹は、遠くからそんな兄の姿を見て、可哀想と一言云った。

マンションから仕事場まで歩いてきっかり五分半。東北本線の線路の下を潜るトンネルを抜けて、旧市街へと出ると、すぐに店があった。便利にはなった。前のようにスーパーまで車で十分も走らなくても、歩いてすぐにスーパーはあり、コンビニもある。病院も、飲み屋も近い。青森駅までも歩いて十分の距離だった。

そこは、老父母にしては新しくも終の棲家になるかもしれない。わたしにとっては、まだまだ途中下車。あれほど嫌った町に、また戻ってきていた。

そこからは海が見えない。山が見えない。そして、家族が見えない。

いつか、わたしは親孝行のふりをする男娼になっているような。

第884話

結婚は人生の墓場だ

金柳妃は、考え方のしっかりしている朴正範と見合いをした。正範は、三十を過ぎたばかりで青年実業家。小さいが会社を経営しているから堅実で、先の見通しも人生計画もきちんと計算されているところが、なんとも安心できる人という印象を柳妃に与えた。

それだけでなく、両親が三年前に事故で亡くなったという苦難も乗り越え、その若さで自分の住むところを買ってあり、一生どころか、子々孫々まで入れる住まいを作ったと聞いていた。

「こちらが正範さんです」

「こちらは柳妃さんね」

見合いの席で、世話をした親戚の叔母はチョゴリで正装していた。柳妃は短大を出て、現代自動車に勤務していた、普通のOLだった。正範は、品定めをするようにまじまじと凝視するのは失礼かと、爽やかな視線をテーブルの上のくちなしに向けていた。

「わたしたちはお邪魔でしょうから、退席いたしますから、お二人でごゆっくりね」

と、柳妃の叔母と正範の友人がくすりと笑って場を離れた。

「ああ、いい匂いがすると思ったら、この花でしたか」

正範は鼻を近づけて陶醉した顔をした。

「あら、朴さんって、ロマンチストなんですね」

貴公子のような上品な目鼻立ちに、細い眼鏡をかけているのは、大ブレイクしたドラマの主役に似ていた。

「そんなに云われたことはないですね。ぼくは、白が好きなんです。白には色彩がないから、自由に心の中で描ける。洋服にしても、その人の素地としての純粹さがある。白

い花が、甘く香るのが多いのを知っていますか？」

柳妃は遠くを見るように目を細めた。

「そう云われれば、そうかもしれません。自分を主張しないことが、香りで知らせるんですね」

「そうです。それは、たとえば、あなたのようにね」

柳妃は赤くなった。控えめな女性は韓国でも珍しくなってきた。柳妃は古風な家族関係の中に育ち、奥ゆかしさを身につけている正範の理想の女性に近かった。

「わたしは、いままで、官吏の娘として育ちました。父が転勤すれば、わたしたち家族も一緒について引っ越しでした。いつも、庭つきの家に住んでいる人を羨んでいましたわ。官舎は、たいていマンションでしたもの。小さいときから、転校ばかりで、定住したいといつも望んでおりました。ですから、結婚したら、生涯を愛する人と、ひとつの町で、ずっと暮らしていたいというのが、わたしの夢でした」

柳妃は目を輝かせて話した。正範は、微笑みながら聞いていた。

「なんだ、そんな簡単な夢でしたか。ぼくは、ぼくのこれからの子孫が代々住むことのできるひとつの家を考え、いまはそれに住んでいます。これからのぼくの子供たちは、そこで生まれ、そこで死ぬ。もうどこにも行くことがない。家族はいつも一緒だというのが、ぼくの哲学なんです」

柳妃は、この人は、どこかに秘めた思想を持っている、そんな気がしていた。この人なら、一生添い遂げられるかもしれない。自分の理想にも近いしっかりとした生活観がある。人生をふらふらするような人ではない。それは、住まいに対する考え方で判る。柳妃の結婚の意志は次第に正範の方へと傾いていった。

二人は何回かの交際の末にゴールインすることとなった。いつも、デイトは高級なレストランやホテルであり、正範がひとりで暮らしているという家には行ったことがなかった。それは、花嫁を迎えるためにとってあるという。すべて家具もあるから、柳妃には、身ひとつで来てくれと正範はいつも云っていた。きっと、ブルジョアだから、家具調度品はなんでも揃っているのだろう。

柳妃は、何か自分が選ばれた幸運な娘に思えた。二人きりで、甘い生活ができる。誰にも邪魔はされない。しかも、小さいときから転居ばかりしてきたが、今度は文字通り永久就職だ。安定した生活が得られる。

挙式が済み、簡単な披露宴が会社関係者を集めて行われると、二人はハネムーンにヨーロッパにでかけた。でかけた後に、正範をよく知る者は、柳妃の不幸を哀れんだ。

「何も知らないで、嫁に行くなんて、どうも、世の女性たちは美男子と金には弱いらしい」

二人が新婚旅行から戻ると、いよいよ新しい生活の場へと案内された。柳妃はわくわくした。どんな家なのだろうか。生まれて死ぬまで住んでいられて、子供たちや孫までが、ずっと住み続けられる家というのは。

やがて、高級外車が、鉄柵の扉を開けて、中に静かに入った。十字架が、広い庭園に

いくつも立っていた。その中で、とりわけ大きなカタコンブのある大理石で作られた立派な墓があった。

「ここだよ。ぼくたちの新居だ」

正範は、石の扉を開けて、階段を地下室へと下りてゆくと、そこには両親の棺が安置されていた。そして、真新しい二つの棺の蓋が開けられていた。

「さあ、ここがぼくたちのベッドだ。ここなら、安心して死ぬこともできるし、何百年でもいてもいいんだよ」

第885話

畳の上で死にたい

畳の上で死にたい。そう考えるのは、現代人には判らない。昔の人は、たとえば戦争だ。どこで弾に当たって死ぬかもしれない。武士もそうだった。路上で斬り死にするかもしれない。

現代でも、道端に花が添えられていれば、そこで交通事故で悲惨な死に方をした犠牲者を思わずにいられない。最近はまだ、世の中は物騒で、いつ暴漢に殺されるか判らない。金目当てだけではない。通り魔のように、無意味に殺人を楽しむ狂人もいるのだ。

事故も怖い災害も怖い。いつ大地震が起こるか判らない。突然に津波や崖崩れに襲われ、あっというまに巨大な力で命を落とすことになるかもしれない。

考えてみれば、危険はいつもどこにでも隣り合わせであるもので、畳の上で死ぬというのが、だんだんと難しい時代が来るかもしれない。

小心者の相沢秀夫は、いつもびくびくしていた。五十過ぎて、周りの人間が、事故や自殺で次々に無惨な死を遂げるのを見るにつけ、いつかは自分の番がくる、だが、どうせ死ぬのなら、畳の上で死にたいと願うようになっていた。

友人の木村は、どこでどう死のうが死んだ人間には判らない。そこまで考えるのは杞憂というものだ。ばからしいと嗤う。

「おれなら、旅の途上でのたれ死にたいよ。たとえ、余命幾ばくもないと云われても、病院にも自宅の部屋にもいねえ。ふらりと死出の旅に行く。おれは、死神が来るのを待つよりは、旅先で歩いてことりとこと切りたいね」

考え方が皆違うから、家族に看取られて死にたいとか、腹上死したいとか、いろいろと自分の最後を考えるのは当然だ。

「でもな、おまえのように、畳の上で調子よく死ぬというわけには行かないのが人生だ。だいたいだが、人の死ぬ場所というのは、救急車の中であったり、病院の手術室であったり、道を歩いていて、脳溢血で倒れたり、心臓発作でばたりと逝ったりな、うまいぐあいには行かないもんだ」

木村の云うように、そうそう畳なんかあるものか。と、木村に名案が浮かんだ。

「あるある、そうだよ。畳の上で死ぬ方法を思いついた」

「なんだ、あるのか、そんな方法」

木村は、相沢に耳うちした。

翌日から、相沢秀夫は、毎日、背中に畳を背負うようにして出勤した。満員の地下鉄では、乗客に文句を云われた。

「なんだよ、非常識でないか。こんなところに畳を背負っているやつがいる」

会社の上司にも云われた。

「相沢くん、何の真似だ。その畳は何とかならんのか」

女子事務員たちもくすくす嗤う。

でも、相沢がその畳を背中にくくりつけてからは、実にそれが快適なことに気が付いた。疲れてくると、どこでも寝ることができる。立ち上がるコツさえ掴んだら、どこでも昼寝ができるし、横になることができるのだ。

体の半分を防御してくれるから、背中からいきなりブスリとやられても軽傷で済むかもしれない。車がぶつかっても、平気だったりする。不便なのは、トイレに入ったり、タクシーには乗れないことだった。多少の不便には目を瞑っても、その安心感には何か、自分が蝸牛になったような気がしていた。畳イコール自分の部屋をいつも背中に感じて、とてもアットホームな毎日だ。

相沢は営業をしていたが、すぐに名前も顔も覚えられるという利点もあった。

「そりゃそうだな、この都会で、いろんな変わり者がいるが、畳を背負っているのは、あいつぐらいだろう」

取引先は、相沢と対応すると、不思議といつも契約をしたり注文をしたりする。というのも、異常な行動が怖かったのである。断れば何をされるかしれたものではない。追い払うように、注文してしまうのだった。

成績が上がったから、会社の上司は何も云わなくなった。総務部長も彼には注意ができない。サービス規程のどこにも、畳を背負って会社に来てはならないとはひとつも書いていないのだった。

相沢秀夫は、木村と退社後に呑んでいた。

「おまえのお陰で、おれは自信ができてきた」と、木村はビールを呷っていた。

「中世の騎士が鎧を付けた気分だな。いいアイデアだよ。これなら、どこでどう倒れても畳の上で死ぬるからな。おまえには感謝しているよ」

木村は、嗤いを堪えていた。

「まあ、おまえは、昔からマイホーム型の人間だったからな。病院で死ぬよりは家で死にたいのだろう」

「そうだな、いまから家族には云ってある。おれがアルツハイマーになったりボケたりしても施設にだけは入れるなよって。もしも、不治の病に冒されても、おれは家で死にたい。それができないときのために、せめて畳だな」

どうしても拘るやつだった。

相沢は、木村と別れて、酔ったままふらふらと狭い路地を歩いていた。そこに突然曲がってきた車がぶつかると、相沢はその場に倒れた。車は畳の上に乗るかかって走り去った。運転手はバックミラーを見ながら呟いた。

「誰だ、こんな小路に畳を立てかけておいたやつは」

憐れにも、相沢は畳の下で死んでいた。

第886話

朝日のあたらぬ家

いつかはそんなときがやって来るとは思っていた。判っていたこととはいえ、それが現実のものとなって、わたしの肩や背中におぶさってくる時、わたしはどこにも行けない束縛と重みを感じ始めていた。

祖父母の通う病院の近い旭町に引っ越してきて、一週間が経っていた。その町が見捨てられた遊郭の跡であったことは書いた。その町の雰囲気は好きであった。国鉄の操場という、昔は煙っぽいところが、なんとなく旅と隣合わせで暮らしているような。

そして、マンションから、表通りに出ると、寂れた商店街があった。トンネルができる前は、開かずの踏切として有名だった。市の郊外に通ずる幹線道路であり、道の両側には商店がずらりと並び、通行人も多かった。どの店も繁盛していたのだが、トンネルのおかげで、両側の商店は死んでしまっていた。いまは、シャッター商店街であり、そこにへばりつくようにして支店を構えている信用金庫に入っても、客はひとりもいない。実に悲哀に満ちた町に、わたしは嫌悪することなく、何かわたしたちが住むには相応しい町のような気がした。

わたしは、少年の頃に聴いたアニマルズの「朝日のあたる家」を口づさんでいた。それは、ニューオーリンズのRising Sunという名の売春宿に棲む奈落の底の少女を歌ったものだった。薄倅の少女が全裸で横たわる建物には、まだ日が昇るといふ希望の名が付いていた。

今度、誕生日がくると米寿を迎える親父は、ここ数年で崩れるように年老いた。あれほど健脚で、万歩計をいつも持って歩き、一里の道のりなら、バスに乗ることなく歩いていた人が、脚が痛むと訴えて、やがてあまり遠くへは歩けなくなっていた。食べるものも、少食で、偏食。外食に連れて行っても、一人前は多すぎた。半分あれば足りた。

だんだんと枯れてくるように骨と皮になってくる。梅干しばかり食べるので、梅干し爺になるよとわたしは冗談を云った。

それでも健康なのだろう。一日二合の酒を二時間かけて舐めるようにして晩酌をやる。煙草は一日ひと箱に減ったといってもひと箱だ。ただ、何かを訊いても、一瞬、空白の時間があるようになった。質問の意味が判らない。マダラボケなのだが、人がどのようにしてボケてゆくのかということ、親父を見ながらわたしは日々記録していた。いずれ、自分にもそんな日が来るのだ。

若いときのことだけは、いつまでも忘れないらしく、満州で暮らしていたときの満語で老夫婦が会話をしている。ニーデ、トントンデワンラとかなんとか話して笑っていた。シベリアのラーゲリに三年抑留されていたから、ロシア語も出てきたりする。五十年、六十年昔のことはよく覚えているのだが、さっき薬を飲んだことはすっかりと忘れていた。

祖父のことを思えば、ボケの進行というのは、あつという間だろう。個人差はあろう

が、一年、二年といわれたい。

親父より四つ下のおふくろも、記憶力はしっかりしているつもりが、躁病的なボケ方をしている。本人はボケていないと想っているから始末が悪い。あまり体を動かさないから、あちこちが動かなくなっている。

「外を歩かなきゃ、歩けなくなってしまうよ」と、できるだけ外に連れだす。早くから寝たきりになってもらったら、困るのはこっちだ。できるだけ、介護はしたくない。死ぬならポックリと突然逝ってもらいたい。

「大丈夫だよ。じいさんをひとり残しては死なないから」と、おふくろは云うが、わたしの希望としては、どっちもひとり残ってほしくはない。逝くときは、夫婦仲良く一緒に逝ってもらいたい。そんなにうまく行くはずもないが。

洗濯ものを干すことも、蒲団の上げ下げもできなくなっていたから、洗濯機は、最新式の全自動乾燥洗濯機にした。ただ、スイッチなどのボタンを三箇所以上押すとすると、もう判らない。おふくろは、クラシック音楽を聴くのが好きだから、わたしのステレオの使い方を説明したが、後で、入れたMDだかというものが、入ったきり出てこない、諦めていた。変に庖丁で壊して出されても困る。

蒲団も、ベッドにしてやった。以前は畳の上に敷きっぱなしだから、湿気で畳が黴ていた。折りたたみ式のベッドにしたから、掃除もしやすい。客が来たときは、部屋も広くなる。

風呂が少し縁が高いのが気にかかった。跨いで入るのは年寄りは大変だろう。案の定、風呂でよろけて倒れる音がした。親父はあちこちにぶつかっているようで、痛いと訴えていた。それでも、杖は使わない。まだ、そこまでは頑固に二人とも認めたがらないのだ。補聴器は電話もとれないので、説得して付けさせた。だが、電話に出ると話がとんちんかんになり、この前も、まだ生きている人を殺してしまった。たまたま知人のおばあちゃんから電話で知らせてきたのだが、亡くなったのはその人の連れ合いではなかった。

「年取ると、よくなるものは何ひとつない。みんな弱ってくるんだ」と、親父は判っているようなことを云うが、毎日、何回もそれを云う。そんな親父をバカにするようにおふくろは、

「耳も遠くなるし、頭も遠くなって」と、笑う。

笑っているうちはいい。そのうち笑えなくなるほど深刻になったら、わたし一人ではどうにもならないから、そのときは、ディサービスとかヘルパーさんとかの世話になるのだろう。

毎朝、マンションを出るときに、晩御飯の支度もしてゆく。お昼は電子レンジで解凍して食べられるお惣菜がいつも入っている。あと、十数年が勝負だった。これは長期戦になるだろう。うちは長生きの家系だから、それだけは覚悟してはならない。

旭町という町名には、明るい響きがあったが、すでに町は日は翳ってきていた。新しく引っ越してきた町の、ここは、朝日があたらない家だった。傾いた夕日だけが、いつまでも長い影を落としていた。

第887話

ペットブームの陰で

ペットブームは過熱していた。異常と思えるほどだ。ショッピングセンター、ホームセンターのペットコーナーの広さと客の賑わいを見ると判る。ペット様の玩具やおやつコーナーまである。洋服からアクセサリ、成人病予防のダイエット食品までとなると、人間と同じだった。ペットも贅沢な暮らしをして、いいものばかり食べていて、運動不足、ストレスも溜まるから、人間と同じ成人病になるという。

ペットと旅行ができるために、最近は、ペットも一緒に泊まれるホテルというのも、各地にできた。ペットお断りでは商売にならない。如何に、そんな客を取り込むかと、各業界も生き残りのためには、ペット同伴でどうぞと受け入れ体勢を整えた。

ペットのための病院も大繁盛だ。旅行へ行くときにペットを預る専用ホテルもどんな市にもできた。ペットの美容院、ペットのお風呂もちゃんと専門の店がある。またそんな仕事をするための専門学校まであるのだ。

まだまだ驚くことはある。ペットのための火葬車もある。ライトバンに窯を積んで、お客の家に行って、ペットの火葬、葬儀一切をやる。そして、墓地までであるという。ひょっとして、戒名なんかも付けるのか。

そこまで行くと、気遣いだ。みんな狂っている。

そのペットブームの陰では、年間、推定で四十五万匹のペットが保健所で始末されているという。一度に猫なんかは七匹とか生む。引き取り手がなければ、保健所に持ち込む。年老いた犬や、病気の犬、中には、もう飽きたからと、持ち込む。持ち込まれないペットはどこかへ捨てられて野生化したり、交通事故に遭ったり、他の動物に食われたりしているのだ。保健所は野犬狩りにも忙しい。

だが、この数字は、保健所だけの数字であり、飼い主の手で密かに始末されているのも多い。ある国立大学の研究所では、年間三千匹の動物たちが実験のために殺されている。ひとつの大学でその数だ。それらの動物たちは、ちゃんと売る業者がいるのだ。保健所から回してもらうものもあるという。

海外から高く売れるというので、フィリピンあたりからも、ごっそりとペットたちが運ばれてくる。日本はいまや、ペットの大輸入国でもある。

大学の研究をしている教授から聞いた話だが、実験の終わった小動物は掌で握って、親指で首をこきんと折って殺すのだそうだ。

そんな数だけの問題ではないが、見えないところで始末されている動物も入れれば、年間百万頭はくだらないだろう。一日三千頭の動物たちが、日本のどこかで殺されてい

るのだ。

北国保健所の所長の敦賀は、年々増えてくる処分に頭にきていた。人間どもの慰安のために利用するだけ利用したら、あとは殺してくれだ。それが、役所の仕事と殺戮を押し付けるのが当たり前の感覚になってきていた。厭な仕事は行政でやり、自分たちはただ可愛がっていただいい。

敦賀所長は、なんとか処分する犬猫を減らす方法はないかと、毎日考えていた。

イラクでの戦争の残虐さを映画にしたら、ベトナム戦争のときのようにアメリカ国内にも反戦ムードが出てきていた。そんな新聞記事を読んで、敦賀所長は、あることを思いついた。世間は表向き、綺麗で正しいことに体裁が保たれているが、その実、裏では相当汚いことが平然と行われているのだ。戦争もそうだ。生々しいシーンは報道もされない。だから、人が死ぬということが、見えないところで行われている。

「それだ、よし、世間がなんと云おうと、わたしはやる。やってやるぞ」

もともと動物好きの所長は、自分の仕事とはいえ、残酷なことをしていることが許せなかった。いまの浮薄な時代、命をもてあそぶ時代も許せなかった。それで、とうとう怒りも頂点に達していた。

数日すると、保健所の道路に面した前庭に動物たちの檻がずらりと並べられた。すべて、捨てられたか、処分してくれと持ちこまれた可哀想なペットたちだった。

【欲しい方には差し上げます。里親募集中。このペットたちの檻の上にある数字は、処分までの時間です。可哀想だと思ふ方は、その時間になるまで引き取ってあげてください】

それぞれの檻の上には、処刑までの時間がカウントダウンされるように掲示してあった。一く一んく一ん。と、愛らしい子犬たちが、殺されるのも知らないで、泣いていた。

一ニャオ、ニャオ。と、これまた生後何日も経っていない、可愛らしい子猫たちが、じやれあっていた。

その檻の前には、通りかかった車が停まり、通行人や学童たちの人だかりができていた。「ママ、飼ってよ。いいでしょう。みんな殺されちゃうのよ」

女の子が母親にせがんでいた。一匹でも飼っている人なら、もう一匹ぐらいと、貰っていった。これでひとつの命が救えるのだ。

その行き場のない動物たちを公開するだけで、だいぶ貰い手がついた。保健所の仕事が減るということは、税金がもっと有効に使えるということだ。人間たちの思い上がりや、慰みのために無駄に税金が使われているのだ。

敦賀所長は、それだけでも怒りは治まらなかった。

「よし、公開処刑を行う」

とんでもないことを命じた。自分の首をかけていた。そんなことをすれば、大変なことになるのは知っていた。

市民の目に止まる前庭に、ガラス張りの堅牢なガス室を造り、その中に可愛いペットたちを入れると、毒ガスで苦しんで死ぬ様子を市民に見せたのだ。マスコミが各社集まっ

た。テレビで全国中継までされた。すぐさま、市長、知事、政治家などが飛んできて、やめさせるように所長を説得した。残酷すぎると、保健所には抗議の電話とメールが殺到した。市民が押しかけ、動物愛護団体から、PTAまで次々に押しかけて、保健所の周辺は人と車で身動きがとれない有様となった。

敦賀所長は、管轄の官僚に平然とした口調で述べていた。

「何か不都合でもありませんか。毎日、やっている仕事を見せただけのことですが」

「ばかやろう。早く、黒いシートでもいいからかぶせろ」

官僚は血圧が上がっていた。

「要するに、見えなくするようにすれば問題がないと」

「あたりまえだ。きさまは何を考えとる。これは重大な責任問題になるからな」

黒いシートで覆われて、前庭を立ち入り禁止とした。それでも、毒ガスで死ぬ犬猫たちの断末魔の泣き声はいつまでも残り続けていた。

第888話

セールスセールスセールス

訪問販売の攻勢もすごいが、電話セールスも煩いくらいだ。

一社長様はいらっしゃいますか。

またか、と店でわたしは電話をとっていた。咄嗟に冗談が出るときは、暇なときだ。忙しいときは、黙って電話を切る。

一はあ、社長ですか。ただいま、行方不明で……、わたしらの給料三ヶ月溜めて、どこへ逃げたものか。

一それは、お取り込み中、失礼いたしました。

と、二度と電話は来ない。と、思うと、今度は、

一奥様いらっしゃいますか。と、化粧品か、ダイエットかエステだ。

一ううう、奥様だと？ あんなやつ、男と逃げやがって、あんた、誰かいい人世話してくれよ。そうしたら化粧品でもエステでもなんでもやるからよ。

そこも二度と電話が来ない。

一〇〇商工ローンですが、経営者の方でいらっしゃいますか。ただいま、無担保低利で事業資金の貸付を行っているのですが一。

一なんだ。町金か。こっちは、金が余っていてな、使い途に困っておる。誰か、借りるもんはおらんかな。

と、態度がでかい。そうして、電話で遊んでいるほど店は閑だった。

煩い電話セールスの撃退法で、警察だとか火葬場だとか、なになに組の事務所だとかというのは、昔からあることだ。そんな古典的な手は使わない。現代にマッチしている

のは、それが現代的テーマであることが重要だ。

—社長さんおりますか。

—社長は、社長は、ゆうべ首吊りいたしまして、ただいま葬儀の日取りを決めているところですが。

—それは、大変でございましたね。なんと申し上げてよいか。

と、相手の態度が変わり、すぐに電話は切れた。これは深刻な演技の勉強にもなる。

そのうち、町では噂が立っていた。林語堂の店主は、五回も女房に逃げられて、首吊り三回、夜逃げ五回、なんでも大儲けして、別荘を四つも持っているとか。話があっちへ飛んだり、こっちへ飛んだりだ。

訪問販売ともなると、そんな演技もできない。

「ダスキントマですが、ただいまお掃除キャンペーンをしまして、二週間の無料お試し期間がありまして」と、毎日のごとくにやってくる。

「ああ、お掃除ね。やったことないから。開店以来、掃いたり拭いたりしたことないから。掃除嫌いなもの」と、相手にならない。みんな苦笑して帰ってゆく。

「店の外に付ける電飾看板ですが」

と、これもまた煩いほど来る。パンフレットを出そうとするのを制して、

「ああ、それですか、それなら知っております。電飾文字を簡単入力して、それがくるくると回るんですな。車からもよく見えるし、そのときどきのセール案内もできる。月々の支払はたったの九千円で五年リース、損金経理ができるのですな」と、セールスよりもよく内容を把握してぺらぺらと喋りまくった。

「そうです、その通りです。どうして、そんなに詳しいんですか」

若いセールスは感激していた。

「当たり前だ、毎日毎日来てさ、同じこと三百六十五日聞かされてみろよ」

新興宗教などの勧誘にも来る。古本屋には珍しい美しいご婦人方だ。それだけで、ふらふらと入信したくもなる。

「あなたは、来世を信じますか」

「生まれ変わりねえ。今度生まれたら、人間はもういいね。豚でいいよ、豚で」

「神を信じますか」

「うーん、ここに連れてきたら信じてやってもいいけど、あの人、こんな大変なときに何しているの？」

「あの人？」

神も仏もあるものかと、わたしはエホバでもなんでも、友達のように云った。

「車内の広告はどうですか」「レジスターの調子はいかがですか」「置き薬などは」「有線放送ですが」「セキュリティシステムの導入のご計画は？」「財テクなどにご興味は……」「保険会社ですが」「コンサートのチケット買ってくださいませんか」「車検はどこに出されていますか」「焼きたてのパンはいかがですか」「女はいりませんか」「漬物屋ですが」「郵便局ですが、小包がありましたら集荷にお伺いします」「インター

ネットはどこをお使いですか」「今度の選挙ですが」

と、いろいろと入れ替わり立ち替わり店にやってきて、毎日が賑やかでいいのだが、わたしは急に深刻になって呟いた。

「それなのに、どうして客は入ってこないんだ……」

第889話

電子投票

未来は選挙も変わった。投票所というものがない。家庭に居ながらにして投票ができるようになった。

それまでは、雨が降ったり、嵐にでもなれば、どっと投票率が下がっていたのが、自宅から投票ができるようになってからは、投票率ばぐんとアップしていた。

パソコンからもできるが、いまやテレビの画面がそのままタッチパネルになり、双方向のデジタル通信で結ばれていた。テレビのリモコンチャンネルでも、画面に手を触れるだけでも、候補者に一票を入れることができるようになった。コンピュータが画面に入力する有権者の顔を認識するから、いたずらや替え玉投票はできない。

老人のために、パソコンがなくても、テレビの画面がそのまま入力画面になっているから、手で触れて選択するだけでよかった。それが、リアルタイムに集計センターのホストコンピュータに情報として流れ、地区別の各候補者の得票率は、アバウトではなく、正確な時間の進行とともに、テレビ画面にカウントされているから、それを見るのも視聴者としても楽しみなことであった。有権者として参加しているという意識が盛り上がり、一票を投じたときにカウントに表示されるから、実感もあった。

アイドル歌手やお笑いタレントたちが、一日中、テレビの画面で、投票を呼びかけ、また若い無関心層にゲーム感覚で投票させていた。

選挙にかかる費用も莫大であったが、それが極端に減った。アジアの国々では結構、昔から行われていた電子投票も、日本が遅れてようやく取り入れた。随分と保守的な国民であった。

第一、コンピュータの普及においては、いまや中国や韓国、イランなどにも負けているといったていたらく。機構そのものが巨大化しすぎると、そのシステムから構築するとなると、かなりの意識改革と予算を投じなければならなかった。新しい国々のほうが、あっさりとしてITを導入しやすかったこともある。

ようやく、我が国でも電子投票を導入したが、どうも信用がおけない人たちもいる。「投票用紙に書いて、一票を入れたのなら、証拠が残るが、クリックだか、栗っ子だかしらんが、そんな家において、テレビ画面の候補者の顔にタッチするだけとは、信用ができません。間違っって触れたらどうするんだ」

昔からコンピュータのことを全く信用していない人もいるし、逆に絶大な信用を寄せ

ている人もいる。ただ、どちらに立つ人でも、見えないという不安はつきまとう。見えないところで不正というのはいくらでもできるわけで、どんなチェックシステムを採用しようが、必ず抜け道というものがある。この場合では、集計をしていて、最後に有権者数を上回る投票というありえない操作が行われたりして、選挙そのものが無効になるときもあるだろう。

また、ハッカーにより妨害されたり乗っ取られたりと、様々なトラブルが予想される。選挙管理委員会では、そうした考えられる様々な不正に対処すべく、二重三重に安全策を講じていたのだが。

電子投票になってからの最初の参議院選挙の日であった。何が起こるか不安はつきまとう。前もって、各家庭を訪問までして、投票の仕方を指導して歩いていた。テレビでは、模擬試験まで行い、国民に理解を求めよう、テストを繰り返していた。

その日の日曜日は、天気予報では雨ということだった。史上空前の投票率の高さになると予想されていた。若者たちは、携帯電話からも投票できるという手軽さが受けて、普段、全然政治に無関心な人でも、一度やってみようと、仲間で集まって、キャーキャーと投票していた。

各陣営は、いままでにない票の動きがあると計算していた。若者たちを動かすにはアイドルだと、いつもならむさくるしい党首たちがテレビに出るのだが、人気タレントを起用して、若者たちに呼びかけた。アピールするための歌まで作り、イメージソングはヒットランクの上位を独占していた。ただ、保守党だけは、いまだに頭が堅く、何故か演歌でいったのが失敗していた。

「わが党のイメージソングはベストテンにも入っていません。きよし君を採用したところで、演歌はまずかったですな」

「わしはクラブのカラオケで歌ったぞ。なかなかいい振り付けだがな」

自分の趣味を押しつける傲慢さがある。

浮動票が、今回は大きく動き、それで勝敗が決定されると睨んでいた。いままでは、選挙というと、じじばばかりが投票所に行っていた。若者たちには無縁の選挙が、今回からはがらりと変わるのには目に見えている。

それで、各党は、いままでのマニフェストには老人の福祉というものを大きく掲げてきたものが、若者の就職率を高めるための施策を掲げ、将来の年金も確保できる公約を盛り込んでいた。

テレビでは朝からカウンターが動いていた。投票率もパーセントで表示されている。足の悪い年寄りも、入院患者たちも、危篤の患者でも投票が容易にできた。

「あなた、死なないで」

「ああ、すみません。お取り込み中、死ぬ前に投票をしていただけませんか。この画面の候補者と党名にタッチしてくださるだけでいいんですが」

と、医者がノートパソコンを患者の枕元に置いた。はあはあと息をようやくしていた患者は、震える手を伸ばしてようやくタッチすると、安心したように事切れた。

「あなたー」

投票は八時には締め切られる。その五分前になって、なんと投票率は九十五パーセントを超えていた。電子投票の成果がここにも表れていた。

「さあ、いよいよ集計です。ほぼ、当確がそろいましたが、接戦しているところがあり、最後の一分一秒が判りません」

国民の目は、テレビの画面のカウンターに釘付けになっていた。と、突然、カウンターの数字が消えた。

「おや、どうしたんでしょうか。データが、データが消えてしまいました」

ニュースキャスターたちは慌てていた。電話をかけまくり、かなり興奮している様子だった。視聴者たちも騒然となった。

全国的に不安定な気候で、各地で大雨、落雷が相次いだ。そのために停電も全国的に発生していた。

ようやく、臨時ニュースが流れた。

「今夜、八時少し前に、選挙管理事務所に設置されていたホストコンピュータなどが、次々に落雷のための使用不能になり、データは消去した模様です」

これがあるからコンピュータは信用ならない。

第890話

アンチ巨人

アンチ巨人が酒場に集まって、酔いも手伝ってか氣勢を挙げていた。

「ここにいる連中はみんなアンチ巨人と思うが、確かだろうな」

リーダー格の男がカウンターやテーブル席で飲んでいる客に疑いの目を送った。

「おれは、昔から巨人は嫌いだった」「おれも虫唾が走る」「うちなんか家族全員だ」みんな口々にそう言い始めた。

「だが、中には隠れ巨人という名で呼ばれている輩もいるかもしれん」

「それは、巨人が負けていたときのことだろう。いまは強くなって、支持層は、実に大きな顔ができる」

「われわれの中も、アンチ巨人ということでの意見は一致しているが、それぞれの考えを持っているわけだ」

「敵の敵は味方というやつだが、それにしてもいつも、どうして団結しないんだ？」

「それは政治の世界と同じで、保守は団結、革新は分裂という構図に似ているな」

この町で消防団をやっている若者は起立して云った。

「だから、われわれはいつも弱いのだ。万年野党で我慢しなくてはいけないんだ」

パン屋の親父も同調して立ち上がった。

「共通の敵はなにせ一番の巨人だ。それをやっつけることが第一問題なのだが、いざというときは、足の引っ張り合い。みんな頭のいいやつが揃っているから尚更足並みが揃わない」

古本屋も話に興奮してきていた。

「なんていったって、経済的な力も人気もある巨人だ。民衆の多くは、長いものに巻かれる形で、まるで偶像崇拜だ」

魚屋も相槌を打って云った。

「世の中が不景気になればなるほど、安定したものの巨大なものに、弱いものら、馬鹿な連中は寄りかかろうとするんだ。寄らば大樹の陰とやらで」

リーダー格がビールの杯を飲み干して溜息混じりに云った。

「そうなんだな、世の中が不安定になればファシズムが台頭してくる。巨人はファッションの象徴だ」

と、みんなそこまで憎んでいた。

「われわれの町にも、猫も杓子もという云い方がびったしする娘や息子たちが多いが、すべてうわべの格好よさで流行を追ったり、流されたり、扇動されたりしているんだ」

酒場の親父もそうした風潮にうんざりした声で云った。

「この世はなんでも力関係だ。資本がものをいう。いい戦力をトレードするにも、年俵いくらと積むことだ。人気に乗るマスコミも悪い。大国が小国を飲み込むように吸収されてゆくのを、黙って見ていなくちゃならん。それは、政治も経済も国家もみんな同じなんだな」

みんな、静かになってしまった。どう論議したところで負け犬の遠吠えぐらいにしか聞こえない。むしゃくしゃするからやたら酒ばかり呑む。

そんなときに、戸外から「巨人が来たぞお」と、叫び声が聞こえた。酒場の連中は、その声で、きっと顔を窓の方に向けた。

「とうとう、やってきたか。前はメタメタに負けたが、今度は勝利をものにしてくれるわ」

全員、戦闘服に着替えた。手には剣を持ち、鋼鉄の盾も持つと、兜もかぶった。

「さあ、行くぞ。小人国の力を見せてやる」

「おれは、巨人の口から入って、腹の中を剣で刺して、暴れまくってやる」

一番若いやつが剣を振りかざして云った。

「どこかで聞いたような話だな。まあいい、相手が巨人でもひるむな。必ず急所というものがあるはずだ」

港に、ぬっと巨人が現れていた。帆船を玩具の船のように束ねて引いていた。

「さあ、陸へ上がったら、戦闘開始だ」

巨人は岩壁に上がってくると、山のような図体で町を見下ろしていた。

第891話

携帯電話口害

電話の会話というのは、盗聴されたりして、かなりヤバイ内容もあるのだが、携帯電話が普及してからは、世間に憚ることなく、大声で聞かせるものとなった。

一もう少し待ってくれませんか。はい、月末にはちゃんと返済いたしますから。ぼくの臓器ですか。売れと？ とんでもないです。ぼくのは脂が乗りすぎておいしくありませんよ。

電車の乗客はじっと聞いていないふりをして、聞いているのだった。

一ええかげんにしろよ。どたまかち割ると。いつ返済してくれるんだ。夜中でもいつでも押し掛けてゆくからな。

同じ車内で、取り立て屋と債務者が携帯で話していた。ひとは汗をかきかき、ぺこぺこ頭を下げている。もうひとは足を通路にだらしなく投げ出して、横柄な態度だ。電車の中では携帯電話の使用ができないルールになっているが、結構みんなやっている。話はどんな恥ずかしいことでも、重要なことでも筒抜けだ。電話の内容がプライベートではなくなった。

一判った。ぼくたち、これで終わりにしよう。離婚届は明日持ってゆくから。そんなに合わないのなら、初めから我慢しないで云ってくれたらよかったのに。君のお陰で履歴に傷がついたじゃないか。

乗客のご婦人方が、利己的な若い男を軽蔑するように凝視していた。

一お願い、ヒロシ、ねえ、もう一度やりなおそうよ。このまま逢えなくなるなんて、わたし、死ぬから。

泣きながら携帯で話している若い女の方に今度は聞き耳を立てる。

そうかと思うと、とても聞いている方が顔が赤くなるほどのラブラブコール。

一タカシ、もう我慢ができないわ。チューしてえ。ダメ、感じてきちゃった。

全く、礼儀作法以前の問題で、ところ構わず携帯電話。

一ええ？ 不渡りを出した？ 社長はいない？ 夜逃げしたって？ どうしてくれるんだ。手形をさんざんジャンプさせて、それじゃ、うちも連鎖倒産じゃないか。

中小企業の社長さんらしき男が、車内でおろおろしている。これは深刻だ。乗客の憐憫の眼差しが集まる。

たまたま居合わせただけの電車の乗客だが、様々な人生の縮図があり、ドラマが展開していた。

一ぼく、ぼく、どうしたらいいのか、判らなくて。おふくろを刺し殺してきたんだ。自首って、何？ どうしたらいいのさ。

衣服に返り血を浴びた少年が、小脇に血糊のべったりと付いた小型ナイフを抱えていた。それを見た乗客から悲鳴が上がった。

まるでドラッグでもやっているように、朦朧として通路をよろけるように歩いていた中年男性が、徐に携帯電話を取り出すと、神妙な声で誰かに電話をしていた。

一何もかも、もうすぐに終わる。終わるんだ。おまえだけは判ってくれると思って電話をしたんだ。おれは、死に場所を捜して、北海道まで行ってうろついたよ。だが、死に切れなかった。あんな淋しい原生林の中で、たったひとりで死ぬことには耐えられなかったんだ。判るだろう。だから、こうして都会に戻ってきたんだよ。ひとりで死ぬなんて、怖いんだ。いまね、爆弾を持っているんだ。

その話を聞いて、ひとりふたりと青ざめた乗客が席を立つ。
一電車の中なんだ。ここで自爆するけど、ひとりじゃないんだ。みんな一緒に死んでくれる。

と、ぞろぞろと隣の車両にみんな移ろうとする。男は乗客を制していた。
「みんな、どうして逃げるんだ。お願いだ。一緒にいてくれ。とても怖いんだ」
男は、紙袋からアルミ缶に入ったものと、電気コードを出してくると、通路に座り込み、コードを接触させた。キャーと、乗客たちは一斉に逃げ出した。パニックになっていた。ところが爆弾はうんともすんとも云わない。

「おかしいな、作り方が間違ったかな。醤油大サジ一杯、砂糖十グラム、酢二十CCと規定通り入れたんだがな」

お料理メモと間違っていた。三杯酢じゃないんだ。

別の車両では、怪しげな男が、こそこそと携帯電話をしていた。
一何？ 交渉が決裂したって？ そうか、話し合いでは解決の途は閉ざされたというわけか。それで、すでに日本海沿岸にミサイルは配備されたか。いつでも発射はオーケーなんだな。臨時ニュースはまだ流されていないぞ。箆口令でも敷いたのか。後、一時間後に首相から宣戦布告の記者会見が行われる予定か。そうか、わたしたちの苦労は何だったのかね。すべてが終わりだ。

乗客は、信じがたい視線を男に送っていた。何か、映画のラストシーンを見ているような気がしていた。突然、男は携帯に向かって叫んでいた。

一なんだと？ 敵国はすでにミサイルを発射しただと。もう間に合わない？ 防衛ラインを超えて、後、数秒で東京だと？

乗客はそわそわしながら、窓の外を見ていた。男も携帯を耳から離して電車の窓に顔をくっつけるようにして眺めていた。銀色に輝く飛行物体が首都の上空に現れたところだった。

第892話

空梅雨

新しい町に越して十日が経っていた。あれこれと生活をしながら、必要なものはメモしながら買い揃えていった。風呂に入るときに、衣類の籠がいるとか、洗面所の石鹸箱であるとか、細かいもので、なければ困るものは、生活してみても判るのだ。

小物は本宅に置いてきたので、別々の生活のためには新たに揃える必要があった。でも、何か、もっと大事なものを忘れていた。それが何か、なかなか思い出せないでいた。なければ困るもので、大切なものだ。どうも、心に引っかかりながら、それが何であるのかどうしても出てこない。

ただ、生活をする上で不便を感じないので、さしたる重要なものとは思えないが、どうもすっきりしない。

新しいマンションは三階建てで、十八世帯が暮らしている。二十年近くもこうした他人とひとつ屋根の下で暮らしたことはないのに、音楽を聴くのにさえ気を遣った。玄関で逢うと、「おはようございます」と、挨拶する。子供たちが多いのにも驚かされる。自転車が沢山止められてあった。若い夫婦が多いようであった。まだ、名前も顔も知らない。引っ越しの挨拶もしていないから、これからも知らなくていいのかもしれない。

わたしの店まで歩いて五分余だから、いままでの本宅からの車での通勤時間が往復で一時間という人生の無駄がなくなるのだ。電車で通勤なら、往復で四冊の本が読める。車ではただ神経をすり減らす運転をするだけなのだ。それが一月で三十時間、一年で三百六十時間、十年では三千六百時間。実に百五十日も、ただ運転のために使われている。それだけの時間があれば、何かできそうだ。

最近は呑みの誘いが多い。店を終えてから駅前食堂まで歩いてゆく。何か井伏鱒二の小説のような舞台に、六人の小説家のかつての卵たちが集まって毎月六日に呑むことにしていた。卵はすでに五十過ぎて、賞味期限も過ぎて、孵化することなく、ピータンのように薫製になっていたかもしれない。それはそれで味がある連中だ。この町からひとりも新人賞が出ていない。

二軒はしごした。どこも焼酎を一升瓶でキープできる安いスナックだ。いくら呑んでもたかがしれている。カラオケで、五十年代、六十年代の歌うたう。ジョン・デンバー、PPM、岡林信康、高石ともや……。いい時代はいつも過去にしかなかった。

酔っても、タクシーはいらない。歩いて帰れるところだ。まして、本宅のように電車でも三十分かかるところで、終電には、盛り上がる前にひとり帰る寂しさはもうない。珍しく十二時過ぎまで呑み歩いた。

いままでなら、六時には起きていたのに、目が覚めると七時半だ。どうも自堕落になるような気がしてきた。朝の鳥のさえずりが聞こえなかった。淡い光も差し込まない。夜は遅くまで、朝は寝坊になった。いままで暮らしていた本宅の田舎時間ではなく、街

の生活時間になったのであろうか。

たまの日曜日だからと、同居のじいさんと婆さんを温泉にでも連れてゆくことにした。いままでは引っ越しのガタガタで、忙しかった。ようやく普通の生活に戻っていた。

郊外のレストランで食事をした。あまり洋食は食べないのだが、初めて入る店だった。客層を見ると、すべてニューファミリーと昔は呼ばれていた、子供が二人くらいいる若い夫婦。わたしは、じっとそんな家族を眺めていて、過ぎた昔を懐かしんでいた。子供たちは家庭を持ち、会社のオーナーになり、上の三人の息子は関東の方で働いていた。

「どれ、パパが食べてあげるから、おまえは、こっちを食べなさい」と、皿を交換している。

「自分で食べたいって注文したんじゃない」と、チビが母親に叱られていた。ほほえましい光景として眺めていた。それもなくなつて久しい。いまは、じじばばの面倒だ。

「おまえ、半分食べてくれないか。多すぎる」と、じいさんから半分回ってきた。チビがいた頃は、食べ残したものを勿体ないと食べていたが、いまは、年寄りの食べきれないものを食べている。

残雪の見える山に車で上り、温泉に入った。露天風呂も家族的雰囲気の中の小さな温泉場だ。山ツツジは終わりの頃だった。

「ああ、いい湯だった。温泉が一番いい。全く極楽だな」と、年寄りたちは悦んでいた。生きて十年。最後の思い出を作るために、わたしは新しい町に越してきたような気がした。

帰りにスーパーへ寄って買い物だ。

「何か食べたいものはあるかい」と、いままでは子供たちの食べたがるものばかりメニューに上がっていたが、年寄りの食べられるものを買込む。毎日作るのはわたしの役目だった。ばあさんは手が不自由で庖丁が握れない。

「鰯は焼くか煮るか、豆腐のオムレツにしようか」と、またいつの間にか主夫をしていた。

平日は、仕事に出る朝に晩ご飯の支度をしてゆく。昼はできあいのお総菜を冷凍しておいている。

たまに呑みに行くが、普段は店とマンションの往復だった。図書館には週に一度行って、本を借りてくるだけ。六畳の自室で転がって好きな音楽を聴きながら本を読む時間が至福のときだ。ばあさんはテレビを見て笑っている。じいさんは二合の酒で酔って先に寝ていた。

何の不自由もない新しい生活は、確かな生活のリズムを刻んで歩き始めていた。

「あっ」と、わたしは声を上げて、本を閉じた。そして、飛び起きた。大事なことを思い出したのだ。そうだった。肝心の女房と子供がいない。この一週間、電話もしていない。顔も見えていない。本宅に帰っていない。怒っているだろうか、恐る恐るケイタイで電話を試してみた。

—ごめん。忘れていた。

—いいのよ、気にしないで。もう、帰ってこなくていいから。

いてもいなくてもいいものになったのか。

—あさっては帰るから。

我が家もいよいよ妻問婚になったか。そう云うと平安時代の貴族のようだが、たまには顔を見に帰らねば、忘れられたら大変だ。

それにしても暑い日が続いていた。雨もなく、今年の梅雨はどうしたのだろうか。

第893話

読みかけの小説

仕事が休みであった。いや、これからはずっと休職なのだ。今日が最後の公休になるのか。

わたしは、見納めといったら縁起が悪いが、その最後の日に弘前に行くことにした。朝からわくわくしている。まるで、意中の人と逢い引きをするときのような心躍る。

青森の停車場から汽車に乗り、のんのんと津軽平野を走ってゆく。初夏の風がすがすがしい。戦争だなんて、どこの国の話だ。平和そのものではないか。田圃も青い海原のように続き、丘陵には林檎園が広がっている。食糧難というのも嘘のような話だ。

弘前の駅前から代官町、土手町と歩き、小路や裏通りにある古本屋を覗いて歩くのが好きだった。まだ、二十歳過ぎたばかりで、わたしは貰った給金の三割も古書の蒐集に使うといった古書狂いであった。古色蒼然とした店頭立つと、もうそれだけで陶酔のあまり倒れそうになる。紙の酸化したすえた匂いだとか、和綴本の歴史を閉じこめた空気というものが、店の棚に漂っていた。本を開くのが、わたしが最初の客であれば、それが明治初年に出版された尋常小学校の教科書なら、七十年昔の空気がページのあわいから逃げ出してくる。ちぎれたページ、落書きした跡も、それを描いたつづらな瞳を思い浮かべる。

わたしは、店頭の特価台を覗くことから始める。給金もそう多くはないから、安くてページ数の多い本を選ぶ。豪華本などは無縁だった。質より量を狙う。あれほど出回った円本がそろそろ特価台に並ぶようになった。それ自体がすでに定価からして安い本なのだが、さらに半額以下になると、一冊の値で五冊、六冊と買えるのだ。岩波文庫や改造文庫も、拾いものがたまに店頭に出る。掘り出し物など、滅多に出るわけもないが、それはタイミングの問題だった。わたしのような古書狂いはこの町にも沢山いるわけで、しかも金に糸目をつけない旦那たちには太刀打ちできない。わたしなど、今日のお昼の腹を満たすことも考えながら、ぎりぎりのところで買い漁るのだから、財布といつも相談だ。

古本屋の親父とは話をしたこともない。こっちは顔を覚えているが、向こうは客としてわたしを覚えていないような顔で、むっすらと将棋の本を開いていた。古本屋の親父というのは、どうしてか取っつきにくいところがある。たまに来る弘前だからそうなのかもしれない。青森の木村の古本屋さんなら、気心は知れている。昔からの古本屋というものも少なかった。ここにきて、生活のために蔵書をただ店を借りて並べての俄古本屋というの増えた。もともと本を持っていた人で商売人ではない。時局が切羽詰まってくると、食えなくなった蔵書家たちが、雨後の竹の子のように店を開いていたが、買いができないで、在庫がなくなると次々に店を閉めていった。そこがシロウトとクロウトの違いだ。買いができない、本を集められない店はなくなって終わりだった。

わたしは、土手町の外れにある角ハデパートにも寄った。その頃はデパートも売場に古書部というのがあった。古本という、人によっては汚らしい本が、堂々とデパートにコーナーがあったのだ。いまでも、古書市を催事場でやるデパートは中央でも多い。古本が知的財産として、世間に認められていたということだ。

その頃の古書の値段というのは、定価以上で売ることはない。初版がどうのということもなく、新しい本は定価の三割引、五年経った本は五割引、そしてさらに古くなると店頭台というふうに、判りやすい値付け方法をとっていた。

時代が時代だから、本も東京辺りから人と一緒に疎開してきた。そうした本が大量に地方の古本屋に流れてきた。本なんか、生活の窮乏になんら足しにもならないから、当時は二束三文で、いい本がいくらでも買えたのだ。第一が食糧で、第二が衣服だった。

そんな古書の投げ売りの中から、わたしは大トルストイ伝を掘り出し、萩原朔太郎詩集の第一書房の三方金の豪華本を安く見つけた。その日の収穫は、若山牧水の「死か芸術か」一冊であった。どんな本でもいい、たった一冊でもいい、出会ったときの嬉しさは、なにものにも代え難い。

わたしは、弘前駅前の食堂で、支那そばを食べるのがいつもの楽しみで、そこでも、買い求めた掘り出し物をこっそりと盗み見るようにして開いていた。

帰りはバスであった。ゆっくりとバスに揺られながら、本をひもといてゆくとき、わたしは、明日のことなど露ほども思わないのだった。

「こんな大事なときに、弘前に古本を買いに行ったんですって」

家族は呆れた顔をしていた。この病気は死ぬまで治らないと自分でも思っていた。翌朝になっても、枕元に本が置かれていた。半分ほど読んだが、何故か、読みかけのまま出かけることにした。帰れないかもしれない。だが、本の続きをそのままにしたから、ひょっとして、生きて戻って、続きを読むかもしれない。

わたしは、葉を読みかけの本に挟んだ。葉には、今日の日付を入れておいた。

昭和十九年七月十五日

青森の停車場には、わたしたち出征する兵士を見送る人々でごった返していた。戦局は怪しくなってきた。列車は東京へ向かう。そして横須賀へ。海軍というところはどんなところであろうか。小説なんか持っていったらピンタ間違いない。軍隊生活より活字に渴望する生活が厳しく思えた。

わたしの名前が高らかに呼ばれた。万歳が親族、町内から一斉に起こった。

第894話

秋葉原慕情

息子たちが、秋葉原のビルの一角を借りて、アニメのプロダクションを本格的に始めていた。何故、秋葉原なのか。それは、そこがかつての電気街からアニメ・ゲーム系とパソコンの街へと変貌しつつあるからだった。

社員も増やして人件費で大丈夫だろうか。いらぬ心配から電話を入れてみた。長男が出た。

―秋葉原のどの辺に引っ越したんだ？

―お父さんに云っても判らないだろう。

―だいたい判るよ。学生時代、秋葉原でバイトしていたから。

―ええ？ そうか、大学から近いからね。どんなバイトしていたの？

わたしは、すっかりと忘れていた秋葉原の風景を思い出していた。

―一九七一年の暮だった。

わたしは○丸電器の六階のレコード売場にいた。五階は演歌やロックのコーナーであり、六階はクラシックレコードのコーナーになっていた。広いフロアがすべてレコードで埋まっていて、東京で一番の在庫を誇っていた。わたしはバイトだから、裏方で、倉庫からダンボール箱にびっしりと詰まっているレコードを売場に出すのだ。それと、お客の注文のレコードを取りに走る。やっているうちにレーベルと番号だけでどんな曲目なのかも判ってくる。エラート、グラモフォンなどの洋盤も扱っているので、ドイツ語、フランス語で書かれているタイトルもなんとなく読めるようになっていた。

もともとクラシックファンなので、そんな職場で大好きなレコードに囲まれて仕事をするというのは、もう目眩がするほど嬉しかった。年末だから、レジの前には客が並ぶほど繁盛していた。わたしは忙しくなるとレジにも回された。

「ハイツ・ホリガーの新譜あるかしら」と、訊いてきたので、

「ああ、フルトのですね」と間違えて云ったら、そこに並ぶ客全員から睨まれた。

「オーボエでしょう」

お客のほうがなんでも知っている。

わたしの部屋はレコードで埋まっていた。バイト代も生活費もクラシックレコードの購入費にあてていた。大学を卒業する頃には千枚近くあった。

当然、ステレオにも興味があり、それで秋葉原を隈無く歩くことになる。マニアというのは虫のようなもので、どんな狭い路地にでも入り込んで、せかせかと歩きながら、

ただ見て回るだけでもいい。ステレオを組み立てるまでには行かないから、部品には興味がなかった。当時欲しくても買えなかったのは、ラックスの管球式のアンプだった。わたしのバイト代の三ヶ月分もしたから買えなかった。ステレオはすべてソリッドステイトで真空管なんかは絶滅種だったが、その透明な音に神話のように陶醉していた。

音の入口は針である。入口とスピーカーの出口に凝っていた。カートリッジと呼ばれた針の部分は、シュアのタイプⅢという人気ブランドは三万いくらししていた。当時のサラリーマンの月給分である。たかが針にそれほど出す人はいくらでもいた。気違いの世界だった。わたしは、グレースのカートリッジでも高かったが、その音が合っていた。アームも捜した。ターンテーブルはベルトドライブではなく、ソニーのダイレクトドライブのものにし、箱だけは手作りのものを購入した。

スピーカーはダイアトーンのDS25という小型の3ウェイだが、名器といわれていたものを買った。それを買うに行くときは、わざと津軽弁で話して、わざわざ青森から買いに来たのにと、値切った。

バラバラの単体で揃えていって、組み合わせた音が失敗することもある。機械同士の相性もあるだろう。ただ、四畳半の部屋では音の限界がある。リスニングルームまで将来はと考えていた。

秋葉原は、家電は通りに面して売っていたが、ステレオ関係は、汚らしいビルの上であるとか、駅裏やガード下の闇市のような小間で、怪しげなおじさんたちが、聞いたこともないブランドのものを売っていた。それを見て歩くのがぞくぞくしてくる。ジャンク品もあるので、新品で買えないものは中古で埋める。

アンプも片チャンネルが五十ワットという強烈なものは四畳半ではいけないのだ。体育館で鳴らすものをどうしてそんな小部屋で聴く必要があったか。友人は小さな部屋にはそれなりにと、イギリス製のサンドイッチという、可愛らしいスピーカーを置いていたが、それがまたいい音を出した。そうすると、それが欲しくてたまらなくなる。少しでも安いものをと、また虫のように、闇市場のような裸電球の狭い路地をせかせかと歩くことになる。迷路のように入り組んで、ガラクタもいろいろと箱に入れて売っていた。アンプとプレーヤーを繋ぐコードだけでも数万円するものもあり、とても信じがたい世界がそこにはあった。

わたしをそこまで駆り立て、のめりこませたものは、一人の少女だった。同じマンションの上に、東京芸大附属高校に通っていたレイちゃんがいた。彼女とは四年も、同じ建物にいて、親同士が友人であったので、お互いに行ったり来たりしていた。のちに芸大に進んだが、いつもピアノとヴァイオリンの音が上の階から降りてきていた。

ラロのスペイン交響曲が課題曲だと、毎夜聞こえてくるのだった。それから、バッハの無伴奏ヴァイオリンソナタを聴かせてくれた。十五歳の少女から信じられない音が出ていた。

わたしは、途方もないことを考えていた。彼女のことを思うと、その音を共有したいと思うようにまでなっていた。オープンリールで、どんな高性能のマイクで録音して、最高のステレオで再生しても、生の音は再現できないのだった。少しでも彼女に近づこ

うと、わたしは、秋葉原の路地裏を歩き回っていた。あの、年末の心細い電球の下に並ぶ部品をバイトの帰りに眺めて歩くひたすらな思いを、わたしは秋葉原という地名で振り返っていた。

彼女は郷里で、いまだに独身でいると聞いた。そして、子供たちに崇高な音楽を教えているのだと。

第895話

ロンリーの思考

東京で暮らしていた独身時代。

マンションという冷たい独房の中で、ぼくは一週間誰とも会わずに暮らしたことがあった。その間、外に出ず、不思議と電話もかかってこなかった。三日一睡もせずに徹夜して、そののち四十八時間、死んだように眠った。起きたとき、ぼくの中で時差が生じていた。少しの間、仮眠したと思いこんでいて、実は丸二日寝ていたのを知らない。夢の国からの時差ボケで、ぼくは時間を取り戻そうと、焦って夜の街へと走った。

いつもトランプをテーブルの上で開いていた。足して十三になると、伏せたカードを開くことができる。そして、頂点までピラミッドのカードを開いてゆくことで、ぼくの運命は決まると信じこんでいたが、運命はいつもやり直しされて、何度も占われた。終いには、どれがぼくの本当の運命なのか判らなくなった。切り札は一度だけでよかった。

トランプ占いに疲れてくると、ギターを弾いた。弾けもしないのに、やたら楽譜だけは持っていて、バッハのシャコンヌも弾けるところまで弾いて指が止まる。そこから先は技術的立入禁止区域だった。セゴヴィアをレコードで聴いた。丸い指だった。いや、音が丸いのだ。ころころと転がる。その引きこもる音がだんだんと遠くなってゆくように、ぼくは東京板橋区南常盤台二丁目角の一階の部屋の四畳半のベッドの中に捨てられていたのだ。誰が、ぼくという生きている死体を捨てたのだ！

たとえば、とぼくはよく無意味な仮説を立てる。ぼくが受験で失敗しなかったなら、それとも予備校に行って、志望校に合格していたら、ここにこんなふうに住んでいただろうか。

時間という概念はぼくにはなんの区切りも与えない。腹が減るから喰うのだ。夜中にもぞもぞと起き出して、台所の下扉を開いた。米粒はいくつかは見つけれられた。小麦粉もすいとんを作るほどの量もない。干涸らびたライ麦パンが出てきた。そいつはとても食えないだろう。当然、冷蔵庫の中には氷しかなかった。冷たい水だけが、ガラス瓶に入れてある。あとはタオルだ。冷やしてあるのは、暑くて寝苦しい夜に、首に巻いて寝るのだった。

もの見事にというよりない。何もなし。すべて食い尽くして、金もないときている。いよいよ、餓死ということも考えなければならない。

誰も来ない日が九日目を迎えた朝、玄関のチャイムが鳴った。来た。とうとう、待っていたものがやってきた。ぼくは、ひとりではない。ぼくを世間は見捨てなかったのだ。やはり、慈悲の心というものを人間は持っている、このひもじい一人暮らしの青年に愛の手を差し伸べる人もいるのだ。と、ドアを開けた。

「新聞とってくれませんか。三ヶ月、いや、二ヶ月でもいいんですが」

と、新聞の勧誘だ。手に洗剤をちらつかせている。

「それは？」と、よろめきながらぼくは玄関にしゃがみこんで訊いた。

「いま、新聞をとってくれたら、洗剤がサービスで、いや、なんだったら、トイレトペーパーもつけましょう」

「そんなんじゃないんだ。何か食えるものがないのか」

ぼくは、ちらりとトイレトペーパーなら食えるかもしれないと思った。

「ありますよ。うどんと蕎麦のセットなんか」

「それだよ、それ」

ぼくは契約した。新聞受には東京新聞、朝日新聞とすでにつっこまれているのに、またしても食糧の景品に負けてしまった。

「おたくは、何新聞？」

「ヨミウリです」

「世身売新聞だと？」

すでに空腹すぎて脳で漢字が組み立てられないでいた。月末の新聞代のことは考えないのだった。いつも、目の前の飯のために不利な取引を繰り返していた。

献血もそうだった。痩せ細ってふらふらしているくせに、街頭献血のバスに乗ってしまった。腹が減っていたから、缶ジュースとお菓子めあてというあさましさからなのだ。ぼくのきつと栄養不足のどす黒い血と、オレンジジュースが交換された。

だが、ぼくは、まだその時点では都会という巨大な機構と関わりあっていたのだ。個人的に名前のある人間との関わりはないにしても、名前も顔もない人間たちとの接触はかろうじてあった。淋しくなるとデパートへ逃げ込む主婦のように、ぼくは書店を駆け込み寺とした。しかし、店員も客の多くも、やはり名前がない。顔がない。人間と認識できる肉の塊が、ぼくとの関わりを避けるようにして、忙しそうに動いているのだ。そんな別世界の生き物たちは、きつと目的があり、その世界となんらかの関わりを持って動いているのだろう。ぼくには予定がない。アドレス帳は真っ白だ。

どこでどう行き倒れようが、きつと顔のない群衆は、ぼくをゴミぐらいにしか考えない。ぼくの死体を古新聞紙のように踏みつけながら、関心がないのがこの街なのだ。

すると、どうしたのだろう。ぼくには肉の塊すらも見えなくなり始めていた。街から人影が一斉に消えていた。バスやタクシーは走っているのに、乗客や運転手の姿は見えない。無人の車が渋滞している。歩道もそうだった。人っこ一人いやしない。レストラ

ンもブディックも無人店舗だった。ぼくは、信じがたい目をこらして四方を振り向いていた。どこにも人間の姿は見えないのだった。地下鉄の駅へと降りていっても、山手線の駅に行っても、電車は来るが、誰も乗っていないのだ。

とうとう、ぼくはひとりぼっちになってしまった。東京という無人島で。

第896話

神経過敏症時代

誰かいるのか。わたしは、暗闇に声を投げかけていた。ずっと、誰もいないはずの自室に、はあはあと息をする音だけが規則正しく聞こえていた。この部屋にはわたし一人よりいない。ということは、闇の中に潜む別の生き物がいるということか。わたしは恐ろしくなって、飛び起きた。時計は真夜中の二時過ぎだ。見渡しても何の変哲もないわたしの部屋だった。

そんなことが続いて、わたしはすっかりと不眠症になり、病院を訪れていた。初めは耳鼻科へと行った。

「人の息が耳元で聞こえる？ 幻聴ではないかと云われるんですな」

医師は、精神神経科へとわたしを回した。女医が担当で、問診に当たっていた。

「いまはどうですか、聞こえていますか」

「微かに聞こえますが、騒音に掻き消されて、そう気にもなりません。夜、蒲団に入ると特に大きく、それは巨大な未知の動物が、どこかに眠っているような寝息ですね」

「どんなふうに聞こえますか」

「はあはあともすーはーとも。病院で死にそうな患者に人工呼吸器をしますね。その音にも似ています」

わたしは、職業のことも訊かれた。コンピュータのオペ室に缶詰になっていること。三十五で独身。趣味は映画鑑賞。酒と煙草はやらない。特に交際している女性はいないこと。どうしてそこまで訊くのだろうか。

「あなた、この雑巾に触ってみてください」

と、女医は汚れた雑巾をわたしに見せた。わたしは、恐る恐る手を伸ばしたが、目を瞑り、どうしても触ることができない。

「あなた、公衆トイレはよく利用されますか？」

その様子を根ほり葉ほり訊くのだった。わたしはティッシュを常に持っていて、便座に敷き詰めて座るようにしていた。ドアのノブもティッシュで掴むし、電車の吊革もそうしている。

「要するに、潔癖性から、妙に神経質になっているんです。人よりも過敏になりすぎていますね」

それは性格だから仕方がない。それと呼吸が聞こえるのと関係があるのか。

「呼吸は、あなたの呼吸音なんです」

わたしは愕然とした。自分の呼吸が煩くて眠れないだなんて。

「それなら、どうしたらいいんでしょうか」

「まさか、息をしないようにするわけにはゆきません。よくありますのは、時計の秒針を刻む音が煩くて眠れないという相談ですね。少しなら、寝酒もいいですし、リラックスできる音楽を聴いて気分転換するのもいいでしょう。精神安定剤を出しておきましょう」

わたしは、病院を出てから、どこか狂っている自分を見つけたのだ。女医は、わたしの幼少時分の家庭環境まで訊いていた。わたしの両親は、わたしが子供のときに相次いで病死した。わたしは祖父母に育てられていた。その祖父母も大学を出る頃には亡くなった。わたしは、四人の死者を見送っていた。

その夜から異変が起こった。呼吸音に加えて、心臓の鼓動が聞こえるのだ。全身に動脈が血液を輸送する夥しい数のヘモグロビンたちのラッシュアワーの騒音がドクドクドクと聞こえ始めたのだ。それは、耳を塞いでも、わたしの体内から聞こえてくるので、止めることはできなかった。

わたしは耳栓を試みたり、ヘッドホンでオルゴールの曲を聴いてみたりしたが、耳のアンテナは常に心音にそばだっている。指向性が気になるものに向かうと、その音が妙に増幅されて、まるでスピーカーから流されているように力強く、ウーファーでドクドクドクとわざとらしく聞こえてくる。

「やめろ、やめてくれ」

と、わたしは叫んでいた。眠るのが怖くなったから、起きていようとする。精神安定剤は、一日の許容範囲を超えて服用していた。呑めない酒も買ってきていた。たかが缶ビールといっても、わたしはその一杯でいつも具合が悪くなるほどの下戸だ。それでも、睡眠薬のつもりでぐっと呑んだ。呑んですぐに吐き出した。どうしても体が受け付けない。

わたしは、また寝不足で病院を訪れていた。

「今度は、心臓の音ですか。困りましたね。それじゃ、睡眠薬を処方しておきましょう」

精神的な過敏症は治せないものなのか。わたしは、以前、歯医者でも同じことをした。部分入れ歯がようやくできて、填めてみたが、どうしても歯茎が拒絶反応で炎症をおこし、受け付けないのだった。赤くなった歯茎を眺めて、歯医者は何度も入れ歯を削っては調整していたが、合うとか合わないとかという問題ではなく、異物を寄せ付けない体なのだ。それで、せっかく作った入れ歯もいまは填めていない。

その現象は、口腔内だけではなかった。腕時計も眼鏡もそうだった。腕時計を付けていないのは、腕の接触部分が赤く負けるからなのだ。アレルギー体質というわけでもないのだが、すべて精神的な作用なのだから、セーターや化繊のシャツで首がちくちくして爛れるのも、軟膏などの塗り薬では効かないのだ。

気にすれば、気になる性格もいまさら改造できるとは思われなかった。わたしは、夜をただ悶々と耐えているだけでせいっぱいなのだが、発狂しそうになる。大声で、真夜中に、

「うるさい、やめろ、やめてくれ」と、何度叫んだことか。ふと、わたしは、いいことを思いついた。そうだ、いままでどうしてこんな簡単なことを思いつかなかったんだろう。

わたしは、ガムテープを机から取り出すと、それで口と鼻を塞いだ。そして、カッターナイフで、自分の心臓をひと突きにした。鮮血が天井まで吹き出すのが見えた。意識が遠くなってゆくとき、わたしは病室の母親の苦しそうな息を思い出していた。

(ざまあみろ)と、わたしは笑っていたかもしれない。これで、ようやく安眠できる。

第897話

海開き

毎年、海開きを待たないで暑い日は海に入った。一夏で何回海水浴をするかが、いつもわたしの中で夏の充足度のバロメーターになっていた。おじさんになってからも海水浴をしたいと思うのは、ぶよぶよの体を人前に晒すことで、恥ずかしさを認識するためもある。皮膚をこんがりとおいしそうに焼くことで、醜い白豚よりはひきしまって見える黒蓋のほうがいいかなと、そうなりたいと思いこんでいた。

わたしの家から海水浴場まで歩いて三分五十秒。海が好きで海辺に住んでいた。家族でよく海に行った。女房はある年齢から水着を着なくなった。女は肌を見せなくなる年齢というものがあるのか。子供たちも、親と一緒に歩くのが恥ずかしくなると、友達とばかり行くので、結局、お父さんは一人淋しく海に行くことになる。シートやクッションを持ってゆき、砂浜の上に敷く。こんなところまでと笑われるかもしれないが、小説を何冊か持ってゆく。どこで本を読んでも同じなら、砂浜の上で波の音を聞き、潮風に吹かれ、太陽に焼かれながら、読書をするというのは贅沢なことだ。

そして、まだ冷たい海に入る。サウナで汗をかいた後の水風呂に入るときのように気持ちがいい。タオルで、あぁいいな、と、まるで親父の水浴。

楽しみはそれに終わらないところがオヤジだ。ビキニのお姉さんたちがキャーキャーとボール遊びに興じているのを、ふふふふふと見ているだけで仕合わせだった。

わたしの住む温泉街のビーチは、毎年、海開きにはいろんな催しをやるのだ。県内のいろんな海水浴場も客を引きつけるために、あれこれと策を練る。ただ、いらっしやいといっても設備のいい、海水の綺麗な海水浴場に集まるのだ。わたしは、この町に暮らしているから、少しでも、地元のためになればと手伝っていた。道の駅のギャラリーに

はどんな企画を立てればいいのかとか、海浜公園の整備のために彫刻を展示する催しものであるとかに、委員として関与していた。観光客や海水浴客が増えれば、町も温泉場も活気がつく。それでお土産も売れるし、食堂も繁盛し、旅館も潤うというものだ。温泉街の活性化のためにも、どうしたらビーチに人を呼ぶことができるか、そのためには、海開きで花火を上げて、県内に宣伝する必要がある。どこのビーチでも派手にやるから、よほどインパクトのある企画でなければマスコミも取材にはこない。なんとかしてパブリシティで、ニュースに取り上げてもらう必要がある。

その委員会の会議が旅館の一室で行われていた。

「どうだろうか、誰か、あっと驚く企画を考えたものはいないか」

旅館組合の長をしているホテルの社長が、若い人を集めて、アイデアを募っていた。

「帆立貝を砂浜に埋めて、捜させるといっことはどうでしょう」

魚屋の二代目が発言した。

「それは五年前にもやっただろう」

「それなら、砂浜で、砂のオブジェを作らせて、賞品を出すというのはい

「それも陳腐だな。あちこちのビーチでやっていることだ」

「うーん」

と、みんな唸るだけでいい案は出てこない。

「ビーチの向かいの湯の島まで遠泳で、一位、二位を決めるというのはい

「それも、別に目新しくはないなあ」

「鉄人レースで、自転車とマラソン、そして最後は湯の島まで泳がせるというのはい

「それも道路の規制やなんやと煩いし、トライアスロンの協会もいろいろと口出ししてくるのは判っているからなあ」

何をするにしても、潰すやつもいて、なかなか話が前に進まない。みんなの意見を総合すると、今年は、ビーチから湯の島までの間で何かできることがないかということだった。島に見えるビーチという他にない景観を利用した企画はないものかなということだった。

その日は次回までに決定するというので、各自、宿題を貰って帰った。

わたしは、島とビーチの間に発泡スチロールの板を並べて、歩いて渡らせるゲームも考えていた。テレビでやっているサスケのような筋肉マン競技というのはいどうか。それなら、二番煎じでも全国から挑戦者がやってくるかもしれない。

と、あれこれと考えているときに、海辺で外国の老人に声をかけられた。

「あなたは、何を悩んでいるんですか」

振り向くと、白く長い服を着て、杖をついて、髪の毛も髭も長い老人だった。どこかで見たことがある。流暢な日本語で話しかけてきた。この近くに大学の臨海試験場があり、外人の大学教授や研究者たちがよく訪れているから、別に不思議でもなんでもない。米軍基地もそう遠くないから、外人はうようよいるところなのだ。

「来週の十九日が海の日ということで、祭日になっているんですが、その日にビーチの海開きもするんです。あの、沖に見える島までなんとか人を渡したいと企画を考えてい

たところですよ。頭が痛くなります。何かいい考えがありますでしょうか」

わたしは、無駄と判っていたが、誰かに訊きたかった。

「なんだ、そんなことで悩んでいたのですか。海開きですね。わたしに任せてください」

その老人は、十九日の朝、九時にきつとこのビーチに来ると約束して姿を消した。わたしは、その老人のことなどすっかりと忘れていた。それどころではなかった。結局、砂浜の宝探しと、津軽三味線の合奏という、あまりユニークな企画ではないところに落ち着いた。砂浜では模擬店も出て、当日は帆立貝のバーベキューが振る舞われることとなった。

いよいよ、海開きの朝がきた。若者たちから幼稚園の子供たちが、浮き袋やボードを手に、いまかいまかと待っていた。沢山の海水浴客が花火の合図を待っていた。組合長と、代議士先生、町会長などがテープカットのために並んでいた。テレビ局が一社だけ、カメラを手に取材に来ていた。三味線奏者たちが、砂浜の椅子に並んで座っていた。さあ、いよいよ海開きだ。

と、そこにあの髭の老人が現れた。手に石板を持ち、杖を高く空に上げたかと思うと、なにやら訳の分からない言葉で、祈禱を始めた。すると、どうしたことだろうか、俄に空が曇り始め、大風が吹いてきた。人々は、何が起こるのかと、ざわめいていた。

やがて、ビーチから湯の島までの海が二つに裂けるように開いた。海底が露出して、いまや歩いて島まで渡れる。海は壁となり、一本の道がついていた。人々は懼れ戦いて、パニックになって逃げ惑う。

組合長が叫んだ。

「誰だ、あんなやつを呼んだのは」

第898話

夏風邪

村田武史は、熱帯夜で、朝方でも三十度以上の蒸し暑さの中、パンツ一枚で、エアコンをがらがんきかせたまま寝ていた。酔って寝ていたので、体が冷えても目が覚めることもなく熟睡していた。ベッドのシートも体温がこもるから、寝莫塵というもの敷いて、その上に寝ると暑くはない。枕カバーの代わりにやはり莫塵を巻いていた。掛蒲団やタオルケットというものもない。それが風邪をひく原因になった。

翌朝、頭が痛い。悪寒がする。どうも熱っぽいようだ。武史は、風邪でもひいたかなと、体温計を出してきた。三十九度もあった。どうりでふらふらするはずだった。風邪薬なんかあるはずがない。独身のアパートに体温計でもあったのがおかしいもので、普段は病院なんかは無縁だったから、なんとか熱ぐらいなら下がるだろうと高をくくって

出勤した。

咳も出始めた。ゲホゲホと電車の中でやると、満員電車だ、みんな顔をしかめて武史に背を向けようとする。武史は歩くのもふらふらしてきた。寒気が止まらず、がたがたと小さく震えていた。

武史の勤める会社は広告制作会社だった。今年三十になる武史は、この会社に入って八年。パソコンのCADソフトを使ってCFの作成をしている。

赤い顔をして、咳こんでいると、みんな口を押さえた。

「大丈夫？ 村田さん。移らないかしら」

「夏風邪だろう。インフルエンザとかじゃないから」

オフィスは、省エネでエアコンをかけていても二十九度だ。みんな、暑い暑いと仕事をしている。そんな中で武史だけが一人、

「うううう、寒い、寒い」と、震えている。同僚たちが羨ましそうにぼやいた。

「いいなあ、村田は。こんな外が三十七度もあるときに、寒いらしい。ぼくも風邪をひきたいよ」

正午になると、真っ赤に燃えたような武史が、はあはあと息をするのも辛そうだ。オフィスの室温は三十一度になっていた。エアコンもきかなくなっていた。

「主任、わたし、暑くて、村田さんの隣では仕事できません。もう、汗びっしょりになっちゃって」

と、女子のスタッフが音を上げた。向かいの社員も、近くの社員たちからも苦情がきた。武史の周り、半径二メートルにはとても暑くていられないのだった。

「すまんが、村田君、今日は病院に行って休みたまえ。君のせいでエアコンも壊れたよ」

上司にそう云われて、武史はふらふらと立ち上がり、エレベーターのところまでようやく辿り着いた。昼休みの時間に入って、エレベーターは満員だった。武史が乗り込んで、扉が閉まると、内部は阿鼻叫喚の地獄に化した。一階でエレベーターの扉が開いた途端、どさどさと人が倒れ込んだ。みんなサウナ風呂に長時間閉じこめられたように汗だくで、中には脱水症状になった社員もいた。

玄関で営業から戻った、武史と交際している真希と出くわした。

「真希、おれは、もう、ダメ、だ、よ」

と、真希の手をとった。突然、女の絶叫がホールに響いた。

「あ、熱い、キャー」

なんと、真希の手は火傷をおっていたのだ。

「お、おれは、どうなっちゃったんだ」

武史は、その場から逃げるようにしてタクシーを拾った。急いで病院に行かなければ大変なことになる。

「お客さん、どちら、うわー、熱い」

運転手がドアを開けて飛び出したのと同時にタクシーは爆発した。燃え上がり、黒煙

を吐くタクシーの中から、ゆっくりと武史が出てきた。洋服も燃えている。それでも、尚も震えて、

「寒い、寒いよう」と、歯をがちがちと鳴らしていた。

消防自動車サイレンを鳴らしてやってきた。人々は昼休みということもあって、通りはビルから吐き出されてきたサラリーマンやOLでいっぱいだった。黒く煤けた顔から武史の白い歯と赤く充血した目がぎろりと周りの野次馬を睨んでいた。武史は睨むつもりはなかった。誰かに助けを求めるように、よろよろと近づくのだった。市民たちを警官たちがガードしながら、拳銃を武史に向けていた。

「おれが、何をしたって云うんだ」

と、武史は悲しそうな顔で叫んだら、口から火を吹いていた。

「キャー、ゴジラよ」

逃げ惑うサラリーマンたちを追うようによろよろと歩く武史は、ついに、

「ガオー」と、不本意にゴジラのように泣いていた。消防車が武史に向けて一斉に放水した。水は武史にかかるとジュワーと水蒸気になっていた。

やがて、大量の氷が運ばれてきて、武史を取り押さえようとする警官隊によって、氷責めにあっていた。武史の体温は急激に下がっていた。そのまま、袋に入れられて、救急車で病院へと搬送された。

警官が付き添いながら病院の診察室へとタンカーで運ばれた武史を、看護師たちと医師が診察した。そして、なんだという顔をして、医師は騒々しい患者の護送に笑っていた。

「熱は三十八度に下がっていますね。ただの夏風邪ですよ」

警官たちは呆然と立ち尽くしていた。何が起こったのか、いまだに理解できない様子で。

第899話

行方喪失

方向音痴という得意な才能を持っている方は結構いらっしゃる。自分がどこを歩いているのか全く判らない。右も左も東西南北も判らない。地理感覚もないので、旅行へ行っても、秋田県の隣が長野県であったりする。

女に道を訊くなとよく云うのは、女性の多くが地図が読めないからではない。男でも道を尋ねてもきちんと説明できない人は多い。一度、電話で家を訊いたことがある。一国道から来ると、こっちの方へ曲がるのよ。こっちに入ってきたら、猫がいるから、そこを反対の方に曲がって……。

と、説明を受けるのだが、あっちとか、こっちとか、どっちなんだよ。猫だと云っても、同じところにじっと立っているのかよ。と、つい怒鳴りたくなる。常に自分を中心に地図を描いているのだろうが、相手の立場で物事を考えないのだ。

バベルの塔の建築が途中で終わったのは、天に届く建物を建築するといった人間どもの自惚れを戒めるために、神は作業中のすべての人間の言語を突然バラバラにした。いままで、ひとつの言語で仕事をしていた仲間が、全く判らない言葉を喋りだしたから、命令が聞けない。仕事は中断せざるをえなかった。世界の言語はそのときに分かれたという。

神は、この現代社会が、欲望の餌食になり、戦争も経済も政治もすべてが実にいい加減な方向に進んでいることに立腹された。全人類に行き先が判らなくすることで、その流れにストップをかけようとした。

タクシーが走っていて、突然、交差点の真ん中で停車した。一台だけではなかった。バスもトラックもすべての車が走行中に止まっていた。タクシーの運転手が、乗客に云った。

「お客さん、どこへ行こうとしているんですか」

乗客も、はたと考えて、

「あれ？ ぼくは、どこへ行こうとしていたんだ。運転手さんに云いましたよね」

どっちも判らないから、走る意味がない。バスも大変なことになっていた。交差点で、右に曲がるのか左に折れるのか路線が判らない。乗っている客は、みんな呆然としていて、自分がどこで降りるのか、何のために乗っているのか、目的地を見失っていた。

それは電車も地下鉄も同じだった。駅でうろうろしている人たちでござった返していた。たまたま、近くに交番があった人はおまわりさんに訊いていた。

「あのう、すみませんが、わたしは、どこへ行こうとしていたんですか」

「そんな、クイズみたいな。あんたが、どこへ行くか判りようがない。朝からそんな人で交番の前に行列ができています。それより、交代時間なんだが、相棒の警官がまだ来ていないんだ。本官も、家に帰りたいが、自分の家がどこか判らなくなっているんだ

」

と、誰に訊いてもみんなが迷子になったように、その場から動けなくなっていた。通学途上の学生たちも、買物に行く主婦も、宅配便の車も、みんな右往左往していた。テレビでは政府の広報が、非常事態を宣言して国民に訴えていた。

一今朝方より、突然、われわれの脳の中にある地理感覚が失われている模様です。ただいま、ご自宅にいる方は、できるだけ家から出ないようにしてください。また、街や会社に行かれる途中の方は、決して慌てることなく、冷静にその場に留まるようにしてください。むやみにパニックに陥ることで、事故に結びつくことも考えられます。特に、交通機関をご利用の方は、路肩に車を止め、安全なところに車などを停車させて、次の情報をお待ちください。なるべくその場から離れないように、持ち場に留まるようにしてください。

地下鉄は途中で止まったので、ぞろぞろと暗い線路の上を乗客は歩いていた。新幹線は降りることもできないので、車両に閉じ込められたまま、乗客はうんざりしていた。

ただ、もっと困ったのは、飛行機だった。

「機長、こんな大変な質問をして笑わないでください。ところで、この機はどこへ向っているんでしょうか」

機長も困惑していた。

「そんな、おれも忘れた。フライトの指令書があるから、見てみる。それに、コンピュータがオートにしているから、黙っていても目的地までは飛ぶんだ」

「機長、大変です。コンピュータも誤作動しているようです。マニュアルに切り替えて、管制塔の指示を受けましょうか」

神は、人間だけでなく、ナビシステムもレーダー誘導装置もすべて計器類を狂わせていた。

一管制塔、こちら◎○○便。羽田空港の進路を誘導してほしい。

一こちら管制塔、八甲通りを南下すると、二つ目の信号を右に折れよ。そこは一方通行で右にしか曲がれない。

一何をぐちゃぐちゃ云っている。空に信号も一通もあるか、このくそ野郎、どうぞ。

「どうしましょうか、機長。もう誰もあてにはできません」

「まあ、こうなったら燃料切れで落ちるのを待つだけだわな」

と、やけくそで口笛なんか吹いている。

空も空なら地上も大変だ。幼稚園の園児も学校の生徒も帰れない。会社からお父さんも、スーパーからお母さんも帰れないでいた。家がどこだか判らない。

「ここはどこだ。わたしはどこへ行けばいいのだ」

みんなうろろうろして泣き出す人も出てくる。国民の大半が迷子になっていた。ただ、その中で、うろたえていない人たちがいた。彼らには始めから行き先なんかなかった。

「へん、みんな何で悩んでいるの？ おれたちには帰る家もなし、どこで寝たっいいい

んだよ」

乞食だけが元気がいい。いや、もう一人いた。

「閣僚からしておろおろしてどうする。そのとき義経少しも慌てずだ」

どっしりと首相官邸で、ソファに座っている小鼠総理は事態をただ見守っていた。

事務官たちがひそひそと囁きあっていた。

「あの人は、普段から方向も目的もない人だからな」

神の思惑はひとつだけ外れていた。

第900話

選挙異変

市長選の話がちらほらちと話題に出てきていた。

「誰か、出馬する者はいないのか。こうなったら誰でもいいんだが、おまえやってみないか」

市役所のトイレで、助役が掃除係の契約職員に声をかけた。

「とんでもねえことでごせえます。あっしには老母と病気の妻がいますんで、そればかりは勘弁してくだせえ」

掃除夫は、血相を変えて逃げてゆく。

「こうなったら、誰かを騙して乗せるよりないだろうな」

昔は、助役も市長の座を狙っていたときがあった。いまは、国もどんな小さな地方公共団体も赤字も赤字、再建団体に転落していたから、どなたが長をやっても大変だった。何をやってもうまくゆかない。赤字は増える一方。

この北国市も市長が自殺してからは、選挙をやろうとしたが、誰も立候補しない。市長不在の異常事態が続いていた。助役が市長代行ということで、なんとか業務は遂行していたが、行政のあまりのお粗末と貧窮は目を覆いたくなるものばかり。よくも歴代の市会議員や市長が放置しておいたものだ。問題を先送りしてきた責任もあるが、そればかりではない。国も県も市町村も、どこも政治家と財界が結託して食い尽くしてしまったのだ。この国はすでにカスになっていた。魚の食えるところはすべて喰った骨だけが残っていた。

国政選挙も同じで、参議院、衆議院ともに立候補者がいない。いままでは、やりたい放題で、政治家ほどうまみのある商売はなかったが、ある時点から法律を改正して、政治家にも責任とけじめをつけてもらうことにしたら、うまみがないどころか、命取りになると、みんな次々に辞めていった。日本に政治家がいなくなった。

笹井貴志は、昭和恐慌をしのぐほどの大不況で、会社は倒産、失職してからというもの、毎日のようにハローワークに通っていた。そこも、ものすごい失業者でいっぱいだ

った。失業率がとうとう三〇パーセント台になり、企業倒産も連日ラッシュだった。

以前なら掃除でも土方でもあったが、それすらも求職がなくなると、県内、県外の求職欄には、政治家を求めるポスターだけが貼られていた。

一求む、東京都知事。

一あなたも国会議員にすぐなれる。いまなら無投票当選間違いなし。

一総理大臣募集。月報酬四百万。首相官邸、メイド、公用車、議員年金完備。

各市町村でも、わが村の村長さなってけると、募集広告が出ていた。北国市でも、市長始め、市議会議員を大々的に募集していたが、どんな貧乏していても、人々は見向きもしない。それほど、いまは魅力もなにもない仕事だった。そればかりか、非常な危険が伴う。この国をよくする材料はなにひとつとしてない。国はついに千兆円を超える借金を抱え、国債が評価が最低まで落ちると、もう誰も引き受けるものがない。国も地方も財源がない。

貴志は五十過ぎて、なかなか仕事はないのは知っていた。ハローワークの職員に、一応勧められた。

「笹井さん、大臣の椅子はいくらでも空いていますが、やってみませんか」

貴志はバカにするなとばかり顔を赤くして怒った。

「そんな、あんた、おれを殺すのか。おれには妻子がいる。年老いた母親がいる。ローンは終わったが家もある。一家の大黒柱が、あんな大臣なんかできるわけがないでしょうが」

みんな、窓口で同じことを云った。まだ泥棒でもしていたほうがいいのか、乞食のほうがましだとか。代議士もついに地に落ちた。ちゃんと報酬が得られるのに、成りたがらない。かつての代議士たちも、すべて引退してしまっていた。これで政治の世界はクリーンになるはずであったが、成り手がいない。

貴志の友人の本村浩志は、長い外国生活にピリオドを打って、本国に帰ってきた。向こうでは和風レストランで一時は羽振りがよかったが、世界的な不況で外食産業が叩かれると、もはやこれまでと、権利を売却して引き揚げてきた。メールのやりとりをしていた貴志のところに、浩志から連絡があった。

一就職先を世話してくれないか。コックでなくても何でもやるから。

貴志は頭にきていた。自分の仕事も決まっていないうちに、どうして人の就職の労をとらなけりゃならないんだ。それに、五十過ぎて、のこのこ帰国したところで、あるわけがない。考えが甘いと、貴志は思ったが、頼まれていた先を思い出した。

本村浩志が帰ってきた。奥さんと子供二人も一緒だった。空港に貴志は迎えに出た。

「おお、元気そうじゃないか。シスコも不景気らしいな」

「こっちは国が破産寸前だとニュースで見たよ」

お互いに抱き合って再会を悦んだ。

「さっそくだが、いい仕事がある。おれの名刺を持って市役所に行ったらいい」

落ち着いてから、浩志は市役所に助役を訪ねていた。

「笹井さんから聞いていました。どうぞ、どうぞ。よかった。あなたがやってくれると

聞いて、職員も市民もみんな悦んでいます。お住まいの方は、こちらにあるんですな」

「はい、祖父の代からの屋敷と田畑と、山林もありまして、やはり老後は故郷で暮らそうと思ひまして」

「そうですか、そうですか。そんなに資産がおありになる。それは、それは」
助役はご機嫌がいい。

「ところで、どんな仕事があるんですか」

浩志はわくわくして切り出した。

「はいはい、あなたには市長という要職を用意してあります。さっそく、選挙をいたしましょう。いやいや、ご心配には及びません。誰も他に立候補いたしませんから、当選確実。選挙活動というのも、一切しなくていいんですから」

周囲に、出納帳や教育委員長まで集まって、にこにこ不気味だった。

本村浩志は、市長になった。何も知らない彼にとっては夢のような話だった。広い豪華な市長の椅子にどっかりと座る。助役がそそくさとやってきた。

「ところで、市長、実印を押していただきたい書類が山とあるんですが」

見ると、かつての市営バスが第三セクターになったバス会社の債務保証書だ。市で運営していた事業はすべて法人化していた。病院も、水道もゴミの焼却場もすべてだった。それらは莫大な借金を抱えていた。

「ご存じかどうか。いままでの政治家は勝手なことばかりやっけていまして、私服を肥やして、任期が終わればはいさようならでした。いいときにしこたま儲けて、時代が変わるとそれですから、国民の不信感を集めまして、それで、法律を改正したのですな。政治家が推進したいと云った事業に関しては、本人から連帯保証人のハンコを貰うようになりまして、議員を辞めたあとでも、責任がついて回るようになったのです。道路しかり、福祉センターしかり、すべて法人にしましたので、議員や長が社長になります。それなら、いい加減な行政はできません。いままでの市長は、自殺が二人、夜逃げが三人、そうそう、一家心中も一人いましたね。あなたがやってくれるので助かりました」

「ええ、それは、話が違う。おれは、帰らせてもらう」

すると、屈強なガードマンたちがやってきた。

「そうはゆきません。ここには、お風呂も、寝室もございます。何か食べたいものがあれば夜中もお持ちいたしましょう。部屋の鍵はわたくしどもがお預かりすることになっています。不用心ですからな。はははは」

そして、ドアが閉められ、外から鍵がかけられた。浩志は、市長室に閉じこめられていた。

「おい、おれをここから出してくれ」浩志は懸命にドアを叩いていた。

全国に、こうして監禁されている名ばかりの知事や市長が数知れずいるとか。

第901話

ラジオ体操

田舎の土地が思わぬ開発で売れて、一躍長者番付に載った三上秀吉は、マンションでも億ションを買って引っ越ししてきた。有り余る金が入った。一生遊んで暮らしてもまだ余る。バカらしくて野良仕事なんかできるかと、まだ五十半ばだが、毎日豪遊することにして、家族で街に越してきたのだった。

「見るじゃ、この五十階からの眺め。ええのう、毎晩百万ドルの夜景ば眺めて、焼酎を飲める。リッチな生活だなあ」

娘はお嬢様学校に転校させた。女房は働きもので、黙って家にいられない性格。

「おら、やっぱし、加工場さパートで出るべがな」

「何ば喋ってるんだ？ そつたらだごとより、上から下までマーロン・ブランドで固めてよ、カルチャーさ行けばいい。ダンス習ったり、アロマなんとかとかな」

「あんたはどうするのさ」

「おらが、おらは美味えもん喰って、映画観て、チャバレーさ行ったり、面白楽しく暮らすべな」

そうして、喰っちゃ寝のぐうたらな生活をしているうちに、秀吉の体は完全に運動不足でなまってきていた。ぶくぶくと醜く中年太り。これではまいねとばかり、秀吉は以前の生活を懐かしんでいた。

「このままなら、おらは墮落してまる。規則正しい生活さ戻さねば」

秀吉は前は五時には起きていた。そうして、九時には寝ていたものが、街に出てきてからは、朝というか昼にもぞもぞと起きてきて、寝るのは夜中だ。田舎と街の生活時間が違う。田舎の商店は六時には店を閉めるが、ここでは二十四時間のビッグストアもあるくらいだ。真夜中でも人がごわごわと歩いている。そんなことは、田舎じゃ、夏祭りのときぐらいだ。

「よし、おらは、体ば鍛える」

と、秀吉は心機一転、五時に起きる生活に切り替えた。夏休みに入ったようで、日中でも子供らの姿が目につく。

「そうか、もう夏休みだもんな。夏休みといや、なんてったってラジオ体操だべ」

六時に秀吉がマンションの外へ出たが、車は通るが、人の姿はちらほら。近くの公園に行ってみたが、子供たちの姿どころか、ラジオ体操のあの音楽が聞こえてこない。あちこちうろうろして、探し歩いたが、どこでもやっていなかった。街は寝坊とは聞いていたが、これは酷い。と、秀吉は憤慨していた。不健康な街の生活に喝を入れなければならないと、そう思った。

マンションの管理人に秀吉は訊いていた。

「ここには、子供会はねえのか」

管理人は笑って応えた。

「大昔はあったかもしれませんが、いまは少子化で、子供の数がめっきりと減りました。ここから一番近い小学校でも、いまじゃ、村の分校並に一学年一クラスで、それも数えるほどしかいないと聞きました」

「それなら、町内会は何をしているんだ」

「町内会ねえ。一応、ありますよ。あるにはありますが、形骸化してしまい、集会もなにもいたしません。当番でゴミ置き場の整備もしたときもありましたが、いまはみんな手伝うこともなく、隣同士の顔も名前も知らないんですから」

「な、な、なんと、顔も知らねえってか」

「それこそ、死んでいても判りません。臭いがするから管理人を呼びにくるんです」

「だったら、ラジオ体操ってのはしねえのけ」

「おやおや、ラジオ体操。懐かしいですねえ。まだそんなのNHKでやっているんですか」

管理人は、話していても相手が田舎者だから初めは面白がっていたが、だんだんと煩く思えてきた。

「不健康だべ。村だば、みんな、姉さも犬まで総出でラジオ体操はするもんだ。あんたも、毎日、体操カードさハンコくれるべ。出たって証拠のよ。それ、欲しくないのけ。皆勤賞なら、マグネグナルドでフライポテトくれるんぞ」

「あなたねえ、大の男がそんなもの欲しくて、毎朝起きて体操しますか？」

「全く、街のもんはだらしがねえ」

秀吉は健全な夏休みがどんなものか教えてやりたかった。昔は、女学生雑誌の人生相談欄で、ドクトルちえこが書いていた、「健全な夏休みの過ごし方」だ。

翌朝、高層マンションの玄関先の庭に、大きな拡声器を用意した秀吉は、ボリュームいっぱい、NHKのラジオ体操を流した。軽やかなピアノのリズムで、マンションの住民は飛び起きた。みんな窓から顔を出している。

管理人だけでなく、寝間着のままの住人たちも玄関に集まってきていた。

「さあ、ラジオ体操第一よーい」と、秀吉一人だけが大声で、イチ、ニ、サン、シとやっていた。

「何よ、今日は日曜日よ。日曜くらい寝せて頂戴よ」

「朝帰りで、さっき寝たばかりなんだぞ、それなのに」

「安眠妨害だ。警察に電話しろ」

管理人はつかつかと秀吉の前に進み出て、ラジオのスイッチを切った。

「おたくねえ、ここをどこだと思っているんですか。ここは東京のど真ん中、銀座八丁目ですよ。誰が、朝早くからラジオ体操なんかしますか」

「うるへえ、早寝早起き。町内揃ってラジオ体操、それが正しい夏休みだべさ」

みんな欠伸をして戻っていった。暑くなると変な人が増える。ラジオから天気予報が流れていた。

一今日も三十八度を超える暑さが続くでしょう。

第902話

夏が来た

それは、子供のときの話だ。まだ、町には貉とかが跋扈し、融雪溝には河童が遊んでいた戦後まもない頃の話だ。

テレビもまだなかった頃のことだから、娯楽といえば、ようやく焼け跡に建ったバラックの中にあった貸本屋か、ラジオのドラマであった。ドサ周りのサーカスや、劇団が来るというので、昼間やっていない映画館に集まったりしていた。わたしは、夏休みの日記をチビた鉛筆の先を舐めながら書いていたが、それは二十日分をまとめて書いてしまうという未来の日記であった。ありもしないことを物語のようにして書いてゆくのがとても好きだった。本当のことなんか、書いて何も面白くないのだった。そして、宿題をすべてやつつけてしまうと、あとは好きなだけ遊んだ。

闇市の仕事から帰ってきたお父さんが、今日は機嫌がいいようで、バタバタと騒々しく帰ってくるなり、水屋で胡瓜の漬け物樽に腕を突っ込んでいた母さんに、大声で何か云っていた。

「あんたたちも出かけるから支度しなさい」

お母さんは、わたしと妹によそ行きを着るように云うのだった。よそ行きと云っても、白の開襟シャツだろう。普段は半ズボンにランニングシャツだった。

「どこへ行くのさ」

と、わたしたちがせきたてられているので、きっと愉快的なものを見にゆくのか、それともお墓参りに行くのか、それともおばあちゃんの家に行くのか、それとも……と、わたしの想像は膨らむ一方だった。

「母さん、おにぎりも頼むぜ」

お父さんが一番張り切っている。昔からそうであったように、お祭り騒ぎが大好きだったとお母さんはいう。何が始まるのか、わたしと妹はわくわくしていた。おにぎりを持ってゆくなんて海水浴だろうか。

お母さんは大きな塩むすびの中に鮭の頭を焼いたのをみぞって入れた。それと、水筒だ。

「早く、早く」とお父さんが玄関でうるさい。

「あんたたち、早くしなさい」と、まるで子供より大人がうるさいから、いつもの逆であった。

外に出ると、近所も家族でお出かけだ。みんな手に手に莫蔭を持ったり、重箱を持ったりしていた。我が家だけではないんだ。町内の人がかぞって、そろそろと海の方に向

かって歩いているものだから、これはきっと、お祭りなんだと、わたしは確信していた。ところが、手を引かれて海の方へと歩くのだが、一向に露店も見えなければ、お囃子も聞こえない。花火も上がっていないのだ。

ラジオの天気予報では、今日から梅雨明けして、本当の夏が来るというのだ。いままでは嘘の夏なのか。季節にも偽物と本物があるのか。子供ながらに疑問に思っていた。

海に行くのではなかった。町はずれの真っ直ぐな道路の両脇に、町の人たちは家族で、運動会のように場所取りをすると、道路端の草むらに、莫塵を敷いて、各々が道路の両側にずらりと座りこんでいた。そして、思い思いにみんなラムネを口にしたり、お父さんたちはご機嫌な顔で、ダクを一升瓶からぐびりとやっていた。

「さあ、おまえたちも、お弁当を食べながら待ちなさい」

と、お母さんが風呂敷を広げた。よその弁当には卵焼きがちらりと見えたが、うちのは塩むすびと胡瓜の一本漬だけだった。それがとても恥ずかしいような気がした。ぼりぼりと胡瓜を嚙りながら、水筒からお茶を飲んだ。お父さんは、ねじり鉢巻をして、得体のしれないアルコールを呑んでいた。左手の甲に塩を載せて、舐めながら、ちびちびと合成酒を飲んでた。

「ねえ、お父さん、何が来るの？」

妹もまだ小さいから、これから始まるものが判らない。

「いいのよ、黙ってお空を見ていてご覧、すごいものが見えるからね」

と、お母さんは南の空を指さしていた。その道路は南へと向かっている一本道だ。道の両側に座っている町の人たちは、みんな道路の南の方から何かがやってくるのを、首を伸ばして見ていた。みんなの視線が、いまかいまかと道路の向こうの空に向けられているのだ。わたしも、立ち上がり、背伸びまでして、何がやってくるのか、どきどきしながら見ていたが、どうして、こんな大事なことを学校では教えてくれないのだろうと、不思議に思っていた。

「お母さん、何が来るのさ。教えてよ」

わたしはしびれを切らしてせがんだ。

「あら、おまえは、去年はいなかったんだね。風邪ひいて家にいたものね。おととしは見たでしょう。毎年、今頃に見られるからね」

わたしは苛々して怒っていた。するとお父さんが叫んだ。

「うるさいぞ、いいか、よく見ているよ。いまな、向こうから夏がやってくるんだ」

わたしは目をこらした。耳を澄ませた。楽隊のパレードがやってくる雰囲気はなかった。夏はどんな形をしているのだろうか。教科書にも図鑑にも載っていなかった。それは入道雲のようなお化けなのかもしれないと、怖い想像をしていた。

やがて、驚いたことに、南の空からゆっくりと赤い線が北の方角へと向かってこちらへと来るではないか。みんな、一斉に拍手をした。わたしは、生まれて初めて見る、季節の区切り線が上空を通過するのを見たのだった。

「よく見るのよ。あの線が過ぎたら向こうは夏なのよ」

お母さんの声のするうちに、赤い線は真上を流れるように過ぎて行った。すると、太

陽がキラキラと獣のように吼えた。眩しい青空に気温がぐんぐんと高くなってゆくのを肌で感じていた。

それは毎年の夏を迎えるための町内のセレモニーのようなものであったかもしれない。

あれから五十年して、わたしは、老いた母にそのことを尋ねた。すると、母はまるで人をばかにしたように笑う。

「おまえ、夢でも見たんだろう。そんな赤い線なんかあるわけがないだろう」

だが、あれは夢なんかではなかった。確かにわたしはこの目で見た。季節というのは、空にくっきりと線で仕切られているのを。そのことをどうしても確かめたくて、わたしは国会図書館にも通った。大学時代の友人で、気象予報士をしているものにも訊いた。だが、どこにもその線のことは書かれていなかった。

あれは、何だったのだろうか。いまだに判らないでいる。

第903話

デジタル・イタコ

毎年、七月の下旬になれば、青森県は下北半島の恐山で、大祭が開かれる。宇曽利湖の畔の寺の境内に、イタコたちが並び、全国各地から死者の声を聞きに参拝客がやってくる。日よけの小さなテントの中で、イタコが口寄せを行い、降霊した死者の声で語り始める。イタコの前には順番を待つ人の列ができる。

その中に、弟子入りして、ようやく最近ユルシを得てイタコのデビューを恐山で果たした独身の若いイタコがいた。なんでも、出身は東京だそうで、口寄せも東京弁らしい。田舎から死んだ母ちゃんを降ろしてもらいたいと、やってきた家族は、母ちゃんが、あまり綺麗な標準語で喋るので驚いたという。

イタコの世界も代替わり。いままでの婆さんばかりでは将来が案じられる。後継ぎもいなければ、この業界も次の世代に引き継がれなくなる。いままでは一番若いイタコでも六十だった。その下がいなかったのが、何人か高校生のときに目を痛めた美貌のイタコが出てきたのだ。

霊媒師は誰でもできるわけではない。小さいときから妙に靈感が強いのか、精神的にトランス状態になりやすい統合失調気味の人になる資格を持っている。

それでも、だんだんと時代が進むと、従来の降霊の仕方では信用がおけないとバカにする若い人たちが増えてきた。

たまたま、オカルトブームから心霊ばやりで、テレビで除霊をしたり透視をしたりという番組が増えて、陰陽師までが現代では大もての有様。こんな流行に、遅れをとってなるかと、イタコの間には、新しい動きが出てきていた。

大祭のイタコたちの中で、女の子たちが行列を作っているところがあった。そこを覗いてみると、白半纏に袈裟、数珠を手にした婆さんのイタコではなかった。な、な、なんと、へそ出しのチビTにミニスカ、耳にピアスで髪染めた、二十代のその辺のイカレたギャルのようなのがイタコをしていた。松木ひろ美と名前が出ていた。

「わたしの元カレなんだけど、ナナハンで湘南をぶっ飛ばして、転倒して死んだのよ。お願い。逢いたいの」

「そう、可哀想なことしたのね。彼氏の死んだ年月日と名前をここに入力してね」

見ると、ノートパソコンが置かれている。トップページには逢いたい人、降ろしてもらいたい人の名前と命日だけを入力する画面が出ていた。

「これって、どういう仕組みになっているの？」

と、みんな不思議がる。

「本当のところは企業秘密よね。このパソコンは霊界のサーバーに繋がっているのよ。そこには、死者の点鬼簿謄本がデータベースになっているのよ。それで検索エンジンで自動的に死んだ人を降ろしてくるの。この世は生年月日で検索するでしょう。あの世では命日で検索するのよ。イタコの出張もみんなしているけど、いまやイタコもネット通販の時代でね、わたしのホームページにアクセスすると、IP電話で降霊もするサービスもしているのよ。お支払はクレジットOKよ」

パソコンが霊界とアクセスしている間、イタコはホトケ呼びをしていた。数珠の代わりにモバイルのアンテナ線をぐるぐると回していた。

アアアアアイアアーごらくのはじめのえんだにはなにがなるやなむあみだぶつものろくじがなるやわがくるみちよここはどこよふるさとならばおりてものがたりそうりょうとよぶや

すると、どうだろう。パソコンの画面にバイク事故で死んだ元カレが映像で出てきたではないか。彼女は目をうるうるさせて名前を呼んだ。

「いまよお、死国でいい女みつけてつきあっているんだ。だから、おまえも、おれのこと忘れてさ、別のカレを作ってな。じゃーにー。」

「なななな、何よ、あの態度、こっちがわざわざ横浜から声を聞きにきてやったっていうのに、マジ切れた」

たまには、泣く人ばかりではなく、こうして怒る人もいる。

ひろ美が別の人の降霊をしているときに、ひろ美のケイタイが鳴った。着メロはゴスペラーズの新曲だ。

「はい。いま、取り込み中なんだけど。取材ですかあ。五時には終わりますから。はい、むつ市内のカフェバーね、いいわよ」

ひろ美は美人だから、テレビや新聞にもたびたび取り上げられた。取材慣れしている。

カフェに行くと、北辺新聞の吉田という記者が来ていた。口髭をたくわえて、トップジョージョに似ている。ひろ美は警戒していた。いままでのマスコミとはちょっと違う。

吉田には危ない臭いがしていた。遊んでいる男には捨てられた女の怨念が染みついているものだ。ひろ美には犠牲になった女たちの顔が浮かんでいた。

取材が終わると、吉田はメルアドを訊いてきた。メールで女を誘うのが誰にも判らない。吉田はひろ美をターゲットにしたということだ。

「いいわよ。わたしも特別の人にしか教えないことにしているのよ。ふふふ」

と、ひろ美は意味深に笑った。ひろ美はこんなドン・ファンは許せなかった。多くの女たちを弄び、その怨念に対して同情的であった。

「reikai@yominokuni.jpよ。あなたのような素敵な雰囲気、いままで女の人を泣かせたでしょうね」

「いや、ぼくはこう見えても真面目ですよ。いつでも真剣です」

(うまいわ。これで騙されるのね)

吉田が、言葉巧みに呑みに誘い出そうとするのをやんわりと断ると、

「メールくださいね。きっと返信しますから」

そう云って、ひろ美は消えるように別れた。

翌日、吉田は、記者としての文のたつところで、女へのくどき文句を並べ立てたメールを、ひろ美に教えられたアドレスへと送った。まもなく、返信メールが着信していた。

「おお、さっそく餌にかじりついてきたか」と、吉田がメールを開くと、突然、パソコンの画面に別れた女たちの蠢く顔が幾重にも出てきて、呪いの言葉を吐いていた。

「殺してやる」「おまえなんか、死んでしまえ」「よくも騙したなあ」

「うわー」吉田はその場に座り込んでしまった。

イタコは死んだものの言葉を語る死口と生きているものが乗り移り語る生口がある。死霊も怖い、生き霊はもっと怖いのだった。

第904話

空室あり

毎年、ねぶた祭の時期になると、遠方から知人がやってきて、宿の手配を頼まれる。半年前で、ようやくなんとか空いているホテルを見つけることもできるが、二ヶ月前となると全くない。しかも、ちゃんとしたホテルや旅館は。すでに大手の旅行会社や代理店によって押さえられているから、個人での手配となると難しい。たとえ部屋があっても、ひとりふたりでは宿もうんと云わない。旧友が社長をしているビジネスホテルでも断られた。この人口三十万もない青森に、県内外からどっと祭期間中は観光客が押しかける。場末のどんな小さな旅館でも、その期間だけは満員である。それでも、安易に考えて、どうにかなるだろうと、車で知り合いが宿も予約しないでやってくる。

「なんとか、あなたの顔でなりませんか」と、懇願されるが、顔といっても蠅ぐらいなら泊まれる広さはあるが、大人三人となると、支えきれるかどうか。

「どんなところでも文句は云いませんね」と、釘を刺しておいて探す。

「もう、寝られるだけでいいよ」と、相手も贅沢は云わない。それで、友人の経営する老人ホームの部屋が空いていたから、頼んだ。本当は、違法なのだが、一泊二食付で五千円で泊めてもらったことがあった。

あと、一週間でねぶた祭というときに、大阪の友人から電話がきた。

一 家族でねぶたを見に行きたいのだが、飛行機はとれたんだが、ホテルの手配、なんとか頼むよ。

一 そんな、今頃では無理だと思うよ。うちに泊まれよ。

一 いや、実は、家族というのは愛人と二人なんだ。

一 そういうことか。モーテルも当日はいっぱいだというし、隣町も近辺の町の民宿もすべていっぱいだというからな。困ったな。

ともかく、無駄と判っていても探してみることにした。名前も知らないような小さな旅館に片っ端から電話帳を開いて電話してみた。どこもいっぱい、空室はない。

一 蒲団部屋でもいいんですが。玄関とか、廊下でも。

と、自分が泊まるのではないから、無責任だった。もう、これが最後だという、それも聞いたこともないホテル風韻という。住所を見ると、墓地のそばのようだ。ともかくも電話をしてみた。

一 あのう、ねぶた期間中ですが、部屋、空いていないでしょうね。当然。

と、こちらも弱気になって、そんな言い方だ。

一 いいえ、ガラ空きです。

なんと、思わぬ返事がきた。

一 ねぶた祭の一番混んでいる五日の夜ですよ。

一 はい、空いております。ただ……。

一 ただ？

一 うちのようなところでもいいんですか？

わたしは、少しそう向こうから云われると、躊躇った。何かものすごい汚い旅館か、問題がありそうだった。まあ、でも、自分が泊まるわけではないし、愛人旅行たあ、とんでもないやつだ。どうでもいい。

一 は、はい、泊まれればいいんで。ちゃんとしたホテルですよ。

一 ええ、一応は、そのようになっておりますが、それから、誠に申し訳ございませんが、当日はねぶた料金ということになってしまして……。

そら、きた。この時期はどこも祭料金で倍はとる。覚悟していなければならない。

一 料金はいいですよ。泊まれれば。

一 はい、それなら、お高いですが、一泊二食付で三千五百円ですが。

一 ええ？ なんて？ 三万五千円ですか。

一 いいえ、三千五百円です。

嘘だろうと思った。ということは、普段はその半額で二食付で二千円もしないということか。きっとすごいホテルなんだろうなと想像した。ボロボロで廊下は穴だらけ、天井からは雨漏り。

一ともかく、予約しておきます。それから、これからどんなところか見に行っていいますか。

友人とはいえ、あまり酷いところに泊めるわけにはゆかない。それで、わたしは、さっそく車で出かけてみた。風韻とは洒落た名前だが、どうも聞いたことがない。

市の郊外の林の中にそのホテルはあった。いままで、その近くは何回も通ったことはあったが、気がつかなかった。見ると、純和風の旅館で、真新しい建物であった。そんなに小さくもない。離れもあり、露天風呂もあると書いてある。わたしは、立派な造りの玄関から入った。

「先ほど、電話で予約したのですが、ちょっと見さしてください。いままでこの町に暮らしていて、知りませんでした。こんなにいいホテルがあったんですね」

電話に出た女将が、応対していた。和服がよく似合う、素敵な津軽美人だ。どこか、昭和初期の雰囲気がある。すべてがクラシック調で造られていた。廊下に貼られたカレンダーも真新しいが、昭和二十九年とある。窓もドアもすべてが、現代建築ではない、木製である。わざわざ作らせたという、実に高くついただろう。部屋もお風呂も案内されたが、申し分ない。これであの料金というのは激安だ。ここは、ひょっとして、誰も知らない穴場なのかもしれない。

「いやあ、気に入りました。こんなところがあったなんて、みんなに宣伝しておきますよ」 食事は期待できないと思ったら、見本の写真を見せてもらった。二の膳もついで、刺身の盛り合わせに季節のてんぷら、焼き物、蒸し物と十五品も郷土料理が並んでいる。とても信じられなかった。

帰りがけ、わたしは、この林の中に隠されて、見えないから立地で損をしているのかなと思ひました。

当日になって、友人がかなり派手な女を連れて青森空港に到着した。空港は団体客などでかなり混みあっていて、ひとまず、ホテルへ荷物を置きに行くことになった。わたしは車で二人をホテルまで案内した。

「よく取れたな」「それが大変だったんだ。どこも塞がっててな。なんとか頼みこんだ」

「しかも、君のおかげで、格安で泊まれるなんて、すまん」

車が、林の中に入ったら、道路が雑草で覆われていた。

「おかしいな。先週来たときは、こんな草ぼうぼうじゃなかったぞ」

仕方なく、わたしたちは、車を降りて、歩いて林の中のホテルへと向った。やがて、木立が切れて、ホテルが見えてきた。屋根には大きな穴があいて、建物が崩れかかっている。窓ガラスはすべて割れて、蔦が絡まり、廃屋となって何十年も経っていたらと思うホテルらしき建物が。

第905話

当節警官事情

犯罪が増えたから、警察官を増員すると政府は公表した。だが、増える犯罪には追いつかない。未解決事件も増え、検挙率も落ちた。警察の不祥事も多くなり国民の不信感は募っていた。

若者たちが根性もなくならなくなった。その傾向がそのまま若い警官にもいえる。

ここは、犯罪がもっとも多いとされる新宿歌舞伎町。そこの交番が一番忙しいと云われる。だが、警官たちの間では、誰もその交番の勤務はやりたがらなかった。忙しいのもそうだが、何よりも怖いというのが本音だった。

交番の前には警棒を手にした警官二名が常にじっと立っていた。繁華街を歩く人たちに目を光らせているようであった。その厳格な顔と、屈強そうな体格が、見るものに威圧を与えるほどであった。それぐらいの選ばれた警官でなければそのセクションは務まらない。真面目で、笑ったり雑談することなく、四六時中、微塵も動かないで警備のために立っている姿は、ロンドンの近衛兵にも似て、都民の目には、さすが鍛えられている精鋭という好感すらもてた。

それでも、犯罪は日常化し、平然と昼日中から堂々に行われるようになった。特に、無目的の青少年の犯罪は防ぎようもなかった。突発的、衝動的、理由なき行きずりの傷害事件が都民を戦かせていた。むしゃくしゃするから、いきなりブスリだ。警官は何をしていたのかと非難されても、そればかりは防ぎようもない。日本は、長引く不景気と、失業率が高くなったのと、外国人の不法滞在で、様々な事件が増加傾向にある。新宿歌舞伎町はその縮図のようなところであった。

「キャー、スリにやられたわ。どうしよう。財布をすられちゃった」

中年のおばさんが、交番へと駆け込み、たったいま被害にあったことを告げたが、警官たちは取り合わない。たかがスリぐらいで騒ぐなというところか。完全に無視していた。スリなんかは小さな犯罪だった。

車が通行人に接触して転倒させ、怪我を負わせたのにひき逃げだ。普通なら、すぐ近くの交番で立っていた警官も目撃者だったが、まるでかわりになりたくないとかばかり、動かないでいた。通行人はすでに、警察不信感になっていて、頼りにならないと思っていたから、自分たちで救急車を手配して、怪我人の手当てもしていた。

「とんでもない時代になったな。交通事故ぐらいでは、警察は動かなくなっているなんて。われわれは、自分の身の安全は自分たちで守らなければならんのだ。もう警察はあてにはならん」

多くの人たちはそう思っていた。それがあたりまえの世の中になったと諦めて、抗議もしない。

と、白昼から暴力団同士の市街戦が始まった。パンパンと拳銃の発射音が続いた。通行人たちは、キャーと悲鳴をあげて、逃げ惑う。流れ弾に当たった女性が、胸から血を吹き出して、その場に倒れた。繁華街は騒然となった。誰かが無駄と判っても、ケイタイで百十番に電話をかけていた。目の前の交番に駆け込むどころか、見ているはずの警官二名は、じっと動かない。酷いという声の人々から囁かれた。

「きっと、見なかったことにしようと、後で口裏を合わせるのよ。全く、度胸がないんだから」

そう非難する人はまだ内情を知らないからだ。

こんな事件で驚いてはいけない。あちこちから、煙がもくもくと出ていた。真夜中ではなく、昼から放火だ。ビルの隙間に積んであるゴミに火を付けて歩いているいかれた若者たちがいた。一軒の商店はめらめらと燃えあがってものすごい煙が商店街に充満していた。やがて、救急車と消防自動車駆けつけてきた。それでも、警官二名は動こうとしない。管轄が違うというのか。それとも職務怠慢なのか。

その昼火事の騒ぎに乗じて、近くの銀行が強盗に襲われた。カウンターに積んであった一千万を盗ると、ナイフで行員を刺して逃げた。非常ベルが鳴った。それでも、近くの交番の前に立っている警官たちは、出動しないのだった。あまりにも事件が立て続けに起こって、動けないものか。怖い顔をしているが、本当は気が弱いのではないか。みんなそう思っていた。

歌舞伎町はすでに無法地帯となっていた。強請が堂々に行われ、麻薬が公然と売買され、殺人事件も頻繁と起こっていた。道路の端に死体が転がっていても、もう誰も何をするとすることもなく、関わりになりたくないと見て見ぬふりだ。

それをいいことに、少年たちは、コンビニから集団万引、宝石店では強盗、停めてあった車では車上荒らし、ビルの屋上から人間が落ちてくる、マンションの上の階ではガス爆発、喧嘩で怪我をした男が血だらけで歩道を這っている。

それでも警官は動かない。もう勝手にやつてくれと匙を投げているのか。毎日、目の前でこんなことばかり起こると、取り締まることがアホらしくなる。

そんな現状を見て義憤を感じた地方から来た中年男が、頭にきて、交番へ怒鳴りこみに行った。

「あんたら、警官だろうが。この惨状を見て、なんとも思わんのか」

それでも、じっとただ立っているだけの警官を見て、おかしく思った男は、近づいて警官に触ってみたりした。

「なんだ、精巧に作られているが、人形じゃないか。国も赤字で、公務員を減らす方向にあるからな」

警官もついにでくのぼうになっていた。いてもいなくてもいい、ただの案山子だった。だけど、誰もそれに対して腹を立てない。まだ人形のほうが許されると思っていた。世の中、実に情けない話になってきた。

第906話

朦 朧

朝からの猛暑。仕事場でパソコンを打っている手が緩慢としている。ラジオの天気予報では三十四度。まだまだ上がるか。ふっと、次にやるべきことを忘れていた。おれは、何をしようとしていたのか。頭の中がぼうとして白濁していた。脳の中のタンパク質が卵白のように固まったか。脳膜炎ではないんだ。次の言葉も出てこない。とにかく、うだる暑さの中で、ひたすら眠い。真夏の眠気を邪気として、祓うためにねぶり流しがあるというのが、ねぶた祭の由来だ。じゃあ、ねぶたをやればいいのだ。

おれは誰もいない店でつと立ち上がり、ねぶたの跳人よろしく、ひとりで跳ねていた。これで少しは眠気も覚めたか、と思いきや、疲れてますます眠くなる。何もやる気がない。

こんなときは、仕事なんかやめて、本でも読もうと、読みかけの本を開いたが、もっと悪い。活字が追えない。目がとろんとして思考力がゼロに近い。

朝から古本屋に客が来ないのは、暑くて本なんか読みたくもないのだ。そんなときに、サパークラブを経営しているマスターがひょっこりと顔を出す。

「いやあ、暑いねえ。ここも蒸し風呂だね」

マスターはご機嫌だった。

「暑いと、飲み屋はいいっていいますね」と、おれ。

「そうなんだ、連日客入りがいい。生ビールが出るから上がりも多いしな」

と、わざわざそれを云いに来たのか。

続いて、電気店の店長が、やはり油を売りに入ってきた。

「こんなに暑いと、本なんか読んでられないな」

と、何しに来たのか。

「店長ところも、景気いいでしょう」

「そうなんだ。エアコンと扇風機はメーカーで増産中。店頭在庫は品切れよ。わはははは」

こいつも、わざわざ笑いにきたものか。気温が一度上がれば、日本の景気は何百億だか何千億だかよくなるというが、おれたちには関係のない話だ。

「おやじ、いたか」と、今度は衣料品の問屋だ。

「あんたとこもひょっとして笑いが止まらないとか」

「そうよ、ご名答。いつもなら、夏物見切りに走るところが、今年は残暑も厳しいらしく、まだまだ押せる」

この商店街でもほくほくの店が多いのだ。長引く不景気に喝を入れるような猛暑だった。

また、わざとらしいやつが入ってきた。近所の酒屋のオヤジだ。

「おう、文学青年、やっとなるな」

「何が、文学青年だ。もう、中年だよ。それより、あんたとも、前年対比で、二割増しの売上げか」

「冗談云っちゃいけねえ。二割だと？ そんなしけたこと。うちは五割増しで売れている。まあ、飲み屋の卸しも入れての話だが」

なんで、忙しい人間が次々と暇な古本屋に威張りに来るんだ。塩があったら撒いておくところだ。

「ふふふふ」と、今度は笑いが止まらない向こう隣の医者だ。

「先生とも景気がいいんですかい」

「いってものじゃありません。ようやくお昼で逃げ出してきましたが、待合室は患者でいっぱい、ふふふふ」

気色悪いやつだ。暑くなれば病人も増えるのか。というと、やはり向こうから嫌なやつがやってきた。あいつは医者と結託しているんじゃないだろうな。

「おお、ここは別天地だな」

「悪かったな。がらんとしていてよ」

「いまどき珍しい」

「うるせえ、どうせ、おまえのとも、死人がいっぱいで儲かっているんだろうよ。新聞の死亡広告は暑くなると、二段、三段と増えるからな」

笑いが止まらないのが、近所の葬儀屋。人ひとりうん百万だ。でも、職業柄、笑っちゃいけない。普段は悲しげな、神妙な顔をしているんだが、やつの本当の顔を知っているのはおれぐらいだ。

「そうか、みんな景気回復したのか。蚊帳の外はおれだけか」

おれは、ふてくさり、ますます頭の中が朦朧としてきた。風吹けば儲かる商売。暑くなれば儲かる商売。暑くなっても寒くなっても、クーデターが起ころうが、大地震が起ころうが、なんにも変化のないのが古本屋。ただ、暑いと、本なんか読んでられない。暑苦しい活字なんか、頭に入らない。

できるだけ体を動かさないことだ。じっとして、体力を使わないことだ。少しでも動くと汗が出る。何も考えないことだ。ただ、ぼうとしていればいいんだ。

からかいの客去り静かな古本屋。

第907話

紫陽花男

「おれは紫陽花が好きだ。男が、何の花が好きだとはとても恥ずかしくて云えないが

、昔からそうだった。家を建てたときは玄関の両側に紫陽花を植えるんだと決めていた。いまでは、かなり増えて、大きくなっている。紫陽花は六月生まれのおれの誕生花のようなものだったね。ただ、この北国では七月でなければ綺麗に咲かないから、梅雨時のイメージよりは夏のほうがぴったりとするんだ。

紫陽花には海があり、アイスクリームが似合うとどこかの詩人が云ったよな。おれは、そのどちらも好きで、ベランダから海に見える家に越してきたんだ。そして、好物のアイスクリームを舐めるのが夢だった。何故か、それがビールでないところが不気味なんだが。

そして、何よりも紫陽花の好きなところは色なんだな。どの色も好きで、色変わりがするところがいい。そうそう、小さい頃に、駄菓子屋で、変わり玉ってのがあったろう。大きな丸い飴で、舐めっていると色が変わるんだ。嚙って割って見たら、着色した飴が幾重にも層になっているんだ。まあ、あれに似ている花だということだ。

昔、石坂洋次郎の原作のテレビドラマで『あじさいの歌』というのがあり、おれと同じ年頃の女優が中学生役で出ていた。初めてのカラー放送があった頃で、テレビの画面が妙に爽やかな感じがして、内藤洋子もまた、セーラー服がよく似合い、おれの中で紫陽花と少女と紫色の制服が重なっていた。それからだ。おれの一番好きな色が薄紫となっていた。いまでも、その色が視界に入ると振り返って見た。どこかに海を感じるのは、その色が海にも通じていたからだろうか。

あじさい寺というのが鎌倉にあった。北鎌倉にある小さな寺で、明月院とかいったな。普段は誰も訪れない寺なのだが、境内が紫陽花で埋め尽くされる六月になれば、観光客で溢れかえる。学生時代に交際していた人は、横浜の国立大学の鎌倉寮に住んでいた。おれたちは、よく鎌倉で待ち合わせをした。当時、カメラを趣味にしていたおれは、公募展に出そうと、彼女をあじさい寺でモデルにした。白地に紫の柄のワンピースを着てきたが、紫陽花を背景にした写真は、顰みにならう西施のような憂いを偶然と表現していた。もう、三十年になる。どこでどうしていることか、いまだに、おれの棺の中に写真だけが残っているんだ。

女といえば、誕生日に紫陽花をリボンと和紙で包んで貰ったことがあった。そいつを花瓶で長く咲かせようとして、薬局でミョウバンなんか買ってきたのだが、どうしても枯れてくる。おれは、長く咲かせることで、二人の関係がその分続くのだと思いこんでいた。それで、庭に植えてみたんだ。ところが、そいつは根づかなかった。とうとう死んでしまった。春に出逢ったのが、夏には別れていた。

それは思いだけではなかった。肥料も水もやり過ぎた。女は自由にさせておくのがよかった。あるいは、土が合わなかったのかもしれない。玄関の紫陽花は造園業者にちゃんと植えて貰ったのだが、そいつだけはもりもりと咲いている。おれがシロウトの手で庭につけた樹木はすべてつかなかった。

紫陽花の色はどれも好きだ。紫、赤紫、薄紫、白。そうして色を変えてゆくのが、おれの気分ぴったり合うんだ。A B型の双子座という性格に似ているんだらうね。多重人格、気分屋、移り気、飽きっぽさ。おれは、住むところも三年と同じところには住め

ないほど、あちこちへ転居してきた。ひとつの町に永住するということが考えられない。北斎のように、バタバタと引っ越ししたくなる。だから、私物は少ないのだ。いつでも風呂敷ひとつで引っ越しできるように、蔵書もなければ衣類も少ない。

飯を食いにゆくときも、飲み屋に行くときも、行きつけというところがあまりない。同じ店に何度も行くのが何か人生の時間の中で勿体ないと考えてしまうんだ。だから、行ったことのない店、新しくできた店にいつも飛び込むんだ。そうすると、また新しい味と出逢えたり、話しをしたことのないホステスと出逢うこともできるわけだ。常に、新しいものを捜すんだね。

旅行もそうだね。一度行ったところには二度と行かない。どうせ行くなら、見聞を広めるために未知の世界に足を踏み入れてみたいね。そう思わないか。

さっき、気分屋と云ったのは、おれは、突然豹変するんだね。髪を長くしてみたと思ったら、ばっさりと坊主になってみたり、口髭を生やしたと思ったら、女装してみたくなったり、自分自身にも飽きてくるんだ。

まさしく、紫陽花がおれの生き方そのものなんだ」

すると、いままで傍で一方的なおれの話聞いていた愛人は、苛々した口調で話を制した。

「あなた、何を云いたいよ。さっきからぐちゃぐちゃと訳の分からないことばかり並べたてて」

女は短気だった。遠回しな云い方は嫌いなのだ。おれは続けた。

「そんな定まらない性格だから、当然、女にもすぐ飽きる。ころころと相手を替えてきたわけだな。だから、おまえも、こんないい加減な男とつきあっていると、ろくな事がない。別の男を見つけたほうがいい」

「別れるってこと？」

ああ、喋りだせばどこまでも続く別れ話。その紫陽花だって、いつまでも咲いているわけじゃない。暑い夏が終われば醜くしなびたように枯れてゆくんだ。

第908話

雷怖い

おれには、誰にも云えない恥ずかしい秘密があった。いままで、誰にも話したことはない。きっと、秘密を知ったら、笑うどころか、実に情けない男と、おれに意気地なしの烙印を焼き付けて、そういう目で見られるだろう。

人間、何かひとつぐらいは苦手なものがあっていい。それが、おれの場合は雷だった。地震は、家が潰れるくらいのなら、きっとみんな一遍にお釈迦になってしまうのだ。自分一人で死ぬのではないから、そう怖いこともない。それより、古本屋をやっているんで、本が全部棚から落ちることが恐ろしい。後で整理するのが大変だ。

火事もそう怖いと思ったことはない。隣近所の火事には小さいときからよく遭遇した。いまは、家が焼けたら、売れない家のことだ、保険金が入ると嬉しいと、水をかける代わりに、ガソリンをかけるかもしれない。

オヤジは怖いと思う。自分で自分のスタイルを風呂上がりの鏡に全身を映してみても判る。とても直視できない。ああ、腹のでっぱりと、垂れた乳、昔の映画俳優と云われた面影はまるでない。自分がいつかオヤジになってみると、いまのオヤジは随分と優しくなった。まるで迫力がない。オヤジは怖くなくなったのだ。

ということで、おれのトップは雷なのだ。臍をとられるから怖いのではない。どうも、いつも狙われているような恐怖を感じるので。雷だけは人ひとりに落ちる。そして、たまたま運のないおれにどうも当たりそうだった。宝くじや懸賞では当たった試しがないが、そんな運のないやつに限って雷には当たるのだ。

夕方から急に土砂降りの雨が降ってきた。雨だけならいい。急に、ピカッと光りやがった。おれは、いつもの癖で、光ってからゴロゴロドッカーンと鳴るまで指折り数えて、何秒かと計算する。五秒で鳴ると、掛ける約三百四十メートルなのだ。それで落ちたところまでの距離が判る。その間が開いてくると、雷雲は遠ざかったことになり、狭くなってくると近づいてきていることになる。

丁度、店を閉めて帰るときであった。ザザ降りだから、外を歩く人もいない。車だけは信号待ちで並んでいる。雷が落ちてても、車の中は安全だった。ゴムのタイヤで絶縁しているからか。

店から住まいまで歩いて五分少しなのだが、おれは、そろそろと建物に添うように歩いていた。まるで、家の壁をひたひたとへばりつくようにして歩く、怪しいやつに見えただろう。だが、いつまでも家が續くわけではない。必ず、道路で分断される。人様の家の軒下で、傘もさしているのだが、おれははたと足を止めた。道の幅は少なくとも五メートル、いや七メートルはあるだろう。その道を渡らなければならない。ということは、あいつに見つかってしまうのだ。あいつは、おれを狙撃しようとして狙っているのだ。隠れるところがない。よし、と、おれは意を決して駆けだした。すると、同時にピカッとドッカーンと、大きな雷が近くに落ちた。

「おぐわあぢやーん」と、おれは言葉にならない言葉でお母ちゃんと叫んでいた。足は震え、歯はがちがちと鳴っていた。よし、ようやく道を渡れた。

そして、またそろそろと建物に添うように歩いていると、な、な、なんと、駐車場があるではないか。そこだけは、家と家が離れて、周りに何も無い。何も無いということは、雷が落ちてきても不思議ではない広い空間があるということだ。

おれは家の玄関先で雨宿りをするふりをして、立っていた。次の雷が落ちたら、すぐに走ろうと待っていた。それは戦場で、大砲が立て続けに撃たれて、小休止の間に走るのに似ていた。雷が近くに落ちた。さあ、いまだとばかり、おれは走った。すると、卑怯な雷は式連発で、次のもっと大きなやつをバリバリドッカーンと落とすやがった。

「あわわわわ」と、おれはズボンを濡らしていた。あまりの恐怖にチビったのだった。

この先の東北本線の下を潜るトンネルに入ってしまったら、こっちのものだ。おれは、頃合いを見計らって全速力で走った。まるで、それを狙うかのようにバリバリと光りやがる。おれは、ようやくトンネルに入った。そこは安全だった。ただ、問題は、トンネルの向こうに出たら、家までの線路際というあまり高い建物が無いところをどうやってクリアするかだ。

一目散に目を瞑って走るよりない。それは、敵陣に爆弾を背負って走る恐怖にも似ていた。通行人の一人でもいたら、たとえ、それが小学生でも、いや、幼稚園児でもいい、一緒に行こうと、ぴったりとくっついて歩きたいところなのだが、不運にも人っこ一人いやしない。

トンネルを出た。何も隠れる場所はない。覚悟を決めて、おれは稲妻が光る下を走った。ピカッとすぐ真上で光った。危ない。こんなときに、金属のものを身に付けているのは自殺行為に等しい。おれは、傘を遠くに捨てて、雨にずぶ濡れになりながら走った。いや、走るとますます標的としては目立つから、ゆっくり歩いたほうが見つからないかもしれない。また光る。腕時計も靴もその場に捨てた。まだ金属のものを身に付けている。ベルトも危ないと、そいつも道端に捨てた。まだある、眼鏡も危ない。おれは眼鏡も捨てて、ゆっくりと、時折急ぎ足で逃げた。家まで泣き出しそうだった。ゴロゴロピカピカ。もうやめてくれ。お願いだ。まだ金属のものを体に付けていることに気が付いた。おれは、部分入れ歯も外した。そいつも惜しげもなく捨ててやった。あとはないか、いや、ある差し歯だ。差し歯は抜けないだろう。金玉は金属ではないのか。

おれは、涙と雨と小便でぐちょぐちょになって、命からがら家のドアを開けて倒れ込んだ。

「助かった。やった。おれは助かったんだ」

九死に一生の感動のドラマであった。ただ、雷のたびに時計と入れ歯と眼鏡をなくしてはいるが。

第909話

浪速のことは夢 其の壱

大阪。その街はわたしの最も好きな街である。東京は暗く、わたしを受け入れない学生時代があり、わたしは自閉症のように自分の殻に閉じこもっていた。

失恋という大きな痛手もあって、目的を失い、ただ流されるままに生きていた。

「バカなやつだ」と、上京してきた父親からは罵倒され、

「おまえというやつはいつまでそうしているんだ」「おまえを見ていると苛々してくるんだよ」と、同郷の旧友たちからは詰られていた。グズでのろま、はっきりしないやつだった。自分でもどうしようもないやつと自己嫌悪しているほど、死にたい気持ちにな

っていた。

わたしは、就職も父親の友人に勧められるまま、自分の意志というものがまるでない人形のようにであった。大阪のビッグストアの試験を本社でたった一人だけで受けた。人事部の課長は、試験の結果を笑って見ながら、

「あなたの合否は結果とは関係ありません。もう入社が決まっているようなものですから、安心してください」と、屈辱的に云われた。裏口入社なのだ。父親が社長と友人ということで、二月という時期外れの形だけの試験になった。

四月。わたしは、周囲の人間に最後まで怒鳴られながら、思い返すと赤くなるような皮肉を浴びせられ、ようやく着いた大阪のアパートの引っ越し荷物の中に座り込み、大声で泣いた。

かつてのわたしを知らない全く新しい土地に来たことで、わたしは逃亡者のように自分を変えようとした。いままでの自分は捨てて、がらりと積極的に振る舞う自分をこしらえた。引っ込み思案で、何をすることも自信がないから踏み込めない。人前に出るのを極端に懼れた、そんな暗い性格を捨てて、全く新しい自分に成りすますため。

大阪は堺の店に配属されたわたしは、そこから別人になった。積極的に挨拶をして、先輩同期の名前を、二百人くらいいたが、一週間で覚えた。できるだけ人と話すようにした。いままでの自分の気持ちの逆を行くように自分に命じた。右へ行こうとすると、わざと左へと歩かせた。

大型店だから、デパートのようなもので、わたしは子供服売場に立った。各売場でタイムサービスをやっていたのを、一度やってみようと、サービスコーナーでマイクを手にも、館内放送をやった。

一本日のご来店誠にありがとうございます。ただいま、三階子供服売場におきましては、おしゃれ着、ジョーゼットのワンピースが二九八〇円と均一ご奉仕をいたしております。数に限りがございます。お急ぎ三階エスカレーター前のハンガーまでお集まりください。

「あいつ、一週間前に入った新入社員やないけ。早いな」と、先輩に目をかけられた。店頭販売もかって出た。ワゴンに特価商品を山積みにして、ハンドマイクで呼びかけ、手を叩いて客寄せをする。それは、十日前のわたしではなかった。

ダメな自分は東京へ捨ててきていた。変わろう、変わろうとすれば人間は変わるものだ。初めは演技でもいい。それがだんだんと型に嵌ってくるのだ。

大阪というところは、東京を敵対視している。文化圏がまるで違うから、テレビ番組も違ったものをやり、当時出てきていた吉本新喜劇というのが大当たりで、間寛平や木村進というのが人気が出始めていた。わたしも、同姓で、進とみんなに呼ばれて、アホなことばかりやって笑わせていた。昭和四十九年だったが、そのころ、テレビで流行っていたギャグを東京の友人や姉妹に教えても、何のことが判らないほど、芸能界まで東と西は二分されているのかと思ったほどだった。吉本の名が東京では通じない。

それで、勤めた当初は、標準語ではないが、東京から来たので、東京弁なるものを話していたが、みんなから「いい格好しい」と云われ、東京弁は極端に嫌われた。女の子

たちは、そうでもなく、その言葉がいいと擁護してくれていた。

「自分、青森やろ、ずうずう弁使こうたらええやん」と、東京では田舎者の代名詞のように青森と笑われていたのが、この大阪では、青森というと、みちのく、憧れの雪国として、馬鹿にされることはないどころか、言葉まで聞かせてくれと求められた。津軽弁はもてはやされた。方言を大事にするというのは、ここではあたりまえのことに思われていた。

周囲の女子社員の多くは、四国や九州の田舎から、この大阪に就職できていた。みんな、初めは恥じらうことなく、田舎言葉丸出しであった。そこが東京とは違った。思えば、東京で友人も少なく、孤立していたのは言葉の障害があった。多くの地方出の若者たちが経験することではあるが、訛があるため、どうしても会話に入ってゆけない。最初から都会になじめないで失敗すると、友人も作れないのだ。そして、県人会や、同郷の旧友といつまでも繋がっていたりする。

そうしたことが、関西ではすっかりと切れることができる。周囲を見渡しても、青森出身というのがいなかった。逆に珍しがられた。わたしは、遠い奥の細道のその先からわざわざやってきた珍種としてもてはやされることとなった。

第910話

浪速のことは夢 其の弐

週休二日制というのがその頃からあった。店の定休日が火曜日。それ以外に一日、ローテーションを組んで休めるのだ。定休日には仲間たちとどこかへ行けるのだが、ひとりの休みは、東京時代と同じで、大阪の町中をひとりうろつくことになる。古本屋巡りと中古レコード屋を捜して回るのと同じだった。

アパートといっても、玄関も廊下もトイレも共有の間借りだった。四畳半に申し訳程度の台所がついていて、その狭い部屋はレコードと本で埋まっていた。冷蔵庫も一人用の小さいのがあったし、その中にはいつもバターと卵と納豆だけは入っていた。仕事の日には昼と夕食は社員食堂で食べられるが、休みの日はいつも飢えていた。外食することは贅沢だと、仲間と行くのでなければひとりでは食堂にも入らない。それで、二合炊きの炊飯器でちゃんと飯を作った。流しはあったが、ガスがないので、電気ポットでお湯を沸かし、カップラーメンをお吸い物代わりにして、ご飯の上にバターを溶かしこみ、醤油をかけて食べたり、生卵をぶっかけて食ったりしていた。

アパートの屋根の上に物干し場があった。洗濯は、共同の流しで大家のおばさんから、洗濯板とタライを借りて、手で洗う。物干し場からは、住吉大社の杜がこんもりと見えていた。この辺りは、何か寂れた感じがしていたが、すぐ裏手に入れば、帝塚山とい

う高級住宅街、山の手になっていた。

休みの日は、わたしは近くに乗り場のあるちんちん電車に乗って、天王寺まで出た。路面電車はいまだ古い車両が使われていて、庶民的でありよく揺れた。天王寺は上野のような気がした。何かと、大阪の町を東京と比較して考えていた。国電の環状線がある。大阪城と皇居は山手線の中にあり、天王寺から通天閣の見える新世界の界隈に足を踏み込めば、そこは浅草だった。動物園と遊園地があるところも上野と似ていた。四天王寺の寺もある。西成のドヤ街が山谷にも似ていて、そんな似た街の配置と臭いが共通してあったところが、判りやすかった。

ただ、気取ったところがない。大阪は巨大な庶民の町である。その町特有の臭いが好きであった。自分にぴったりとしていると思う。

新世界はいかがわしい店があつたりして、立ちんぼもいたり、やり手婆が、潜んでいたり、風采のよくないにいさんたちが、うろうろしていて、若いアベックの行くところではない。だが、その性の臭いと前近代的な風俗の、見捨てられた町というアンバランスな界隈が好きでよく行った。

三本立の去年封切られたような映画を格安で観せていた。そこで、どろどろした後味の悪いヤクザ映画なんかを見たりした。観た映画のことなど全然覚えていないのだが、ひとつだけこれも安っぽい映画だったが、青森の十三湖が舞台になる映画で、確か「津軽三味線」というヤクザに追われて青森まで逃げて殺されるとかいう設定の、何か暗い映画であったが、郷里が出てくるので感激して観ていた記憶だけが残っていた。

新世界というと、新しい町という雰囲気はあつたが、連れ込み宿あり、博打場あり、朝から屋台で呑んでいるおっさんがいて、まだ二十二歳のわたしなんか通ると、お姉さんが、声をかけてくる。

「お兄ちゃん、ショートで三千円でいいから、遊んでな」

そうした緊張感がたまらない。人間界の掃き溜めか、吹き溜まりか、大阪の裏面史がそこには息づいていた。

汚らしい食堂に「びっくりぜんざい百五拾円」と下げピラが貼ってあったので、一瞬、どんなものだろうかと立ち止まり、甘党のわたしは吸い込まれるようにして入った。果たして、洗面器みたいな大きな器にかなりの量のぜんざいが入って出てきた。さすがのわたしもたじろいだ。食べられるだろうか。

大阪の食べ物は関東とはまた違った。このぜんざいと呼ばれているものは、関東ではお汁粉だ。水っぽいのだ。お汁粉を頼んだことはないが、きっと大阪ではそれは単なる小豆湯のように薄いのもかもしれない。

けつねうどんというものにも驚いた。ダシ汁だから、醤油色をしていない。丼の底が澄んでいるから見えるのだ。一瞬、わたしは、店の親父が醤油を入れ忘れたものと思った。だが、呑んでみるとちゃんとしょっぱい。いい味を出していた。それが定食になっていて、ご飯が付いてくる。どうやって食べるのだろうかと思つた。どっちも主食ではないのかと。

環状線で大阪駅まで行く。そこで京都行の電車に乗り換えた。わたしは、自分が何を

しているのか判っていた。吹田で降りた。駅前の「再会」という喫茶店に入る。すると、同時に大雨が降ってきた。あのときと同じだった。ここで逢ったのだ。雨で出られな
いでいた。まさか、後を追ってきたというのか。わたしの信条は来るものは拒まず、去
るものは追わずではなかったのか。

この町のどこかですれ違うかもしれないと、わたしは三年経っていたが、いまだ犯人
のように顔を隠してコーヒーを飲んでいて、足を踏み入れてはならない町であった。す
っかりと思い出していた。ここは、あの人の実家のある町なのだ。

大阪に来たのは、わたしの意志ではなかった。意志があるなら、もっとも遠い町を選
んだはずだ。タバコが一本きりになった。それがなくなったら帰ろうと思った。

傘がなかったから、駅まで走った。あのときもこうして走った。大阪万博の夏の雨が
、駅のホームを濡らしていたとき。

ひとりになるとわたしは元の暗いやつに戻っていた。電車を乗り継いで、天王寺の駅
で降りた。またちんちん電車に乗ってアパートまで帰るだけだった。すっかり夜になっ
ていた。淋しい通りを歩いていると、横丁から中年女の声がかかった。

「お兄ちゃん、いい子おるで。まだ生娘や」

わたしは、無視する傍ら、その声の方向にふらっと行きそうになった。ポケットには
小銭だけ。給料日までまだ二週間もあった。

第911話

浪速のことは夢 其の参

会社には男子寮と女子寮があった。女子寮は仁徳天皇の御陵の傍にあり、男子寮は阪
和線の和泉府中というところにあった。店が商業の町として昔栄えた堺にあった。いま
は、臨海工業地帯がどんどんと建設されて、商業の町というイメージはない。利休と与
謝野晶子の町という文化的イメージからもほど遠い。

わたしは、よく男子寮に吞めば泊まりに行った。

電車で途中通過するところに、信太山がある。葛の葉で有名なところだ。

恋しくば尋ねきてみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉

狐の恩返しで、狐の母から生まれたのが、陰陽師の安倍晴明だとされる。

その当時の信太山は、先輩から聞いた話では売春アパートの巣窟であり、シロウトの
主婦たちが生活費を稼ぐために安く体売っているということであった。

わたしは、葛の葉の話と重ね合わせ、きっと、妖狐たちが、若い男たちに自分の息子
の影を求め、また年上の母性を犯すことで、何か危ない近親相姦の臭いを求めて、若い
男たちが、尋ねてゆくものと思った。

「十五分で二千円らしい」と、電車で酔った先輩が話していた。

「どや、自分も筆おろしせえへんか」

と、からかわれていた。まだ童貞であったのを見破られていた。

田園地帯に男子寮が建っていた。鉄筋コンクリート造りの研修所のような立派な建物だ。二人の寮生には広すぎるほどの部屋で、十五畳はあったろうか。わたしは、同期入社の子三輪と仲がよかった、広い部屋に蒲団がひとつと、週刊誌などが散乱しているだけの殺風景な部屋に驚いた。本棚というものがなく、本は床に積んであったりした。

呉服部門の先輩の部屋にみんなが集まって麻雀をやり始める。わたしはその頃は麻雀ができなかったので、隣の部屋でギターをつま弾いたり、エロ本を見たりしていた。壁に三輪の字で、（今年こそ童貞を捨てる）と、決意が貼ってあった。

寮のトイレには、寮母さんの書いた短冊が座る正面の壁に貼ってあった。

慌てずに脇に散らすな棹の露吉野の桜も散れば汚し

というような短歌が書かれてあった。それがトレイの中、みな違う歌だということで、寮母さんの博学に感服したものだ。

夜中というより朝方まで起きていたりして、みんないつ寝たものか。中には睡眠時間が何時間もなく、起きて出勤するものもいた。呉服の斎藤先輩は、三輪に頼んで、当日休みのわたしたちのために、近くの寿司屋に買いに走らせた。朝ご飯というより昼に近かった。

「客人が来とるからのう。寮の飯がどんなものか味わってもらおうか」

午前中から豪華なにぎりが出た。これが、標準的な寮の飯だと嘘ぶいていた。

「どうして、あなたは寮に入らないんですか」

と、面接のときに本部の人事課長に訊かれた。

「彼女でもおるんですか」と、まるで寮に入らない男子は何か個人的に問題がありそうな云い方をした。女子寮は門限があったが、男子寮は比較的自由だった。学生ではない。社会人だからあまり縛ることはできない。その生活を見てからは、寮に入ってもいいかなと、思い直した。ただ、わたしにはひとりの時間というのが欲しかった。出入り自由で、二人ずつ部屋にいと、全くひとりの時間というのがない。書きものをしているのを覗かれるのも嫌だったし、音楽も好きに聴いていたい。まだ、わたしの中には東京の後遺症が残っていた。

朝、店が開店すると、直属上司が、コーヒーブレイクだと、わたしを隣の喫茶店に連れて行った。仕事の打ち合わせもするが、どんな女と寝たとかそんな話を朝っぱらからするえげつのない上司だった。

売場に戻ると、問屋が来ている。わたしの手を引いて、また別の喫茶店に誘う。そうして、一日三杯以上のコーヒーを飲んでた。売場にいる時間が半分もなく、展示会だ、仕入だ、打ち合わせだと、女子とパートさんを売場に残し、男子社員は外にいるほうが多い。あまり出たがらない上司は、夏物を適当に買ってきてくれと、まだ新入のわたしを船場まで買いにやったりしていた。何が売れるか判らない。流行の柄とスタイル、生地などの勉強もしなければならない。

いつも最後の九時閉店まで店にいた。バックヤードで、値付けのおばさんたちと雑談

しながらかぎ針で、値札を洋服に付けてゆく作業も楽しいものであった。そのパートのおばさんたちから随分と可愛がられた。みんなで各部門の値付けを順番に積んでいる箱からやっているのだが、急いで出したいときは、甘えた声で頼むと、

「進ちゃんの頼みや、しゃーないな」と、みんな先にやってくれたりした。石油ショックの後とはいえ、まだ売れていた。特価台に山積みしても、次々になくなる。値付けが間に合わないほど売れたのだ。

くたくたになって、背広を掴み、帰るときも同僚が酒に誘う。

「どや、一杯」

その一杯が一杯では終わらないところが怖かった。三日と空けずに呑みに行っていた。つきあいを大切にしようと思ったから、断ることはしなかった。いろんな先輩から誘われた。ほいほいと付いてゆくので、給料なんかすぐになくなる。

わたしは、それでもつきあいを止めない。東京にいる妹はまだ学生であったが、貯金を持っているのを思い出した。妹に手紙を書いた。

一万円、貸してくれ。

すると、妹から返事の封筒が来た。

一社会人が学生に金を借りるなんて、逆じゃないの。信じられない。このお返しは高いよ。高くつくよ。ボーナス払いの倍返しなのだ。

そうして、一万円が入っていた。持つべきは姉妹。わたしは、借金までして酒を飲み歩いていた。

第912話

浪速のことは夢 其の四

同じ子供服の部門に配属されたのは、わたしの他に相田美登里という大分から高校を卒業して就職した女子社員だった。最初からおとなしい子で、緊張しているのが痛々しそうだった。ガリガリに痩せていて、胸がないのが気になった。どうして、こんな子を採用したのだろうか、わたしは自分のことを棚に上げてそう思っていた。接客ができない。レジは間違える。いつも、トイレに走って行って、吐いたりしていた。

ホームシックにかかったのか、そのうち、売場の倉庫に入って泣いていた。十八というと、もう大人という感じがするが、彼女はまだ子供から抜け出ない様子だった。大分は国東半島の寺の娘で、わたしは、学生時代に旅行して、訪れた摩崖仏を思い返していた。

「相田さん、今度の店休に京都へ行ってみませんか」と、わたしは彼女をデイトに誘った。あまり可哀想で、どうやら情が移り、なんとか慰めてやりたいと思うようになっていた。

美登里は、一対一では怖かったのか、同期の女子で話せる相手をひとり連れて行っていいかと訊いた。向こうが二人ならと、バランスをとるため、わたしはやはり大卒で同期の靴売場の藤川を誘った。藤川は地元だ。京都は庭のように知っている。車も出すというから、休みの日に四人で京都にドライブに行くことになった。

大阪からは、車でも電車でも、神戸、奈良、京都と近い。日帰りコースなら、姫路、高野山、琵琶湖までと見所が沢山あった。

京都。その古都もわたしには暗いイメージしかなかった。学生時代に文学青年をしていて、ふらりと一人でユースに泊まりながら、冬の京都を歩いていた。哲学の道のインクライン、高野悦子が来ていたジャズ喫茶のシャンクレール、ポケットには大佛次郎の「帰郷」の文庫本をねじこんで、小説の舞台を歩いたりしていた。

わたしの目は、そんな淋しい自分の影を見つけようとする。探しにきてやったと胸の中で云っていた。それは、すでに死んだ自分だった。

わたしたちは、円通寺の座敷にきちんと正座していた。住職は、若いわたしたちを歓迎して、寺を案内してくれていた。

「そんなに、近づかないで、もっと座敷の中から見たほうがよろしい。この庭はそのように部屋の中から見られるように作ってあるからの」

苔むす石庭が見えた。その先に低い生け垣があり、木立のあわいから、ちょうど比叡の山が顔を出している。円通寺は借景で有名な寺である。人間の視覚をきちんと計算して作られている庭であった。その見事な間合いを住職は人にもたとえた。

「人間も、付かず離れず、距離というものが大切すな」

わたしたちの関係を見てそう云われたのか。どうも友人にしても恋人同士にしても不自然な遠慮が働いているのを感じ取ったのか。五月の爽やかな比叡を見、わたしは隣で安心したように少しは落ち着いている美登里を見ていた。

美登里はそんなことがあってから、だんだんと慣れてきたようで明るく振る舞うようになった。わたしは、兄貴として彼女をよく仲間に入れて喫茶店にも誘い、遠出に行くときは必ず声をかけた。

三階同士というのは部門が違ってても結束する。同じフロアには、呉服、ベビー服、服地とあり、いつもその連中とどこかへ出かけた。引っ込み思案の美登里の背中を押すようにみんなと一緒に、淡路島へ泳ぎに行ったり、宝塚へ行ったりした。

夏を前に、社員親睦の会では、屋上でビアガーデンを毎年催して、夏のセールを乗り切ろうとやる。料理やつまみはすべて社員たちの手作りで、生ビールの樽は取引先が太っ腹で出してくれた。その会場で、わたしはねぶたを披露した。跳ね方を教えてみんなが輪になって踊った。

「面白いわ、行ってみたい」と、みんな口々に云うので、

「よし、今年の夏は青森に行くもの」と、指を上げたらみんなが掴んできた。

酔った勢いもあったが、なんとなく青森・北海道ツアーができてしまった。三階フロアの仲のいい六人が行くこととなった。美登里は先輩に遠慮してか、居残りとなった。三泊四日で道南まで回るといふ強行軍だった。仕事が終わってから、新幹線と夜行を乗

り継いで青森へ。ねぶたに跳ねる衣裳は実家に沢山用意していた。十和田湖なども見せて、翌日には函館、洞爺湖で一泊、札幌に寄って、その日のうちに青森へ戻り、日本海で大阪まで帰るというハードなスケジュールだった。列車の予約はお祭り時期であり、取れなかった。すべて自由席であり、空いた席にそれぞれが座ってゆくという、どうなるか皆目見当のつかない旅行であった。

わたしは、できるだけ沢山の人と八方美人のように話して、いろんなところへ行った。特定の人とつきあうことはしなかった。

夏の旅行のことで盛り上がっていると、美登里がすねたように云った。

「木村さんはそんな人だから」

美登里の言葉とは思えない云い方。田舎の高校から就職で大阪に出てきて、化粧もヘタな女の子たちが、次第に大人の女にできあがってくるのを、わたしは一年、二年と眺めていた。みんな、同じ化粧をし、同じ流行の服を着て、同じアイドルの話をするようになる。そうした中にも、美登里だけは、どこかにお国訛りが消されずに残っていたし、その目には海が映っているようであった。

第913話

浪速のことは夢 其の五

大阪の四畳半が狭くなったので、会社の近くの堺へと引っ越すこととなった。歩いてゆける範囲で、風呂はなくとも、台所は広いほうがいいと、一DKのトイレ付の部屋を見つけた。東京に比べたら、家賃は半分以下と安いのが大阪のいいところだが、敷金が二つ三つという東京の慣例に比べたら、十ヶ月は取ったりするから、驚く。まとまった資金がなければ引っ越しもできない。

そこは、鉄筋の五階建のアパートだった。一階が喫茶店になっている。その五階なのだが、エレベータなんかはついていない。そうすると、上に行くほど逆に安くなる。その部屋が激安だった理由は他にもあった。窓を開けると、すぐ隣に大阪に流れる高速道路が走っている。窓は閉めていても、昼となく夜となく車の走る音でうるさいのだ。

わたしは、一年、住吉にいて、翌年の春に堺に越してきた。それが災難の始まりだった。

春は、ストライキの季節で、私鉄が軒並み一週間も十日も妥結せずに止まったままであった。遠くから電車を通っている者たちは、男子寮の連中も含めて、みんな分散して、友人、親戚のところへ転がりこむ。当然、店まで歩いてゆけるところにあるわたしのアパートは狙われた。先着四名様と云ったのに、七人も八人も来る。蒲団がひとつしかないのだが、薄い敷布にくるまって寝たりしていた。しかも、入れ替わり立ち替わり、いろんな人が勝手に泊まりにくる。中には毛布と枕持参で来る者もいた。

ドアの鍵は夜には開けておいたから、出入りは自由であった。いつかは、朝方目が醒めると、三人が寝ているはずの部屋に五人が寝ている。見知らぬ顔がでんと凶々しくも鼾をかいて寝ている。よく見ると、眼鏡を外していたが、店長と人事マネージャーだった。みんな、我が家のように、麻雀で晩くなれば、木村のところに行こうと、承諾もなくやってくる。

「ここは、会社の寮か」と、叫びたくなる。しかもだ、勝手に冷蔵庫を開けてだ、コーラなんか呑むんじゃない。

偉い人たちが泊まりにきていたので、わたしは朝早くからやっている近くの市場に走り、食パンと卵を買ってきた。肩を寄せ合って寝るほどの狭い部屋にひとりひとりと起きてくる。すでにパジャマや歯ブラシも持ってきていて、名前まで書いて、人の部屋に勝手に吊すな。みんな、長期戦だった。

わたしは、全員のパンを焼いて、サイホンでコーヒーを入れ、目玉焼きまで添えた。「はい、当店のモーニングサービスです」と、供すると、店長はいたく感激して、「うん、ここはいいところやな、ずっと厄介になるかいな」

冗談ではない。食費はどうしてくれる。家賃も払え。しかし、そんな心配もない。みんなそれぞれが、一宿一飯の恩義とばかり、酒を持ってくる、ジュースをどっさりと買

い込んでくる、寿司から刺身までと、毎晩が宴会だった。

わたしが、東京にいたときは、誰の顔も見ずに、どこへも外出しないで、一週間部屋にいたときもあった。十日も人の声も聞かないで内面的な生活といったら聞こえはいいが、閉じこもっていたのが、いまは懐かしい。大阪はひとりにさせてくれないどころか、毎日誰かが泊まりにきていた。わたしには、自分の時間というものがある。テレビがないから、みんなして、勝手にステレオを聴き、ギターを弾いたりしているのはいい、中には人の蔵書に難癖をつけて、どうのこうのと批評しては読んでいたりするやつもいた。

わたしには、毎日の日課があった。日記をつけ、詩のようなものをノートに書き並べていた。それができないでいたのだ。

当時の日記を読み返すと、三日分をまとめて書いたりしていた。一ようやく、みんないなくなり、自分の時間ができた。このノートに戻ってくるのが本当の僕の顔だった。

と、三日間の空白を埋めるようにして、出来事を書き連ねるのだが、書いているうちに、誰かが、ドアを開けて入ってきたから、
一誰かが、またやってきた。一時中断する。

という下りがあったりした。誰もわたしの別の顔を知らない。その世界とは無縁の人たちばかりであった。

勤務は早番と遅番があった。早出は八時にはアパートを出てゆく。遅番は昼からだから、ゆっくりだ。休みの人間はいつまでも寝ている。ちらかった部屋の掃除もできない。

「みんな出て行け」と、掃き出したい気持ちだった。一度は夏だったが、同期入社の寮生以外がみんな泊まったことがあった。六畳と三畳台所に十四人が寝ていた。というより、足を伸ばして座ったまま寝ていたり、玄関の靴の上に寝ていたり、暑いからとドアを開けて、外に首まで出して寝ていたり、それが男も女もまぜこぜで、トイレのドアも開かない状態だった。早朝の新聞配達の人が人の足や首が出ていたので、ぎょっとした顔をしていたとか。

ある夜に、珍しく誰も来ないと思っていたら、真夜中にランジェリーコーナーの部門長が、酔って泊まりにきた声がした。彼は、前に大勢来た同期の連中のうち、ひとりの女の子が新しい靴を履いてゆき、忘れていった靴がぽつんと玄関にあるのを、彼女が来ているものと思ったようだ。

「な、なんや、誰か来とるんか」と、彼は女ものの靴を玄関にみつけて独りごちた。わたしが、起きてきて玄関に顔を出すと、彼は慌てて帰って行った。

「すまん、悪いことしてしもうた」と、暗がりでも声だけが逃げてゆく。

それからはぱたりと誰も来なくなった。妙な噂が流れていた。わたしが同棲していると。わたしは、その効き目についてうまい妙案を思いついた。それからは、いつも玄関に女ものの靴を置いておくようにした。

「今夜、泊まりに行っていいか」と、予約してくる客以外は、みんな遠慮して来なくなった。それは実にいいおまじないであった。

第914話

浪速のことは夢 其の六

ハーフと云っても、白取章吉という名前からして、若い人を想像できない。だが、彼は、ギリシア系の顔をしたハーフだった。髪はアテナイの石像のように縮れていた。顔の掘りが深く、精悍な感じがした。女の子たちから騒がれ、振り向かれていた。

だが、彼と一日でもつきあえば、その性格にがっかりしてしまう。

わたしは、新入社員の研修で、彼と同室であり、別々の店に配属されても、電話でやりとりして、よく休日には一緒に歩いた。

「いまな、JBLのフルレンジのスピーカー使うてな、バックホーンの箱をこしらえてあるさかい、音出よったら聴きに來てえな」と、関西弁バリバリなのはまだいい。かれは、一緒に歩いても、せわしく、声も仕草も目眩がするほど早く慌ただしい。それだから、見た目には格好がよくても彼女ができない。章吾は、彼女よりステレオマニアだから、ステレオの部品を捜すことで、大阪の日本橋界限をよく一緒に歩いた。大阪にもある日本橋は、秋葉原と同じだった。いまはでんでんタウンと呼ばれているらしいが、電器店が軒を連ねている。

学生時代に秋葉原を虫のように歩き回ったことを大阪でもしていた。ただ、マニアと云っても、わたしの場合はそう濃くもない。白取章吾は一種の気違いだった。彼とは、最初からステレオの話で盛り上がり、休みのたびに日本橋をうろつくことになるのだが、彼の話の中心はいつもステレオのことで、わたしなんかは聞き役で、それも関西弁の早口で、何を喋っているのか判らないときがあった。

彼の後ろをついてゆくと、本格的に自作するやつだったから、アンプリファイヤーの細かな部品なんかをパレットに取りながら、購入しているのだ。自宅では、その部品をハンダゴテでくっつけて、この世に一台きりのステレオを作っては音を楽しんでいた。かなり専門的な話ばかりで、喫茶店で話していても、だんだんと飽きてくる。女気がないから、色っぽい話はまるでない。思い詰めたようにステレオの話ばかりするので、ステレオが彼女であった。

日本橋でも場末になると、次第に怪しい店が闇市場のように並んでくる。あまり人が行かない裏通りのガードの下辺りに、中古の機械の部品がごちゃごちゃと放置されているような店が並んでいた。わたしは、そんな店を覗いて歩くのが好きだった。以前から、骨董品にも興味があったので、わたしは、とある店で、大正時代に使ったような重い鉄製の扇風機を安く見つけた。そいつは、まだちゃんと動くので使えた。六角時計なんかも見つけた。ネジが巻けてボンボンと鳴る。そうしたものを買ってきては、部屋に並

べるので、部屋がだんだんと大正ロマンに近くなる。

京都の東寺の骨董市も有名だが、さすが関西で、骨董品店を覗くと年代ものがぎっしりと詰まっている。休日は、中古のステレオを見たり、古本屋、古レコード店、骨董品店と、すべて古いものの店を回ることが馴染みのコースとなっていた。

「ねえ、どんな休みしとるの？ 観察してみたいわ」と、仲間の女の子が云うが、つれて行ってもつまらない。かといって、彼女たちにつきあって、心齋橋や地下街のブティックを覗いてもこっちが飽きてくる。

わたしは、次第に白取章吾から離れていった。可視範囲の狭いやつで、いい容姿が勿体ない。彼からの誘いを断っているうちに電話も来なくなった。

週休二日に溜まった公休を足して、三日連休にすると、わたしはよくふらりとひとりで旅に出た。もともと旅行も好きであった。大阪を中心にする、西日本はすべて射程距離であったから、青森という辺境の地で育ったわたしにとっては、岩手秋田へ行く感覚で四国へ行けるのが不思議な感じがした。修学旅行でなければ縁もなかった古都が身近にあるのが嬉しい。

わたしの旅行というと、ホテル旅館は成り行きでの飛び込みだった。いつもはテントとシュラフを担いでの蟹族を学生時代の延長でやっていた。仲間の女の子たちは、一緒に行きたがっていた。みんなで行って面白い旅行もあるが、うるさいときもある。趣味が違えば、博物館だ美術館だと入るのも嫌がる。だから、ひとりゆっくりのんびりと旅に出るのだ。だんだんと、わたしの別の顔を知ってきた女の子が、

「自分は、ひとりのほうがいいんやね。そうなんやわ。そういう人なん」と、美登里のような云い方をした。そうして、恨みがましい視線をいつまでも向けてよこす。

初夏になれば、わたしの中の旅の虫が疼く。地図を開いて、いまだに行ったことのない地名を捜す。わたしの指は北陸を指していた。

行くときはいつも夜行列車であった。そのほうが、目的地に朝のうちに着いて、一日歩くことができる。宿泊代も一日浮かせるのだ。列車とバス、徒歩と乗り継ぎながら夏の初めの能登半島を一周した。九十九湾、軍艦島、恋路海岸と周り、適当なキャンプ場でテントを張った。まだ夏休みには早く、林の中のキャンプ地には誰もいない。そこにひとりで泊まった。夜は真っ暗になった。火をおこして簡単な調理もした。ちろちろと消えてゆく焚き火を最後まで見つめていた。どんなに周りに人がいっぱいいても、自分はひとりであった。その仮面を剥ぐときが、こうした旅行であった。

翌日は、バスで眩しすぎる禄剛崎灯台を見て、時国家、平家の落人部落を見て輪島に宿をとった。朝市を見てから金沢へ出ようと臆気に考えていた。はっきりとした予定のない旅であった。何をしても自由であり、囚われる人もいない。まだ見ぬ人と過ぎて行った人の狭間に、わたしはひとりきりいたのだった。

社員食堂で飯を食うのが前は楽しみであった。わたしが席に座ると、同期の女の子たちが、話をしながら食べられると、そばに座りたがる。部門が違っているから、一日に一度だけ食堂で逢えるのだった。いつもキャーキャーと笑い声が聞こえる華やかな職場だった。

同じフロアに事務所があり、店長室があり、POP室があった。わたしは、子供服部門であったが、販売促進課にも半分籍を置いていた。販促のチーフが、わたしを指名してきた。チラシを作成したり、キャッチコピーを考えたり、合同でない単独の売り出しでは、各部門から目玉商品を出してもらい、隣のスーパーに対抗していた。春夏秋冬で店頭とショーウィンドウ、天井などのモールや下げビラも企画して印刷所に発注する。

セールで如何に客を引くかと、催し物も企画する。子供たちを集めるために、ゴレンジャーショーをやったり、水着のファッションショー、落語家の店頭販売など。また、売り出し中の歌手を呼んでの新曲キャンペーンに歌ってもらったりと、デパートでやるようなことはみんなやっていた。

販促室はPOP室と同居である。ポップとは、いまなら、パソコンでできることだが、当時は、価格札や下げビラ、ショーカードなどすべて、ポスターカラーでレタリングの技術を用いて書いていた。女子のスタッフが三人いて、朝から晩まで各売場から頼まれたショーカードに品名と価格を書いていた。売り出しともなると、どっとくるから、彼女たちも殺気立つ。

そこのチーフをしている年上の怖いお姉さんがいた。クレオパトラのような髪型をしていた。男たちと対等に渡り合うほど威勢もよかった。そのクレオパトラがいきなりわたしに嘸みついてきた。

「自分、アホちゃう？ 毎日、食堂で女の子たちに囲まれて、なんとも思わんの？ うちなあ、見とるだけで虫ずが走るわ。見とるだけで苛々すんね」

ぴしゃりとやられた。この職場にきて、一年余り、そんなことを云われたことはなかった。気がつかなかった。そんな目で見ている人もいるのだ。先輩のひとりがPOP室にやってきて、わたしに云った。

「服地のサエ子が云うとったぞ、わたしの胸のサイズを知っとるのは進ちゃんだけやって。彼女、Gカップ云うとったけど、ほんまかいな」

まるで、冗談を本気にして、わたしは陰ではすっかりと女たらしになっていた。きっと笑いものにされていたのだ。それを知らないで、ひとり道化をしていた。

「目立つなあ。会社じゃ、あまり派手にすると飛ばされるから、気いつけ」と、いらぬ忠告までされた。

それからだ、わたしは、一番遅い時間に社食に上がり、ひとりぽつんと食べていた。急にみんなの目が気になりだした。ここ、大阪も東京と同じであった。わたしはいつも笑い者なのだ。

退社時に女の子たちが、タイムカードのところで待っていた。

「黒馬に行かへん」と、誘う。黒馬はパーラーであった。

「ううん、ちょっと、具合が悪いから」と、わたしは断って帰った。また暗いわたしに戻っていた。

七月に入って、同期の藤川と三輪が祇園祭を見に行こうと、わたしを誘った。

「男同士で行こう」と、わたしが云うと、

「男同士で何すんね。祇園祭の宵山やで」と、無理矢理、女子同伴で行くこととなった。わたしは、最後まで抵抗していたから、結局、男三人と女二人という組み合わせになり、わたしはあぶれていた。

宵山は、祇園祭の山車を四条通りにずらりと並べて涼みの客に見せるのだ。広い通りが見物客でいっぱいになるほど、人の頭が並んでいた。

わたしたちは、デートコースで有名な、フランソワという大正風の夢二の絵を飾った茶店で、冷コー（アイスコーヒー）を呑んだ。それから、夕食は珍竹林という、やはり若者たちに人気のある囲炉裏のある居酒屋で呑んで喰った。いつのまにか、組み合わせができていて、二人ずつ、話に夢中だった。わたしだけが、無視されたように、置いておかれた。間が持たなかった。

きっとどこの街に行っても、わたしの正体は見破られ、みんなに詰られ、からかわれるようになるのだ。社会不適合な人間なのではないだろうか、わたしは、また自分の殻に閉じこもろうとしていた。

五人でまた宵山の四条通りに出た。これから河原町を通り、三条の駅から大阪へ帰ろうというのだ。二組のカップルはいい雰囲気であった。

二人の女は、去年の夏に青森に連れて行った人で、わたしとは仲がよかった。わたしが最近になって女を避けているのが、彼女たちには痛切に感じていた。それで、今夜は復讐というわけか、わざと見せびらかしているような視線を感じていた。のちに、このことからか、ひと組は結婚することになる。

わたしは、のけ者であった。ここから一時も早く逃げ出したい衝動にかられていた。恥の底に座らせられている自分がいた。コンコンチキチキコンチキチ。笛が吹かれ、鐘が叩かれ、煌びやかなゴブラン織の絵柄を眺めながら、浴衣姿が感嘆の声を上げ、団扇で扇ぎ、下駄が鳴る。

人の波にわざと吞まれるように、わたしはひとり彼らからはぐれて、先へ、先へと歩いて行った。そうだ、このまま行方不明になればいいのだ。

わたしは、人混みにまだ見ぬ相手を捜していた。そして、ずっと東京から引きずってきている女の名前を呼んでいた。

どこへ行っても同じだった。わたしは、すぐに見つけられ、それがおまえだと指さされ、どうしようもない男であったと、笑われる。わたしのひしゃげた目は、群衆の中に、もうひとりの別の自分をも捜していた。どこかへ帰りたかった。わたしは押され、流され、どんどんと離れて行った。

第916話

浪速のことは夢 其の八

イトーヨーカドー、ジャスコ、ダイエーなどは、いまから四十年前は、まだ小さな店であった。全国の小さなスーパーや商店が、その頃よりもはやされることになったセルフサービスという販売形態を前面に出して、合併を繰り返しながら巨大化してゆく。

通夜の席で、たまたま隣り合わせになった社長同士が、「一緒になりませんか」「どこ」「あんたとこと」と、ところかまわず合併の話が飛び交っていると、まことしやかに語られていた。

それまでは、すべて対面販売で、商品はガラスケースに入っていた。お客が、手にとるためには、販売員に声をかけなければならない。人件費が、経費の中で一番の比重を占めているので、それを削り、一人当たりの売上高を上げるにはセルフがいい。

業界は再編成されて、急激に成長していった。だから、わたしがそのビッグストアに入ったときは、まだ会社創立十年とかそんなものであった。幹部社員もみんな若い。わたしのいた堺店の店長は、大学を出てまだ五年だから、入社してまもなく従業員二百人、年商六十億の店の店長を二十七でやっていた。若いから、頭も体もフレキシブルで、革命的な経営ができる。店で働いていて、勢いを感じず。アメリカの経営のノウハウを取り入れて、能力主義で上に上がった。すべてが、いままでの古い体質から抜けきった新しいやり方を導入していた。

西郷という店長は、名前の通り、大学ではフットボールをやってきたといい、体格がいい。上背と体重が見るものを圧倒させるほどの巨体だ。その店長はよく怒鳴り、叫び、迫力があつたので、みんなから恐れられていた。

「木村君、今月は予算達成できるんか」と、店長がわたしを呼んで眼鏡の奥から鋭い視線を送ってきていた。

「はい、やります。なんとしても達成します」と、事務所に張り出された各部門の昨年実績、今年の予算の棒グラフを眺めていた。あと三日で月末だ。2パーセントだけ上げれば達成できるところまできていた。

「できなかつたら、どうしてくれる」と、店長は詰め寄った。

「なんでも好きなものを奢ります」と、つい口を滑らせた。

「よし、判った。飯と酒やな。それは楽しみや」

「その交換条件で、予算達成したら、逆に奢ってくれますか」と、わたしは鬼の店長にずけずけとものを云う。事務所では、はらはらしている女子社員たち、苦笑しているマネージャーの顔があつた。

「よっしゃ、何でも好きなもん食べさしたる」

わたしは、女では意気消沈していたが、仕事では常に燃えていた。商売人の血が騒ぐ

のは、ねぶたのお囃子を聞いたときに、同郷の人であればうかれ出すのに似ていた。

それからの三日間は、ワゴンセールをやったり、タイムサービスを煩いくらいやりして、三台のレジも一時間刻みで点検していた。部門長は、いつも不在で、どこに行っているのか判らない。男はわたしよりいなかった。許される範囲で何でもやった。

その結果は、あと数万円の売上で予算達成というところで、負けてしまった。

翌朝、わたしは暗い顔をして出社した。朝からうきうきと怖いくらい機嫌がいいのは店長だった。

「木村君、今夜、約束だぞ」

わたしは、財布をこっそりと開いてみた。巨漢だから、食うだろうな。うわばみのように呑むだろうなと、急に不安になった。

その夜だった。閉店してから、わたしは一人では間が持たないから、三輪を呼んで三人で呑むことにした。

「さあ、どこへ連れて行ってくれるのかな」と、店長はにたにた笑っている。わたしは、よく先輩に連れて行ってもらったグリルに店長と三輪を案内した。キッチンと対面してカウンターに坐る。雰囲気も高級なレストランだが、シェフが目の前で好みで調理してくれる。広い鉄板があり、分厚いヒレ肉を香草やワインなどで香りをつけながらナイフを手品のように動かして切っては焼いていた。

「さあ、今日は遠慮せんからな。ばくばく食うたる」

と、恐ろしい宣言までしていた。

その後は、店長のよく通うクラブへ連れて行かれた。

「ママ、今夜は、うちの若いもんの奢りやから、シャンパンの上ものを抜いてや」

わたしは、だんだんと青くなってきた。

「いやあ、今夜の酒は旨い。いままで、こんな美味しい酒は口にすることがない」

と、わざとらしく云うものだから、こっちはますます落ち込んだ。三輪はわたしと同じく遠慮して酒もあまり進まない。しかし、クラブの方は、後で勘定を払うときに、安くしてくれたのには驚いた。店長がママに口添えしていたのだろうか。財布は空にならずに助かった。

「今夜は、二人とも、うちに泊まれや。いま、うちの嫁はんが出産のために実家に帰っているさかい、独身なんや」

店長という職責からも孤独であり、家でもひとりという、急に店長が哀れに思えてきた。わたしたちは、タクシーで店長のマンションまで連れて行かれた。蒲団は敷きっぱなし、七月といっても、熱帯夜で暑苦しかった。そこにはさすが高給取り、クーラーがあった。わたしと三輪は酔った勢いで、勝手に冷蔵庫に首を突っ込んで、ビールを取り出し、酒の肴になるものを出して、呑みなおしていた。

「好きなもん、出して食え。たいしたもんないやろ。レトルトパウチに冷凍もんばかりや」 店長のプライバシーを見た。家庭の匂いが漂っていた。第一子は女の子であった。産前産後を実家でと、戻っていた奥さんと赤ん坊の写真が飾られてあった。結婚して

所帯を持っているというだけで、かなりの距離感があった。まして、父親であるということは、わたしたちには、別世界の生き物として遠い存在に思えた。

「わし、先に寝るから、適当にやってくれ。なんなら、冷蔵庫は空にしてもええからな」

三輪と缶ビールを次々に空けながら、

「ところで、ここは、どこだったっけ」と、惚けた会話をしていた。いきなりクラブからタクシーで連れてこられた大阪のどこかの町にいた。店長の象のような鼾が響いてきていた。

梅雨が明けたら、真夏の赤い口が開いていた。二度目の大阪の夏が来ていた。

第917話

浪速のことは夢 其の九

店が全面改装することとなった。二ヶ月は営業ができない。リニューアルといっても、内装はすべて張り替えるのだから、かなりの大工事になる。それを閑な八月にやろうということとなった。二、八というと商売は上がったりのときで、お盆で、大きな都市は逆に人が出て、がらんとなるのだ。

近くの空地进行を借りて、プレハブを建てて、仮設店舗で営業した。狭いところだから、人はそんなにいない。ワゴンを並べての特価品だけで勝負していた。半分づつ、交代で有給休暇もすべて消化して、二週間の連休がとれることになった。バカンスだった。なかなか、こんな機会はない。

男子たちは寮に集まって、それぞれ、どこへ旅行に行くかと、もめていた。女連れで行きたいと、大半はそう考え、誰を誘おうかと、名前まで列挙していた。

「木村はどないする？」と、わたしの意見を訊いてきた。

「おれは、男同士でなら、行ってもいいが……」と、云うと、

「気色悪いやっちゃん。最近、おかしいぜよ、妙に女を避けて、男に走りよる」

みんなのまとまった計画はできなかった。バラバラで、旅行をするということになった。わたしは、行ったことのないところと、地図を広げて考えた。四国はいまだ足を踏み入れたことはない。そうだ、四国一周の八十八箇所廻りの巡礼に出ようか。それが、どんなに大変なことか、まだわたしには判っていなかった。

「木村さんは、どこに行くん？」

と、同じ売場の漆原紀子が聞いてきた。

「四国一周のひとり旅をしようと思っているんだ」

「なんや、それなら、うちの田舎に泊ったら。琴平やけど、すっごい田舎でね、五右衛門風呂があるんよ」と、普段は仕事だけのつきあいの彼女が初めて自分の田舎のことを話した。

「それに、うち、どうせ帰るし。恥ずかしいくらい汚いところやから、気にせんで寄って」

話を聞いているうちに、行ってみたくなる。中学を出て、集団就職で女工になり、そこから苦勞して夜学を出ると、この店に中途採用された。仕事は一番できる。色気がないから、彼氏という噂もないが、紀子の実家なら、泊まっても誰も何も云わないだろうと思った。

長い休暇が来た。わたしは、岡山から瀬戸内を渡って高松まで行く連絡船の中にいた。お盆過ぎの帰省客が帰った後とはいえ、まだ夏休み中なので、家族連れが目立った。高松の岩壁に降り立ったとき、わたしは四国に足を踏み入れた感激に浸っていた。今回の旅で、沖縄を除いて、すべての県を回ることになる。

栗林公園を見て回った。影がないほどの暑さだった。太陽が天上に三つも見えたような猛暑だ。蝉がゼンマイを巻いたときのように、ぎりぎりと啼いていた。庭園の美しさは汗に流されて、目にしみっていた。ハンカチはずっぷりと濡れて役に立たない。

琴平まで汽車で行ったが、金刀比羅さんは遠くから見ただけで、わたしは乗り換えして、そのいくつめかの小さな駅で降りた。すっかりと田舎で、駅前には家も建っていない。商店なんかもないようであった。大丈夫だろうか。もうすっかりと暗くなっている。虫の合奏だけが聞こえていた。駅の公衆電話から漆原に電話したら、いまから迎えに行くということで、わたしは待合所に一人ぼつんと待たされた。やがて、紀子が珍しく恥ずかしそうな顔でやってきた。

「うちには、車がないから、家まで山道を歩かなあかんから」と、手には懐中電灯を持っていた。二人で、真っ暗な山道を登って行った。外灯なんかないから、足元がおぼつかない。

「昔なら、提灯下げて歩いたんだらうな」わたしは心細くなって云った。

「そや、うちにまだあるわ」

ふふふと、紀子は笑う。周りに民家の明かりがないから、一軒だけぼつんと建っているのだらう。二十分くらい歩かせられて、ようやく漆原の家に辿りついた。

紀子の両親は広島に出稼ぎに行っていたので、実家には祖父母と兄だけがいた。

「もうひとり、いるんよ」と、紀子は、先に誰か客人が来ているのを匂わせた。

「ばあ」と、暗闇からいきなり長い髪の幽霊が出た。同じ売場の北川佐知子であった。

「なんだ、来ていたのか」

ひとりでは不安だったが、これで三人なら話もはずむだらう。さっそく、わたしは五右衛門風呂を貰った。それは外に屋根と囲いだけ回した大きな釜風呂だった。紀子が、薪をくべて火をおこしていた。

「下駄があるやろ。そのまま入ると足の裏、火傷するから、下駄を履いて入るんよ」

木の蓋を沈めて入ると思っていたら、下駄を履くというのは知らなかった。

「湯加減どう？」と、釜番の紀子から声が聞こえるので、何か見られているようで恥ずかしい。

家は農家なので、取れたて新鮮な山の幸と、地酒が振る舞われた。兄も気さくな人柄

で、この東北の果ての男を歓迎してくれた。当夜の着はわたしだった。女二人が、職場の延長でわたしをからかう。

「うちの田舎はもっと辺鄙やね」と、佐知子は云う。奈良の十津川の近くというから、日本の秘境と呼ばれているところだった。みんな、大変なところから来ていた。わたしの郷里はまだ都会だった。店で働く多くの若者たちは、訊けば郡部から来ているものが圧倒的に多かった。

「明日はどうするん？」

と、訊かれた。予定もない旅であった。右周りか左周りか、どっちが逆うちなのだろうか。

「台風が明日は上陸するちゅうから、気いつけんとな」兄も注意した。

その夜半からここ琴平の田舎でも、ものすごい雨が降っていた。

翌朝、駅にまたひとりてくてくと山を下りてゆく。佐知子は明日まで泊まるという。兄はバイクで途中まで見送りにきた。手を振るじいさん、ばあさんたちもカメラにおさめた。

駅員に訊くと、台風の大雨で、不通になっている路線があるという。土讃本線はまだ動いている。わたしは、台風の進路を推理しながら、高知まで南下することにした。

四国は小さな国の集まりで、東北の大きさからすると、動きやすい。高知に午前中に入る。そこも大雨であった。こんなときに観光も寺周りもない。わたしは、ものすごい風の中、バスで桂浜へと向かっていた。普段でも荒々しい波を連想する桂浜が、台風の暴風で、荒れ狂っていた。家を呑み込むような高さの波が浜に押し寄せていた。傘もきかない。わたしは、雨に打たれ、風に倒されまいとして、浜に立って、その波を身近に感じていた。この波に奮い立たせられた男たちが、幕末に走ったのだろうか。

高知の駅は観光客でごった返していた。そこから右にも左にも行けなくなっていた。線路が水没し、崖崩れもあり、道路も寸断されていた。どこにも行けないことが判った。わたしは、台風のさなか、高知市に取り残された格好になった。観光客の多くは、駅員や観光案内所に気遣いのようにくっついてかかっていた。何も、彼らが悪いわけでもないのに。

「いつになったら、運転再開するんですか」「はい、いま、調べておりまして、復旧の目処がつかましたらアナウンスいたしますから」「身内の不幸で、なんとか行く方法がありませんか」「仕事ができへんがな」

わたしは、案内所で、宿を紹介してもらった。今夜はここに泊まるよりない。思わぬ足止めをくらった。

「どこでもよろしいですか」「はい、どんなところでもいいですよ。屋根さえついていれば」

わたしは、市内の安ホテルに投宿した。室戸岬経由でその先までバスでなら行けるという情報を得た。汽車がダメでもバスがある。これで明日の予定が立った。こんなところにいつまでもいるわけには行かない。

行き当たりばったり。わたしはそんな旅が好きであった。ただ、どこにも行けないという追いつめられた旅は初めてであった。明日から、行く先々の寺で印を貰い、わたしは同行のない巡礼に出る。

第918話

浪速のことは夢 其の十

秋から冬へは斜面を転がり落ちるように早かった。友人の藤川が家業を継ぐためと辞めて行った。女子社員の平均在籍年数は三年と少しだから、わたしが勤務した日数では、半分以上が入れ替わったことになる。店長も西郷店長が転勤してから二人目となり、マネージャークラスもみんな他店へと移動した。部門長は、四人目であった。

今度の上司は酒癖が悪く、呑むとわたしの胸ぐらを掴んでスナックの外へと叩き出すこともした。普段はころこると笑い、愛想のいい人なのだが、酒を飲むとがらりと変わる。目が座ってきたら危険信号だった。

北川佐知子だけが売場では古参になったが、よくその上司につきあわされていた。女の子には酔っても乱暴はしないのだ。

「自分なあ、なんで腹割って話しせえへんのや。わしが、見せてるいうのに」

と、蛇の目で睨んでくる。わたしは、どんな親しい人にも自分を見せないところがあった。それが、酔っても乱れず、醒めているのも気に入らない。

「呑ませがいが無いんや」と、よく先輩に云われた。いまのように、酒酔い運転の取締も罰則も厳しくないときで、当時、先輩から譲り受けたクーペで、宿院まで呑みに行き、三時頃にタクシー代わりに上司を送って行ったりして上司のお抱え運転手もしていた。だから、そうぐでんぐでんに酔ってもいられない。

それだけではない。労働組合の支店の委員長にさせられた。専従ではないので、仕事をしながら、忙しくなってくる。いままでの店長以下の管理職とは対立関係になり、話し合いの席も定期的に設けられた。当時の組合はどこも強かった。景気もまだまだよかったので、鼻息も荒かった。ベアは二桁、それも毎年二割近い高率だった。ストライキもよくやった。

わたしは、自分がむしゃくしゃすると、よく坊主頭にした。すると、マネージャーから注意を受けた。一応、客商売だから、坊主はあまり印象がよくないと。

それならと、髪が伸びたから、今度はパーマをかけて、眼鏡をやめてコンタクトにすると、紳士服の売場に行って、女の子たちに見立ててもらい、いままでの自分とは全く違うスタイルにした。店のパートさんもその変貌に驚いた。別人になるのは楽しいことであった。わたしは、自分が嫌いなのだ。

組合の研修旅行でヨーロッパに行ったのもその頃であった。三輪も一緒に行ったが、

空港では、わたしはいつも係官に別室へ連れて行かれ、ベラベラと訳の分からない言葉で詰問され、所持品まで調べられた。パスポートの写真は眼鏡をかけ、七三に分けた髪型の真面目そうな青年であったのに、実物はすっかりとイカレタ若者風であった。当時は日本の若者というと、赤軍を警戒され、入国審査でピリピリしていた。

海外研修から戻ると、服地売場に、今度新しい社員が入ってくるという噂が立っていた。どんどんと人は減らされて、わたしも三年で古い社員になりつつある。新しい人が入ってくるのは稀であった。

二月になり、中途採用されたその人が売場に立った。細身で背が高い。大きな目がエキゾチックな感じがした。いままで、店にいた子の中では浮いた感じがするほど、異質な雰囲気を受けた。ハーフだという噂まで流れたほどだ。

昼過ぎに喫茶店「黒馬」に行くと、服地の部門長と二人でその人が話し合っていた。「おお、木村君、今度、うちに採用された姥さんだ。こっちは、組合の委員長もしているこの店の主やな」

「主はあんたでしょう。ぼくより一年先輩だし」

その人は挨拶した。どこか違う。何かが違った。だが、女という女はわたしには禁制であった。見てはいけない。そう、また自分に云いきかせて首を振り、視線を避けた。

「木村君、前のほうが好感が持てたのに、どないしてそんないま流行にしてしまうたんや」

店長はそんなことを云った。

「イメージチェンジです。アパレル産業にいたら、流行には敏感であるべしと」

とかなんとか云って、どうでもよかった。自分を殺すことばかり考えてきたが、今度からは自分で遊ぶのだ。

社食で、その人と初めて口を利いた。

「ここに座ってもいいですか」と、献立を載せたトレイを持って、わたしの食べているテーブルの前に座った。多少ドギマギしている自分がおかしかった。

「梅干し食べなさい。酸性をアルカリ性に変えるというから」

わたしは、テーブルに常設してある梅干しの瓶をその人に勧めた。いままで、こんなに意識した人もいない。無視すればするほど気になる存在であった。

「姥って、珍しい名前だね。どこの出身？」

「お父さんは鹿児島なんです。薩摩半島の西の端に姥部落というのがあって、そこの出なんです。いまは佐世保に住んでいます」

「長崎ですか」

人のことをじっと凝視する癖のある人で、わたしは下を向いたまま話していた。

同じフロアにいて、仕事をしていると、どこかにその人の視線があった。服地を尺で測りながら切る作業をしているときも、柱の鏡にはその人の視線が映っていた。

転勤になった呉服の斎藤先輩が、店にひょっこりと顔を出した。

「麻雀でしこたま勝ったから、祝杯につきあわんか」と、三輪と数人の先輩も誘って、

呑みに行くことになった。スナックを二軒ほど回った。いつになく、わたしは機嫌よく呑んでいた。何かが変わっていた。どこかがおかしかった。ウイスキーの水割りが甘く感じたので、斎藤先輩に云った。

「この酒、甘くないですか」

すると、斎藤先輩は、俳人が解説するような口調で云った。

「うん、それは、お主の春だからだ。人も変われば、相手も変わる。苦い酒も甘くなる。うん」

「おまえ、恋をしとるんか」

三輪まで背中を叩いてからかう。

「相手は誰やねん」

ふと、その人の大きな目がよぎった。その年の暮れにわたしは、その人と結婚することになるうとは思ひもしなかった。

第919話

浪速のことは夢 其の十一

車を中古で先輩から買ってから、わたしの行動半径は広がった。それまではペーパードライバーであった。免許を取って四年の間、殆ど乗ったことがない。それを聞いている友人たちは、誰も乗りたがらない。みんな、来年になったら乗ってやってもいいと、この初心者敬遠していた。

試運転のときから物損事故をやらかした。歩道に乗り上げた。動転して、ブレーキとアクセルと間違えたから、人の家のゴミ箱に突っ込んで停まった。ものすごい音でゴミ箱は壊れ、家人たちが家から飛び出してきた。

だが、こんなことは運転をするものの宿命のようなもので、いずれ誰かが犠牲にならなければならない。

服地の女子社員から内線電話がわたしにかかってきた。同じフロアだから傍に来て云えば通じるものを、プライベートな内容の連絡には内線が使われた。

一姥さんが、自分とお茶したいって。

橋渡しを同僚がかって出た。わたしは、電話を取りながら売場が見える柱の鏡に、その人の俯いた顔を見つけた。橋渡しの女の子は電話をかけながら、わたしに手なんか振っていた。

その夜、仕事が退けてから待ち合わせの「モンブラン」という喫茶店に行った。その店は新しくできた洒落た雰囲気のお店であったが、職場からは少し離れているため、仲間はあまり利用しない。二階もあり、二階に上がる客はあまりいないようで、人目にもつかない格好の場所だった。

二階に上がると、二人が先に来て待っていた。何か照れた。少し緊張した。

「姥さんが、自分とつきあいたいんやて。いま、つきおうてる人おらんのやろう？」

橋渡だけが積極的に話すだけ話したら、

「なら、うち、お邪魔なようやから、これで帰るわ」と、さっさと帰ってしまった。お見合いみたいに話すこともない。まさか、趣味は？と改まって訊くのもおかしい。

「長崎って、雪は降らないんだらう」

青森の話になったから、雪で切り返した。

「ううん、積もらんけど、降るっちゃね」

言葉の端々に長崎弁が出ていた。

「君のことをもっと知りたい」と、わたしは交際したい旨を匂わせた。

「先に云うておきたいことがあるんよ。うちのお母さんな、原爆症なんよ。後で知ってから嫌いになる人いるから、いまから云うとくの」

「君はなんともないんだらう。それじゃ、問題もなにもないじゃないか。この関西じゃ、いまだに根強く、エッタの子とだけは交際してはならんと、うちの職場でも親に云われたとか、差別があるんだな。九州もそのことであるのか」

被曝二世といっても、まだ腹の中にも入っていない戦後も戦後生まれだった。わたし自身は、そんな差別に対してはものすごい反感を覚えるほうだった。

「それと、うちの両親は離婚しとるの。お父さんは炭坑離職者っていうの？ いまはお酒ばかり吞んで、乱暴しよるから子供は寄りつかなくなっしもうてね」

姥絹子は、そう家庭環境を屈辱的に告白するのには、覚悟がいるのだから。後で知って、いままでつきあっていた相手が離れて行ったという。

「今度、ドライブに連れて行こう」

まさか、初心者マークの練習台だとは云えずにいたから、絹子は何も知らずに悦んでいた。

喫茶店で話こんで、すっかりと遅くなったから、わたしは格好つけて会社の駐車場に置いている車でどうせ、自分のアパートまで帰るのだから、絹子を送ってゆくことにした。

「アパートは遠いの？」

絹子のアパートは市内のずっと南側でだいたい場所が判る程度だった。わたしは、いまは店とアパートの往復ぐらいしか運転していない。怖くて通行量の多い国道なんかは走ったことはなかった。

車は、先輩が若者向きに改造していた。わたしは、初めて人を乗せた。それが絹子だった。かなり緊張して、少し言葉も震えていた。なんとかなるだろうと思っていた。

車はそろそろと夜の国道に出た。初めて人を乗せた。本人は平気で助手席に座っている。知らないということは仕合わせなことだ。わたしは小刻みに震えていた。

ともかくも夜とはいえ、大阪方面から帰る車がスピードを上げて走る国道に出た。絹子のアパートの方角に向かっているのだが、一方通行が多く、真っ直ぐには行けない。右だ左だと暗い住宅街の路地を走るうちに、わたしは方角が分からなくなっていた。

そのうち、道路は公園の中を横切ったり、郊外の畑の農道を走ったりしていた。そして、変な道に入ってゆくと、だんだんと先細りになって、ついに行き止まりだった。何百メートルも入ってきて、行き止まりの細い道。ということは、その来た道をバックで戻らなければならない。道路はぬかるみで、両側には堰がある。外灯もない暗い道をテールランプの明かりだけで戻らねばならない。そろそろと後進していると、いきなり後輪がドブに落ちた。

「やったー」

人通りもないどんづまりの道だ。車を上げるのは容易ではない。わたし一人の力ではびくともしない。絹子も手伝って、車を持ち上げようとした。二人とも手も足も泥だらけになっていた。いい格好して、送ってゆくと云った初めてのドライブが悲惨なことになっていた。

二人連れの農家の男の人たちが、たまたま通りかかった。四人で上げたらなんとか道路に車輪が載った。よかったと、救われた思いで、お礼を述べて、またバックしていたら、今度は反対側が脱輪した。男の人たちは笑って、わたしと運転を代わった。慣れている道だから、広い通りに車はようやくのことで出られた。わたしは、面目丸潰れだった。

そして、十二時近くなろうとしているのに、まだアパートには着かないで、どこかの町をぐるぐると回っていた。

「怖いだろう」と、わたしは押し黙ったままの助手席の人に訊いた。

「ううん、あなたがいるから」と、云ってくれるのはありがたいが、怖いのはこっちだった。とうとう、私鉄の駅へと辿り着いた。絹子の降りる駅から四つも離れた駅だった。わたしは、そこで絹子を降ろした。

「ごめん。電車で帰ってくれる？ このままでは明日になってしまう」

絹子は淋しい無人駅に降ろされた。心配そうにこっちを見ていた。急に、心臓がドキドキしてきた。今度は、わたしのアパートの方角が分からない。ここはどこだ。どっちが北なんだ。

四国ではどこにも行けずに立ち往生していたが、ここでは迷走していた。二十四になって、わたしは女を前にして自分をも見失おうとしていた。

第920話

浪速のことは夢 其の十二

売場ではどこかに絹子の視線があった。わたしは、次第に意識するようになっていた。歩くときも背中に視線があると、右足と右手を同時に出して歩いたかもしれない。

絹子は臆面もなく閉店時になると、黙ってわたしがレジを締めているところに来て、一緒に帰ろうと待っていた。

「今夜、アパートに遊びに行っていていい？」と、訊いてきた。

「うん、掃除はしたからいいけど……、一緒に行くのはまずいから、モンブランで待っていて」と、先に絹子を帰した。

後で、絹子には云っておいたが、会社というところはおかしなところで、あまりベタベタとつきあっているカップルがいると、転勤させて離すのだった。毎日、顔を合わせていられるのがいいのであれば、交際しているのは誰にも見破られないようにすることだ。

そのように、わたしはできるだけ売場では絹子を無視し、言葉を交わさないように努めた。

わたしは、いままでひとりだけ女の人を自分の部屋に入れたことはなかった。いつも遊びに来るのは集団だった。その夜の絹子は無口だった。二人で食べようと、寿司とビールを買って、アパートまで向かった。

机とベッドと本棚とステレオがある部屋に、小さな折り畳みのテーブルを出して、小さな宴会の支度をした。

「あら、小鳥を飼っているの？」と、絹子が真っ先に気が付いた。わたしは、東京からローラーカナリアを一羽持ってきていた。

「ローリーというんだ。騙されて雌を買わされた」

「優しいのね」と、云うから、

「ひもじくなったときの非常食だよ」と冗談で返した。

絹子はここでも遠慮なくじっと人の顔を見る。

「いつも、じっと見るんだね。穴が空いたらどうするんだ」

「その穴に入ればいいちゃ」と、絹子も云うことがおかしな子だった。

「男の人の部屋って、もっと汚って思ってた」

珍しそうに見渡していた。わたしは、表面だけはいつも綺麗にしていた。押入は開けたら大変だ。どっと詰め込んだいろんなものが降ってくる。洗濯ものでも靴下はいつも臭いにおいがしていたから、洗濯物入には芳香剤を入れておいた。いつも入れ代わり立ち代わり人が来るから、部屋はちらかる。掃除は仕方なくしていた。

少し酔ってきていた。FMラジオをいつもBGM代わりに流していた。それが、いつのまにかジェットストリームをやっていた。ヴァイオリンの軽快なジプシー音楽が聞こ

えていた。ということは、すでに十二時は過ぎたということだ。

「どうしようか」と、わたしが云うと、絹子は立ち上がり、台所で洗いものをし始めた。わたしは、その後ろをうろうろとただ歩くだけであった。危険な時間帯が過ぎてゆく。

「でもなあ、掛け蒲団がひとつしかないから」

三月でもまだ寒い。

「ごめんね、泊まるつもりなかったんやけど……」

わたしは、ベッドのマットを一枚だけ降ろして、それに毛布とシーツだけでくるまって寝ることにした。ちゃんと二枚敷くことが礼儀のような気がしていた。

ヴァイオリンの音色が官能的に聞こえていた。

「電気、消そうか」

絹子は恥ずかしそうに反対側を向いて寝ていた。

一行の空白で、すぐ朝が来るところが、小説だった。しかも、肝心なところははしょって書ける。

翌朝の太陽が黄色に見えた。世界観ががらりと変わっていた。人を好きになるということが、どういうことか、わたしは忘れていた感覚を取り戻していた。一人の部屋に、背中を向けて化粧する人がいた。

わたしたちは、と言葉も複数になっていた。一階のテナントの喫茶店でモーニングサービスをとった。絹子はトーストに砂糖をかけた。わたしはトーストに食塩をかけた。そして、互いにおかしいと笑い合う。北と南では砂糖と塩くらいの違いがある。これから、この人とどれほどのトーストを食べるのだろうか。わたしはそんなことを考えていた。

店にいては、いつも他人同士の冷たい間柄を演技しなくてはならなかった。社食でも絶対に同席することはない。誰も怪しむことはない。気が付かない。

そして、毎日のように、昼食の後の三十分の休憩を、モンブランの二階で待ち合わせしていた。階下の席もまばらなほど暇な喫茶店であったが、二階までは誰も上がってこないのだ。わたしが先に二階に上がると、店の美人のママは、無口な常連客ではあったが、微笑みながら歓迎してくれていた。わたしたちの座る椅子は定まっていて、いつもママは二つのお冷のタンブラーを持ってきて黙って置いた。

螺旋階段を絹子が店の制服で上がってくるとき、心配そうにちらりとわたしがいるべき席を覗いていた。そして、ゆっくりと上がってくる。

そんな逢い引きがいつまでバレないで続けられるのか、四月になっても、まだ誰もわたしたちのことは知らなかった。

絹子は目が大きかったから、女子社員たちに、陰で「目が病気の子」と密かに呼ばれていた。マンガのように目の大きい女の子が現実にはいたら化け物だ。それが、病気にさせられていたから内心笑っていた。わたしは、顔が人一倍大きいから、誰かに顔が病気と云われていたかもしれない。

絹子は、ひとつ上の兄とアパートに暮らしていた。妹思いのいい兄であったが、頻繁に外泊するので、わたしをよく思っていなかったようだ。何度か、兄のいるアパートに遊びに行ったし、パチンコ好きの兄とパチンコをしたこともあった。わたしは、こそこそと家族の前ではつきあいたくはない。できるだけ自分の気持ちも兄弟に伝えたかった。

絹子の弟が博多の会社を辞めて、大阪に出てきたときも、部屋探しを手伝ってやった。そこまでしていたのに、兄弟の不信感はわたしに向けられていた。

会社でも、わたしたちのことは噂に出はじめ、ある日、値付けのパートのおばさんたちが、三階に十人くらいでぞろぞろとやってくると、

「どの子やね」「あの目の大きい子やて」「あれが木村ちゃんの彼女かいな」と、わざわざ見に来たりしていた。

特定の人ができるのと、女の子たちはわたしに遠慮し出した。仲のよかったグループも離れた。

夏に、わたしたちは青森に行くことにした。四日の休暇をもらい、絹子を両親に合わせることにした。本気で一緒になろうと考え始めていた。

青森から帰ってからあの狂った八月が待っていた。お盆近い暑苦しい夜だった。いきなり、アパートのドアが蹴られた。鍵を開けると、ドヤドヤと絹子の兄弟たちが乱暴に入ってきた。

「おまえ、妹と遊んで、終いには捨てる気いやる。だいたい、同じパターンや。判つとるんやで」

わたしは、豹変した兄弟に狼狽えた。いままで、そんな目で見られていたのかというショックもあった。家が違いすぎるというのが、兄たちの云い分であった。わたしはそうではないことを必死で伝えたが、どうしても力づくで別れさせるようだ。

それからのことは思い出したくもない。ただ、兄弟の名誉のために云えば、絹子と結婚したあとは和解して、いい親戚関係は保たれたということだ。

だが、当時は、警察沙汰になり、店長にも知られ、四六時中見張られるということにまでなっていた。当然、わたしたちは会社にはいずらくなり、ついには駆け落ちを決行することとなった。

青森に連れて帰ったときの絹子の印象もよくなかったのか、両親からの手紙では反対のようなことが書かれていた。わたしたちが一緒になるのは周囲はすべて反対であり、誰も祝福はしてくれそうにもない。

頂点からいきなり、奈落へと突き落とされたような感じがしていた。

あれは、八月の十三日だった。わたしは、密かに住民票を名古屋の架空のアパートに転出させ、本当のアパートを捜すために高速道路を奈良、三重と通って名古屋に向かっていた。すべては計画的に進められていた。いまなら、夜逃げ屋。わたしは、そんなところには才能を発揮した。足跡を完全に消して、ある日突然に大阪の町から消えるのだ。

運送屋も、地元なら足が着くと、電話帳で、少し遠い、隣町の小さな運送屋を頼んだ。夜中に引っ越すのは逆に目立つので、みんなが仕事をしている昼間の方が安全のような気がした。五階から荷物を降ろすのが大変であった。

車は、すでに名古屋のアパートに置いてきていた。そして、わたしは新幹線で戻ってきた。兄に車をよく貸したりしていたので、見つかりやすいと思った。絹子には十五日に決行すると話していた。荷物は三回に分けて、手で持てるだけ、わたしのアパートに運んでいた。会社にはそれぞれが辞表を書いて郵送した。本当は正社員だからひと月前に辞意を伝えなければならない。迷惑がかかるのは知っていた。ただ、八月という暇なときを狙ったので、業務には差し障りがないと思っていた。

前日に、わたしは、親友の三輪と黒馬でコーヒーを飲みながら、最後に話しておこうとした。だが、この計画は誰の口から漏れるかもしれない。わたしは、親姉妹、同僚にも話していなかった。

「なあ、元気でやっていてな」と、わたしは、三輪の顔をマジマジと凝視していた。

「なんや、気持ち悪いやっちな」と、三輪は笑うだけで取り合わない。

「どないしたんや。いつものおまえやあらへん」

にたにた笑う三輪には、ついに何も云えなかった。

「明日になれば、すべてが判る」

「ほなら、楽しみにしとこ」と、いつものわたしが出社しているものと思っていた。

名古屋のアパートは名前を変えて契約した。絹子は妻としていた。大家は、夫婦ものならと、安心していた。わたしは、床屋に行き、髪を短く切った。そして、また眼鏡をかけた。まるで、別人を装うように、がらりと自分を変えたのだ。

絹子はボストンバッグを手に、また持てるだけの荷物を運んできていた。十一時に運送屋の小型トラックが着いていた。光熱費と家賃の精算はすべて終えてあった。親にも手紙を書いた。絹子にも心配しないようにと、兄に手紙を書かせた。それが明日着くようにした。多分、青森の両親は、名古屋の偽のアパートまで訪ねて来るだろう。絹子の兄も捜すだろう。精神的におかしくなっていたわたしは、いつもおどおどとしていた。用意周到の割りには、いつも後ろを振り返り、誰かにつけられていないか、追ってこないかと、気にしてばかりいた。

すべての荷物を積み込むと、わたしたちは、トラックの助手席に座った。松原インターから西名阪自動車道を通り、名古屋までの逃避行だった。バックミラーに大阪の懐かしい町が映っていた。三年と少しだけ住んだ町だったが、いま、ひとりの女と、わたしのすべてと取引をした。親姉妹を捨て、友人と仕事を捨て、名前を変え、髪も切った。

何か、もう来ることがないような気がして、わたしは何度も振り返っていた。絹子が

こっそりとわたしの手を握ってくる。これからどうなるのか、不安でいっぱいになりながら閉じた目を開けると、八月十五日の碧落が行く手に鋭く切り立って見えた。

第922話

浪速のことは夢 其の十四

梅田の駅に降り立ったとき、わたしは、広い地下街で迷っていた。確か、地下鉄の御堂筋線というのがあった。わたしの記憶はだいぶ怪しくなっていた。難波までそれで行き、難波からは南海高野線で堺東で降りるのだ。乗り換えが容易ではないほどに、街はがらりと変わっていた。あの、ごちゃごちゃした大阪の雰囲気はモダンになって、何かとつき難くなっていた。地下鉄の車両も変わった。駅も変わった。

難波に出たときは、あまりの懐かしさに一瞬立ち尽くしたほどだった。わたしは、若くなった錯覚で、あのときを取り戻そうと、気持ちも弾んでいた。震える手で南海電車の切符を購入した。ここでは野球は南海であった。

電車は、実に三十年ぶりで、わたしを堺へと運んでいた。いままで、ついで関西には来る用事もなかった。通過したことはあったが、降り立ったことはなかった。何故か、わたしの中でいままで大切に保存されていた街だった。

駅にはまだT百貨店があった。建物はリニューアルして新しい雰囲気だが、人伝に聞いた話では、近々閉店するという。

わたしは、ドキドキしながら、青春の地へと歩を進めていた。駅前の全蓋アーケードの商店街を歩いてゆくと、わたしが勤めた店があるはずだった。だが、どうも様子がおかしい。デパートの真向かいに大きく店を出していたはずのDというスーパーがない。建物は廃墟として残っていた。そして、あれほど賑やかに人通りのよかったアーケード街は、昼間でも人があまり歩いていないのだ。シャッターを降ろしている店が多く、営業している店もかろうじて開けているような感じがしていた。

わたしが、酔うといつも寮の女の子たちにお土産だと、シュークリームの箱を持たせた店は倒産していた。あのころの記憶を頼りに、歩いて見ても、全く名残がない。わたしのいた店はオフィスビルに変貌していた。建物自体が、新しく建て替えられていた。その隣の競合店のI屋というスーパーも倒産していた。わたしの働いた店が倒産したのは三年前に大騒ぎしたので知っていた。だが、Jグループに経営は移行したと聞いていた。それでも、不採算店舗はどんどんと閉められた。わたしがいた店は駐車場もあまりなかった。地階と四階しかない中規模の店舗であり中途半端であったのだろう。将来性のない立地の店は閉められる。

郊外型の大型ショッピングセンターに客足を取られると、中心商店街はどこもゴース

トタウンになった。ここも同じだった。わたしは、うろうろと昔の面影をどこかに捜していた。それがみつからない。どこにもない。ないのだった。床屋があったので、その主人に訊いてみた。

「あのう、昔、この辺に黒馬という喫茶店があったんですが」

「さあな、わしらは、五年前にここに来たもんでな。そうそう、そう云えば、そんなこと云うとったお客がおったな。そこの駐車場のとこな、あすこに喫茶店で、よう繁盛した馬とかいう店があったと」

わたしは、建物を壊して、歯が抜けたようになっていいる街を見て、その幻の店を想像していた。

「すみません、この辺りに、モンブランという喫茶店があったの知らないでしょうか」

今度は通行人の年寄りを掴まえて訊いていた。

「モンブルだかなんだか知らんけどな、ここやったと思うわ。白と黒の店やったかいな」

そうだ。白と黒が基調になった店だった。それが、貸店舗の看板が錆びていた。もう長く、誰も借り手のない店が、放置されたままになっていた。

わたしは、どうにかして、昔の欠片だけでも発掘したい気持ちになっていた。それで、藤川に電話をしていた。藤川と三輪は、わたしと絹子の結婚式にも呼んだ。いまでも年賀状は毎年欠かさない。

一なんや、懐かしいのう。来るんやったら、前からメールでもくれたらよかったのに。

元気そうな藤川の声だ。

一いやあ、衝動的に来てしまったんだ。

一堺におるって。変わったろう。何もなくなってな。いまからそっちへ走るから、Tデパートの上のレストランで待ってえな。

藤川は家業の靴屋を継いだ。結婚式以来二十七年ぶりに逢う。来るまで時間がかかるだろうと、わたしは、自分の暮らしたアパートの辺りまで歩いてみた。高速道路に沿ってゆくと判る。見覚えのある風景がいまだに残っていて、わたしは涙が出そうになった。ここには、わたしの青春の墓がある。古い家もそのままだ。車でゴミ箱を壊した家もまだある。酔って歩いた道、テニスコートのある公園、いつも煙草を買った店、みんなそのままだ。

アパートのビルはすでに取り壊されて、ただの空き地になっていた。みんな思い出は廃墟になってゆく。

残っているのは、ここの駅のあるデパートだけであった。わたしは、藤川とそこで逢った。

「おお、髪も白くなって、お互いに孫がおる爺さんや」

改めて互いの顔を見ると、そこには二十四の青年の顔はすでになかった。

「三輪はどうしてる」と、一度手紙で倒産したときに慰めたことを話した。

「あいつ、人が変わったようになってな、まあ、五十過ぎていままで三十年近くも勤めた会社が倒産で、切られたんやろ、管理職までしたあいつや、いまさら、若いもんにこき

使われるような仕事にはつけんやろな。毎日、パチンコばかりして、奥さん泣いとったで」

その奥さんは、わたしと仲のよかった菜穂子だった。

「呉服の斎藤先輩の消息は判るか」

わたしは、まるで行方不明者の搜索をするように、唯一の情報源である藤川に訊いていた。

「斎藤さんな、癌で逝ってもうたらしいわ。他店の店長やった仲間から聞いた話やけどな。まだ子供さんが小さくて大変らしい」

そう云えば、わたしが出てくるまでまだ独身だった。飄々とした斎藤先輩の顔が浮かんだ。

聞けば、すべての古い仲間たちが、倒産のために転職したり、転居して居場所も判らないという。お嫁に行った女の子たちの話も聞いた。大分の美登里は、ずっと後になって、田舎に帰ったというだけで、後のことは判らない。北川佐知子は、わたしが行方不明になったすぐ後に、後任で入った男子社員と結婚して辞めたという。漆原紀子は、服地の主任と結婚したが、転勤してゆき、その後も夫婦でこの会社にいたとしたら、失職したのではないかという。

わたしは、二百人の名前と顔をスライドさせていた。

「そういう自分も、離婚してから子供育てて、大変やったな」

藤川は今度はわたしのことを聞き始めた。

「絹子さんはどないしてますねん」

「ああ、うちの息子たちとはパソコンのテレビ電話でやりとりしているらしい。いまは、互いに再婚して、別々の人生を歩んでいる。もう子供たちも東京で働いていて、今度も孫の顔を見に来たついでに足を伸ばしたんだ。早いもんだな、三十年だ」

「あんときは、みんな心配してな。いまごろどこにおるんやろうて、みんなで寄ればその話やった」

藤川も遠くを眺める目で懐かしんでいた。

「これから、どうするんや」

「これから、少し天王寺なんか見て周り、京都へも寄って帰ろうと思う」

「昔の思い出探しか、いいのう」

わたしは、藤川車で天王寺まで送ってもらい、そこで別れた。古い大阪の街はそこにもなかった。

休みは今日明日よりない。できるだけ、わたしは札所を回る巡礼でいよう。わたしの燃え尽きた日々があった街だ。鈴を振りふり思い出す。そんな感傷があってもいい。わたしは、また恐る恐る夢のような街に足を踏み入れていた。

(了)

納涼サービス

暑い、暑い、暑い、暑い、暑い、暑い、暑い、と文字を見ているだけで暑くなる。ここ青森でも連日の三十何度。このままでは史上最高記録を作るのは見えている。全国的な猛暑だった。

北村古書店でも、暑くて仕事にならない。クーラーなんか貧乏で店に付けていないから、バイトから借りていた扇風機を回していた。だが、バイトも扇風機を使うからと持ち帰った。団扇もない。ぼうっと暑くなってきた。毎日、パソコンに向かっての仕事なのだが、店主の北村は、思考能力が低下して、眠くなってくる。

夏になると、県外からのお客も店に来る。全国古書店地図というのが、毎年出ているのだが、それを手にして回っているマニアもいれば、北村の通販のお客が大きな旅行鞆を携えてやってくる。

「いやあ、暑いすな。青森まで来ると涼しいかと思ったら、なんですか、これじゃ東京と同じだ」

さも、暑いのが北村のせいでもあるように不満をぶちまける。確かに、肥満気味の北村の体型と顔を見ていれば、暑苦しい。

「北海道も暑いらしいから、日本全国逃げ場はないですよ。こうなったら、北極へ行くよりないんです」

お客も納得する。

「おや、それでも、なんですね、この店は外に比べたらひんやりしますな。特にその、レジの辺りが」

北村はぶすっとした。どうせ、うちは、暇で乏しい売上のせいで、寒々としていますよ。

窓がない奥の倉庫は確かに外とは何度か低いようで、本棚で囲まれた倉庫の奥に立つと、ひんやりした感じがする。古本の怨念か、冷氣ならぬ霊気が漂っているためか。

ねぶた祭、花火大会、お盆と続き、ますます客は来ない。そうした行事とは無縁の商売、いや、却って売れなくなるのだ。毎年、夏は売上が悪い。あまり暑いと、誰でも本を読む気がしなくなる。商売で夏枯れという言葉がある。売るものがないのだ。衣料品店もそうなら、呉服屋の亭主も店に来てぼやいていた。浴衣も安い。それすらも売れなくなった。近所の暇な商売の親父たちが次々と様子を見に来る。不動産屋もそのひとりだ。

「あまり暑いから、事務所を閉めて、涼みに出たんだが、夕方も暑くてたまらん」「夕涼みねえ、気温が下がらないから、どうしてもダメだよ。何か涼しくなるような策はないものかなあ」

北村もうだる暑さに閉口して、なんとか涼しくなるような工夫を考えていた。

「体を動かすと余計に暑くなるから、じっと止まっているのがいいよ」

と不動産屋。そうかもしれない。余分なエネルギーを放出すると部屋も熱くなるから、動かないでいればいい。扇いでも熱い空気が来るだけだ。

北村は、服を全部脱いでしまいたかった。じっとりと汗がしみて気持ちが悪い。ベトベトしている。どうせ客が来ない店だ。窓も本で塞がって、外からは見えない店だから、思い切ってポロシャツを脱いで、上半身裸になって、仕事をしようとした。不動産屋は、

「それでいい。よし、おれも上を脱ごう」と、中年の醜い体型を晒していた。

「上を脱いだらさっぱりするが、どうも下半身が今度は暑苦しくて気持ちが悪い」「それなら、ズボンも脱いでしまおう。どうせ、誰も来やしない」

そうして、二人ともパンツ一枚になっていた。

「ああ、これで少しは涼しいか。でもな、街中にいろんな商売があるが、こんなどうでもいい店もないぜ」

と不動産屋は笑う。

「何をおっしゃいまして、そちらも店を閉めてきたくせに」

パンツ一枚だけつけているのも面倒だと、北村はそれも脱いですっぽんぽんになった。

「ああ、さっぱりする。これは涼しい」

何も体につけていないのが一番涼しい。

「そうか、おれもやってみよう」と、不動産屋もパンツを脱いだ。

そこへ、近所のプロパンガスがやってきた。

「暑いねえ、な、な、なんという格好しているんだ。二人とも暑さで頭がおかしくなったのかい」

「いやあね、どうしたら涼しくなるかって、北村の旦那と話していたら、これが一番いいことに結論が出たってわけだ」

「そうかな、そうだろうな。おれも仲間に入れてくれ」と、プロパンガスもすっぽんぽんに裸になった。親父たちの裸を互いに見ているだけでぞっとして涼しい。不気味さがなんともいえない。

そんなところへ珍しくお客が入ってきた。お客はびっくり仰天。

「ここは、すみません、服を脱いで入る古本屋さんなんですか」

と、中年の客はおろおろしていた。

「おう、そうよ、新しい商売で、ヌーディスト古本屋ってんだ」

プロパンガスがそう冗談で云ったら、真面目そうな客で、

「そうですか、それではわたしも脱がせていただきますでしょうか。それにしても暑いですねえ」と、いとも簡単に裸になってしまった。そうして、本を探しているのだ。

四人の親父たちが全裸でうろうろしている店のドアが突然開いた。滅多にないことだが、若い女性客が、何か本を求めて入ってきた。

「キャー」

町内中に響き渡る絶叫が北村古書店から聞こえていた。

第924話

意 地

いつも奇をてらうというやり方で、それがパフォーマンスと云われようが、おれはおれのや

り方でやってきたんだ。誰がなんと云おうと、邪魔立てはさせん。

それにしても、警備が厳重だった。夜中なら大丈夫だろうと、こっそりと一人でやってきたのだが、入るのも容易ではないような気がしてきた。正面には、警棒と安全装置を外した拳銃を携帯している警官たちが、全部で十二人もいた。両側の垣根のところにも、機動隊が総勢何人いるのだろうか。二十人、いや三十人はいるか。テロの脅威があるから、特に、今日、明日は危ないのだった。

それもそうだが、最も危ない連中は、マスコミだ。どこに隠しカメラがあるか判らない。さっきから、うろうろと、怪しげな連中が肩からカメラを下げて歩いている。カメラを持っていないやつは、私服警官に違いない。いずれにしても、そのバリアーをどうやって突破するかだ。まだ、警官の方がいいのだが、見つかると、ものものしくなりすぎる。それは困ったものだ。どうにかして、中に入りこみたいものだ。

おれは、今夜のために、特訓を密かに続けてきた。忍者の真似事も白土三平のマンガを読んで、随分と研究した。防衛庁の知り合いから、これも部外秘の資料だが、レンジャー部隊の教本を一部づつ分けてもらった。

学生時代鍛えた体は、この年になってもまだまだ若いものには負けない自信がある。おれの訓練は、家の庭で毎晩行われた。軍隊式の匍匐前進のやり方。ただ、彼らのように、重い背囊から、銃器を持つての前進ではないから、その点は楽だった。自衛隊はカーキ色の迷彩服を着ているが、おれが決行するのは真夜中だから、上から下まで全身黒づくめだ。目出し帽で顔をすっぽりと隠す。顔と特徴のある髪型で発見される可能性が高い。そのためには、頭は見せないに限る。膝と肘を使って、芋虫のように少しづつ地面を這ってゆく。靴も黒の音のしない特別の靴を用意した。衣ずれの音だけでも発見されてしまうから、なるだけ音のしないジャージで動きやすくした。だが、問題がないわけではない。こここのところの猛暑で、熱帯夜だ。夜中でも三十度以上の高温だった。その中で、長袖に頭からすっぽりとかぶっているのは、地獄のように暑かった。全身、ずっぴりとすでに汗でどろどろと気持ちが悪い。

おれは静かに生垣から潜りこむと、入り込むことには成功した。芝生と木立で整備された庭に潜んでいる限り、安全のような気がした。だが、中は中で見回りの警官たちが、二名づつうろろしている。マスコミの連中は入れないから、まだいいとして、なんとか見つからないように、建物の中に入りこまなければならない。建物はすべてのドアが鍵がかけられているのだ。ただ、警備の人間たちが、決まった時間に窓ガラスやドアの点検に来るのを知っていた。その時間帯を狙うしかないのだ。

おれは、ダブルオーセブンもナポレオンソロも好きでよく見ていた。まさか、いまになって、自分がそんな真似事をするとは思ってもしなかった。どうして、ここまでしなけりゃならんのだ、と、自問してみたが、やはりこうする以外になかった。世間があまりにも煩いから、こんな無様な格好で忍び込まなければならんのだ。

だが、これが成功すると、おれ自身も納得し、世間も欺ける。初めは、こんなことをすること自体が恥ずかしい醜態と思っていたが、もうそんなことは云ってられない。ここまで来ると、意地よりなかった。何がなんでも入ってやる。それも、いつかのように日にちを変えて、あっと云わせるような卑屈な手は使いたくはなかった。堂々と入ることも最近では厳しい。それなら、お

忍びでと思ったが、そうはゆかない。常に監視されているのだ。ここに来るだけでも、何人もの人と車を巻いてやってきたのだ。やつらも、慣れている。常に追う人間は、嗅覚も勘も優れているものだ。また、追われるものは、次第にカムフラージュがうまくなる。いままでもそうしてきた。

とにかく実行は今日でなくては意味がない。この日ということは、すでに零時を過ぎているので、成功したら、この日にちに入ったことになるのだ。だんだんと、夜が長くなってくだろう。夏とはいっても、五時過ぎにはもう明るい。やるとすれば、四時前にかたづけたいところだ。いまは一時半を過ぎたところだから、あと二時間半よりない。やれるか。いや、どうしてもやり遂げるのだ。

計画はすでに頭の中に入っている。絶対にうまく行くだろう。そのために、テレビだけではない。いままでどれほどの探偵小説を読んできたことか。

おれは、ようやくのことで、建物の非常口へと辿りついた。二時になれば見回りの警備員が来るはずだ。そのチャンスを逃してはいけない。時計は正確に合わせていた。

予定通り、靴音が近づいてきた。二時だった。おれは、小石を掴み、非常口のドアに当てた。コツンと音がしたら、案の定、ドアが開いた。

「誰だ」と、警備員が懐中電灯を向けてきた。おれは、低木の陰に隠れたまま、小石を遠くの草むらに投げ込んだ。ガサガサと音がする。警備員は、

「誰かいるぞ」と、音の方角へと走った。今だ。おれは、開いたドアから建物の中に入ることができた。入ってしまえばこっちのものだ。

ところがどうしたことだろうか。新たに赤外線センサーを導入していたとは知らなかった。けたたましく非常警報が鳴り響いた。おれは、廊下を駆けた。警備員たちが、笛を吹いた。建物に一齐に電燈が点った。警報機の音と真夜中に電燈が点いたことで、外の警官や機動隊たちが、境内に雪崩れ込んだ。マスコミの連中もそれに続いたようだ。外はものすごい怒号で騒然となっていた。おれは、もう闇雲に廊下を突っ走った。

本殿の中に入ろうとしたところで、新聞記者たちのストロボに幻惑された。警官たちが、拳銃を構えて、おれを包囲していた。その中のひとりが、啞然とした顔で、おれに云った。

「総理大臣ではありませんか。こんな、真夜中に、靖国神社の中で何をされているんですか」

もう少しでうまくゆくところだったのに。

第925話

温泉奇譚

お盆といっても、どこの温泉場もいっぱいだ。予約もとれない。こんなときに車で旅行する二

人組がいた。若い人たちにはお盆は関係がない。郷里に帰るのではなく、休暇を利用して旅行しようと、東北の観光地巡りをしていた。オートキャンプ場も各地にあるから、泊まる場所がなくても、車で寝たらいい。

工藤隆史と笹井潤の会社の同僚同士で、休みのたびにドライブしていた。目的は女だった。男ばかりの職場だったから、旅先で出逢うチャンスを期待していた。二人とも三十過ぎて彼女もいまだいなかった。

山道を走っているうちに、道に迷ったようだった。車に装着していたナビシステムが止まったきり、動かない。いままではそんなことはなかった。

「おいおい、しっかりしてくれよ。困ったな。ナビがなければ地図なんか持ってきていないから、道が判らないぜ」

運転していた隆史が泣き言を吐いた。

「大丈夫かよ。もう暗くなってきたぜ。引き返したほうがよくないか」

「こんな山道でUターンする場所もないから、先に行ってみようよ。どこかに出るかもしれない」

ガードレールもない未舗装の林道が続いていた。どこを走っているのか見当もつかない。辺りは真っ暗だ。二人は不安になった。

すると、林が切れるところに灯りがぼつんと見えてきた。

「おい、民家かもしれん。助かったぞ。道を訊いてみようよ」

道の脇にねつき温泉入口と表示があった。

「おい、ラッキーだぜ。ここは温泉なんだ。部屋が空いているかな」

車は旅館の前に着いた。平屋だが、山峡の温泉の鄙びた観があり、女性雑誌に登場しそうな宿であった。車は一台も止まっていないところを見ると他に客が来ていないようだ。こんな、夏休みのどこも満員のときに、きつここは穴場なのだ。二人はそう思った。

「いらっしゃいませ。お泊まりでございますか」

玄関から迎えに出たのが、絶世の美女だ。少し年増だが、着物をきちんと着た女将らしかった。

「空いてますか」

「はい、今日はキャンセルがありまして、団体さんが来ませんので、貸し切りでございますよ」

女将はほほほと笑った。そんなこともあるのだと、二人はほくそ笑んだ。

「その分、本日は大サービスをいたします。勿論、料金も安くお泊まりいただけます」

「おいおい、聞いたか。おれたちはついているぞ」

「先にお風呂になさいますか？ お食事が先でございますね」

純和風の宿は、日本人が忘れていた匂いがまだあった。廊下もぎしぎしと鳴る黒光りした板だ。欄間も素晴らしい。若い仲居さんたちが何人も出てきて、二人を部屋まで案内した。それが、まだ二十歳かそこらの色白で細面、スタイル抜群の娘たちだ。みんな美女揃いだった。

「こんな田舎に、すごい美人ばかりいるなんて、夢みたいだな」

隆史はドギマギしていた。だが、潤だけは冷静に考えていた。

「何かおかしくないか。この旅館よ。こんなに美人揃いで、客が一人もいないということは、何

か問題があるんだぞ。ほら、いまニュースで持ち上がっている偽物の温泉だよ。きつとこも摘発されたんだ」

庭の見える和室でお膳が用意されていた。

「おビールがよろしいでしょうか。それとも地酒もございますが」

「とりあえずビールで、後でその地酒とやらを冷でもらおう」

二人とも、お膳の前に座って驚いた。刺身の舟盛りに岩魚の焼魚、山菜料理など食べきれないほど並んでいる。

「おいおい、これで一人八千円と云っていたが本当かよ。これじゃ、料理分にもならんぜ」

二人はひそひそと囁きあっていた。

「この刺身みたいなのは？」

「はい、こちらは鯉のあらいでございますね。そして、こちらは幻の魚と云われておりますイトウのお造りでございます」

それは、二人とも口にしたことのない珍味であつた。隆史はよくよく味わって食べていた。いちいち感心していた。ところが、醒めているのは潤のほうだ。

「ばか云え、これは中国かどこからか輸入した冷凍ものだけ。騙されちゃいけない。こんな魚をいちいち釣りにゆくのかよ」

地酒も隆史はベタ誉めだ。若い浴衣姿の仲居さんたちが、両側に座って、お酌してくれる。

「いやあ、甘露、甘露」

と、隆史はご機嫌だ。潤はまた囁いた。

「こんな地酒も、嘘だろう。山奥で造っているわけがない。ラベルだけ印刷して、中身は大手で造っているのさ。温泉まんじゅうなんかも売っていたが、あれだって、包装だけをご当地にして、中身は北陸の大工場で作っていて、全国の観光地に卸しているっていうじゃないか。名物に美味しいものなしとは云ったもんだ。みんな嘘っぱちで、ごまかしばかりだ」

温泉が信用できない。すべてが嘘で固められているような気がしてならない。二人は露天風呂に入った。

「おい、これも水道水に草津の湯の温泉の素を入れているのかよ」

隆史も疑い出した。

「いや、これは本物くさいな。匂いを嗅いでみろよ。臭いだろうが。濁っているのも、どうも本物くさい」

「ゆで卵の腐った匂いというか、何かものすごく臭いよな」

「うん、これは強い温泉なんだろう。体にはよさそうだ」

二人とも、酔ってから温泉に入ったら、急激に酔いが回った。ふらふらになって、部屋でごろんと寝てしまった。

朝になっていた。がやがやと声がする。目が覚めると、遠巻きにして、子供らが覗きこんでいた。はっとして二人は起き上がると、体が臭い。手も足もどろどろと汚れていた。農家のじいさんも覗いていた。

「あんたら、何をしとったのけ。畑の肥溜めに落ちたんか」

糞まみれになって、畑に寝ていた二人に、旅館の建物は見えなかった。

第926話

帰省

帰省ラッシュが始まっていた。毎年、お盆になると一齐に休暇が出て、みんなこぞって家族のところに帰る。それが八月十三日にどっと出発するから、混むというものではない。何億、いや何十億いるのか。出口はひしめきあっているのだ。それでも以前よりは帰省するものが減ったというのは、若い人たちが、帰省もしなくなっただけで、家族と一年に一度の再会も別にしなくてもいいなんて、しらけたところがあるから居残り、どこかに浮遊していたりして、全く何を考えているのかわからない。

わたしは新盆だから、今年初めて帰るのだが、どうも家に残ったひとり息子が心配だった。どうしているか様子を見に行かねばならんと思っていた。それにしてもこの帰省ラッシュはすさまじい。いままで見たこともない。何せ、赤ん坊から老人まで、しかもいろんな時代の人たちがいるのだから、実にバラエティだ。ちょんまげに上下を着た武士から、軍服を着た兵隊さんたち、古代から現代までのファッションショーか、仮装行列か。賑やかにいろんな言葉を喋りながら、ひしめきあっている。

「おや、あなたは、まだ新しい方ですな」

着物を着た町人風の旦那がわたしに声をかけてきた。

「はい、まだこの世界では新入りで、でも、すごいものですね。これは、新幹線や東名高速の混み具合なんかは屁でもない。スペクタクルですね」

見渡す限りの広い宙に向こうが見えないほどの人、人、人である。それが民族の大移動のように、どどどと音さえしないが、一齐に帰省する姿は壮観だった。「でも、あなたなんかは、帰るところがあり、迎えてくれる人がいるからいいですよ。わたしなんか、帰ったところで、ルーツを辿るのが大変です。もう、知っている人なんかいないでしょう。過去帳によろしく名前が出てくるだけで、墓なんかはありません。長い年月で、墓もあちこちへ動かしましたからね。それで、どこへ帰ったらいいのかと、この世の案内所で訊いたんですよ。こちらでも除籍謄本みたいなのをちゃんと保管してあるんですねえ。あなたの子孫は、いま、この町のどこそで、こんな商売をしていなさるから、と親切に教えてくれるものだから、わたしは去年、初めて行きましたよ。するってえと、五代目、六代目とわたしの息子や孫たちもみんな集まっているじゃないですか。嬉しくってね。やはり年に一度のお盆だ。こうして、みんなが一度に逢えるのはいいもんです」

わたしは、すでに現世の子孫から忘れられてしまっている人がいることに、哀れを感じていた。いずれ、わたしもそうなるのだが、でも、そうまでして帰る必要があるのだろうかと思いましたが。

わたしが帰るには見届けたいことがあるからだ。ひとり息子のばか息子がどんなふう先祖の

供養をしているのかと。あいつひとりを残して死んでも死にきれない。

どこの家も、玄関に迎え火を焚いているから、着陸場所を支持している空港の誘導路のようだが、あちこちでやっているから、どこが自分の家なのか判らない。一齐に火を焚くなと云いたい。中には迷って、他人の家に帰るやつも出てくるだろう。

だが、わたしが自分の家にやってきたときは、そんな迎え火なんかはなかった。玄関に立って、驚いた。蜘蛛の巣が張っているではないか。庭は雑草だらけで、玄関からしてゴミの山。つかつかと居間に入ってゆくと、息子ときたら、ぐうたらで、ごろんと横になってテレビゲームをぴこぴこやっているではないか。もう、四十過ぎたというのに、仕事もまだしていないようだ。わたしの残した預金と生命保険で喰っているらしい。

それにしても、酷い生活だった。部屋は埃とゴミが散乱して、掃除もしていない。これじゃ、嫁どころか相手もないのだろう。仏壇を見ると、お盆というのに、扉は閉めたきり。きっと開けたことはないのかもしれない。ということは、毎日、ご飯と水も上げていないということだ。まして、花や菓子なども上げるやつではない。あんまりだ。

「おまえもそう思うだろう」

声で振り返ると、そこにわたしの親父が立っていた。その横ではわたしの女房が泣いている。

「あんな子を生んだ覚えはないのですが……」

「いや、みんな、おまえたちの躰がなっていないからだ。お盆というのに、あの孫ときたら、寺に行くでもなし、墓参りに行くでもなし、走馬燈や供え物で供養するわけでもなしか。ご先祖様を粗末にするにもほどがある」

親父はかんかんに怒っていた。それで、頭に来て、ゲームを止めさせた。

「あれ、おかしいな。バグってしまった。傷があるのかな。頭にきた。別のゲームでもやろうと」

ばか息子はなおもゲームだ。

「ばかやろう。今日は何の日か知っているのか。お盆だよ、お盆。しかも、父親が去年死んだ新盆だよ。こいつと来たら、きっと三回忌も七回忌も何もしないつもりだな」

「嘆かわしい。これでは、きっと先祖代々の墓も無縁仏かいな」

「生きていたら蹴飛ばしてやるどころだ」

わたしだけでなく、息子の周りにやきもきした霊たちが集まってきていた。

すると、急に息子はゲームをやめて、むくりと起き出すと、

「今日は、盆の十三日だったな。しかたねえ、拝んでやるか」

そうして、伸びをすると、仏壇のところに行った。仏壇の扉を開いた。みんな、何が始まるのかと、息子の背後に集まっていた。なんと、仏壇の中にはパソコンがあるではないか。スピーカーや通信機器も配置されて、まるでハイテク仏壇だ。息子がスイッチを入れ、インターネットに繋がると、いきなり旦那寺の住職の顔が出てきた。読経が始まる。みんな唖然としていた。住職の後ろ姿がディスプレイに映っているのだ。

それが終わると、お布施はどうするのかと思っていたら、画面にクレジット番号を入力するページが出てきた。

「はあ、時代が変わったものだ。ネットだかなんだか判らんが、それでお布施まで支払できる

とは」

寺も二代目、三代目と若いブロードバンド時代の住職が跡を継いでからは、お盆の忙しいときに各檀家を回るなどという非合理的なことはしなくなった。みんながスボラになっていた。

先祖の霊たちが呆れて見ている、みんな一斉に云った。

「これじゃ、浮かばれないよねえ」